新潟県埋蔵文化財調査報告書　第215集

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

山　口　遺　跡

２０１０

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

山　口　遺　跡

２０１０

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は日本海側の新潟市と太平洋側の福島県いわき市を結ぶ主要幹線道路です。また、新潟市と阿賀野市、阿賀町を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たし、近年その交通量は増加の一途をたどっています。

しかし、現道は阿賀野市の市街地（旧安田町、旧水原町）を通過しており、幅員が狭小なため、その交通量に対応できず交通混雑、交通騒音、交通事故等の都市機能や生活環境に与える影響が問題となっています。

阿賀野バイパスはこれらの問題の解消、安全かつ円滑な交通処理を目的とし、阿賀野市の将来の街づくりとの調和を取りながら計画されたものです。また、「阿賀野テクノタウン（新潟県東部産業団地）」や「阿賀野市総合運動公園」などを支援し、当該地域の発展に寄与するものです。

本書は、この阿賀野バイパスの建設に伴い実施した、阿賀野市山口に所在する山口遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査によって、同遺跡は弥生時代、古代、中世の遺跡であることが分かりました。特に弥生時代では掘立柱建物、土坑、埋設土器などの遺構や土器から、県内でも調査例の少ない弥生時代前期から中期前半の小規模な集落が発見されました。また、古代では 8 世紀後半から 9 世紀中ごろの、中世では 13 世紀から 14 世紀の集落の一端が明らかとなりました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、地域の歴史資料として広く活用されるとともに、県民の埋蔵文化財に対する理解や認識を深める契機となることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで格別な御配慮をいただいた、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

新潟県教育委員会

教　育　長　武藤　克己

例　　言

1　本書は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪 3079 番地ほかに所在する山口遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は一般国道 49 号阿賀野バイパスの建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は、発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社ノガミに委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成 20 年 4 月から 12 月にかけて発掘調査を実施した。発掘調査面積は 8,850m^2 である。

3　整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成 20 年度に埋文事業団の管理・監督のもと株式会社ノガミがこれにあたった。

4　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は山口遺跡の略記号を「ヤマグ」とし、遺構名、出土地点や層位等を続けて記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて座標北である。

7　遺物番号は古代・中世の遺物と弥生時代の遺物でそれぞれ通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はそれぞれ一致している。

8　本文中の註は脚註とし、頁ごとに番号を付した。また、引用･参考文献は著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章に係るものに限り、章の最後に掲載してある。

9　自然科学分析（珪藻分析・花粉分析・寄生虫卵分析・植物珪酸体分析・微細物分析・放射性炭素年代・土壌理化学分析）はパリノ・サーヴェイ株式会社に、黒曜石産地分析は有限会社遺物材料研究所に委託して行った。

10　遺物のトレースは株式会社セビアスに委託して行った。

11　遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。

12　調査成果の一部は『埋文にいがた』65 号、『第 16 回　遺跡発掘調査報告会』、『平成 20 年度　新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』で公表しているが、本書をもって正式報告とする。

13　石器・玉類の石材鑑定は掲載遺物については埋文事業団髙橋保雄が行い、未掲載遺物に関しては荒谷が行った。

14　第Ⅲ章 2・3 の地質に係る部分については千葉博俊氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）に現地にてご助言をいただいた。

15　本書の執筆は髙橋保雄（埋文事業団調査課課長代理）の指導のもと、荒谷伸郎（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部　調査員）、吉田浩明（同　調査員）、髙橋勝広（同　調査員）、石垣義則（同　調査員）がこれにあたり、編集は荒谷が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 1…髙橋保雄、2・3…荒谷伸郎
第Ⅱ章…石垣義則
第Ⅲ章…荒谷伸郎
第Ⅳ章 1…荒谷伸郎、2・3…吉田浩明、4…荒谷伸郎
第Ⅴ章 1…荒谷伸郎、2…吉田浩明・髙橋勝広・荒谷伸郎、3A・B…石垣義則、3C・D・E…荒谷伸郎
第Ⅵ章 1・2・3…千葉博俊・斉藤崇人・伊藤良永・馬場健司・松本美由紀・髙橋敦・斉藤紀之・中根秀二（パリノ・サーヴェイ株式会社）、4…藁科哲男（有限会社遺物材料研究所）
第Ⅶ章 1A…石垣義則、1B・C…荒谷伸郎、2・3…吉田浩明・荒谷伸郎

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相沢　央　　朝岡政康　　阿部泰之　　アラタンホヤガ　　石川日出志　　笹澤正史　　北野博司
関　雅之　　田中耕作　　鶴巻康志　　中山俊道　　古澤妥史　　増子正三　　渡邊ますみ
阿賀野市教育委員会　　阿賀野川土地改良区

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 1
A　試 掘 調 査 …… 1
B　本発掘調査 …… 3
C　整 理 作 業 …… 4
3　調 査 体 制 …… 4
A　試 掘 調 査 …… 4
B　本発掘調査・整理 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境 …… 6
2　歴史的環境 …… 7
A　弥生時代の遺跡 …… 7
B　古代の遺跡 …… 8
C　中世の遺跡 …… 9

第Ⅲ章　調査の概要

1　調査の概要 …… 13
A　遺跡の立地と微地形 …… 13
B　グリッドの設定 …… 13
2　基本層序と地形の変化 …… 15
3　調査の基本方針 …… 18

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要 …… 19
A　古代・中世の遺構 …… 19
B　弥生時代の遺構 …… 19
2　第１面の遺構 …… 19
A　掘立柱建物 …… 20
B　井　　戸 …… 20
C　土　　坑 …… 23
D　竪穴状遺構 …… 25
E　溝 …… 25
F　炭　　窯 …… 27
G　焼 土 遺 構 …… 27
H　畝間状遺構 …… 27
I　凹 地 遺 構 …… 28
J　性格不明遺構 …… 28
K　ピ　ッ　ト …… 29
3　第２面の遺構 …… 29
A　土　　坑 …… 30
B　ピ　ッ　ト …… 30
4　第３面の遺構 …… 30
A　掘立柱建物 …… 31

B　土　　坑 …… 32
C　ピ　ッ　ト …… 34
D　埋 設 土 器 …… 36

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要 …… 37
2　古代・中世の遺物 …… 37
A　中世の土器・陶磁器 …… 37
1）井　　戸 …… 38　2）土　　坑 …… 39
3）溝 …… 39　4）性格不明遺構 …… 40
5）遺構外出土土器・陶磁器 …… 40
B　古代の土器 …… 40
1）土　　坑 …… 40　2）溝 …… 41
3）焼 土 遺 構 …… 41　4）性格不明遺構 …… 41
5）遺構外出土土器 …… 41
C　石　　器 …… 42
D　石　製　品 …… 42
E　鉄　製　品 …… 42
F　銅　製　品 …… 43
G　鉄生産関連遺物 …… 43
H　木　製　品 …… 43
3　弥生時代の遺物 …… 43
A　弥生時代の土器 …… 43
1）分　　類 …… 43　2）実測図の表現方法について …… 47
3）掘立柱建物 …… 47　4）土　　坑 …… 47
5）ピ　ッ　ト …… 50　6）遺構外出土土器 …… 50
B　土製品・焼粘土塊 …… 54
C　石　　器 …… 55
1）石　　鏃 …… 56　2）石鏃失敗品 …… 56
3）石　　錐 …… 57　4）不定形石器 …… 57
5）両極剥離痕のある石器 …… 57　6）磨 製 石 斧 …… 58
7）敲 磨 石 類 …… 58　8）石皿・砥石・台石類 …… 59
9）石　　核 …… 59　10）剥　片　類 …… 59
11）異 形 石 器 …… 60
D　玉　　類 …… 60
E　搬　入　礫 …… 61

第Ⅵ章　自然科学分析

1　は じ め に …… 62
2　古環境推定及び植物利用 …… 62
A　試　　料 …… 62
B　分 析 方 法 …… 62
1）珪 藻 分 析 …… 62　2）花粉分析・寄生虫卵分析 …… 63
3）植物珪酸体分析 …… 63　4）微細物分析 …… 64
C　結　　果 …… 64
1）珪 藻 分 析 …… 64　2）花粉分析・寄生虫卵分析 …… 67
3）植物珪酸体分析 …… 68　4）微細物分析 …… 69
D　考　　察 …… 70
1）古　環　境 …… 70
3　遺物の年代観及び遺構の性格の検討 …… 72
A　試　　料 …… 72

1）土坑試料 …… 72　2）SE1260 …… 73
3）弥生土器 …… 73
B　分析方法 …… 73
1）放射性炭素年代測定 …… 73　2）寄生虫卵分析 …… 73
3）土壌理化学分析 …… 74
C　結　　果 …… 74
1）放射性炭素年代測定 …… 74　2）寄生虫卵分析 …… 74
3）土壌理化学分析 …… 75
D　考　　察 …… 76
1）SE1260 …… 76　2）土　　坑 …… 77
4　黒曜石産地分析 …… 78
第Ⅶ章　ま　と　め
1　弥生時代 …… 82
A　弥生土器 …… 82
1）器種組成 …… 82　2）編年的位置付け …… 84
B　石器・玉について …… 87
C　総括と周辺遺跡との関連について …… 88
2　古　　代 …… 89
3　中　　世 …… 90
≪要　　約≫ …… 92
≪引用・参考文献≫ …… 93
≪観　察　表≫ …… 96
遺構（中世・古代）観察表 …… 96
掘立柱建物（SB）観察表 …… 96　井戸（SE）観察表 …… 96
土坑（SK）観察表 …… 96　竪穴状遺構（SX）観察表 …… 97
溝（SD）観察表 …… 97　炭窯（SX）観察表 …… 99
焼土遺構（SX）観察表 …… 99　畝間状遺構（SX）観察表 …… 99
凹地遺構（SX）観察表 …… 99　性格不明遺構（SX）観察表 …… 99
遺物観察表 …… 100
土器・陶磁器（古代・中世）観察表 …… 100　石器観察表 …… 104
石製品観察表 …… 104　鉄製品観察表 …… 104
銅製品観察表 …… 104　羽口観察表 …… 104
鉄滓観察表 …… 104　木製品観察表 …… 104
弥生土器観察表 …… 105　土製品・焼粘土塊観察表 …… 112
石鏃観察表 …… 113　石鏃失敗品観察表 …… 113
石錐観察表 …… 113　不定形石器観察表 …… 113
両極剥離痕のある石器観察表 …… 114　磨製石斧観察表 …… 114
敲磨石類観察表 …… 114　石皿・砥石・台石類観察表 …… 115
石核観察表 …… 115　異形石器観察表 …… 115
玉類観察表 …… 115

插図目次

第 1 図　阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置……2
第 2 図　トレンチ位置図……3
第 3 図　山口遺跡周辺の主な遺跡……11
第 4 図　周辺の地形とグリッド設定図……14
第 5 図　基本層序と遺構検出層位模式図……17
第 6 図　混入物の含有率……18
第 7 図　遺構の平面・断面形態及び遺構覆土の堆積形状の分類……18
第 8 図　弥生土器出土分布図……44
第 9 図　石器出土分布図……55
第 10 図　剥片類出土分布図……60
第 11 図　珪藻化石……64

第 12 図　主要珪藻化石群集の層位分布…… 66
第 13 図　花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の状況写真・種実遺体 …… 67
第 14 図　植物珪酸体含量…… 69
第 15 図　植物珪酸体…… 69
第 16 図　リン酸・腐植含量分布図…… 76
第 17 図　リン酸・カルシウム含量分布図…… 76
第 18 図　山口遺跡における弥生土器の組み合わせとその編年観…… 86

表　目　次

第 1 表　調査・整理の経過……4
第 2 表　山口遺跡周辺の主な遺跡…… 10
第 3 表　器種別石器出土表…… 55
第 4 表　珪藻分析結果（1）…… 65
第 5 表　珪藻分析結果（2）…… 66
第 6 表　花粉分析・寄生虫卵分析結果…… 68
第 7 表　植物珪酸体含量…… 68
第 8 表　微細物分析結果…… 70
第 9 表　放射性炭素年代測定結果…… 75
第 10 表　暦年較正結果 …… 75
第 11 表　土壌理化学分析結果 …… 75
第 12 表　湯ノ倉・板山の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値…… 79
第 13 表　山口遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果…… 79
第 14 表　山口遺跡出土黒曜石製遺物の検定結果‥ 79
第 15 表　山口遺跡・猫山遺跡出土土器の器種組成表 …… 83

図 版 目 次

［図面図版］

図版 1　遺構配置図 1（第 1 面）／遺構分割図配置模式図（第 1 面）／確認層位模式図（第 1 面）
図版 2　遺構分割図 1
図版 3　遺構個別図 1（SK48・49・53・67、SD77・110、SX54・55・85、P28 ～ 31・51・73・74・86・133）
図版 4　遺構分割図 2
図版 5　遺構個別図 2（SD22・24、SX17、P33）／遺構分割図 3（SK7・15・20・828、P6）
図版 6　遺構分割図 3
図版 7　遺構個別図 3（SK829・830、SD22 ～ 25・27、P8 ～ 11・16・18・19）
図版 8　遺構分割図 4
図版 9　遺構個別図 4（SB1500、SK152・520・521・545、SD50・546・583・796・797、SX144、P203・206・522）
図版 10 遺構分割図 5
図版 11 遺構個別図 5（SE995、SK94・991・997、SD43・50・962、SX56・141・142、P44・57・58）
図版 12 遺構分割図 6
図版 13 遺構個別図 6（SK149・763・764・920・969・988、SD148・624・793 ～ 795・798、SX153・154・573、P321・454）
図版 14 遺構分割図 7
図版 15 遺構個別図 7（SE4、SK52・960、SD50・574）
図版 16 遺構分割図 8
図版 17 遺構個別図 8（SX576・577・610・780、P105・128・129・575・605・812・814・815）／（SE722、SK150・507・721・922、SD580、P1014・1038）
図版 18 遺構分割図 9
図版 19 遺構個別図 9（SE513、SK578）
図版 20 遺構個別図 10（SK1255、SD580・645・800・801、SX647・648、P598・599・604）
図版 21 遺構分割図 10
図版 22 遺構分割図 11
図版 23 遺構個別図 11（SE799・857）／（SK1639、SD580・645）
図版 24 遺構分割図 12
図版 25 遺構個別図 12（SE1538、SD1539・1540、SX1537・1624）
図版 26 遺構分割図 13
図版 27 遺構個別図 13（SK1053 ～ 1056・1177、SD645・1031・1032・1041 ～ 1044・1521・1541、P1522）
図版 28 遺構分割図 14
図版 29 遺構個別図 14（SB1282、SE1175・1211・1260、SK1225、SD1031・1032・1201・1207・1259）
図版 30 遺構分割図 15
図版 31 遺構個別図 15（SE1173・1220・1230、SK1174・1212・1621、SD1201・1207・1224、SX1231・1623）
図版 32 遺構分割図 16

図版 33 遺構個別図 16（SE1052、SK1057・1058・1179・1180・1210・1213、SX1208・1209・1178）
図版 34 遺構分割図 17
図版 35 遺構分割図 18
図版 36 遺構個別図 17（SE1554、SD1593 ～ 1596・1598・1599、SX1555・1610、P1162・1163）／（SB1324、SD1031・1201）
図版 37 遺構配置図 2（第 2 面）／遺構分割図配置模式図（第 2 面）／確認層位模式図（第 2 面）
図版 38 遺構分割図 19
図版 39 遺構分割図 20
図版 40 遺構分割図 21 ／遺構個別図 18（SK1414）
図版 41 遺構配置図 3（第 3 面）／遺構分割図配置模式図（第 3 面）／第 3 面調査範囲
図版 42 遺構分割図 22
図版 43 遺構個別図 19（SK1350・1536、P1352・1413・1428・1493・1494・1517・1612）
図版 44 遺構個別図 20（SK1161・1394・1502・1611・1640、P1024・1393）
図版 45 遺構分割図 23
図版 46 遺構個別図 21（SK1165・1170・1227・1449・1450、SX1397）
図版 47 遺構個別図 22（SK1040・1289、P1036、SH1167）
図版 48 遺構分割図 24
図版 49 遺構個別図 23（SB1607 ①＜ P1241・1390 ～ 1392・1506・1507、SX1637 ＞）
図版 50 遺構個別図 24（SB1607 ②＜ P1169・1286・1290・1508・1509・1515 ＞、SK1176・1214、P1051）
図版 51 遺構個別図 25（SK1505・1523）／遺構分割図 25・26（弥生時代）
図版 52 中世の土器 1
図版 53 中世の土器 2
図版 54 中世の土器 3、古代の土器 1
図版 55 古代の土器 2
図版 56 古代の土器 3
図版 57 古代・中世の石器・石製品・鉄製品・銅製品・鉄生産関連遺物・木製品
図版 58 弥生時代の土器 1
図版 59 弥生時代の土器 2
図版 60 弥生時代の土器 3
図版 61 弥生時代の土器 4
図版 62 弥生時代の土器 5
図版 63 弥生時代の土器 6
図版 64 弥生時代の土器 7・土製品・弥生時代の石器 1
図版 65 弥生時代の石器 2
図版 66 弥生時代の石器 3
図版 67 弥生時代の石器 4
図版 68 弥生時代の石器 5
図版 69 弥生時代の石器 6
図版 70 弥生時代の石器 7
図版 71 弥生時代の石器 8
図版 72 弥生時代の石器 9・異形石器・玉類

［写真図版］

図版 73 調査範囲全景、遺跡遠景（古代・中世）
図版 74 遺跡近景、調査前風景、基本土層、作業風景、部分全景（古代・中世）
図版 75 部分全景（古代・中世）
図版 76 調査範囲全景、掘立柱建物 1（弥生時代）
図版 77 掘立柱建物 2、土坑 1、包含層遺物出土状況 1、弥生時代の玉（弥生時代）
図版 78 掘立柱建物、井戸 1（古代・中世）
図版 79 井戸 2（古代・中世）
図版 80 井戸 3（古代・中世）
図版 81 井戸 4（古代・中世）
図版 82 井戸 5（古代・中世）
図版 83 土坑 1（古代・中世）
図版 84 土坑 2（古代・中世）
図版 85 土坑 3（古代・中世）
図版 86 土坑 4（古代・中世）
図版 87 土坑 5（古代・中世）
図版 88 土坑 6（古代・中世）
図版 89 土坑 7（古代・中世）
図版 90 土坑 8（古代・中世）
図版 91 土坑 9（古代・中世）
図版 92 土坑 10、竪穴状遺構（古代・中世）
図版 93 溝 1（古代・中世）
図版 94 溝 2（古代・中世）
図版 95 溝 3（古代・中世）
図版 96 溝 4（古代・中世）
図版 97 溝 5（古代・中世）
図版 98 溝 6（古代・中世）
図版 99 溝 7（古代・中世）
図版 100 溝 8（古代・中世）
図版 101 炭窯、焼土遺構、畝間状遺構（古代・中世）
図版 102 凹地遺構、性格不明遺構 1（古代・中世）
図版 103 性格不明遺構 2（古代・中世）
図版 104 性格不明遺構 3（古代・中世）
図版 105 ピット（古代・中世）
図版 106 掘立柱建物 3（弥生時代）
図版 107 掘立柱建物 4、土坑 2（弥生時代）
図版 108 土坑 3（弥生時代）
図版 109 土坑 4（弥生時代）

図版 110 土坑 5（弥生時代）
図版 111 ピット（弥生時代）
図版 112 埋設土器、包含層遺物出土状況 2、木質遺物出土状況（弥生時代）
図版 113 中世の土器 1
図版 114 中世の土器 2
図版 115 中世の土器 3・古代の土器 1
図版 116 古代の土器 2
図版 117 古代・中世の石器・石製品・鉄製品・銅製品・鉄生産関連遺物・木製品
図版 118 弥生時代の土器 1
図版 119 弥生時代の土器 2
図版 120 弥生時代の土器 3
図版 121 弥生時代の土器 4
図版 122 弥生時代の土器 5・土製品
図版 123 弥生時代の石器 1
図版 124 弥生時代の石器 2
図版 125 弥生時代の石器 3
図版 126 弥生時代の石器 4
図版 127 弥生時代の石器 5
図版 128 弥生時代の石器 6
図版 129 弥生時代の石器 7・玉類

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

一般国道 49 号（福島県いわき市～新潟市）は、太平洋側と日本海側を結ぶ主要幹線道路である。新潟県内では、沿線の阿賀野市･東蒲原郡阿賀町と新潟市を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たしている。現道は阿賀野市の市街地（旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村）を通過し、交通量も 1 日当たり 20,000 台を超えている[1)]。しかし、この区間の道路幅員が狭小なため、近年の交通量の増加に十分対応できず、交通混雑や交通騒音・交通事故など、都市機能や生活環境に与える影響が問題になっている。これらの問題を解消し、安全で円滑な交通を処理することを目的に、「一般国道 49 号安田バイパス」（阿賀野市六野瀬～同市寺社間 5.6km）と「一般国道 49 号水原バイパス」（阿賀野市寺社～同市下黒瀬間 8.1km）が計画された。これら二つのバイパスは、平成 16 年の市町村合併に伴う阿賀野市の誕生を機に、「阿賀野バイパス」と呼称することになった。

阿賀野バイパスのうち、安田バイパス部分は昭和 60（1985）年の一部暫定供用を経て、平成 18（2006）年 10 月に供用されている。

一方、水原バイパス部分は、平成 11 年 3 月に都市計画道路として決定され、翌 12 年 4 月事業化された。平成 15 年度から用地着手が行われた。これを受けて国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委という）との間で、建設用地内における埋蔵文化財の取り扱い、試掘確認調査に関する協議が本格化した。

平成 17 年 4 月、国土交通省から試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）調査を委託した。これ以降、阿賀野バイパスの試掘確認調査が本格化し、平成 17 年度に庚塚遺跡が、平成 18 年度に狐塚遺跡がそれぞれ新遺跡として登録された。本発掘調査は平成 19 年度から本格化し、庚塚遺跡・狐塚遺跡の発掘調査を実施した。

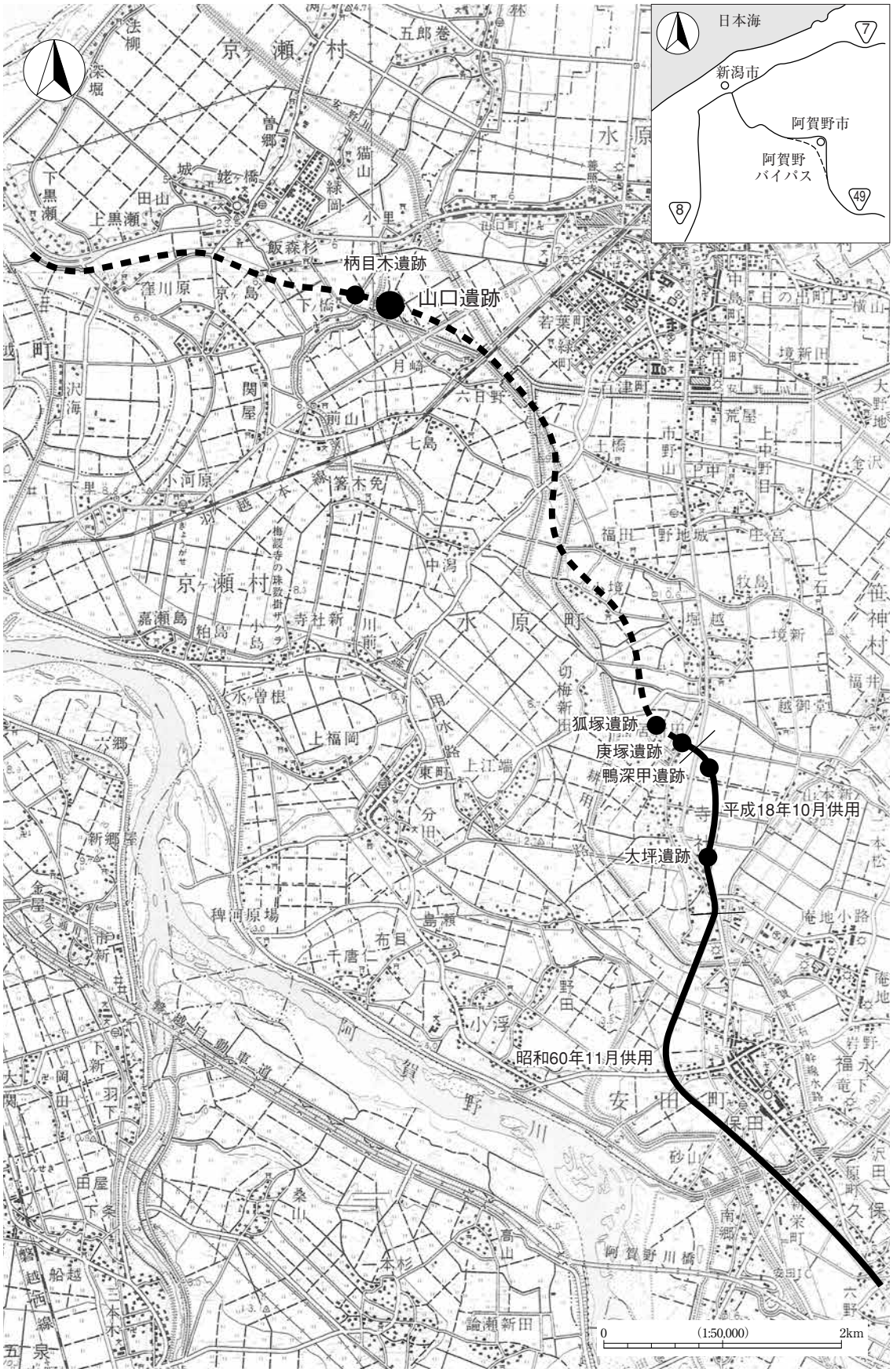
山口遺跡は平成 19 年度の試掘調査で新発見された遺跡であり、本発掘調査必要面積が 42,300m^2 と報告された。これを受けて国土交通省、県教委の 2 者で山口遺跡の取り扱いを協議した。平成 19 年 10 月･平成 20 年 2 月の協議を経て、当初調査予定面積は小里川寄りの 5,000m^2 と決定した。

2　調査の経過

A　試 掘 調 査

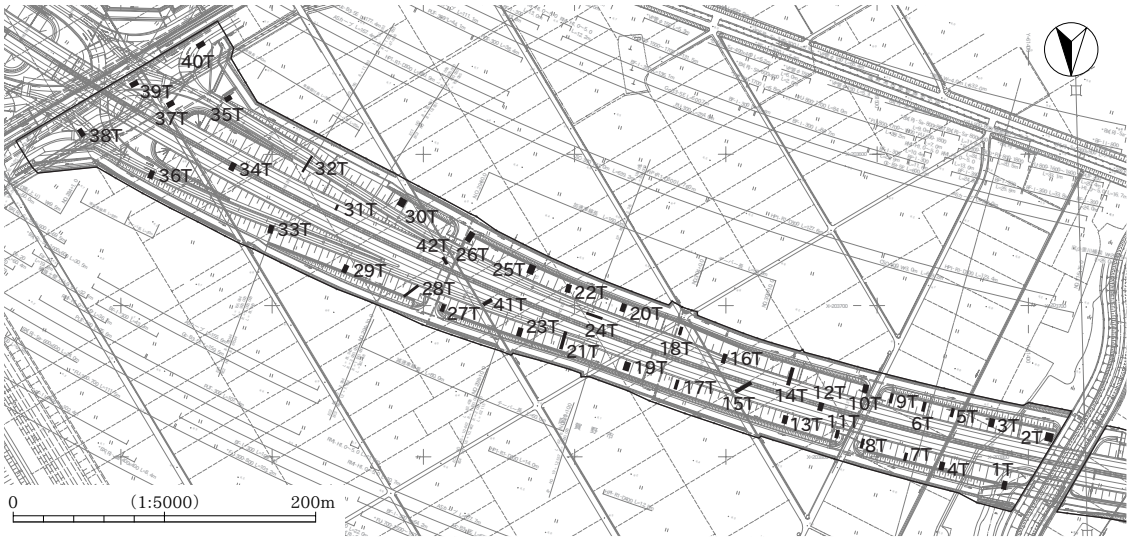
試掘調査は、平成 19 年 10 月 10 日から 30 日までの 15 日間に行った［加藤 2008］。調査範囲は阿賀野川右岸の自然堤防上、阿賀野バイパス路線内の旧小里川から国道 460 号間の 50,000m^2 を対象に、重機及び人力によるトレンチ（試掘坑）掘削と精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。設定したトレンチは 42 か所で、実質調査面積は 796m^2、試掘率は 1.6％である。

1）　阿賀野市保田～同市中央町 1 丁目間では、20,600 台／日もの交通量があり、大型車が 12.5％を占めている状況である [国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所 2006]



第１図　阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置

（国土地理院発行「新潟」「新津」1：50,000 原図　平成９年発行）



第２図　トレンチ位置図

調査によって、弥生時代の遺物包含層と古代・中世の遺物包含層が複数のトレンチから確認された。これに合わせて、遺構も６トレンチで弥生時代の竪穴状の掘り込みが、古代の遺構も５トレンチから32トレンチの範囲内で溝、土坑、ピットが確認された。

この結果を踏まえ、新遺跡の存在が明らかとなり、字名から「山口遺跡」として周知化された。これに伴い古代・中世遺跡36,900m^{2}の範囲に、重複する弥生時代の遺跡3,500m^{2}と古代の遺構が２層確認された範囲1,900m^{2}を加えた、延べ42,300m^{2}について本発掘調査が必要であると判断した。

B　本発掘調査

本発掘調査は平成20年４月15日から12月１日の期間で行った。以下、調査日誌から経過を抜粋して記載する。

４月15日　プレハブ設営をはじめとした準備工に着手した。

４月22日　阿賀野市教育委員会を訪問し、調査計画を説明する。

５月８日　調査区の西側２／３の範囲を対象にバックホーによる表土掘削に着手する。

５月９日　作業員を入れての作業を開始する。遺物も出土し始め、調査区西半では中世の遺物が、東側では古代の遺物が主体であった。また、後に弥生時代の調査範囲とした8F、9Eグリッドを中心とした範囲では、表土直下がⅤ層であったため、弥生時代の遺物も多く出土して遺構の存在をうかがわせた。

５月12日　遺構検出を本格的に開始した。5・6B、5・7・8C、4・7D、3・4・6・7EグリッドではⅢｂ層上面で、これよりも東ではⅤ～Ⅵ層上面での検出となった。

５月29日　遺構掘削に着手した。調査区西側では中世の遺構が、東側では古代の遺構が主体となって出土した。

７月10日　調査区の東側1/3の表土掘削に着手した。ここでは、古代の遺物と鉄滓の出土が目立つ。

８月１日　ラジコンヘリコプターによる１度目の航空写真撮影を調査区西側の「第１面」を対象に行う。

８月18日　弥生時代の包含層であるⅤ層の掘削に着手する。

８月23日　弥生時代の調査と並行して「第２面」の調査のため、対象範囲の間層掘削をバックホーにて28日まで行う。ここで検出した遺構・遺物は共に少なかった。遺構掘削終了後、引き続き下位の「第

3 面」の調査へ移行した。

10 月 9 日　農閑期に入り、これまで使用されていた農道部分の掘削が可能になる。バックホーにて掘削を行い、古代・中世の包含層と遺構が残存していることを確認する。

10 月 10 日　排土置場としていた調査区北東隅の表土掘削を行う。この頃、弥生時代の遺構掘削が本格化し、複数基のピットの存在から掘立柱建物の存在がうかがわれた。

10 月 23 日　調査成果を報道機関に公開する。

10 月 25 日　現地にて調査成果を一般に公開する。見学者 120 名。

11 月 13 日　ラジコンヘリコプターによる 2 度目の航空写真撮影を調査区東半の「第 1 面」を対象に行う。

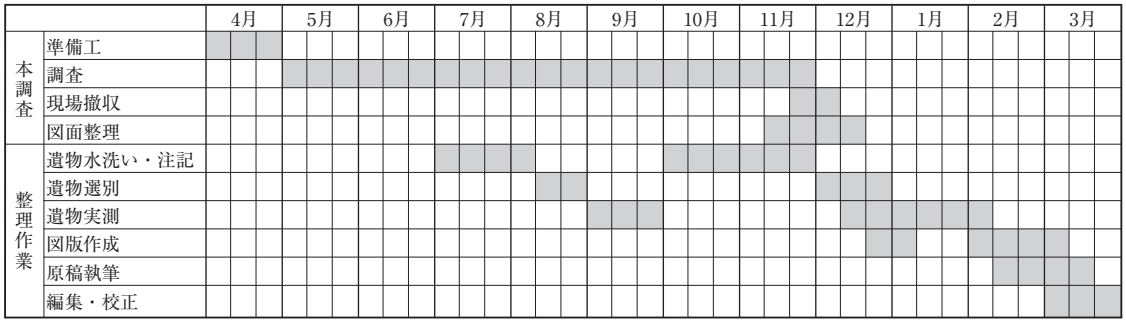
11 月 27 日　ラジコンヘリコプターによる 3 度目の航空写真撮影を「第 3 面」の調査範囲を対象に行う。

11 月 28 日　深度 2 m を超える井戸の断ち割りをバックホーにて行い、底面を検出する。

12 月 1 日　すべての測量を終えて、現地調査終了となる。

C　整理作業

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。現地発掘作業が終了した 12 月 2 日から、本格的な整理作業に着手した。本発掘調査と一部並行して行った整理作業の流れは以下のようになる。



第 1 表　調査・整理の経過

3　調 査 体 制

A　試 掘 調 査

調査期間　平成 19 年 10 月 10 日～ 30 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　木村　正昭（事務局長）

斎藤　　栄（総務課長）

藤巻　正信（調査課長）

庶　　務　長谷川　靖（総務課班長）

調査指導　田海　義正（調査課試掘・確認調査担当課長代理）

調査担当　加藤　　学（　同　班長）
調 査 員　斉藤　　準（　同　嘱託員）

B　本発掘調査・整理

調査期間　平成 20 年 4 月 15 日～ 12 月 1 日
整理期間　平成 20 年 12 月 2 日～ 3 月 31 日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理　木村　正昭（事務局長）
　　斎藤　　栄（総務課長）
　　藤巻　正信（調査課長）
庶　　務　長谷川　靖（総務課班長）
監　　督　髙橋　保雄（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査組織　株式会社　ノガミ
現場代理人　小熊　晋介　（埋蔵文化財調査部）
調 査 指 導　戸根　与八郎（　　同　　調査室長）
調 査 担 当　荒谷　伸郎　（　　同　　調査員）
調　査　員　吉田　浩明　（　　同　　調査員）
　　小林　晴生　（　　同　　調査員　8 月 9 日まで）
　　高橋　勝広　（　　同　　調査員　8 月 18 日から）
　　石垣　義則　（　　同　　調査員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

山口遺跡は、新潟県の北東部に位置する阿賀野市に所在する。阿賀野市は平成 16 年 4 月に安田町、水原町、笹神村、京ヶ瀬村が合併して誕生した市で、本遺跡は旧水原町に位置する。

本遺跡の西方には一級河川の阿賀野川が流れる。阿賀野川は山間部を蛇行し、阿賀野市（旧安田町）草水、五泉市馬下付近から平野に流れ出し扇状地を形成する。この扇状地にほぼ重なる阿賀野市草水から稗河原場付近に至る 12km 程の間では、川の流れは比較的急で、砂礫の広い河原を枝分かれしながら流れている。これより下流では流れを大きく蛇行させながらも、緩やかになり流路も安定する。阿賀野川は広大な沖積地である新潟平野を形成する。

新潟平野は、海岸線に沿って砂丘列が発達し、河川の海への流出口を狭くしている。このような地形のため、洪水時になると河川の水が海に流出しづらく氾濫をおこしやすい。阿賀野川は氾濫を繰り返すことによって流路を変え、自然堤防、三日月湖（河跡湖）を作り、河道の痕跡を残してきた。

本遺跡の東方には五頭連峰が連なる。五頭連峰は菱ヶ岳断層に沿って南北に延び、北から南へ向い、金鉢山（888.4m）、松平山（953.9m）、五頭山（912.5m）、菱ヶ岳（973.5m）、宝珠山（559m）などの山々からなる。五頭連峰の周辺には熊野神社が多く分布することから、中世には熊野信仰（熊野系修験）の対象となる場所であったという意見もある［中野 1988］。現在は登山道が整備され、地域の人々が利用し、また山麓の西側には出湯、今板、村杉などの古くからの温泉もあり、観光地として賑わいをみせる。五頭連峰の西側には、標高約 100 m前後の山々からなる笹神丘陵が約 18km にわたって延びている。丘陵地の西側、北端の旧豊浦町の真木山丘陵から南端の旧安田町の赤坂山丘陵には、古代から中世の窯業遺跡や製鉄関連遺跡が多数分布する。丘陵は第三紀層の上に堆積した第四紀洪積層によって形成されたと考えられる［荒木 1970］。

本遺跡の現況は水田で、その周囲には田園風景が広がる。水田以前は桑畑として利用されていたことが明治 44 年の測量地形図から見てとれる。遺跡の西側には人工河川として改修された旧小里川が流れる。小里川は旧水原町上江端付近に源を発する。現在は旧京ヶ瀬村小里付近で人工河川として改修された安野川へ合流するが、かつては駒林川へと合流していた。この駒林川はさらに北上して人工河川の新井郷川へ合流するが、かつては福島潟へと注ぎ込んでいた。また、正保 4（1645）年に成立した「正保越後国絵図」をみると、かつての安野川も福島潟に流れ込んでいたことが認められる。改修以前の小里川は、勾配が緩やかで流路は大きく屈曲していた。そのため豪雨のたびに氾濫し、駒林川と共に沿岸耕地に浸水、冠水の多大な被害をもたらしていた［京ヶ瀬村 1969］。これを防ぐために行われた小里川・安野川の改修では多くの蛇行部分をカットし、現在の直線的な流れへと変える工事が行われた。

2　歴史的環境

A　弥生時代の遺跡

山口遺跡周辺の弥生時代前期から中期後半までの様相について、阿賀野川以北を中心に概観する。この地域には阿賀野川以南と比較しても多くの弥生時代の遺跡が分布している。

弥生時代に先行する縄文時代後期後半から終末期の遺跡として青田遺跡（旧加治川村）、村尻遺跡（新発田市）、鳥屋遺跡（旧豊栄市）、六野瀬遺跡（5）などある。これらに関わる発掘調査や研究成果から、浮線網状文土器群の鳥屋 2b 式と亀ヶ岡文化の最終型式群の大洞 A' 式が併行関係にあることが理解されている［荒川 1999、小林 2008］。「大洞 A' 式」の範疇をどのように理解するかは研究者間で一致しない部分もあるが、今回の報告では大洞 A' 式の直後、新潟県域の「緒立式」、福島県域の「御代田式」、山形県庄内地方の「生石 2 式」から弥生土器とする見解［石川 2003］に基づいている。

広域的な視点で葬制から弥生時代前半の特徴をあげるとするならば、東日本における再葬墓とこれに関わる遺跡の存在があげられる。弥生時代の再葬墓は前期から中期前半の東日本、とくに中部地方から関東地方、東北南部の一帯に分布しており［石川 1999］、新潟県もその分布圏内となる。県内ではこれまでにも多くの再葬墓が確認されており、その当時の葬制、集落形態や集落構造を読み解く上で重要な地域と位置付けられると考える。

県内の再葬墓の調査は昭和 13（1938）年、杉原荘介氏らによる六野瀬遺跡の調査に始まる。この時、再葬墓に隣接して伸展葬とされた 1 体も検出されている［杉原 1968］。その後、平成 2 年（1990 年）にも調査が行われ、再葬墓に関係すると見られる「剥片剥離作業ブロック」が検出されている［石川 1992］。

猫山遺跡（6）は昭和 33（1958）年に調査が行われ、県内 2 例目の再葬墓が検出された［上原 1959］。ここで出土した土器は、当時の北陸地方を代表するものとして、全国集成の中でも紹介されている［上原・磯崎 1968］。その後、平成 13（2001）年に京ヶ瀬村教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代前期から中期前半にかけての大型掘立柱建物群や土坑墓の可能性が示唆される土坑 6 基などが検出された。この成果は集落の調査事例が少ない中で、貴重なものといえる［古澤ほか 2003］。平成 14（2002）年からは、遺跡の範囲と内容を確認するための試掘調査が実施されている。遺跡範囲の推定とともに、層位的な遺物の出土状況の把握などの成果があげられている［古澤 2008］。本遺跡の東方約 1.3㎞に位置する三辺稲荷遺跡（43）は平成 20（2008）年に調査が行われ、前期の土器とともに直径 4m の住居が検出された［古澤 2008］。

大曲遺跡（4）は昭和 49（1974）年に土取りにより偶然に発見された遺跡である。当時、再葬墓 1 基確認されたが、その詳細は報告されていない。その後、平成元（1989）年に県内では 4 例目としての調査が行われ、17㎡の小範囲から 4 基の再葬墓が検出された［石川 1989］。出土した土器は、県内では分布が希薄な中期前葉のものであり、周辺地域との関連を示す事例を含むものであった。石器では第 3 ～ 5 号墓坑から多数の剥片類が出土した点が特筆される。また、近年までその詳細が不明であった 1974 年の調査で出土した土器については、阿賀野市教育委員会により再整理が行われた。これらについては資料紹介という形で公表されている［アラタンホヤガ 2008］。

大曲遺跡に隣接する山ノ下遺跡（3）は平成 9（1997）年に調査が行われた。この報告の中で再葬墓造営期の遺跡の類型化が試みられ、「再葬墓遺跡」以外を「剥片剥離作業遺跡」と「生活遺跡」として捉え、

山ノ下遺跡は生活遺跡に位置付けられた［石川 2005a］。これにより、再葬墓研究の進展に伴っては、それ自体にのみに焦点をあてるのではなく、その周辺の遺跡との関連性とともに論じる必要性が明確に指摘された。

その後、広域的には中期中頃の南御山 2 式直前には弥生再葬墓は減少し、それ以後は見られなくなり、それに変わるように土坑墓と壺棺が普及する。六野瀬遺跡では東北系弥生土器の南御山 2 式とともに、北陸系櫛描文土器が出土している［石川 2000］。狐塚遺跡（2）では、中期後半の土坑墓が 11 基検出されている［佐藤ほか 2009］。なお、本遺跡からも中期後半の宇津ノ台系の土器が少量ではあるが出土している。

B　古代の遺跡

山口遺跡が位置する阿賀野市は、古代の行政区画である越後国沼垂郡に属していた。越後国沼垂郡の成立については［山田 1986、轡田 2004］が詳しい。それによると、7 世紀末頃、それまで越国とされていた地域が細分され、越前国・越中国・越後国・佐渡国が成立する。その後、大宝二（702）年に越中国の蒲原、古志、魚沼、頸城の 4 郡が越後国に移管され、和銅元（708）年には越後国に出羽郡が成立する。和銅五（712）年に出羽郡が分離し、陸奥国の最上・置賜両郡と合わせて出羽国が設置される。8 世紀中葉には越後国の領域がほぼ確定し、現在の新潟県の原型が出来上がる。また、「和名類聚抄」によると、沼垂郡には足羽・沼垂・賀地の 3 郷が記されており、本遺跡周辺は賀地郷あるいは沼垂郷に属していたと見られる。

以下では生産遺跡と集落遺跡の動向に着目し、古代の様相を概観する。なお、須恵器及び土師器の年代については述べるときは、［春日 1999］編年を用いることとする。

生 産 遺 跡

窯業や製鉄などの林野の開発は、製塩などの海辺の生産とともに、古代の主要な手工業生産に位置付けられる。五頭山麓窯跡群（笹神窯）は沼垂郡内の須恵器生産を担い、一郡一窯的生産の役割を果たしていた。五頭山麓窯跡群は 8 世紀前半に須恵器生産が開始され、8 世紀後半から 9 世紀前半に窯数が最も多くなり、9 世紀中葉以降生産は減少し、そして衰退へと向かう。最も活動が活発になる時期は、官衙の再編時期と重なり、手工業生産が最も拡充される時期である。調査事例は清見寺 A 窯跡（24）［中川ほか 1962］や狼沢 2 号窯跡（50）［中川ほか 1973］があり、出土した須恵器からそれぞれ 8 世紀後半（Ⅳ 2 期）、9 世紀前半（Ⅴ 2 期）の所産である［小林 2004］。9 世紀前半以降、他郡では須恵器生産が衰退していくが、笹神窯では小規模ながら生産が継続される［望月 2006］。なお、沼垂郡内にはホーロク沢窯跡群（新発田市）［鶴巻 2001］や安田窯跡群（旧安田町）［春日 2004］が確認されているが、ともにⅣ 2 ～ 3 期（8 世紀後半）と操業時期は短期間である［春日 2006］。五頭山麓窯跡群で生産される須恵器の胎土はやや粗く、石英や長石、金雲母などの混入物が多く混入するざらついた胎土が特徴である。

集 落 遺 跡

生産遺跡に続いて、古代の集落遺跡を見てみると、集落（村落）がいくつかのまとまりをもって分布する。発久遺跡（23）の周辺には、小曽根遺跡（14）、腰廻西遺跡（51）、壱本杉遺跡（52）、未明遺跡（54）、台田遺跡（53）などが分布する。この周辺は、古墳前期から在地豪族の拠点として開発が進められていた地

域でもあった。また、近くには五頭山麓窯跡群や製鉄遺跡が位置し、それらの手工業生産との関わりを持ちやすい地域だったともいえる。発久遺跡はⅣ～Ⅵ期（8 世紀中葉～ 9 世紀後半）まで続く長期的な集落で、当時の役所の業務に関わる木簡や多数の墨書土器が出土したことから官衙関連遺跡と評価されている［川上 1991］。代表的な木簡をみていくと、暦木簡は各月朔日の干支が書かれている木簡で、そこに記されている暦は記載方法や朔日干支の検討から延暦十四(795)年の暦とみられる。辺抄木簡は、品物を受け取ったことを証明する木簡である。その木簡には、受け取り責任者とみられる「磯部廣人」という署名も記されている。さらに、健児が宿直勤務をしたことを上司に報告した宿直報告の木簡も出土した。健児制とは延暦十一（792）年に設置された兵制で、健児には地方有力者である郡司の子弟が充てられた。この木簡の出土から、発久遺跡には健児によって守衛される施設があったと推測されている［相沢 2004］。また、その木簡は定木として再利用された痕跡が認められる。Ⅳ期（8 世紀中葉～ 9 世紀初頭）は律令社会の変革期であり、これまでに整備されていた官衙の再編が行われる時期と見られ、沼垂郡及び岩船郡では、この時期に官衙関連遺跡が増加する［春日 2006］。ただし、壱本杉遺跡（52）のように 9 世紀中頃に新たな集落が形成される動きも見られる［川上 1999］。

その一方で、9 世紀に入ると、これまでに古代の集落が形成されなかった阿賀川右岸の自然堤防及び微高地に、新たな土地開墾の動きがみられる。その動きは、大坪遺跡（39）、横峰 B 遺跡（46）、鴨深甲遺跡（42）、庚塚遺跡（1）の周辺で認められる。大坪遺跡では土師器焼成遺構が 5 基検出されており、その土師器の年代はⅥ期の所産である［荒川ほか 2006］。

C　中世の遺跡

中世に入ると、これまでの政治や経済活動に大きな変化が見られる。そのひとつは土地支配の在り方で、古代の律令制とは異なり、荘園と国衙領からなる「荘園公領制」と呼ばれる。中世において、山口遺跡周辺は摂関家領の白河荘内に属していた。白河荘の範囲は阿賀野市及び新潟市北区（旧豊栄市）の一部が含まれると考えられており、白河荘の成立やその歴史的背景については［荻野 1986］や［樋口 2004］、［田村 2004］の論考が詳しい。

白河荘について

上記の論考を参考に白河荘について概観する。中世では、古代で見られた初期荘園や免田型荘園とは異なり、領域型荘園（中世荘園）が成立する。それは 11 世紀中葉以降のことで、12 世紀初頭の白川院政期に本格化し、鳥羽院政期にピークを迎える。越後国の荘園の多くは、鳥羽院政期に成立したものである。また、11 ～ 12 世紀には国衙領も郡・郷・保などの新たな支配体制に分割・再編成された。阿賀野川以北（阿賀北）では、白河荘のほかに、奥山荘･加地荘･豊田荘などの荘園が成立することから、「荘園の世界」といわれる。白河荘の立荘は、長承三（1134）年八月二十八日「越後国司庁宣」で認められる。そこには、荘園の四至（東西南北の境界）に牓示を打ち、国司の入部を禁じる旨が記されている。牓示とは領主名が記された所領の境を定める標識であり、官物や臨時雑役の免除、不入などの特権の標識でもある。また、治承四（1180）年五月十一日「皇嘉門院惣処分状」から白河荘が皇嘉門院領であったことがわかる。皇嘉門院は摂関家の藤原忠通の娘・聖子であり、同荘が成立した長承三年段階では崇徳天皇の皇后であった。ただし、実質的な管領者は藤原忠通であり、彼が皇嘉門院領として白河荘を立荘させたと見られる。立荘する際には、立荘に反対する在庁官人を牽制し、現地で立荘を承認させる力が必要であった。その実力を持っ

ていたものが城氏一族と見られている。

城氏とは、10 世紀後半～ 11 世紀前半に東国で活躍した平維茂（維良）の後裔である。維茂の嫡子繁貞は越後国に郎党・従類を養い、越後国司の追捕の対象となるような活動を行うなど、国衙勢力と敵対しながらも、越後国内に所領を獲得しつつある存在であった。城という性は、維茂の子繁成が出羽城介に任命されたことに由来する。繁成と越後の関わりは不明であるが、城氏一族が「越後国住人」と初めて史料上にその姿を明確に現したのは、永久五（1117）年のことで、そこで記される「越後国住人平永基」は城貞成の子である。城氏一族のなかで、白河荘に関わった人物に資永（助永）・助職（長茂）兄弟がいる。とくに弟の助職は城四郎と称し、国人からは白河御館とも呼ばれていた。治承三（1179）年に始まる源平の争乱は、その後越後国にも波及し、平家の滅亡に伴い城氏の勢力も衰えはじめる。

文治元（1184）年、越後国は源頼朝の知行国となり、それ以後も一時的な断絶があるものの、鎌倉時代を通じて将軍知行国として存続し、鎌倉幕府の管轄領域である東国に位置付けられた。鎌倉期の白河荘は、伊豆出身の大見家秀が地頭となって管理、支配を行った。その後、荘内をいくつかに分割し、大見一族から派生した安田氏、水原氏、山浦氏らの国人領主によって支配された。大見一族の在地支配が進むにつれて九条家の白河荘支配は後退していく。

元弘三（1333）年に鎌倉幕府が滅亡し、建武新政権が発足する。倒幕に大きな功績を挙げた新田義貞が越後守に任命され、守護職を兼務し一国全体を統括した。程なく、足利尊氏と後醍醐天皇・新田義貞との関係は悪化し、尊氏は後醍醐側に反旗を翻す。後醍醐天皇の南朝側は、新田義貞を総大将として出陣するが、尊氏軍に敗れ去る。これ以降、越後国も南北朝の動乱状況となる。白河荘の位置する阿賀北地域には、尊氏方の北朝勢力が数多く控えていた。白河荘山浦地頭大見能登権守の代官を名乗る加治岡政光は、足利方の国大将佐々木加地影綱の軍に属し、新田方の軍勢と合戦している。これは、白河荘の在地勢力が動乱に参加している唯一の事例である。

延元三（1338）年、尊氏は征夷大将軍となり室町幕府が成立する。暦応四（1341）年、上杉憲顕が越後国守護となる。それ以後、上杉氏は越後の領国支配を進め、上杉一族や守護代長尾一族が越後各地に配置されるようになる。越後府中を拠点とする守護上杉氏の支配は、阿賀野川以北には及びにくかったと見られ、越後守護の弟・憲重が白河荘の山浦を拠点としたことは、守護支配の弱点を補うものと見られる。この後、16 世紀前半まで守護上杉氏、守護代長尾氏による越後国支配の体制が存続する。

永正四（1507）年、守護代長尾為景が上杉一族の上条定実を擁立して、守護上杉房能を追放したとき、越後の戦国時代が幕を開ける。

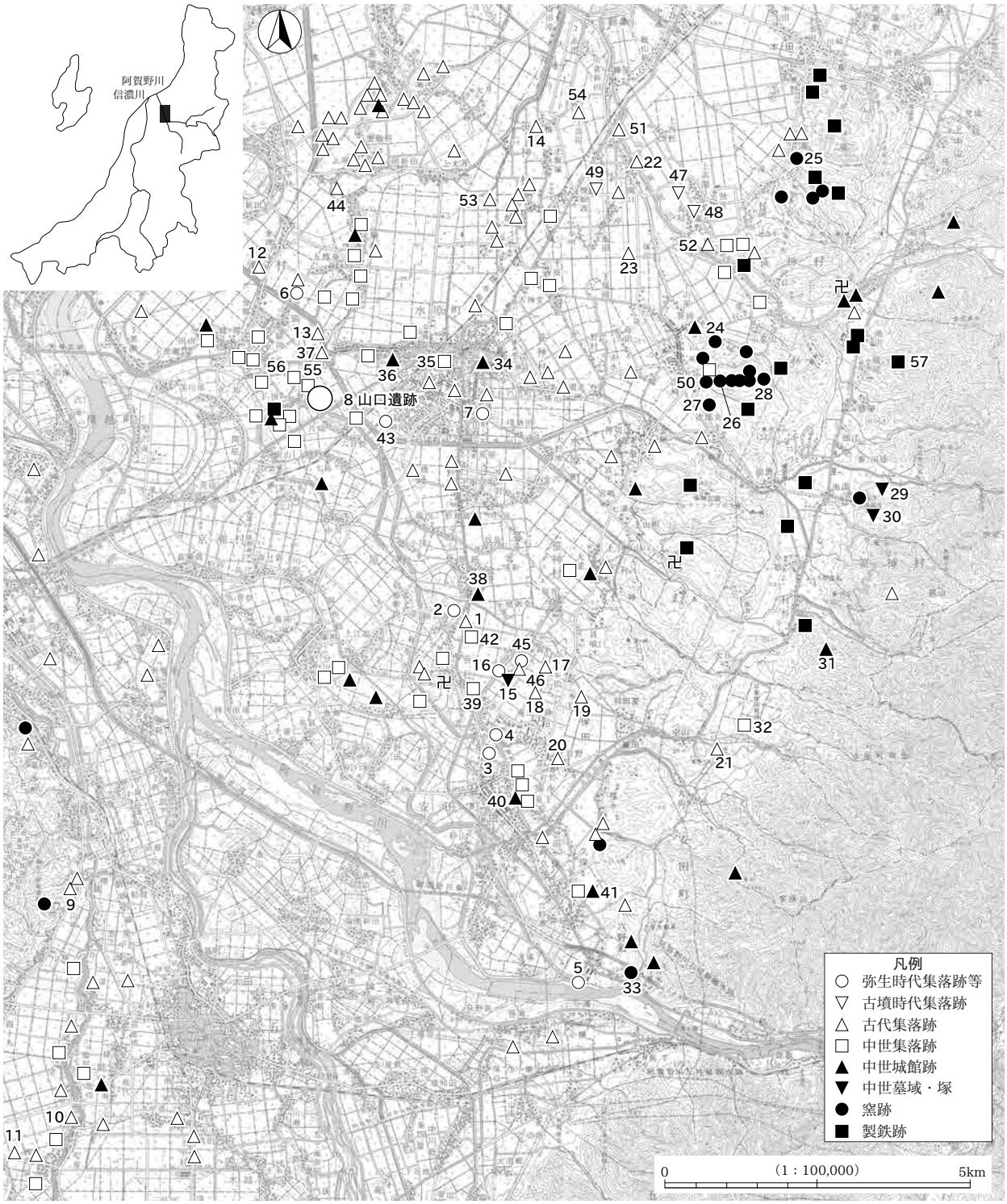
No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	庚塚	11	住吉田	21	ツベタ B	31	村杉城跡	41	六野瀬館跡	51	腰廻西
2	狐塚	12	村下	22	腰廻	32	滝山	42	鴨深甲	52	壱本杉
3	山ノ下	13	大曲川端	23	発久	33	赤坂山中世窯跡	43	三辺稲荷	53	台田
4	大曲	14	小曽根	24	清見寺窯跡 A	34	水原館跡	44	山鳥屋敷	54	未明
5	六野瀬	15	横峰経塚	25	北沢	35	七面堂	45	横峰 A	55	柄目木
6	猫山	16	小山崎	26	狼沢中世窯跡	36	下条館跡	46	横峰 B	56	村前東
7	下金田	17	上野林 J	27	権兵衛沢窯跡	37	羽宜場	47	上高関	57	湯沢砂子
8	山口	18	上野林 L	28	背中炙窯跡	38	堀越館跡	48	前田		
9	小実山	19	上野林 C	29	経沢中世墓域	39	大坪	49	高畑		
10	新保	20	岩野 A	30	目洗沢中世墓域	40	安田城跡	50	狼沢二号窯跡		

第 2 表　山口遺跡周辺の主な遺跡

生 産 遺 跡

中世における経済活動は、古代以上に流通範囲や流通量が拡大する。集落遺跡から出土する陶磁器や土器の器種組成は、広域流通品の珠洲窯や越前窯の製品、狭域流通品の在地産陶器、輸入陶磁器、在地産の土師器などからなる。

12 世紀後半以降、中世須恵器生産の中心的役割を担う珠洲窯が活発になる状況の中で、笹神丘陵では



第３図　山口遺跡周辺の主な遺跡

（国土地理院発行　平成11年「津川」平成９年「新津」「新潟」平成２年「新発田」 1:50,000原図）

古代に一度廃絶した窯業が再開される。笹神丘陵における窯業生産の推移は、13 世紀の北沢遺跡（須恵器系・吉岡Ⅱ古期、13 世紀第 3 四半期）に始まり、背中炙窯（須恵器系・吉岡Ⅱ新期、13 世紀第 4 四半期）［吉岡 1994］、権兵衛沢窯（瓷器系・13 世紀後半～ 14 世紀初頭）、赤坂山中世窯（瓷器系・13 世紀中頃～後半）と生産が短期操業で運営され、狼沢窯（瓷器系・13 世紀末～ 14 世紀前半）をもって終焉を迎える［小田 1999］。また、赤坂山中世窯跡の西方約 1km に位置する六野瀬遺跡（5）では、近接する赤坂山中世窯の製品が多く出土することから、その製品の積み出し場と推定されている［鶴巻 1992］。

集 落 遺 跡

集落では土地利用に変化が見られ、堀が巡る館が出現し、集落や生産域には条理区画が用いられる。また、丘陵部には防御施設を伴う山城も出現する。白河荘内には中世館跡が数多く確認されているが調査事例は極めて少ない。堀越館跡は 14 世紀後半～ 15 世紀前半の館で、出土遺物は日用品が少なく、茶の湯、花生け、香に関する非日用的なものが目立つ。特に、重要な資料として廃棄土坑からの一括遺物が挙げられる。これは火事場整理品と見られ、和田中条氏文書中条房資記録の応永三十（1423）年の部分に、堀越要害落城の記事が残っていることから、この廃棄一括資料は考古学と文献史学の双方の視点から検討できる貴重な事例といえる［小田 2001］。それ以外の城館としては水原館跡（34）、安田城（40）、笹岡城などがある。

大坪遺跡（39）の周辺では 9 世紀に始まり、中世まで断続的に営まれた複合遺跡が分布する。大坪遺跡では中世初期の掘立柱建物 50 棟が検出され、その内訳は梁間 1 間型建物が 10 棟、総柱建物が 40 棟である。大きなものでは床面積が 100㎡を超えるものもあり、4 棟検出されている。遺構はこのほかに井戸や大型の溝、木棺墓が検出されている。遺物は土師器を中心に、珠洲焼や国産陶器、白磁や高麗青磁の輸入陶磁器類が多数出土し、主体となる時期は 11 ～ 12 世紀であった。これらの成果により大坪遺跡は大型建物を中心とした集落であり、当時の有力者の居館と考えられている［荒川ほか 2006、荒川 2007］。鴨深甲遺跡（42）は、14 世紀～ 15 世紀前半の集落であり、掘立柱建物や井戸、土坑などが検出されたほかに、溝状の凹地遺構が数多く検出された。凹地遺構は水田跡の可能性が示唆されており、鴨深甲遺跡は居住域と耕地または水田と見られる生産域からなる集落である。［髙橋ほか 2006］。なお、鴨深甲遺跡の西側に隣接する狐塚遺跡（2）でも 12 ～ 14 世紀の集落が確認されている［佐藤ほか 2009］。

第Ⅲ章　調査の概要

1　調査の概要

A　遺跡の立地と微地形

本遺跡の所在する阿賀野市域は、北流する阿賀野川によって形成された沖積平野と五頭山を中心とした山地、標高約 100m の笹神丘陵で構成される。遺跡は阿賀野川の右岸、流れから東へ約 3.4km 離れた沖積地に位置している。北東は小里・山口集落、南西は下ノ橋集落、南東は月崎・六日野のそれぞれの集落が乗る自然堤防に囲まれた氾濫平野に位置している。遺跡の周囲に目を移すと、集落の位置する自然堤防や旧河道によって若干の起伏が認められるものの、近代の耕地整理によってほぼ平坦地へと改変されている（第４図）。そのため旧地形の把握は困難であったが、本来は微高地と後背地が複雑に入り組んだ複雑な様相を呈していたと考えられる。地形図及び周辺住民からの聞き取りによると、本遺跡周辺は耕地整理以前には桑畑として利用されていた。なお、現況の水田の標高は約 6m である。

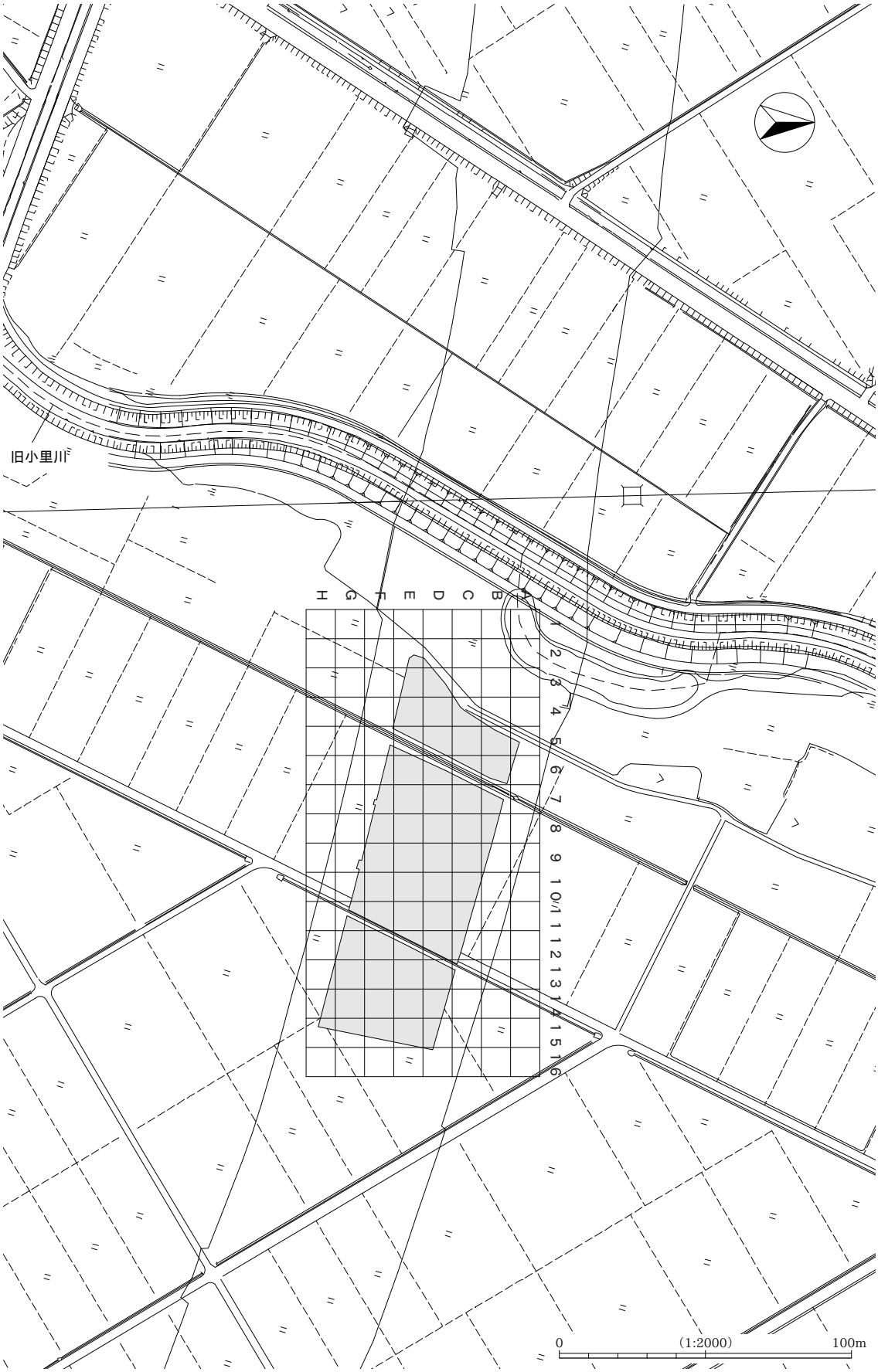
調査区の西側 60m に旧小里川が北流する。現在は排水路として開削改修されているが、本遺跡から約 800m 北流した地点で駒林川に合流して福島潟方面へと至る。今回の調査では、弥生時代から古代までの地形が旧小里川に向かって下る様子が明らかになった。このことから、流路部分については調査区外であったが、この斜面が旧小里川の河川作用によって形成された可能性を指摘できる。これについては基本層序の項で詳述する。この旧小里川の対岸、本遺跡から約 70m 西方には柄目木遺跡が位置する。

B　グリッドの設定

グリッドの設定については今後の調査継続に伴う復元性を考慮し、道路法線に沿った任意のものではなく東西座標軸による数値で設定した。

グリッドは、国家座標Ⅷ系に沿って 10m の方眼を組み、これを大グリッドとした（第４図）。大グリッドの呼称は、西から東へアラビア数字で１～５、北から南へアルファベットの大文字でＡ～Ｅとした記号を組み合わせ、1A･2A…、1B･2B…、1C･2C…のように呼称した。さらに大グリッド内を 25 分割し、北西隅を 1、北東隅を 5、南西隅を 21、南東隅を 25 となるように番号を付して 2m 四方の小グリッドとし、大グリッド番号との組み合わせで、「9E17」などと表した。調査範囲のほぼ中央に位置する 9E グリッド北西隅の杭の座標はＸ＝ 203780.000、Ｙ＝ 61480.000 である。

なお、調査区中には農作業用水路が２本縦断していた。この２本は発掘調査中も供用中であったため安全確保を理由に、水路からは十分な距離をとって表土・包含層掘削を行った。さらに、調査区の周囲も農道に囲まれていたため、表土掘削は調査境界から距離をとり、農耕車の通行と作業員の安全に留意して作業を行った。



第４図　周辺の地形とグリッド設定図

2　基本層序と地形の変化

本遺跡は阿賀野川及びその支流によって形成された沖積地の氾濫平野に立地している。今回の調査では、弥生時代から古代、中世に至る地形の変化と土地利用の変遷が捉えられた。

人為的な痕跡を残すⅥ層以前の堆積層は、重機による掘削が可能な深度までは、基本層序で把握したものと同質のシルトを基本とした層であった。これは比較的均質なシルトが厚く堆積し、阿賀野川本流の作用による沖積世の堆積物と考えられる。その後、現在の流路と近接した位置に旧小里川が流下を始める。この河川の浸食作用により調査区西半のⅥ層が削られ、西へ下る斜面が形成されたと考えられる。旧小里川との関連は、弥生時代調査範囲のⅥ層上面の等高線が開削改修以前の旧河道痕跡に平行することからも推察できる。その後、弥生時代に至り、人々が最初の生活痕跡を残す時期を迎えて遺物包含層のⅤ層が形成される。弥生時代の遺構は、この斜面を上った自然堤防状の微高地とその後背地に構築され、斜面は主に遺物の捨場として利用された。

弥生時代以降、遺跡は一度空白期となり、再び人々の痕跡が認められるのは古代となる。この時点で斜面はまだ存在しているが、人々の活動痕跡の中心は調査範囲の東側に重心を移し、斜面はわずかな遺物の散布が認められる程度となる。この古代を主とする遺物包含層であるⅣ層は、上下層と異なる暗褐色を呈している。これは植生の変化を含めた周辺環境の変化と安定を示している可能性がある。その後、斜面は間層であるⅢｂ層により埋没する。この堆積には遺物は伴わず、比較的均質な砂質シルトで構成されることから、比較的短期間の内の洪水堆積であったとも推察できる。これにより斜面は埋積し、調査区東半から続く平坦な地形へと変わる。

ここまでは、斜面部を中心に堆積過程と地形の変遷を述べたが、調査区東側の高位面では近代の耕地整理に伴う削平により原地形の完全な把握には至らなかった。わずかに耕地整理時に農道部分として削平を免れた部分（第５図・柱状図⑥）から推測すると、古代の遺物を多く含む暗褐色層が確認され、Ⅳ層が高位面まで及ぶことと、斜面部でⅣ層を覆い隠したⅢｂ層がここまでは及んでいないことが推測された。こうして調査範囲がほぼ平坦になった後の中世段階で、遺物包含層のⅢａ層が形成された。合わせて調査範囲全域に遺構が構築されるようになる。その後、近世段階では遺物の出土も少なく、利用頻度は高くなかったと考えられる。近代に至ると桑畑として利用された後、前述の耕地整理を経て、現在は周囲一面が水田へと転換されている。

上記のように原地形及び遺物包含層と遺構確認面の関係については、削平により断続的にしか把握できなかった部分がある。そのため、調査は層位順にではなく、遺構の広がりを面として捉えることで行った。現代の耕作土であるⅠ層、旧表土と考えられるⅡ層及び調査区西半で確認された中世の遺物包含層であるⅢａ層を掘削した後に検出した遺構群を「第１面」とした。ここで遺構検出面としたⅢｂ層の下に被覆されたⅣ層を掘削した後に検出した遺構群を「第２面」とした。上面の一部が古代･中世の遺構検出面となった弥生時代の遺物包含層であるⅤ層については、その範囲が限定されることから、遺構・遺物が検出された部分のみを調査範囲とし、ここで検出した遺構群を「第３面」とした。調査は以上の計３面で行い、報告順も調査順に従い「第１面」（古代・中世）→「第２面」（古代）→「第３面（弥生時代）」の順とした。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅵ層の説明をする（第５図）。本調査区は西へ下る斜面部分と削平により作出された東側の平坦面で構成される。この状況を表現するため、基本層序の土層の取得は調査範囲の長軸である

「柱状図①－柱状図⑦」ラインをメインベルトとして行った。

なお、既報［加藤 2008］の試掘調査との基本層序の相違点は、大きく以下の 2 点である。①試掘でのⅢ層は、これをⅢ a、Ⅲ b 層に新たに細分し、Ⅲ a 層を中世を主とする遺物包含層、Ⅲ b 層は無遺物層と理解し、この上面を遺構検出面とした。②本調査区内では「試掘調査のⅥ層」は存在しなかったが、調査段階では試掘調査の層順をそのまま用いて作業を行った。しかし、今回の報告にあたっては層順の連続に欠けが生じないように「試掘のⅦ層」を「Ⅵ層」に振り替えて行う。この 2 点以外に大きな認識の違いは無い。

Ⅰ層…にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/3）　粘性：強い　しまり：強い

現代の水田耕作土である。調査区を南北に縦断していた農道部分を除く全域に広がる。

Ⅱ層…褐色シルト（10YR4/4）　粘性：普通　しまり：普通

中世以降に堆積した層で、耕地整理以前の旧表土と考えられる。

Ⅲ a 層…にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性：普通　しまり：普通

中世を主とする遺物包含層である。Ⅲ b 層と色調・土質が近似するが、遺物の面的な広がりが捉えられたことから遺物包含層として分離した。植物珪酸体分析（第Ⅵ章 2）では、栽培植物であるイネ属を検出した。

Ⅲ b 層…褐色砂質シルト（10YR4/4）　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い

調査区西半の斜面を埋没させた無遺物の間層で、上面は中世の遺構検出面となる。今回の基本層序中ではもっとも砂質が強い。土質は均質であり、混入するシルトブロックの粒径が局所的にではあるが、水平に堆積する様子が観察できる部分もある。このことから堆積に水の作用の介在をうかがい知ることができ、比較的短期間の内の洪水堆積であった可能性も指摘できる。

Ⅳ層…暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性：普通　しまり：普通

古代から中世の遺物包含層である。時代幅は広いが、今回の調査範囲では主に古代の遺物を包含していた。間層であるⅢ b 層に覆われた部分からの出土遺物は古代のものに限定されることから、Ⅲ b 層の堆積時期は「古代以降、中世の遺構が構築される以前」に置くことができる。

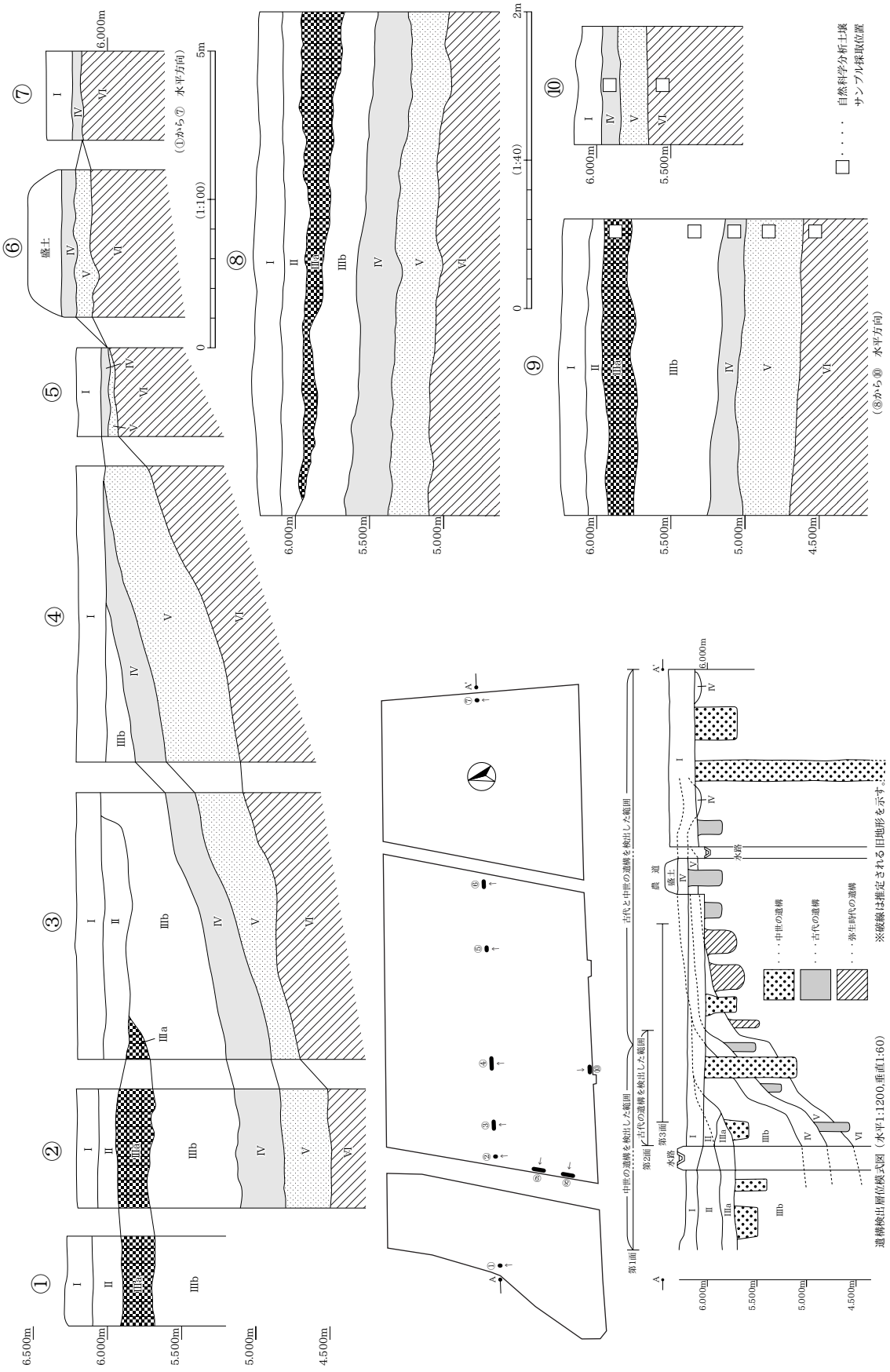
色調は上下層とは異質な暗褐色を呈する。これを有機物の堆積作用と考えれば、植生を含めた周辺環境の大きな変化、もしくは長期の安定が推測された。植物珪酸体分析（第Ⅵ章 2）からは、「タケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等」が生育していた環境が推定されている。

Ⅴ層…にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）　粘性：強い　しまり：強い

弥生時代の遺物包含層で、上面は古代・中世の遺構検出面でもある。Ⅵ層に色調・土質ともに極めて近似するが、遺物の混入と極めてわずかに混入する炭化物（φ～ 3mm）によって分層し得た。表現が適切ではないかもしれないが、調査時は「Ⅵ層よりわずかに濁った層」という認識であった。弥生時代の遺構が構築される範囲に存在し、前述の農道部分（第 5 図・柱状図⑥）から東では検出できなかった。

Ⅵ層…褐色粘質シルト（10YR4/6）　粘性：強い　しまり：強い

無遺物層で、本層上面を今回調査範囲の全時期を通しての最終遺構検出面とした。色調・土質はⅤ層に近似するが、こちらは炭化物粒を一切含まない均質なシルト層である。以下、重機による掘削が可能な深度までは砂質の若干強い層を数回挟むものの、基本的に同質のシルトが厚く堆積するのを確認した。



第５図　基本層序と遺構検出層位模式図

3　調査の基本方針

土層注記にあたっては客観性を確保するため、現場での調査段階において調査員間で共通認識を持って記載を行った。

色　　調　農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』（2002年版）を使用したが、色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の酸化の進行によって著しく変化する。可能な限り水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するように心がけた。また、グライ化が認められた部分についてはできる限り迅速に、酸化が進行する前に色調の記録を行った。

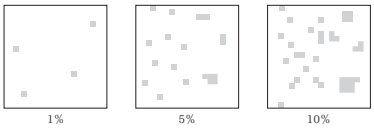
土　　質　本遺跡の土質は基本的には「シルト」であるが、より粘性が強く粒子が細かいシルトを「粘質シルト」、より粘性が弱く粒子が粗いシルトを「砂質シルト」と区別した。

粘　　性　同じ土質に分類された土層の中で、さらに「強い」、「普通」、「やや弱い」、「弱い」の４段階に細分した。基本層序を基準にし、自然堆積に近い状態のものを「普通」とした。感覚的要素が強く働く項目であるが、調査員が相互に共通認識の構築に努め、記載内容にズレがないように記載した。個別の土層説明の掲載にあたっては「普通」の場合は記述を省略し、これ以外のものについてのみ特記する属性として記述した。

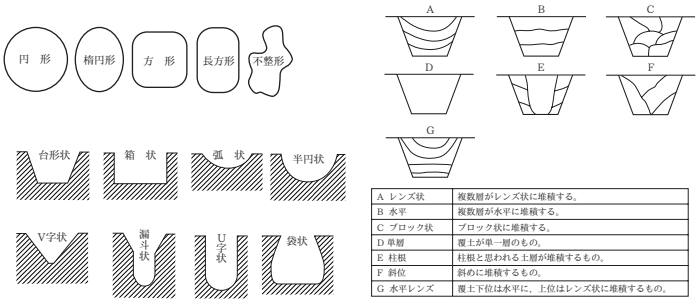
し ま り　十分に水分を含んだ状態で、「強い」、「普通」、「やや弱い」、「弱い」の４段階で区別した。基本層序を基準にし、自然堆積に近い状態のものを「普通」とした。しまりは、粘性と同様に極めて感覚的要素が多い記載であるので、この記載についても調査員が相互に共通認識を持って行った。個別の土層説明の掲載にあたっては「普通」の場合は記述を省略し、これ以外のものについてのみ特記する属性として記述した。

混 入 物　混入物には、炭化物、焼土などが認められた。混入物の含有率は、色調と同様に『新版　標準土色帖』（2002年版）に基づいて判断した（第６図）。個別の土層説明の掲載にあたっては、個別の指示が無い限り「均等に」混入した状態を示しており、これ以外のものについては特記事項として状態を記述した。また、混入物の粒径については数値を記述した。下限と上限の定まっているものは「3 ～ 5mm の」とし、微細物が多く上限のみ把握できたものに関しては「～ 3mm の」と記述した。

また、本遺跡では基本層序及び遺構覆土中で、普遍的に径 5mm 前後の白色シルトブロックの混入が３～７％前後認められた。これは、後世の植物の根痕である可能性が高いとのご教示を得ることができた。このため径 10mm 以下、かつ含有率 10％以下の白色シルトブロックについては記載を省略した。また、壁の崩落等による明らかな地山由来のシルトブロックなどについては、その旨を記述してある。



第６図　混入物の含有率
（「新版標準土色帖」から作成）



第７図　遺構の平面・断面形態及び遺構覆土の堆積形状の分類
（［荒川ほか 2006］を一部改変）

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

A　古代・中世の遺構

古代・中世の遺構は計２面の合計で、掘立柱建物（SB）３棟、井戸（SE）15 基、土坑（SK）49 基、竪穴状遺構（SX）１基、溝（SD）45 条、炭窯（SX）１基、焼土遺構（SX）２基、畝間状遺構（SX）１群 16 条、凹地遺構（SX）１群 14 基、性格不明遺構（SX）22 基、ピット（P）1,320 基を確認した。

「第１面」では、Ⅲｂ層が良好に残る調査区西側で中世の遺構を主体に検出し、中央から東側にかけては後世の削平の影響でⅤ層～Ⅵ層が遺構検出面となることもあり、古代と中世の遺構が混在する状況であった（図版 1）。大多数の遺構はここでの検出となった。時期は古代と明確にできる遺構が土坑８基、溝４条、焼土遺構２基、性格不明遺構３基と一部のピットに限られることから、これを除く大半のものは中世に属するものと考えられる。

「第２面」は、調査区中央部で中世の遺構が構築されるⅢｂ層を取り去った後に検出した遺物包含層Ⅳ層の下、Ⅴ層上面を遺構検出面として調査を行った（図版 37）。ここでのⅣ層出土遺物は古代のものに限定されることから、確認した遺構も古代に属するものと考えられる。

以下、遺構の記述にあたっては本来、時代別に行うべきであるが、今回の調査では層位的な遺構の把握と調査ができなかったことと、遺物を出土しないことで時期を明確にできなかった遺構が多数に上ることから、ここでは各調査面での記述を優先した。遺構種別ごとの記述では、時期が明確な遺構については、その明示に努めた。

B　弥生時代の遺構

「第３面」で検出した。掘立柱建物（SB）１棟、土坑（SK）19 基、建物を構成するもの以外の単独で検出したピット（P）15 基、埋設土器（SH）１基を確認した。遺構の分布範囲は包含層の範囲とほぼ一致し、Ⅴ層掘削後のⅥ層上面を遺構検出面とした。立地は斜面を東へ上った自然堤防状の微高地とその後背地に限られる。出土遺物から、時期はいずれも弥生時代前期～中期前半に位置付けられるものである。

遺構配置は、掘立柱建物を中心に構築される様相を捉えることができた。掘立柱建物の南では約７～10m の距離を置いて東西方向に土坑が並んで構築されている。一方、北東約 6m の地点では袋状土坑が単独で構築される。このように掘立柱建物の周囲では遺構が比較的密に確認されたが、南西側の 8E グリッドには周囲を遺構と斜面の落ち際に囲まれた空白域も存在する。また、北西の斜面には遺構は構築されずに遺物の捨場として利用されていたと考えられる。

2　第１面の遺構

表土及び表土直下の遺物包含層を掘削後に調査区全域で検出した遺構群である（図版 1）。ここで検出した遺構は掘立柱建物３棟、井戸 15 基、土坑 48 基、竪穴状遺構１基、溝 45 条、炭窯１基、焼土遺構２基、

畝間状遺構１群 16 条、凹地遺構１群 14 基、性格不明遺構 22 基、ピット 1,167 基である。

A　掘立柱建物

３棟確認した。掘立柱建物を構成する柱穴の認定にあたっては、柱穴の配置・規模及び底面標高についても考慮した。ピットについては、このほかに 1,167 基検出されており、3 棟の掘立柱建物を構成するピット 20 基の比率は約 1.7％と低いものである。したがって、今回認識した以外にも掘立柱建物や柵列などが相当数存在するものと考えられる。

SB1282（図版 28・29・78）

12E・F グリッドに位置する。P1276・P1277・P1278・P1283・P1629・P1630 の 6 基により構成される。桁行 2 間（東側 4.16m、西側 4.37m）、梁行 1 間（北側 2.49m、南側 2.59m）で、長軸方位は N － 7°－ W、面積は 10.83m² である。桁行方向の柱間寸法は、P1283 － P1630 が 2.26m、P1283 － P1629 が 1.90m、P1276 － P1277 が 2.14m、P1277 － P1278 が 2.23m を測る。

P1283 の平面形は楕円形に近いが、各柱穴の掘形としては円形を意図したものと考えられる。直径は 20 ～ 34cm、断面形はいずれも U 字状で、深さは 21 ～ 55cm を測る。柱痕は検出できなかった。遺物は出土していない。

SB1324（図版 35・36・78）

14・15G グリッドに位置する。P1316 ～ P1323 の 8 基により構成される。梁行 2 間、桁行 2 間で、南北軸を基軸とすると方位は N － 1°－ W とほぼ真北を指す。規模は南北方向 2.63 ～ 3.01m、東西方向 2.88 ～ 2.97m を測る。柱間寸法を見ると東側柱列が北から 1.37m と 1.64m、西側柱列が北から 1.32m と 1.31m、北側柱列が東から 1.36m と 1.52m、南側柱列が東から 1.49m と 1.48m を測る。面積は 8.25m² である。

柱穴の平面形は円形を基調であるが、P1317 は楕円形を呈する。断面形は浅く、P1321 が弧状となる以外は U 字状の形状である。柱穴の直径は 21 ～ 29cm、深さ 7 ～ 45cm を測る。柱痕は検出できなかった。

遺物は P1320 から古代の土師器の甕の小片が出土したが、本遺構周辺は古代の遺構が点在していることから、これは埋没時に混入した可能性が高いと判断した。

SB1500（図版 8・9・78）

6E・F グリッドに位置する。P239・P241・P1218・P1455・P1456・P1460 の 6 基により構成される。本グリッド周辺はピットが密集して確認されており、P1218 が P1461 を P1455 が P1470 を切っている。桁行 2 間（北側 2.70m、南側 2.79m）、梁行 1 間（東側 1.48m、西側 1.27m）で長軸方位は N － 60°－ W、面積は 3.75m² である。柱間寸法は P239 － P1455 が 1.43m、P1455 － P1456 が 1.27m、P241 － P1460 が 1.31m、P1460 － P1461 が 1.48m を測る。

柱穴の掘形は P1456 と P1460 が方形、そのほかが円形となる。断面形はいずれも U 字状を呈する。柱穴の直径は 19 ～ 28cm、深さ 15 ～ 31cm を測る。柱痕は検出できなかった。

遺物は出土していないが、Ⅲ b 層上面で検出したことから判断して、中世に属すると考えられる。

B　井　　戸

15 基検出した。いずれも平面形を円形とする素掘り井戸であり、内部に井戸側などを持つものは無い。グリッド 7 列から東側の全域に分布している。

平面規模は、最小径で 92cm（SE722）、最大径で 292cm（SE799）となる。深度が 2m 前後と相対的

に深い井戸（SE513・857・1052・1173・1554）の断面形は、U字状で占められる。深度が浅く、平面規模も小形となる井戸の断面形状は、箱状のものが3基（SE722・1175・1230）、台形状のものが3基（SE1538・1220・1260）となり、深度は82～117cmの中に収まる。一方、径2～3m前後と平面規模の大きい井戸（SE4・799・995・1211）では、深さが104～160cmとなる。断面形は、SE4・995・12114が台形状、SE799が弱い袋状となる。なお、SK578は緩く開く立ち上がりから土坑としたが、壁の崩落した井戸の可能性もある。このように平面規模の拡大と深度の増加には直接的な相関関係は認められず、形態の違いは機能差もしくは時期差に起因するものと考えられる。

分布は、深度が相対的に深い井戸と平面規模の大きい井戸は、調査区中央から東側にかけて点在する状況を示しており、特段の配列や集中は認められない。7・8Dグリッドの SE4 と SE995 の近接は、時期差を持つものであろう。一方、浅く小型とした6基の井戸は、調査区中央から東側にかけての南寄りに偏在しており、その中でも11・12F、13Gグリッドに5基が集中する。

溝との重複関係についてはSE857（9Fグリッド）、SE1211（13E・Fグリッド）、SE1175（14F・Gグリッド）、SE1173（14Gグリッド）、SE1230（12・13Gグリッド）でそれぞれ溝と重複しているが、SE1175とSD1259が新旧不明である以外は、いずれも溝よりも新しい。このことから、重複する溝に井戸の付属施設としての機能は認め難い。

遺物は、無遺物の4基（SE857・1052・1260・1538）以外、いずれも中世の遺物が出土することから、遺構の時期も中世に置くことができると考えられる。出土した土器はいずれも破片資料であった。SE799では埋没途中の3層中に多量の礫を主体とする遺物が廃棄された状態が認められた。SE1554では機能時に近いと考えられる6層から木製品（146・147）と礫が出土した。無遺物の4基についても覆土と掘形形状の類似性及び分布状況から判断し、中世に属する可能性が高い。

SE4（図版14・15・78）

7D10・15、8D6・11グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径193cm、短径172cm、深さ104cmを測る。断面は台形状である。覆土は16層に分層し、レンズ状に堆積するが、下位には炭化物の斜位層が見られる。1～9層はにぶい黄橙色が基調となり、地山ブロックが混入する自然埋没土と推測される。10層以下では炭化物の混入が顕著となり、11・14・16層は炭化物が主体の斜位層となる。遺物は珠洲焼（1）、青磁（2）、中世土師器（3）、和釘（131）、砥石のほか、覆土16層から種実が3点と炭化米の可能性のある炭化種実21.26gが出土している。

SE513（図版18・19・78）

10D7・8・12・13グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径173cm、短径159cm、深さ211cmを測る。断面はU字状であるが、一部は狭い底面からV字に近い状態で立ち上がる。覆土は17層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は中世土師器のほか、覆土16層から種実が2点出土している。

SE722（図版16・17・78・79）

8F18・19グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径92cm、短径78cm、深さ95cmを測る。断面は箱状である。覆土は3層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は中世土師器（4）が出土した。

SE799（図版21・23・79）

9F24・25、9G4・5グリッドに位置する。P956と重複し、本遺構が古い。平面は円形で、規模は長径292cm、短径246cm、深さ132cmを測る。断面は緩い袋状である。覆土は5層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土3層から10～20cmの大きさの礫が約80点出土し、この中には煤の付着した礫

も少量混在していた。礫は覆土３層に沿うように南東方向からの傾斜をもっており、一度に廃棄されたものと考えられる。遺物は珠洲焼（5・6）、瀬戸・美濃焼（9）、青磁（7）、中世土師器（8）、和釘のほか、種実が１点出土している。

SE857（図版 21・23・79）

9F3 グリッドに位置する。SD140 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 153cm、短径 141cm、深さ 183cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は 10 層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土８層の上面には炭化物が薄い帯状に堆積していた。遺物は覆土上層から古代の土師器が出土したが、これは重複する古代の溝（SD140）に帰属する可能性が高い。

SE995（図版 10・11・79・80）

7D14・15 グリッドに位置する。P1005 と重複するが、新旧関係は不明である。平面は円形で、長径 254cm、短径 234cm、深さ 160cm を測る。断面は台形状である。覆土は 11 層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土６層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼（12）、中世土師器（10・11）が出土している。

SE1052（図版 32・33・80）

14D23 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 122cm、短径 111cm、深さ 193cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は７層に分層でき、水平レンズ状に堆積する。覆土２層は炭化物が主体の層で、椀状で薄く堆積する。本遺構南西には溝状の掘り込みが重複している。井戸に伴う施設の痕跡の可能性もあるが、削平されたⅥ層が検出面という点を考慮し、関連は不明である。遺物は覆土から鉄滓が出土している。

SE1173（図版 30・31・80）

14G2・7 グリッドに位置する。SD1201 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 122cm、短径 105cm、深さ 188cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は９層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土７層は炭化物を多く含み、覆土中位に約 1m の厚さで堆積する。遺物は珠洲焼のほか、覆土７層から炭化米の可能性のある炭化種実 0.18g が出土している。

SE1175（図版 28・29・80）

14F21、14G1 グリッドに位置する。SD1031・1259 と重複し、SD1031 より新しく、SD1259 との新旧関係は不明である。平面は円形で、長径 101cm、短径 96cm、深さ 85cm を測る。断面は箱状である。覆土は４層に分層でき、レンズ状に堆積する。SD1259 との新旧関係は不明としたが、本遺構との関連も推測される。遺物は珠洲焼、刀子（125）、鉄滓が出土している。

SE1211（図版 28・29・81）

13E23・24、13F3・4 グリッドに位置し、SD1031・SD1032 より本遺構が新しい。平面は円形で、直径 262 ～ 292cm、深さ 118cm を測る。断面は台形状である。覆土は６層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土３層下部ではシルトと黒色土によるラミナ状の互層が形成されている。遺物は覆土から珠洲焼（13 ～ 15）、瀬戸・美濃焼（16・17）、砥石（120）、銅製提子（139）、羽口のほか、3・4 層から炭化米の可能性のある炭化種実 0.21g が出土している。

SE1220（図版 30・31・81）

13G12・13・17・18 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 97cm、短径 75cm、深さ 117cm を測る。断面は台形状である。覆土は６層に分層でき、レンズ状に堆積する。3 層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼、鉄滓が出土している。

SE1230（図版 30・31・81）

12G25、13G2 グリッドに位置する。SD1207、SX1231 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 183cm、短径 162cm、深さ 96cm を測る。断面は箱状である。覆土は 5 層に分層でき、水平レンズ状に堆積する。4 層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼(18･19)、青磁(20)、中世土師器(21)、砥石(119)、焼成粘土塊、鉄製品が出土している。

SE1260（図版 28・29・82）

12F11・12・16・17 グリッドに位置する。平面は円形であるが、隅丸方形状に弱く角が張る。規模は長径 97cm、短径 87cm、深さ 93cm を測る。断面は漏斗状である。覆土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SE1538（図版 24・25・82）

11F9 グリッドに位置する。P1586 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 128cm、短径 116cm、深さ 82cm を測る。断面は台形状である。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は古代の須恵器と土師器の小片が出土したが、近接する古代の遺物集中範囲から混入した可能性が高い。

SE1554（図版 34・36・82）

15D12・17 グリッドに位置する。SX1542 と重複し、本遺構が古い。平面は円形で、長径 108cm、短径 103cm、深さ 216cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。底部直上の 7 層は炭化物が主体の層である。6 層上位から木製の下駄（146）と鍬（147）、人為的な痕跡の不明確な杭状の木片が出土した。その直下には 10 ～ 20cm 大の礫が 3 点認められ、木製品との同時性をうかがわせる出土状況であった。遺物はこのほか珠洲焼（22・23）、砥石が出土している。

C　土　　坑

48 基検出した。なお、SK578 については壁が開いて立ち上がるため土坑としたが、壁の崩落した井戸の可能性も考慮した。

「第 1 面」で検出した土坑のうち、中世の遺物を出土するものは 5 基、古代の遺物を出土するものは 8 基である。残る 35 基は土器類の出土はなかったが、これらの大部分は調査区西側のⅢb 層上面で確認されていることから、多くは中世に属するものと考えられる。

出土遺物などから古代としたものは、SK721・1053・1054・1056・1058・1177・1180・1639 の 8 基である。このうち 8F グリッドにて SK721 を単独で検出したほかは、13E グリッド周辺での検出である。古代全体で見ると 11F グリッドでも遺構の集中が見られることから、これらとともに古代の遺構は調査区東側に分布の中心があるものと考えられる。

古代の土坑とした 8 基の平面は、長方形 1 基（SK721）、円形 2 基（SK1054･1058）、楕円形 3 基（SK1053･1056・1177・1180）、となる。規模は楕円形の SK1180 が長径 261cm で最大となり、以下は 57 ～ 180cm の中に収まる。深さは 5 ～ 34cm となる。

無遺物の土坑も含め、中世及びその可能性が高いと判断したものは 40 基である。このうち 6C グリッドにある SK67 と SK94 は未調査部分を挟んでいるが、本来同一の大型土坑となる可能性がある。SK578 については前述のように井戸の可能性がある。さらに SK960 は長径 580cm、短径 480cm の規模で SD800・801 と連結することから、相互に関連した機能も想定できる。また、SK20 では炭化米の可能性のある炭化種実 0.01g 以下が出土している。

以下、時期が明確なものを中心に抽出したものについて記述する。

中世の土坑

SK152（図版 8・9・85）

6E18 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 91cm、短径 80cm、深さ 25cm を測る。断面は半円状である。覆土は２層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は珠洲焼（152）が出土した。

SK578（図版 18・19・86）

9C23・24、9D3・4 グリッドに位置する。平面は円形を呈する。規模は長径 315cm、短径 287cm、深さ 115cm を測る。断面は台形状である。覆土は 17 層に分層でき、レンズ状に堆積するが、底面直上の 17 層は均質な砂質シルトで、厚く堆積する。遺物は珠洲焼（26）、中世土師器（25）、刀子（122）、和釘（135）、砥石のほか、覆土 17 層から炭化米の可能性のある炭化種実 0.08g が出土している。

SK764（図版 12・13・86）

7E24･25、7F4 グリッドに位置する。SK149･763 と重複し、SK149 より新しく、SK763 より古い。平面は長方形と推定され､長径は残存長で 222cm､短径 153cm､深さ 30cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層できる。レンズ状の堆積で１層は、炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼、中世土師器が出土している。

SK960（図版 14・15・88）

9B18・19・21 ～ 24、9C1 ～ 4・7・8 グリッドに位置する。SD800・801 と重複するが新旧関係が明確でないことから、同時存在した可能性が高い。平面は不整形で、長径 580cm、短径 480cm、深さ 75cm を測る。断面は弧状である。覆土は 11 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は珠洲焼（27）、青磁（28）、砥石（117）、刀子（126・127）、和釘（130）が出土している。

古代の土坑

SK721（図版 16・17・86）

8F4・5・9・10 グリッドに位置する。P1014 と重複し、本遺構が新しい。平面は長方形で、長径 180cm、短径 151cm、深さ 29cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器、土師器が出土している。

SK1053（図版 26・27）

12E5 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径は推定 102cm、短径 71cm、深さ 12cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器が出土している。

SK1054（図版 26・27・89）

13E12・17 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 79cm、短径 67cm、深さ 20cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器が出土している。

SK1056（図版 26・27・89）

12E10、13E6 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 132cm、短径 104cm、深さ 13cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層でき、レンズ状に堆積する。３層は焼土が主体の層である。遺物は２層の上位で須恵器や土師器（64）の破片が一括廃棄された状況で出土した。このうち須恵器無台杯 62 と 63 は、重なった状態で出土した。

SK1058（図版 32・33・91）

13D15･14D11 グリッドに位置する。SX1178 と重複するが、新旧関係は不明である。平面は円形で、長径 112cm、短径 97cm、深さ 34cm を測る。断面は台形状である。覆土は 3 層に分層でき、水平に堆積する。遺物は須恵器（65）が出土している。

SK1177（図版 26・27・90）

12E9・10 グリッドに位置する。平面はやや不整な楕円形で、長径 145cm、短径 105cm、深さ 23cm を測る。断面は半円状である。覆土は 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は土師器（66・67）が出土している。

SK1180（図版 32・33・91）

13E8・9・13・14 グリッドに位置する。SK1210 と重複し、本遺構が新しい。平面は楕円形で、長径 261cm、短径 96cm、深さ 11cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器（68･69）が出土している。

SK1639（図版 22・23）

12C16 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 57cm、短径 47cm、深さ 5cm を測る。断面は弧状である。覆土は 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は土師器が出土している。

D　竪穴状遺構

SX1555（図版 34・36・92）

長方形の整然とした平面形が推測され、平坦な底面が作出されるものを竪穴状遺構とした。しかし、全体の調査を行えなかったこともあり、隣接する凹地状遺構群の一部となる可能性を残す。調査区東端の 15D25・16D21 グリッドに位置する。SX1610 と重複し、本遺構が古い。東側が調査区外のため全体形は不明であるが、平面は東西方向を指す長方形と考えられ、断面はほぼ平坦な底面をもつ台形状となる。覆土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。長径方向での残存長は 166cm、短径方向で 187cm となり、深さは 16cm を測る。遺物は出土していない。

E　溝

調査区全域で 45 条の溝を検出し、古代と中世の各時期のものが存在する。なお、このほかに調査区東端で並列した小溝を 16 条検出した。これらについては一群を「畝間状遺構」として扱い、別項を設けて後述することとした。

調査時において未調査部分を挟んだ両側で検出したものは、基本的に別番号を付した。報告にあたり、改めて同一遺構とできるものについては方向、断面形、覆土の状態、底面標高、出土遺物をもとに検討した。結果、中世の溝では「SD22 － SD50」、「SD23 － SD797」、「SD25 － SD546」、「SD26 － SD27 － SD962」、「SD580 － SD1042」、「SD645 － SD1044」が同一の溝である可能性が高いと考えた。古代の溝については削平により分断されている部分も含め、「SD140 － SD632 － SD1539」、「SD1032 － SD1041」が同一の溝である可能性が高いと考えた。SD140（8E ～ 9F グリッド）と SD1539（11F グリッド）は西北西軸の同一の線上に位置し、いずれも古代の遺物を出土している。さらに西側の延長線上にある SD632 についても西北西軸に延びる溝がほかに存在しない点からみて、SD140・1539 と同一の溝を形成する可能性が高いと考えた。調査区東側の SD1032 と SD1041 はいずれも古代の遺物を出土してお

り、T 字状に交差している。

以上のように整理すると、45 条検出したうちの 9 条は統合され、計 36 条の溝として把握できる。このうち確実に古代に属するのは、前述の「SD140 － SD632 － SD1539」と「SD1032 － SD1041」の 2 条に限定され、このほかの多くは中世に属するものと考えられる。

底面傾斜と軸方向　中世の溝については底面の傾斜に着目した。9・10C グリッドの SD800・801 は平行して屈曲しながら SK960 に連結している。屈曲部から東側の底面標高を見るとほぼ平坦であるが、屈曲部から SK960 手前までの底面標高差は SD800 が 10cm（勾配 1/30）、SD801 が 28cm（勾配 1/10）と、SK960 に向かって下っている。SK960 との新旧関係は不明であるが、同時に開口していたと考えた場合には相互の関連性が推測できる。調査区西側の SD24 は底面標高差 21cm（勾配 1/100）をもって西方向に緩やかな傾斜している。SD24 の北側に平行する SD22・23 はそれぞれ勾配 1/300、1/350 と緩やかではあるが、西向きの勾配をもって下っている。また、SD645 は勾配 1/210 をもって西に延びている。一方で、そのほかの中世の溝はほぼ平坦な底面が構築されている。

このように中世の溝を底面の傾斜から概観すると、東西方向の溝は西方向の勾配を持ち、これに直交する南北方向の溝では、前者ほどの勾配は認められない。両者の違いは機能を含めた遺構の性格の違いに起因する可能性が指摘できる。加えて、東西方向の勾配が流水を促し、旧小里川方面の低地への排水を意図したものと仮定すると、現在は削平により失われた中世段階の地形が北西方向に緩やかに下るものであったとも考えられる。

長方形に巡る溝　調査区西側の 7C グリッドにある SD43 は長方形に巡る溝である。長径 900cm、短径 711cm の規模をもち、長方形の長軸の方位は N － 30° － W を指す。幅は 51 ～ 150cm と不揃いで、左回り（反時計回り）に底面標高が徐々に下っていく状況であり、深さは 23 ～ 128cm と約 1m の高低差を持つ。その先は未調査部分に至り、全体の形態は不明である。なお、本遺構の西側には未調査区を挟む形で SK67（深さ 97cm）と SK94（深さ 110cm）が存在する。これは大形土坑として同一遺構となる可能性があり、合わせて SD43 との関連もうかがわれるものである。

一方、調査区東側の 12・13F、12 ～ 14G、13・14H グリッドでは二重に巡る溝が存在する。外側の溝（SD1201・1224）は隅丸長方形に、内側の溝（SD1207）は長方形に巡る。外側の溝は長径 19.9m、短径残存長 12.2m、内側の溝は長径 11.6m、短径 9.0m の範囲を巡り、長方形の長軸の方位は概ね N － 65° － W を指す。外側の溝の幅は 60 ～ 160cm、深さは 13 ～ 68cm と、溝幅と深さが不定であり、底面は起伏とともに段差も持っている。内側の溝幅は 35 ～ 100cm、深さは 8 ～ 55cm で、複数の段差をもって時計回りに徐々に底面標高を下げている。さらに未調査部分を経て、調査区南壁にかかる SX1231（深さ 82cm）に連結する可能性も指摘しておく。このように、底面に傾斜をもち外周側に抜けていくような溝の形態や大型の土坑に近接する状況は前述の SD43 との共通点といえる。さらに両者とも溝が全周することなく、1 か所あるいは 2 か所の通路状の切れ目を有する点は、本遺構の性格を考えるうえで重要と考えられる。ただし、起伏をもつ溝の上部が削平を受けた結果、途切れたような状態で確認されたに過ぎず、本来は全周していた可能性も考慮されなければならない。なお、溝の内側からは軸方向などで溝との直接的な関連をうかがわせる遺構は検出されていない。これは、削平による遺構の消失も考慮されなければならないが、SD43 の内側では小規模なピットが 1 基のみの検出であるように、もともと遺構が希薄な地点であったとも考えられる。

F　炭　　窯

SX55（図版 2・3・101）

調査区西側の 5C・6C グリッドに位置し、形態及び炭化物層の状況から炭窯と判断した。東側が未調査部分となるが、平面形は細長い長方形と考えられる。断面は長径方向･短径方向ともに台形状であるが、長径方向は西側が緩い段部をもって立ち上がる。規模は長径方向の残存長 423cm、短径 105cm、深さ 43cm を測る。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。4・5 層は炭化物を多く含むことから、直下の 6 層上面を焼成面と考えた。加えて、掘形面でも焼成が行われたとすると、少なくとも 2 回以上の使用が推測できる。シルト質の土壌に起因するのであろうか、底面及び壁面にかけて焼土などの明確な被熱痕は形成されない。遺物は出土していないが、4 層から炭化米の可能性のある炭化種実 0.16g が出土している。

G　焼 土 遺 構

調査区中央東寄りで検出した SX1537 と SX1626 の 2 地点を焼土遺構とした。いずれも焼土の分布範囲として捉えられたもので､地山への明確な被熱痕跡は認められない。2 地点間は約 3m と近接している。また、SX1537 の南西隣接部及び SX1626 の 2m 北東でそれぞれ遺物集中範囲を確認した。これについては相互の関連性も考慮し、ここで合わせて記述する。

SX1537（図版 24・25・101）

11F18 グリッドのⅤ層上面で検出した。焼土の分布は不整円形を呈し、南北方向 78cm、東西方向 73cm の範囲に広がる。また、焼土範囲の南西に近接して遺物集中範囲を確認した。東西方向 79cm、南北方向 80cm の範囲に土師器甕の細片を中心に、須恵器無台杯（72）などが出土した。この遺物集中範囲は SD1539 内に落ち込むように分布しており、本遺構の形成は SD1539 と同時期とできる。

SX1626（図版 24）

11F8 グリッドのⅤ層上面で検出した。焼土の分布は不整楕円形を呈し、長径方向 129cm、短径方向 105cm の範囲に広がる。長軸方位は N － 38°－ E を指す。焼土範囲の北東 2m、11F4・5 グリッドでは遺物集中範囲（図版 25）を確認した。遺物は東西 180cm、南北 50cm の範囲に土師器甕の細片を中心とした遺物が集中して出土し、この中には墨書された須恵器無台杯（84）が含まれていた。

H　畝間状遺構（図版 34 ～ 36・101）

調査区東端で並列した小溝を 16 条検出した。これを一定区画内で同一の方向性が認められたため、耕作痕跡を想定した 1 単位の遺構群として捉えた。

14E・F、15E・F・G グリッドに位置し、SD1593 ～ 1601・1613 ～ 1619 の 16 条の小溝により構成される。北側で凹地遺構を構成する SX1550 ～ 1552・1600 と重複し、本遺構が古い。確認できた範囲は北東方向は 15.8m、北西方向は 15.1m までで、溝の長軸方位は N － 60°－ E 前後を指す。断面形は半円状あるいは弧状を呈し、上端幅 25 ～ 85cm（平均 50cm）、底部幅 10 ～ 67cm（平均 20cm）、深さ 10 ～ 20cm（平均 15cm）を測る。覆土はいずれも単層であるが、褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルト、赤褐色砂質シルトが混在している。炭化物などの混入物は極少量しか認められない。遺物は出土していない。

Ｉ　凹 地 遺 構（図版 34・36・102）

調査区東端の 15D・E・F グリッドにおいて、凹地遺構群を確認した。SX1542 ～ 1553・1558・1610 の 14 基により構成される。平面はいずれも不整形を呈し、底面は凸凹が顕著である。これらはほぼ南北方向を軸方向として配置されることから、一群の遺構となる可能性が高いと考えた。SE1554 及び畝間状遺構と重複し、本遺構群が新しい。

検出された範囲は南北方向で約 16m、東西方向で約 9.8m である。個別の規模をみると、南北方向 114 ～ 496cm、東西方向 100 ～ 355cm となり、深さは 10 ～ 20cm と浅い。覆土はいずれも単層で、地山ブロックを含む灰褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、オリーブ黒色砂質シルトが混在する。遺物は SX1543 から焼成粘土塊が出土したのみである。

Ｊ　性格不明遺構

性格不明遺構としたものは計 22 基である。時期は SX573・1178・1623・1624 が古代と考えられ、これ以外の多くは中世に属するものと考えられる。以下、大分類ごとに記述する。

SX85・141・142・577・610・1623（図版 2・3・10・11・14・17・30・31・102 ～ 104）

上部が削平されたことによるのか深度が浅いもので、底部付近のみが残存し、本来の形態が失われたと考えられるものである。SX85 は地山が変質したと考えられる範囲のみの確認である。SX610 はやや不整な平面形を呈し、底面には緩やかな凹凸が見られる。遺物は SX610 から中世土師器、SX1623 から土師器が出土した。

SX17・780（図版 4・5・14・17・102）

上記同様に検出深度の浅いものであるが、底面直上に多量の炭化物が堆積するものである。このうち SX17 の 3 層については掘形を伴わない地山であるⅢb 層が焼成時の熱で変質した部分と考えられ、覆土 2 層が炭化物を多く含む底部直上層となる。SX780 では炭化物に加えて焼土も含まれる。

SX1208・1209（図版 32・33・104）

深度が浅く、底面直上に多量の焼土が堆積するものである。SX1208 は長径 48cm、短径 27cm、深さ 7cm、SX1209 は長径 39cm、短径 28cm、深さ 2cm とともに規模は小さい。底面直上の焼土層の状況から、何らかの焼成遺構の可能性がある。

SX144・153・154（図版 8・9・12・13・102・103）

浅い掘形内に多量の炭化物とともに骨片が認められるものである。SX144 は長径 56cm、短径 47cm、深さ 6cm の浅い円形の掘形を呈する。覆土は暗褐色シルト内に炭化物を 40％、焼土を 5％含み、細骨片も微量ながら確認された。SX153 は長径 42cm、短径 23cm、深さ 5cm の楕円形の掘形を呈する。2 層では炭化物を 30％を含み、1 層では細骨片の集中する部分が見られる。SX154 は長径 82cm、短径 72cm、深さ 5cm の円形の掘形を呈する。覆土は炭化物を 30％、焼土を 20％含むほか、多量の焼骨片も検出できた。また南西側には溝状の張り出し部分を伴う。

以上の 3 基については焼骨の出土からいわゆる火葬土坑の可能性も指摘できるが、地山への明確な焼土の形成が認められないため、ここに含めた。

SX573（図版 12・13・103）

浅い掘形内に土器片や礫が配置されるものである。長径 82cm、短径 64cm、深さ 8cm の楕円形の掘

形内から最大 20cm の礫 14 点とタタキ目のある珠洲焼体部片 4 点が出土した。礫には被熱したものも含むが、覆土中に炭化物や焼土は含まれない。

SX54（図版 2・3・102）

炭化物の混入がみられないものの、炭窯とした SX55 とほぼ同じ主軸方向で隣接するうえ、形態も類似することから、同種の遺構あるいは関連性がうかがわれるものである。遺物は覆土から青磁（52）、中世土師器が出土した。

SX56・576（図版 10・11・14・17・102）

浅く溝状の掘形を有するものである。SX56 はその配置と方向性から SD43 との関連性がうかがわれる。SX576 は覆土 2 層及び 5 層で炭化物を多く含む。遺物は SX56 から珠洲焼（53）のほか中世土師器が出土し、これは SD43 出土のものと接合した（35）。SX576 からは中世土師器が出土した。

SX647・648・1178・1231（図版 18・20・30・31・32・33・103・104）

平面形は長方形、断面形が箱状あるいは台形状を呈し、比較的整然とした掘形を持つ。このうち SX1178 は覆土中に焼土・炭化物が多く混入することから、焼成遺構の可能性がある。なお、SX1231 は調査区外にかかっており全体形は不明である。遺物は SX1178 からは須恵器（73 ～ 75）、土師器が出土している。SX1231 からは珠洲焼（54・55）、中世土師器（56・57）が出土したほか、覆土から炭化米の可能性のある炭化種実 1.79g が出土している。

SX1624（図版 24・25・104）

浅い不整な掘形内に多量の遺物を出土するものである。底面に硬化は見られないが、平坦に整形されており、南壁沿いの 2 本の小ピットが本遺構に伴うものとすれば、不整ではあるが竪穴状遺構とも考えられる。遺物は須恵器の杯（76 ～ 81）を主体に、蓋（82）・甕（83）、土師器の甕が出土している。

K　ピ　ッ　ト

1,187 基確認した。掘立柱建物を構成するものが 20 基あるため、単独の状態で検出されたピットは計 1,167 基となる。調査区西側のⅢｂ層上で検出したものは、時期も中世のものが大半であると考えられる。調査区中央から東側では古代と中世のピットが混在し、古代のピットに関しては「第 2 面」と同時期のものを含むと考えられる。

規模はいずれも小さい。平面が直径 20 ～ 30cm の円形で断面が U 字状のものが主体を占めているが、直径 10 ～ 20cm の円形で断面が V 字状の杭穴状の形態をもつものも約 260 基存在する（図版 105）。これらは調査区中央南西側の 7E グリッド周辺、調査区北東の 14D グリッド周辺、調査区西端の 5C グリッド周辺でやや集中する。

3　第 2 面の遺構

調査区中央部のⅢｂ層の下から、遺物包含層のⅣ層と、これに対応する遺構群をⅤ層上面にて検出した（図版 37）。遺構は斜面に構築され「第 1 面」とは地形を変えている。ここで検出した遺構は土坑 1 基、ピット 153 基である。時期は、包含層出土遺物が古代に限定されることから、いずれも古代に属する。

A　土　　坑

SK1414（図版 40・92）

6D・E グリッドに位置する。平面は円形で、長径 183cm、短径 155cm、深さ 27cm を測る。断面は弧状である。覆土は６層に分層でき、レンズ状に堆積する。６層は炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

B　ピ　ッ　ト

153 基検出した。直径 20 ～ 30cm の円形で断面形がＵ字状になるものが主体となるが、直径 10 ～ 20cm ほどの円形で、断面形がＶ字状を呈する杭穴状のものが 12 基存在する。これらについては建物、杭列などを構成する配置を捉えることはできなかった。

4　第３面の遺構

調査区中央部にて、弥生時代の遺物包含層のＶ層とこれに対応する遺構群をⅥ層上面にて検出し、これを第３面と捉えた（図版 41）。ここで検出した遺構は、掘立柱建物（SB）１棟、土坑（SK）19 基、建物を構成するもの以外のピット（P）15 基、埋設土器（SH）１基である。遺構の重複は SB1607 を構成する P1509 と P1515 の１か所のみと少ないことから、各遺構間に大きな時間差はないものと考えられる。

これらの遺構群が構築される高位面に隣接した斜面の落ち際、6・7E、8D グリッドを中心に、遺物分布が等高線に平行した帯状を示す小規模な遺物の捨場を検出した（図版 41）。出土量は、特に掘立柱建物に近接した範囲で多くなる。これより北側、遺構密度の低い地点では隣接する斜面からの遺物の出土も希薄となり、捨場を形成しなくなる。

遺構覆土の観察において、角ばった炭化物の混入が認められるものがある。これは包含層中に混入するものとは形状が異なるもので、特定の遺構でのみ認められる。粒形が角ばった状態は、その供給源が近い可能性を示し、遺構までの移動距離も短かったと考えられる。このような混入の状態は包含層のものとは異なり、その生成過程と共に区別されるものである。

このほか、7E4 グリッドを中心とした範囲で木質遺物を確認した（図版 51・遺構分割図 25 中段）。これは斜面に横たわるような状態で、大きく２本を検出した。木質部分は脱色により白色化しており、残存状態は極めて不良であった。明確な加工痕は見出せないことと、樹皮が多くの部分で遺存することを考え合わせ、自然木の可能性が高いと判断した。

調査にあたっては、土坑としたもの及びピットとしたものの一部については、微細遺物の回収のために覆土を回収しての土壌洗浄を行った。結果は、わずかに小型の剥片石器を回収したが、期待した骨片の回収はならなかった。これは骨片の残存状態が不良であったためと考えられる。なお、これにより得られた微細な剥片類は、以下の出土個数記述の際に調査時に取り上げられたものと区別して、［○点（○ g）］と記載した。これは、土壌洗浄の有無により個体数が大きく変化するが、この変移が必ずしも遺構の性格を表すものではないと考えたためである。本遺跡では剥片石器製作が行われていたことは確実であり、微細な剥片類は包含層中に普遍的に存在するものであったと認識している。

A　掘立柱建物

SB1607（図版 48 ～ 50・76・77・106・107）

柱穴と考えたピット 8 基と集石及び赤化範囲（SX1637）により構成される。なお、本遺構周囲で検出した P1169・1286・1290・1515 についても本遺構との関連を考慮し、ここで報告する。

位置・形態・規模　弥生時代調査範囲のほぼ中央、9D1 グリッドを中心に位置する。立地する地形は、斜面と後背地に挟まれた自然堤防状の微高地である。建物の長軸方向も地形に従い、等高線に平行して構築されている。Ⅴ層掘削中、標高 5.8 ～ 5.9m 前後の地点にて集石の露出により確認した。形態などは縄文時代からの系譜をうかがわせる。以下、部位名称は青田遺跡［荒川ほか 2004］に基づいて記述する。

柱穴配置はいわゆる亀甲形となり、この桁行方向に P1509・P1508 の 2 本の張り出し柱を加えるものである。P1390 － P1507 間とした主軸長は 5.4m となる。梁行長は P1241 － P1391 間で 3.0m、P1506 － P1392 間で 2.6m、P1509 － P1508 間で 2.5m となり、西側ほど狭くなる。

柱穴　平面形態は不整なものが多いが、これは断面形態が開口部に向かい開くものが多いためである。断面観察では柱痕様の堆積を示すものがあり、この柱痕の径は約 20 ～ 30cm の幅に収まる。しかし、本来の柱の太さと必ずしも一致しない可能性もある。深さは、亀甲形を形成する 6 本では 66 ～ 96cm であるが、張り出し柱と考えた P1509、P1508 は小径で、深さも 60、30cm と浅い。

構造復元時に「独立した棟持柱」［古澤ほか 2003］が埋設されたと考えられる P1507 では、掘形が 96cm と最も深い。これと対になる P1390 は、深さは及ばないものの、根固めのためと考えられる土器片の埋設を検出した。土器片は柱痕の西半を取り囲むように覆土中位から下位にかけて重ね合わせた状態で出土した。これに用いられた土器(1)は、ほかの多数の土器片と異なり、水平方向の輪積み部分ではなく、垂直方向を指向して割れていた。これを人為的なものと解釈すると、縦方向での分割は破片を重ねるのに適しており、同時に土器の湾曲と柱の曲線が合えば、隙間を埋めるのにも都合がよいためと考えられる。また P1391 の覆土中及び P1392 の覆土 7・9 層では極微量であるが骨片の混入が認められた。

遺物の出土は少ない。土器は、前述の根固めに用いられたものを除くと細片が多く、掘形埋め土への混入と理解できる出土状況であった。石器は、P1390 から多くの剥片ともに石核が出土した。また、P1392 では掘形埋め土である 9 層からヒスイの原石（図版 72 － 283）が出土した。

また、建物の周囲で P1169、P1286、P1290、P1515 の 4 基のピットを確認した。いずれの柱穴も建物を構成するものより規模が小さい。P1290 では柱痕状の分層が可能であった。

内部施設　集石と赤化範囲を検出した。その性格上、建物との関連については検討の余地を残すが、ここでは建物との同時性を想定して報告する。

集石は、建物の中央からやや南東よりに位置する。掘形は伴わず、検出面上に直接礫が配置されている。礫は径 10cm 前後の凝灰岩を主体に用い、いずれも被熱を受けている。赤化範囲は、この集石と P1391、P1392、P1507、P1508 を取り囲むように建物の南東側に形成される。明確な被熱痕跡は見出せなかったが、この範囲内からは極めて微量であるが焼土粒も検出できた。これにより、集石には屋内炉としての機能が推察され、とすれば赤化範囲は地山に形成された焼土が拡散した範囲とも理解できる。また、この範囲内でも極めてわずかだが、骨片の混入が認められた。

B　土　　坑

19 基検出した。このうち、平面規模が１～2m 前後で弧状に近い断面形状を持つものが 8F、9E･F グリッドを中心に、帯状に 10 基（西から SK1502・1394・1166・1450・1165・1170・1227・1449・1289・1040）集中した状態で検出された。この中には、覆土中にて骨片を検出できたものがある。骨片は極めて微量なうえ、径も最大のものでも 3mm 前後と小さい。検出位置は、覆土上位よりも底面に近いところで多く認められた。これを受け、猫山遺跡との遺構の類似性も考え合わせ、一部の土坑については墓の可能性を考慮した調査を行った。同時に覆土を回収しての土壌洗浄の対象にもした。さらに SK1165・1170・1289・1394 については遺体埋置の可能性を探るために土壌の理化学分析を行った。結果はリン酸とカルシウムの含量からは、遺体等の痕跡は認め難いとのことであった（第Ⅵ章 3）。

土器は残存率の低い細片が多く、接合率も高くない。この傾向は覆土中でも特に上位で顕著で、これは包含層出土土器の様相に近いともいえる。石器では、前述の帯状に集中する土坑群の内、SK1040・1165・1166・1170 からの石鏃の出土が特筆される。この４土坑から出土した石鏃は 11 点すべてが完形であり、本遺跡から出土した石鏃全体の完形率 48％（失敗品を除く）と比較すると突出して高い割合といえる。石鏃自体は、土坑のうちでは SK1176・1523 からも出土しているが、こちらからは欠損品か失敗品しか出土していない点とも対照的である。

SK1040（図版 45・47・77・107）

9E15・20 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 168cm、短径 160cm、深さ 74cm を測る。断面は漏斗状である。覆土は６層に分層され、２・３層では極微量の骨片が認められた。土器は４層を除く各層から出土した。特に２・６層からの出土が多く、６層からは沈線に赤彩が施された底部片（6）が出土した。石器は石鏃２点、不定形石器１点、敲磨石類２点、石核３点、剥片類 33 点（127.86g）［23 点（7.34g）］が出土した。

SK1165（図版 45・46・107）

8F8・9 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 184cm、短径 132cm、深さ 48cm を測る。断面は半円状である。覆土は２層に分層され、２層では極微量の骨片が認められた。土器は１・２層から出土する。出土量は１層からのものが多いが、同一個体片は少ない。石器は石鏃３点、不定形石器５点、両極剥離痕のある石器１点、敲磨石類１点・破片１点、剥片類 57 点（108.39g）［60 点（10.64g）］が出土した。

SK1166（図版 42・44・108）

8F6・11 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 204cm、短径 172cm、深さ 40cm を測る。断面は弧状である。覆土は３層に分層した。土器は１層から比較的残存率が高い破片（14）が出土した。石器は石鏃１点、剥片類 22 点（77.81g）［23 点（7.19g）］が出土した。

SK1170（図版 45・46・107）

8F9･10･14･15 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 228cm、短径 196cm、深さ 32cm を測る。断面は弧状である。覆土は２層に分層され、1･2 層では極微量の骨片が認められた。わずかな違いであるが、下位の２層で確認した骨片のほうが多く、径も 5mm 前後と大きい。土器は１・２層から出土する。出土量は１層からのものが多いが、同一個体片は少ない。石器は石鏃５点、不定形石器４点、両極剥離痕のある石器１点、剥片類 64 点（229.98g）［77 点（29.46g）］が出土した。

SK1176（図版 48・50・108）

8D23・24 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 164cm、短径 134cm、深さ 34cm を測る。断面は弧状である。覆土は 4 層に分層した。土器は、出土量は多いが、細片が主体である。底面直上、4 層から出土した土器（25）について放射性炭素年代測定を行い、BP2,330 ± 30 との結果を得た（第Ⅵ章 3）。石器は、石鏃の欠損品が 2 点、剥片類 29 点（135.50g）［2 点（8.38g）］が出土した。

SK1214（図版 48・50・108）

8D25、9D21 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 134cm、短径 126cm、深さ 28cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は、出土量は多いが、細片が主体である。石器は敲磨石類 1 点・破片 1 点、石核 1 点、剥片類 6 点（38.33g）が出土した。

SK1227（SX1397 遺物集中地点）（図版 45・46・108・112）

8E20・25、9E16・21 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 180cm、残存短径 140cm、深さ 38cm を測る。断面は弧状である。覆土は 3 層に分層した。土器は各層から出土するが、底面近くの出土が多い。石器は石錐 1 点、不定形石器 1 点、両極剥離痕のある石器 1 点、敲磨石類 2 点・破片 2 点、石核 3 点が出土した。この土坑に隣接して遺物集中地点（SX1397）が認められ、壺（35）と敲磨石類 3 点、剥片類 7 点（31.79g）［20 点（6.93g）］が出土した。

SK1289（図版 45・47・77・108）

9E22・23、9F2・3 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 122cm、残存短径 108cm、深さ 58cm を測る。断面は台形である。覆土は 3 層に分層され、2・3 層では極微量の骨片が認められた。遺物では 2 層からの垂玉の出土が特筆される。土器は 2 層から SB1607 － P1509 と接合する 36、SK1170 と接合する 39 が出土した。石器は石核 2 点、剥片類 10 点（43.72g）［10 点（2.37g）］が出土した。また、覆土中に炭化物が多く混入することから、微細物分析を試みた（第Ⅵ章 2）。結果、オニグルミの核、コナラ属の子葉、ブナ科の果実のほかマツ属とヌルデ？の炭化材が認められた。

SK1350（図版 42・43・109）

7E9・14 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 80cm、短径 66cm、深さ 18cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は細片の出土である。石器は剥片類 9 点（14.66g）［4 点（1.36g）］が出土している。

SK1394（図版 42・44・109）

7F5･10、8F1･6 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 92cm、短径 68cm、深さ 32cm を測る。断面は台形状である。覆土は 2 層に分層され、2 層では極微量の骨片が認められた。土器は各層、細片の出土である。石器は不定形石器 1 点、敲磨石類 1 点、剥片類 15 点（89.32g）［6 点（1.36g）］が出土した。

SK1434（図版 48・51）

11C11・16 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 48cm、短径 44cm、深さ 8cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は 1 層から底部片が出土している。石器は、石核 1 点が出土した。

SK1449（図版 45・46・109）

8F1･6、9F5･10 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 168cm、短径 152cm、深さ 38cm を測る。断面は V 字状である。覆土は 2 層に分層され、2 層では極微量の骨片が認められた。土器は、出土量は多くないが 43 を復元し得た。石器は剥片類 1 点（2.02g）［44 点（11.03g）］が出土した。

SK1450（図版 45・46・107）

8F2・3・4・8 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 142cm、短径 120cm、深さ 36cm を測る。断面は弧状である。覆土は２層に分層され、２層では極微量の骨片が認められた。土器は各層、細片の出土である。石器は両極剥離痕のある石器１点、剥片類４点（3.75g）［10 点（1.83g）］が出土した。

SK1502（図版 42・44・109）

7F4 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 96cm、短径 96cm、深さ 18cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は敲磨石類１点・破片１点、石核２点、剥片類 16 点（41.57g）が出土した。

SK1505（図版 48・51）

9D5、10D1 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 78cm、短径 64cm、深さ 18cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は剥片類［1 点（2.96g）］が出土した。

SK1523（図版 48・51・77・110）

9D4･5･9･10 グリッドに位置する。平面は長方形で、長径 180cm、短径 136cm、深さ 80cm を測る。断面は袋状である。覆土は４層に分層した。

遺物は１層と４層からの出土が多い。土器では底面上から７点、比較的大形の破片が出土（内３点を図化、45 ～ 47）した。この土器は、ほぼ底部直上としてよい出土状況であったが、土器と底面の間には、４層よりも炭化物を多く含む 1cm にも満たない薄い堆積層が認められた。これは使用時に近い堆積物と考えられ、本遺構機能時の炭化物供給量が堆積時よりも多かったことが推測される。石器は石鏃の欠損品１点、石鏃失敗品１点、石錐３点、不定形石器１点、敲磨石類４点、石皿・砥石・台石類１点、石核４点、剥片類 20 点（190.54g）［44 点（39.56g）］が出土した。石器は、土器片のように底面直上からの出土はない。

SK1536（図版 42・43・110）

6F5 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 94cm、短径 78cm、深さ 46cm を測る。断面は台形状である。覆土は４層に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は、両極剥離痕のある石器１点、敲磨石類１点、剥片類４点（5.53g）が出土した。

SK1611（図版 42・44・110）

7E15・20、8E11・16 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 188cm、残存短径 184cm、深さ 40cm を測る。断面は弧状である。覆土は４層に分層した。遺物は 1･4 層からの出土で、土器は各層、細片の出土である。石器は石鏃１点、敲磨石類１点、剥片類２点（1.17g）［44 点（14.25g）］が出土した。

SK1640（図版 42・44・110）

8F11 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 92cm、短径 68cm、深さ 32cm を測る。断面は台形状である。覆土は３層に分層した。土器は２層から比較的残存率が高い破片（56）が出土した。石器は敲磨石類１点、剥片類１点（1.02g）［1 点（0.36g）］が出土した。

C　ピ　ッ　ト

掘立柱建物の項で扱ったもの以外の単独で検出したピット 11 基についてここで報告する。柱痕が残るものとこれに規模が類するものをピットとしたが、機能面で土坑と明確に区分できないものを含む。したがって、名称の違いは機能、性格の違い明確にするものではない。当初は建物の存在を想定しての検出に

努めたが、SB1607 のような建物の確認には至らなかった。しかし、斜面の落ち際に小規模な土坑としたものも交えて列状に並ぶ様相(「SK1536 － P1493」、「P1517 － 1494 － P1428 － P1413 － SK1350」、「P1493 － P1494 － P1352 － P1024 － SK1640」）が捉えられたことから、建物以外の構造物（機能・用途）を想定することも可能であろう。

遺物の出土は、土坑としたものより総じて少ない。土器は細片の出土が主体で、図化したものも 4 ピットの 8 点に留まる。石器の出土も同様に少ない。

P1024（図版 42・44・111）

7F9・10 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 108cm、短径 92cm、深さ 68cm を測る。断面は漏斗状である。覆土は 6 層に分層され、1・2 層は柱痕の可能性がある。土器は細片の出土である。石器は石核 1 点、剥片類 4 点（30.33g）が出土した。

P1036（図版 45・47）

10E17 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 52cm、短径 46cm、深さ 28cm を測る。断面は半円状である。覆土は 2 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は出土していない。

P1051（図版 48・50）

8D24・25 グリッドに位置する。近接する SB1607 との関連もうかがわれる。平面は不整形で、長径 164cm、短径 124cm、深さ 58cm を測る。断面は半円状である。覆土は 5 層に分層した。遺物は単独で確認したピットの中では最も多い。土器は、出土量は比較的多いが、細片が主体となる。石器は石鏃の欠損品 1 点、石鏃失敗品 1 点、両極剥離痕のある石器 1 点、敲磨石類 3 点・破片 1 点、石核 3 点、剥片類 21 点（154.96g）が出土した。

P1352（図版 42・43・111）

7F3 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 104cm、短径 92cm、深さ 72cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は 6 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は敲磨石類 2 点が出土した。

P1393（図版 42・44）

8F6 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 20cm、短径 18cm、深さ 20cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は 3 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は石錐の破片 1 点、剥片類 3 点(11.10g)が出土した。

P1413（図版 42・43・111）

7E13・14 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 48cm、短径 46cm、深さ 28cm を測る。断面は台形状である。覆土は 5 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は剥片類 4 点（1.28g）［1 点（0.25g)］が出土した。また、2 層からは蛇紋岩の原石（図版 72 － 285）が出土している。

P1428（図版 42・43・111）

7E17・18 グリッドに位置する。平面は不整形で、推定長径 74cm、短径 52cm、深さ 72cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は 9 層に分層され、1 ～ 7 層は柱痕の可能性がある。土器は細片の出土である。石器は、石錐 1 点、剥片類 2 点（6.41g）が出土した。

P1493（図版 42・43・111）

6F5、7F1 グリッドに位置する。平面は円形で、推定長径 64cm、短径 62cm、深さ 58cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は 7 層に分層され、1 ～ 4 層は柱痕の可能性がある。土器は出土していない。石器は剥片類 3 点（2.84g）が出土した。

P1494（図版 42・43）

7E22 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 36cm、推定短径 36cm、深さ 40cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は２層に分層した。土器は細片の出土である。石器は出土していない。

P1517（図版 42・43・111）

7E16･17 グリッドに位置する。平面は円形で、推定長径 64cm、残存短径 56cm、深さ 60cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は３層に分層した。土器は細片の出土である。石器は、石核１点、剥片類２点（4.87g）が出土した。

P1612（図版 42・43）

7F13・14・18・19 グリッドに位置する。平面は楕円形で、残存長径 90cm、推定短径 76cm、深さ 68cm を測る。断面はＵ字状である。覆土は４層に分層され、１～３層は柱の抜き取り痕跡とも理解できる。土器は細片の出土である。石器は剥片類２点（9.47g）が出土した。

D　埋設土器

SH1167（図版 42・43・112）

１基検出した。弥生時代調査範囲の南東端、9F17・18 グリッドに位置し、表土直下で確認した。土器の上半を欠くが、包含層の削平状況と土器下半の残存率の高さを考え合わせ、埋設土器として報告する。掘形は平面が円形で、径 56cm、深さ 28cm となる。ここに土器がやや西側に傾いた斜位の状態で埋設されていたと考えられるが、上半は削平により消失した可能性が高い。覆土は２層に分層したが、埋設土器の内外での覆土の違いは認識できなかった。断面観察では、底部片の外に土器片が押しつぶされ、複数重なるような状態であった。しかし、この状態は不自然で、後世の削平時などに露出した土器片が土圧の影響でめり込んだものと考えられる。土器は胴部下半のみの出土で、残存部は条痕文のみが施された深鉢（65）である。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

遺物は 54 × 34 × 10cm の整理箱で総数 82 箱出土した。時代は遺構が構築されるのと同じ弥生時代、古代、中世のものであり、わずかに近世遺物も見られる。出土量は弥生土器が 49 箱と最も多く、次いで弥生時代の石器が 13 箱となる。その後、時期を経るごとに出土量は少なくなり、古代の土器は 6 箱、中世の土器・陶磁器は 3 箱である。

掲載にあたっては、土器・陶磁器は出土遺構ごとの掲載を優先し、これ以外のものについては遺構の内外を問わず種別ごとに掲載した。

2　古代・中世の遺物

土器・陶磁器を主体に石器、石製品、鉄製品、銅製品、鉄生産関連遺物、木製品が出土した。このほか主に井戸から種実及び炭化米の可能性のある種実が出土しているが、これについては遺構の各説でそれぞれの個数と重さを記述している。遺物の分類・編年及び年代観については、古代の土師器・須恵器は［春日 1999］（須恵器の胎土分類は［新潟古代土器研究会 2004］）、珠洲焼は［吉岡 1994］、青磁・白磁は［山本 2000］、瀬戸・美濃焼は［藤澤 2008］、中世土師器は［品田 1997］の各論考を参考にした。

第 1 面の調査に伴う遺物は、遺構内及び遺物包含層であるⅢa・Ⅳ層からの出土である。中世の土器・陶磁器の出土傾向は、珠洲焼については調査区東部の 3D･E ～ 9･10B･C グリッドにかけて帯状に分布し、溝では SD22・23・26・50・800・801、土坑では SK960 などに沿うような状況とも捉えられる。また、鉄製品もほぼ同様の出土傾向を示す。一方、青磁や中世土師器などの出土は散在的で、特定の傾向は認められない。古代の土器の出土傾向は、須恵器については分布に濃淡があるものの調査区のほぼ全域から出土している。特にはピット分布の濃い 6 ～ 8D、8F、13・14D・E、14・15F ～ G グリッドからの出土が多い。土師器も同様に分布に濃淡があるものの調査区のほぼ全域から出土している。

第 2 面に伴う遺物は、間層であるⅢb 層に被覆された遺物包含層であるⅣ層からの出土である。ここでの遺物は古代のものに限られる。古代の土器の出土傾向は 7 ～ 9C・D グリッドの斜面の落ち際付近から多く出土し、これより東の高位面（第 1 面）との包含層の連続性をうかがわせる状況であった。

A　中世の土器・陶磁器

貿易陶磁器である青磁・白磁、国内産陶磁器である珠洲焼、瀬戸・美濃焼、これに在地産の中世土師器を加えて構成されている。

珠洲焼が出土量の大半を占め、時期幅も［吉岡 1994］のⅠ期からⅤ期と広い。しかし、Ⅰ期･Ⅱ期（12 世紀第 3 四半期～ 13 世紀第 2 四半期）とできるものはそれぞれ 1 点に留まり、一部Ⅴ期の可能性のあるものも含むが主体はⅢ・Ⅳ期（13 世紀第 3 四半期～ 14 世紀第 3 四半期）となる。貿易陶磁器である青磁は龍泉窯系の椀に限られ、21 点出土している。時期は［山本 2000］のＥ期（13 世紀前後～前半）となり、珠

洲焼の年代幅に収まる。このことから、中世遺物の主体時期は 13 世紀から 14 世紀に置くことができる。なお、出土量は少ないものの中世土師器も広くは「13 世紀中ごろ～ 15 世紀前半ごろ」［鶴巻 2004］の様相を呈しており、これと矛盾しない。この年代観は遺構内外でも大きな違いは見られないことから、遺構の構築年代と理解しても差し支えない。

1）井　　戸

SE4（1 ～ 3）

1 は珠洲焼擂鉢で、SD583 出土の破片と接合したものである。内面は使用により大きく摩滅しており、卸し目はわずかに確認できるのみである。2 は青磁椀で、蓮弁文が施されていると考えられる。3 は中世土師器の皿である。成形はロクロで、轆轤台からの切り離しがヘラ切りの C 類［品田 1997］（以下同じ。なお、本報告にあたっては出土量が少ないため皿・小皿の細分は行わず、器種は便宜的に「皿」を用いた）にあたる。

SE722（4）

中世土師器の皿で、C 類である。

SE799（5 ～ 9）

5・6 は珠洲焼である。5 は甕である。6 は擂鉢の体部で、内面には一単位幅 2.2cm（8 本）の卸し目が施される。7 は青磁椀で、蓮弁文が施されていると考えられる。8・9 は中世土師器の皿で C 類である。

SE995（10 ～ 12）

10・11 は中世土師器の皿で C 類である。12 は珠洲焼擂鉢である。色調はにぶい黄橙色を呈し、単位不明の卸し目が残る。［吉岡 1994］（以下同じ）のⅢ期と考えられる。

SE1211（13 ～ 17）

13 ～ 15 は珠洲焼である。13 は甕の口縁部である。14 は擂鉢で、器形はわずかに膨らみを有する。内面には一単位幅 3cm（11 本）の卸し目が体部中位から施される。Ⅳ期と考えられる。15 は擂鉢で一単位幅 2.8cm（9 本）の卸し目が残る。16・17 は瀬戸・美濃焼である。16 は仏花瓶である。釉薬は灰釉で、丸みの強い体部に櫛描きによる 4 本の平行沈線が巡る。17 は卸皿である。釉薬は灰釉で、口縁部直下から卸し目が一本引きされている。

SE1230（18 ～ 21）

18・19 は珠洲焼である。18 は擂鉢の口縁部である。なお、今報告では珠洲焼の鉢類の細分に関し、便宜的に卸し目の残存しないものも「擂鉢」とし、片口部の残存するもののみ「片口鉢」として分離した。19 は甕の体部下半である。内面の一部に研磨痕が認められ、「土器片利用の研削具」［藤巻 1989］、「土器片研磨具・研削具」［髙橋 1996］としての機能も推察される。20 は青磁椀である。椀Ⅱ -a 類で E 期（13 世紀前後～前半）［山本 2000］（以下同じ）と考えられる。21 は中世土師器の皿で、轆轤台からの切り離しが糸切りの B 類である。

SE1554（22・23）

22・23 は珠洲焼擂鉢である。22 は胎土には海綿骨針を含むが、長石・石英も多く含んでいる。23 の内面には幅広の一単位幅 3.5cm（16 本）の卸し目が密に施される。Ⅳ～Ⅴ期と考えられる。

2）土　　坑

SK152（24）

珠洲焼擂鉢で、内面には一単位幅 2.2cm（11 本）の卸し目が施される。

SK578（25・26）

25 は中世土師器で、底部は糸切りと考えられる。26 は珠洲焼擂鉢で、色調は黄橙色を呈している。内面には一単位幅 2.2cm（11 本）の卸し目が体部中位から施されている。Ⅲ期と考えられる。

SK960（27・28）

27 は珠洲焼片口鉢の片口部分である。28 は青磁椀で、薄い器壁に鎬蓮弁文が施されている。

3）溝

SD22（29 ～ 32）

29 ～ 31 は珠洲焼擂鉢である。29 の内面には卸し目が体部中位から施される。30・31 は共に、内面は一単位幅 2.0cm（10 本）の卸し目が密に施され、Ⅳ期と考えられる。32 は青磁椀と考えた。

SD23（33）

珠洲焼擂鉢で、口縁部が外側に引き出されている。

SD43（34 ～ 36）

34 は青磁椀で、SD795 から出土した破片と接合したものである。薄い器壁に鎬蓮弁文が明瞭に施され､釉も薄く均一にかけられている。椀Ⅱ -b 類でＥ期のものである。35 は中世土師器の皿でＣ類である。SX56 から出土した破片と接合した。36 は珠洲焼擂鉢で、ほかと比較すると器壁が薄手である。Ⅱ期と考えられ、遺構出土のものでは古手となる。

SD50（37 ～ 45）

37 ～ 43 は珠洲焼である。37 ～ 39・42・43 は擂鉢である。37 は一単位幅 2.2cm（9 本）、38 は一単位幅 2cm（9 本）、39 は一単位幅 2.8cm（9 本）の卸し目が施される。42 の内面は使用により大きく摩り減っている。40 は甕の口縁部である。41 は壷Ｔ種の口頸部である。44 は青磁椀である。椀Ⅱ -b 類でＥ期である。45 は中世土師器の皿である。ロクロ成形であるが、底部の切り離しは風化により読み取れない。

SD77（46）

珠洲焼擂鉢で、6D5 グリッドのⅢａ層から出土した破片と接合したものである。口縁端部は、ほぼ平坦に作出される。内面は一単位幅 1.8cm（9 本）の卸し目が施される。Ⅳ期と考えられる。

SD794（47）

珠洲焼片口鉢である。内面は一単位幅 2.2cm（7 本）の卸し目が施される。Ⅳ期と考えられる。

SD795（48）

珠洲焼で、壷の頸部と考えた。なお、本遺構から出土した青磁椀が SD43 出土破片（34）と接合した。

SD800（49）

中世土師器の皿でＣ類である。

SD1201（50）

珠洲焼擂鉢である。卸し目は口縁端部との間隔をやや開けて施される。

SD1224（51）

青磁椀である。鎬蓮弁文が施され、特に鎬が明瞭である。

4）性格不明遺構

SX54（52）

青磁椀で、蓮弁文が施されている。

SX56（53）

珠洲焼壷の体部である。外面は平行タタキ目、内面は無文当て具痕が残るが、底部近くの下半ではこれが及ばずにロクロ目が残る。なお、本遺構から出土した中世土師器がSD43出土破片（35）と接合した。

SX1231（54～57）

54・55は珠洲焼である。54は擂鉢である。55は珠洲焼の鉢又は壷の底部と考えた。56・57は中世土師器のⅢである。57はロクロ成形であるが、底部の切り離しは風化により読み取れない。

5）遺構外出土土器・陶磁器

第1面の調査時に包含層より出土したものである。遺物はⅢa層、Ⅳ層からそれぞれ出土するが、中世遺物に関してはⅢa層からの出土が多い。

珠洲焼（58～60）

遺構外から出土するものも遺構出土のものと同様にⅢ期からⅣ期が主体となるが、わずかにこれより古手のものも含む。58は擂鉢で、卸し目は口縁端部のかなり下から施される。Ⅰ期と考えられ、本遺跡出土の珠洲焼では最も古手に位置付けられる。59は片口鉢で、内面は一単位幅2.4cm（11本）の卸し目が施される。60の擂鉢は体部が直線的に開く。59・60はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

白磁（61）

口縁端部の釉が拭われて口禿げとなっている。器種は明確にできない。

中世土師器

細片のみの出土である。遺構出土のものと同様に成形はロクロで、轆轤台からの切り離しがヘラ切りのC類が主体で、切り離しが糸切りのB類は少量の出土である。

B　古代の土器

須恵器と土師器がある。須恵器は［春日1999］のⅣ～Ⅴ期（8世紀後葉～9世紀中葉）に位置付けられる。この時期は、指摘のように『越後の須恵器窯生産の「定着」期（Ⅳ期）』から『小泊産の大量流入と越後の須恵器窯生産の「衰退」期（Ⅴ期）』［春日1999］にあたる。本遺跡から出土した須恵器からも、阿賀北産と小泊産が混在し、これ以外の産地の可能性を残すものがわずかに混じる様相が読み取れた。器種は杯の出土が多く、これ以外の甕・瓶などは少ない。土師器は、甕のほか食膳具である椀も認められ、これもⅤ期の様相を呈しているといえる。

1）土　　坑

SK1056（62～64）

62・63は須恵器無台杯である。ともに胎土は［新潟古代土器研究会編2004］（以下同）のB群で、小

泊産と考えられる。64 は土師器無台椀で器壁が薄い。外面はロクロナデが確認できるものの、内面はより風化が著しくわずかに確認できるのみである。器高が高いことから小甕の可能性も残す。

SK1058（65）

須恵器の底部である。底径は 5.6cm と小さく、体部も急に立ち上がることから瓶と考えた。

SK1177（66・67）

66・67 は土師器の底部である。66 は無台椀、67 は無台杯と考えた。

SK1180（68・69）

68・69 は須恵器の底部である。68 は有台杯、69 は瓶と考えた。

2）溝

SD1032（70）

須恵器有台杯である。胎土はＢ群で、色調は一部橙色を呈する。

SD1539（71）

須恵器無台杯である。胎土はＣ群とした。Ｃ群は、阿賀北産としたＡ群、小泊産としたＢ群に当てはまらないものである。本遺跡での出土量はＡ群・Ｂ群と比べ少なく、客体的な存在である。絶対的な出土量が少ないため断定できないが、本群が隣接する柄目木遺跡でも出土するいわゆる新津丘陵産を含む可能性を指摘しておく。

3）焼土遺構

SX1537（72）

土師器長胴甕である。風化が著しいが、外面はロクロナデが確認できる。

4）性格不明遺構

SX1178（73 ～ 75）

73 ～ 75 は須恵器無台杯である。73 は胎土がＢ群、74 はＣ群となる。75 は底部が回転糸切りで、胎土はＡ群で阿賀北産と考えられる。

SX1624（76 ～ 83）

76 ～ 83 は須恵器である。76 ～ 79 は無台杯である。76・77 は底部を回転ヘラ切りで切り離し後ナデが行われ、底面は丸みを帯びる。81 は有台杯、82 は蓋、83 は甕の体部片である。これらの胎土は 83 を除きＡ群である。残る 83 もＣ群に分類され、本遺構から明確にＢ類と分類できるものは出土していない。

5）遺構外出土土器

a　第　1　面

古代・中世第 1 面の調査時に包含層から出土したものである。ここで出土した中世の遺構への混入土器についてもここで扱い、該当遺物は観察表に明記した。

須恵器（84 ～ 99）

84 ～ 89 は無台杯である。84 は底部外面に「廣者」と墨書されている。90 ～ 92 は有台杯である。蓋は 93 が胎土Ａ群、94・95 が胎土Ｂ群である。96・97 は長頸瓶の口縁部と底部で、胎土はＡ群である。

98 は壷の肩部と考えられ、一条の沈線が巡る。胎土はＢ群である。99 は甕の口縁部で胎土はＢ群である。

土師器（100 ～ 107）

100 ～ 102 は椀である。100 は風化が著しい。102 は赤彩が施されている。調整はロクロナデ後、体部下位はロクロケズリが行われ、口縁部下には二条の沈線が巡っている。赤彩と口縁部が内湾する器形の特徴から、金属器を模倣したとされる「赤彩土師器」［北野 1994］に類するものと考えられる。103 は黒色土器である。内面で黒色処理が行われる。器種は明確にできない。104 は遺存状態が不良で口径も推定できないが、小甕である。105 は 104 の存在を受けて小甕の底部と考えた。内面にタール状の付着物が認められる。用途を含め中世土師器の可能性を残す。106・107 は長胴甕の口縁部である。

b　第　2　面

須恵器（108 ～ 114）

108 ～ 110 は無台杯である。111･112 は蓋である。112 は外縁が意図的に打ち欠かれた可能性がある。111 が胎土Ａ群、112 がＢ群である。113・114 は横瓶の口頸部と体部である。

C　石　　器（115 ～ 120）

石器は砥石がある。11 点出土しており、いずれも「第 1 面」に伴うものである。116 ～ 118 は正裏面･両側面の 4 面に砥面が認められる。115・120 は正裏面に砥面が認められる。119 も砥面の残存は片面のみだが、形態も含め正裏面に砥面を残すものに類すると考えられる。石材は図示したものはいずれも凝灰岩である。

D　石　製　品（121）

古代の石製品として腰帯の石銙(巡方)1 点が出土した。出土は中世の遺構である SD50 の覆土中からで、時期が異なる遺構への混入であった。そのため、古代の遺構との関連は明らかでない。一部欠損しているが残存部では高さ 3.6cm、幅 3.6cm、厚さ 0.5cm、重量 13.33g で、石材は黒色粘板岩である。表面と側面はよく研磨されているが、裏面は条線の鋸目が残る。装着痕は残存する裏面の三隅に潜り穴が認められ、本来は四隅にあったと考えられる。

E　鉄　製　品（122 ～ 138）

刀子

可能性のある細片も含め 15 点出土し、6 点図示した。122 は刃部で、幅が広く厚みもある。123 ～ 125 は刃部から基部で、いずれも両端を欠損している。123 は刃部と基部の境で、その両方に段を持つ。124 は刃側に、125 は背側に段を持つ。126・127 は基部である。

和釘

可能性のある細片も含め 34 点出土し、10 点図示した。いずれも断面方形である。135 ～ 137 はこれが折れ曲がったものと考えた。

不明鉄製品

138 は半球形の椀状を呈する鉄製品である。口径 3.2cm、器高 1.7cm、重さ 10.07g である。器壁は厚さ 2 ～ 3mm ほどと薄い。

F　銅　製　品（139）

提子が１点出土した。SD1211 から出土したもので、容器部の口縁部と注口、弦の取り付け部が残存する。注口は厚さ約 2mm の銅板を半円の樋状に曲げたもので、容器部との接合部から先端に向かいやや狭まり、上向きに取り付けられる。弦の取り付け部は、注口を跨ぐように容器部の口縁部に取り付けられている。形状は半円形の銅板に切り込みを入れた山形で、中心に径約 5mm の円孔が穿たれている。

G　鉄生産関連遺物（140 ～ 145）

羽口・鉄滓がある。大半は調査区西側からの出土で特に鉄滓は 13・14E グリッドに集中が認められる。このほか焼成粘土塊としたものが若干出土しているが、その多くは羽口もしくは鉄生産に関わる炉壁などの小破片と考えられる。

羽口

いずれも小破片であった。140 は炉内先端部で溶損によりガラス化している。推定内径 2.5cm である。

鉄滓

椀形鍛冶滓と流動滓がある。141 ～ 143 は椀形鍛冶滓である。143 は椀形鍛冶滓の破片で、底面に取り込まれた炉壁の一部が付着する。144・145 は流動滓である。

H　木　製　品（146・147）

杭や板材の可能性のある木片を除くと、明確に製品とわかるものは２点であった。いずれも SE1554 から出土したものである。146 の下駄は板目に切り出された板材を用いたいわゆる連歯下駄で、緒穴が２か所に残る。台裏では長軸に対して直交するわずかな盛り上がりを前後２か所で確認でき、ここが歯であったと考えられる。また、台表で認められたわずかに凹む範囲は指圧痕と考えられる。147 の鍬は板目に切り出された板材を用い、柄の装着穴は中央に開けられている。差し込み口は片側に開く形状で、柄は斜めに装着されたと考えられる。

3　弥生時代の遺物

A　弥生時代の土器（1 ～ 144）

弥生時代前期から中期前半のものが主体で、これ以外ではわずかに中期後半のものが出土する。出土は遺構群を中心とした分布状況を示す（第８図）。8E・9F グリッドのように遺構が集中する場所に近接して集中域が認められる。また遺構群の北西側の斜面部でも等高線に沿うように集中域が認められ、小規模な捨場を形成する。遺構が希薄な調査区北側や南東側では、土器の出土量も減る。遺構出土土器は包含層出土のものと比べて細片が多く、接合率も低い。SK1166 や SK1449 のように同一個体の破片が比較的多く出土した遺構についても、略完形まで復元できたものは皆無であった。接合・抽出については遺構出土土器を優先し、遺構外出土土器については復元率が高い個体を中心に作業を行った。

1）分　　類

これまでに調査された同時期の周辺遺跡［古澤ほか 2003・土橋ほか 2009］との相互比較を容易にするた

第８図　弥生土器出土分布図

めに新潟市緒立遺跡の分類［渡邊 1998a］（以下、〈緒立･甕○類に該当〉のように表記した）を基に行った。なお、本遺跡の特性に合わせて、一部異なる部分や表現を改変した部分がある。

①甕形土器（以下、「甕」）

A 類…肩が張り、口頸部が直行ないし外反するもの。肩部から胴部上半に変形工字文などの文様帯が施文される。さらに、口縁部の施文や口縁部の形状により細分した。〈緒立・甕 C 類に該当〉

A1…口縁部外面に 1 ～数条の平行沈線文が施文されるもの（66）。〈緒立・甕 C1 類に該当〉

A2…口縁部外面が無文のもの（67）。〈緒立・甕 C2 類に該当〉

A3…くの字に外反した短い口縁が付くもの（19a・19b・36・37・68・69）。〈緒立・甕 C3 類に該当〉

B 類…A 類から外反する口縁が付かないもの。さらに、口縁部の施文により細分した。〈緒立･甕 D 類に該当〉

B1…口縁部に縄文が施されないもの。B2 と明瞭な区別をする為、口縁部の文様帯に縄文が施されないものということも出来る（5・25・26・70）。〈緒立・甕 D1 類に該当〉

B2…口縁部に 1 ～数条の平行沈線文が施され、その部分に縄文が施されるもの。また、口縁部の文様帯に縄文が施されるもの。B2 の中でも、その文様が変形工字文または変形工字文が崩れたもの（12・54・72 ～ 78）と、磨消縄文のもの（14・82）がある。〈緒立・甕 D2 類に該当〉

C 類…最大径が口縁部にある筒形になるもの（48a・48b・82）。〈緒立・甕 E 類に該当〉

D 類…口径 40cm 程度の大型のもので、口縁部から体部上半のいずれかに単位文様が施されるもの。胴部上半に変形工字文や工字文が施文されるもの（45）。〈緒立・甕 F1 類に該当〉

E 類…口径 40cm 前後の大型のもの。

E1 類…単位文様が描かれないもの（84a・b）。〈緒立・甕 G 類該当〉

E2 類…単位文様が施文されるもの（7・30a・30b・85）。〈緒立遺跡に該当する分類なし〉

F 類…屈曲する頸部を持ち、単位文様は描かれないもの。さらに、地文が縄文施文のもの（32）、地文が条痕文施文のもの（86）、ハケメ調整が施されるもの（87）。〈緒立・甕 H 類に該当〉

②深鉢形土器（以下、「深鉢」）

A 類…地文に条痕文を施されるもの。さらに、口縁部等の施文により細分した。〈緒立・深鉢 A 類に該当〉

A1 類…口縁部に条痕文のみ施されるもの。口縁部が内湾するもの（88・89）、内湾しないもの（1・15・16・27）、指頭圧痕による波状口縁のもの（90）がある。〈緒立・深鉢 A2 類に該当〉

A2 類…口縁部に条痕を施された後に、波状沈線文を施文されるもの（21・91）。〈緒立・深鉢 A1 類に該当〉

A3 類…口縁部から体部上半に縄文が施されるもの（49a・49b・92a・92b）。〈緒立・深鉢 A3 類に該当〉

A4 類…口縁部に平行沈線文等が施文されるもの（28）。〈緒立・深鉢 A4 類に該当〉

A5 類…口縁部に結節縄文が施文されるもの（93）。〈緒立遺跡に該当する分類なし〉

B 類…地文に縄文を施すもの。さらに、口縁部等の施文により細分した。〈緒立・深鉢 B 類に該当〉

B1 類…口縁部に縄文のみ施されるもの（4・43）。〈緒立・深鉢 B3 類に該当〉

B2 類…口縁部に波状沈線文等の沈線文が施されるもの。波状沈線文が施されるもの（9・41・52・63・94 ～ 96）、平行沈線文が施されるもの（46・97）がある。〈緒立・深鉢 B2 類に該当〉

B3 類…口縁部に結節縄文が施されるもの（18・22a・22b・38・64・98）。〈緒立・深鉢 B1 類に該当〉

C 類…口縁部に縄文帯と横位羽状沈線文が施されるもの（99）。〈緒立・深鉢 C 類に該当〉

D 類…口縁部が内湾し、口縁部が肥厚部分に縄文が施される（100）。〈緒立遺跡に該当する分類なし〉

③鉢形土器（以下、「鉢」）

A 類…胴部から口縁部にかけて緩やかに外傾するか、もしくは直線的に立ち上がるもの。〈緒立・鉢 A 類に該当〉

A1 類…胴部上半に変形工字文が描かれるもの（101）。〈緒立・鉢 A2 類に該当〉

A2 類…無文のもの（102）。〈緒立遺跡に該当する分類なし〉

B 類…口径に対し器高が高い小型の鉢で、口縁部から胴部に変形工字文などが施文されるもの（103・104a ～ d）。〈緒立・鉢 B2 類に該当〉

C 類…胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、単位文様が施されないもの(50・105・106)。〈緒立・鉢 C 類に該当〉

D 類…口径が 30cm 前後の大型の鉢で、口縁部から胴部上半に文様帯が施される。さらに、器形により細分した。〈緒立・鉢 D 類に該当〉

D1 類…胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がるもの。胴部に縄文、口縁部に変形工字文などが施文されるもの（110）。〈緒立・鉢 D1 類に該当〉

D2 類…D1 類に比べ小型で、土器の厚みは薄手のもの（113・114）。〈緒立・鉢 D2 類に該当〉

D3 類…口縁部が強く内湾するもの（111・112・115）。〈緒立・鉢 D3 類に該当〉

E 類…口頸部が外反し、底部が丸底ないし平底のもの。

E1 類…肩部で屈曲するもの。胴部から底部にかけて単位文様が施されるもの（39・47・107）。〈緒立・鉢 E2 に該当〉

E2 類…胴部から底部にかけて単位文様が施さないもの（108）。〈緒立遺跡に該当する分類なし〉

④高杯・台付鉢形土器

出土量自体少なく、細片のみで器形の全体像がつかめない為、分類は行っていない。

⑤壺形土器（以下、「壺」）

A 類…口縁部外面が肥厚し、その部分に沈線文が施文されるもの（122）。〈緒立・壺 B2 類に該当〉

B 類…口縁部外面が肥厚し、その部分に縄文が施される。頸部は無文帯で、肩部には磨消縄文で文様が施文される（125）。〈緒立・壺 C3 類に該当〉

C 類…頸部が短く、屈曲が弱いもので、ミガキが加えられる（59）。〈緒立・壺 F 類に該当〉

D 類…口縁部が肥厚し、頸部に隆帯が巡るもの（34）。〈緒立に該当する分類なし〉

E 類…頸部の屈曲は弱く、口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がる。胴部下半から底部には条痕文が、口縁部から胴部上半には縄文が施される（35）。土器の厚みはやや薄手の作りである。〈緒立に該当する分類なし〉

F 類…大型の壺で、肩部から胴部上位に文様帯を施すもの（123）。〈緒立に該当する分類なし〉

そのほかに、細片では反撚が施文されるもの、磨消縄文や磨消浮帯文が描かれるものもある。

⑥蓋形土器（以下、「蓋」）〈緒立に該当する分類なし〉

緒立遺跡では出土量が少なく、分類されていない。以下、本遺跡出土遺物を基に分類した。蓋部につまみ部が付随するものと、つまみ部を持たない逆台形状のものがある。今報告では、全体の形状が把握できるものが限られたため、蓋部とつまみ部に分けた上で細分した。

蓋部

A 類…地文に縄文が施されるもの。さらに、文様の特徴により細分した。

A1 類…縄文のみ施文されるもの（55・131）。

A2 類…平行沈線文が施されるもの（11a・11b）。

A3 類…変形工字文が施されるもの（24）。

A4 類…磨消浮帯文が施されるもの（135）。

B 類…地文が施されないもの。さらに、文様の特徴により細分した。

B1 類…ナデのみのもの（61）。

B2 類…変形工字文が施されるもの（132）。

B3 類…沈線文で変形工字文以外の文様が施文されるもの（133）。

B4 類…沈線文が一条引かれ、口縁部外面に強いナデを加えるもの（60）。

B5 類…結節縄文のみ施文される（134）。

つまみ部

C 類…縄文が施されるもので、形状により細分した。

C1 類…つまみの立ち上がりの外反が弱く、形状は逆台形状で、小ぶりのもの（136）。

C2 類…C1 類よりひとまわり大きいもの（3・17・137・138）。

D 類…つまみの立ち上がりの外反が弱く、形状は逆台形状で、ミガキ調整が加えるもの（139）。

E 類…立ち上がりが直行し、ナデのみのもの（140）。

また、つまみ部を持たない逆台形状の蓋は 62・143 である。

2）実測図の表現方法について

遺構出土遺物、遺構外出土遺物の順に記載する。遺構出土遺物は掘立柱建物・土坑・ピット・埋設土器、遺構外出土遺物は包含層・試掘トレンチがある。

実測の際は［石川 2005b］に基づき、以下の事項に留意して作業を行った。

①土器の実測図を作成する際には文様の単位に着目し、単位文の中心軸を正面とした。

②欠損部のある土器を復元実測する際は、現存する部分（範囲）を明記し、復元した部分と区別した。

③一周の 6/36（1/6）以上残存していれば、径の推定を行った。

④文様が入る遺物の実測図には必ず拓本を添え、必要に応じて展開拓本を添えたものもある。断面図に「外面の拓本」を添える場合は断面に向かって左側に、「内面の拓本」は右側に配置した。

ここで記述の際に用いた用語についても若干補足しておく。変形工字文の記載で用いた「交点 1」・「交点 2」や「中点 1」・「中点 2」は［須藤 1976］で用いられているものである。「磨消縄文」は基本的に「広義の磨消縄文」であるが、明らかに充填とわかるものについては「充填縄文」と表記した［石川 2005c］。「磨消浮帯文」は磨消部をわずかに窪ませ、それに挟まれて浮き上がる部分との陰陽で構図を描いたものを示す［石川 2002］。

以下、各説とする。出土地点や層位、胎土、調整、色調などは観察表に譲り、記述は特記事項のみとした。

3）掘立柱建物

SB1607

掘立柱建物を構成するピットのうち P1390・1391・1509 から出土した土器である。

P1390（1 ～ 3）

1 は深鉢 A1 類である。外面は地文前のナデが丁寧でないためか、わずかに輪積み痕が残る。内面も同様にナデが弱く輪積み痕が残る。胎土には白色の粗砂や小礫の混入が非常に目立つ。柱穴の根固めの使用を意識してか、破片は縦方向に割られている。2a・b は鉢であり、胎土や磨消縄文の特徴、焼成具合などから二片を同一個体と考えた。無文部と縄文部のコントラストが明瞭である。3 は蓋のつまみ部 C2 類である。縄文（LR）が施文され、つまみ部と体部の境部分はナデで消されている。

P1391（4）

深鉢 B1 類である。内外面には、工具による横方向のナデが残り、砂粒の動きから工具は右から左へ動いたと考えられる。口縁部外面には 1.5cm 幅の縄文が帯状に施文される。

P1509（5）

甕 B1 類であり、波状文が描かれる文様帯は弱いナデで整えられる。

4）土　　坑

SK1040（6 ～ 10）

6 の外面には、幅 3mm のやや深めの沈線による二条の平行沈線文が横走する。沈線溝には赤彩がわずかに残る。その上に多重モチーフによる文様が描かれるが、全体の構図は不明である。底面には二本描きによる「4」に似た構図が描かれる。胎土には粗砂や小礫が混入し、やや粗い。7 は甕 E2 類である。8a・b は甕の胴部である。縄文（LR）施文後、平行沈線文間に横位の羽状沈線文が描かれる。羽状沈線文

部には縄文が残る。9 は深鉢 B2 類である。10 は深鉢の底部で、底面はナデで整えられる。

SK1165（11 ～ 13）

11a・b は蓋 A2 類である。12 は甕 B2 類である。磨消縄文により文様が描かれる。13 は鉢の底部で、縄文（LR）施文後に、底面及び底部外面がナデで整えられる。

SK1166（14 ～ 17）

14 は甕 B2 類である。磨消縄文により、口縁部の三角形モチーフとその下の長方形モチーフが描かれる。また、内外面の摩耗が顕著である。15・16 は深鉢 A1 類である。17 は蓋のつまみ部 C2 類である。外面は摩耗や剥離が著しいが、わずかに縄文が残る。

SK1170（18 ～ 24）

18 は深鉢 B3 類である。口縁部に結節縄文が二段施文される。19a・b は甕 A3 類である。20 は甕の胴部である。21 は深鉢 A2 類である。内面はナデで、わずかに輪積み痕が残る。22a・b は深鉢 B3 類である。胎土や焼成、土器の厚みなどから同一個体と考えた。22b の上位にわずかに結節縄文が残る。22a の破片と合わせ、口縁部から体部にかけて少なくとも二段一組の結節縄文が二組施文される深鉢と考えられる。23 は肩部に縄文（反撚 RR）が施される大型の壺の破片の可能性がある。24 は蓋 A3 類である。口縁端部にのみススが付着していることから、蓋として使用されたものと考えた。

SK1176（25 ～ 28）

25・26 は甕 B1 類である。25 の文様帯は、変形工字文の特徴である二等辺三角形は間延びして菱形状になったものと考えられる。中点 1 も省略されるが、交点 1 と中点 2 はわずかに盛りあがる。文様帯と口縁部内面には丁寧なミガキが加えられる。また、外面に付着した炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行い、BP2,330 ± 30 との結果を得た（第Ⅵ章 3）。26 の無文部分は丁寧なミガキが加えられ、縄文部とのコントラストが明瞭である。内面にも丁寧なミガキが加えられる。27 は深鉢 A1 類である。外面には縦方向の条痕文が施文され、口縁端部のみ強いナデで整えられる。28 は深鉢 A4 類である。やや厚手の作りで、外面に横方向の条痕文が施文されるが、これが密な部分とそうではない部分がある。口縁部外面には幅 5mm 程度の工具を用い、強く押してから右方向に弱く引くことの繰り返しによりキザミ状の押し引き文が施文される。猫山遺跡でも同様の深鉢が出土しており、押し引き文を引く間隔は 28 のほうが短い。29 は壺の胴部と考えられる。

SK1214（30・31）

30a・b は甕 E2 類であり、胎土や焼成の特徴から同一個体と考えた。縄文（反撚 RR）施文後、口縁部には四条の平行沈線文が横走し、部分的に沈線を指先でつまむことで匹字状の交点を作り出している。波状口縁を呈し、口縁端部には幅 2mm の細い沈線が施文される。文様帯の上下には円形の刺突文が巡る。30b は体部で左上がりの条痕が施文される。31 は甕の体部と考えられ、磨消縄文により重菱形文が描かれる。無文部分の磨消は丁寧なものではない。

SK1227・SX1397（32 ～ 34・35）

32 は甕 F 類である。内外面のナデは丁寧ではなく、わずかに輪積み痕が残る。縄文（LR）施文後、頸部外面には二条の平行沈線文が横走する。口縁部外面は横方向の強いナデで整えるが、丁寧なものではない。底部片は確認していない。33 は小型の鉢と考えられる。縦走する平行沈線文間に、先端が円形で鋭利な工具による刺突文が下方から施され、三列もしくは四列の刺突文となる。34 は壺 D 類である。胴部片も出土しているが、いずれも細片のため接合不能であった。外面は摩耗し、わずかに細かな条痕文が残る。

内面は弾けたような剥離が顕著である。口縁部は肥厚し、頸部には9単位の眼鏡状隆帯がめぐる。色調は灰白色で、胎土には粗砂を含み、やや粗い。35はSK1227の東側の遺物集中地点（SX1397）から出土した壺E類である。やや薄手の作りで、内面にはナデの痕跡が残る。34にみられる顕著な剥離は認められない。口縁部から胴部上半には横方向の、胴部下半には左上がりの条痕文が施文される。肩部には縄文（LR）が施文され結節部が残る。頸部には沈線幅4mm、浅い三条の平行沈線文が横走する。

SK1289（36～39）

36・37は甕A3類である。36は磨消縄文により、変形工字文からの系譜と考えられる間延びした三角形の構図が描かれる。外面は摩耗気味であるが、三角形部分には縄文が残る。内面にはミガキが加えられる。38は深鉢B3類である。やや薄手の作りで、口縁部には結節縄文が二段施文される。39は鉢E1類である。薄手の作りで、口縁部外面には三条の平行沈線文が横走し、これを指先でつまむことで匹字状の交点を作り出している。体部外面には、無文の縦区画帯が加わり、平行沈線文の無文帯から棘状部が付加される。角ばった長石と粗い金雲母の混入が目立つ胎土である。

SK1394（40～42）

40は甕の口縁部と考えられるが、広口壺の可能性もある。41は深鉢B2類である。穿孔は焼成後のものである。42は壺の破片と考えられ、わずかに磨消浮帯文が確認できる。

SK1449（43）

深鉢B1類である。

SK1502（44）

磨消浮帯文が描かれた壺の胴部と考えられる。

SK1523（45～51）

45～47は土坑の底面上から出土したものである。45は甕D類である。口縁部には二条の平行沈線文が横走し、肩部から胴部上半には変形工字文が描かれる。46は深鉢B2類である。大型の器形であるが、やや薄手の作りといえる。縄文（LR）施文後に、口縁部外面に三条の平行沈線文が横走するが、上下にぶれて粗雑である。底面の網代圧痕は特徴的である。46に使用された網代には多重菱形文が編まれている。網代の条材は緯条、経条ともに2mm程度とやや細く、圧痕自体がやや深い。拓本の上位を見ると紐による結び目が確認できる。土器製作時の網代ではなく、籠状製品の転用の可能性を指摘しておく。また、拓本のみでは表現しきれない部分もあると考え、粘土を用いたモデリング陽像も合わせて提示してある（図版119）。なお、新潟市西郷遺跡［土橋ほか2009］でも同様の網代を持つ底部が出土している。47は鉢E類である。波状口縁を呈し、その頂部は二股に割れ、口縁端部には刻みが加えられる。平方沈線文が一定の間隔を空け、四段横走する。頸部と胴部には先端が角ばった工具による刺突文が、二段の刺突文として巡る。胴部の刺突文にはわずかに赤彩が残る。底部には摩耗しているがわずかに縄文が残る。二段目の平行沈線文は、上下の抉り込みから匹字状の交点を作り出している。内面のナデは丁寧なものではなく、輪積み痕が残る。

48a・bは甕の体部片である。磨消縄文により枠状モチーフが描かれ、その内部に縄文が残る。49a・bは深鉢A3類である。波状口縁を呈し、やや薄手の作りである。やや左上がりの条痕文を施文後、口縁部外面には幅4.5cm程度の縄文帯が巡る。50は鉢C類である。縄文（LR）が施文されるが、方向は一定ではなく、粗雑な感を受ける。また、縄文施文前の工具によるナデの痕跡が残っている。口縁部には二条の平行沈線文が横走するが地文同様に粗雑である。内面にも外面同様に工具による右上がりのナデの痕

跡が残る。51 は台付き鉢と考えられ、波状口縁の形態がやや異なるが、120 と同一個体の可能性もある。波状口縁を呈し、外面には縦走する縄文（LR）が残る。横走する平行沈線文には丁寧なミガキが加えられ、粘土粒を押し付けた交点も丁寧に調整されている。沈線溝には赤彩が残る。

SK1536（52）

深鉢 B2 類である。やや薄手の作りで、波状文の間隔は狭い。

SK1611（53・54）

53 は甕の胴部と考えられる。54 は甕 B2 類である。変形工字文が描かれ、工字状の交点は上下の沈線文が寄せられてやや盛り上がる。

SK1640（55・56）

SK1640 からは 55 と 56 のみが出土した。55 は蓋 A1 類で、内面に沈線文が施文される。56 は深鉢の底部で、底面には笹による平行葉脈圧痕が残る。

5）ピ　ッ　ト

P1024（57）

甕の胴部と考えられる。磨消縄文により重菱形モチーフの文様が描かれる。重菱形の下方の平行沈線文に着目すると、下からの抉り込みにより匹字状の交点を作り出している。

P1051（58 ～ 62）

58 は甕の胴部上半である。59 は壺 C 類である。内外面ともに丁寧なミガキが加えられる。60 は蓋 B4 類である。口縁部には沈線文が一条巡る。口縁端部から沈線文まではナデが行われる。体部にかけては摩耗しているが、わずかに縄文を確認できる。61 は蓋 B1 類である。内面のナデと比べ外面のナデは雑である。62 はつまみ部を持たない蓋の天井部である。

P1352（63）

深鉢 B2 類である。施文工具が竹管状で、溝の中央部はやや盛り上がる。

P1428（64）

深鉢 B3 類で、撚りが弱い縄文（LR）施文後に、口縁部に結節縄文が施文される。

SH1167（65）

深鉢の胴部下半である。二次焼成の影響で著しく摩耗し、部分的に剥離している。胴部下半ではわずかに左上がりの条痕文が確認できる。

6）遺構外出土土器

甕形土器（66 ～ 87）

66 は甕 A1 類である。復元実測のため、器高については若干上下する可能性がある。口縁部は外反し、沈線文が一条横走する。肩部には匹字文が、胴部上半には横位の羽状沈線文が描かれる。胴部下半から底部にかけては平行沈線文が横走する。匹字文と羽状沈線文の組み合わせはやや古い様相を留めるといえる。しかし、口縁部の短かさ、筒状に近い器形、胴部下半の横走する平行沈線文は弥生前期の特徴といえるものである。外面は二次焼成の影響でかなり摩耗している。67 は甕 A2 類である。頸部には二条の平行沈線文からなる匹字文が、肩部には工字文が二段施文される。68・69 は甕 A3 類である。68 は波状口縁を呈する。口縁部には間延びした変形工字文が描かれ、これには丁寧なミガキが加えられる。内面にも丁

寧なミガキが加えられている。交点 1 及び中点 1・2 は匹字状で表現される。胎土には多量の金雲母が混入する。69 は幅 2mm の細めの沈線によりやや間延びした変形工字文が口縁部に描かれ、浮線文状にも見える。文様帯のうち口縁端部から二～三条目の工字状をなす平行沈線部分でのみ縄文が磨り消されている。胴部には横走する三条一組の平行沈線文が等間隔に三段施される。二次焼成の影響で、外面は全体に淡いススが付着し、部分的に剥離が見られる。内面は口縁部のみ薄くコゲが付着する。

70・71 は甕 B1 類である。70 は変形工字文がかなり崩れ、粗雑な沈線で文様が描かれている。沈線幅は 3mm で、沈線溝は非常に浅い。文様帯は弱いナデで整えられ、その際に使用された工具痕が残る。胴部には縄文が施文されるが、摩耗しているため明瞭には捉えられない。内面はナデで輪積み痕が残る。72 ～ 79 は甕 B2 類である。72・73 には変形工字文が描かれる。73 は 72 と比べ、流れるような沈線で描かれ、変形工字文の特徴でもある二等辺三角形もやや丸みを帯びている。74 は平行沈線文間に楕円形の文様が描かれ、磨消縄文手法は見られない。75 ～ 77 には波状文が描かれる。79 になると変形工字文がかなり崩れ、三角形や重菱形モチーフの文様が描かれる。80a・b・81 は甕 B 類の体部片と考えられる。

82 は甕 C 類で、いわゆる筒形土器である。磨消縄文で王字状の沈線文が描かれ、その部分に縄文（LR）が充填される。構図は硬化せずやや緩い。沈線幅は 2mm とほかの個体と比べて細く、浅い。83 は甕 C 類の胴部で、磨消縄文で左下に延びる棘が描かれ、底部近くには平行沈線文が三条横走する。

84a・b は甕 E1 類で、同一個体 2 点を図示した。条痕文を施文後に、口縁部から胴部上半に縄文（反撚 LL）が施され、結節部も残る。85a ～ e は甕 E2 類で、同一個体の各部位 5 点を図示した。胴部下半には右下がりやや深めの条痕文を施文後に、口縁部から胴部上半に縄文（LR）が施され、条痕文部分と縄文部分との境には結節部が残る。その後、平行沈線文と下向きの連弧文が組み合わされた構図が描かれる。85a は波状口縁を呈し、口縁端部は横方向のナデで整えられる。その頂部は二股に割れ、その両側には刻目文が加えられる。86 は甕 F 類である。86 の肩～胴部上半に右下がりの条痕文が施され、口縁部から頸部の外面は強めのナデで整えられる。口縁部はわずかに波状口縁様を呈する。

87 は非常に薄手の作りである。外面の摩耗が顕著で、頸部と胴部上半の一部で縄文（RL）がわずかに確認できるのみである。内面はいわゆるハケメ調整であるが、粗雑なせいか輪積み痕が残る。弥生前期～中期前半の所産というよりも、やや新しくなるものと考えられる。

深鉢形土器（88 ～ 100）

88 ～ 90 は深鉢 A1 類である。条痕文のみ施文された深鉢でも 88 や 89 のように口縁部が内湾するものと、90 のように条痕文施文後に、口縁端部を横方向のナデで整えながら外反させ、さらに指頭痕を加え波状口縁を作り出すものの 2 種類が確認された。91 は深鉢 A2 類である。92a･b は深鉢 A3 類である。92a は口縁端部がナデで整えられ、口縁部は波状口縁を呈し、その頂部は二股に割れる。91b は体部には右下がりの条痕文施文後に縄文 LR が施され、結節縄文も残る。93 は深鉢 A5 類で口縁部がやや内湾する。胴部上半では右下がりの、口縁部では横方向の条痕文を施文した後に結節縄文が二段施される。口縁端部は横方向の強いナデで整えられる。

94 ～ 97 は深鉢 B2 類である。94 のように口縁部の内湾が強いものと、95・96 のように内湾が弱いものがある。97 は横走する三条の平行沈線文と縄文が施される。この沈線の一部は縄文に切られているため、平行沈線施文後に縦走する縄文（LR）が施文されたと考えられる。98 は深鉢 B3 類である。ほかの深鉢と比べ、やや薄手の作りである。98 には横走する縄文（LR）施文した後に、口縁部に結節縄文が施される。99 は深鉢 C 類である。二条の横走する平行沈線文間に右上がりの沈線文が描かれ、沈線羽状

文に似る。沈線幅は 4mm で浅い。100 は深鉢 D 類で、細片のみの少量出土であった。

鉢形土器（101 ～ 116）

101 は鉢 A1 類である。外面には変形工字文が描かれ、その交点及び中点は縦方向の沈線のみで表現される。文様帯にはミガキが加えられ、口縁部のみ縄文（LR）が施文される。内面にも丁寧なミガキが加えられる。102 は鉢 A2 類である。内外面は強めのナデで整えられる。特に口縁端部から内部へ 4mm 程の部分でより強くナデられ、口縁端部をやや鋭利なものとする。口縁部の内外面には二次焼成によりススがわずかに付着する。特徴的な口縁端部やススの付着から蓋として使用した可能性も指摘できる。

103 は鉢 B 類である。二次焼成を受け、外面は摩耗しているが口縁部にはわずかに縄文（LR）が残る。沈線幅 3 ～ 4mm のやや浅めの沈線で変形工字文が描かれる。交点 1 は下から抉り込みを入れて、その両側に粘土を押して作出される。104a ～ d は胎土や焼成具合、沈線文や沈線幅の特徴から同一個体 4 点を図示し、鉢 B 類と考えた。内外面の摩耗が著しいが、わずかに縄文（LR）が残る。口縁部から胴部上半には変形工字文が描かれる。底部の沈線文の構図は不明瞭であるが、右下がりの二条の短い平行沈線文は特徴的に描かれており、底面にも二条の平行沈線文が確認できる。

105・106 は鉢 C 類である。105 の外面の平行沈線はやや粗雑で、調整はナデのみである。

107 は鉢 E1 類である。頸部が屈曲し、口縁部が開く器形と考えられる。体部には二条の平行沈線文が横走し、丸底の底部にかけては縦区画が設けられ、三角形をモチーフとした文様が描かれる。沈線の太さは約 3mm とやや太い。体部には右方向から刺突文が施され、刺突列として巡る。108 は鉢 E2 類である。109 は鉢の底部片で、外面には匹字文が描かれ、底面には縄文（LR）が施文される。

110 は鉢 D1 類である。変形工字文が崩れ、平行沈線文間に三角形モチーフが磨消縄文で描かれる。口縁部近くの三角形の辺は閉じない。113・114 は鉢 D2 類である。113 の口縁部には変形工字文が描かれ、その文様帯には丁寧なミガキが加えられる。交点及び中点はやや盛り上がりを見せる。114 は平行沈線間に、磨消縄文による三角形をモチーフとした文様が描かれる。111・112・115a・115b は鉢 D3 類である。111 の口縁部外面には五条の平行沈線文が横走し、三条目の沈線文を上下に抉り込むことで匹字状の交点を作出する。匹字部は 9 単位で配置されると考えられるが、抉り込みも弱く、粗雑な印象を受ける。文様帯にはミガキが加えられる。胴部上半の内面には、幅 10cm 程度のコゲが帯状に付着する。115a・b には横走する三条の平行沈線と三条の波状文が描かれ、波状文は平行沈線文の三条目を切っている。

116 の鉢は砂沢式もしくは生石 2 式の搬入品と考えられる。幅 4mm のやや深めの沈線で変形工字文が丁寧に描かれる。中点 1 は沈線を下から抉り込み、その両側に粘土を押しやった後に粘土粒を貼り付けることで作出される。中点 2 にも粘土粒が貼り付けられている。内面には二条の平行沈線文が横走する。波状口縁の頂部には二股に分かれる突起が付き、そこには刺突文が施される。口縁端部にも沈線文が施される。胎土は非常に精良で、海面骨針が混入する。なお、同一個体片は報告分を含んでも 3 点のみの出土であった。

高杯・台付鉢（117 ～ 121）

117 ～ 119 は高杯と考えられる。117 は幅 3mm のやや深めでしっかりした沈線により変形工字文が描かれる。縄文部分には赤彩がわずかに残る。胎土は非常に精良で、海綿骨針が混入する。120 は台付鉢と考えられるが、身が深めの鉢の可能性もある。縦走する縄文（LR）施文後、口縁部では二条、胴部では四条の横走する平行沈線文が施される。口縁部の沈線文は丁寧なミガキで整えられる。内面にも幅 2mm の沈線文が施され、外面同様に丁寧なミガキで整えられている。121 は台付き鉢の台部である。波

状文は並走する平行沈線文を切らずに描かれる。胎土には粗砂が混入し、精良とはいえない。

壺形土器（122 ～ 130）

122 は壺 A 類である。口縁部が肥厚し、その部分に沈線文が一条巡る。残存部では粘土粒がおよそ 60°間隔で貼り付けられることから、これは六単位であったと考えられる。123a ～ d は壺 F 類である。胴部最大径が 30cm を超える大型の壺である。口縁部から頸部、底部は不明であるが、胴部下半には条痕文が施文され、胴部上半には沈線文による文様が描かれる。構図は明らかではないが、胴部最大径となる部分には平行沈線文が横走し、その上位に連弧文が組み合わさるものと考えられる。沈線内には縄文が施文され、さらに刺突文が加えられる。沈線の外側はナデで整えられ、沈線文を強調する。内面はナデで、輪積み痕がわずかに残る。34 のような内面の顕著な剥離は認められない。外面にはわずかにススが付着し、123d の内面にはコゲが付着する。124 は壺の胴部で、撚りが弱い縄文（R）が施文され、二本描きによる短い下向き連弧文が描かれる。125 は壺 B 類である。肩部には、磨消縄文で工字状文が描かれる。工字状部分が磨り消され、枠状部分の縄文が残る。沈線は幅 3mm でやや深いものである。

126・127 は壺の破片と考えられる。126 は磨消縄文手法により縦方向の錨形文が描かれる。沈線幅 3mm でやや深い沈線が丁寧に施文される。磨消縄文による錨形文は器種を問わず、新潟県内では出土例が少ない。しかし、福島県や宮城県では定量確認されるものであり、県内の類例としては新潟市西郷遺跡［土橋ほか 2009］の丸底鉢があげられる。127 も磨消縄文により文様が描かれる。

128・129a・b は磨消浮帯文が施された壺と考えられる。129a・b は土器の厚みから小型壺の可能性がある。

130a・b は 1.5mm 程度の角張った白色の粗砂を多く混入する胎土や焼成、色調などから同一個体と判断した。破片のみで全体像は把握できない。

蓋形土器（131 ～ 143）

131 ～ 135 は蓋の口縁部から体部である。131 は蓋 A1 類である。132 は蓋 B2 類である。間延びした変形工字文が三単位配置されると考えられる。幅約 4mm の沈線溝には赤彩がわずかに残る。内面にも沈線文が施文され、強めのナデで調整されている。133 は蓋 B3 類である。体部には沈線文により四重の同心円が描かれる。口縁部には二条の平行沈線文が施される。文様にはミガキなどの調整は認められない。内面には沈線文が施され、ミガキが加えられる。沈線は幅約 4mm を基本とするが不安定で部分的に細くなったり、太くなったりする。口縁部内外面には二次焼成によるススが付着している。134 は蓋 B5 類で、体部外面はかなり摩耗しているが、口縁部では結節縄文が認められる。ほかに縄文施文の痕跡が残らないころから、結節縄文のみが施されたものと考えられる。135 は蓋 A4 類で、磨消浮帯文手法により約 3cm の小円文が描かれる。同一個体片の観察から、口縁部に小円文が一周するように 7 単位で配列するものと考えられる。

136 ～ 142 は蓋のつまみ部である。136 は蓋 C1 類、137・138 は蓋 C2 類である。139 は蓋 D 類で、外面には丁寧な横方向及びやや右下がりのミガキが加えられ、内面はナデで整えられる。140 は蓋 E 類で、出土したつまみ部のなかでもっとも背丈がある。内外面共にナデで整えられる。

141 はつまみ部で体部片もわずかに残る。体部には縄文が施文され、つまみ部の外面が強くナデられ、一段下がり、体部の縄文部がやや盛り上がる。142 はつまみ部の破片で、つまみ部には等間隔に 5 か所、焼成前に穿孔が施される。143 はつまみを持たない蓋である。143 の天井部には縄文が施され、天井部側縁部はナデられたことで縄文が消され、部分的には指頭圧痕も残る。

試掘トレンチ出土（144）

144a ～ c は弥生中期後半の宇津ノ台式と考えられる。基本的に内外面共にハケ調整であるが、144c は輪積み痕を境に上位がハケ調整、下位はナデである。144a は口縁端部に内面と外面から交互に刻目文が施される。口縁部外面には幅 2mm と細い沈線で二本描きによる平行沈線文、下向き連弧文、上向き連弧文が施される。144b・144c では、胴部上半には平行沈線文区画に横位の羽状沈線文が、その文様帯の下位には下向き連弧文が施文される。

B　土製品・焼粘土塊（145 ～ 154）

145 はミニチュア土器で蓋形または高杯形を呈している。本報告では蓋形として図示した。滑車形耳飾りにも似るが、内外面の調整が粗雑なことからミニチュア土器と判断した。焼成は均一で、にぶい黄橙色である。胎土には粗砂や小礫を含まず、比較的精良である。146 は環状土製品をして図示した。欠損のため全形は不明であるが、口縁部は一段肥厚し、下方に向かいやや窄まるようにも見える。厚みは 4mm、一段肥厚する口縁部は 5mm と薄手の作りで、現状は風化により非常にもろい。肥厚部には 3mm 程度の沈線文が巡るが、やや粗雑である。内外面には赤彩が施されるが、そのほとんどが剥落し、わずかに残存するのみである。147 は粘土板を折り返して山形状の突起を作出するが、下半は欠損しており全体形は不明である。これを折り返し接着部分が認められる側を下、その逆を上に置き図示した。土器の突起部分の可能性と共に、土偶や土偶形容器類の一部である可能性も否定できない。上半には植物の茎の痕のような沈線状の痕跡が、突起部には指頭による調整の痕跡が残る。下半の粘土板接着部は波状に整形されている。胎土には粗い金雲母、粗砂の混入が目立つ。焼成は均一で色調は外面がにぶい黄橙色、内面及び断面は外面よりも赤みを帯びたにぶい橙色である。

148 ～ 154 は焼粘土塊である。その大半がⅤ層からの出土であり、弥生時代の所産としてよい。焼粘土塊は総数 24 点が出土し、その総量は 295.46g である。その内、鉱物などの混和材が混入するものが 22 点、混入しないものも 2 点（計 18.03g）ある。混和材には石英、長石、角閃石、金雲母が認められ、粗砂や小礫の混入量にはそれぞればらつきがある。これら焼粘土塊は、もとは土器の素地であった可能性があるが、小塊が多いことから別の用途も考えなければならない。図化に際しては自然面、もしくは指頭痕や植物痕が目立つ方を便宜的に表とし、欠損や剥離が見られるほうを裏とした。側面については必要に応じて図化した。

148 は表面には指頭痕が残り、裏面は指頭痕が目立たず偏平な形状を呈する。裏面の上半には指紋が残る。表裏で色調が異なり、表面はにぶい橙色と明るく、裏面は褐灰色とやや暗い。径 6mm 程度の焼成前の穿孔が確認できる。穿孔の内面上部には沈線状の切れ込みが確認でき、出口右側は上方に引っ張られるように成形され楕円状を呈する。胎土には赤色粘土が混入し、少量ながら 3 ～ 6mm 程度の小礫も目立つ。

149 ～ 154 は指頭痕が残るものである。149 は表面に指頭痕が残る。裏面では凹凸が見られるが意図的なものではないと考えた。150 は下半を両側面から指で摘んだ指の痕と表面からの指頭痕が残る。裏面には剥離した痕跡が認められる。151 は焼粘土塊の中でもっとも重く 55.5g となる。左側面には粘土を握った状態に付いた指の跡が深く残る。表面では握った際に粘土が寄せられて生じた皺も確認できる。焼成のむらは見られず、表裏面共ににぶい黄橙色である。152 ～ 154 は植物痕が残るものである。152 の表面には植物の茎の痕跡が残る。裏面には両側面から寄せられた際に生じた粘土の皺が確認できる。153 の表面には沈線のような筋がみられる。これは断面形状の観察から、成形時の植物の茎による圧痕、

もしくは焼成により付着していた植物が燃焼して圧痕状の痕跡として残ったものと考えられる。154 の下半では剥離が認められる。表裏面で刺突のような痕跡が見られるが、意図的なものか断定できない。

C　石　　器（155 ～ 277）

出土した石器は第 3 表のとおり、合計で 680 点（剥片類を除く）である。器種組成は、剥片石器では石鏃の出土が多く、これに不定形石器、両極剥離痕のある石器、石錐が続く。礫石器は磨製石斧、敲磨石類、石皿・砥石・台石類が出土している。また石器製作についても石核、剥片類、原石の出土からうかがわれる。器種組成を含む様相は、猫山遺跡との類似性が指摘できる。

包含層からの石器の出土の様相は、大きくは土器と同様の傾向を示す。剥片石器では石鏃、石錐、不定形石器、両極石器、剥片類は、遺構の位置する高位面で遺構に近接した分布を示す。特に剥片類については 8F・9E グリッドに集中を見出せる。一方、石核は高位面でも一定の出土量を示すが、他器種より斜面部での出土割合が高い。

器種名／出土区分	石鏃	石鏃失敗品	石錐	不定形石器	両極剥離痕のある石器	磨製石斧	敲磨石類	石皿・砥石・台石類	小計	異形石器	石核	剥片類	合計
出　土　数	97	43	49	95	62	7	149	21	523	4	153	3,554	4,234
百分率（%）	19	8	9	18	12	1	28	4	100 ※	-	-	-	

※　各項目の百分率は、小数点第 2 位を四捨五入して表記しているため、この合計は 100 とならない。

第 3 表　器種別石器出土表

第 9 図　石器出土分布図

掲載にあたっては、土器と異なり、遺構の内外を問わず、器種ごとに行った。遺構に関わる出土状況については遺構各説でも一部記述した。以下、器種ごとの記載に関し、分類の定義及び細分類の視点、観察表の項目など基本的な部分については、猫山遺跡［古澤ほか 2003］、西郷遺跡［土橋ほか 2009］を参考にした。

1）石　　鏃（155 ～ 179）

「扁平で鋭い先端部を持つ」［阿部 1979］石器を石鏃とした。総数 97 点出土している。分類は完形の 47 点を対象に、形状により行った。

A 類（155 ～ 164）　形状が柳葉状となるものである。凸基有茎鏃が主体であるが、いわゆる尖基鏃は 1 点のみの出土であるためここに含めた。19 点出土している。長さは、最大のもので 31.33mm、最小のもので 18.56mm、平均では 24.86mm となる。平均幅は 10.53mm、平均厚は 5.04mm、平均の重さは 1.05g である。

B 類（165 ～ 168）　有茎石鏃で、基部が平基状となるものである。10 点出土している。長さは、最大のもので 31.15mm、最小のもので 12.98mm、平均では 22.07mm となり、平均値では最小となる。平均幅は 11.53mm、平均厚は 4.54mm、重さは平均で 0.80g となり、平均値では最小となる。

C 類（169 ～ 176）　有茎石鏃で、基部が凹基状となるものである。ここでは、左右のどちらかが凹基状を呈するものであれば本類に含めた。14 点出土している。長さは、最大のもので 34.37mm、最小のもので 18.14mm、平均では 25.34mm となる。平均幅は 12.46mm、平均厚は 4.48mm、平均の重さは 0.93g である。

D 類（177 ～ 179）　有茎石鏃で、両側縁が屈曲して形状が五角形となるものである。4 点出土している。長さは、最大のもので 34.32mm、最小のもので 22.02mm、平均では 28.37mm となる。平均幅は 12.57mm、平均厚は 4.52mm、平均の重さは 1.06g である。

石　材　流紋岩を用いるものが 60 点と 62％を占める。次いで頁岩（含む珪質頁岩、以下同）が 18 点（19％）で続き、以下はメノウ 14 点（14％）、黒曜石 3 点（3％）、緑色凝灰岩 1 点（1％）となる。詳細は後述（Ⅵ章 4）するが黒曜石製の 3 点については蛍光 X 線分析による産地分析を行い、170 と 171 については新発田市板山産、159 については宮城県湯ノ倉産との結果を得た。

欠損品　欠損品が 50 点出土しており、これは総数の 52％を占める。その性格上、石鏃失敗品を含むものであるが、ここでは製作途中の可能性が低いと考えたものを扱う。基部のわずかな欠損も含めるため、残存率に大きな差があり、上記の分類が可能なものも含む。欠損部位は基部、もしくは先端部に集中している。

2）石鏃失敗品（180・181）

「石鏃を意図して製作されたと推定されるが、何らかの理由で製作を断念（失敗）したと考えられるもの」［阿部 2000］で、その可能性のあるものも含む。総数 43 点出土している。その性格上、石鏃の欠損品を含むものであるが、ここでは製作途中の可能性が高いと考えたものを扱う。180 は左側縁の二次加工が進み、A 類を意図して製作されていたことがわかる。181 は横長剥片を素材に、先端部が作出されている。

石　材　流紋岩を用いるものが 37 点で 86％を占め、石鏃の完形品及び欠損品より割合が高い。次いでメノウが 4 点（9％）で続き、以下は緑色凝灰岩 1 点（2％）、鉄石英 1 点（2 点）となる。

3）石　　錐（182 ～ 196）

意識的に先端部を形成している石器の中で、石鏃を除いたものである。総数49点出土している。分類は、可能であるものを対象に、つまみ部の有無・形態により行った。

A類（182 ～ 189）　全体形状が棒状のもの。25点出土している。長さは、最大のもので43.72mm、最小のもので19.04mm、平均では28.97mmとなる。平均幅は9.37mm、平均厚は6.99mm、平均の重さは1.83gである。184・185・187・188は、先端に顕著に摩耗痕が認められる。摩耗痕は両端部が作出されるものでも、一方の端部で顕著に発達するものが多い。

B類（190 ～ 194）　つまみ部が作出されるもので、つまみ部と錐部の境が明瞭なもの。17点出土している。長さは、最大のもので54.04mm、最小のもので21.24mm、平均では30.49mmとなる。平均幅は24.52mm、平均厚は8.84mm、平均の重さは5.96gである。

C類（195・196）　つまみ部が作出されるもので、つまみ部と錐部の境が不明瞭なもの。4点出土している。長さは、最大のもので45.28mm、最小のもので27.16mm、平均では34.53mmとなる。平均幅は19.10mm、平均厚は7.14mm、平均の重さは1.83gである。195は、先端に顕著に摩耗痕が認められる。

石　材　流紋岩を用いるものが36点で73％を占める。次いで頁岩が6点（12％）で続き、以下はメノウが4点（8％）、緑色凝灰岩1点（2％）、鉄石英1点（2％）となる。

遺存状態　B･C類では錐部の欠損が7点（33％）で認められる。なお、錐部の破片は3点出土している。

4）不定形石器（197 ～ 204）

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。連続的な押圧剥離による刃部ラインを持つ、いわゆるスクレイパー、削器などと呼称されるものは出土していない。これは猫山遺跡の様相[酒井2003b]とも一致する。総数95点出土している。分類は、刃部形状により行った。

A類（197～199）　連続剥離または連続剥離状による鋸歯状刃部をもつもの。13点出土している。長さは、最大のもので93.74mm、最小のもので35.14mm、平均では50.37mmとなる。平均幅は35.61mm、平均厚は12.38mm、平均の重さは19.91gである。

B類（200）　抉入状の刃部を有するもの。4点出土している。長さは、最大のもので86.32mm、最小のもので22.68mm、平均では49.95mmとなる。平均幅は36.15mm、平均厚は11.14mm、平均の重さは22.77gである。

C類（201）　素材の端部に連続剥離状の端部を有するもの。1点出土している。

D類（202 ～ 204）　刃部の加工はないものの、使用の結果生じたものと推定される微細剥離が認められるもの。77点出土している。長さは、最大のもので104.71mm、最小のもので19.48mm、平均では44.70mmとなる。平均幅は30.81mm、平均厚は9.17mm、平均の重さは14.35gである。

石　材　流紋岩を用いるものが85点で89％を占め、石鏃の完形品及び欠損品より割合が高い。次いで頁岩が7点（7％）で続き、以下はメノウ2点（2％）、凝灰岩1点（1％）となる。

5）両極剥離痕のある石器（205 ～ 214）

ピエス・エスキーユ、両極石器、楔形石器などと呼称され、両極から剥離痕のある石器を一括した。両

極技法で剥片を剥離したと考えられる両極石核、両極剥片も含む。総数 62 点出土している。分類は、両極剥離痕の数により行った。

A 類（205 ～ 210）　2 極一対の両極剥離痕を持つもの。42 点出土している。長さは、最大のもので 12.80mm、最小のもので 10.17mm、平均では 33.86mm となる。平均幅は 28.85mm、平均厚は 11.06mm、平均の重さは 22.22g である。

B 類（211・212）　4 極二対の両極剥離痕を持つもの。3 点出土している。長さは、最大のもので 50.54mm、最小のもので 33.55mm、平均では 42.67mm となる。平均幅は 36.42mm、平均厚は 12.52mm、平均の重さは 24.78g である。

C 類（213・214）　両極技法によって得られたと考えられる剥片である。17 点出土している。長さは、最大のもので 55.30mm、最小のもので 13.65mm、平均では 25.97mm となる。平均幅は 19.61mm、平均厚は 7.56mm、平均の重さは 5.68g である。

石　材　流紋岩を用いるものが 38 点と 61％を占める。次いで頁岩が 13 点（21％）で続き、以下はメノウ 9 点（15％）、凝灰岩 2 点（3％）となる。

6）磨製石斧（215 ～ 220）

剥離・敲打を基本に成形され、研磨で仕上げた一端に刃部を有する斧形の磨製石器である。出土は試掘時の 1 点（表面採集）を除き、すべて包含層からの出土で、総数 7 点である。215 ～ 217 は装着に伴うと考えられるツブレが観察でき、刃部でも使用痕と考えられる剥離が見られる。いずれも輝緑岩である。218 は残存厚 3.1cm の大形品である。石材は輝緑岩である。219・220 は小形品である。219 は、結晶片岩を用い、細身の形態を呈する。220 は中心軸に明瞭に稜線があり、横断面は六角形に近い。研磨痕も明瞭に残る。石材は蛇紋岩である。

7）敲磨石類（221 ～ 256）

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。側縁以外の敲打痕の集中は、いわゆる凹痕と理解した。総数 149 点出土しているが、このうちの 30 点は分類が不可能な破片であった。分類は使用痕の種類、使用部位等で行ったが、残存率によるところも大きい。

A 類（221 ～ 229）　磨痕のみ認められるもの。60 点出土しているが、欠損品の残存部位が磨面のみのもの（229 ほか）を含むため、本類内での組成比率は実際より高い数値になっていると考えられる。

B 類（230 ～ 235）　磨痕と凹痕が認められるもの。11 点出土している。230 は、割れ口に接して敲打痕が認められることから、使用に伴い欠損したものと考えられる。扁平な礫の中央に凹痕が発達するもの（231・232）と、棒状の礫に凹痕が複数並ぶもの（233・234・235）がある

C 類（236 ～ 242）　磨痕と側縁に敲打痕が認められるもの。24 点出土している。扁平な円礫を用いるものが多いが、240 は破損により生じた角をつぶすように新しい磨面が形成されており、破損後も使用が継続された様子がうかがえる。形状の差異とともに、ほかとは異なる用途も想定される。

D 類（243 ～ 246）　磨痕・凹痕・敲打痕すべてが認められるもの。4 点出土している。

E 類（247）　凹痕のみ認められるもの。8 点出土している。8 点中 6 点が比較的軟質な凝灰岩である。そのため、ほかの使用痕の有無が風化により読み取れないものを含むと考えられる。図化した 247 に関

しても、石材が軟質な凝灰岩であるため、顕著な凹痕は認識できたが、ほかの使用痕に関しては風化により読み取れないものの可能性がある。

F 類（248 ～ 256）　敲打痕のみが認められるもの。12 点出土している。いずれも端部、もしくは側縁部で敲打痕が発達するが、249・251 については細長く鋭い線状の圧痕が認められる。

石　材　石材鑑定は破片を除く 119 点を対象に行った。花崗岩を用いるものが 62 点と 52％を占める。次いで安山岩（石英安山岩 1 点を含む）が 35 点（29％）で続き、以下は凝灰岩 11 点（9％）、流紋岩 3 点（3％）、ホルンフェルス 2 点（2％）、ヒン岩 1 点、斑レイ岩 1 点、砂岩 1 点、軽石 1 点となる。

8）石皿・砥石・台石類（257 ～ 267）

それぞれ異なる機能・形態を持つ 3 器種であるが、本遺跡からは絶対的な出土量が少なく、その性格上明確な線引きが難しい。そのため、ここでは「扁平な大形の礫の表面または表裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの」として一括して扱うこととした。総数 21 点出土しているが、このうちの 9 点は本類のものと考えられる破片であった。

257 ～ 259 は扁平な円礫に使用痕が認められるものである。いずれも表裏面に平滑面がある。石材は花崗岩である。この 3 点を除くと、ほかはいずれも粒子の粗い石材を選択しているといえる。

石　材　石材鑑定は破片を除く 12 点を対象に行った。流紋岩 5 点、凝灰岩 3 点、安山岩 1 点、閃緑岩 1 点、砂岩 1 点、軽石 1 点であった。265 は軽石を用い、使用面が平坦であることから、手持ち砥石と考えたが、石製品、もしくはその未成品の可能性を残す。なお、265 とほぼ同じ大きさの軽石の原石はわずかではあるが遺跡内に持ち込まれている。

9）石　　核（268 ～ 275）

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。総数 153 点出土した。西郷遺跡［土橋ほか 2009］の分類を参考に分類した。

A 類（268・271 ～ 273）　剥片を素材とするものである。69 点出土している。平均の重さは 64.23g である。268 は出土した内で最大のものである。下端にも剥離が形成されることから、台石などに置いた状態で剥離作業を行ったと考えられる。石材は頁岩である。271 は両極技法による可能性がある。

B 類（269・270・274・275）　礫を素材とするものである。84 点出土している。平均の重さは 98.82g である。275 は、石材はメノウで礫面を残す。

石　材　流紋岩を用いるものが 121 点と 79％を占める。次いで頁岩が 19 点（12％）で続き、以下はメノウ 8 点（5％）、凝灰岩 5 点（3％）となる。

10）剥　片　類

二次加工及び使用痕の観察できない剥片をここで一括した。3,554 個出土し、重量は 13111.41g であった。このうち包含層（Ⅴ層）からは 2,742 個、11651.88g が出土した。

出土分布（第10図）は土器や定形的な石器と大きくは変わらないが、これらよりは斜面部への集中が弱く、土坑周辺での出土が顕著といえる。

第 10 図　剥片類出土分布図

11）異 形 石 器（276 ～ 278）

上記の石器の内に含まれず、かつ用途の想定がし難いもの 4 点をここで扱う。

276・277 は 2 点とも押圧剥離によって製作されており、石鏃及び石錐との類似性も指摘されるが、側面形態が湾曲して三日月形を呈していることから分離した。276 は流紋岩、277 は黒色緻密安山岩である。278 はいわゆる「雨垂れ石」と呼称されているものである。時期を明確にし得ないため古代・中世の遺物である可能性を残すが、ひとまずここで報告する。表裏面共に敲打による無数の凹痕が発達し、独特の形態を呈する。石材は軽石である。時期は明確にし難い。加えて、出土は「第 2 面」で確認した古代のピットからではあるが、弥生時代の包含層を掘り込んで遺構が構築されていた点に留意し、ここで報告することとした。

D　玉　　類（279 ～ 285）

穿孔が施され、垂飾と推定されるものである。総数 4 点出土しているが、遺構からは SK1289 から出土した 281 の 1 点のみである。ここではヒスイ・蛇紋岩の原石 3 点も関連を考慮し、ここで扱う。なお、石材鑑定についてはほかの石材と同様に肉眼で行ったが、ヒスイについては簡易的な比重計測も合わせて行い、値がヒスイに近似することを確認した。

279 はヒスイ製の垂玉である。形状は原石をそのまま用いたもので、研磨などの整形痕跡は認められない。これに穿孔が施されている。孔の位置は穿孔が可能な細薄部ともいえる側縁近くで、正裏面の双

方から穿たれる。280・281 は蛇紋岩製の垂玉である。280 は整形が顕著で、刻み状の装飾が施される。研磨による擦痕も全面で認められる。孔は正裏面の双方から穿たれている。281 は比較的、原石の形状を残していると考えられ、擦痕は孔の周囲で顕著に認められる。孔は正裏面の双方から穿たれている。282 は凝灰岩製である。軟質の原石を用いているのが異質で、造りも粗雑である。

283 ～ 285 は玉との関連がうかがわれる原石である。283 はヒスイの角礫状の原石である。掘立柱建物を構成する柱穴、P1392 からの出土である。284・285 は 283 より緑色が強い蛇紋岩の原石で、狭義ではいわゆるロディン岩の範疇に入るものである。

E　搬　入　礫

遺跡内に持ち込まれた加工痕の見出せない礫である。今回、弥生時代調査範囲内から回収できた礫の合計は 72.67kg である。これらは建物の構築材として、あるいは石器の原石としてなど様々な用途を意図して持ち込まれたものと考えられる。

第Ⅵ章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社[1)]・有限会社遺物材料研究所[2)]

1　はじめに

新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する山口遺跡は、阿賀野川右岸沖積地の自然堤防上に立地する。発掘調査の結果、3 面の遺構検出面が確認され、弥生時代及び古代～中世の集落であることが明らかとされている。

本章では、山口遺跡における古環境変遷、遺構の性格及び内容物、土器の年代観、黒曜石の産地分析等の検討を目的とした自然科学分析調査結果を報告する。

2　古環境推定及び植物利用

A　試　　料

試料は、斜面を下った低地部（以下、低地部）の基本土層（第 5 図･柱状図⑨）から採取された土壌（Ⅵ･Ⅴ･Ⅳ･Ⅲb･Ⅲa 層）と、弥生時代の土坑群が検出された付近（以下、微高地部）の基本土層（第 5 図･柱状図⑩）から採取された土壌（Ⅵ・Ⅳ層）、炭化物が多量に混じる状況が観察された弥生時代の土坑である SK1289 覆土 2 層から採取された土壌である。

これらの試料のうち、微高地部・低地部のⅥ・Ⅳ層を対象に珪藻分析を行う。また、低地部から採取されたⅥ・Ⅳ・Ⅲb・Ⅲa 層を対象に花粉分析・植物珪酸体分析を行う。SK1289 覆土 2 層は、弥生時代の植物利用等の検討を目的として微細物分析を行う。

B　分析方法

1）珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定･計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は［原口ほか 1998］、［Krammer1992］、［Krammer & Lange-Bertalot1986・1988・1991a・1991b］、［渡辺ほか 2005］、［小林ほか 2006］、［Witkowski et al.2000］などを参照し、分類基準は［Round et al.1990］に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は［柳沢 2000］に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類

1）パリノ・サーヴェイ株式会社（千葉博俊・斉藤崇人・伊藤良永・馬場健司・松本美由紀・高橋敦・斉藤紀之・中根秀二）
2）有限会社遺物材料研究所（藁科哲男）

（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については［Vos & de Wolf1993］を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は［Lowe1974］に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）については［小杉 1988］、淡水生種（貧塩性種）については［安藤 1990］、陸生珪藻については［伊藤・堀内 1991］、汚濁耐性については［渡辺ほか 2005］の環境指標種を参考とする。

2）花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析は試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現するすべての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉･胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭（微細な炭化植物片）の含量も求める。微粒炭は 20 μm 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

寄生虫卵分析は花粉分析と同様の処理手順を施し、重液による有機物の分離が終了した時点で処理を止める。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現するすべての寄生虫卵と花粉･胞子化石について同定･計数する。

結果は、花粉・胞子化石については同定及び計数結果の一覧表として、寄生虫卵・微粒炭については 1cc あたりに含まれる個数として表示する。寄生虫卵・微粒炭の個数については有効数字を考慮し、100 単位として表示する。

3）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、［近藤 2004］の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 10 の位を四捨五入して 100 単位に丸め、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化を図示する。

4）微細物分析

試料を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材（主に 4mm 角以上）などの遺物を抽出する。

現生標本及び［石川 1994］、［中山ほか 2000］等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は、70℃ 48 時間乾燥後の重量と最大径を表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し保管する。

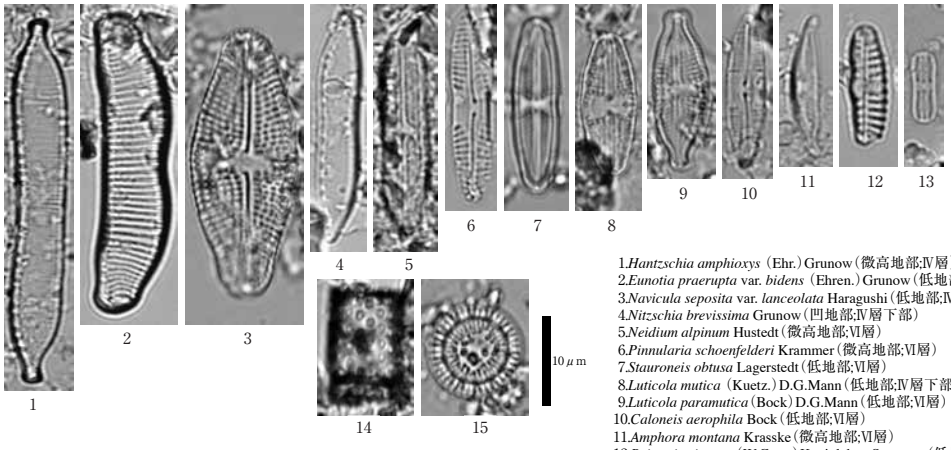
C　結　　果

1）珪 藻 分 析

結果を第 4・5 表、第 11・12 図に示す。いずれの試料も堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。産出分類群数は、合計で 43 属 90 分類群である。以下に、各地点の産状を示す。

a　低　地　部

Ⅵ層は、陸生珪藻の産出割合が約 60%、水生珪藻が約 30%産出する。また、海水生種が約 10%産出する。主要種は、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻 B 群の *Pinnularia schoenfelderi* が約 13%、陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* と *Hantzschia amphioxys* が 10%産出し、次いで同じく陸生珪藻 A 群の *Diadesmis biceps*、*Neidium alpinum*、陸生珪藻 B 群の *Stauroneis obtusa*、*Pinnularia subcapitata* 等を伴う。水生珪藻では特に多産するものはなく、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、止水性種の *Aulacoseira laevissima*、*Cyclotella ocellata*、海水浮遊性の *Coscinodiscus marginatus* 等を伴う。



1.*Hantzschia amphioxys*（Ehr.）Grunow（微高地部;Ⅳ層）
2.*Eunotia praerupta* var. *bidens*（Ehren.）Grunow（低地部;Ⅳ層下部）
3.*Navicula seposita* var. *lanceolata* Haragushi（低地部;Ⅳ層下部）
4.*Nitzschia brevissima* Grunow（凹地部;Ⅳ層下部）
5.*Neidium alpinum* Hustedt（微高地部;Ⅵ層）
6.*Pinnularia schoenfelderi* Krammer（微高地部;Ⅵ層）
7.*Stauroneis obtusa* Lagerstedt（低地部;Ⅵ層）
8.*Luticola mutica*（Kuetz.）D.G.Mann（低地部;Ⅳ層下部）
9.*Luticola paramutica*（Bock）D.G.Mann（低地部;Ⅵ層）
10.*Caloneis aerophila* Bock（低地部;Ⅵ層）
11.*Amphora montana* Krasske（微高地部;Ⅵ層）
12.*Reimeria sinuata*（W.Greg.）Kociolek et Stoermer（低地部;Ⅳ層下部）
13.*Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck（微高地部;Ⅳ層）
14.*Aulacoseira crassipunctata* Krammer（微高地部;Ⅵ層）
15.*Cyclotella ocellata* Pantocsek（微高地部;Ⅵ層）

第 11 図　珪藻化石

Ⅳ層下部では、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻の産出割合が約 60%と高く、次いで水生珪藻が約 30%産出する。主な産出種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* と *Hantzschia amphioxy* が約 20%産出し、同じく陸生珪藻 A 群の *Diadesmis biceps*、*Luticola cohnii* 等を伴う。水生珪藻では、好止水性種の *Navicula seposita* var. *lanceolata* が約 10%と多産するほか、好流水性で中～下流性河川指標種の *Planothidium lanceolatum*、*Reimeria sinuata* 等を伴う。

分類群	生態性			環境指標種	凹地部		微高地部	
	塩分	pH	流水		Ⅳ層下部	Ⅵ層	Ⅳ層	Ⅵ層
Bacillariophyta（珪藻植物門）								
Centric Diatoms（中心型珪藻類）								
Arachnoidiscus spp.	Euh				-	-	-	1
Aulacoseira alpigena（Grun.）Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	1	-	-	-
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	3	2
Aulacoseira granulata（Ehr.）Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	1	1	2
Aulacoseira italica（Ehr.）Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1	-	-	-
Aulacoseira laevissima（Grun.）Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	3	2	1
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh				-	3	-	-
Coscinodiscus spp.	Euh				-	1	1	3
Actinoptychus senarius（Ehr.）Ehrenberg	Euh			A	-	1	-	-
Orthoseira roeseana（Rabh.）O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1	-	1
Cyclotella bodanica Grunow	Ogh-ind	ind	l-bi	M	-	1	-	-
Cyclotella ocellata Pantocsek	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	3	-	4
Thalassiosira eccentrica（Ehr.）Cleve	Euh			A	-	1	-	-
Araphid Pennate Diatoms（無縦溝羽状珪藻類）								
Diatoma mesodon（Ehren.）Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	r-bi	K,T	1	-	1	-
Fragilaria capitellata（Grun.）J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
Fragilaria vaucheriae（Kuetz.）Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-
Meridion constrictum Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	2	1	-	-
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	-
Ulnaria ulna（Nitzsch）Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	-
Tabellaria fenestrata（Lyngbye）Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	-	1	-
Thalassionema hirosakiensis（Kanaya）Schrader	Euh				-	-	-	1
Thalassionema nitzschioides（Grun.）Grunow	Euh			A,B	-	2	1	3
Raphid Pennate Diatoms（有縦溝羽状珪藻類）								
Monoraphid Pennate Diatoms（単縦溝羽状珪藻類）								
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2	-	1
Lemnicola hungarica（Grunow）Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-
Planothidium lanceolatum（Breb. ex Kuetz.）Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4	-	-	-
Achnanthidium lapidosum（Krasske）H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1	-	-
Achnanthidium subhudsonis（Hustedt）H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	1	-
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-
Cocconeis placentula Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	1	-
Biraphid Pennate Diatoms（双縦溝羽状珪藻類）								
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	2	1
Cymbella cistula（Ehr.）Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	1	-	-	-
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	1	-	-
Cymbella tumida（Breb.）Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-
Cymbopleura naviculiformis（Auerswald）Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	1	-	-
Encyonema silesiacum（Bleisch）D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-
Placoneis elginensis var. *neglecta*（Krasske）H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1
Gomphoneis rhombica（Fricke）Merino *et al.*	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	-	-	1
Gomphonema parvulum（Kuetz.）Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	3	-	-
Gomphonema pumilum var. *rigidum* E.Reichardt et Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Reimeria sinuata（W.Greg.）Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	5	1	1	1
Rhoicosphenia abbreviata（C.Agardh）Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
Navicula seposita var. *lanceolata* Haragushi	Ogh-ind	ind	l-ph		15	-	1	-
Stauroneis borrichii（Pet.）Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	4	1	1
Frustulia vulgaris（Thwait.）De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-
Diadesmis biceps Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	15	4	3	1
Diadesmis contenta（Grun.ex Van Heurck）D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	1	4	1
Luticola goeppertiana（Bleisch）D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	1	-	1	-
Luticola cohnii（Hilse）D.G.Mann	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	11	1	-	-
Luticola minor（R.M.Patrick）Mayama	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-
Luticola mutica（Kuetz.）D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	38	7	16	17
Luticola paramutica（Bock）D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	3	13	6

第４表　珪藻分析結果（1）

2　古環境推定及び植物利用

分類群	生態性			環境指標種	凹地部		微高地部	
	塩分	pH	流水		Ⅳ層下部	Ⅵ層	Ⅳ層	Ⅵ層
Luticola plausibilis（Hustedt ex Simonsen）D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind		3	-	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	3	4	5	7
Neidium bisulcatum（Lagerst.）Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	1	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	-	3	2	4
Caloneis angustivalva Boye P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-	-
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-
Caloneis truncatula（Grunow）	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-
Diatomella balfouriana（W.Smith）Greville	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	5	2	2	1
Pinnularia microstauron（Ehr.）Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	1	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	13	4	13
Pinnularia schroederii（Hust.）Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	5	4	4	3
Pinnularia subcapitata var. *elongata* Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	1	-	-	-
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata*（Grun.）Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	1	-	-	-
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	-
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	1
Pinnularia valdetolerans Mayama et H.Kobsyasi	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S	1	-	-	-
Pinnularia viridis（Nitz.）Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	2	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-	-
管縦溝類								
Hantzschia amphioxys（Ehr.）Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	31	9	20	16
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	7	1	-	1
Nitzschia perminuta（Grun.）Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	-	-	3	2
Nitzschia terrestris（Pet.）Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-
Epithemia adnata（Kuetz.）Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
Rhopalodia gibberula（Ehr.）O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	3	1	1	-
翼管縦溝類								
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	1	-	1
短縦溝類								
Eunotia bilunaris（Ehr.）Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	1	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	1	-	-	-
Eunotia minor（Kuetz.）Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	-	-	-
Eunotia pectinalis（Kuetz.）Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	1	-	-
Eunotia praerupta var. *bidens*（Ehren.）Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	8	2	1	-
Eunotia veneris（Kuetz.）De Toni	Ogh-hob	ac-il	ind	T	1	-	-	-
海水生種					0	8	2	8
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					10	2	1	1
淡水生種					190	93	99	92
珪藻化石総数					200	103	102	101

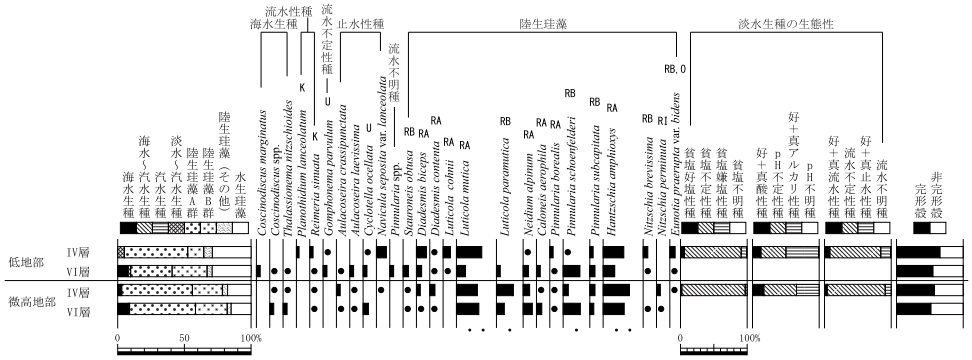
＜凡例＞

H.R.: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Euh　：海水生種	al-bi　：真アルカリ性種	l-bi　：真止水性種
Meh　：汽水生種	al-il　：好アルカリ性種	l-ph　：好止水性種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種	ind　：pH 不定性種	ind　：流水不定性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種	ac-il　：好酸性種	r-ph　：好流水性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種	ac-bi　：真酸性種	r-bi　：真流水性種
Ogh-unk　：貧塩不明種	unk　：pH 不明種	unk　：流水不明種

＜環境指標種群＞

A: 外洋指標種 ,B: 内湾指標種 ,E1: 海水泥質干潟指標種（以上は小杉 ,1988）、K: 中～下流性河川指標種 ,M: 湖沼浮遊性種 ,O: 沼沢湿地付着生種（以上は安藤 ,1990）、S: 好汚濁性種 ,U: 広域適応性種 ,T: 好清水性種（以上は Asai&Watanabe,1995）、R: 陸生珪藻（RA:A 群 ,RB:B 群 ,RI: 未区分、伊藤・堀内 ,1991）

第５表　珪藻分析結果（2）



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満の産出を示す。
<環境指標種>
K:中～下流性河川指標種,U:広域適応性種,RA:陸生珪藻A群,RB:陸生珪藻B群,RI:未区分陸生珪藻

第 12 図　主要珪藻化石群集の層位分布

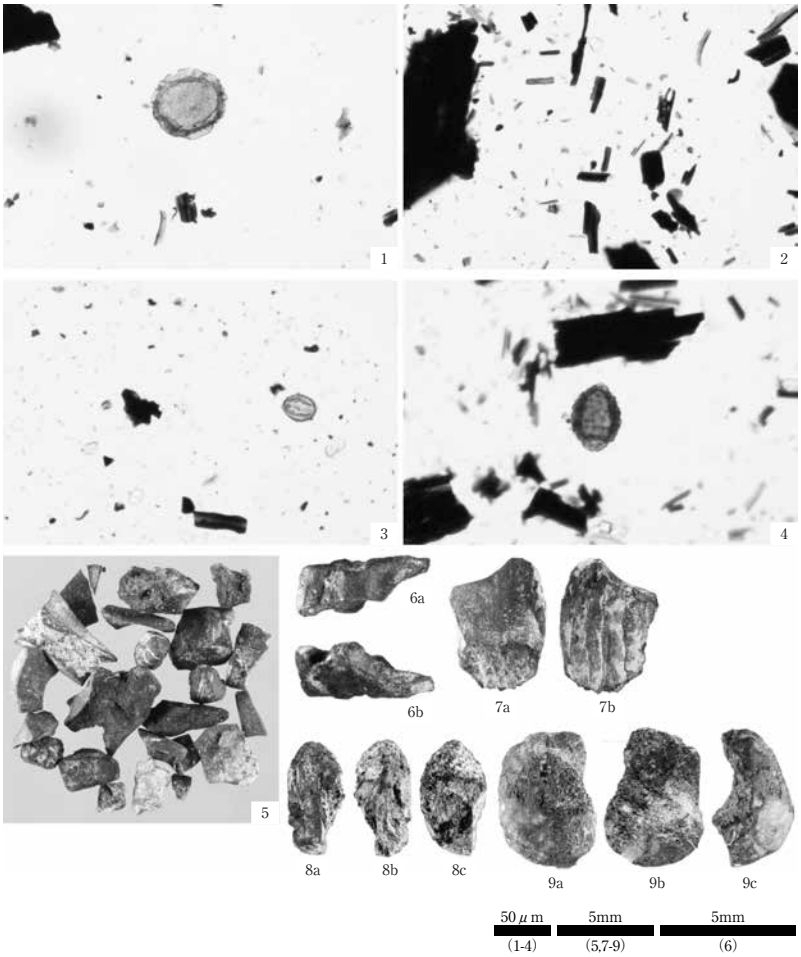
b　微高地部

低地部と同様に陸生珪藻が多産し、約 80%を占める。これに次いで、水生珪藻が約 20%産出する。なお、Ⅵ層では海水生種が約 10%産出する。陸生珪藻の主要種は、Ⅳ層もⅥ層も近似し、陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* と *Hantzschia amphioxys* が約 20%産出し、陸生珪藻 B 群の *Luticola paramutica*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Pinnularia subcapitata*、陸生珪藻 A 群の *Neidium alpinum* 等を伴う。水生珪藻も特に多産するものはなく、止水性の *Aulacoseira crassipunctata*、*Aulacoseira laevissima*、海水浮遊性の *Thalassionema nitzschioides*、*Coscinodiscus* spp. 等が低率ながら産出する。

2）花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第 6 表に示す。低地部のⅢ a・Ⅲ b・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層からは、花粉化石がほとんど検出されず、検出された花粉も保存状態は極めて不良である。検出された花粉は、木本花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科がわずかに認められるのみである。

各試料における微粒炭量は、Ⅲ a 層は約 6,400 個 /cc、Ⅲ b 層は約 3,000 個 /cc、Ⅴ層は約 1,600 個 /cc、Ⅳ層は約 8,200 個 /cc、Ⅵ層は約 400 個 /cc、SE1260 覆土 3 層は約 20,300 個 /cc である。



1.プレパラート内の状況（低地部;Ⅲa層）
2.プレパラート内の状況（低地部;Ⅳ層）
3.プレパラート内の状況（低地部;Ⅵ層）
4.プレパラート内の状況（SE1260 3層）
5.オニグルミ 核（SK1289 2層）
6.オニグルミ 核（SK1289 2層）
7.ブナ科 果実（SK1289 2層）
8.コナラ属 子葉（SK1289 2層）
9.不明炭化物A（SK1289 2層）

第 13 図　花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の状況写真・種実遺体

分類群	低地部 Ⅲａ層	Ⅲｂ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	SE1260 3層
木本花粉						
ツガ属	1	-	-	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	1	-
草本花粉						
イネ科	-	-	-	1	1	-
ベニバナ属	-	-	-	-	-	1
不明花粉	-	-	-	-	-	1
シダ類胞子						
シダ類胞子	23	15	13	101	20	152
合　計						
木本花粉	1	0	0	0	1	1
草本花粉	0	0	0	1	1	1
不明花粉	0	0	0	0	0	1
シダ類胞子	23	15	13	101	20	152
総計（不明を除く）	24	15	13	102	22	154
寄生虫卵						
寄生虫卵［個 /cc］	-	-	-	-	-	0
1cc あたりの微粒炭量［個］	6400	3000	8200	1600	400	20300

第６表　花粉分析・寄生虫卵分析結果

3）植物珪酸体分析

結果を第７表、第 14･15 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下、各地点の産状を記す。

a　低　地　部

Ⅵ層は、植物珪酸体含量は約 6,500 個 /g である。クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属等が検出される。Ⅳ層下部は、植物珪酸体含量は約 1.6 万個 /g であり、Ⅵ層と同様にクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族が検出される。Ⅲｂ層は、植物珪酸体含量は約 9,100 個 /g であり、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出される。また、栽培植物であるイネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体も検出される。その含量は、短細胞珪酸体と機動細

（個 /g）

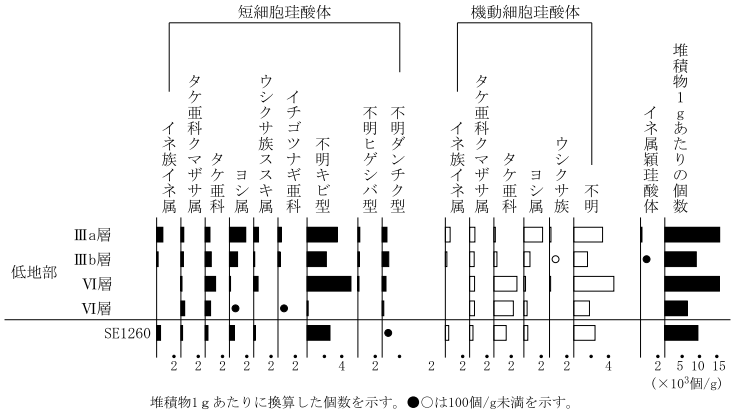
試料名 / 分類群	低地部 Ⅲａ層	Ⅲｂ層	Ⅳ層	Ⅵ層	SE1260
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	700	200	-	-	500
タケ亜科クマザサ属	300	300	100	400	200
タケ亜科	600	700	1,200	600	300
ヨシ属	1,900	900	100	<100	600
ウシクサ族ススキ属	600	100	500	-	200
イチゴツナギ亜科	400	200	-	<100	-
不明キビ型	3,500	2,200	5,100	100	2,600
不明ヒゲシバ型	200	200	100	-	-
不明ダンチク型	600	800	400	200	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	600	200	-	-	400
タケ亜科クマザサ属	600	500	600	600	400
タケ亜科	200	400	2,700	2,200	1,400
ヨシ属	2,200	700	200	400	500
ウシクサ族	200	<100	100	-	-
不明	3,300	1,600	4,600	1,800	2,500
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体	200	<100	-	-	-
合　　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,700	5,600	7,600	1,500	4,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	7,000	3,400	8,200	5,000	5,100
珪化組織片	200	100	0	0	0
総　計	15,800	9,100	15,800	6,500	9,600

第７表　植物珪酸体含量

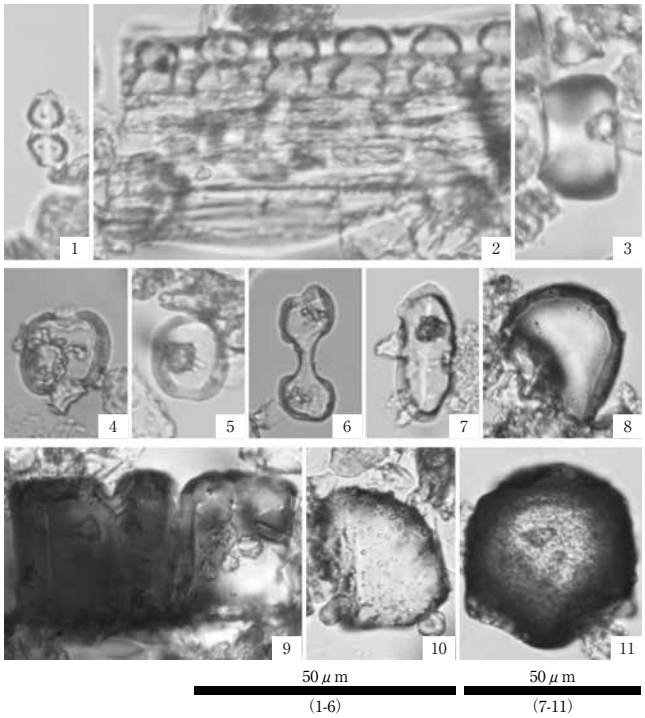
胞珪酸体はそれぞれ約 200 個 /g、穎珪酸体は 100 個 /g 未満である。Ⅲ a 層は、植物珪酸体含量は約 1.6 万個 /g である。Ⅲ b 層と同様の分類群が検出され、ヨシ属の含量が高い。また、イネ属も検出され、その含量は、短細胞珪酸体が約 700 個 /g、機動細胞珪酸体が約 600 個 /g、穎珪酸体が約 200 個 /g である。

b　SE1260 覆土 3 層

SE1260 覆土 3 層は、植物珪酸体含量は約 9,600 個 /g である。クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属が検出されるほか、栽培植物のイネ属も検出される。イネ属の含量は、短細胞珪酸体は約 500 個 /g、機動細胞珪酸体は約 400 個 /g である。



第 14 図　植物珪酸体含量



1.イネ属短細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
2.イネ属短細胞列（SE1260 3層）
3.クマザサ属短細胞珪酸体（SE1260 3層）
4.ヨシ属短細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
5.ヨシ属短細胞珪酸体（SE1260 3層）
6.ススキ属短細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
7.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
8.イネ属機動細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
9.イネ属機動細胞列（SE1260 3層）
10.クマザサ属機動細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）
11.ヨシ属機動細胞珪酸体（低地部;Ⅲa層）

第 15 図　植物珪酸体

4）微細物分析

結果を第 8 表に示す。SK1289 覆土 2 層からは、落葉広葉樹のオニグルミの核 24 個、落葉または常緑広葉樹のコナラ属の子葉 3 個、ブナ科の果実 2 個の計 29 個が検出され、いずれも炭化が認められる破

分類群	部位	状態		SK1289 2 層	備考
木本類					
オニグルミ	核	破片	炭化	24	最大径 5.5mm
コナラ属	子葉	破片	炭化	3	
ブナ科	果実	破片	炭化	2	
不明炭化物 A				2	長さ 7mm, 幅 5mm
不明炭化物				2	
炭化材				0.77g	最大径 1.5cm < 樹種同定結果 > マツ属複維管束亜属（3）, ヌルデ？（2）
			分析量	100cc 168.4g	

第 8 表　微細物分析結果

片である。このほかに、最大径 1.5cm 程度の炭化材（0.77g）、不明炭化物 4 個が確認された。

また、検出された炭化材について樹種同定を行った結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）と落葉広葉樹のヌルデ？（*Rhus javanica* L..?）が確認された。以下に、検出された種実の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.） Kitamura）　クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ 3-4cm、径 2.5-3cm 程度の頂部が尖る広卵体で、1 本の明瞭な縦の縫合線がある。破片は最大で 5.5mm 程度。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。

・コナラ属（*Quercus*）　ブナ科

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば卵～球状楕円体。破片は子葉の合わせ目に沿って割れた半分未満で、最大で長さ 6mm、径 3mm 程度。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上はわずかに窪み、頂部にある小さな孔（主根）を欠損する。

・ブナ科（Fagaceae）

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。破片は丸みを帯びるが、全形は不明。大きさは最大で長さ 7mm、幅 5mm 程度。（外）果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面（内果皮）は材質が異なり、粗い縦筋がある。コナラ属の可能性がある。

・不明炭化物（Unknown）

木材組織が確認されない、部位・種類共に不明の炭化物の破片が検出された。炭化しており黒色。うち 2 個は類似することから、不明炭化物 A としている。不明炭化物 A は、丸みを帯びることから、全形は球状の可能性がある。大きさは最大で長さ 7mm、径 5mm 程度。表面は平滑で内部はやや海綿状。子葉の合わせ目は確認されない。

D　考　　察

1）古　環　境

a　堆 積 環 境

Ⅵ層に認められた珪藻化石群集は、低地部、微高地部ともに陸生珪藻が多産し、これとは生育環境を異にする中～下流性河川指標種群を含む流水性種や止水性種、海水生種が低率ながら混在する状況が認められた。このような様々な生育環境を示す珪藻化石が混在する群集は、河川の氾濫等に伴う一過性の堆積物中に認められる混合群集［堀内ほか 1996］に近い特徴と言える。なお、陸生珪藻が他の種類に比べ多産し

たことから、陸生珪藻の生育に適した好気的環境にあったことが推定される。本遺跡は、阿賀野川右岸の自然提坊上に立地することから、河川等の氾濫や増水等の影響を受けていた可能性もあるが、基本的には好気的環境であったと考えられる。

一方、古代の遺物包含層とされるⅣ層も、低地部及び微高地部いずれも陸生珪藻が多産したことから、好気的環境であったことが推定される。なお、低地部のⅣ層（試料番号 10）からは好止水性種の *Navicula seposita* var. *lanceolata* が比較的多く検出された。本種は、［原口 2000］が菅生沼で記載した種で、止水域に生育する種類である。現地性種とすれば、Ⅳ層堆積時に部分的（あるいは一時的）に、沼地・沼沢湿地のような水域環境であった可能性がある。

b　古　植　生

花粉分析の結果、低地部の基本土層試料及び SE1260 覆土 3 層のいずれの試料も花粉化石がほとんど検出されなかったことから、古植生の検討は困難であった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（［中村 1967］、［徳永・山内 1971］、［三宅・中越 1998］など）。上記した珪藻分析結果では、陸生珪藻が多産したことから好気的環境が推定されており、わずかに検出された花粉も花粉外膜が破損・溶解するなど保存状態が悪かったことを考慮すると、経年変化の影響を受け分解・消失したと考えられる。

なお、わずかに検出された花粉から、針葉樹のツガ属、落葉広葉樹のブナ属、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属等の木本類が周辺に生育していたと推定される。また、弥生時代前期の土坑覆土（SK1289 覆土 2 層）からは、落葉広葉樹のオニグルミ、落葉または常緑広葉樹のコナラ属を含むブナ科の炭化種実、マツ属複維管束亜属及びヌルデ？の炭化材が検出された。オニグルミは、河川沿いなどの適湿地に生育する高木である。針葉樹のツガ属やマツ属、ブナ属・コナラ属を含むブナ科、ヌルデ等は、現在の本遺跡周辺域の山野に普通に生育することから、これらは当時の本遺跡周辺の森林や林縁、河畔等に生育していたと考えられる。

また、オニグルミは核内部の種子が生食可能であり、コナラ属を含むブナ科は、一部を除いてアク抜きすれば子葉が食用可能である。これらの堅果は、長期保存可能で収量も多いことから、植物質食糧として利用された痕跡の可能性がある。これらの種実の破片が炭化した状態で検出されたこと、マツ属複維管束亜属やヌルデ？等の炭化材が検出されたことから、燃料材等としての利用も推定される。

植物珪酸体分析結果では、Ⅵ層及びⅣ層からクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出された。このことから、タケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等は、周辺の微高地や低地部の開けた明るい場所に生育していたと推定される。特にヨシ属は、湿潤な環境を好むことから、低地部周辺に生育した可能性がある。また、クマザサ属は、落葉広葉樹林の林床に生育する分類群が含まれることから、上流域の落葉広葉樹林の林床等に生育したものも含まれる可能性がある。

一方、Ⅲ a・b 層では、下位のⅥ層やⅣ層と同様の分類群が検出されたほか、栽培植物のイネ属も検出された。その含量は、Ⅲ b 層では短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに約 200 個 /g、穎珪酸体は 100 個 /g 未満、Ⅲ a 層では、短細胞珪酸体は約 700 個 /g、機動細胞珪酸体は約 600 個 /g、穎珪酸体は約 200 個 /g であった。イネ属の含量が低いことや、Ⅲ層に相当する堆積物の所見を考慮すると、これらの本土層における稲作の可能性は低い。また、SE1260 覆土 3 層からは、栽培植物のイネ属の植物珪酸体や、

栽培種のベニバナ属の花粉が検出されたことから、イネの植物体の利用や周辺域でのベニバナ属の栽培・利用等が推定される。本地域における栽培植物の利用状況については、隣接する柄目木遺跡で検出された中世の井戸から検出された種実遺体の検討の結果、モモやイネ、アワ、ヒエ、ムギ類、アサ、マメ類、シソ、ナス科、メロン類等の栽培植物の種実遺体群が確認されており（未公表資料）、多くの栽培植物が利用されていたことが明らかとされている。

3　遺物の年代観及び遺構の性格の検討

A　試　　料

試料は、弥生時代前期～中期初頭の土坑４基（SK1165･1170･1289･1394）の覆土等から採取された土壌、SE1260 覆土３層から採取された土壌、SK1176 の ４層から出土した弥生時代前期～中期初頭と考えられる土器（図版 58 － 25）である。以下に、各試料の概要を記す。

1）土 坑 試 料

土坑試料は、発掘調査時に土坑を埋積する堆積物の観察と合わせて試料の採取を行っている。なお、試料採取位置は、土層断面に限定されたため、発掘調査時に区分された各土層及び土坑底面を構成する堆積物を層位毎に採取している。以下に、各土坑覆土の観察所見及び採取試料を記す。

a　SK1165・1170

２基の土坑は隣接する。覆土は、SK1165・1176 ともに、それぞれ１・２層からなる。SK1165 覆土１層は局所的に炭化物が混じる褐灰色シルト～粘土、２層は炭化物が混じる褐灰色粘土、土坑底面（地山）は褐灰色粘土であるが、１・２層に比べ塊状をなす。本土坑では、１層から土器や石器などが多量に出土している。試料は、１層、２層上部・下部、地山から採取している。一方、SK1176 では、１層は褐灰色シルト～粘土、２層は褐灰色粘土である。試料は、１層上部・下部、２層から採取している。

b　SK1289

覆土は１～３層からなる。１層は、炭化物がわずかに混じる褐灰色シルト、２層は炭化物が多量に混じる褐灰色シルト～粘土、３層は炭化物が混じる褐灰色シルト～粘土であり、２～３層から土器がまとまって出土する。試料は、１層上部・下部、２層、３層から採取しており、炭化物が多量混じる２層については上記した微細物分析用の試料を合せて採取している。

c　SK1394

覆土は1･2 層からなり､1･2 層ともに褐灰色を呈するシルトである。１層からは土器片が多量出土する。なお、土坑底面（地山）は、覆土１・２層に比べやや泥質である。試料は、１層上部・下部、２層、地山から採取している。

上記した各土坑は、いずれも基本土層Ⅵ層を検出面としており、土坑覆土はⅥ層の基質との変化はほとんど認められず、土器や石器等の出土状況や炭化物の混入の程度、土坑底部の堆積物（地山）と比較して、偽礫化した堆積物からなるという特徴が認められた。

2）SE1260

試料は、SE1260 覆土 3 層から採取された灰色シルト混じり粘土である。

3）弥生土器

試料は、SK1176 の底面直上の 4 層から出土した弥生土器片（図版 58 － 25）に付着した炭化物である。炭化物は、土器口縁部外面に施文された沈線内に多く認められ、器面の一部にも付着する状況が観察された。

これらの試料のうち、上記した土坑試料と、比較対照試料として微高地部から採取された基本土層Ⅵ、Ⅴ、Ⅳ層を対象に土壌理化学分析（腐植含量、リン酸含量、カルシウム含量）を行う。また、SE1260 覆土 3 層を対象に寄生虫卵分析、土器の外面に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行う。

B　分析方法

1）放射性炭素年代測定

炭化物について、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じ切り、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し、封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02 のマニュアルに従い、1 年単位まで表された同位体効果の補正をした年代値を用いて行う。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、暦年較正結果は σ・2 σ（σ は統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95%の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比（確立分布）は、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

2）寄生虫卵分析

本分析方法については、本章 2 － B － 2）を参照されたい。

3）土壌理化学分析

腐植含量はチューリン法［土壌標準分析・測定法委員会 1986］、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法［土壌養分測定法委員会 1981］、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法［土壌養分測定法委員会 1981］でそれぞれ行う。以下に、各項目の操作工程を示す。

a　分析試料調製

試料を風乾後、軽く粉砕して 2.00mm φの篩いを通過させる（風乾細土）。風乾細土の一部を細かく粉砕し、0.5mm φの篩いを全通させる（粉砕土）。風乾細土の水分を加熱減量法（105℃、4 時間）により測定する。

b　腐 植 含 量

粉砕土 0.100 ～ 0.500g を 100ml 三角フラスコに正確に秤量し、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土%）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（乾土%）を算出する。

c　リン酸含量

風乾細土 2.00g をケルダールフラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で 100ml に定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸濃度を測定する。測定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を算出する。

d　カルシウム含量

リン酸含量測定においてろ過したろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計でカルシウム濃度を測定する。測定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

C　結　　果

1）放射性炭素年代測定

土器（図版 58 － 25）の炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、2,330 ± 30yrBP を示す（第 9 表）。また、この補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は calBC 405-calBC384 である（第 10 表）。

2）寄生虫卵分析

結果を第 6 表に示す。SE1260 覆土 3 層からは寄生虫卵は 1 個体も検出されない。また、顕鏡時にプレパラート中における花粉の産状の確認も行ったが、花粉化石の検出状況及び保存状況は極めて悪く、ブナ属やベニバナ属の花粉が検出されるのみである。

3）土壌理化学分析

結果を第11表、第16･17図に示す。腐植含量は、比較対照とした微高地部のⅣ･Ⅴ･Ⅵ層は2.08～0.82%の範囲にあり、含量はⅣ層からⅥ層へ減少する。土坑試料では、SK1165は1.29～0.75%、SK1170は0.97～0.77%、SK1289は1.92～1.07%、SK1394は0.95～0.79%の範囲にあり、ほぼ比較対照試料の含量範囲内にある。含量変化の特徴をみると、SK1165・1170・1394では1層から下位に向かって減少するが、SK1289は2層で増加が認められる。

リン酸含量は、微高地部のⅣ・Ⅴ・Ⅵ層は2.03～1.71P_2O_5mg/gの範囲にあり、含量はⅣ層からⅥ層へ減少するが、Ⅴ・Ⅵ層はほぼ程度である。土坑試料では、SK1165は2.37～1.54P_2O_5mg/g、SK1170は2.29～2.08P_2O_5mg/g、SK1289は3.16～2.44P_2O_5mg/g、SK1394は2.28～1.89P_2O_5mg/gの範囲にあり、比較対照試料とした微高地部のⅣ・Ⅴ・Ⅵ層の含量より概して高い。含量変化の特徴をみると、SK1165・1170・1394ではおおむね1層下位に向かって減少するが、SK1289の2・3層では増加が認められる。

カルシウム含量は、微高地部のⅣ・Ⅴ・Ⅵ層で4.49～3.51CaOmg/gの範囲にあり、含量はリン酸

試料名	試料の質	補正年代 (yrBP)	δ ^{13}C (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 code.
SK1176 土器	土器付着炭化物	2,330 ± 30	-24.93 ± 0.63	2,330 ± 30	IAAA-82442

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2）BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値

第9表　放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代（cal）															相対比	測定機関 Code.
SK1176 土器 土器付着炭化物	2,327 ± 31	σ	cal	BC	405	-	cal	BC	384	cal	BP	2,355	-	2,334	1.000	IAAA-82442
		2 σ	cal	BC	506	-	cal	BC	457	cal	BP	2,456	-	2,407	0.054	
			cal	BC	455	-	cal	BC	439	cal	BP	2,405	-	2,389	0.015	
			cal	BC	419	-	cal	BC	358	cal	BP	2,369	-	2,308	0.898	
			cal	BC	280	-	cal	BC	258	cal	BP	2,230	-	2,208	0.031	
			cal	BC	242	-	cal	BC	239	cal	BP	2,192	-	2,189	0.002	

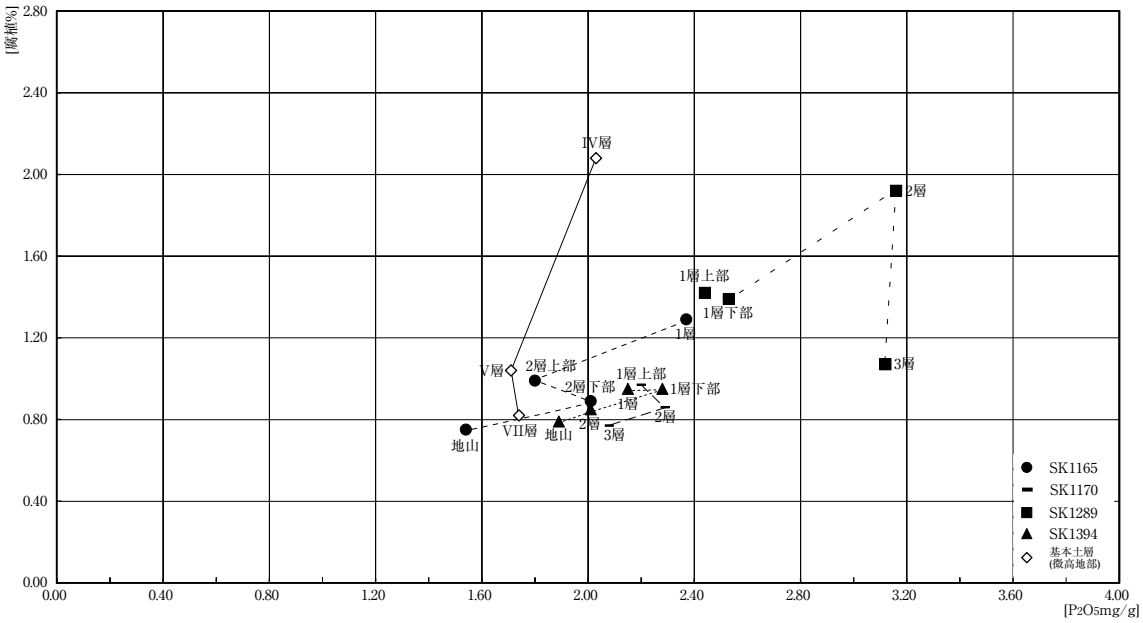
1）RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第10表　暦年較正結果

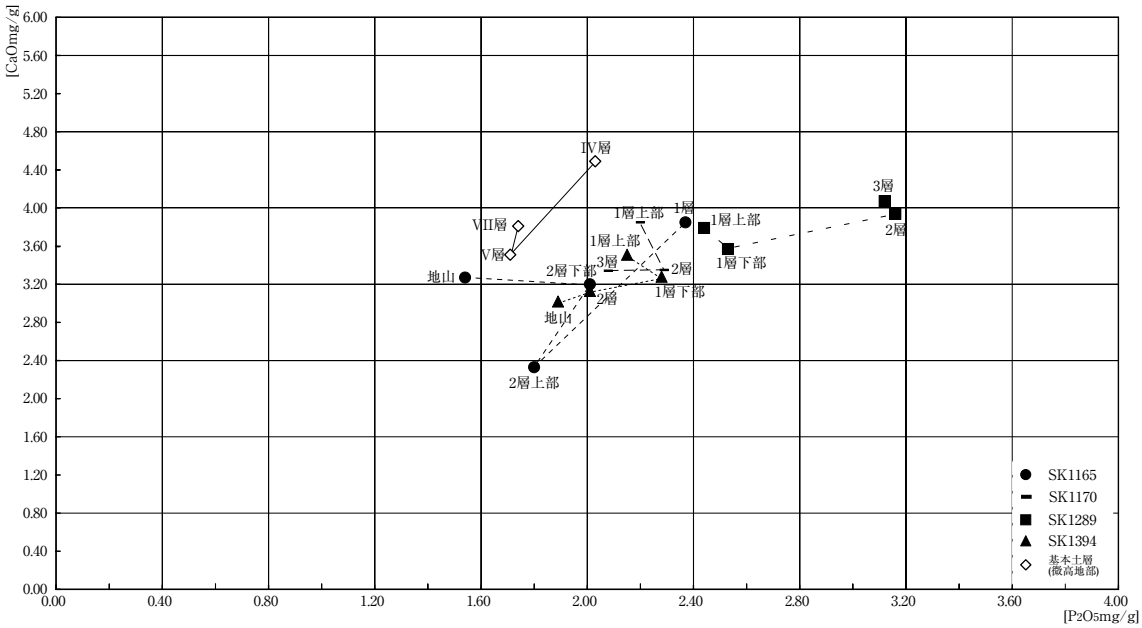
試料			土性	土色		腐植含量	P_2O_5	CaO
遺構名	層名 / 地点					(%)	(mg/g)	(mg/g)
SK1165	1層		LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	1.29	2.37	3.85
	2層	上部	LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.99	1.80	2.33
	2層	下部	LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.89	2.01	3.20
	地山		HC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.75	1.54	3.27
SK1170	1層		HC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.97	2.20	3.85
	2層		LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.86	2.29	3.35
	3層		LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.77	2.08	3.34
SK1289	1層	上部	LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	1.42	2.44	3.79
	1層	下部	LiC	2.5Y4/4	オリーブ褐	1.39	2.53	3.57
	2層		HC	2.5Y4/3	オリーブ褐	1.92	3.16	3.94
	3層		LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	1.07	3.12	4.07
SK1394	1層	上部	LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.95	2.15	3.51
	1層	下部	LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.95	2.28	3.28
	2層		SiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.85	2.01	3.13
	地山		LiC	2.5Y4/3	オリーブ褐	0.79	1.89	3.02
微高地部	Ⅳ層		HC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	2.08	2.03	4.49
	Ⅴ層		HC	2.5Y4/4	オリーブ褐	1.04	1.71	3.51
	Ⅵ層		HC	2.5Y4/4	オリーブ褐	0.82	1.74	3.81

1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修,1967）による。
2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編,1984）の野外土性による。
SiC; シルト質埴土（粘土25～45%, シルト45～75%, 砂0～30%）、LiC; 軽埴土（粘土25～45%, シルト0～45%, 砂10～55%）、HC; 重埴土（粘土45～100%, シルト0～55%, 砂0～55%）

第11表　土壌理化学分析結果



第 16 図　リン酸・腐植含量分布図



第 17 図　リン酸・カルシウム含量分布図

含量と同様にⅣ層からⅥ層へ減少する。土坑試料では、SK1165 は 3.85 ～ 2.33CaOmg/g、SK1170 は 3.85 ～ 3.34CaOmg/g、SK1289 は 4.07 ～ 3.57CaOmg/g、SK1394 は 3.51 ～ 3.02CaOmg/g の範囲にあり、微高地部のⅣ・Ⅴ・Ⅵ層の含量幅にある。含量変化の特徴を見ると、SK1170・1394 はおおむね 1 層から下位に向かって含量が減少する。一方、SK1165 では、1 層が最も高い含量であるが、2 層・地山でも高い含量が認められる。SK1289 は、リン酸含量と同様に 2・3 層で増加が認められる。

D　考　　察

1）SE1260

古代～中世の井戸とされる SE1260 は、このほかに検出された大型の井戸と覆土の特徴が異なることから、井戸以外の性格が推定された。本分析ではトイレ遺構の可能性を検討するため寄生虫卵分析を実施

したが、寄生虫卵は１個体も検出されなかった。

寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主（ヒト）に感染する。寄生虫卵は普通の土壌中にも含まれるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている（例えば［金原・金原 1992、1993］、［金原ほか 1995］など）。今回分析対象としたSE1260覆土３層の産状をみる限り、トイレ遺構としての利用を支持することはできない。

2）土　　坑

土壌に供給された動植物遺体は、土壌動物や土壌微生物によって分解されるが、その分解過程で一部の低分子有機化合物が生成され、これが重縮合して暗色無定形の高分子化合物となる。これがいわゆる腐植（腐植物質）である。腐植の集積量は、富加された有機物量（動植物遺体量）と腐植の分解量に左右されるが、その天然賦存量（自然含有量）は、主に気候、植生、母材（砂・シルト・粘土の鉱物など）、地形等の土壌生成因子によって規制される有機物の動態に対応し、定常状態を示す。したがって、天然賦存量範囲は、生成された土壌の種類で大きく異なり、水田耕作土層で 0.9 ～ 3.6%、黒ボク土壌Ａ層（表層）で３～ 26%、褐色森林土Ａ層（表層）で１～ 19%、泥炭土壌の低位泥炭で 22 ～ 56%、高位泥炭で 46 ～ 55%が通常範囲とされる［久馬ほか 1993］。なお、自然土壌の腐植集積は、土壌表層の粘土画分にあることから、通常は表層で最も高く、下層になるにしたがい低くなるが、耕作が頻繁に行われた土壌では腐植の分解のみが進行するため、表層の腐植含量は減少する。

これを踏まえて今回の分析結果を見ると、比較対照とした微高地部の基本土層Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層は、下位に向かって腐植含量が減少し、自然土壌の腐植集積パターンと調和的である。また、土坑試料においても、SK1165・1170・1394 の含量変化はそれに類似し、含量幅は微高地部のⅤ・Ⅵ層に近似する（第 16 図）。土性や土色もこれに類似することから、SK1165・1170 ・1394 はⅤ層やⅥ層が埋積した可能性が高く、土坑試料の地山はⅥ層土壌に類することがうかがわれる。一方、SK1289 の含量変化は、上記した３基の土坑とは異なり、２層で高い含量を示した（第 16 図）。これは自然土壌の腐植集積パターンとして解釈しにくい含量変化であり、動・植物遺体富加による含量増加が示唆される。

次にリン酸及びカルシウムについて考察する。リン酸、カルシウムの含量は、遺体等の痕跡を判断できる点で重要とされる。リン酸の天然賦存量については、いくつかの報告事例があり（［Bowen1983］、［Bolt・Bruggenwert1980］、［川崎ほか 1991］、［天野ほか 1991］）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0P_2O_5mg/g 程度と推定される。一方、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5P_2O_5mg/g［川崎ほか 1991］という報告例があるほか、遺構等を対象とした調査事例では、骨片等の痕跡が認められる土壌では 6.0P_2O_5mg/g を超える場合が多い。また、カルシウムの天然賦存量は、普通１～ 50CaOmg/g［藤貫 1979］とされ、リン酸よりも含量幅が大きい。また、土壌中を比較的移動しやすく、下層方向に拡散する成分である。なお、遺体等が土壌中で分解した直後は、リン酸、カルシウム含量は当然多いが、その成分は時間経過とともに徐々に系外へと広がる（特にカルシウムでは顕著）という特性があるため、天然賦存量内に収まってしまうケースも考えられる。そのため、リン酸・カルシウム含量による遺体等の痕跡を検討する場合、天然賦存量との比較による評価のほか、遺構覆土と同質、かつ人為的影響が低いとされる基本土層との比較や、同一遺構内覆土における含量変化による評価が必要となる。

今回の分析では、これらの土坑が検出された地点付近の基本土層（微高地部）のⅣ・Ⅴ・Ⅵ層と、SK1165・1394 の土坑底面を構成する堆積物（地山）を比較対照試料とし、土坑覆土を発掘調査時の土

層区分に基づき調査を行った。その結果、リン酸・カルシウム含量ともに天然賦存量の上限値を明らかに越える試料は認められなかった。また、基本土層におけるリン酸・カルシウム含量のうち、土色・土性から埋積物の母材となったと見られるⅤ・Ⅵ層の含量幅との比較においても、SK1165・1170・1394 は同程度あるいは、それより低い含量を示す（第 17 図）。これらの産状から、遺体の痕跡を示唆するリン酸カルシウム（骨の主成分）の富加を支持することはできない。

一方、SK1289 では、2 層においてⅤ・Ⅵ層の腐植・リン酸含量に比べ高く、カルシウム含量は 1 層に対して 2・3 層で高い含量を示した。SK1289 覆土 2 層は、試料採取時の所見や上記した微細物分析結果から木本類に由来する炭化物が混じる状況が確認されており、腐植・リン酸含量はこれらの影響を受けていることが推定される。3 層では、腐植含量が低く、カルシウム含量が高いという特徴も見出されるが、基本土層Ⅴ・Ⅵ層や SK1289 覆土 2 層のカルシウム含量との比較では明瞭な有意差を認められず、遺体等の痕跡の存在を支持するに至らない。

4　黒曜石産地分析

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒曜石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/K の両軽元素比量を除いて産地分析を行った場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。ほかの元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。また、安山岩製の遺物は、白っぽく表面が風化しているために、アルミナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。今回分析した山口遺跡出土黒曜石製遺物の分析結果を第 13 表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため Rb/Zr の一変量だけを考えると、第 13 表の試料番号 102559 番の遺物では Rb/Zr の値は 1.725 で、板山群の［平均値］±［標準偏差値］は、1.772 ± 0.098 である。遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えると、この遺物は原石群から 0.48 σ離れている。ところで板山原産地から 100 個の原石を採ってきて分析すると、平均値から± 0.48 σのずれより大きいものが 63 個ある。すなわち、この遺物が、板山群の原石から作られていたと仮定しても、0.48 σ以上離れる確率は 63％であると言える。だから、板山群の平均値から 0.48 σしか離れていないときには、この遺物が板山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を霧ヶ峰群に比較すると、霧ヶ峰群の［平均値］±［標準偏差値］は、1.052 ± 0.051 であるので遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えると、この遺物は原石群から 13 σである。これを確率の言葉で表現すると、霧ヶ峰群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 135 σ以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、霧ヶ峰群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は板山群に 63％の確率で帰属され、信頼限界の 0.1％を満たしていることから板山産原石が使用されていると同定され、さらに霧ヶ峰群に百億分の一％の低い確率で帰属され、信頼限界の 0.1％に満たないことから霧ヶ峰群の原石でないと同定される」。遺物が一

か所の産地（板山産地）と一致したからと言って、例え板山群と霧ヶ峰群の原石は成分が異なっていても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、ほかの産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、ほかの産地にも一致する可能性は推測される。すなわち、ある産地（板山産地）に一致し、必要条件を満足したと言っても、一致した産地の原石とは限らないので、帰属確率による判断を 305 個すべての原石群について行い十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことで、はじめて板山産地の石材のみが使用されていると判定される。九州産黒曜石原石の十分条件がないと、板山産原石の可能性はあるが、九州産原石の可能性も否定できないと言う結果になる。実際は Rb/Zr といった唯 1 つの変量だけでなく、前述した 8 つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A 原産地の A 群で Ca 元素と Rb 元素との間に相関があり、Ca の量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは、A 群の石材で作られた遺物であれば、A 群と比較したとき、Ca 量が一致すれば当然 Rb 量も一致するはずである。したがって、もし Rb 量だけが少しずれている場合には、この試料は A 群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングの T2 乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する［東村 1976・1980］。産地の同定結果は 1 個の遺物に対して、黒曜石製では 305 個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については、低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち板山産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石及び九州産、信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を第 14 表に記入した。原石群を作った原石試料は直径 2cm 以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざまで、これらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を 0.1％に設定した。今回分析した山口遺跡出土の黒曜石製石器及び剥片 5 個

原産地 原石群名	元素比										分析 個数
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K	
宮城・湯ノ倉	2.174 ± 0.068	0.359 ± 0.017	0.057 ± 0.005	2.544 ± 0.149	0.116 ± 0.009	0.658 ± 0.024	0.138 ± 0.015	0.020 ± 0.013	0.073 ± 0.003	0.956 ± 0.040	21
新潟・板山	0.232 ± 0.011	0.068 ± 0.003	0.169 ± 0.017	2.178 ± 0.110	1.772 ± 0.098	0.772 ± 0.046	0.374 ± 0.047	0.154 ± 0.034	0.027 ± 0.002	0.359 ± 0.009	44

第 12 表　湯ノ倉・板山の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

分析 番号	元素比									
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K
102558	2.159	0.365	0.058	2.518	0.105	0.649	0.147	0.023	0.076	0.987
102559	0.229	0.066	0.169	2.179	1.725	0.691	0.338	0.158	0.027	0.354
102560	0.228	0.065	0.174	2.269	1.823	0.825	0.383	0.134	0.027	0.358
102561	0.228	0.065	0.171	2.260	1.797	0.770	0.370	0.154	0.027	0.363
102562	0.233	0.065	0.175	2.265	1.790	0.775	0.388	0.122	0.028	0.362
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1：標準試料 -Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)"

第 13 表　山口遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析 番号	番号		層	取上番号	種類	ホテリングの T2 検定結果	判定
102558	1	6F5 グリッド	V 層	3269	石鏃	湯ノ倉（94%）	湯ノ倉
102559	2	9E7 グリッド	V 層		石鏃	板山（80%）	板山
102560	3	9E22 グリッド	V 層		石鏃	板山（94%）	板山
102561	4	8F5 グリッド	V 層		剥片	板山（85%）	板山
102562	5	8F8 グリッド	2 層	SK1165 S-11	剥片	板山（82%）	板山

第 14 表　山口遺跡出土黒曜石製遺物の検定結果

は信頼限界の0.1%を越えて原石産地が同定された。各産地の原石使用頻度が高い産地と活発な交流があったと推測すると、板山産が80％（4個）で、湯ノ倉産が20％（1個）で、地元の板山産原石が多用されていことから、地元産地と活発な交易・交流があったと推測される。これにより、湯ノ倉産原石の使用で、原石の伝播に伴って湯ノ倉産地地区の生活、文化情報を受け取り、また、逆に山口遺跡の生活、文化情報を伝えた可能性を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

第Ⅵ章引用・参考文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会

伊藤良永・堀内誠示　1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6

伊藤良永　2007　「珪藻分析の歩みと動向」『PALYNO No.5』パリノ・サーヴェイ株式会社出版刊行会

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省 農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』

金原正明・金原正子　1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－右京七条一坊西北坪－』 奈良国立文化財研究所

金原正明・金原正子　1993 「史跡松江城二ノ丸番所跡 SK-04 内堆積土の分析」『史跡松江城発掘調査報告書』松江市教委区委員会

金原正明・金原正子・中村亮仁　1995 「大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告II』石川県鹿島町教育委員会

久馬一剛・佐久間敏雄・庄司貞雄・鈴木　晧・服部　勉・三土正則・和田光史編　1993 『土壌の事典』朝倉書店

小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27

小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五　2006 『小林弘珪藻図鑑』第1巻 （株）内田老鶴圃

近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48

徳永重元・山内輝子　1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』 共立出版株式会社

土壌標準分析・測定法委員会編　1986 『土壌標準分析・測定法』 博友社

土壌養分測定法委員会編　1981 『土壌養分分析法』 養賢堂

藤貫　正　1979　「カルシウム」『地質調査所化学分析法』52

中村　純　1967　『花粉分析』古今書院

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967 『新版標準土色帖』

原口和夫・三友清史・小林　弘　1998 「埼玉の藻類　珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会

原口和夫　2000　「菅生沼の珪藻類」『珪藻学会誌』16

東村武信　1976　「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9

東村武信　1980　『考古学と物理化学』学生社

ペドロジスト懇談会　1984 「野外土性の判定」『ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック』 博友社

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫　1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」『日本文化財学会　第13回大会研究発表要旨集』 日本文化財学会

三宅　尚・中越信和　1998 「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6

柳沢幸夫　2000　「II-1-3-2-（5）計数・同定」『化石の研究法－採集から最新の解析法まで－』 化石研究会・共立出版株式会社

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子　2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴圃

Asai, K. & Watanabe, T.　1995 「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological

Groups　relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa」『Diatom』10

Bowen,H.J.M.　1983 『環境無機化学 - 元素の循環と生化学 - 浅見輝男・茅野充男訳』博友社

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M　1980 『土壌の化学 . 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳』 学会出版センター

Krammer, K.　1992 「PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa」『BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA』BAND26　J.CRAMER

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1986 「Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/1　Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1988 「Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae」『In:　Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/2　Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991a 「Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/3　Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991b 「Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/4　Gustav Fischer Verlag

Vos, P.C. & H. de Wolf　1993 「Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects」『Hydrobiologica』269/270

Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G.　1990 「The diatoms」『Biology & morphology of the genera』Cambridge University Press, Cambridge.

Lowe, R.L　1974　Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.　2000 「Iconographia Diatomologica 7」『 Diatom flora of Marine coast I』 A.R.G.Gantner Verlag K.G.

第Ⅶ章　ま　と　め

1　弥生時代

A　弥生土器

1）器種組成

今回の調査では弥生時代前期～中期前半、中期後半の土器が出土した。ここでは、存続時期が重なり合う猫山遺跡［古澤 2003a］との器種組成[1]の比較を通して、本遺跡出土土器の検討を行う。

猫山遺跡の出土土器は、地区ごとで時期差があるものの、おおむね弥生前期～中期前半の所産と考えられている。比較は報告資料に基づき、器種ごとに行った（第 15 表）。なお、比較については出土量の差、掲載土器抽出の方法・視点の違いは考慮していない。また、両遺跡とも報告資料を用いた操作であるため厳密な個体数を示していないことも明示しておく。

以下、器種ごとに両遺跡の様相を概観する。

甕形土器

器種組成の比率は両遺跡ともにほぼ同じ数値を示し、緒立 C4・D1・D2 類の小型甕が多い。緒立遺跡の報告では緒立 C 類から E 類へ、口縁部が変化することが指摘されており［渡邊 1998b］、後続の緒立 E 類も両遺跡で認められる。このほか、猫山遺跡では緒立 A 類や B 類が、山口遺跡では緒立 F1・H 類がある。

深鉢形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の 16%（24 点）に対し、本遺跡は 24%（34 点）と高い比率を示す。なお、甕と深鉢を合わせた煮炊具（煮沸具）の比率でも、猫山遺跡の 47.7%に対して、本遺跡は 53.5%とわずかに上回っている。この煮炊具の比率の高さは、本遺跡の特徴のひとつにあげられる。

地文の比較では、猫山遺跡は地文が条痕文の深鉢（緒立 A 類）が深鉢の 95.8％となり、圧倒的多数を占めるのに対し、本遺跡での比率は 38.2％と低い。一方、猫山遺跡では認められない地文が縄文の深鉢である緒立 B 類が 52.9%と A 類を上回っている。このように、本遺跡では緒立 A 類と B 類の両者が認められることが猫山遺跡との違いとしてあげられる。なお、猫山遺跡については昭和 43 年刊行の『弥生式土器集成』をみると、掲載された深鉢 2 点（PI.71 － 16・17）[2]も地文は条痕文である［上原・磯崎 1968］。ただし、平成 19 年度の試掘調査資料では、地文に縄文が施文され、口縁部に波状沈線文が施された深鉢 2 点が報告されている［古澤 2008］。しかし、これを加えて考えたとしても、緒立 B 類が本遺跡ほどに出土している状況には至らないであろう。

また、本遺跡の緒立 A 類には口縁部が明らかに内湾するもの（88）が認められる。口縁部が内湾する深鉢については、福島市孫六橋遺跡の出土遺物の検討から、福島県域では縄文晩期以来の伝統的な器形とされているものである［石川 2002］。

1）弥生時代前期から中期前半の土器の器種組成は、阿賀町下西ノ沢遺跡・人ヶ谷岩陰［阿部 2006a］、村上市二又遺跡［阿部 2006b］でも提示されている。

2）16 については、実測のやり直しにより資料の再提示がなされている。［古澤ほか 2003］。

器種	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
甕	42	48
深鉢	34	24
鉢	23	37
高杯台付鉢	6	4
壺	15	32
蓋	21	1
不明	1	5
合計	142	151

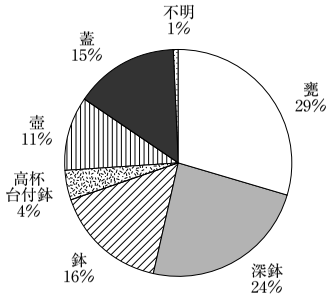
甕緒立分類	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
A	0	3
A1	0	2
A2	0	0
A3	0	1
B	0	3
C1	1	2
C2	1	2
C3	0	0
C4	5	6
D	2	3
D1	5	4
D2	11	19
E	2	1
F1	1	0
F2	0	0
G	1	1
H	2	0
I	0	1
その他	11	0
合計	42	48

深鉢緒立分類	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
A	1	0
A1	2	14
A2	7	6
A3	2	1
A4	1	2
B	2	0
B1	5	0
B2	9	0
B3	2	0
C	1	1
その他	2	0
合計	34	24

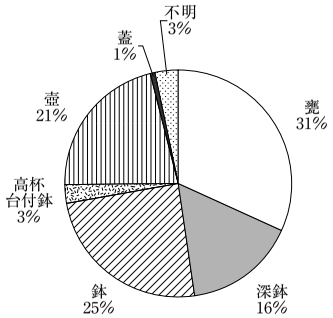
鉢緒立分類	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
A	1	0
A1	0	0
A2	1	4
A3	0	2
A4	0	4
A5	0	0
B	0	3
B1	0	3
B2	2	9
B3	0	0
C	3	6
D1	1	0
D2	2	0
D3	3	0
D4	0	0
E	1	2
E1	0	0
E2	3	2
E3	0	1
その他	6	1
合計	23	37

壺緒立分類	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
A1	0	0
A2	0	0
B1	0	1
B2	1	3
B3	0	0
C1	0	1
C2	0	1
C3	0	6
C4	0	0
C5	0	1
D	0	2
E	0	0
F	1	0
F1	0	2
F2	0	0
G	0	2
H1	0	2
H2	0	2
H3	0	2
H4	0	0
H5	0	0
H6	0	0
I	0	0
その他	13	7
合計	15	32

蓋山口分類	山口遺跡資料点数	猫山遺跡資料点数
蓋部 A1	2	1
蓋部 A2	1	0
蓋部 A3	1	0
蓋部 A4	1	0
蓋部 B1	1	0
蓋部 B2	1	0
蓋部 B3	1	0
蓋部 B4	1	0
蓋部 B5	1	0
つまみ部	1	0
つまみ部	4	0
つまみ部	1	0
つまみ部	1	0
つまみ部その他	2	0
つまみを持たない蓋	2	0
合計	21	1



山口遺跡



猫山遺跡

第 15 表　山口遺跡・猫山遺跡出土土器の器種組成表

鉢形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の 16%（37 点）に対し、本遺跡は 24%（23 点）と低い比率を示す。細片が多い器種であるが、猫山遺跡では緒立 A 類・B 類の比較的小型の鉢が多く認められるのに対し、本遺跡では大型の鉢である緒立 D 類が認められる。緒立遺跡では D 類は二次焼成に伴うススやコゲの痕跡が認められることから、煮炊きでの使用も推定される。本遺跡における煮炊具の比率の高さは先に触れたが、これに煮炊きに使用された可能性のある緒立鉢 D 類を加えると、その割合はさらに高くなる。

蓋形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の 0.7%（1 点）に対して、本遺跡では 15%（22 点）と極めて高い比率を示す。緒立遺跡や猫山遺跡では蓋の報告例は少なく、器種組成のなかでも捉えがたい一群といえる。一方、本遺跡の出土量からは積極的な使用の状況がうかがえる。なお、猫山遺跡では『弥生式土器集成』［上原・磯崎 1968］において「壺用蓋形土器」として、つまみ部を持つ口径 26.5cm の変形工字文が施される蓋（PI. 70 - 3 上）と、つまみ部を持たない口径 16.4cm の蓋（PI. 70 - 5 上）の 2 点が報告されている。しかし、これを加えて考えたとしても、蓋が本遺跡ほどに出土している状況には至らないであろう。

蓋の使用状況としては、「煮炊き」と「内容物や貯蔵物の保護」が考えられ、両者の判断要素として法量や、ススやコゲの付着の有無に着目した。器形から判断したものもあるが、山口遺跡の蓋の多くで炭化物の付着が認められたことから、その多くは煮炊きに用いられた可能性が高いと考えた。

壺形土器

器種組成の比率は本遺跡の 10.6%（15 点）に対し、猫山遺跡は 21.2%（32 点）と高い比率を示す。壺の割合が高くなる要因のひとつには、再葬墓（壺棺再葬墓）の存在があげられる。再葬墓の容骨器の器種組成は壺形土器が約 7 割と居住地での組成とは大差がある［石川 1996］とされており、猫山遺跡においても、特に調査区 2 区における壺の比率の高さから、墓域が存在する可能性が指摘されている［古澤 2003c］。このような視点からすると、本遺跡では土坑から再葬墓と関わる壺の出土例は認められず、器種組成における壺の割合も低いことから、再葬墓との関連性は低いといえる。ただし、ひとつ留意点もあり、34（図版 59・118）の内面には顕著な剥離痕（ハジケ）が、外面には著しい摩耗が認められる。再葬墓の容骨器には、小型土器では著しい煮沸痕、中・大型土器も口頸部欠損部の磨跡（再生）・穿孔（と結縛）や漆塗付による割れ目の補修・底部周縁部の摩滅痕などから日常容器の転用品が多いとの指摘がある［石川 1996］。胎内市分谷地遺跡（旧黒川村）の再葬墓から出土した壺（1 号 - 1、3 号 - 1、12 号 - 1）の内面には、ハジケ痕が報告されている［伊藤 2003］。また、新発田市村尻遺跡の再葬墓から出土した壺にも、ハジケやススの付着が報告されており［石川 1982］、資料の実見でも 34 と類似した剥離痕（ハジケ）を確認した。このようにハジケ痕と容骨器との相関は、周辺の遺跡においても強く認められるものである。ただし、壺に見られるそのような痕跡が、直接的に再葬墓に関わるものについてかは慎重な議論が必要である。

このように両遺跡の器種組成をみてみると、本遺跡は壺形土器の出土が少なく、再葬墓に関わる要素が希薄といえる。一方で日常生活に直接結びつくような器種組成の実態がうかがえた。

2）編年的位置付け

ここでは、先行研究による編年案との対比により本遺跡出土資料に編年的位置付けを与えてみたい。

緒立遺跡の編年案［渡邊 1998b］は 1 期と 2 期に大きく分けられており、さらにこれを a ～ c 期に 3

細分することにより計 6 期が設定されている。時期は 1a 期を大洞 A' 併行、1b 期を砂沢式併行、1c 期を青木畑式併行とし、2a 期と 2b 期の区分は明瞭でないとしつつ 2c 期までを、福島県の西麻生式から南御山 2 式直前までとしている。ここでは、本遺跡出土資料数の不足から各期の細分は行わず、大きく『1 期』を前期、『2 期』を中期前半として捉えた。なお、2 期は細分可能なものについては渡邊裕之氏の論考［渡邊 1999］に基づき、「中期 1」、「中期 2」に細分した。これらの先行研究を基に本遺跡の器種（以下、「山口甕 C 類」のように表記する）の組み合わせと編年観を示したものが第 18 図である。

前期

甕では筒形を呈する山口甕 C 類を除いたものが該当すると考えられる。66 の匹字文と横位の沈線羽状文の文様構図は、晩期終末期の鳥屋 2b 式の伝統と見られる古い要素であるが、器形がやや筒形に近くなることや胴部下位の平行沈線文は弥生時代前期の特徴を示すと考えた。67 の口縁部から胴部上位の文様の分化も古い要素とみられる。この両者は、本遺跡で最も古相を示す資料に位置付けられる。

口縁が短く外反する甕（山口甕 A3 類）やその口縁がなくなる甕（山口甕 B 類）は、前期の主要器種のひとつである。法量の差で小型と中型のものがある。無地文に文様帯が描かれる 68 や 25 は、地文上施文手法で変形工字文が描かれるもの（73）や波状文が施されるもの（75）と比べ、古い要素と考えられる。それらには、文様帯や内面の調整には丁寧なミガキで整えられ、色調もやや暗味を帯びる。

口縁部に波状沈線文が施される深鉢は前期の主要器種のひとつで、中期前半まで出土すると見られる。前節でも触れたが、口縁部が内湾する深鉢（88）は、福島県域との交流を考える上で重要な器種のひとつである。これまでの深鉢の分類は、地文の種類と口縁部外面に施される文様の属性によるものであったが、今後は器形による要素も加味して検討していかなくてはならない。また、深鉢のみの特徴で編年を考えることは難しく、有文の甕や鉢との組み合わせからの検討が必要である。

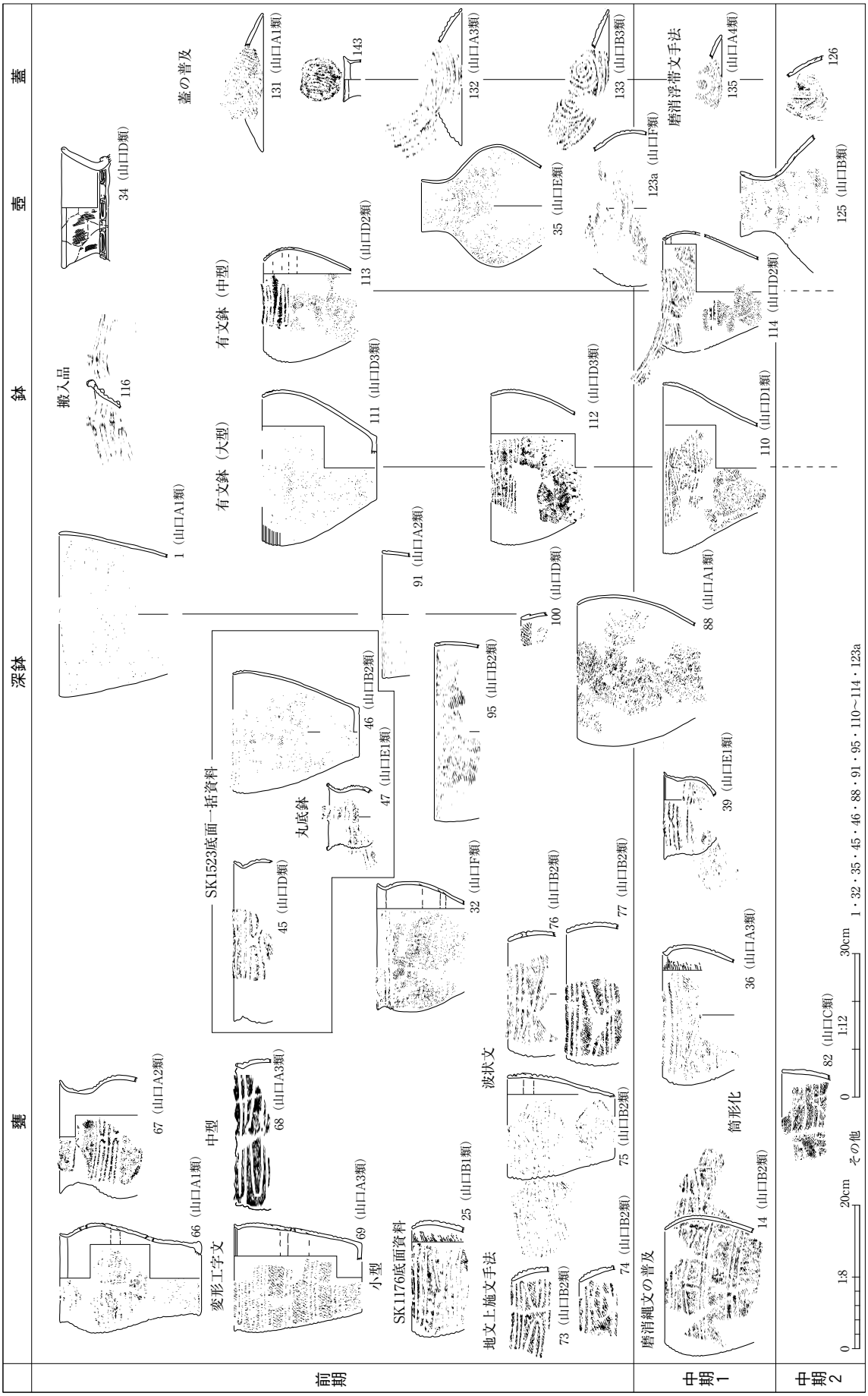
鉢を見てみると、搬入品の鉢（116）が認められる。変形工字文の重層化の特徴から前期の所産である。山口鉢 D 類は、その法量から大型の D1 類や D3 類、一回り小さい中型の D2 類がある。甕と同様に口縁部の文様帯の特徴から、無地文に匹字文や変形工字文が描かれるもの（111・113）がやや古く、縄文地に変形工字文が施されるもの（112）がやや新しいとされるが、両者ともに前期の内に収まるものである。

壺の資料は少ないが、頸部に隆帯が巡るもの（34）は前期の所産である。なお、35 や 123a の壺は中期前半まで新しくなる可能性を含むものである。

前期の主体となる資料を見ると、緒立遺跡で示された編年案に沿った細分の可能性がうかがえた。今回は資料数の不足から、細分を果たせなかったが、文様帯の手法や器形の変化及び器種組成の中での蓋の増加が細分の鍵になると考えられる。なお、緒立式については、砂沢式や生石 2 式の 2 時期区分から細分の可能性も指摘［佐藤 2008］されており、今後のさらなる資料の増加に期待したい。

中期

中期前半に位置付けられるものは、磨消縄文が主体となる一群で、甕では山口甕 B2 類（14）、鉢では山口鉢 D1 類（110）、山口鉢 D2 類（114）が相当するものと考えられる。磨消縄文は弥生時代中期において東日本で広く用いられている。福島県域では中期初頭の今和泉式から中頃の南御山 2 式まで用いられ、東北地方では福島県域でもっとも早く普及し、その後各地で普及したと考えられている［石川 2005d］。山口遺跡の資料でも、前期では変形工字文が主要な文様であるが、中期に入ると変形工字文の継承が弱くなり、三角形や枠状（工字状）モチーフの磨消縄文が多く認められるようになる。39 の丸底鉢の底部にも磨消縄文が描かれ、さらに、縦区画帯や無文帯から棘状部が付加されるのも中期前葉の特徴のひとつであ



第18図　山口遺跡における弥生土器の組み合わせとその編年観

る。また、猫山遺跡では認められない磨消浮帯文手法を伴う一群（135 ほか）がある。磨消浮帯文手法が用いられる資料は、弥生時代中期前半の福島市孫六橋遺跡で定量確認されており［石川 2003］、福島県域との関係がうかがわれる。

中期２の資料は少ない。筒形の山口甕Ｃ類（82）は山口甕Ｂ類が変化したものと考えられ、中期１～２の主要器種である。磨消縄文で枠状（工字状）が施されるが、細い沈線や文様のやや硬化気味の特徴から中期２と考えた。磨消縄文による錨形文も１点（126）認められる。錨形文を伴う土器は、上記の孫六橋遺跡でも出土しているが、宮城県や岩手県域などで多く認められるモチーフで、中期前半から中頃の高田Ｂ式から中在家南式及び田舎館式の併行期に多いとされている［石川 2002］。

以上のように、猫山遺跡との比較により器種組成の差異について、緒立遺跡との比較により編年的位置付けについての検討を行った。結果、出土の主体は弥生時代前期の緒立式であること、中期前半（中期１～２）のものは、出土量は少ないながらも磨消縄文や磨消浮帯文手法などが認められたことから、福島県域との関係がうかがえた。なお、これに後続する時期では中期後半の宇津ノ台系（144）が１個体のみではあるが出土している。このことから、今回の調査範囲内ではその痕跡は希薄であるが、遺跡周辺では断続的な土地利用が継続されたと考えられる。

今回の編年的位置付けを与える作業を通しては、東北地方南部との文様や器種の類似性の高さを再認識した。本遺跡出土土器は、猫山遺跡や緒立遺跡などの県内の遺跡との比較だけでなく、東北地方南部の弥生土器編年を考える上でも多くの示唆を与える一群といえる。

今後の課題としては、弥生時代前期の資料が増加に呼応した緒立式の再評価の必要性があげられる。これにより緒立式の細分が果たされれば、これに後続する中期前葉の土器のさらなる理解につながるものと考えられる。

Ｂ　石器・玉について

本遺跡から出土した石器は、剥片石器では石鏃、石錐、不定形石器、両極剥離痕のある石器が、礫石器では磨製石斧、敲磨石類、石皿・砥石・台石類が出土しており、加えて異形石器としたものもある。このほか、多くの石核、剥片類に加えて原石と考えられる礫も出土しており、剥片石器製作も活発に行われていたと考えられる。

剥片石器は器種組成（異形石器、石核、剥片類を除く、以下同じ）の 66％を占めている。なかでも石鏃の出土が多く、失敗品を含む総点数は 140 点となり、全体の 26.7％となる。この石器組成における石鏃の比率は猫山遺跡とも近似（29.5％）するものである。一方、石鏃における両遺跡の相違点としては、本遺跡でのアメリカ式石鏃の欠落があげられる。４点のアメリカ式石鏃が出土した西郷遺跡［土橋ほか 2009］では、その出現は中期中葉～後葉[3] の可能性が指摘されている。これにより、本遺跡の石器組成を弥生時代前半でも、中期中葉以前に置くことも可能であろう。出土量の少ない器種のため出土の有無により断定まで至るものではないが、本遺跡出土の遺物群の時間幅や遺跡の特性を考える上では大きな示唆を与えるものと考える。

3）西郷遺跡では縄文時代晩期～弥生時代中期後半の遺物が出土している。アメリカ式石鏃を出土するⅧ層は弥生時代前期から中期の時間幅を持つが、主体は中期中葉～後葉にあるとされている。

また、このほかの石器についても、剥片石器を主体とする石器組成などに猫山遺跡との類似性を強く感じさせるものであった。

石材選択においても、猫山遺跡と同様に流紋岩の多用が認められた。流紋岩の多用は、ひいては阿賀野市域の同時代の弥生時代前半の遺跡において普遍的に認められる。その状況は流紋岩への固執ともとれる様相を呈しており、当地域の特徴としてあげられている［石川 2005a］。本遺跡もその例に漏れず、周辺遺跡との強い関わりを想起させる。なお、阿賀野市域の遺跡で用いられる流紋岩の採取地点については近隣の阿賀野川流域が想定されている［酒井 2003c］。この在地を向いた石材選択は黒曜石の産地選択にも現れており、産地分析を行った 5 点中 4 点が新発田市板山産であることにも関連があると考えられる。

玉は縄文時代晩期の遺跡に形態が類似するものが散見され、弥生時代の玉のなかでもいわゆる「縄文系」［木下 1996］に大別されるものである。素材はヒスイ、蛇紋岩といった緑色を呈するものが用いられているが、軟質の緑色凝灰岩を用いるものもある。しかし、両者では材質の硬軟に大きな違いがある上、形態の類似性も弱く、有する性格の根本的な違いも想定される。また、ヒスイ・蛇紋岩（ロディン岩）は共に原石が出土しているが、未製品を含む玉製作をうかがわせる遺物や剥片類は確認できなかった。

以上のように、本遺跡の石器群は大枠では縄文時代以来の石器組成を存続させる状況が認められた。しかし一方で、石匙といった縄文時代に普遍的な器種の欠落、不定形石器における刃部の作り出しの省略及び粗雑化、形態変化の可能性を含む定形的な石皿の欠落といった変化も少なからず認められる。これは、西郷遺跡で指摘された弥生時代中期に至り起こる「縄文時代以来の石器組成や定型石器の製作工程が崩れていく」［土橋ほか 2009］という大きな変革の前段とも捉えられる状況と評価できるだろう。

C　総括と周辺遺跡との関連について

本遺跡は旧小里川の自然堤防状の微高地と後背地に立地しており、河川に近接した場所で営まれた遺跡と考えられる。土器は弥生時代前期から中期後半のものが出土しているが、主体は前期～中期前半にある。遺構構築時期も同様に前期～中期前半に位置付けられるものが大半を占めると考えられる。

遺構は、掘立柱建物、土坑、ピット、埋設土器がある。

掘立柱建物の亀甲形に柱を配置する平面形態は、古くは縄文時代後期からあり、晩期では胎内市野地遺跡［渡邊ほか 2009］、新発田市青田遺跡［荒川ほか 2004］などにその系譜を求めることができる。本遺跡でみつかった建物は、青田遺跡の形態分類では「B3」にあたり、復元では「落棟付平屋建物」が想定されている［宮本 2002・2003］。弥生時代のものでは長岡市尾立遺跡のほか、猫山遺跡の平成 13 年度の調査でも 3 棟が確認されており、すでにその報文中で「縄文時代終末期の文化を色濃く継承しているもの」［古澤 2003b］との指摘がなされている。また、その立地でも河川沿いの微高地の等高線と平行に長軸を置いて構築される点に青田遺跡との共通性を見出すことができる。

掘立柱建物の周囲に目を移すと、斜面部には遺構は構築されず、遺物が廃棄される捨場として利用されている。この捨場の遺物は、建物に近接して多く出土する傾向を示し、建物との強い関連がうかがわれる。

土坑では、袋状土坑を 1 基、掘立柱建物から北東に約 7m 離れた地点で検出した。ほかの土坑と異なり単独で配置されている。また、一部の土坑が帯状に 10 基並んで配置される状況が認められた。これらの土坑については掘立柱建物に近接して集中的に配置される状況から猫山遺跡で確認された土坑墓群との類似性が想定された。そのため、本遺跡の調査段階においても土坑墓を意識した調査を行った。骨片の

確認や垂玉の出土が認められたものの、調査時にはその可能性を積極的に示す事象は認められなかった。加えて、土坑の覆土についても土壌理化学分析を行ったが、遺体埋置の可能性は低いとの結果（第Ⅵ章３）であった。また、骨片も土坑以外のピットなどでも確認されるものがあり、包含土層中に普遍的に存在するものとも捉えられる。

このように、これらの土坑群が墓である確証を得ることはできなかった。しかし、自然科学分析では墓である可能性は低いとされたものの、それでも同形の土坑が複数並ぶ景観に変わりは無い。さらに、完形の石鏃の出土率の高さなどの特筆すべき特徴もあり、これらの土坑群の性格についてはさらなる議論の余地があると考える。

以上のような状況から、本遺跡は弥生時代前期～中期前半の集落の一端と考えられる。また、遺構の検出総数が少なく、遺構間の重複部分も少ないことから、存続期間は比較的短期間の可能性が指摘できる。

周辺の遺跡に目を向けると本遺跡の北約 1.6km に位置する猫山遺跡との類似性が強く、当地の弥生時代前半の典型的な様相を示していると評価できる。その内実は、縄文時代からの伝統を強く残し、その系譜をうかがわせる事象を多く確認した一方で、いわゆる弥生時代を特徴付ける稲作に関わる遺物や管玉等の西日本から波及したとされる文化要素については確認することができなかった。

また、当地域の弥生時代前半を考える上で、再葬墓との関連を欠くことはできない。本遺跡の位置する阿賀野市は再葬墓遺跡が集中し、3 遺跡での存在が知られている。一方、弥生時代前半の集落については調査事例が少ない。そのため、再葬墓研究における検討対象が必然的に再葬墓自体に限定されてきたことが石川氏によって指摘されている［石川 2005a］。さらに再葬墓を営んだ社会の復元のためには、わずかながらも同時代の生活痕跡を残す「遺跡を拾い上げる作業」の重要性をあげ、再葬墓造営期の遺跡を「再葬墓遺跡」「生活遺跡」「剥片剥離作業遺跡」の 3 つに類型化した。本遺跡は「土器組成とともに、石器類では石鏃や石錐といった狩猟具・加工具が明瞭である点や石核や剥片類が明瞭である」［石川 2005a］ことから生活遺跡に当てはまるものと考えられる。このように本遺跡はこれまで確認事例が少なかった弥生時代前半の集落を調査したという点に加え、再葬墓を造営した集団の「生活遺跡」を調査し得たということでも、その意義は大きいと考える。

2　古　　代

古代において調査区の西半は第 2 面として調査した旧小里川へと下る斜面部が広がっていた。この斜面部は古代の遺物を残すものの、遺構は 1 基の土坑以外は小規模なピットが散見されるのみで、積極的な土地利用はされなかったといえるだろう。必然的に遺跡の重心は斜面部から離れ、これより東に広がる高位面にあると考えられる。しかし、この高位面も今回の調査範囲の大部分が近年の耕地整理により削平されており、いわゆる生活面は捉え難い範囲が大部分であった。

ピットを除く遺構は第 1 面の東側では SB1282・1324 の 2 棟の掘立柱建物が確認されたが、時期は不明で古代と断定できるものではない。明確に古代に限定できるものとしては、土坑 8 基のほかでは何らかの焼成遺構の可能性がある SX1178 や不整形の掘形を持つ SX1624 がある。しかし、明確に古代とできる建物は確認することができず、その様相は明確にし難い。遺構の数そのものが少ないことについては、近代の耕地整理時の消失という要因も考慮されなければならない。しかし、これを差し引いたとして

も遺跡内における主要な居住域を外れている可能性が指摘されよう。これは試掘時に検出された古代の遺物の出土のピークが、今回の調査範囲のさらに東側にあること［加藤 2008］からも類推されるものである。

このように、今回の調査範囲における古代の様相はその全体像は明らかにし難いものの、斜面とこれに隣接した集落の外縁部である可能性が高いと考える。その実態の把握については、中世の溝から出土した石銙（巡方）の在り方と共に、今後の調査の東進により大きく集落という枠組みのなかでなされていくものと考える。

3 中　　世

中世に至り、古代に存在した調査区西半の斜面（第２面）は洪水によると考えられる堆積層（Ⅲｂ層）により埋没し、比較的平坦な地形に変わったと考えられる。この平坦地を活用することで、中世における活動領域は第１面全域へと拡大する。しかし、その痕跡は古代同様、近年の耕地整理による削平を受け、いわゆる生活面としては捉え難い範囲が大部分であった。

出土土器は貿易陶磁器では 13 世紀前後～前半のものが出土しているが、これと共伴して出土する珠洲焼の多くが 13 世紀後半から 14 世紀前半（珠洲Ⅲ～Ⅳ期）のものであることから、本遺跡の主体時期もここに置くことができると考える。しかし唯一、SD43 については青磁椀とともにⅡ期と考えられる珠洲焼の擂鉢が出土しており、周囲の遺構よりもわずかに古く、13 世紀前半の遺構となる。なお、珠洲焼については遺構外からⅠ期のもの（58）が出土していることから、調査区内を含む本調査区周辺にも 12 世紀後半にまで遡る生活痕跡を残している可能性がある。

遺構は第１面に広く展開するピットと点在する井戸や溝の状況から、これらが規則性を持って配置された居住域であったと考えられる。

掘立柱建物は３棟抽出した。しかし、広範囲に及ぶ削平の状況を考えると、失われた柱穴も多数あることは想像に難くない。そのため今回の報告における掘立柱建物は、その存在を明示することに主眼があり、提示したプランが当時の建物を正確に復元し得るという確証を欠いていることを明示しておく。そのため、報告したもの以外に掘立柱建物や杭列など多数の遺構が存在したことは確実といえる。そのため、本調査区の中世の様相を明確にはし難いが、出土遺物の時間幅に加え、近接して構築される井戸（SE4 と SE995、SE1173 と SE1175）が作り替えによる結果と仮定すれば、一定以上の期間に渡って営まれた集落の居住域であったとしておくことには無理は無いように思われる。

溝は、東西方向に構築される一群と北東－南西方向に構築される一群の２つに大別される。また、溝からは遺物の大半が出土しており、溝に関連した遺物の遺構間接合も SE4 と SD583 による珠洲焼擂鉢（1）、SD43 と SD795 による青磁椀（34）、同じく SD43 と SX56 による中世土師器（35）の３例を確認できた。このうち SD43 は長方形に巡る溝であるが、接合関係が認められた SX56 とは連続性のある位置関係にあり、遺構間接合の事実はその関連性をより強く示唆するものといえる。

このほかの遺構で特筆すべきものとしては焼骨片を伴う遺構の存在があげられる。6D・7E グリッドで確認した SX144・153・154 の３基からは、焼骨片と共に多量の炭化物も出土している。掘形の平面形は楕円形で土坑状のもの（SX144・153）のと溝状の張り出し部が突出するもの（SX154）がある。いずれも検出面からの深さは５～ 6cm と浅いが、これは遺構の検出面が現在の耕作土の直下であったことから削平により失われた結果と考えられる。ここでは、構築当時の姿を保っていないことに加え、地山への明

確な焼土の形成が認められないため断定にまでは至らなかったものの、これらには火葬土坑の可能性が想起される。県内では中世の火葬土坑の検出例は多くは無いが、特に張り出し部を有するものについては、東国に分布の中心があることが指摘されているものである［梁瀬 2009］。しかし、今回確認した 3 基についてはいずれも時期を明確にする遺物を出土していない。このことから、構築時期は近世以降である可能性も否定できず、時期の決定には慎重にならなければならない。そのため今回検出した 3 基については、中世の火葬土坑である可能性を指摘するに留め、県内における類例の増加を待つものとしたい。

このように、今回の調査範囲における中世の様相は、掘立柱建物、井戸、溝が配置される居住域であったと考えられる。また、その一部では耕作痕の可能性のある畝間状遺構や水田としての機能も想定［髙橋ほか 2006］されている凹地遺構及び炭窯も配置される。これらからは生産域としての性格を読み取ることもでき、居住域に隣接して多用な生業活動が営まれた場所とも位置付けられる。さらには、これらの遺構群との並存については明確にできないが、火葬土坑の可能性を持つ遺構が存在しており、これが中世のものであるならば、集落の性格、土地利用の在り方やその変遷過程についてもさらなる幅を与えるものとなろう。さらなる検討は古代同様、今後の調査の継続とそれによる成果の蓄積を受け、再度行うものとしたい。

要　　約

1　山口遺跡は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪 3079 番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川右岸の沖積地に立地し、標高は約６ｍを測る。

2　調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い、平成20年４月15日から12月１日まで実施した。調査面積は 8,850m^2 である。

3　遺跡の西側には旧小里川が北流している。本調査区は旧小里川の沖積作用によって形成された斜面及び微高地、後背地に立地していると考えられる。この沖積作用によって地形は各時代ごとに異なり、遺跡の形成に大きく影響している。なお、自然科学分析の結果から、古代においてはタケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が生育した環境が推定されている。

4　第１面では調査区全域にて、古代及び中世に属する掘立柱建物３棟、井戸 15 基、土坑 48 基、竪穴状遺構１基、溝 45 条、炭窯１基、焼土遺構２基、畝間状遺構１群 16 条、凹地遺構１群 14 基、性格不明遺構 22 基、ピット 1,167 基を検出した。

5　第２面では調査区中央部から西側の斜面部にて、古代に属する土坑１基、ピット 153 基を検出した。

6　第３面では調査区中央部にて、弥生時代に属する掘立柱建物１棟、土坑 19 基、建物を構成するもの以外のピット 15 基、埋設土器１基を検出し、県内でも調査例の少ない弥生時代前期～中期前半の集落の調査となった。

7　古代・中世の遺物は、土器・陶磁器を主体に石器、石製品（古代の石銙（巡方）１点を含む）、鉄製品、銅製品、鉄生産関連遺物、木製品などが出土した。

8　中世の土器は貿易陶磁器である青磁・白磁、国内産陶磁器である珠洲焼、瀬戸・美濃焼、これに在地産の中世土師器を加えて構成されている。出土量の大半を占める珠洲焼はⅠ期からⅤ期と考えられるものが出土しているが、主体はⅢ・Ⅳ期（13 世紀第３四半期～ 14 世紀第３四半期）にある。青磁は龍泉窯系の椀に限られ、時期は 13 世紀前後～前半となる。このほかの土器の年代観を合わせて考えても中世遺物の主体時期は、13 世紀から 14 世紀に置くことができる。

9　古代の土器は須恵器と土師器が出土した。須恵器はⅣ～Ⅴ期（８世紀後葉～９世紀中葉）のものが出土し、産地では阿賀北産と小泊産の混在と、これ以外の可能性を残すものがわずかに混じる様相が読み取れた。

10　弥生時代の遺物は、弥生土器・土製品・石器・玉類・搬入礫などが出土した。

11　弥生土器は弥生時代前期～中期前半のものが主体となって出土し、これ以外ではわずかに中期後半のものが出土する。

12　石器は、剥片類を除き 680 点出土した。剥片石器は石鏃、石錐、不定形石器、両極剥離痕のある石器が出土した。礫石器は磨製石斧、敲磨石類、石皿・砥石・台石類が出土した。その器種組成・石材組成については、本遺跡の北 1.6km に位置する猫山遺跡との強い類似性が指摘できる。また、石器製作も石核、剥片類、原石の出土から活発に行われていたと考えられる。

13　弥生時代の様相については、縄文時代からの伝統を強く残し、その系譜をうかがわせる事象を多く確認した一方で、いわゆる弥生時代を特徴付ける稲作に関わる遺物や管玉等の西日本から波及したとされる文化要素については確認することができなかった。

引用・参考文献

相沢　央　2004　「古代 第四章 蝦夷「征討」と発久遺跡」『笹神村史』通史編　新潟県笹神村

阿部朝衛　2000　「先史時代人の失敗と練習」『考古学雑誌』第 86 巻第 1 号　日本考古学会

阿部泰之　2006a　「下西ノ沢遺跡・人ヶ谷岩陰」『東蒲原郡史』資料編 1 原始　東蒲原郡史編さん委員会

阿部泰之　2006b　「新潟県朝日村二又遺跡出土弥生土器の再検討（2）」『三面川流域の考古学』第 5 号　奥三面を考える会

荒川隆史　1999　「第 2 章 縄文時代 第 2 節 縄文土器 第 6 項 晩期 2 編年と地域性 後葉」『新潟県の考古学』 新潟県考古学協会編　高志書院

荒川隆史ほか　2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 153 集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史　2007　「阿賀北・大坪遺跡－中世初期の居館跡－」『御館の時代―十二世紀の越後・会津・奥羽―』 柳原敏昭・飯村均編　古志書院

荒木繁雄　1970　「別篇 1. 水原郷の地形・地質について」『新潟県文化財調査年報第十　水原郷』 新潟県教育委員会

アラタンホヤガ　2008　「新潟県阿賀野市大曲遺跡出土の土器について」『三面川流域の考古学』第 6 号　奥三面を考える会

石川日出志　1982　「Ⅴ 考察 5. 村尻遺跡における弥生時代の墓址群」『村尻遺跡Ⅰ』 新潟県新発田市教育委員会

石川日出志　1989　「（速報）新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓群の発掘調査」『北越考古学』第 2 号　北越考古学研究会

石川日出志　1992　「Ⅴ まとめ 3. まとめ」『六野瀬遺跡 1990 年調査報告書 立川ブラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書』 新潟県安田町教育委員会

石川日出志　1996　「9 墓地 10. 再葬墓」『弥生文化の研究』第 8 巻　祭と墓と装い　金関恕・佐原真編　雄山閣

石川日出志　1999　「第Ⅲ章 弥生文化の東へ西へ－この世とあの世－　第 4 節 あの世の東と西　4 東日本弥生墓制の特質」『新弥生紀行－北の森から南の海へ－』 朝日新聞社

石川日出志　2000　「南御山 2 式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第 11 号　北越考古学研究会

石川日出志　2002　「福島市孫六遺跡出土弥生土器の再検討」『福島考古』第 44 号　福島県考古学会

石川日出志　2003　「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第 1 巻　小学館

石川日出志　2005a　「弥生時代再葬墓に近接する生活遺跡の試掘調査－新潟県阿賀野市山ノ下遺跡－」『考古学集刊』特別号　明治大学文学部考古学研究室

石川日出志　2005b　「第 2 部 資料編－再実測・拓本作成資料集成　1. 資料編実測図作成上の留意点」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年（課題番号 14310189）平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書』 明治大学文学部考古学研究室

石川日出志　2005c　「縄文晩期の彫刻手法から弥生土器の磨消縄文へ」『地域と文化の研究 1』 明治大学文学部考古学研究室

伊東　崇　2003　「第Ⅴ章弥生時代（Ⅰ～Ⅴ区） 1. Ⅱ区の遺構と遺物」『分谷地 A 遺跡Ⅰ』上段（Ⅰ～Ⅳ区）編弥生時代再葬墓　新潟県黒川村教育委員会

上原甲子郎　1959　「新潟県猫山遺跡調査の概報」『日本考古学協会第 24 回総会　研究発表要旨』 日本考古学協会

上原甲子郎・磯崎正彦　1968　「北陸地方Ⅱ」『弥生土器集成本編 2』 小林行雄・杉原荘介編　東京堂出版発行

荻野正博　1986　「第 6 章荘園と武士　第 2 節荘園と国衙領」『新潟県史』通史編 1 原始・古代　新潟県

小田由美子　1999　「第 5 章中世・近世　第 2 項五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会　高志書院

小田由美子　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 99 集 堀越館跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第４章古代 第２節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会　高志書院

春日真実　2004　「資料編 第Ⅱ章沼垂郡（34）五輪敷沢窯跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

春日真実　2006　「第二編歴史考古古代篇 第３章古代越後の集団と地域」『日本海域歴史体系』第二巻古代篇Ⅱ 熊田亮介・坂井秀弥編　青文堂出版株式会社

加藤　学　2008　「Ⅱ 発掘調査受託事業の概要 ４試掘・確認調査 阿賀野バイパス 17 工区試掘調査」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 19 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

川上貞雄　1991　『笹神村文化財調査報告８ 発久遺跡』 新潟県笹神村教育委員会

川上貞雄　1999　『笹神村文化財調査報告９ 前田遺跡・壱本杉遺跡』 新潟県笹神村教育委員会

北野博司　1994　「総論」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会

京ヶ瀬村　1969　『村誌』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会

木下尚子　1996　「11 装身具 3. 垂飾」『弥生文化の研究』第８巻　祭と墓と装い　金関恕・佐原真編　雄山閣

轡田克史　2004　「古代 第三章 笹神の律令制」『笹神村史』通史編　新潟県笹神村

小林青樹　2008　「第Ⅱ部 様式各節 〈晩期・続縄文〉浮線網状文系土器」『小林達雄先生古希記念企画　総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会　株式会社アム・プロモーション

小林　弘　2004　「（27）清見寺Ａ窯跡、（33）狼沢２号窯跡 資料編 第Ⅱ章 沼垂郡 １生産遺跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

酒井亜紀　2003a　「第３編 猫山遺跡 第３章 遺物 ２石器 Ｃ分類と分析 ｂ石鏃失敗品」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会

酒井亜紀　2003b　「第３編 猫山遺跡　第５章まとめ　Ｃ石器組成と出土分布状況 」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会

酒井亜紀　2003c　「第３編 猫山遺跡 第５章まとめ Ｄ石材について 」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会

佐藤祐輔　2008　「東北地方南部における砂沢式並行期の土器について」『第６回 弥生時代土器における砂沢式の諸問題－資料集－』 海峡土器編年研究会

佐藤友子ほか　2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 203 集 庚塚遺跡・狐塚遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

品田高志　1997　「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸　―考古学が語る北陸―』 北陸中世土器研究会　桂書房

杉原荘介　1968　「新潟県・六野瀬遺跡の調査」『考古学集刊』第四巻 第一号　東京考古学会

須藤　隆　1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第 23 巻 第２号 考古学研究会

髙橋保雄　1996　「水久保遺跡 第Ⅳ章遺跡 3. 遺物 C. 土器転用品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 79 集　水久保遺跡・宮平遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

髙橋保雄ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 172 集　鴨深甲遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

田中耕作　1991　「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊について－村尻遺跡発掘出土遺物の紹介 その３－」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会

田中耕作　1999　「新発田市村尻遺跡出土の焼粘土塊（続）」『北越考古学』第 10 号　北越考古学研究会

田村　裕　2004　「中世 第三章 南北朝・室町前期の白河荘」『笹神村史』通史編　新潟県笹神村

鶴巻康志　1992　「Ｖまとめ 2. 六野瀬遺跡と赤坂窯」『新潟県安田町文化財調査報告 12　六野瀬遺跡 1990 年調査報告書』 新潟県安田町教育委員会

鶴巻康志　2001　「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第 12 号　北越考古学研究会

鶴巻康志　2004　「土師器からみた中世の小地域圏－新潟県北部阿賀北地方を中心に－」『中世土器の基礎研究ＸＶＩＩ』 日本中世土器研究会

土橋由理子ほか　2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 200 集　西郷遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
中川成夫・倉田芳郎　1962　『新潟県北蒲原郡における二窯址の調査』　立教大学文学部史学研究室
中川成夫・川上貞夫・土井義夫　1973　『狼沢窯址群の調査』笹神村文化財調査報告 4　新潟県笹神村教育委員会
中野豈任　1988　「三　五頭山信仰と中世鉱業」『忘れられた霊場－中世心性史の試み－』　平凡社選書 123
新潟古代土器研究会　2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』　新潟古代土器研究会
樋口真己　2004　「中世 第一章 白川荘の成立と城氏の展開」『笹神村史』通史編　新潟県笹神村
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』　高志書院
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第 3 号　新潟考古学談話会
古澤妥史　2003a　「第 3 編 猫山遺跡 第 3 章 遺物 1 土器」『京ヶ瀬村埋蔵文化財は靴調査報告書第 2 集　大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』　新潟県京ヶ瀬村教育委員会
古澤妥史　2003b　「第 3 編 猫山遺跡 第 5 章 まとめ 1 遺構」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集　大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』　新潟県京ヶ瀬村教育委員会
古澤妥史　2003c　「第 3 編 猫山遺跡 第 5 章 まとめ 2 遺物 A 土器について」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』　新潟県京ヶ瀬村教育委員会
古澤妥史ほか 2003　『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集　大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』　新潟県京ヶ瀬村教育委員会
古澤妥史　2008　「Ⅱ. 実施事業 2. 埋蔵文化財 B. 各種調査の状況（2）試掘・確認調査 遺跡保存・整備を視野に入れた猫山遺跡範囲内容確認調査」『阿賀野市 文化財年報 3　平成 19 年度（2007.4.1 ～ 2008.3.31）』　新潟県阿賀野市教育委員会　生涯学習課文化行政係
松永篤知　2008　「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第 92 巻 第 2 号　日本考古学会
宮本長二郎　2002　「青田遺跡の住居と集落」『「よみがえる青田遺跡」資料集　川辺の縄文集落』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
宮本長二郎　2003　「第Ⅶ章まとめ 1 青田遺跡の住居と集落」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 青田遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
望月精司　2006　「第二編歴史考古古代篇 第 5 章日本海地域の古代土器生産」『日本海域歴史体系』第二巻古代篇Ⅱ　熊田亮介・坂井秀弥編　青文堂出版株式会社
八木勝枝　2002　「第Ⅴ章 遺物　4 土製品 C 焼成粘土塊」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ　元屋敷遺跡 上段Ⅱ（上段）（本文編）』朝日村文化財報告書 第 22 集　新潟県朝日村教育委員会・新潟県
梁瀬裕一　2009　「房総の中世墓」『日本の中世墓』　高志書院
山田秀雄　1986　「第 5 章 律令制下の越後・佐渡国　第 2 節 国郡制の成立・整備」『新潟県史』通史編 1 原始・古代　新潟県
山本信夫　2000　『太宰府条坊跡ⅩⅤ　―陶磁器分類編―』　太宰府市の文化財 第 49 集　太宰府市教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
渡邊朋和　1998a　「第二章原始･古代 ―緒立遺跡―　第 3 節出土遺物　三、緒立遺跡 B 地区出土土器」『黒埼町史』資料編一 原始・古代・中世　新潟県黒埼町
渡邊朋和　1998b　「第二章原始･古代 ―緒立遺跡― 第 3 節出土遺物　五、小結」『黒埼町史』資料編一 原始･古代･中世　新潟県黒埼町
渡邊裕之　1999　「第 3 章 弥生時代・縄文時代 第 2 節 土器 第 1 項 弥生前期・中期前葉」『新潟県の考古学』　新潟県考古学協会編　高志書院
渡邊裕之ほか 2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集 野地遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

掘立柱建物 (SB) 観察表

( ) 推定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	間数（桁行×梁行）	桁行長（m）	桁行柱間長（m）	梁行長（m）	梁間柱間長（m）	方位	面積（㎡）	備考
SB1282	28	29	12E・F	2 × 1	4.16 ～ 4.37	1.90 ～ 2.26	2.49 ～ 2.59	－	N-7° -W	10.83	P1276 ～ 1278·1283·1629·1630 により構成される。
SB1324	35	36	14・15G	2 × 2	2.63 ～ 3.01	1.31 ～ 1.64	2.88 ～ 2.97	1.36 ～ 1.52	N-1° -W	8.25	P1316 ～ 1323 により構成される。
SB1500	8	9	6E・F	2 × 1	2.70 ～ 2.79	1.27 ～ 1.48	1.28 ～ 1.47	－	N-60° -W	3.75	P239·241·1218·1455·1456·1460 により構成される。

井戸（SE）観察表

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。( ) 推定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備考
SE4	14	15	7D10・15、8D6・11	－	円形	台形状	レンズ状	193	172	104	珠洲焼（SD583 出土片と接合）、青磁、中世土師器、和釘、砥石、種実出土。
SE513	18	19	10D7・8・12・13	－	円形	U 字状	レンズ状	173	159	211	断面形 V 字状に近い。中世土師器、種実出土。
SE722	16	17	8F18・19	－	円形	箱状	レンズ状	92	78	95	中世土師器出土。
SE799	21・23	23	9F24・25、9G4・5・9	SE799 ＜ P956	円形	袋状	レンズ状	292	246	132	珠洲焼、瀬戸·美濃焼、青磁、中世土師器、和釘、種実出土。
SE857	21	23	9F2・3	SD140 ＜ SE857	円形	U 字状	レンズ状	153	141	183	8 層上面に薄い炭化物層が堆積。
SE995	10	11	7D9・14・15	≠ P1005	円形	台形状	レンズ状	254	234	160	6 層炭化物多く含む。珠洲焼、中世土師器出土。
SE1052	32	33	14D23	－	円形	U 字状	水平レンズ	122	111	193	鉄滓出土。
SE1173	30	31	14G9・10	SD1201 ＜ SE1173	円形	U 字状	レンズ状	122	105	188	珠洲焼、種実出土。
SE1175	28・29	29	14F21・14G1	SD1031 ＜ SE1175、≠ SD1259	円形	箱状	レンズ状	101	96	85	珠洲焼、刀子、鉄滓出土。
SE1211	28	29	13E23・24、13F3・4	SD1031・1032 ＜ SE1211	円形	台形状	レンズ状	292	262	118	珠洲焼、瀬戸・美濃焼、中世土師器、砥石、銅製品、羽口、種実出土。
SE1220	30	31	13G12・13・17・18	－	楕円形	台形状	レンズ状	97	75	117	底面に段あり。珠洲焼、鉄滓出土。
SE1230	30・31	31	12G25・13G21	SD1207・SX1231 ＜ SE1230	円形	箱状	水平レンズ	183	162	96	珠洲焼、青磁、中世土師器、砥石、鉄製品、焼成粘土塊出土。
SE1260	28	29	12F12・17	－	円形	漏斗状	レンズ状	97	87	93	断面形は緩やかな漏斗状に開く。
SE1538	24	25	11F9	P1586 ＜ SE1538	円形	台形状	レンズ状	128	116	82	
SE1554	34・36	36	15D7・12	SE1554 ＜ SX1542	円形	U 字状	レンズ状	108	103	216	珠洲焼、砥石、木製品出土。

土坑（SK）観察表（1）

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。( ) 推定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SK7	6	5	5D2・7	－	楕円形	台形状	水平	63	47	28	N-55° -E	珠洲焼出土。
SK15	6	5	4C24	－	（楕円形）	台形状	レンズ状	（118）	70	20	N-76° -W	
SK20	6	5	5D12・13	SD27 ＜ SK20 ＜ P6	楕円形	箱状	レンズ状	112	55	54	N-74° -E	和釘出土。
SK48	2	3	5A24・25、5B4・5	－	（楕円形）	台形状	レンズ状	160	76	32	N-12° -E	
SK49	2	3	5C2	P101 ＜ SK49	円形	台形状	単層	102	87	14	－	
SK52	14	15	8C16・17・21・22	SD50 ＜ SK52	（楕円形）	半円状	レンズ状	161	（110）	45	N-57° -E	
SK53	2	3	5B10・15、6B6・11	－	方形	台形状	水平	138	128	49	N-21° -W	
SK67	2	3	6C3	－	不明	台形状	レンズ状	南北 <145>	東西 <30>	93	不明	
SK94	10	11	6C15・19・20	－	（丸方形）	（弧状）	レンズ状	南北 <330>	東西 <230>	110	N-4° -W	
SK149	12	13	7F4	SK149 ＜ SK764	円形	半円状	ブロック状	90	79	41	－	
SK150	16	17	8F9	－	楕円形	台形状	単層	65	43	21	N-32° -E	
SK152	8	9	6E17・18・23	－	円形	半円状	レンズ状	91	80	25	－	珠洲焼出土。
SK507	16	17	8F7・8	－	円形	弧状	単層	123	117	15	－	
SK520	8	9	6E18・19	SK520 ＜ P203・204・206・522	円形	弧状	単層	114	98	8	N-16° -W	
SK521	8	9	6E19	SK521 ＜ P206・208・209・213	楕円形	弧状	単層	100	72	13	N-62° -W	
SK545	8	9	6D22・23	－	円形	台形状	レンズ状	84	71	17	N-59° -E	
SK578	18・19	19	9C23·24、9D3·4·8・9	－	円形	台形状	レンズ状	315	287	115	－	珠洲焼、中世土師器、刀子、和釘、砥石、種実出土。
SK694	12	－	7E9・10	SK694 ＜ P693	（楕円形）	弧状	単層	105	72	10	N-51° -W	
SK721	16	17	8F4・5・9・10	P1014 ＜ SK721	長方形	弧状	単層	180	151	29	N-26° -W	須恵器、土師器出土。

土坑（SK）観察表（2）

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、＜ ＞残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SK763	12	13	7E20・25	SK764＜SK763	（円形）	弧状	レンズ状	105	102	16	－	1 層炭化物多く含む。
SK764	12	13	7E24・25、7F4	SK149＜SK764＜SK763	（長方形）	台形状	レンズ状	<222>	153	30	N-57°-E	1 層炭化物多く含む。珠洲焼、中世土師器出土。
SK828	6	5	4C19・24	－	（円形）	半円状	水平	東西 125	南北 <68>	46	－	
SK829	6	7	5C21・22	－	方形	台形状	レンズ状	79	69	20	N-7°-W	
SK830	6	7	5C23	－	楕円形	台形状	レンズ状	75	52	24	N-72°-W	
SK920	12	13	7D24、7E4	SK920＜P683・684	楕円形	台形状	単層	184	53	14	N-20°-W	1 層炭化物多く含む。
SK922	16	17	8F19	－	楕円形	弧状	単層	75	60	18	N-19°-E	
SK960	14	15	9B17・18・21～24、9C1～3・7・8	SD800・801≠SK960	不整形	弧状	レンズ状	580	480	75	N-24°-W	珠洲焼、青磁、砥石、刀子、和釘出土。
SK969	12	13	7E23、7F3	SD969＜SD148	円形	弧状	レンズ状	83	78	12	－	
SK988	12	13	7D23・7E3	SK988＜SD795	（楕円形）	台形状	レンズ状	82	66	13	N-55°-E	
SK991	10	11	7D13・14	－	（円形）	半円状	水平	57	54	34	－	
SK997	10	11	6D5・10	SD996＜SK997	楕円形	弧状	レンズ状	70	52	14	N-90°-E	
SK1053	26	27	12E9・10	－	楕円形	弧状	単層	（102）	71	12	N-69°-W	須恵器出土。
SK1054	26	27	13E15・20	－	円形	台形状	レンズ状	79	67	20	－	須恵器出土。
SK1055	26	27	13E11・16	－	楕円形	台形状	レンズ状	71	57	13	N-47°-E	
SK1056	26・27	27	12E10・13E6	－	楕円形	台形状	レンズ状	132	104	13	N-10°-E	須恵器、土師器出土
SK1057	32	33	13E13・14	－	方形	箱状	レンズ状	65	57	23	N-14°-W	
SK1058	32	33	13D15、14D11	≠SX1178	円形	台形状	水平	112	97	34	－	須恵器出土。
SK1174	30	31	14F22・23、14G2・3	－	長方形	台形状	レンズ状	174	87	29	N-60°-E	
SK1177	26	27	12E9・10	－	（楕円形）	半円状	レンズ状	145	105	23	N-76°-W	土師器出土。
SK1179	32	33	13E15・20	－	円形	弧状	単層	92	82	12	－	
SK1180	32	33	13E8・9・13・14	SK1210＜SK1180	楕円形	弧状	単層	261	96	11	N-89°-E	須恵器出土。
SK1210	32	33	13E8・9	SK1210＜SK1180	長方形	台形状	水平	166	46	38	N-88°-W	
SK1212	30	31	13G4・9	－	長方形	台形状	レンズ状	124	58	20	N-73°-E	
SK1213	32	33	13E10・15	－	楕円形	半円状	レンズ状	77	58	19	N-35°-W	羽口出土。
SK1225	28	29	12F20	－	円形	半円状	レンズ状	69	62	32	－	
SK1255	18	20	10C1	－	（楕円形）	半円状	レンズ状	<74>	85	25	N-19°-E	1 層炭化物多く含む。
SK1414	40	40	6D22・23、6E2・3	－	円形	有段の弧状	レンズ状	183	155	27	N-52°-W	
SK1621	30	31	14G1	－	円形	台形状	レンズ状	75	71	37	－	2 層炭化物多く含む。
SK1639	22	23	12C11	－	楕円形	弧状	レンズ状	57	47	5	N-67°-W	土師器出土。

竪穴状遺構（SX）観察表

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、＜ ＞残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SX1555	34	36	15D20・25、16D16	SX1555＜SX1610	（長方形）	台形状	レンズ状	<166>	187	16	N-89°-E	中世か。

溝（SD）観察表（1）

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、＜ ＞残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	断面形	覆土堆積形状	残存長（m）	上端幅（cm）	底部幅（cm）	深さ（cm）	備考
SD22	4・6	5・7	2E～5D	SD26＜SD22＜SD27	V 字状～台形状	レンズ状	32.1	34～170 平均 50	10～111 平均 10～20	29～71	SD50 と同一溝か。珠洲焼、青磁、和釘出土。
SD23	4・6	7	2E～5D	－	台形状	レンズ状	30.7	36～345 平均 50	7～294 平均 10～20	34	SD797 と同一溝か。珠洲焼、鉄製品出土。
SD24	4・6	5・7	3E・4E	SD24＜SD25	台形状	水平	17.4	67～95	19～53	18～48	中世か。
SD25	6	7	4・5E	SD24＜SD25	台形状	レンズ状	10.4	45～60	23～41	28	SD546 と同一溝か。
SD26	6	－	4D	SD26＜SD22	弧状	単層	6.7	72～93	40～68	28	SD27・962 と同一溝か。

溝（SD）観察表（2）

切り合いの記号は「旧＜新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、＜＞残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	断面形	覆土堆積形状	残存長（m）	上端幅（cm）	底部幅（cm）	深さ（cm）	備考
SD27	6	7	5D	SD22＜SD27＜SK20	台形状	水平	4.3	94～104	64～80	67	SD26・962と同一溝か。4・5層炭化物多く含む。
SD34	6	－	5C・D	－	台形状	単層	3.5	35～73	17～38	23	中世か。
SD43	10	11	7B・C	－	台形状～半円状	単層	22.1	51～150	23～128	23～42	珠洲焼、青磁（SD795出土片と接合）、中世土師器（SX56出土片と接合）、刀子、和釘出土。
SD50	8・12・10・14	9・11・15	6D～9C	SD574・796＜SD50＜SK52、≠SD583	台形状～弧状	レンズ状	30.4	53～253	23～102	18～52	珠洲焼、青磁、中世土師器、鉄製品出土。古代の石鈎（巡方）混入。
SD77	2	3	6C	SD77＜SX54	台形状	単層	1.2	25～34	10～19	22	珠洲焼出土。
SD110	2	3	5C	SD110＜P136	台形状	単層	0.6	58	42	7	中世か。
SD140	16	－	8E～9F	SD140＜SE857・P146	台形状	単層	10.6	36～55	21～34	5	SD632・1539と同一溝か。土師器出土。
SD148	12	13	6F・7E	SD580・SK969＜SD148	台形状	レンズ状	9.7	56～65	11～53	64	1層炭化物多く含む。珠洲焼、砥石、刀子出土。
SD546	8	9	6D	－	台形状	水平	1.6	47～60	34～41	16	SD25と同一溝か。
SD574	14	15	8B・9C	SD574＜SD50	弧状	単層	6.8	36～151	21～120	10	中世か。
SD580	16・18・22	17・20・23	7E～9D	SD794＜SD580＜SD148・SD793・SX647・SX648	台形状～半円状	レンズ状	58.6	55～85	16～38	25	SD1042と同一溝か。
SD583	8	9	6D・E	SD797＜SD583＜SD794、≠SD50	弧状	レンズ状	11.5	88～110	47～75	17～37	珠洲焼（SE4出土片と接合）出土。
SD624	12	13	6・7E	SD794＜SD624	半円状	レンズ状	3.8	34～47	13～26	20	中世か。
SD632	12	－	7E	SD794＜SD632	弧状	単層	2.8	38～49	14～29	4	SD140・1539と同一溝か。
SD645	18・22・26	23・27	9C～12C	SD1541＜SD645＜SD1521	台形状～半円状	レンズ状	35.4	32～73	14～38	14～28	SD1044と同一溝か。
SD793	12	13	7D・E	SD580・795・798＜SD793	台形状～半円状	水平～レンズ状	13	49～80	30～52	18～22	青磁、中世土師器、鉄釘出土。
SD794	8・12	13	6D・7E	SD583＜SD794＜SD580・624・632・836、SX144	台形状～半円状	レンズ状	12.5	54～86	28～68	21	珠洲焼出土。
SD795	12	13	7D・E	SK988＜SD795＜SD793	台形状～半円状	レンズ状～水平	13.4	70～132	51～94	17～35	珠洲焼、青磁（SD43出土片と接合）出土。
SD796	8	9	6D	SD796＜SD50・SD797・SX144	台形状	単層	3.3	59～98	47～75	10～38	中世か。
SD797	8	9	6D	SD796＜SD797＜SD583＜SD794	台形状～半円状	単層	6.7	40～104	15～31	18～21	SD23と同一溝か。
SD798	12	13	6D、7D・E	SD797＜SD798＜SD793	台形状	水平	7.2	49～61	21～43	23	中世か。
SD800	14・18	20	9・10C	≠SD801・SK960	台形状～弧状	水平	11.6	84～158	26～64	30～44	珠洲焼、瀬戸・美濃焼、中世土師器出土。
SD801	14・18	20	9・10C	≠SD800・SK960	台形状～弧状	斜位	14.6	76～190	26～74	31～43	珠洲焼、中世土師器、砥石、和釘出土。
SD836	12	－	7E	SD794＜SD836	台形状	台形状	2.2	39～50	15～30	12	中世か。
SD962	10	11	6D	SD962＜SX56	台形状	レンズ状	2.3	95	59	44	中世か。
SD996	10	－	6D	SD996＜SK997・SX56	台形状	単層	1.5	36～40	18～23	11	珠洲焼出土。
SD1031	26・28・30・35	27・29・36	13D～15H	SD1032＜SD1031＜SE1175・SE1211・SD1201	台形状～弧状	レンズ状	43.2	60～101	41～90	10～22	中世土師器出土。
SD1032	26・28・30	27・29	13D～13G	SD1032＜SE1211・SD1031・1042・1201・1207	台形状	レンズ状	34.9	45～63	25～42	13～30	須恵器、土師器出土。
SD1041	26・32	27	13・14D	SD1042＜SD1041＜SD1043	台形状～半円状	水平	11.3	55～78	12～58	11～16	土師器出土。
SD1042	26・32	27	13・14D	SD1032＜SD1042＜SD1041	台形状～半円状	水平	13.4	32～50	15～25	44	SD580と同一溝か。
SD1043	26	27	13D	SD1041＜SD1043	半円状	単層	3.3	30～37	15～23	11	中世か。
SD1044	26・32	27	13・14D	－	台形状	レンズ状	7.3	45～62	20～35	16～34	SD645と同一溝か。珠洲焼出土。
SD1201	28・30・35	29・36	12F・G、13F・G、14G・H	SD1031・1032＜SD1201＜SE1173、≠SD1259	台形状	レンズ状	27.8	60～160	27～62	23～68	珠洲焼出土。
SD1207	28・30	29・31	12G・13F・G・H、14G	SD1032＜SD1207＜SE1230	台形状	レンズ状	33.4	35～100	12～65	8～55	珠洲焼、中世土師器、焼成粘土塊出土。
SD1224	30	31	12G	－	台形状	レンズ状	8.8	79～98	49～74	13～37	珠洲焼、青磁、和釘、羽口出土。
SD1259	28	29	14G	≠SE1175・SD1201	台形状	レンズ状	0.8	51～77	39～53	11	SE1175・1201と同時開口か。
SD1521	26	27	12C・D、13C	SD1541＜SD645＜SD1521	台形状	レンズ状	6.9	35～43	18～28	30	
SD1539	24	25	11F	－	台形状	レンズ状	3.7	82～97	56～73	20	SD140・632と同一溝か。須恵器出土。
SD1540	24	25	10・11G	－	台形状	単層	2.4	40～53	17～32	19	古代か。
SD1541	26	27	12C・D	SD1541＜SD645＜SD1521	台形状～箱状	水平レンズ	5.6	89～115	64～75	43	須恵器出土。

炭窯（SX）観察表

（ ）推定値、< >残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	平面形	断面形	覆土堆積形状	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SX55	2	3	5C14・15、6C11	（長方形）	台形状	レンズ状	<423>	105	43	N-80°-W	4層炭化物多く含む。

焼土遺構（SX）観察表

（ ）推定値、< >残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	焼土分布範囲	長軸（cm）	短軸（cm）	方位	備考
SX1537	24・25	－	11F18・19	不整円形	南北 78	東西 73	－	焼土範囲として検出。南西に隣接した同一確認面で遺物集中範囲を確認。土師器出土。
SX1626	24	－	11F8	不整楕円形	129	105	N-38°-E	焼土範囲として検出。北東側で遺物集中範囲を確認。

畝間状遺構（SX）観察表

切り合いの記号は「旧<新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、< >残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	断面形	覆土堆積形状	残存範囲（m）	上端幅（cm）	底部幅（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SD1593～1601 SD1613～1619	34・35	36	14E・F、15E～G	＜SX1550・1551・1552・1600	半円状 弧状～	単層	北東 15.8 北西 15.1	25～85 平均 50	10～67 平均 20	10～20 平均 15	N-60°-E	

凹地遺構（SX）観察表

（ ）推定値、< >残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	全体確認範囲（m）		個別規模（cm）		深さ（cm）	備考
								南北方向	東西方向	南北方向	東西方向		
SX1542～1553 SX1558・1610	34	36	15D～F	畝間状遺構<凹地遺構	不整形	弧状	単層	<16.0>	<9.8>	114～496	100～355	10～20	SX1543から焼成粘土塊出土。

性格不明遺構（SX）観察表

切り合いの記号は「旧<新」、「≠」は新旧不明を表す。（ ）推定値、< >残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土堆積形状	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
SX17	4	5	4E4	－	不整形	弧状	レンズ状	70	62	12	－	2層炭化物多く含む。
SX54	2	3	5C9・10、6C6	SD77＜SX54＜P28	楕円形	台形状	レンズ状	411	108	18	N-89°-W	4層炭化物多く含む。青磁、中世土師器出土。
SX56	10	11	6C25、6D4・5、7C21、7D1	SD962・996＜SX56＜P57・58	（楕円形）	弧状	単層	<513>	158	18	N-65°-E	珠洲焼、中世土師器（SD43出土片と接合）出土。
SX85	2	3	5B25、5C5、6B21、6C1	SX85＜P86	不整形	不整形	－	378	258	－	N-65°-E	
SX141	10	11	6C25、7C21	－	（楕円形）	弧状	単層	78	<17>	14	N-75°-E	
SX142	10	11	7C11	－	円形	弧状	単層	北西方向 43	北東方向 41	10	－	
SX144	8	9	6D14	SD794・796＜SX144＜P500	円形	弧状	単層	56	47	6	－	細骨片含む。1層炭化物多く含む。
SX153	12・13	13	7E16	－	楕円形	弧状	不明	42	23	5	N-54°-E	炭化物と細骨片を多く含む。
SX154	12・13	13	7E21・22	－	円形	弧状	水平	82	72	5	－	炭化物と細骨片を多く含む。
SX573	12・13	13	7E16・17	P321＜SX573	楕円形	台形状	単層	82	64	8	N-78°-E	珠洲焼出土。
SX576	14	17	8C20・25、9C16・17	－	楕円形	弧状	レンズ状	482	141	27	N-67°-E	2・5層炭化物多く含む。中世土師器出土。
SX577	14	17	8C24	－	方形	台形状	単層	72	64	15	N-32°-W	
SX610	14	17	8D2・3・7・8	－	楕円形	弧状	レンズ状	285	147	28	N-35°-W	中世土師器出土。
SX647	18	20	10D12・13・17・18	SD580＜SX647	長方形	箱状	ブロック状	298	204	38	N-80°-E	
SX648	18	20	9D19・20・24・25	SD580＜SX648	長方形	台形状	水平	272	94	56	N-72°-E	
SX780	14	17	8C22・23、8D2・3	－	（楕円形）	弧状	単層	<65>	78	10	N-72°-W	1層炭化物多く含む。
SX1178	32	33	13D20、14D16	≠SK1058	長方形	台形状	水平	194	130	24	N-81°-W	須恵器、土師器出土。
SX1208	32	33	13E25、14E21	－	楕円形	弧状	水平	48	27	7	N-24°-W	1層焼土多く含む。
SX1209	32	33	13E19・24	－	楕円形	半円状	レンズ状	39	28	2	N-41°-E	1層焼土多く含む。
SX1231	30	31	12G25、13G21・22、13H2	SX1231＜SE1230	（長方形）	箱状？	レンズ状	<414>	<85>	82	N-66°-W	2層炭化物多く含む。珠洲焼、中世土師器、種実出土。
SX1623	30	31	14H1	－	楕円形	半円状	レンズ状	121	42	14	N-82°-W	土師器出土。
SX1624	24・25	25	11F22・23、11G1・2	SX1624＜P1567・1568・1625	（楕円形）	台形状	水平	<345>	240	14	N-75°-W	須恵器、土師器出土。

土器・陶磁器（古代・中世）観察表（1）

（）推定値、<> 残存値

No.	出土地点	出土層位	種類	器種	法量（cm）			遺存状態	調整			色調	備考
					口径	底径	器高		外面	内面	底部		
1	SE4／SD583	11層／3層	珠洲	擂鉢	－	（11.8）	<2.1>	底33/36	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り・板目圧痕	外：褐灰（7.5YR5/1） 内：褐灰（7.5YR6/1）	SD583の覆土3層と接合。海綿骨針。
2	SE4	覆土	青磁	椀	－	－	<3.5>	体2/36	施釉	施釉	－	外:灰オリーブ（5Y5/2）灰オリーブ（5Y5/3）	蓮弁文。
3	SE4	7層	中世土師器	皿	（6.2）	（4.8）	<1.1>	口6/36～底3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：にぶい橙（7.5YR7/3）	内外面にわずかに煤付着。
4	SE722	覆土	中世土師器	皿	－	（7.5）	<1.5>	底17/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外：浅黄橙（7.5YR8/3） 内：浅黄橙（7.5YR8/4）	内外面にわずかに煤付着。
5	SE799	覆土	珠洲	甕	－	－	<5.0>	口2/36	ロクロナデ、体部平行タタキ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/～N6/）	海綿骨針。
6	SE799	覆土	珠洲	擂鉢	－	－	<5.0>	体1/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/）	海綿骨針。一単位幅2.2cm（8本）の卸目。
7	SE799	覆土	青磁	椀	－	－	<3.5>	体3/36	施釉	施釉	－	外内：オリーブ灰（2.5GY6/1）	蓮弁文。
8	SE799	覆土	中世土師器	皿	－	（5.8）	<1.1>	体～底2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り？	外：浅黄橙（7.5YR8/3） 内：にぶい橙<7.5YR7/4	
9	SE799	覆土	中世土師器	皿	－	（7.1）	<1.8>	体～底2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：浅黄橙（10YR8/4）	
10	SE995	9層	中世土師器	皿	（8.1）	（7.2）	<1.1>	口5/35～底6/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：にぶい橙（5YR7/4） 内：にぶい橙（5YR7/3）	
11	SE995	2層	中世土師器	皿	－	（6.7）	<1.2>	底8/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外：褐灰（7.5YR6/1） 内：褐灰（7.5YR5/1）	
12	SE995	覆土	珠洲	擂鉢	（19.4）	－	<7.9>	口～体5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：にぶい黄橙（10YR7/3）	卸目残存するが単位は不明。
13	SE1211	2層、覆土	珠洲	甕	－	－	<6.9>	口1/36以下	ロクロナデ、体部平行タタキ		－	外内：褐灰（10YR5/1）	海綿骨針。
14	SE1211	3層	珠洲	擂鉢	（38.2）	－	<7.5>	口～体3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/）	海綿骨針。一単位幅3.0cm（11本）の卸目。
15	SK1211	覆土	珠洲	擂鉢	－	－	<4.2>	底1/36	ロクロナデ			外内：灰（N5/）	海綿骨針。一単位幅2.8cm（9本）の卸目。
16	SE1211	覆土	瀬戸・美濃	仏花瓶	－	－	<3.6>	体8/36	施釉	ロクロナデ	－	外：オリーブ黄（5Y6/3） 内：灰白（5Y8/2）	外面灰釉。4本の平行沈線が巡る。
17	SE1211	3層	瀬戸・美濃	卸皿	（8.1）	－	<1.5>	体8/36	施釉	施釉	－	外：灰（N7/）内：灰（N6/）	口縁部内外に灰釉。体部内面に卸目。
18	SE1230	覆土	珠洲	擂鉢	（26.0）	－	<4.3>	口～体2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：灰（N5/）内：灰（N6/）	海綿骨針。
19	SE1230	1層	珠洲	甕	－	－	<5.8>	体1/36	ロクロナデ、体部平行タタキ	ロクロナデ	－	外内：灰（N4/～N/5）	海綿骨針。転用され内面に砥面が形成される。
20	SE1230	4層	青磁	椀	－	－	<2.5>	口3/36	施釉	施釉	－	外内：オリーブ灰（2.5GY6/1）	蓮弁文。
21	SE1230	覆土	中世土師器	皿	－	（6.6）	<1.1>	底9/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外内：橙（5YR6/6）	
22	SE1554	3層	珠洲	擂鉢	－	（9.4）	<3.0>	体～底3/36	ロクロナデ		静止糸切り	外内：にぶい赤褐（2.5YR5/3）	海綿骨針。長石・石英多く含む。一単位幅3.5cm（16本）の卸目
23	SE1554	3層	珠洲	擂鉢	－	（16.5）	<6.2>	体～底5/36	ロクロナデ・指頭圧痕		静止糸切り	外内：灰（N6/～N5/）	海綿骨針。一単位幅3.5cm（16本）の卸目。内面にわずかに煤付着。
24	SK152	1層	珠洲	擂鉢	－	（12.2）	<5.5>	体9/36～底6/36	ロクロナデ		静止糸切り	外内：褐灰（7.5YR5/3）	海綿骨針。一単位幅2.2cm（11本）の卸目。
25	SK578	覆土	中世土師器	皿	－	（6.2）	<0.8>	底10/36			回転糸切り？	外：浅黄橙色〈10YR8/3〉 内：にぶい黄橙色（10YR7/2）	
26	SK578	2・17層、覆土	珠洲	擂鉢	（28.4）	－	<8.0>	口～体6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：浅黄橙（10YR8/4） 内：浅黄橙（10YR8/3）	焼成やや不良か。一単位幅2.2cm（11本）の卸目
27	SK960	覆土	珠洲	片口鉢	－	－	<3.9>	口1/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外:褐灰（10YR6/1）内:灰（N5/）	
28	SK960	覆土	青磁	椀	－	－	<2.0>	口1/36	施釉	施釉	－	外：灰オリーブ（5Y5/3） 内：灰オリーブ（5Y5/2）	鎬蓮弁文。器壁薄い。釉薄く均一。
29	SD22	3層	珠洲	擂鉢	（25.0）	－	<5.6>	口3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/）	海綿骨針。卸目ありわずかに残存。

土器・陶磁器（古代・中世）観察表（2）

（）推定値、<> 残存値

No.	出土地点	出土層位	種類	器種	法量（cm）			遺存状態	調整			色調	備考
					口径	底径	器高		外面	内面	底部		
30	SD22	覆土	珠洲	擂鉢	－	（13.6）	<5.1>	体～底 3/36 ～ 7/36	ロクロナデ・指頭圧痕	ロクロナデ	静止糸切り	外内：にぶい赤褐（2.5YR5/4）	海綿骨針。一単位幅 2.0cm（10 本）の卸目。
31	SD22	覆土	珠洲	擂鉢	－	（10.5）	<5.6>	体～底 4/36	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り	外：にぶい赤褐（2.5YR5/3） 内：にぶい赤褐（5YR4/3）	海綿骨針。一単位幅 2.0cm（10 本）の卸目。
32	SD22	覆土	青磁	椀？	－	－	<2.3>	体 1/36	施釉	施釉	－	外内：オリーブ灰（2.5GY6/1）	
33	SD23	覆土	珠洲	擂鉢	－	－	<4.0>	口～体 1/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/）	海綿骨針。
34	SD43/SD795	2 層／1 層	青磁	椀	－	－	<4.5>	口～体 3/36	施釉	施釉	－	外：灰オリーブ（5Y6/2） 内：灰オリーブ（5Y6/3）	SD795 の覆土 1 層と接合。鎬蓮弁文。釉は薄く均一。
35	SD43/SX56	2 層／1 層	中世土師器	皿	－	（8.2）	<1.7>	体～底 11/36	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外：明褐灰（7.5YR7/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	SX56 の覆土 1 層と接合。
36	SD43	2 層	珠洲	擂鉢	（28.2）	－	<4.0>	口 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外；灰（N4/） 内：灰（N6/）	海綿骨針。
37	SD50	1 層	珠洲	擂鉢	－	－	<7.6>	体 1/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	海綿骨針。一単位幅 2.2cm（9 本）の卸目。
38	SD50	1 層	珠洲	擂鉢	－	（9.4）	<6.9>	体～底 6/36	コクロナデ・指頭圧痕	ロクロナデ・指頭圧痕	静止糸切り	外：灰（N5/） 内：灰（N6/）	海綿骨針。一単位幅 2.0cm（9 本）の卸目
39	SD50	1 層	珠洲	擂鉢	－	（11.4）	<6.4>	底 4/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：灰（N5/） 内：灰（N6/）	海綿骨針。一単位幅 2.8cm（9 本）の卸目
40	SD50	1・2 層、覆土	珠洲	甕	－	－	<7.6>	口 3/36	平行タタキ		－	外：灰（N6/） 内：灰（N5/）	海綿骨針。
41	SD50	1 層	珠洲	壺	（11.2）	－	<4.8>	口 5/36	ロクロナデ、体部平行タタキ	ロクロナデ	－	外：暗赤褐（10YR4/1） 内：赤灰（10R4/1）	海綿骨針。壺 T 種。
42	SD50	覆土	珠洲	擂鉢	－	（10.2）	<3.9>	体 2/36 ～底 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り	外内：灰（N6/）	海綿骨針。
43	SD50	覆土	珠洲	擂鉢	（24.0）	－	<4.6>	口 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	海綿骨針。
44	SD50	8 層、覆土	青磁	椀	－	－	<5.8>	口～体 3/36	施釉	施釉	－	外内：オリーブ灰（2.5GY6/1）	鎬蓮弁文。
45	SD50	1・2 層、覆土	中世土師器	小皿	（7.1）	（4.8）		口～底 11/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外内：橙（7.5YR6/6）	
46	SD77	覆土	珠洲	擂鉢	（28.0）	14.0	11.2	口～体 10/36	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り・板目圧痕	外：灰（N5/） 内：にぶい赤褐色（5YR5/4）	遺構外 6D5 グリッドの Ⅲ a 層と接合。海綿骨針。一単位幅 1.8cm（9 本）の卸目。
47	SD794	2 層	珠洲	片口鉢	（27.0）		<8.7>	口～体 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/）	海綿骨針。一単位幅 2cm（7 本）の卸目。
48	SD795	2 層	珠洲	壺？	－	－	<4.7>	頸部 1/36	平行タタキ		－	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 内：にぶい黄褐（10YR6/2）	海綿骨針。
49	SD800	3 層	中世土師器	皿	－	（8.0）	<1.0>	底 9/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：にぶい橙（5YR7/4）	
50	SD1201	1 層	珠洲	擂鉢	－		<6.3>	口 2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：灰（N6/）内：灰（N5 /）	海綿骨針。卸目残存するが単位は不明。
51	SD1224	1 層	青磁	椀	－	－	<2.6>	体 4/36	施釉	施釉	－	外内：明オリーブ灰（2.5GY7/1）	鎬蓮弁文。釉薄く均一。
52	SX54	1 層	青磁	椀	－	－	<2.0>	口 2/36	施釉	施釉	－	外内：灰オリーブ（5Y5/2）	蓮弁文。
53	SX56	1 層	珠洲	壺	－	－	<13.2>	体 7/36	ロクロナデ、体部平行タタキ	無文当て具	－	外：褐灰（5YR4/1）内：灰赤（2.5YR4/2）	海綿骨針。
54	SX1231	覆土	珠洲	鉢	－	－	<3.3>	口～体 2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	海綿骨針。
55	SX1231	3 層	珠洲	甕もしくは鉢	－	（10.7）	<3.2>	底 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外内：灰白（N7/）	軽い
56	SX1231	2 層	中世土師器	皿	（13.2）	－	<1.9>	口 4/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：淡橙（5YR8/3）	
57	SX1231	覆土	中世土師器	皿	－	（8.2）	<1.7>	底 3/36	ロクロナデ			外：灰白（7.5YR8/2） 内：灰白（7.5YR8/2）	
58	7D7	Ⅲ a 層	珠洲	擂鉢	（34.2）	－	<7.9>	口 2/36 ～体 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/ ～ N4/）	海綿骨針。卸目残存するが単位は不明。

土器・陶磁器（古代・中世）観察表（3）

（）推定値、<> 残存値

No.	出土地点	出土層位	種類	器種	法量（cm）			遺存状態	調整			色調	備考
					口径	底径	器高		外面	内面	底部		
59	6D19	Ⅲａ層	珠洲	擂鉢	(33.6)	－	<7.9>	口 5/36 ～体 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：灰（N5/） 内：灰（N6/）	海綿骨針。一単位幅 2.4cm（11 本）の卸目。
60	6D9	Ⅲａ層	珠洲	擂鉢	(28.0)	－	<9.5>	口 6/36 ～体 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N5/ ～ N6/）	海綿骨針。
61	5C	Ⅲａ層	白磁	不明	(9.7)	－	<1.3>	口 6/36	施釉	施釉	－	外内：明オリーブ灰（2.5GY7/1）	口縁端部口禿げ。
62	SK1056	１層	須恵器	無台杯	(11.3)	(11.3)	<3.1>	口 7/36 ～ 体 8/36 ～ 底 36/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土Ｂ群（小泊産）。
63	SK1056	２層	須恵器	無台杯	12.65	7.8	3.6	口 22/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土Ｂ群（小泊産）。
64	SK1056	２層	土師器	無台椀	－	(6.0)	<6.1>	体～底 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外：明赤褐（2.5YR6/6） 内：橙（7.5YR7/4）	器壁薄い。小甕の可能性あり。
65	SK1058	１層	須恵器	瓶か	－	(5.6)	<2.6>	体～底 10/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：灰（N4/） 内：灰白（N7/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
66	SK1177	２層	土師器	無台椀	－	(7.6)	<2.0>	体～底 1/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：赤橙（10R6/6） 内：橙（5YR7/6）	小甕の可能性あり。
67	SK1177	１層	土師器	無台杯	－	(6.0)	<1.3>	底 7/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外内：橙（7.5YR7/6）	
68	SK1180	１層	須恵器	有台杯	－	(5.6)	<2.6>	底 10/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：灰（N4/） 内：灰白（N7/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
69	SK1180	１層	須恵器	瓶か	－	(7.2)	<2.6>	底 32/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外：暗灰（N3/） 内：灰（N6/）	胎土Ｂ類（小泊産）。
70	SD1032	１層	須恵器	有台杯	－	(7.2)	<1.3>	底 5/36	－	ロクロナデ		外：灰褐（7.5YR6/2） 内：橙（7.5YR6/6）	胎土Ｂ群（小泊産）。
71	SD1539	４層	須恵器	無台杯	(13.5)	(8.2)	<3.5>	口 4/36 ～ 体 7/36 ～ 底底 9/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：にぶい黄橙（10YR7/3）	胎土Ｃ群
72	SX1537	Ⅳ層	土師器	長胴甕	(19.8)	－	<5.7>	口 5/36	ロクロナデ		－	外内：浅黄橙（7.5YR8/4）	風化著しい。
73	SX1178	８層	須恵器	無台杯	12.8	8.4	3.3	完形	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（N7/）	胎土Ｂ群（小泊産）。口縁部外面黒化。
74	SX1178	３層	須恵器	無台杯	－	(8.0)	<1.7>	体～底 8/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：白灰（2.5Y8/1）	胎土Ｃ群
75	SX1178	３層	須恵器	無台杯	－	(6.8)	<2.9>	体 4/36 ～底 36/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外：灰（N5/） 内：灰白（N6/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
76	SX1624	５層	須恵器	無台杯	(13.1)	(8.0)	3.8	口 14/36 ～ 体 14/36 ～底 21/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ	外内：褐灰（10YR6/2）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
77	SX1624	２層	須恵器	無台杯	(12.8)	(8.6)	<3.7>	口 5/36 ～底 36/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：褐灰（10YR6/1）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
78	SX1624	２層	須恵器	無台杯	(12.3)	(7.8)	<3.2>	口 1/36 ～底 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
79	SX1624	２層	須恵器	無台杯	－	(7.7)	<1.2>	底 7/36	ロクロナデ		回転ヘラ切り	外内：灰（N5/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
80	SX1624	覆土	須恵器	杯	(12.6)	－	<2.6>	口～体 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
81	SX1624	２層	須恵器	有台杯	(12.2)	(7.4)	<4.1>	口 1/36 ～ 体 18/36 ～底 36/36	ロクロナデ	ヘラ切り	回転ヘラ切り	外：灰（N4/） 内：灰（N6/）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
82	SX1624	２層	須恵器	蓋	(13.6)	－	<2.7>	頂～口 15/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外：灰（N5/） 内：褐灰（7.5YR5/2）	胎土Ａ群（阿賀北産）。
83	SX1624	２層	須恵器	甕	－	－	<4.2>	体 1/36	平行タタキ後カキメ	同心円当て具	－	外：2.5Y7/2 内：2.5Y6/1	胎土Ｃ群
84	11F5	Ⅳ層	須恵器	無台杯	－	(9.2)	<2.0>	底 16/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（5Y6/1）	胎土Ｂ群（小泊産）。底部外面に「廣者」の墨書。
85	14H1	Ⅰ層	須恵器	無台杯	(12.1)	(7.1)	<3.4>	口～底 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N5/）	胎土Ｂ群（小泊産）。底部内面ヘラ記号×。内面にわずかに煤付着。
86	11G2	Ⅳ層	須恵器	無台杯	(12.2)	(9.1)	<3.3>	口 10/36 ～ 体 16/36 ～底 17/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土Ｂ群（小泊産）。
87	14H1	Ⅳ層	須恵器	無台杯	(12.2)	(7.6)	<3.2>	口～体 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N5/）	胎土Ｂ群（小泊産）。

土器・陶磁器（古代・中世）観察表（4）

（）推定値、<> 残存値

No.	出土地点	出土層位	種類	器種	法量（cm）			遺存状態	調整			色調	備考
					口径	底径	器高		外面	内面	底部		
88	10G2	Ⅳ層	須恵器	無台杯	（12.2）	（7.9）	<3.5>	体～底 11/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（10YR7/1）	胎土 B 群（小泊産）。
89	13G8	Ⅳ層	須恵器	無台杯	12.7	7.0	3.4	体～底 17/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（N7/）	胎土 B 群（小泊産）。
90	14H2	－	須恵器	有台杯	－	（7.6）	<2.2>	底 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土 A 群（阿賀北産）。中世の遺構 SD1201 の 3 層から出土。
91	11E25	Ⅳ層	須恵器	有台杯	－	（8.2）	<2.6>	体～底 9/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（N6/）	胎土 A 群（阿賀北産）。
92	14E12	－	須恵器	有台杯	－	（7.4）	<3.0>	底 26/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土 A 群（阿賀北産）。中世の遺構 SE799 の覆土から出土。
93	表採	－	須恵器	蓋	（12.6）	－	<2.1>	頂～口 11/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外：黄灰（2.5Y4/2） 内：黄灰（2.5Y6/1）	胎土 A 群（阿賀北産）。
94	9F24	－	須恵器	蓋	（13.6）	－	<2.0>	口 9/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	胎土 B 群（小泊産）。中世の遺構 SE799 の覆土から出土。
95	11E1	Ⅳ層	須恵器	蓋	（13.7）	－	<1.9>	頂～口 3/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外：灰（N5/） 内：灰（N6/）	胎土 B 群（小泊産）。
96	7F6	Ⅳ層	須恵器	長頸瓶	（3.5）	－	<3.1>	口 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：灰（N6/） 内：灰（N5/）	胎土 A 群（阿賀北産）。
97	8D12	Ⅳ層	須恵器	長頸瓶	－	（6.4）	<3.5>	体 9/36 ～底 8/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外内：灰（N5/）	胎土 A 群（阿賀北産）。
98	9C9	－	須恵器	壺か	－	－	<10.1>	体 1/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：灰黄（2.5Y7/2） 内：灰（N5/）	胎土 C 群。阿賀北産か。一条の沈線が巡る。中世の遺構 SK960 の覆土から出土。
99	14D22・24	Ⅳ層	須恵器	甕	－	－	<4.0>	口 2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：灰（N6/）	胎土 B 群（小泊産）。
100	6D13	－	土師器	無台椀	（12.2）	（7.4）	<3.7>	口 3/36 ～底 7/36	ロクロナデ	ロクロナデ		外内：にぶい橙（7.5YR7/4）	中世の遺構 SD50 の覆土から出土。
101	8C23	Ⅲ層	土師器	無台椀	（10.8）	（7.0）	3.3	口 1/36 ～ 体 7/36 ～底 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外内：橙（5YR6/6）	
102	6D20	Ⅳ層	土師器	無台椀	（13.6）	（6.6）	5.5	口～底 7/36	ロクロナデ後体部下位ロクロケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	外内：浅黄橙（7.5YR8/4）	いわゆる「赤彩土師器」。赤彩が施される。沈線二条巡る。
103	6E11	Ⅳ層	黒色土器	不明	－	（7.1）	<1.3>	底 9/36		ヘラミガキ		外内：橙（7.5YR7/6）	内面黒色処理。
104	9G4	－	土師器	小甕	－	－	<3.5>	口 2/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：にぶい褐（7.5YR5/3） 内：灰褐（7.5YR4/2）	中世の遺構 SE799 の覆土から出土。
105	9F3	－	土師器	小甕か	－	8.3	<0.9>	底 19/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外：浅黄橙（10YR8/3） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	中世の遺構 SE799 の覆土から出土。内面に煤付着。
106	8F9	Ⅳ層	土師器	長胴甕	（22.6）	－	<4.4>	口頸 5/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外内：にぶい橙（7.5YR7/3）	
107	12G17 ～ 19	－	土師器	長胴甕	（22.2）	－	<2.8>	口 4/36 ～頸 3/36	ロクロナデ	ロクロナデ	－	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：浅黄橙（10YR8/3）	中世の遺構 SD1224 の 1 層から出土。
108	6D14	Ⅳ層	須恵器	無台杯	（13.2）	（9.2）	<3.1>	口～底 6/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（N7/）	胎土 C 群。阿賀北産か。
109	9C13	Ⅳ層	須恵器	無台杯	－	（9.1）	<2.8>	体 3/36 ～底 12/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰白（N7/）	胎土 B 群（小泊産）。
110	6D24、6E3	Ⅳ層	須恵器	無台杯	（11.4）	（8.2）	<3.1>	口～底 11/36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	外内：灰（N6/）	胎土 B 群（小泊産）。
111	9C13	Ⅳ層	須恵器	蓋	（13.8）	－	<2.9>	頂～口 10/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外：灰（N6/） 内：灰白（N7/）	胎土 C 群。阿賀北産か。
112	10C11	Ⅳ層	須恵器	蓋	－	－	<3.2>	頂 24/36	ロクロナデ後、頂部ロクロケズリ	ロクロナデ	－	外：灰白（N7/） 内：灰白（10YR7/1）	胎土 B 群（小泊産）。
113	8D13	Ⅳ層	須恵器	横瓶	（14.0）	－	<5.0>	口頸 6/36	平行タタキ後カキメ	同心円当て具	－	外：褐灰（10YR4/1） 内：褐灰（10YR5/1）	胎土 C 群。阿賀北産か。
114	8C11、8D3・7・13	Ⅳ層	須恵器	横瓶	－	－	<8.0>	体 8/36	タタキ後カキメ	同心円当て具	－	外：褐灰（10YR5/1） 内：灰（N5/）	胎土 C 群。阿賀北産か。

石器観察表

No.	出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
115	7C16	Ⅲa 層	砥石	8.1	3.3	0.7	28.58	凝灰岩	
116	SD148	覆土	砥石	7.2	4.3	2.7	77.13	凝灰岩	
117	SK960	3 層	砥石	5.6	2.8	2.4	43.45	凝灰岩	
118	6E1	Ⅰ層	砥石	4.7	4.0	1.9	52.61	凝灰岩	
119	SE1230	覆土	砥石	5.5	3.5	0.6	13.60	凝灰岩	
120	SE1211	覆土	砥石	5.6	2.6	1.0	18.95	凝灰岩	

石製品観察表

< > 残存値

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
121	8C9	－	巡方	<3.6>	3.6	0.5	13.33	黒色粘板岩	中世の遺構 SE50 の覆土から出土。

鉄製品観察表

< > 残存値

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	遺存状態	備考
122	SK578	17 層	刀子	<7.3>	2.0	0.6	18.08	刃部残存	
123	P29（6C）	3 層	刀子	<6.5>	1.8	0.4	10.19	刃部～茎部残存	
124	SD43	2 層	刀子	<7.2>	1.6	0.5	9.55	刃部～茎部残存	
125	SE1175	2 層	刀子	<5.4>	1.2	0.3	9.25	刃部～茎部残存	
126	SK960	8 層	刀子	<5.1>	0.8	0.3	12.40	基部残存	
127	SK960	覆土	刀子	<5.6>	0.6	0.3	4.76	基部残存	
128	P185（6E）	覆土	和釘	<3.1>	0.7	0.6	3.94		
129	SD43	覆土	和釘	<4.3>	0.8	0.7	8.44		
130	SK960	覆土	和釘	5.8	0.7	0.6	7.13		
131	SE4	7 層	和釘	<5.7>	0.4	0.3	4.77		
132	SD43	2 層	和釘	<7.1>	0.6	0.5	13.34		
133	SD801	1 層	和釘	<9.1>	0.7	0.5	17.36		
134	SK20	1 層	和釘	<7.3>	0.8	0.5	11.25		
135	SK578	5 層	和釘	<5.4>	O.9	0.4	10.95		
136	SD22	覆土	和釘	<2.2>	0.5	0.4	2.05		
137	SD22	覆土	和釘	<2.2>	0.4	0.4	1.43		
138	SD50	覆土	不明	口径 3.2	底径 2.0	高さ 1.7	10.07	口～底部 26/36	

銅製品観察表

< > 残存値

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	遺存状態	備考
139	SE1211	覆土	提子	4.7	7.7	<3.8>	40.06	口縁部・片口・つるの取り付け部残存	孔穿たれる。

羽口観察表

（ ）推定値、< > 残存値

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	外径（cm）	内径（cm）	重量（g）	遺存状態	備考
140	13D20	Ⅳ層	羽口	<3.9>	（7.0）	2.5 ～ 2.8	51．91	先端部 1/2 遺存	

鉄滓観察表

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
141	13D20	Ⅳ層	椀形鍛冶滓	7.7	6.4	2.2	130.01	木炭痕
142	5D	Ⅳ層	椀形鍛冶滓	7.3	7.0	2.3	165.92	木炭痕
143	13E20	Ⅳ層	椀形鍛冶滓	4.3	3.6	2.4	34.26	炉壁の一部？付着
144	13E19	Ⅳ層	流動滓	4.8	3.2	1.6	17.32	
145	14F19	Ⅰ層	流動滓	5.7	3.1	2.2	13.32	

木製品観察表

（ ）推定値、< > 残存値

No.	遺構名・出土地点	出土層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取り	備考
146	SE1554	6 層	下駄	24.2	<9.5>	2.0	板目	指圧痕あり。
147	SE1554	6 層	鍬	<12.5>	11.0	1.6	板目	

弥生土器観察表（1）

凡例
残存部位：口縁部→口、頸部→頸、肩部→肩、胴部→体、底部→底、高台→高、天井部→天、つまみ部→つまみ、蓋部（口縁～体部）→蓋　また、※ x/36 で表記されたものは、口縁部以外の残存率である。
混入物：石英→英、長石→長、角閃石→角、金雲母→金雲、赤色粘土→赤粘、海綿骨針→海綿、粒径 0.2 ～ 2mm →粗砂、粒径 2mm ＜→小礫
色調：農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に基づき記載した。

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
1	SB1607-P1390（8E10）／7・8 層	深鉢	A1	口～胴	16/36	34	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	条痕文	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/3） 内：にぶい橙（7.5YR7/3）	-	輪積み痕残る（内外面）
2a・b	a）SB1607-P1390（8E10）／3 層 b）8E5／V	鉢	-	a）底 b）胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲	磨消縄文 （LR、三角形モチーフか）	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	外：スス 内：-	
3	SB1607-P1390（8E10）／1 層	蓋	C2	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	LR →ナデによる磨消	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	-	つまみ径：5.9cm
4	SB1607-P1391（9E6）／1 層	深鉢	B1	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	ナデ→ LR	ナデ	外：褐灰（10YR5/1） 内：褐灰（10YR4/1）	-	
5	SB1607-P1509（9D17・22）／1 層	甕	B1	口～胴	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	平行沈線文、波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 褐灰（10YR4/1） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：スス 内：コゲ	
6	SK1040（9E15）／6 層	鉢	-	胴～底	※31/36	-	-	-	7	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	非変形工字文、沈線文（底面）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：褐灰（10YR5/1）	外：沈線溝に赤彩 内：-	
7	SK1040（9F15）／2 層	甕	E2	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・粗砂	LR →平行沈線文、 横位の羽状沈線文	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR6/4） 内：にぶい橙（7.5YR6/4）	-	丸みある赤色砂粒が混入。
8a・b	a）SK1040（9E15）／覆土、 b）9E25／V 層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角（多）・金雲・粗砂	LR →平行沈線文、 横位の羽状沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
9	SK1040（9E15）／2 層	深鉢	B2	口	5/36	26	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →沈線波状文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：灰黄褐（10YR6/2）	外：スス 内：-	
10	SK1040（9E15）／2 層	深鉢	B	胴～底	※36/36	-	-	-	9.1	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR、ナデ（底面）	ナデ	外：にぶい橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	外：スス 内：-	
11a	SK1165（8F8）／1 層	蓋	A2	蓋	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →平行沈線文	ナデ、沈線文	外：灰白（10YR8/2） 内：褐灰（10YR6/1）	-	
11b	SK1165（8F8）／2 層				-	-	-	-	-	-		LR →平行沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 褐灰（10YR5/1） 内：灰黄褐（10YR6/2）	-	
12	SK1165（8F8）／覆土	甕	B2	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・金雲・粗砂	磨消縄文（充填 LR、三角形）	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（7.5YR3/1）	-	
13	SK1165（8F8）／1 層	鉢	-	底	※36/36	-	-	-	7	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR、ナデ（底面）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	
14	SK1166（8F11）／1・2 層	甕	B2	口～胴	3/36 ※18/36	15.8	-	18.6	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、三角形・長方形）	ナデ	外：黒褐（7.5YR3/2） 内：黒褐（7.5YR3/2）	外：スス 内：コゲ	内外面の磨耗が顕著。
15	SK1166（8F6）／2 層	深鉢	A1	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
16	SK1166（8F6）／1 層	深鉢	A1	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	
17	SK1166（8F6）／1 層	蓋	C2	つまみ	※14/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	縄文	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 褐灰（10YR5/1） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	-	つまみ径：8.0cm、 外面が磨耗。
18	SK1170（8F14）／2 層	深鉢	B3	口	1/36	-	-	-	-	-	長・角・金雲・粗砂	LR →結節縄文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：浅黄（2.5Y7/3）	外：スス 内：-	
19a	SK1170（8F9）／1 層	甕	A3	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	波状口縁、変形工字文	ナデ	外：褐灰（7.5YR4/1） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：スス 内：-	
19b	SK1170（8F14）／覆土			胴	-	-	-	-	-	-		変形工字文			外：スス 内：コゲ	
20	SK1170（8F9）／1 層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・海綿・粗砂	変形工字文→ LR 充填か	ミガキ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：-	外：スス 内：-	

弥生土器観察表（2）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
21	SK1170（8F14）／覆土	深鉢	A2	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	条痕文→沈線波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 褐灰（10YR5/1） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	輪積み痕残る（内面）
22a	SK1170（8F15）／覆土	深鉢	B3	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	波状口縁、結節縄文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR6/2）	-	
22b				胴	-	-	-	-	-	-		LR →結節縄文		外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススー 内：-	
23	SK1170（8F14）／1層	壺か	-	肩	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	反撚 RR	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	大型の壺の可能性あり。
24	SK1170（8F14）／1層、8F13／V層	蓋	A3	蓋	6/36	-	-	-	-	-	英・長・金雲・粗砂	LR か→変形工字文	ナデ、沈線文	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	外：ススー 内：ススー	
25	SK1176（8D23·24）／4層（底面直上）	甕	B1	口～胴	8/36	14.4	-	16.2	-	-	英・長・角・金雲	LR →変形工字文	ミガキ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：灰褐（7.5YR4/2）	外：ススー、 吹きこぼれか 内：コゲ	放射性炭素年代測定資料
26	SK1176（8D23・24）／1層	甕	B1	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、三角形モチーフ）	ミガキ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/2）	-	
27	SK1176（8D23・24）／1層	深鉢	A1	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・小礫	条痕文→ナデ	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススー 内：-	輪積み痕残る（内面）
28	SK1176（8D23・24）／1層	深鉢	A4	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文→沈線文（押し引き文）	ナデ	外：黒褐（10YR3/2） 内：褐灰（10YR5/1）	外：ススー 内：-	
29	SK1176（8D23・24）／1層	壺か	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・小礫	LR →磨消浮帯文	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：ススー 内：-	
30a	SK1214（8D25·9D21）／1層、8D25／V層	甕	E2	口～肩	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・赤粘・粗砂・小礫	波状口縁、 反熱 RR →匹字文、刺突文	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	-	
30b	SK1214（8D25・9D21）／1層			胴	-	-	-	-	-	-		条痕文		外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	-	
31	SK1214（8D25・9D21）／1層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、重菱形）	ミガキ	外：黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
32	SK1227（8E25）／3層	甕	F	口～胴	4/36 ※36/36	25.8	25	25.3	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →平行沈線文、ナデ（口縁部）	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：褐灰（10YR4/1）	外：ススー 内：コゲ	輪積み痕残る（内面）
33	SK1227（9E21）／覆土、SK1227（8E20）／3層	鉢	-	底	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	平行沈線文、刺突文	ナデ	外：浅黄橙（10YR8/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	丸みある赤色砂粒が混入。
34	SK1227（8E25）／3層	壺	D	口～頸	8/36	16.6	12.6	-	-	-	長・角・金雲・赤粘・粗砂	条痕文→眼鏡状隆帯	ナデ	外：灰白（10YR8/2） 褐灰（10YR4/1） 内：灰白（10YR8/2） 褐灰（10YR4/1）	-	外面の磨耗が顕著 内面の剥離が顕著
35	SX1397（9E21）／V層	壺	E	口～胴	18/36	10.5	10.6	25.7	-	-	英・長・角・赤粘・粗砂・小礫	条痕文→ LR →平行沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/4） 褐灰（10YR4/1）	外：ススー 内：-	
36	SK1289（9F2）／2層、P1509（9D17・22）／2層	甕	A3	口～胴	7/36	17.3	-	19.6	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、三角形モチーフ）	ミガキ	外：にぶい橙（7.5YR7/3） 褐灰（7.5YR4/1） 内：黒褐（7.5YR3/1）	外：ススー 内：コゲ	
37	SK1289（9F2）／3層	甕	A3	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	波状口縁、変形工字文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：ススー 内：-	
38	SK1289（9F2）／1層	深鉢	B3	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・小礫	LR →結節縄文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススー 内：-	
39	SK1289（9F2）／2層・覆土、SK1170（8F14）／1層	鉢	E1	口～底	6/36	12	10.5	10.9	-	-	英・長・角・金雲・小礫	匹字文、磨消縄文（LR、縦区画帯・棘）	ナデ、沈線文	外：浅黄橙（10YR8/3） 黄灰（2.5Y5/1） 内：浅黄橙（10YR8/3）	-	充填縄文か
40	SK1394（7F5）／1層	甕か	-	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	L か→平行沈線文	ミガキ	外：浅黄橙（10YR8/3） 内：褐灰（10YR5/1）	-	

弥生土器観察表（3）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
41	SK1394（7F5）／１層	深鉢	B2	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →波状沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい橙（7.5YR7/3）	-	穿孔（焼成前）
42	SK1394（7F5）／１層	壺か	-	肩	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →磨消浮帯文	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	
43	SK1449（9F6）／１･２層･覆土、9F6／Ｖ層	深鉢	B1	口～胴	10/36	34	-	34.6	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR	ナデ	外：黒褐（7.5YR3/2） 内：黒褐（7.5YR3/2）	外：スス、浮きこぼれか 内：コゲ	断面にスス付着
44	SK1502（7F4）／１層	壺か	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →磨消浮帯文	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：スス 内：-	
45	SK1523／４層	甕	D	口～胴	5/36	33	31.4	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	LR →変形工字文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：明黄褐（10YR6/6）	外：スス 内：-	充填縄文か
46	SK1523／４層	深鉢	B2	口～胴	8/36	24.4	-	25.6	10	26.5	英・長・角（多）・金雲・粗砂・小礫	地文 LR →平行沈線文、網代圧痕（底面）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 黒褐（7.5YR3/2） 内：灰黄褐（10YR6/2） 黒褐（10YR3/2）	外：スス 内：コゲ（バンド状）	
47	SK1523／４層	鉢	E1	口～胴	3/36 ※8/36	9.6	7.8	8.7	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	波状口縁（端部にキザミ）、 R、匹字文、刺突文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR6/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR6/2）	外：赤彩 内：-	
48a・b	SK1523（9D5）／１層	甕	-	胴	※8/36	-	-	13.4	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、枠状）	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：灰黄褐（10YR6/2）	外：スス 内：-	
49a・b	SK1523（9D5）／１層、9D14／Ｖ層	深鉢	A3	口～底	3/36 ※18/36	-	-	-	11.7	-	英・長・角・海綿・粗砂・小礫	波状口縁、条痕文→ LR 網代圧痕	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） にぶい褐（7.5YR5/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/3） 黒褐（10YR3/1）	外：スス 内：コゲ（バンド状）	
50	SK1523／１層・覆土	鉢	C	口～胴	11/36	12.2	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	横走する LR →平行沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	外：スス 内：コゲか	
51	SK1523／覆土	台付鉢か	-	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	波状口縁、 縦走する LR →工字文	ナデ、沈線文	外：褐灰（7.5YR4/1） 内：にぶい黄橙（10YR7/2） 灰黄褐（10YR5/2）	外：赤彩 内：-	119 と同一個体の可能性あり。
52	SK1536（6F4）／３層	深鉢	B2	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →沈線波状文	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	外：スス 内：-	
53	SK1611／４層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →平行沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	
54	SK1611／覆土	甕	B2	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	LR →変形工字文	ミガキ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/2）	外：スス 内：コゲ	
55	SK1640（8F16）／２層	蓋	A1	蓋	6/36	16.8	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	LR	ナデ、沈線文	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：スス 内：スス	
56	SK1640（8F16）／１・２層	深鉢	B	胴～底	※36/36	-	-	-	8.3	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	LR、平行葉脈圧痕（底面）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：スス 内：コゲ	
57	P1024（7F9）／覆土	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、菱形）	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄褐（10YR5/3） 褐灰（10YR4/1）	外：スス 内：-	
58	P1051（8D25）／覆土	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	変形工字文	ミガキ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：灰黄褐（10YR6/2）	外：スス 内：-	
59	P1051／１層	壺	C	口	3/36 ※6/36	9.8	8.2	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	ミガキ	ミガキ	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
60	P1051／覆土	蓋	B4	蓋	5/36	12	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	沈線文、ナデ	ナデ	外：褐灰（10YR5/1） 灰白（10YR8/2） 内：褐灰（10YR5/1） 灰白（10YR8/2）	-	

弥生土器観察表（4）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
61	P1051／覆土	蓋	B1	蓋	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲	ナデ	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：ススス	
62	P1051／覆土	蓋	-	天井	※36/36	-	-	-	-	-	長・角・金雲・粗砂	網代圧痕（天井部）、横走するLR	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 灰黄褐（10YR6/2） 内：にぶい橙（7.5YR7/4） 褐灰（10YR6/1）	-	天井部径：5.6cm
63	P1352（7F3・4）／覆土	深鉢	B2	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →沈線波状文	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：-	
64	P1428（7F17・18）／覆土	深鉢	B3	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →結節縄文	ナデ	外：黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：-	
65	SH1167（9F18）／1層	深鉢	A	胴～底	※26/36	-	-	-	13.2	-	英・長・角・赤粘・粗砂・小礫	条痕文、ナデか（底面）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：明黄褐（10YR6/6）	外：ススス 内：コゲ	外面が磨耗。
66	11C14・15／V層	甕	A1	口～底	1/36 ※13/36	12.1	-	15.3	8.7	19.8	英・長・角・金雲・粗砂	LR →匹字文、横位の羽状沈線文、平行沈線文	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 灰黄褐（10YR5/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄褐（10YR6/2）	外：ススス 内：-	外面の磨耗が顕著。
67	8D22／V層	甕	A2	口～胴	3/36 ※6/36	15.5	12.8	17.2	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	匹字文（頸部）、工字文（肩部）	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
68	9E11／V層	甕	A3	口	9/36	19.4	-	-	-	-	英・長・角・金雲（多）・粗砂	波状口縁、変形工字文	ミガキ	外：暗褐（10YR3/3） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：コゲ	
69	8F13／V層	甕	A3	口～底	5/36	14.8	-	15.3	9.6	17.8	英・長・角・金雲・粗砂	LR →変形工字文、平行沈線文	ナデ、沈線文	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/2）	外：ススス 内：コゲ	外面わずかに剥離。
70	6E10・18／V層	甕	B1	口～胴	8/36	13.4	-	14.9	-	-	英・長・角・金雲・小礫	LR →変形工字文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：褐灰（10YR4/1）	外：ススス 内：コゲ	輪積み痕残る（内面）
71	7E4／V層	甕	B1	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	平行沈線文、波状文	ミガキ	外：褐灰（10YR4/1） 内：褐灰（10YR4/1）	外：ススス 内：コゲ	
72	8F12／V層	甕	B2	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・金雲・粗砂	LR →変形工字文	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/1）	外：ススス 内：コゲ	
73	8E18／V層	甕	B2	口	4.5/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	変形工字文→ LR 充填	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	
74	8E18／V層	甕	B2	口	2.5/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →変形工字文（簡略化）	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	
75	9D22／V層	甕	B2	口～底	14/36	13.8	-	14.9	8.4	14.6	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →平行沈線文、波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：ススス 内：-	
76	8F19／V層	甕	B2	口	7/36	14.9	-	17.6	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →平行沈線文、波状文	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/2）	外：ススス 内：-	2か所に穿孔（補修）
77	8F23／V層	甕	B2	口	6/36	17.4	-	20	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →平行沈線文、波状文	ナデ	外：黒褐（7.5YR3/1） 内：黒褐（7.5YR3/1）	外：ススス 内：コゲ	
78	7F6／Ⅳ層	甕	B2	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →変形工字文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR6/2）	外：ススス 内：-	
79	9E19／V層	甕	B2	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	沈線文（三角形・菱形モチーフ）	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 内：灰黄（2.5Y7/2）	-	
80a・b	a）9F13／V層 b）9F11／V層	甕	Bか	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	変形工字文→ LR 充填	ナデ	外：黒褐（7.5YR3/1） 内：黒褐（7.5YR3/1）	外：ススス 内：コゲ	
81	9E22／V層	甕	Bか	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR、モチーフ不明）	ナデ	外：黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：コゲ	
82	8C24／V層	甕	C	口～胴	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR 充填、王字状）	ナデ	外：にぶい褐（7.5YR5/4） 内：灰褐（7.5YR4/2）	外：ススス 内：-	
83	8D22／V層	甕	C	胴～底	※7/36	-	-	-		-	英・長・金雲・海綿・粗砂	磨消縄文（LR、枠状）	ナデ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：灰褐（7.5YR4/2）	外：ススス 内：コゲ	

弥生土器観察表（5）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
84a	10D6・11／V層	甕	E1	a）口 b）頸～肩	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文→反撚 LL	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	外：ススス 内：-	
84b	10D6・11／V層	甕	E1	頸～肩	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文→反撚 LL	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	外：ススス 内：-	
85a	8F10／V層	甕	E2	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	波状口縁、LR →平行沈線文	ナデ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：ススス 内：-	丸みある赤色砂粒が混入
85b	9E18／V層	甕	E2	肩	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR・結節縄文→沈線文	ナデ	外：にぶい褐（7.5YR5/3） 内：にぶい褐（7.5YR5/4）	外：ススス 内：-	丸みある赤色砂粒が混入
85c	9E17／V層	甕	E2	肩	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →沈線文	ナデ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：ススス 内：-	丸みある赤色砂粒が混入
85d	8F10／V層	甕	E2	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文→ LR・結節縄文→沈線文	ナデ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：ススス 内：コゲ	丸みある赤色砂粒が混入
85e	9E22／V層	甕	E2	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	条痕文→ LR・結節縄文→沈線文	ナデ	外：にぶい褐（7.5YR5/3） 内：にぶい褐（7.5YR5/4）	外：ススス 内：-	丸みある赤色砂粒が混入
86	10E19／V層	甕	F	口～胴	12/36	20	18.8	22.8	-	-	英・長・角・金雲・小礫	条痕文→ナデ（口縁部）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：コゲか	波状口縁気味
87	8D19／V層	甕	-	口～胴	2/36 ※11/36	21.7	18.4	20.7	-	-	英・長・角・赤粘	RL	ハケメ	外：にぶい黄褐（10YR5/4） 灰黄褐（10YR4/2） 内：橙（7.5YR6/6） 灰黄褐（10YR4/2）		外面の磨耗が顕著。 明るい褐色粘土（φ 3mm）が均一に混入。 輪積み痕残る（内面）
88	6E14／V層	深鉢	A1	口～胴	5/36	28	-	31.6	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・海綿・粗砂	条痕文	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄褐（10YR5/3） 褐灰（10YR5/1）	外：ススス 内：コゲ （底部内面）	
89	12F14・15／V層	深鉢	A1	口～胴	8/36	28.9	-	30	-	-	英・長・角（多）・金雲・赤粘・粗砂	条痕文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：灰黄褐（10YR6/2）	外：ススス 内：-	
90	10C15／V層	深鉢	A1	口	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	指頭痕による波状口縁、条痕文	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	外：ススス 内：コゲか	
91	6E10／V層	深鉢	A2	口	6/36	26	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	条痕文→波状沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：浅黄橙（10YR8/4）	外：ススス 内：-	
92a・b	10E7／V層	深鉢	A3	a）口 b）胴	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・小礫	波状口縁、 条痕文→ LR →口縁部ナデ	ナデ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：ススス 内：コゲ	
93	8D13／V層	深鉢	A5	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	条痕文→結節縄文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	外：ススス 内：-	
94	8E18／V層	深鉢	B2	口～胴	5/36	20.6	-	23.8	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR →波状沈線文	ナデ	外：黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：コゲ	
95	10D5・10／V層	深鉢	B2	口	18/36	36.6	-	37.6	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	LR →沈線波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	
96	8F17／V層	深鉢	B2	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・小礫	縦走する LR →波状沈線文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：-	
97	8D13／V層	深鉢	B2	口～胴	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲	平行沈線文→ミガキ、縦走する LR	ナデ	外：黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR4/2）	外：ススス 内：コゲ	
98	10E15／V層、 11E11／V層	深鉢	B3	口～胴	4/36 ※8/36	29.2	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	横走する LR →結節縄文	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/1）	外：ススス 内：コゲ	
99	11C12／V層	深鉢	C	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	LR →平行沈線、横位の羽状沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：ススス 内：-	
100	8F18／V層	深鉢	D	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR（複合口縁）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	丸みある赤色砂粒が混入。
101	8D18／V層	鉢	A1	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲	LR →変形工字文	ミガキ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	

弥生土器観察表（6）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
102	9E12／V層	鉢	A2	口～底	11/36	16.9	-	-	6.1	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	ナデ	ナデ	外：にぶい橙（7.5Y7/4） 内：橙（7.5YR7/6）	外：ススス 内：ススス	
103	10E1／V層	鉢	B	口	5/36	17.2	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	変形工字文, LR（口縁部）	ナデ、沈線文	外：にぶい黄褐（10YR4/3） 内：黒褐（10YR3/2）	外：ススス 内：コゲ	
104 a～d	6E24／V層	鉢	B	口	1/36	-	-	-	-	-	英・長・角・海綿	LR →変形工字文、 底面に平行沈線文	ナデ、沈線文	外：黄灰（2.5Y4/1） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	
105	7F6／V層	鉢	C	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・金雲・粗砂・小礫	波状口縁、 平行沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	-	
106	8F3／V層	鉢	C	口	4/36	-	-	-	-	-	長・角・金雲	LR →平行沈線文	ミガキ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：褐灰（10YR4/1）	-	
107	9F7／V層	鉢	E1	胴	※6/36	-	12.3	14.1	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	沈線文（三角形モチーフ）、 変形沈線文、刺突文	ナデ	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	
108	8F5／V層	鉢	E2	底	-	-	-	-	-	-	長・角・金雲	LR →平行沈線文	ミガキ	外：にぶい橙（7.5YR7/3） 内：褐灰（7.5YR5/1）	-	
109	7E5／V層	鉢	-	底	※11/36	-	-	-	6	-	英・長・角・金雲・粗砂	匹字文、LR（底面）	ナデ	外：浅黄橙（10YR8/3） 内：灰白（2.5Y8/2）	-	
110	11E11／V層	鉢	D1	口～胴	5/36	35.4	-	35.8	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	磨消縄文（LR、三角形モチーフ）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 灰黄褐（10YR5/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/2） 灰黄褐（10YR5/2）	外：ススス 内：コゲ	
111	9E8・17／V層、 SK1227（8E20）／3層、 SK1289（9F2）／3層	鉢	D3	口～底	5/36	30.4	-	32.6	13	24	英・長・角・金雲・赤粘・海綿・粗砂・小礫	LR →匹字文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 黒褐（10YR3/2） 内：灰黄褐（10YR6/2） 褐灰（10YR5/1）	外：ススス 内：コゲ	断面にスス付着
112	8E18／V層	鉢	D3	口～胴	4/36 ※6/36	30.4	-	34	-	-	英・長・金雲・粗砂・小礫	LR →変形工字文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：ススス 内：-	
113	8E17／V層	鉢	D2	口～胴	5/36	19	-	24	-	-	長・角・金雲・粗砂	LR →変形工字文	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 灰黄褐（10YR5/2） 内：黒褐（10YR3/1） にぶい黄橙（10YR7/2）	外：ススス 内：コゲ	
114	10E8／V層	鉢	D2	口～胴	11/36	22	-	25.4	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	磨消縄文（LR充填、三角形モチーフ）	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 内：黒褐（10YR3/2）	外：ススス 内：コゲ	
115a・b	7F7／V層	鉢	D3	a）口 b）胴	3/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	RL →平行沈線文、波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：-	
116	9E11／V層	鉢	-	口～胴	4.5/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・海綿	波状口縁（口縁端部に沈線文）、 変形工字文	ミガキ、 平行沈線文	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	外：赤彩 内：赤彩	搬入品か
117	7E3／V層	高杯か	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・海綿	LR →変形工字文	ミガキ	外：褐灰（7.5YR4/1） 内：褐灰（7.5YR4/1）	外：赤彩 内：-	
118	6E25／V層	高杯か	-	口	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・海綿・粗砂	変形工字文	ナデ、沈線文	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3） 褐灰（10YR4/1）	-	
119	8E18／V層	高杯か	-	口	6/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	変形工字文	ミガキ、沈線文	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	
120	8D19／V層	台付鉢か	-	口～胴	4/36	-	-	-	-	-	長・角・金雲（細）・赤粘	波状口縁、 縦走するLR →平行沈線文	ミガキ、沈線文	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	外：沈線溝に赤彩 内：-	精良な胎土
121	10E2／V層	台付鉢	-	台	※27/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →平行沈線文、波状文	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	台部最小径：7.4cm
122	9E17／V層	壺	A	口～頸	10/36	8	6.8	-	-	-	英・長・金雲・粗砂	複合口縁、 沈線文→粘土粒の貼り付け、 ミガキ	ミガキ	外：黒（10YR2/1） 内：黒（10YR2/1）	外：ススス 内：ススス	断面にスス付着

弥生土器観察表（7）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
123a	8D13・14／V層	壺	F	胴	8/36	-	-	32.7	-	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	条痕文→平行沈線文、沈線文（LR か→刺突文）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：-	輪積み痕（内面）
123 b～d	8D23／V層	壺	F	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	沈線文（LR か→刺突文）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：コゲ	Y133 の断面にスス付着。
124	8D10／V層	壺	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	R（撚りが弱い） →下向き連弧文（2 本描き）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	-	
125	8D13・14／V層	壺	B	口～肩	28/36	8.8	7.5	-	-	-	英・長・角・赤粘・粗砂・小礫	磨消縄文（LR、枠状）	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	-	
126	5F5／V層	壺か	-	肩か	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	磨消縄文（LR 充填、錨形）	ナデ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	-	
127	8F9／Ⅳ層	壺か		肩か	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲	磨消縄文（LR 充填、円形など）	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR6/2）	-	
128a・b	9E17／V層	壺か	-	胴か	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR →磨消浮帯文	ナデ	外：褐灰（10YR4/1） 内：褐灰（10YR4/1）	-	
129a・b	8F3／V層	壺か	-	胴か	-	-	-	-	-	-	長・角・金雲	LR →磨消浮帯文	ミガキ	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：褐灰（10YR4/1）	-	小型壺か
130a・b	8F13／V層	不明	-	胴か	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR か→沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：褐灰（10YR5/1）	-	
130b	8F13・V層	不明	-	胴か	-	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR か→沈線文	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：褐灰（10YR5/1）	-	
131	8D19／V層	蓋	A1	蓋	6/36	19	-	-	-	-	英・長・金雲・粗砂・小礫	LR	ナデ	外：黒褐（10YR3/1） 内：黒褐（10YR3/1）	外：ススス 内：ススス	
132	10E2／V層	蓋	B2	蓋	11/36	18.9	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	変形工字文	ミガキ、沈線文	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	外：沈線溝に赤彩 内：-	
133	9E14／V層	蓋	B3	蓋	5/36	-	-	-	-	-	英・長・角（多）・金雲・粗砂	沈線文（同心円）→平行沈線文	ミガキ、沈線文	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：黒褐（10YR3/2）	外：ススス 内：ススス	
134	8D24／V層	蓋	B5	蓋	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘	結節縄文	ナデ	外：橙（7.5YR6/6） 内：橙（7.5YR6/6）	外：ススス 内：ススス	
135	8F1／V層	蓋	A4	蓋	4/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲（粗）	LR →磨消浮帯文（円形）	ナデ、一部ミガキ	外：黒褐（10YR3/2） 内：黒褐（10YR3/2）	-	
136	8F12／V層	蓋	C1	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：褐灰（10YR4/1）	-	つまみ径：4.9cm
137	10E17／V層	蓋	C2	つまみ	※29/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：灰黄褐（10YR6/2）	-	つまみ径：8.0cm
138	6E23／V層	蓋	C2	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	LR	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/4） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	-	つまみ径：6.2cm
139	6E22／V層	蓋	D	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	ミガキ	ナデ	外：浅黄橙（10YR8/4） 内：浅黄橙（10YR8/3）	-	つまみ径：7.9cm
140	9E12／V層	蓋	E	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	ナデ	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	外：ススス 内：-	つまみ径：7.1cm
141	9E13／V層	蓋	-	つまみ～蓋	※23/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂	LR（体部）、ナデ（つまみ部）	ナデ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：褐灰（10YR5/1）	-	つまみ最小径：5.6cm
142	9F9／V層	蓋	-	つまみ	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	ナデ、穿孔（5 箇所）	ナデ（つまみ部）、ミガキ（体部）	外：浅黄橙（10YR8/4） 内：褐灰（10YR4/1）	-	つまみ最小径：7.4cm 体部内面：浅黄（2.5Y7/3）

弥生土器観察表（8）

報告No.	出土位置／層位	器種	分類	残存部位	口縁残存率（X/36）	法量（cm）					混入物	調整・施文		色調	付着物	備考
						口径	頸径	体部最大径	底径	器高		外面	内面			
143	8F15 ／Ⅴ層	蓋	-	天	※36/36	-	-	-	-	-	英・長・角・金雲・粗砂	天井部にLR	ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：灰（5Y4/1）	-	天井部：灰黄褐（10YR5/2） 天井部径：6.1cm
144a	6E17 ／Ⅴ層	甕	-	口	2/36	-	-	-	-	-	英・長・角・赤粘・海綿・粗砂・小礫	ハケメ→木目刻目文、平行沈線文、上向き連弧文、下向き連弧文	ハケメ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：スス 内：-	
144b	6E17 ／Ⅴ層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・赤粘・海綿・粗砂・小礫	ハケメ→横位の羽状沈線文	ハケメ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：スス 内：-	
144c	試掘 5T、6E21 ／Ⅳ層	甕	-	胴	-	-	-	-	-	-	英・長・角・赤粘・海綿・粗砂・小礫	ハケメ→横位の羽状沈線文、平行沈線文、下向き連弧文	ハケメ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	外：スス 内：-	輪積み痕残る（内面）

土製品・焼粘土塊観察表

報告No.	出土位置／層位	器種	法量				混入物	色調		特徴	備考
			長さ（mm）	幅（mm）	厚み（mm）	重さ（g）		外面	内面		
145	8E13 ／Ⅴ層	ミニチュア土器	-	-	-	4.98	英・長・角・金雲	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR6/3）	手づくね、指頭痕、ナデ	最小径 18mm
146	9D20 ／Ⅴ層	土製品か	35	24	-	14.07	英・長・角・金雲・粗砂	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/2）	幅 3mm の沈線文（口縁	内外面に赤彩
147	9E1 ／Ⅴ層	焼粘土塊	52	36	23	19.04	英・長・角・金雲・粗砂	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい橙（5YR7/4）	粘土板折り曲げ成形、指頭痕、植物痕か	
148	7F13 ／Ⅴ層	焼粘土塊	61	38	19	29.5	英・長・角・金雲・赤粘・粗砂・小礫	にぶい橙（7.5YR7/3）	褐灰（10YR4/1）	指頭痕、穿孔（焼成前）	
149	8E3 ／Ⅴ層	焼粘土塊	35	21	17	10.52	英・長・角・金雲・粗砂・小礫	にぶい褐（7.5YR6/3）	にぶい黄橙（10YR7/2）	指頭痕	
150	8F13 ／Ⅴ層	焼粘土塊	35	28	16	13.86	英・長・角・金雲・粗砂	褐灰（10YR5/1）	灰黄褐（10YR5/2）	指頭痕、剥離（裏面）	
151	7F5 ／Ⅴ層	焼粘土塊	60	38	28	55.52	英・長・角・金雲・小礫	にぶい黄橙（10YR7/2）	にぶい黄橙（10YR7/3）	指頭痕（にぎりによる）	
152	SK1166（8F11）／2層	焼粘土塊	28	23	11	7.65	英・長・角・金雲・粗砂	灰黄褐（10YR6/2）	にぶい黄橙（10R7/3）	指頭痕、植物痕	
153	9E5 ／Ⅴ層	焼粘土塊	35	22	15	11.69	英・長・角・金雲・粗砂	にぶい黄橙（10YR6/3）	灰黄褐（10YR6/2）	指頭痕、植物痕	
154	8E1 ／Ⅴ層	焼粘土塊	33	30	15	14.98	英・長・角・金雲・粗砂	灰白（10YR8/2）	褐灰（10YR4/1）	植物痕か	

石鏃観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	遺存状態	備考
155	SK1040（9E15）	覆土	A	2.34	1.02	0.54	1.16	メノウ	縦長	完形	
156	8E25	V	A	2.53	0.88	0.62	1.11	流紋岩		完形	
157	9E10	V	A	2.38	0.83	0.39	0.72	流紋岩	縦長	完形	
158	6F3	V	A	2.51	0.96	0.56	1.14	頁岩	縦長	完形	
159	6F5	V	A	1.86	1.07	0.49	0.61	黒曜石		完形	黒曜石蛍光Ｘ線産地分析番号１
160	7E22	V	A	2.01	1.08	0.49	0.78	珪質頁岩	縦長	完形	
161	SK1170（8F14）	１層	A	2.21	0.94	0.43	0.62	流紋岩		完形	
162	SK1170（8F14）	１層	A	2.61	1.36	0.69	1.48	流紋岩		完形	
163	9E11	V	A	3.13	1.22	0.48	1.57	流紋岩		完形	
164	SK1289（9F2）	３層	A	2.95	1.20	0.51	1.39	流紋岩		完形	
165	9D17	Ⅳ	B	1.78	1.41	0.50	0.85	メノウ		完形	
166	SK1170（8F14）	１層	B	2.07	1.16	0.31	0.57	珪質頁岩		完形	
167	SK1165（8F8）	１層	B	2.68	1.19	0.59	1.09	流紋岩		完形	
168	7F1	V	B	2.82	1.29	0.44	1.02	流紋岩		完形	
169	10E14	V	C	2.00	1.27	0.42	0.64	メノウ		完形	
170	9E22	V	C	1.86	1.05	0.32	0.38	黒曜石		完形	黒曜石蛍光Ｘ線産地分析番号３
171	9E7	V	C	2.13	1.17	0.42	0.60	黒曜石		完形	黒曜石蛍光Ｘ線産地分析番号２
172	7D20	V	C	2.49	1.09	0.41	0.57	メノウ		完形	
173	SK1170（8F14）	２層	C	2.22	1.32	0.43	0.72	流紋岩		完形	
174	10E3	V	C	2.58	1.49	0.76	1.46	流紋岩		完形	
175	SK1165（8F8）	２層	C	3.44	1.56	0.47	1.99	メノウ		完形	
176	9D17	Ⅳ	C	2.81	1.15	0.51	1.18	流紋岩		完形	
177	SB1607 - P1508	１層	D	2.20	1.27	0.28	0.60	頁岩		完形	
178	8D25	Ⅰ	D	2.43	1.18	0.47	1.05	玉髄		完形	
179	9F1	V	D	3.43	1.34	0.46	1.13	頁岩		完形	

石鏃失敗品観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	備考
180	10D21	V	2.15	1.27	0.41	1.00	流紋岩		
181	8F12	Ⅳ	5.17	2.97	1.12	14.13	流紋岩	横長	

石錐観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	遺存状態	備考
182	9E2	V	A	2.99	0.87	0.71	1.45	メノウ		完形	
183	9E18	V	A	4.37	0.85	0.62	2.01	珪質頁岩		完形	
184	7E16	V	A	2.29	0.94	0.71	1.25	流紋岩		完形	先端に顕著な摩耗痕
185	SK1523	覆土	A	2.96	0.88	0.68	1.71	流紋岩		完形	先端に顕著な摩耗痕
186	6E15	V	A	3.50	0.92	0.89	2.10	珪質頁岩	縦長	完形	
187	9E12	V	A	3.34	1.41	0.73	3.45	珪質頁岩	縦長	完形	先端に顕著な摩耗痕
188	8F12	V	A	3.88	1.24	0.87	3.89	頁岩		完形	先端に顕著な摩耗痕
189	9D9	V	A	4.26	0.96	0.78	2.87	凝灰岩	縦長	完形	
190	6E14	V	B	2.89	2.01	0.78	2.20	流紋岩	縦長	完形	
191	8F8	—	B	3.43	2.16	1.33	2.71	流紋岩		完形	古代・中世の遺構（SK507）への混入品
192	9E22	V	B	3.83	3.56	1.71	11.32	流紋岩		錐部欠	
193	8F3	V	B	2.92	2.70	0.87	3.56	流紋岩	横長	完形	
194	8D18	V	B	2.49	2.60	0.53	1.72	流紋岩		完形	
195	SK1227（8E25）	１層	C	2.72	1.23	0.70	1.17	流紋岩		完形	先端に顕著な摩耗痕
196	SK1523（9D5）	覆土	C	3.30	1.57	0.69	2.05	珪質頁岩		完形	

不定形石器観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	二次調整部位	備考
197	SK1040（9E15）	２層	A	9.37	3.63	2.77	54.78	流紋岩	縦長	左側縁	
198	SK1227（8E25）	３層	A	5.35	2.95	1.76	18.58	流紋岩		左側縁	
199	7F9	V	A	5.14	4.54	1.16	22.25	流紋岩		左側縁	
200	8D15	V	B	8.63	5.28	2.46	59.31	流紋岩	縦長	両側縁	
201	10E9	V	C	5.62	4.53	1.64	37.14	流紋岩	縦長	下縁	
202	8E25	V	D	1.95	1.73	0.37	1.08	メノウ			使用痕あり
203	8F12	V	D	3.87	4.05	1.23	16.70	凝灰岩			使用痕あり
204	8F2	V	D	5.89	3.30	1.92	25.51	流紋岩	縦長		使用痕あり

両極剥離痕のある石器観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
205	6E15	V	A	2.22	1.85	0.97	3.34	流紋岩	
206	8D18	V	A	3.45	2.55	0.91	5.50	流紋岩	
207	8E20	V	A	5.27	4.61	2.91	63.81	メノウ	
208	8F14	V	A	3.66	3.45	1.31	14.61	凝灰岩	
209	9D12	V	A	3.87	4.42	1.45	21.87	流紋岩	
210	9E18	V	A	3.38	1.89	0.89	6.58	珪質頁岩	
211	8D19	V	B	5.05	5.15	1.86	48.77	流紋岩	
212	10E17	V	B	3.35	2.45	0.72	5.26	珪質頁岩	
213	11D5	V	C	2.43	1.48	0.63	1.66	流紋岩	
214	9E7	V	C	2.74	3.43	1.10	8.80	流紋岩	

磨製石斧観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
215	6E23	V	7.5	3.2	1.6	57.14	輝緑岩	完形	装着時のツブレ
216	11C13	V	7.4	4.3	1.7	74.91	輝緑岩	完形	装着時のツブレ
217	8F7	V	6.4	4.9	1.3	59.62	輝緑岩	完形	装着時のツブレ
218	10F14	V	7.8	4.4	3.1	156.41	輝緑岩	基部欠損	
219	試掘 5T	表面採集	4.0	1.2	0.8	5.82	結晶片岩	基部欠損	
220	9E22	V	2.1	2.1	0.8	3.93	蛇紋岩	刃部欠損	

敲磨石類観察表

「磨」は磨痕、「敲」は敲打痕を表している。「◎」は表裏の両面、両側縁、両端部に、「○」は片面、片側縁、片端部に使用痕が認められることを表している。「空欄」は使用痕が認められないものである。

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	表裏面		側縁		端部		遺存状態	備考
									磨	敲	磨	敲	磨	敲		
221	8E20	V	A	10.4	8.2	6.0	658.61	安山岩	○						完形	
222	SK1611	4 層	A	10.4	6.7	5.2	484.93	安山岩	◎						完形	
223	10E23	V	A	7.6	6.3	3.6	226.94	花崗岩	◎						完形	
224	P1051（8D25）	2 層	A	9.0	8.2	5.9	600.37	安山岩	◎						完形	
225	SK1523（9D5）	1 層	A	11.1	8.7	6.3	837.37	花崗岩	◎						完形	
226	9E7	V	A	11.9	10.9	3.1	622.28	花崗岩	◎						完形	
227	8E2	V	A	14.8	12.4	2.8	800.00	ヒン岩	◎						完形	
228	7E16	V	A	11.8	10.1	5.4	947.12	安山岩	◎						完形	
229	SK1040（9E15）	2 層	A	11.3	8.7	4.3	612.19	花崗岩	◎						4／5	
230	9E8	V	B	8.6	7.9	5.4	439.73	安山岩	◎	○					3／5	
231	9E8	V	B	11.5	9.1	5.5	484.37	安山岩	◎	◎					完形	
232	SK1040（9E20）	2 層	B	15.7	10.5	4.2	666.05	安山岩	◎	◎					完形	
233	9D24	V	B	16.8	8.1	7.3	747.84	凝灰岩	◎	○					完形	
234	8D19	V	B	15.0	10.4	7.4	1019.17	凝灰岩	○	◎					3／5	
235	SK1165（8F8）／10D5	1 層／V	B	26.8	7.4	6.0	1400.00	凝灰岩	◎	◎	○				完形（接合）	
236	9E7	V	C	8.9	8.1	4.9	475.20	安山岩	◎			◎			完形	
237	P1352（7F3）	1 層	C	10.2	8.3	4.3	535.04	花崗岩	◎			○			完形	
238	SB1607 - P1392	1 層	C	10.8	9.4	6.0	853.91	花崗岩	◎			○			完形	
239	6F5	V	C	10.8	8.5	5.7	777.45	花崗岩	◎			○			完形	
240	SK1394（7F5）	1 層	C	6.5	4.6	2.5	113.15	安山岩	○					○	3／5	割れ口にも磨痕
241	SK1214（9E20）	2 層	C	13.2	11.5	4.9	1090.65	花崗岩	◎			◎			完形	
242	SK1640（8F11）	1 層	C	9.9	8.6	4.8	564.97	安山岩	○			○			4／5	
243	9F12	V	D	8.1	8.0	4.5	422.63	石英安山岩	◎	◎		○			完形	
244	8D10	V	D	8.6	6.6	4.6	220.68	凝灰岩	○	○				◎	完形	
245	8E5	V	D	11.8	9.5	4.5	768.77	花崗岩	◎	○		◎			完形	
246	8D22	V	D	9.3	7.8	5.6	611.01	安山岩	◎	○		○			4／5	
247	6E10	V	E	9.4	7.7	3.7	218.82	凝灰岩		◎					完形	
248	9E2	V	F	19.1	12.9	8.1	2129.17	安山岩				○			4／5	
249	9F20	V	F	8.4	5.5	3.7	274.73	流紋岩						◎	完形	線状の圧痕も敲打によるものと考えた。
250	P1051（8D25）	1 層	F	10.9	5.9	5.8	330.49	輝緑岩				○			完形	
251	SK1523	覆土	F	7.8	6.2	3.4	205.34	ホルンフェルス						○	3／5	線状の圧痕も敲打によるものと考えた。
252	SX1397（9E21）	V	F	13.0	6.5	4.1	366.03	花崗岩						◎	完形	
253	SX1397（9E21）	V	F	15.4	8.9	7.2	1039.46	ホルンフェルス						◎	完形	
254	9E12	V	F	7.4	4.5	2.8	109.13	花崗岩						○	4／5	
255	SB1607 - P1391	6 層	F	8.9	4.5	2.6	139.24	花崗岩						◎	4／5	
256	SK1227（8E20）	3 層	F	8.5	6.4	3.0	203.74	流紋岩						○	4／5	

石皿・砥石・台石類観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
257	8F12	V	23.2	21.8	4.5	3700.00	花崗岩	完形	
258	SK1523（9D5）	1 層	19.1	17.9	4.3	2400.00	花崗岩	完形	
259	12C16	V	30.5	15.3	8.2	4700.00	花崗岩	欠損	
260	8F9	V	16.6	8.2	2.4	448.53	砂岩	欠損	
261	10E15	V	17.0	13.7	6.1	1672.19	花崗岩	欠損	
262	6F2	V	17.3	19.5	6.4	2700.00	凝灰岩	欠損	
263	SB1607 - P1507	1 層	10.6	6.4	5.1	216.48	凝灰岩	欠損	
264	10E2	V	13.9	12.6	7.1	1617.65	安山岩	欠損	凹状の敲打痕あり。
265	6D25	V	4.6	3.7	3.1	11.67	軽石	完形	
266	6E11	V	7.4	10.3	8.8	1100.33	閃緑岩	欠損	
267	9D24	V	17.0	8.9	8.1	1471.72	花崗岩	欠損	

石核観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
268	SB1607 - P1392	1 層	A	81.41	158.04	61.62	827.98	頁岩	
269	7E13	V	B	68.79	148.77	68.87	495.53	流紋岩	
270	9E7	V	B	81.93	111.75	43.35	352.33	流紋岩	
271	8E12	V	A	45.68	48.54	41.22	113.54	流紋岩	
272	SB1607 - P1241	1 層	A	88.41	103.27	45.75	286.50	流紋岩	
273	8F2	V	A	27.55	51.94	29.35	29.67	流紋岩	
274	11C7	V	B	41.29	103.20	54.66	171.91	流紋岩	
275	P1024（7F9）	2 層	B	43.11	81.65	39.34	140.67	メノウ	

異形石器観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	備考
276	7E10	V	48.17	13.06	11.07	5.52	流紋岩	横長	
277	9E8	V	27.13	14.38	6.35	2.35	黒色緻密安山岩	縦長	
278	6E8	—	18.0	12.8	4.8	532.50	軽石	—	いわゆる「雨垂れ石」。 古代のピット P1387 の 1 層から出土。

玉類観察表

No.	出土地点（遺構名）	出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
279	8E3	V	3.9	2.0	1.8	18.39	ヒスイ	垂玉
280	8F13	V	3.7	2.7	0.8	13.56	蛇紋岩	垂玉
281	SK1289（9E22）	2 層	2.1	1.2	0.4	1.50	蛇紋岩	垂玉
282	8D25	V	2.3	2.1	0.9	2.38	凝灰岩	垂玉
283	SB1607 - P1392	9 層	2.5	1.7	1.0	8.00	ヒスイ	原石
284	7F1	V	3.0	2.3	1.9	21.84	蛇紋岩	原石。狭義のロディン岩
285	P1413（7E13・14）	2 層	2.4	2.2	1.4	8.61	蛇紋岩	原石。狭義のロディン岩

図　　版

凡　　例

1　遺構平面図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

焼土範囲

炭化物範囲

地山が変質（変色）したと考えられる範囲

2　遺構断面図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

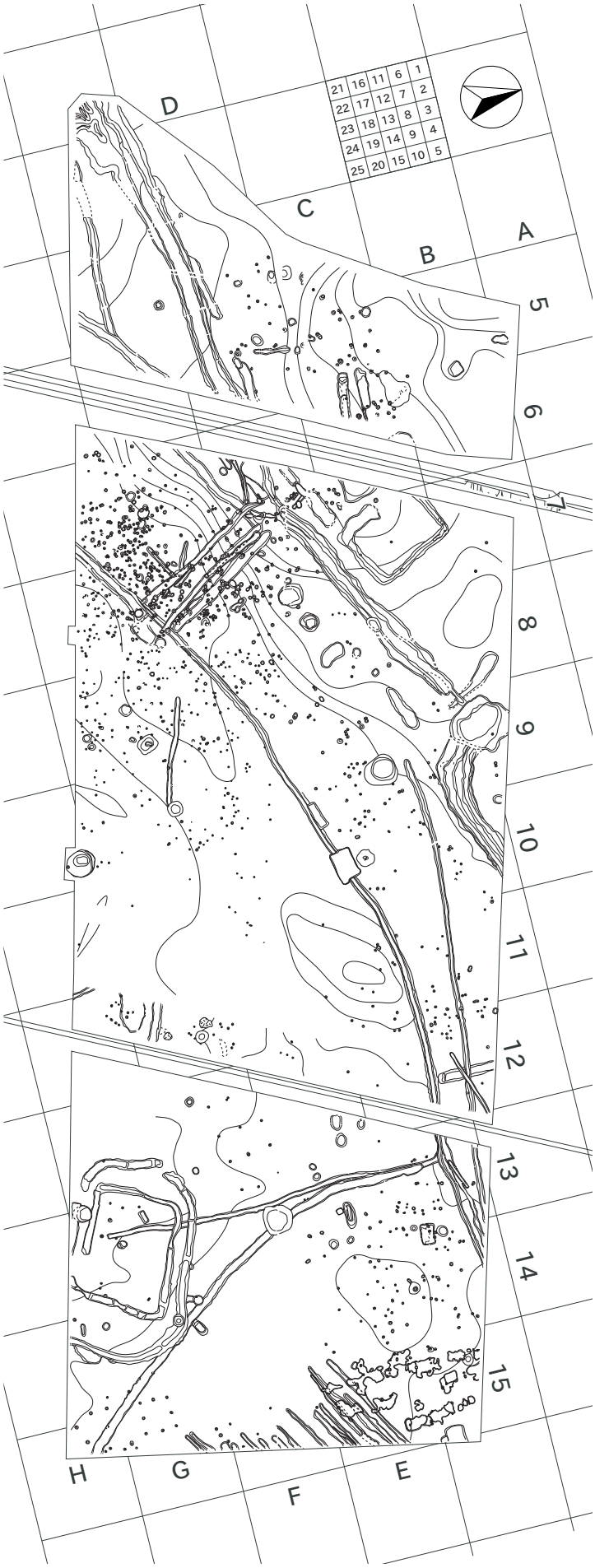
炭化物の混入が10％以上、もしくは主体とする堆積層

3　遺物図版で使用したスクリーントーンの凡例は実測図とともに個別に示した。

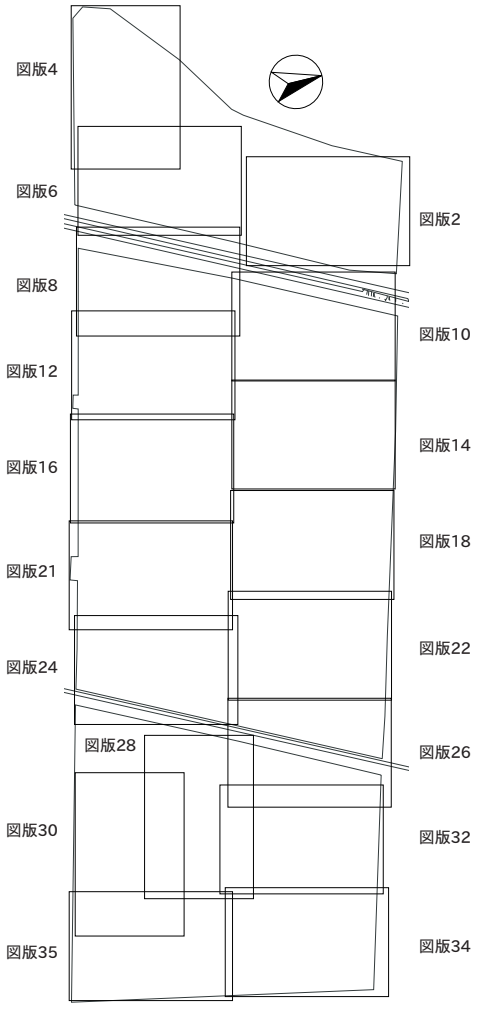
4　土器は須恵器を断面塗りつぶしとし、これ以外については白抜きとした。

5　遺構個別図において、掘立柱建物を構成するピットに●記号を付した。

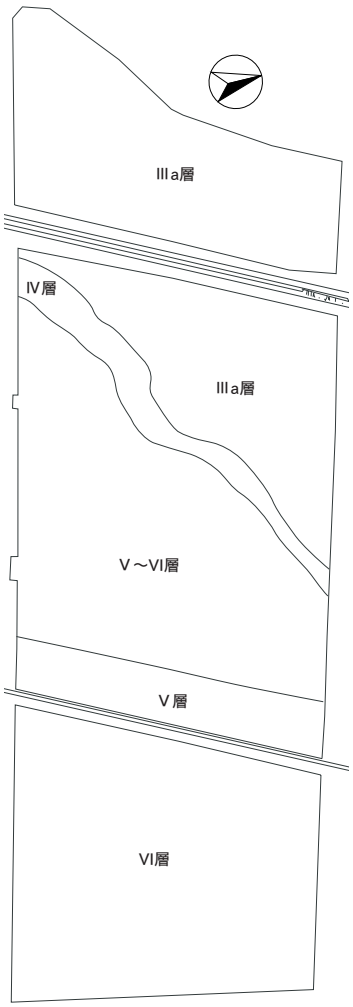
6　遺物写真図版の縮尺は、図面図版と概ね同じである。



遺構配置図1（第1面）



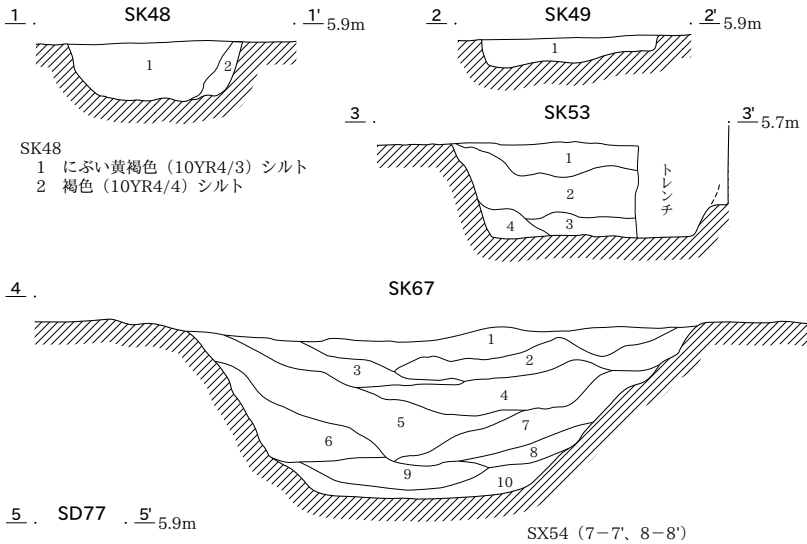
遺構分割図
配置模式図
（第1面）



遺構確認層位模式図
（第1面）
0 (1:1000) 20m

遺構分割図 1

SK48
1
1'
6B
4Tr
3'
SK53
3
5.50
5.60
4
11
SX85
6C
SK67
18'
P86
18
P133
11'
4'
P100
P29
13'
13
17
P46
P74
P73
17'
12'
8'
7
5
SX54
SD77
P28
12
16
5'
2
P51
SK49
2'
8
7'
16'
10
P101
9'
P117
9
14'
10'
SX55
14
P30
5.70
15'
15
P31
SD110
6
6'
P136
6D
5.80
0
(1 : 80)
4m

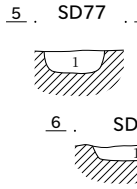


SK48
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　褐色（10YR4/4）シルト

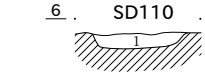
SK49
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下

SK53
1　褐色（10YR4/4）シルト　土質はⅢa層に近似する。
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　しまり：強い
4　暗褐色（10YR3/3）シルト　しまり：強い　炭化物（φ～1mm）1%以下　色調は3層よりやや暗い。

SK67
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%以下
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
4　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下　色調は2層よりわずかに明るい。
5　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
6　褐色（10YR4/4）砂質シルト
7　黒褐色（10YR3/1）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
8　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
9　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い　炭化物（φ～1mm）1%
10　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～10mm）1%

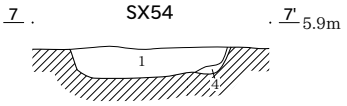


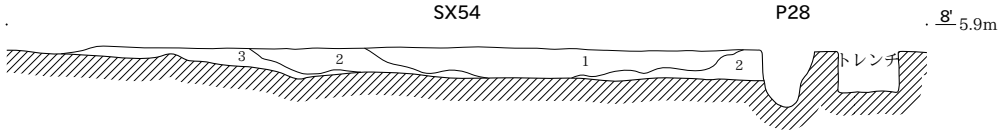
SD77
1　褐色（10YR4/4）シルト

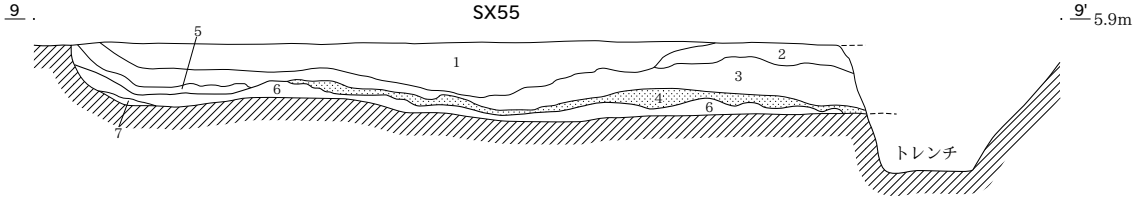


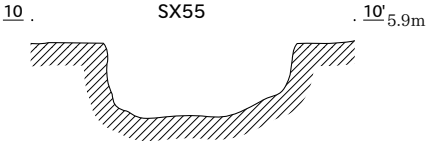
SD110
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト

SX54（7－7'、8－8'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
3　褐色（10YR4/4）シルト　色調は、2層よりわずかに明るい。
4　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　粘性：やや弱い

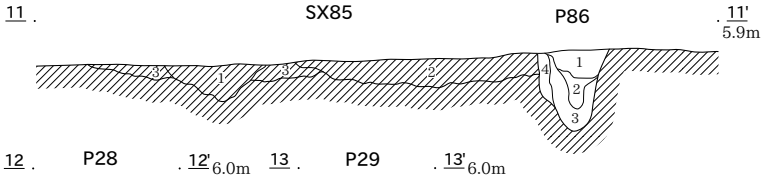






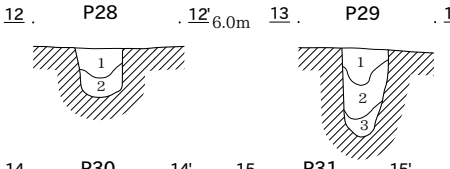


SX55
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　焼土（φ～3mm）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～10mm）5%下部濃集　色調は、2層よりやや暗い。
4　黒色（10YR2/1）シルト　炭化物（φ～5mm）多量に含む　焼土（φ～10mm）1%
5　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）5%
6　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
7　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　土質は、Ⅲb層に近似する。



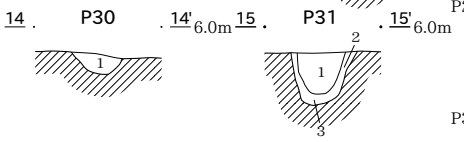
SX85
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：やや弱い
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：やや弱い
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：やや弱い

P86
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）3%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
4　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下

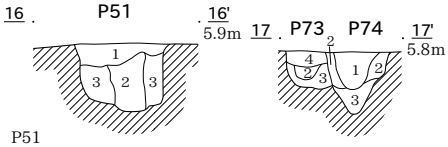


P28
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%　焼土（φ～1mm）1%

P29
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
3　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い

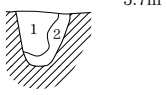


P30
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）5%



P31
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　地山ブロック（φ～10mm）5%
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：やや弱い
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　粘性：やや弱い

P51
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　炭化物（φ～1mm）3%　焼土（φ～3mm）1%以下
2　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
3　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～1mm）1%　地山ブロックが主体の層である。

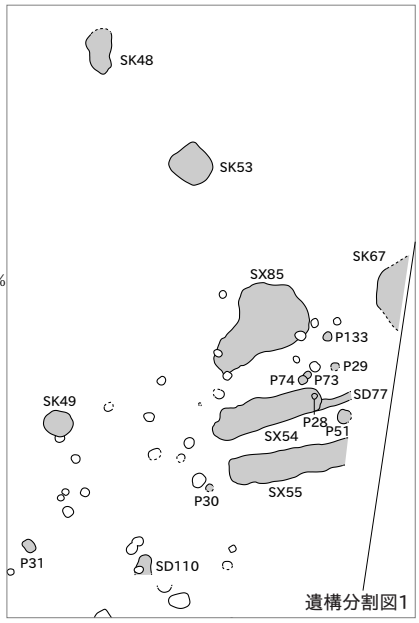


P73
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
3　灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト　粘性：やや弱い

P133
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト

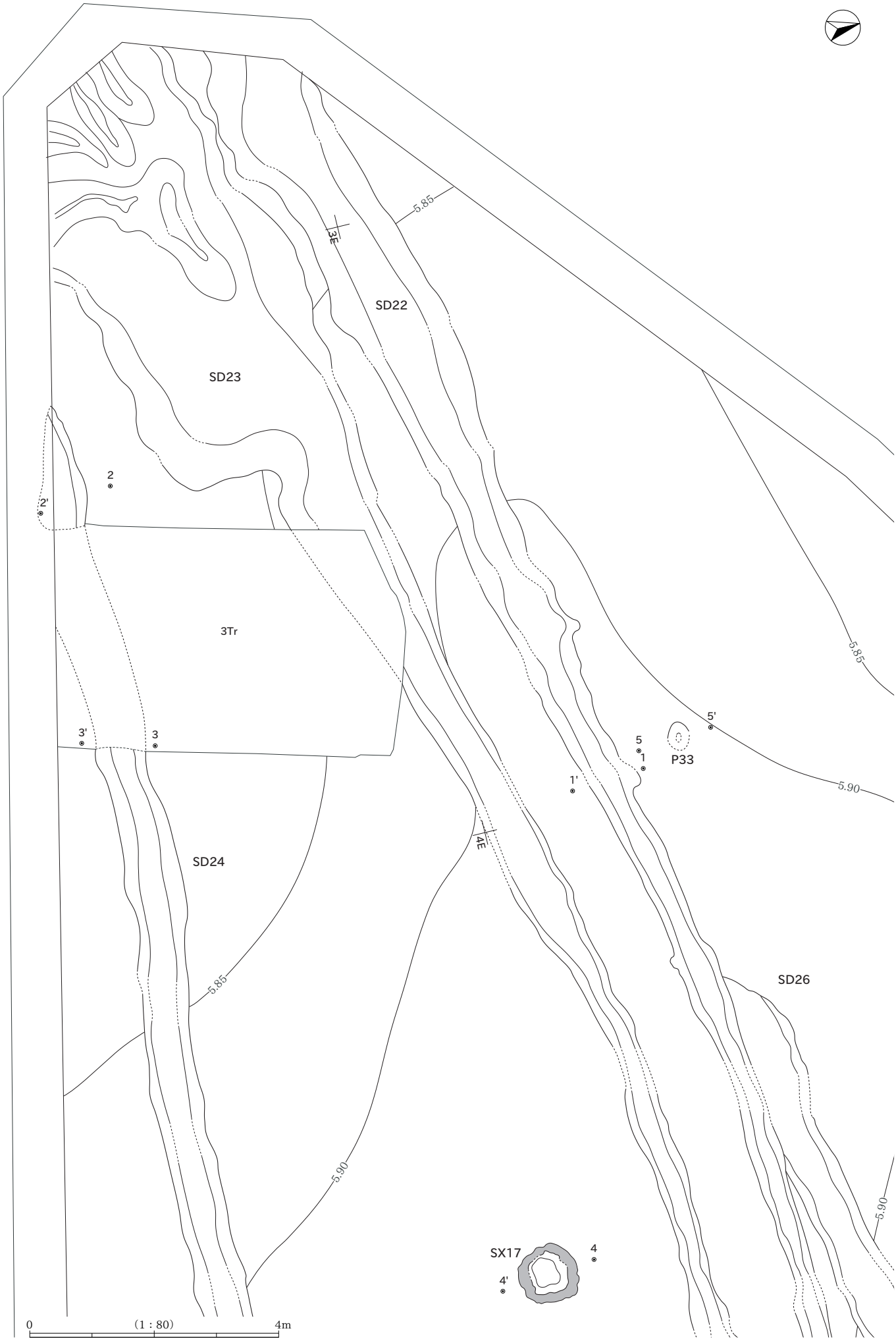
P74
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト

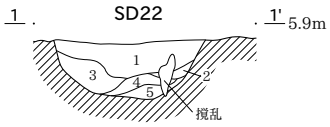
0　（1：40）　2m



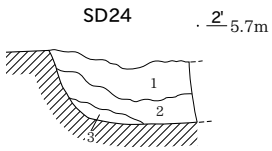
遺構分割図1

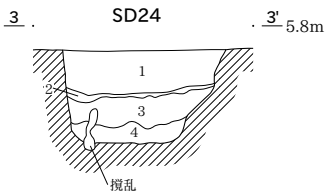
遺構分割図 2


SD22
SD23
3Tr
SD24
SD26
P33
SX17
3E
4E
5.85
5.90
1
1'
2
2'
3
3'
4
4'
5
5'
0
(1 : 80)
4m

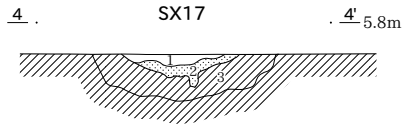


SD22
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm、10mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　1層より若干砂質が強い。
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　2層より若干砂質が強い。
4　灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト　炭化物（φ～2mm、φ5mm）1%　焼土（1mm）1%
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%

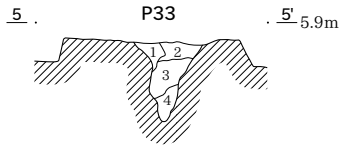




SD24（2－2'、3－3'）
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
2　灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルト
3　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
4　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト　炭化物（φ2mm）1%　壁崩落土が混入する。

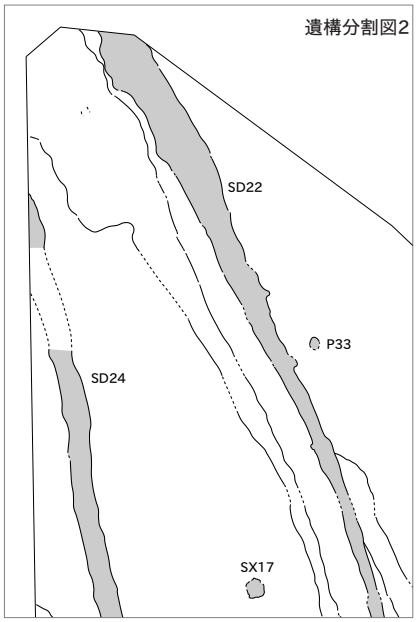


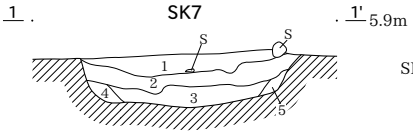
SX17
1　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：やや弱い
炭化物（φ2～10mm）3%
2　黒褐色（10YR3/2）砂質シルト　粘性：やや弱い
しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）20%
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）　砂質シルト　粘性：
やや弱い　Ⅲb層がグライ化した地山変質土と
考えられる。



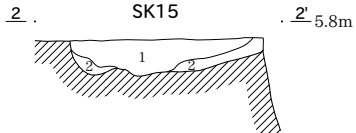
P33
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い
土質はⅢa層と近似する。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い
しまり：強い
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い
4　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い

0　（1：40）　2m

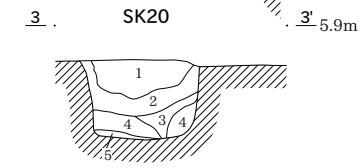




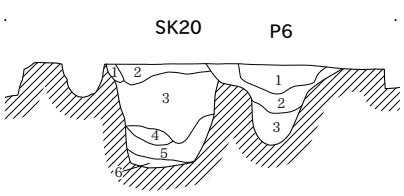
SK7
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%　焼土（φ～1mm）1%　人為的な埋め戻し土と考えられる。
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～10mm）3%　焼土（φ～1mm）1%　人為的な埋め戻し土と考えられる。
3　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）1%　焼土（φ～5mm）1%　人為的な埋め戻し土か。
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　壁崩落土と考えられる。
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　壁崩落土と考えられる。



SK15
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ3～5mm）3%　焼土（φ1mm）1%
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト　炭化物（φ1～3mm）1%

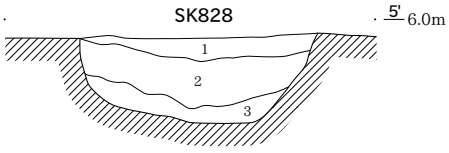


SK20（3－3'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト 地山ブロック（φ～10mm）5%上部に濃集する
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト　地山ブロック（φ～10mm）10%
3　黒褐色（10YR3/1）シルト　炭化物（φ～3mm）1%　4層と黒褐色シルトの混合土である。
4　黒褐色（10YR3/2）シルト　地山ブロック（φ～5mm）5%
5　黒色（10YR2/1）シルト



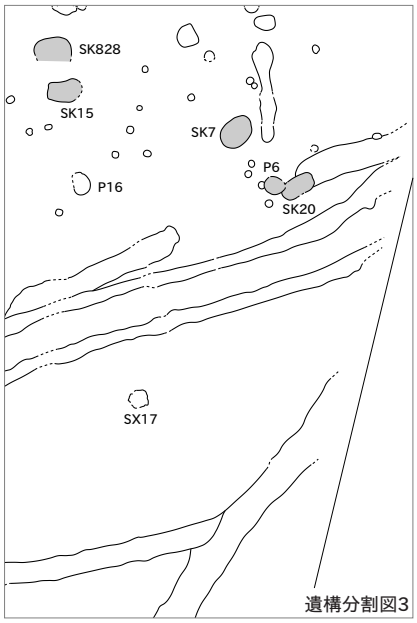
SK20（4－4'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト
色調は、2層よりわずかに暗い。
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト
炭化物（φ～1mm）1%
4　黒褐色（10YR3/2）シルト　炭化物
（φ～3mm）1%
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
炭化物（φ～1mm）1%
6　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト
粘性：やや弱い　しまり：やや弱い

P6
1　褐色（10YR4/4）粘質シルト　地山ブロック5%
炭化物（φ1mm）1%　焼土粒（φ1mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ3mm）
1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　粘性：弱い
しまり：弱い

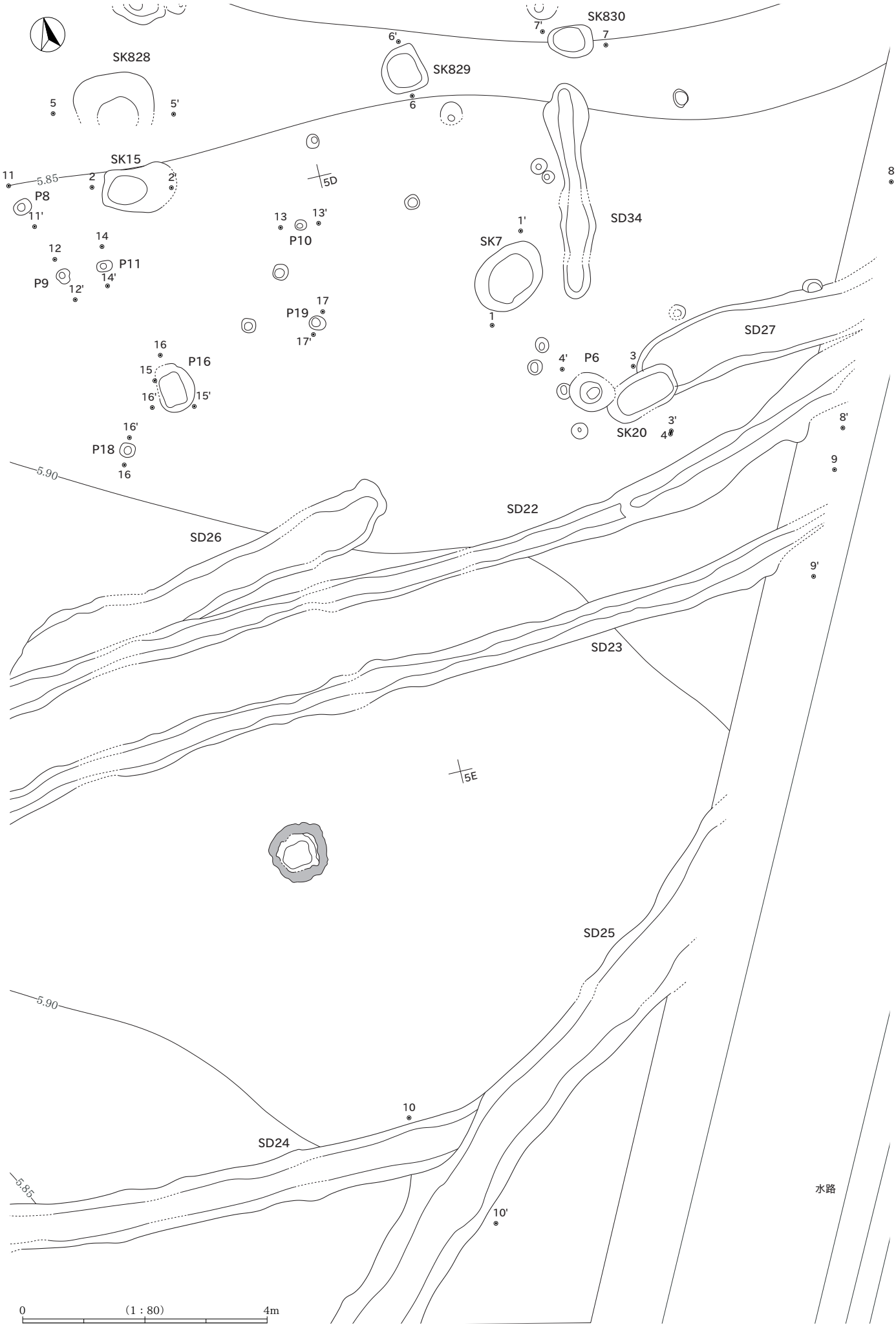


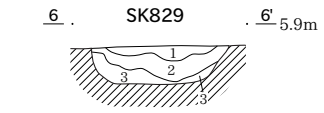
SK828
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い
炭化物（φ～2mm）1%以下
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや
弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト

0　（1：40）　2m

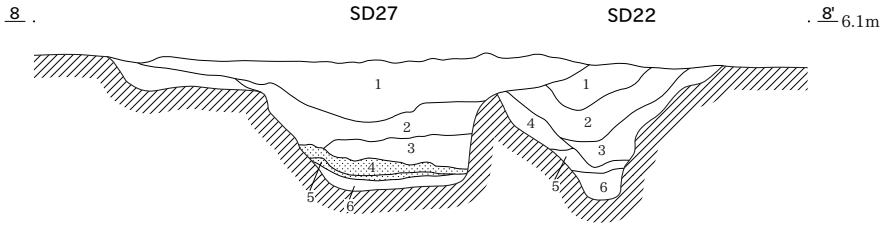


遺構分割図 3

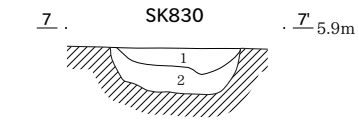

SK830
7'
7
6'
SK829
6
SK828
5
5'
SK15
11
5.85
2
2'
P8
11'
5D
13
13'
P10
14
12
P11
P9
14'
12'
SK7
1'
1
SD34
8
17
P19
17'
16
P16
15
16'
15'
4'
P6
3
SD27
16'
P18
16
SK20
3'
4
8'
9
5.90
SD22
SD26
9'
SD23
5E
SD25
5.90
10
SD24
5.85
10'
水路
0
(1 : 80)
4m



SK829
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　炭化物（φ～5mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
3　褐色（10YR4/4）砂質シルト

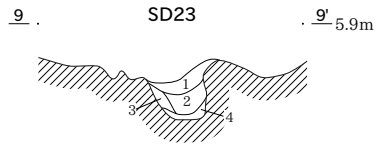


SD22
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3mm）2～3%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）2～3%
3　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2～3%　2層より色調やや暗い。
4　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：弱い　炭化物（φ～3mm）2～3%
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2～3%　地山（Ⅲa層）ブロックが主体の層である。
6　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2～3%

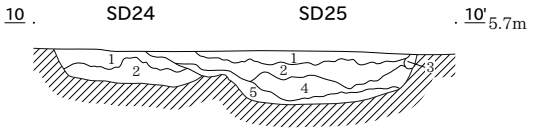


SK830
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物
　（φ～5 ）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト

SD27
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～2mm）2～3%
2　褐色（10YR4/4）シルト
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ3～10mm）5%　焼土（φ2～3mm）混入
4　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ2～5mm）10%
5　黒褐色（10YR3/2）シルト　粘性：強い　しまり：弱い　炭化物（φ2～10mm）15%　焼土ブロック（φ5mm）2%
6　灰黄褐色（10YR4/2）　砂質シルト　しまり：弱い
7　褐色（10YR4/6）砂質シルト　炭化物（φ2mm）5%　地山（Ⅲa層）ブロックが主体の層である。

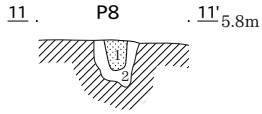


SD23
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ1mm）1%　地山（Ⅲa層）ブロックが主体の層である。
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　1層より色調やや暗い。
3　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　しまり：やや弱い

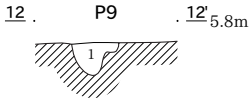


SD24
1　褐色（10YR4/4）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　しまり：やや弱い

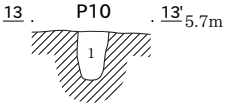
SD25
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　しまり：やや弱い
3　にぶい黄橙色（10RY6/4）砂質シルト　しまり：やや弱い
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　しまり：やや弱い
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　しまり：やや弱い



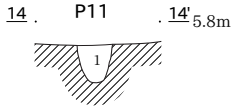
P8
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm、15mm）10%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm）3%



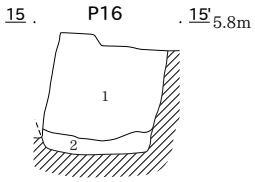
P9
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm）3%



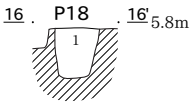
P10
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm）3%

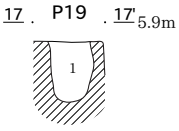


P11
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm）3%　焼土
　（φ1mm）1%



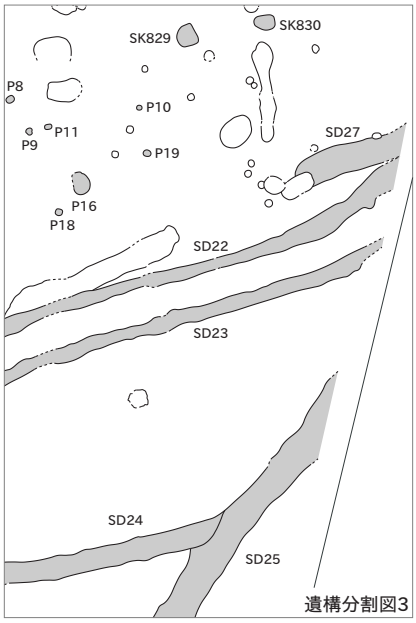
P16
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～5mm、φ10～20mm）7%
　焼土（φ～2mm、20mm）2%
2　にぶい黄橙色（10YR6/4））砂質シルト
　炭化物（φ～5mm、φ10mm）3%
　焼土（φ～2mm）1%　壁崩落土が混入する。





P18
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～5mm、φ10～20mm）7%
　焼土（φ～2mm、20mm）2%

P19
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト
　炭化物（φ～5mm、φ10mm）3%
　焼土（φ～2mm）1%　壁崩落土が混入する。

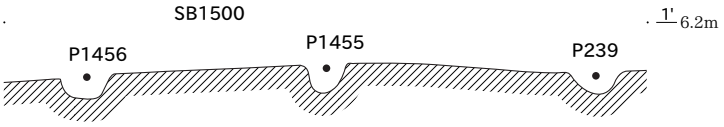


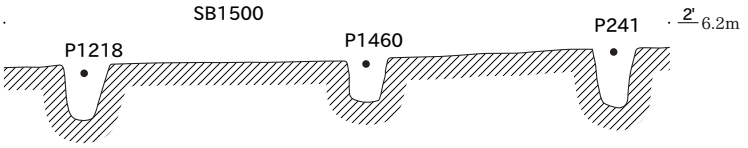
遺構分割図3

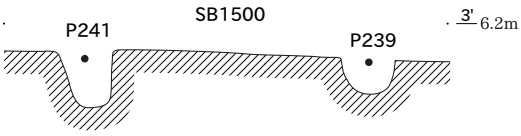
0　（1：40）　2m

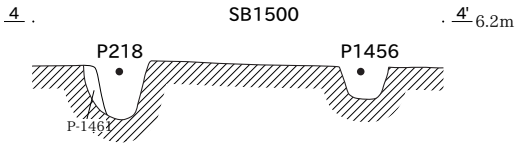
遺構分割図 4

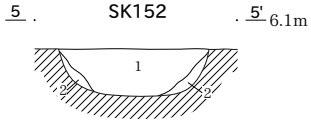
6D
8
SD583
SD50
SX144
11'
SD796
11
10
8'
SD797
10'
7
SD546
7E
7'
SK545
9
SD583
SD794
9'
6E
水路
5.80
P522
P1452
P206
6
SK520
P203
6'
5' P185
SK521
5
5.90
SK152
4'
1
P1456
P1455
3'
5Tr
P239
1'
SB1500
2
P1218
6.00
4
P1461
P1460
6F
P241
2'
3
トレンチ
0
(1 : 80)
4m



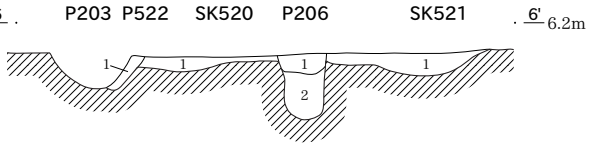


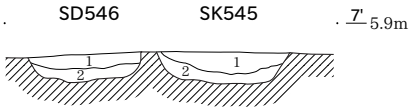






SK152
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い　炭化物（φ5～10mm）1%
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：強い　地山（Ⅳ層）ブロック50%混入する。





SK520
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い

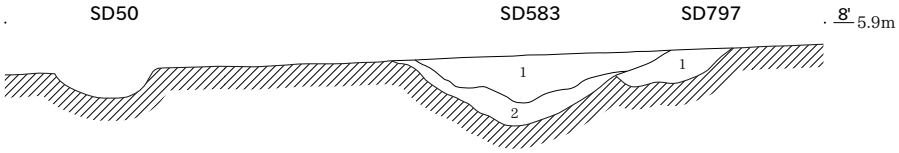
SK521
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　しまり：強い

P206
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　灰白色シルト主体土　粘性：やや弱い
　しまり：強い
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　黄褐色シルト主体土　暗褐色シルト10%混在
　粘性：ある　しまり：やや弱い

P522
1　にぶい黄褐色（10YR4 /3）砂質シルト　しまり：強い　黄褐色シルトブロック
　（φ～10mm）20%

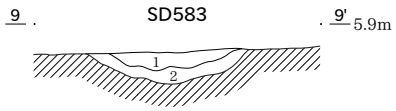
SK545
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1～3%　黒色粒子（φ5mm）5%
2　暗褐色（10YR3/4）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）1～3%

SD546
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ1mm）1%　黒色粒子（φ5mm）5%
2　褐色（10YR4/4）シルト

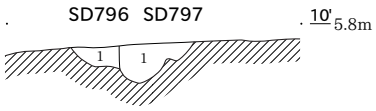


SD583（8－8'）
1　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：強い
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い

SD797（8－8'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い

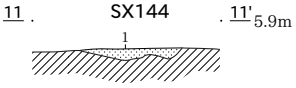


SD583（9－9'）
1　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い
　炭化物（φ～2mm）3%
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い
　炭化物（φ～2mm）3%

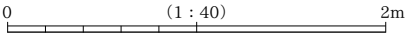


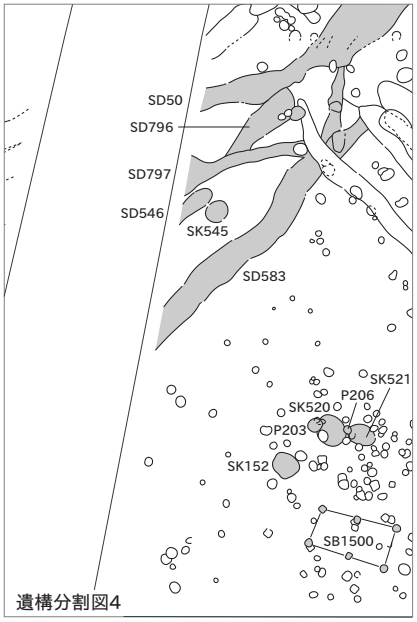
SD796
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い
　酸化鉄粒3%　酸化鉄（φ～2mm）2%　地山（Ⅲb層）
　ブロック（φ2～5mm）10%

SD797
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
　酸化鉄10%　地山（Ⅲb層）ブロック（φ2～3mm）30%



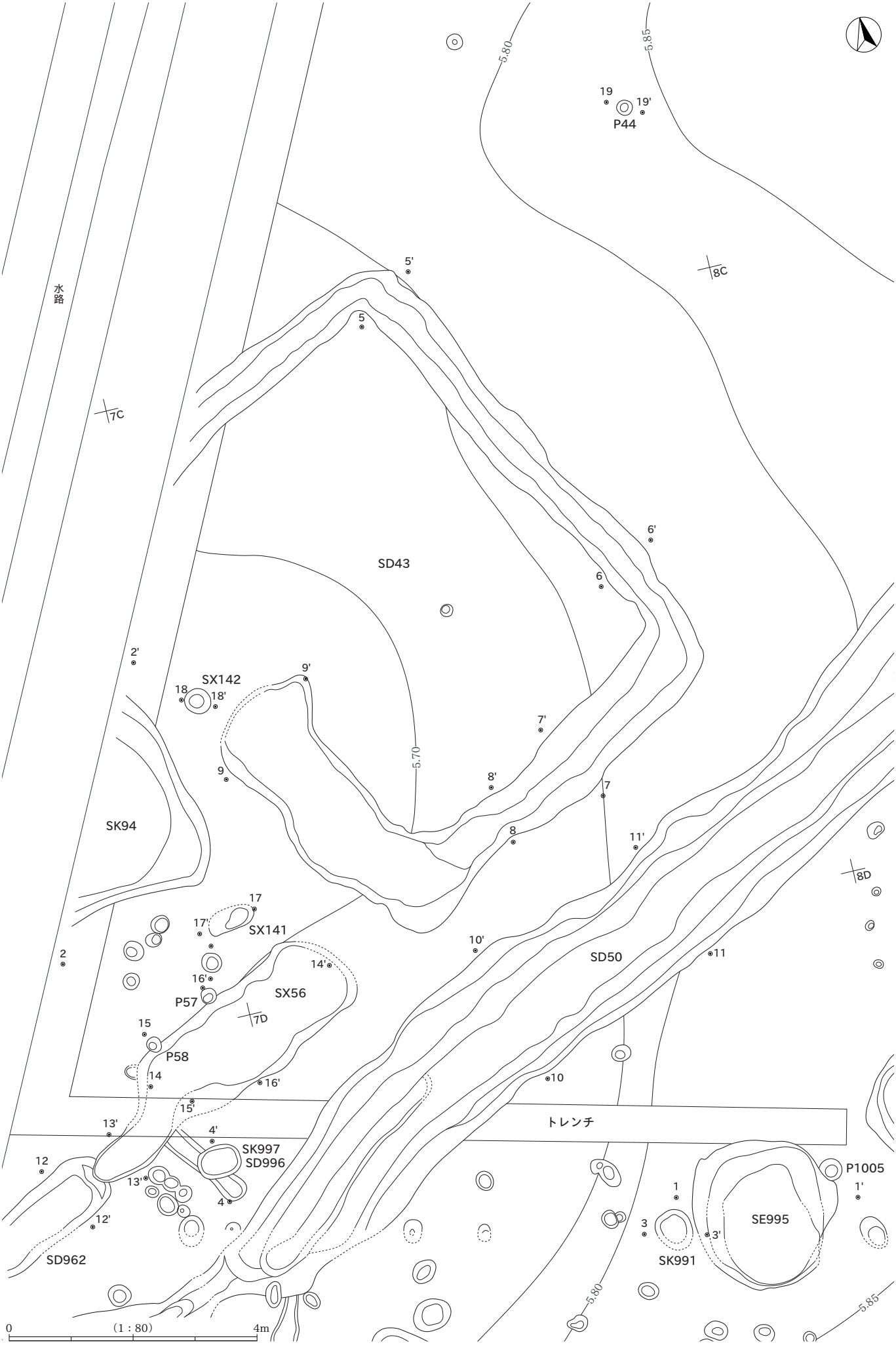
SX144
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　しまり：強い　炭化物40%
　焼土（φ5～10mm）5%　細骨片1%以下



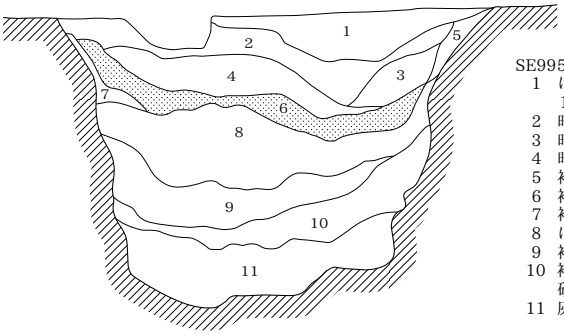


遺構分割図4

遺構分割図 5

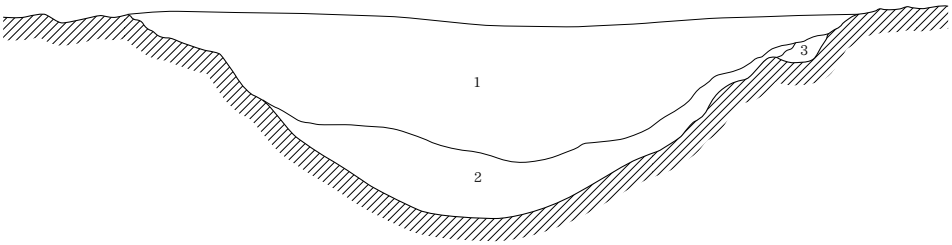

水路
7C
8C
8D
7D
SD43
SK94
SX142
SX141
SX56
SD50
SD962
SK997
SD996
SK991
SE995
P44
P57
P58
P1005
トレンチ
5.80
5.85
5.70
0
(1 : 80)
4m

1 . SE995 . 1' 6.3m



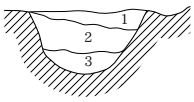
SE995
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下　焼土（φ～5mm）1%以下
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%　焼土（φ1～2mm）1%以下
3　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ2～10mm）2%　焼土（φ1～2mm）1%以下
4　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%　焼土（φ1～2mm）1%以下
5　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い
6　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～10mm）10%　焼土ブロック（φ1～2mm）1%
7　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い
8　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
9　褐色～にぶい黄橙色（10YR4/4～6/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ2～10mm）1%
10　褐色（7.5YR4/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ5～10mm）1%　灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトをラミナ状に挟む。
11　灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ5～20mm）1%

2 . SK94 . 2' 5.9m



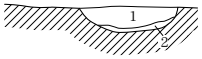
SK94
1　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト　炭化物（φ1～2mm）まばらに2%土器片及び礫片が多く出土した。
2　にぶい黄褐（10YR5/3）シルト　炭化物（φ1～2mm）3%比較的大きな礫片が混在する。
3　灰黄褐（10YR6/2）砂質シルト　2層に地山ブロックが混入する層。

3 . SK991 . 3' 6.2m



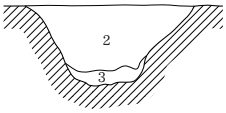
SK991
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　地山（Ⅱ層）ブロックが主体の層である。
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　黄色シルトブロック（3～5mm）30%

4 . SK997 . 4' 5.9m

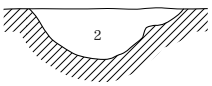


SK997
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　炭化物（φ～3mm）3%
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　色調は、1層よりやや明るい。

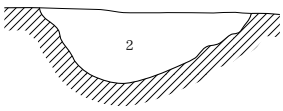
5 . SD43 . 5' 5.9m



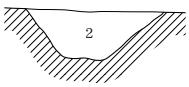
6 . SD43 . 6' 5.9m



7 . SD43 . 7' 5.9m



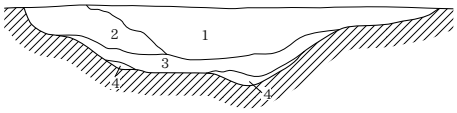
8 . SD43 . 8' 5.9m



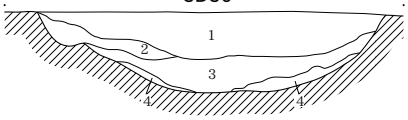
9 . SD43 . 9' 5.9m

SD43（5－5'～9－9'）
1　にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト　炭化物（φ～5mm）2%　地山ブロック20%混入
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）2%
3　灰黄褐色（10YR6/2）シルト　壁崩落土が混入する。

10 . SD50 . 10' 5.8m

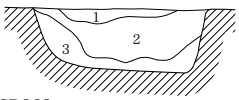


11 . SD50 . 11' 5.8m



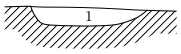
SD50（10－10'、11－11'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）1%　壁崩落土が混入する。
4　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　3層より壁の崩落土の混入が多い。

12 . SD962 . 12' 5.9m

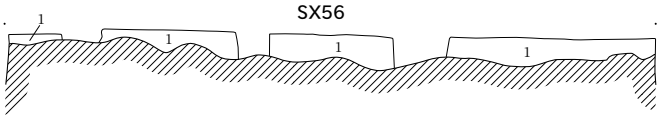


SD962
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ～3 mm）5%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2%
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）2%

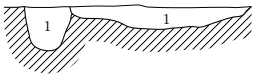
13 . SX56 . 13' 5.9m



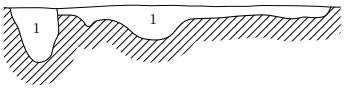
14 . SX56 . 14' 5.8m



15 . P58 SX56 . 15' 5.8m



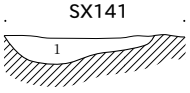
16 . P57 SX56 . 16' 5.8m



SX56（14－14'～16－16'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ1～3mm）5%

P57・58
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ1～10mm）1%
SX56より色調暗く、炭化物の混入がわずかに多い。

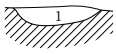
17 . SX141 . 17' 5.8m



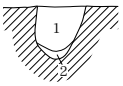
SX141
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　しまり：やや弱い

SX142
1　灰白色（10YR8/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2%

18 . SX142 . 18' 5.8m



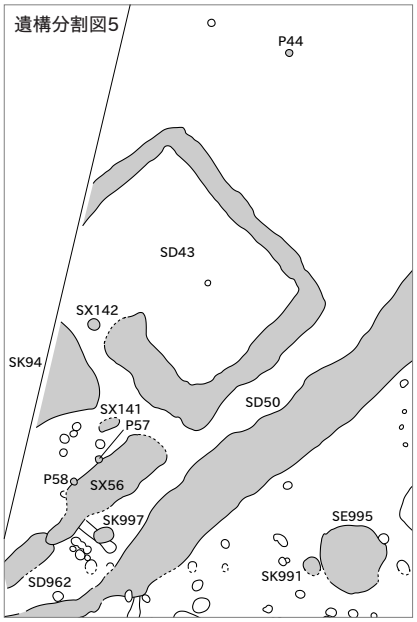
19 . P44 . 19' 5.8m



P44
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）2%
2　灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルト　壁崩落土が混入する。

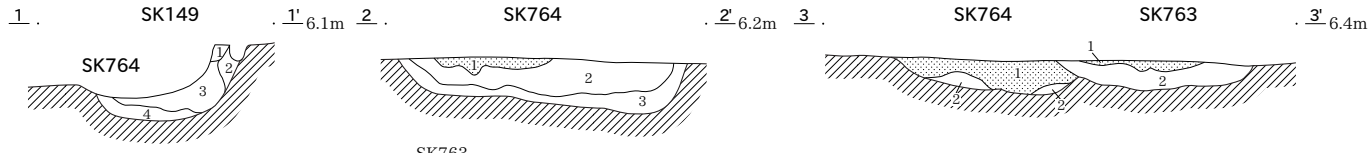
0　（1：40）　2m

遺構分割図5



遺構分割図 6

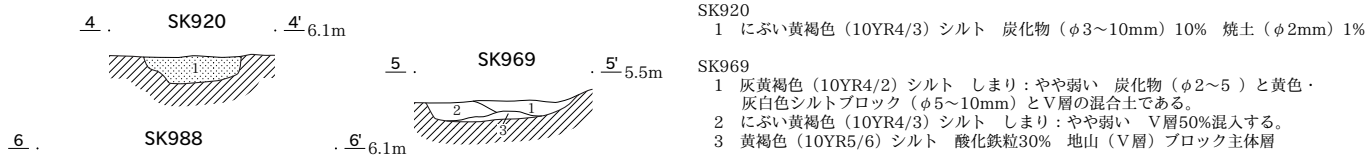
SD50
SD798
SD795
SD794
SD632
SD836
SD793
SD580
SD624
SD148
SK920
P454
P683
SK988
P684
P693
SK694
SK763
SK764
SK969
SK149
SX153
SK573
SX154
P485
6Tr
5.75
5.80
5.90
6.00
7E
8E
7F
0
(1 : 80)
4m



SK149
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：強い
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強い
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い
　炭化物（φ～2mm）2%
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い

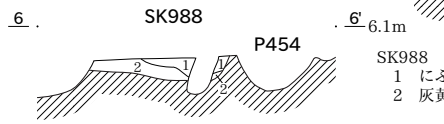
SK763
1　黒褐色（10YR2/2）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：強い　炭化物（φ～10mm）30%　焼土（φ5～10mm）10%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）　砂質シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ1mm）1%

SK764（2－2'、3－3'）
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：強い　炭化物（φ～5mm）10%　焼土（φ～5mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い　炭化物（φ2～3mm）1%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い　炭化物（φ～2mm）1%

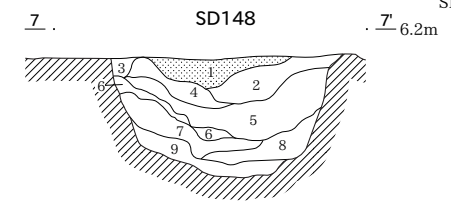


SK920
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ3～10mm）10%　焼土（φ2mm）1%

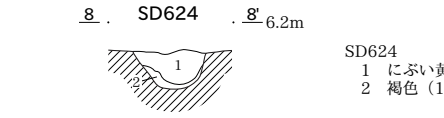
SK969
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～5 ）と黄色・灰白色シルトブロック（φ5～10mm）とⅤ層の混合土である。
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　Ⅴ層50%混入する。
3　黄褐色（10YR5/6）シルト　酸化鉄粒30%　地山（Ⅴ層）ブロック主体層



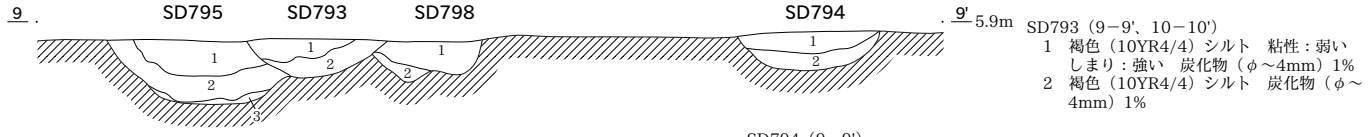
SK988
1　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ1mm）1%　地山（Ⅳ層）ブロックが主体の層である。
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：強い　炭化物（φ～2mm）1%　地山（Ⅳ層）ブロックが主体の層である。



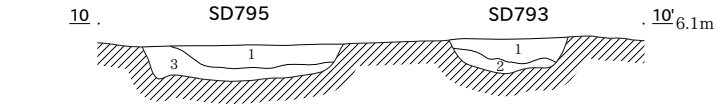
SD148
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　炭化物（φ～20mm）10%　焼土（φ20mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：強い　地山（Ⅲ・Ⅴ層）ブロック（φ5mm）混入
4　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　炭化物（φ1mm）1%
5　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ1mm）1%
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　しまり：やや弱い　地山（Ⅴ層）ブロックが多量に混入する。
7　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：弱い　炭化物（φ～2mm）1%
8　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：強い　しまり：弱い　炭化物（φ～2mm）1%地山（Ⅲ・Ⅴ層）ブロックが混入する。
9　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　粘性：強い　しまり：弱い　炭化物（φ～2mm）1%　地山（Ⅴ層）ブロックが多量に混入する。



SD624
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ1mm）1%
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト



SD793（9－9'、10－10'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ～4mm）1%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～4mm）1%



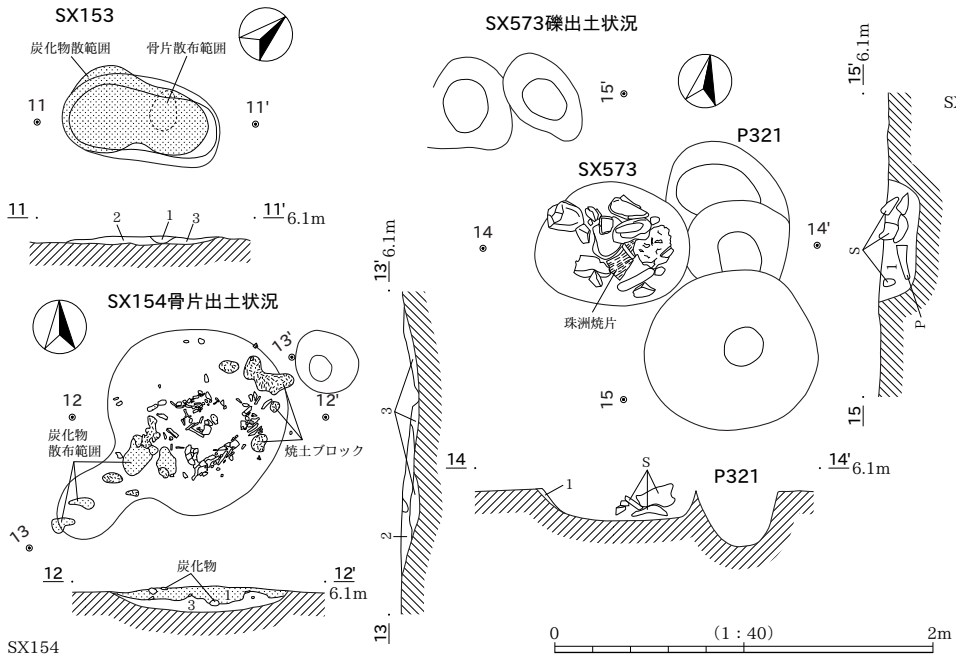
SD794（9－9'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ1mm）1%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ1mm）1%

SD798（9－9'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強い　炭化物（φ2～4mm）1%
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ3～5mm）1%

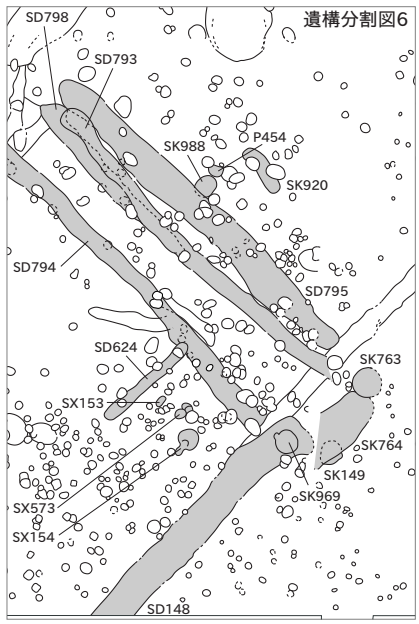
SD795　（9－9'、10－10'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　炭化物（φ1mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　炭化物（φ1mm）1%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　炭化物（φ1mm）1%
　地山（Ⅳ層）ブロック15%

SX153
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）2%　細骨片10%
2　暗褐色（10YR3/3）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ3～5mm）30%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　粘性：弱い　しまり：強い　炭化物（φ3mm）5%　細骨片1%

SX573
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：弱い



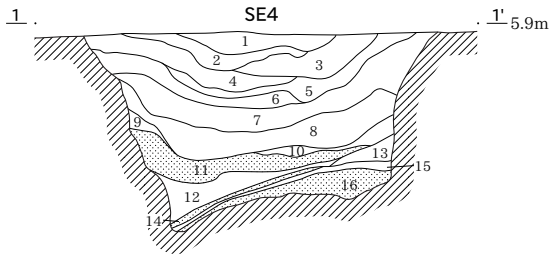
SX154
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：強い　炭化物（φ2～10mm）10～20%　焼土（φ5～20mm）20%　灰20%　焼骨片多量に混入。
2　暗褐色（10YR3/3）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ10～20mm）30%　焼土（φ5～10mm）1%　灰5%　細骨片1%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～1mm）2%　灰2%



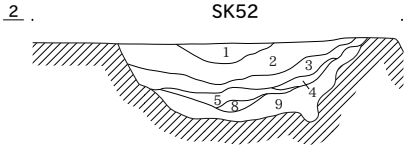
0　（1：40）　2m
SX154
0　（1：30）　1.5m
SX153・573
0　（1：20）　1m

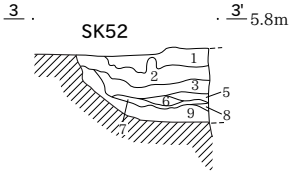
遺構分割図 7

7Tr
SD574
SK960
SD800
SD801
P605
SD50
SX576
P575
SX577
SK52
SX780
P814
P815
P812
P105
P128
P129
SX610
SE4
9C
9D
8D
5.85
5.80
5.90
5.95
0
(1：80)
4m

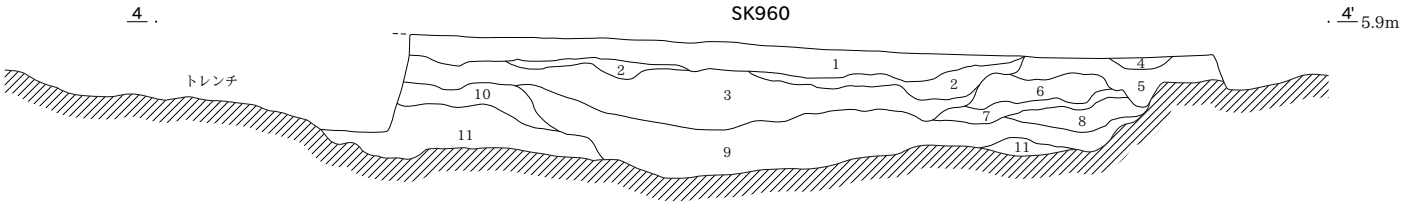


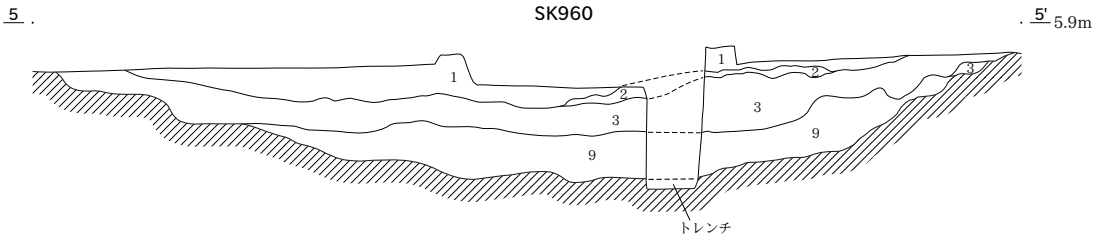
SE4
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　シルトブロック（φ～20mm）30%
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　上位層よりわずかに黄色が強い。
4　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
5　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　シルトブロック（φ～10mm）40%
6　灰黄褐色（10YR5/2）シルト
7　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ2～5mm、10～20mm）7%　焼土（φ3mm）2%
8　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ～5mm）2%
9　にぶい黄橙色（にぶい10YR6/4）砂質シルト　壁崩落土が混入する。
10　褐灰色（10YR4/1）シルト　炭化物（φ1～5mm、φ15mm）5%
11　黒褐色（10YR3/1）炭化物主体層　粘性：やや弱い　しまり：弱い　炭化物（φ1～5mm、φ10～30mm）を多量に含む。
12　にぶい黄橙色（にぶい黄橙色（10YR6/4））シルト　炭化物（φ1～5mm、φ10～15mm）7%　焼土（φ1～5mm、φ10mm）2%
13　褐灰色（10YR4/1）シルト　炭化物（φ1～5mm）5%
14　黒色（10YR2/1）炭化物主体層　粘性：やや弱い　しまり：弱い
15　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ1～5mm、φ10～15mm）7%　焼土（φ1～5mm、φ10mm）2%
16　黒色（10YR2/1）炭化物主体層　粘性：やや弱い　しまり：弱い



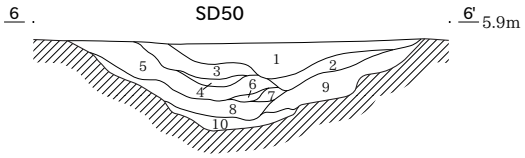


SK52（2－2'、3－3'）
1　灰白色（10YR8/2）シルト　粘性：やや弱い　地山ブロックが混入する。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～5mm）2%
3　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂質シルト　炭化物（φ2～5mm、10mm）7%
4　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂質シルト
5　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂質シルト　炭化物（φ2～5mm）7%　焼土（φ5mm、40mm）3%
6　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
7　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）7%
8　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）5%
9　灰黄褐色（10YR6/2）シルト　炭化物（φ～5mm）3%

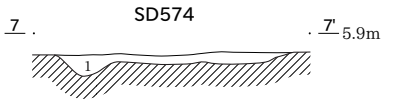




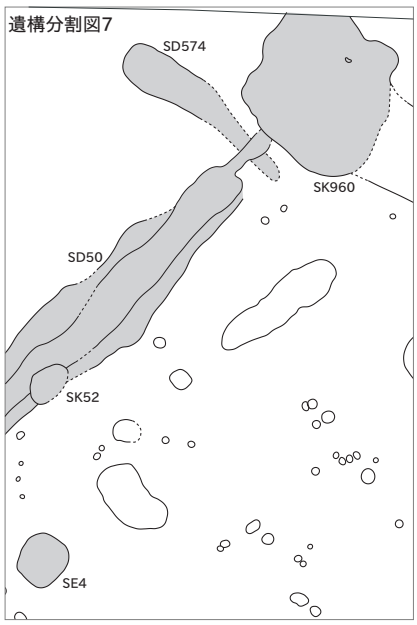
SK960（4－4'、5－5'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3mm、φ15～20mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3mm、φ15～20mm）3%　灰白色（10RY8/1）シルトブロック40%混入する。
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　炭化物（φ～3mm、φ15～20mm）3%　2層に混入する灰白色シルトブロックが少量混入する。
4　浅黄橙色（10YR8/4）シルト　しまり：やや弱い
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、φ10mm）3%　焼土（φ～2mm）1%
6　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、φ10mm）10%　焼土（～φ3mm）3%
7　黄橙色（10YR8/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
8　灰白色（10YR7/1）シルト　炭化物（φ5mm・10mm）2%
9　灰白色（10YR7/1）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ5mm・10mm）が混入する。
10　灰黄褐色（10YR6/2）シルト　炭化物（φ～5mm）2%
11　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～5mm、φ20mm）3%



SD50
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：やや強い　しまり：強い　炭化物（φ3～15mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　1層類似土に地山ブロック混入　粘性：弱い　しまり：やや弱い
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　1層類似土　炭化物（φ3～5mm、15mm）3%　焼土粒（1～2mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　3層より炭化物減少
5　黒褐色（10YR3/2）シルト　1～4層より砂質強くなる　粘性：やや強い　しまり：やや強い　炭化物（φ2～5mm、10～20mm）10%　焼土粒（φ2～3mm、10～15mm）5%　土器片・礫片出土層
6　黒褐色（10YR3/2）シルト　5層よりシルト質強くなる　炭化物2%　焼土1%
7　黒褐色（10YR3/2）シルト　5層類似土　炭化物2%　焼土粒1%
8　灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルト　地山ブロックの混入目立つ　粘性：弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ3～5mm、一部50mm）3%　焼土粒（φ1～3mm）1%
9　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　地山ブロック混入　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～3mm）1%
10　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　9層より地山ブロック多い　粘性：弱い　しまり：やや弱い



SD574
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　しまり：やや弱い
炭化物（φ～3mm、10mm）底面近くまばらに2%

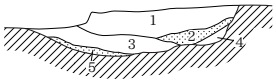


0　（1：40）　2m

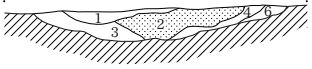
遺構分割図 8

5.90
5.95
9E
SD580
5
5'
6.00
9F
P1038
6'
6
SD140
4'
8F
P1014
4
SK721
3'
2'
SK150
2
6.00
SK507
3
6.05
6Tr
5.95
1'
SK922
SE722
1
6.05
0
(1 : 80)
4m

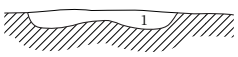
8 . SX576 . 8' 5.9m



9 . SX576 . 9' 5.9m



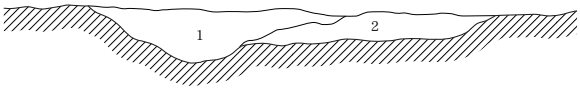
10 . SX577 . 10' 5.9m



SX576（8－8'、9－9'）
1　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　炭化物（φ2～5mm）2%
2　黒褐色（10YR3/2）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ1mm、φ5～10mm）30%
　焼土（φ2～5mm）5%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ3～5mm、φ10～15mm）3%　焼土（φ10～20mm）2%
4　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルト　壁崩落土が混入する。
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ1mm、5mm）20%
6　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルト　壁崩落土が混入する。

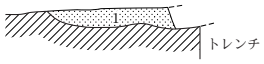
SX577
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　炭化物（φ～3mm、φ10mm）3%
　焼土（φ1mm）1%

11 . SX610 . 11' 6.1m



SX610
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm、φ10mm）3%　焼土（φ～3mm、φ10mm）2%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm、φ10mm）10%　焼土（φ～2mm、φ15mm）3%

12 . SX780 . 12' 6.1m



SX780
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
　炭化物（φ～3mm）10%
　焼土（φ～5mm、φ15mm）5%

13 . P105 . 13' 5.8m

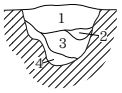
P105
1　暗褐色（10YR3/4）シルト
　炭化物（φ～2mm）2%
2　にぶい黄橙色（10YR7/3）
　砂質シルト

14 . P128　P129 . 14' 5.8m

P128
1　灰黄褐色（10YR5/2）シル
　炭化物（φ～5mm）2%
　焼土（φ5mm）2%

P129
1　灰黄褐色（10YR5/2）シルト
　炭化物（φ～5mm）2%
　焼土（φ5mm）2%

15 . P575 . 15' 5.9m

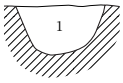


P575
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　炭化物（φ～5mm）5%　焼土
　（φ3～10mm）3%、骨片（φ2～5mm）3%
2　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　炭化物（φ～5mm）3%　焼土
　（φ3～10mm）1%、骨片（φ2～5mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト
　炭化物（φ～5mm）1%以下　骨片
　（φ2～5mm）1%以下　壁崩落土が
　混入する。

16 . P605 . 16' 6.0m

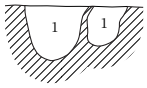
P605
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
　炭化物（φ～5 ）2%

17 . P812 . 17' 6.1m



P812
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト
　しまり：やや弱い　炭化
　物（φ～3mm）3%

18 . P814　P815 . 18' 6.0m

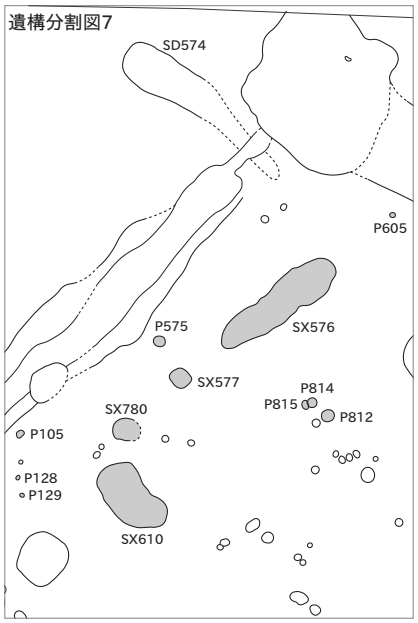


P814
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト
　しまり：やや弱い　炭化物
　（φ～3mm）3%一部に地
　山ブロック混入する。

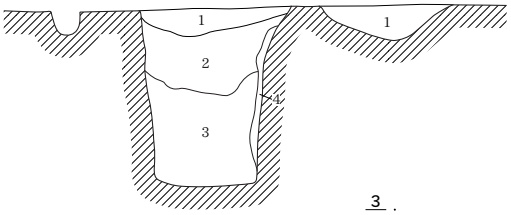
P815
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト
　しまり：やや弱い　炭化
　物（φ～3mm）3%

0　（1：40）　2m

遺構分割図7



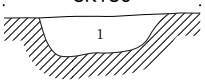
1 . SE722　SK922 . 1' 5.2m



SE722
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：弱い　炭化物（φ2～20mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
3　暗褐色（10YR3/4）粘質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%
4　黒褐色（10YR2/2）粘質シルト　粘性：強い　しまり：弱い　炭化物（φ～3mm）25%

SK922
1　褐色（7.5YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下

2 . SK150 . 2' 6.0m

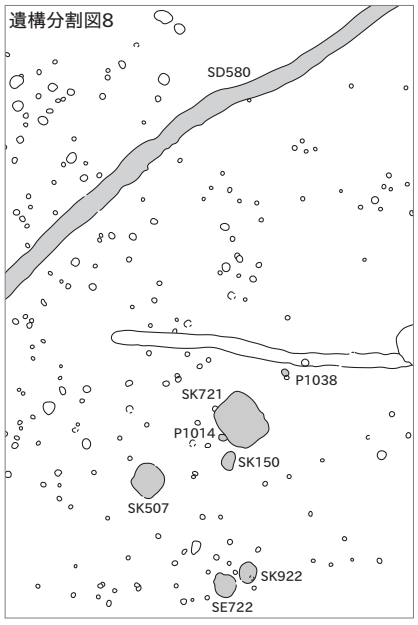


SK150
1　褐色（7.5YR4/3）シルトと灰黄褐色～褐色（10YR4/2～4/4）シルトの
　混合土　埋め土か。

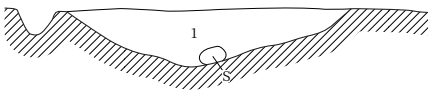
3 . SK507 . 3' 6.1m

SK507
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　炭化物（φ～3mm）1%以下

遺構分割図8

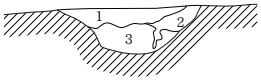


4 . P1014　SK721 . 4' 6.2m



SK721
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　粘性：やや弱い　炭化物（φ～
　2mm）1%以下

5 . SD580 . 5' 6.1m



SD580
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：やや弱い　しまり：強い
　炭化物（φ～3 ）1%以下
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2 ）
　1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物
　（φ～2 ）1%以下　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック
　（φ3～10 ）40%

P1038

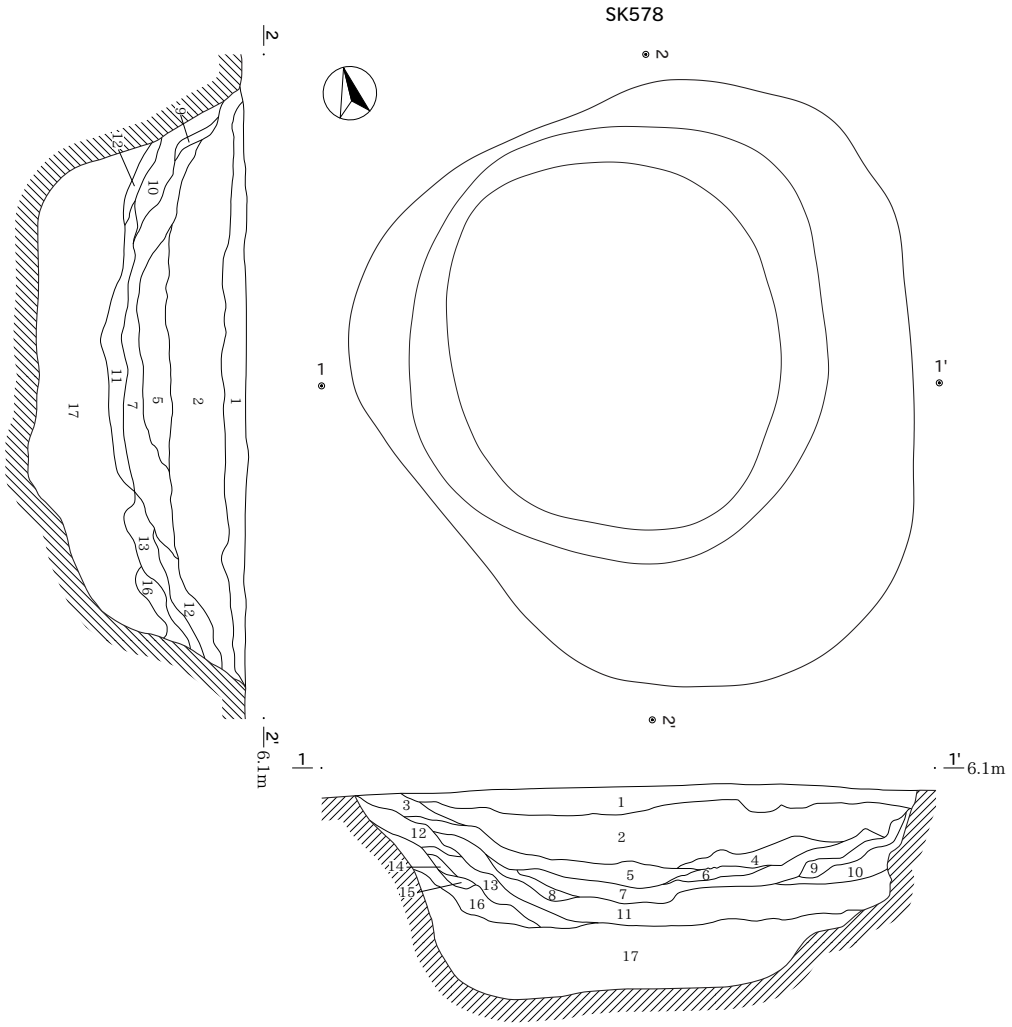
6 . 6' 6.0m

P1038
1　褐色（10YR4/4）シルト
　しまり：やや弱い
　炭化物（φ1～2 mm）1%

0　（1：40）　2m

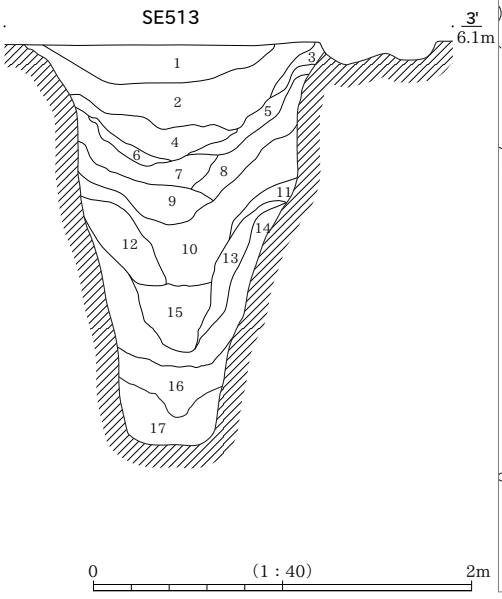
遺構分割図 9

10C
4
4'
SK1255
9
5.95
SD800
8
9'
SD801
8'
SD645
11
11'
P604
5.90
7'
7
10
P598
P599
10'
10D
2
1
1'
SK578
2'
SE513
3'
3
SX647
5'
5
6
SX648
SD580
6'
5.95
10E
0
(1 : 80)
4m

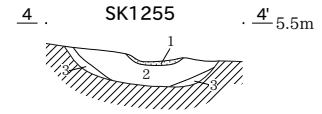


SK578
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～10mm、20mm）5%　焼土（5～10mm）2%
3　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～10mm、20mm）2%
4　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～10mm、20mm）3%　焼土（φ5mm）2%
5　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～10mm、20mm）3%
6　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～10mm、20mm）5%
7　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～10mm）2%
8　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～10mm）1%
9　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～10mm）2%　壁崩落土が混入する。
10　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～10mm）2%　9層より壁崩落土の混入多い。
11　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　炭化物（φ～10mm）2%　壁崩落土が混入する。
12　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　炭化物（φ～10mm）2%　焼土（φ～5mm）1%　11層より壁崩落土の混入が少ない。
13　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2%　焼土（5mm）1%
14　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト
15　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　炭化物（φ10mm）1%
16　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　炭化物（φ～10mm）2%　壁崩落土が混入する。
17　褐灰色（10YR4/1）砂質シルト

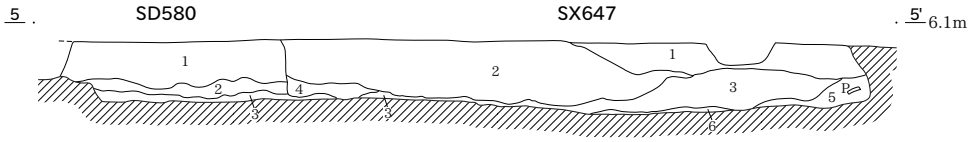
SE513
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～5mm）1%以下
2　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～5mm）1%　地山ブロック（φ～10 ）3%
3　黒褐色（10YR3/2）シルト　地山ブロック（φ～3mm）3%
4　暗褐色（10YR3/4）シルト　地山ブロック（φ～10mm）5%
5　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い　壁崩落土が主体の層である。
6　黒褐色（10YR3/2）シルト　粘性：強い　壁崩落土と考えられる地山ブロックが主体の層である。
7　暗褐色（10YR3/3）粘質シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下
8　暗褐色（10YR3/4）シルト
9　暗褐色（10YR3/3）シルト
10　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　地山（Ⅶ層）ブロック（φ～10mm）5%
11　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い　壁崩落土とシルトの混合土層である。
12　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　粘性：強い　地山ブロック（φ～10mm）3%
13　暗褐色（10YR3/3）シルト　地山ブロック（φ～5mm）5%
14　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト　地山ブロックが主体の層である。
15　黒褐色（2.5Y3/2）粘質シルト
16　黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト
17　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質シルト　しまり：やや弱い



遺構分割図9

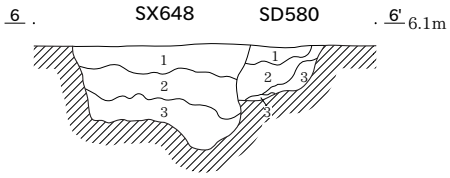


SK1255
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～10mm）30%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：強い　2層に比べると炭化物の混入極わずかで、色調もやや暗い。



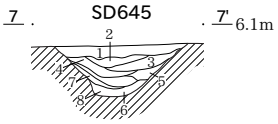
SD580（5－5'）
1　灰褐色（7.5YR4/2）粘質シルト
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト
3　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い

SX647
1　褐色（10YR4/4）粘質シルト　地山（Ⅴ層）ブロック（φ～10mm）5%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　しまり：強い　地山（Ⅴ層）ブロック主体層。
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　しまり：強い　地山（Ⅴ層）ブロック10%　色調は、1層よりわずかに暗い。
4　暗褐色（10YR3/3）粘質シルト　しまり：強い
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　しまり：強い　Ⅴ、Ⅶ層による埋め戻し土が主体の層である。
6　褐色（10YR4/4）粘質シルト　しまり：強い　Ⅴ・Ⅵ層による埋め戻し土が主体の層である。

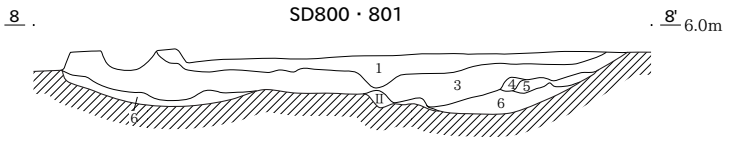


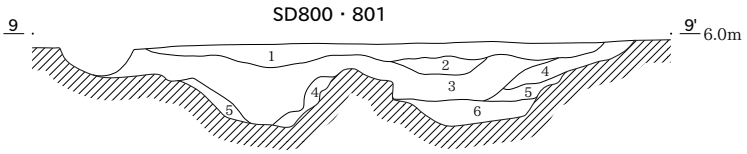
SD580（6－6'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　シルトブロック（φ～5mm）10%　粘性：やや強い　しまり：強い
2　にぶい黄褐色（10YR4/3））シルト　シルトブロック（φ～3mm）10%　粘性：ある　しまり：ある
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　シルトブロック（φ～3mm）5%　粘性：ある　しまり：ある
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：ある　しまり：ある

SX648
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルト　粘性：強い　しまり：強い　シルトブロックが主体の層である。
3　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い　しまり：強い　シルトブロックが主体の層である。

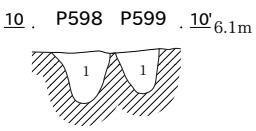


SD645
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%　1層を主体に地山ブロックが混入する。
3　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%　灰褐色（10YR6/1）シルトブロック20%
4　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%　3層を主体に地山ブロックが混入する。
5　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%　土質は4層に近似するが、地山ブロックの混入が4層より少ない。
6　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　しまり：やや弱い　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトブロック混入。
7　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
8　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　しまり：やや弱い　土質は6層に近似するが、色調わずかに暗い。壁崩落土が混入する。



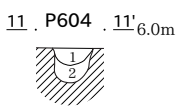


SD800・SD801（8－8'、9－9'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3mm）2%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3mm）2%
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　焼土（φ～2mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　地山（Ⅳ層）ブロック（壁崩落土）混入。
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　地山（Ⅳ・Ⅴ層）ブロック（壁崩落土）混入。
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：強い　しまり：強い　炭化物（φ～3mm、10mm）3%　地山（Ⅴ層）ブロック（壁崩落土）混入。

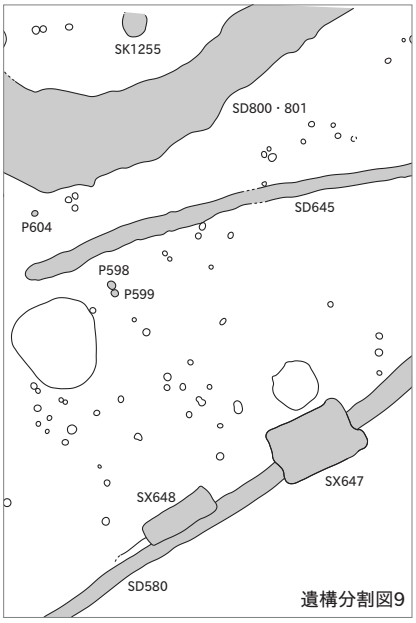


P598
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト　Ⅵ層類似土　粘性：やや強い
しまり：やや弱い　炭化物（φ1～3mm）3%　焼土粒
（φ1mm）1%

P599
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト　Ⅳ層類似土　粘性：やや強い
しまり：やや弱い　炭化物（φ1～3mm）3%

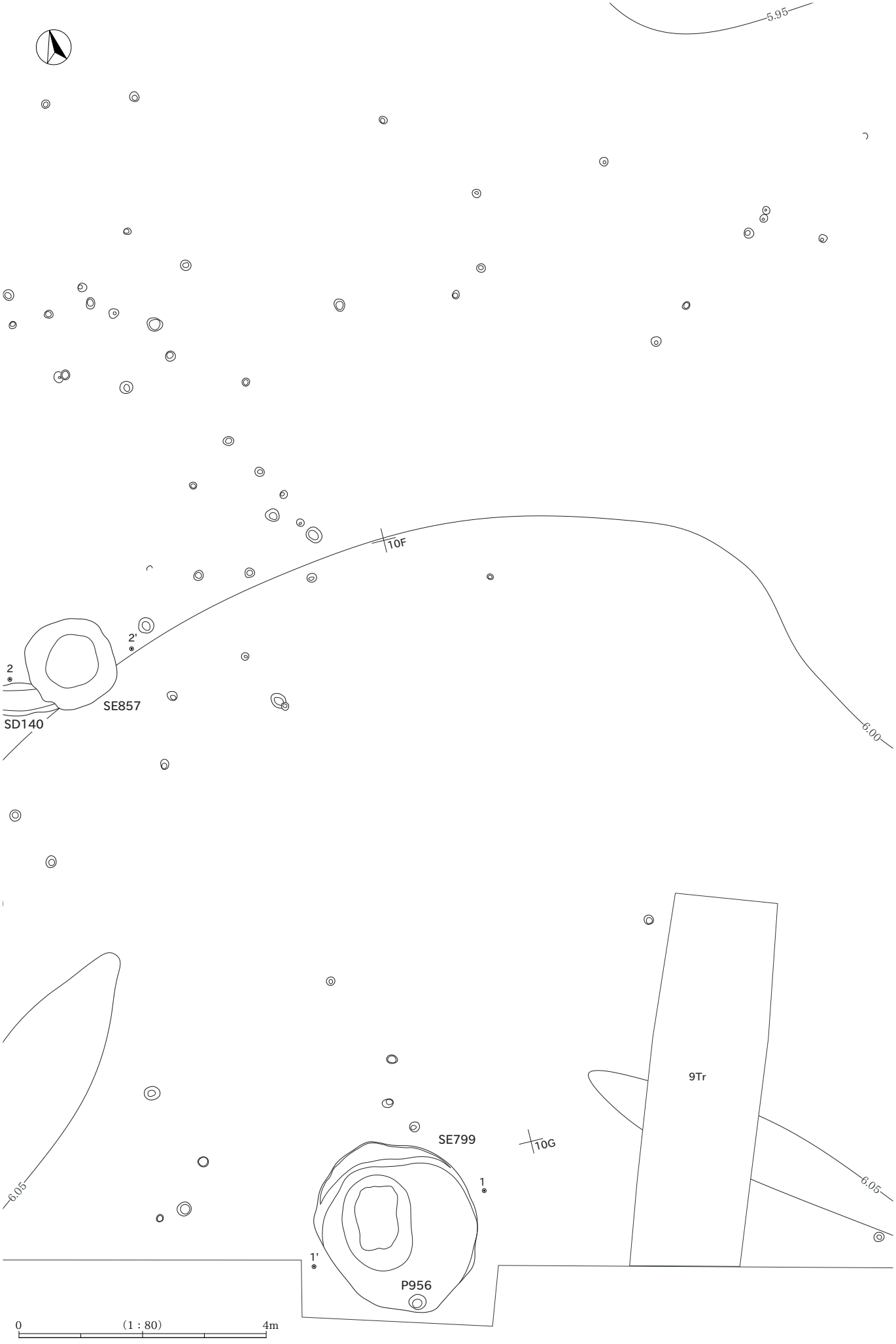


P604
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm）2%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～5mm）2%
1層に壁崩落土が混入する。



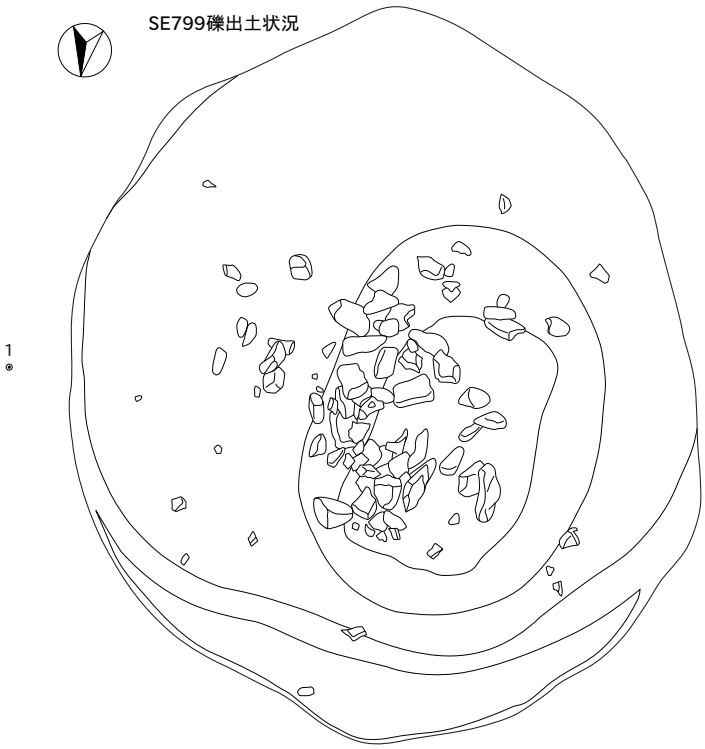
0　（1：40）　2m

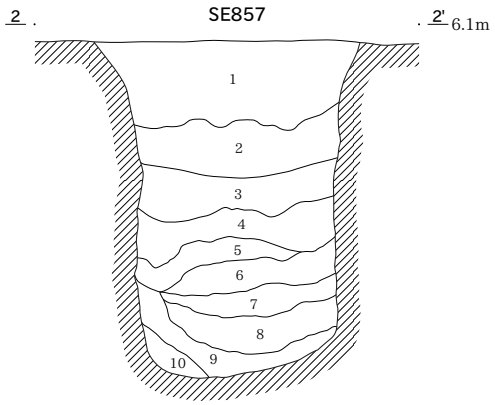
遺構分割図9


5.95
10F
2'
2
SE857
SD140
6.00
9Tr
SE799
10G
1
6.05
6.05
1'
P956
0
(1 : 80)
4m

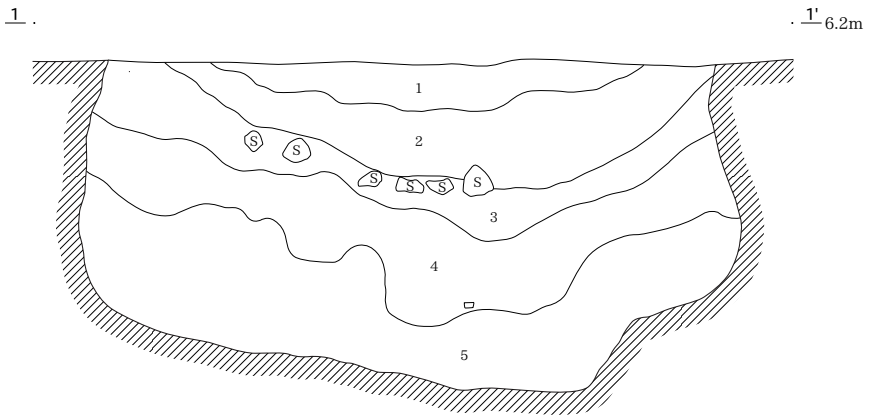
遺構分割図 11

1
1'
SK1639
3'
SD645
3
12D
11D
2'
SD580
2
5.90
12E
11E
6.05
撹乱
6.10
0
(1 : 80)
4m

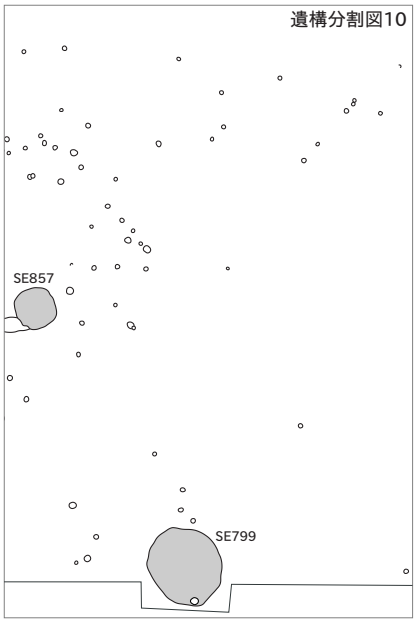




SE857
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～10mm）1%以下
2　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトブロック（φ1～100mm）10%
3　にぶい黄褐（10YR5/3）シルト　炭化物（φ5～30mm）3%
4　にぶい黄褐（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3、10～20mm）2%　形状をとどめていない木片が混入する。土質は3層と近似する。
5　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3、10～20mm）2%　鉄分の沈着が目立つ。
6　灰黄褐（10YR5/2）シルト　炭化物（φ～5mm）2%　炭化物は3～5層と比べ、粒径の大きな炭化物が少ない。鉄分の沈着がやや目立つ。
7　灰黄褐（10YR5/2）シルト　土質は6層に近似する。6層より鉄分の沈着が少ない。
8　灰（N6/）粘質シルト　粘性：強い　しまり：強い　8層上面に非常に薄い炭層が形成される。
9　灰（N5/）粘質シルト　粘性：強い　しまり強い　棒状の自然木片が出土した。
10　灰（N5/）粘質シルト　土質は9層に近似し、これに地山ブロックが混入する層。

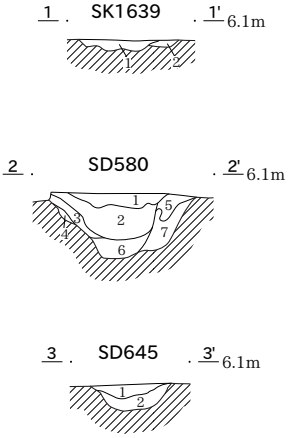


SE799
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～8mm）3%
3　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
4　暗褐色（10YR3/3）シルト
5　褐色（10YR4/4）砂質シルト　しまり：やや弱い



SE857
0　（1：40）　2m

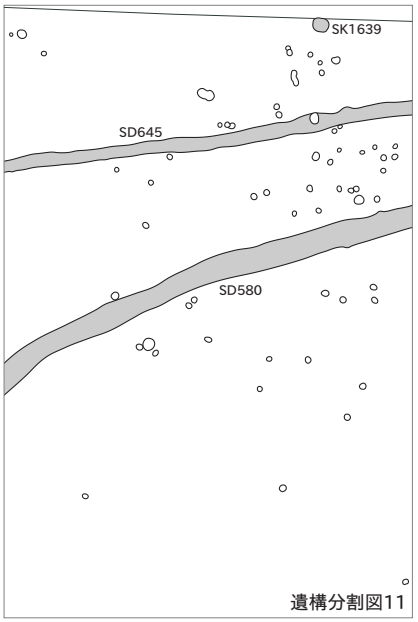
SE799
0　（1：30）　1.5m



SK1639
1　暗褐色（7.5YR3/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　焼土ブロック（φ～5mm）3%
2　明黄褐色（10YR6/6）シルト　炭化物（φ～1mm）1%

SD580
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　Ⅳ層ブロック少量混入　粘性：やや強い　しまり：やや強い　炭化物（φ1～2mm）2%
2　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　灰褐色シルトブロック混入　粘性：やや強い　しまり：やや強い　炭化物（φ1～2mm）1%
3　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　2層より色調暗い　壁崩落土（Ⅳ層）混入　シルトブロック（φ～3mm）5%　粘性：ある　しまり：ある
4　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　壁崩落土（Ⅳ層）多量混入
5　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや強い　炭化物（φ1～2mm）1%　焼土粒（φ2～3mm、10～15mm）5%　土器片・礫片出土層
6　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　灰褐色シルトブロック2層より多く混入　粘性：やや強い　しまり：やや弱い　にぶい黄褐色ブロック混入
7　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　壁崩落土混入

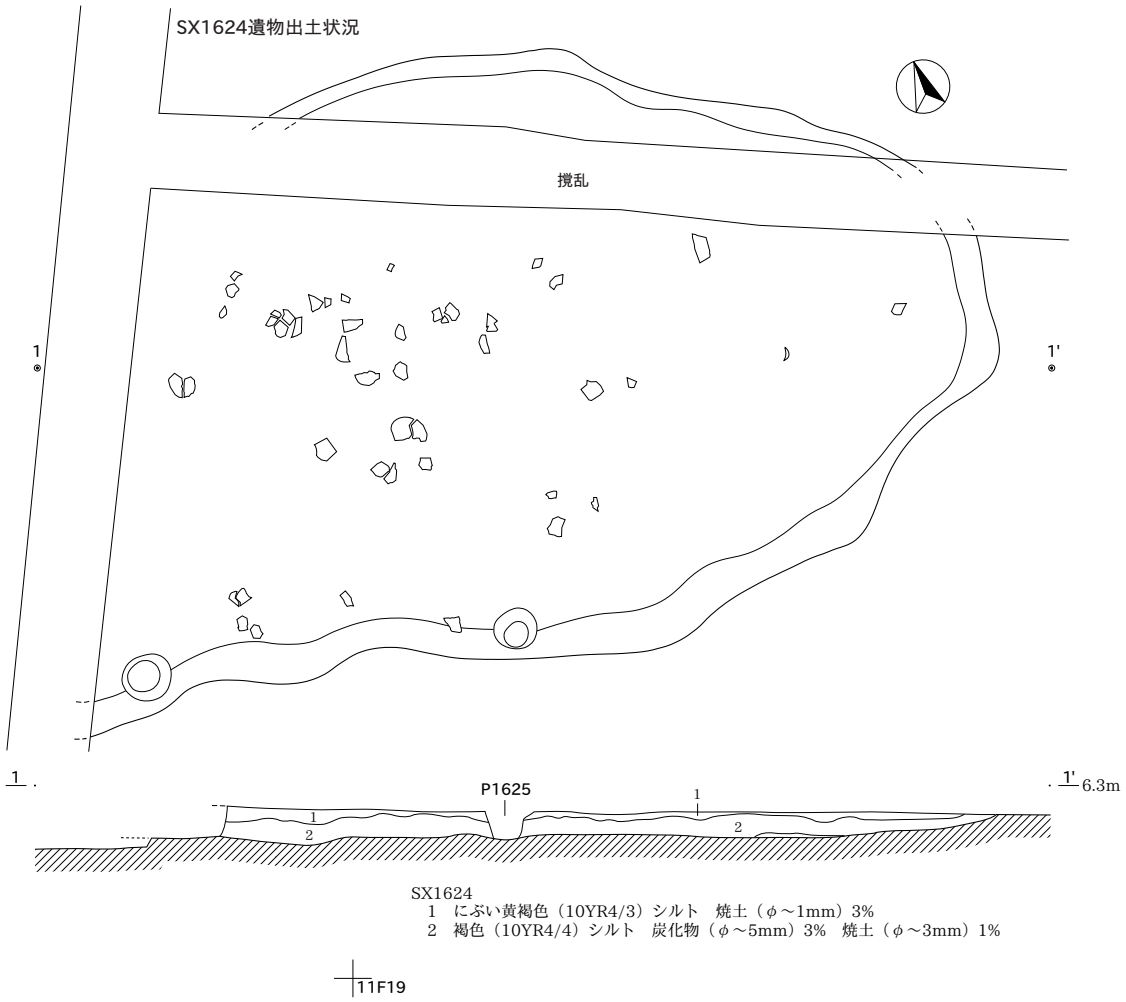
SD645
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
2　灰黄褐色（10YR5/2）シルト　しまり：やや弱い　土質は6層に近似するが、色調わずかに暗い。壁崩落土が混入する。



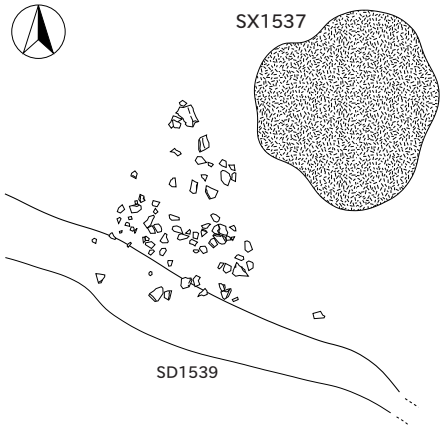
0　（1：40）　2m

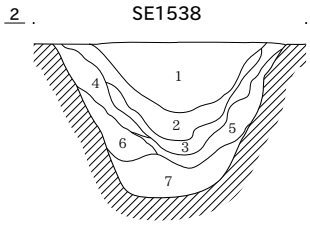
遺構分割図 12

5.90
5.95
6.10
6.15
6.20
6.00
6.05
11F
11G
11F4・5グリッド
遺物集中範囲
SE1538
P1586
SX1626
2
2'
撹乱
SX1537
遺物集中範囲
3
SD1539
3'
SX1624
1
1'
P1625
P1567
P1568
水路
SD1540
4'
4
9Tr
10Tr
0
(1 : 80)
4m

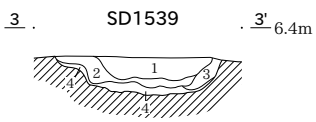


SX1624
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　焼土（φ～1mm）3%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）3%　焼土（φ～3mm）1%

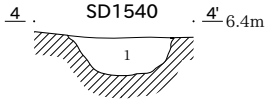




SE1538
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　黒褐色（10YR3/2）シルト
3　褐色（10YR4/4）粘質シルト
4　暗褐色（10YR3/3）シルト
5　暗褐色（10YR3/3）シルト
6　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　シルトブロックが主体の層である。
7　褐灰色（10YR4/1）シルト　土質は均質でグライ化が顕著である。



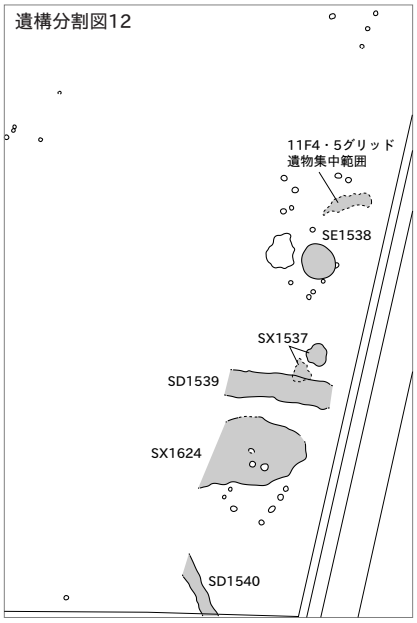
SD1539
1　暗褐色（10YR3/3）シルト
2　暗褐色（10YR3/4）シルト
3　黒褐色（10YR2/3）シルト
4　褐色（10YR4/4）シルト　シルトブロックが主体の層である。

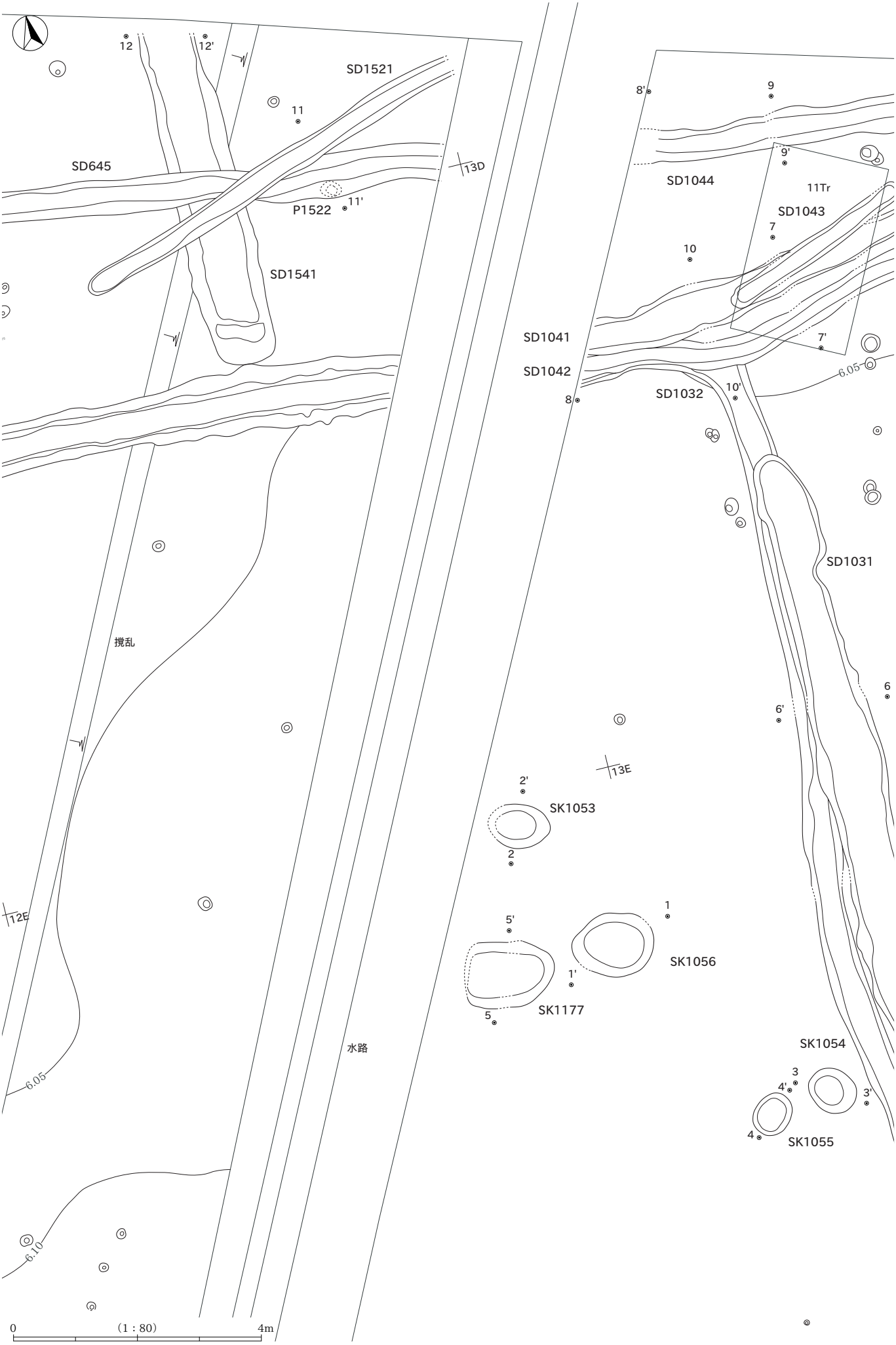


SD1540
1　にぶい黄褐色
（10YR4/3）シルト

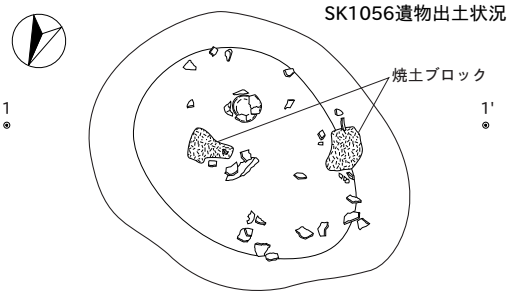
0　（1：40）　2m

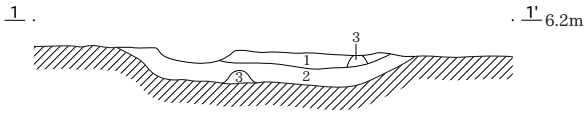
SX1537・1583・1624・1627
0　（1：30）　1.5m



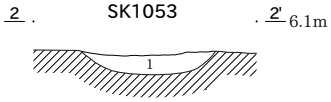

12
12'
SD1521
11
SD645
13D
P1522
11'
SD1541
撹乱
12E
6.05
6.10
水路
8'
9
9'
SD1044
11Tr
SD1043
7
10
SD1041
SD1042
8
7'
6.05
SD1032
10'
SD1031
6
6'
13E
2'
SK1053
2
1
5'
SK1056
1'
SK1177
5
SK1054
3
4'
3'
4
SK1055
0
(1：80)
4m

SK1056遺物出土状況

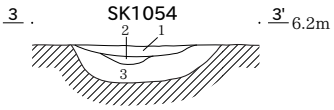




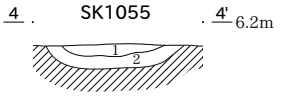
SK1056
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～10mm）3%
　焼土（φ～5mm）5%
3　焼土主体層



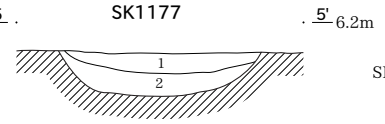
SK1053
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%



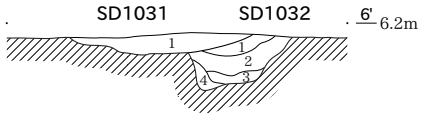
SK1054
1　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：強い　炭化物
　（φ～5mm）5%　焼土（φ～3mm）3%
2　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
　焼土（φ～2mm）3%
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下
　焼土（φ～10mm）1%



SK1055
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
　焼土（φ～2mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～
　3mm）1%　焼土（φ～5mm）3%

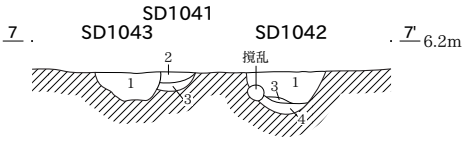


SK1177
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強い　炭化物（φ～3mm）1%
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）3%

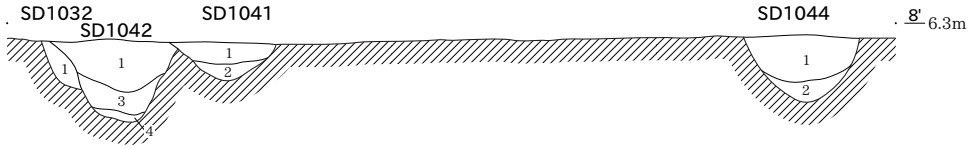


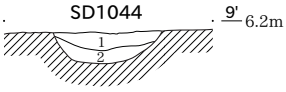
SD1031
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）5%

SD1032（6－6'、8－8'、10－10'）
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト　粘性：強い
　シルトブロックが主体の層である。
4　褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性：強い

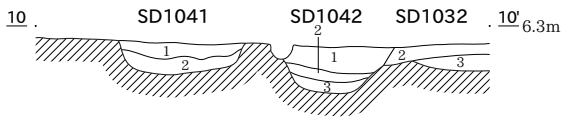


SD1043
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　黄褐色砂質シルト粒1%
　粘性：やや強い　しまり：





SD1044（8－8'、9－9'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　土質はⅢa層に近似する。
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　グライ化が顕著である。

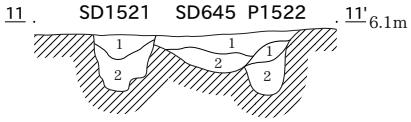


SD1041（7－7'、8－8'、10－10'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強い　地山（Ⅳ層）ブロック1%　黄灰砂質シルトブロック5%
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：強い　地山（Ⅳ層）ブロック5%　黄灰砂質シルトブロック1%　色調は1層に比べやや暗い。
3　黄褐色（10YR5/6）シルト　黄灰砂質シルトブロック10%

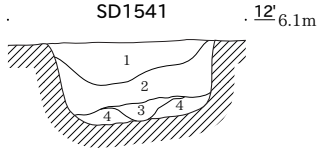
SD1042（7－7'、8－8'、10－10'）
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　地山（Ⅳ層）ブロック5%　黄灰砂質シルトブロック7%。Ⅲa層を
　基本とするが、やや変質している。
2　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：やや弱い　1層と土質近似するが、グライ化が顕著である。
3　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：やや弱い　地山（Ⅳ層）ブロック10%
4　暗褐色（10YR3/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　黄褐色砂質シルトブロック10%

SD1521
1　褐色（10YR4/4）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト

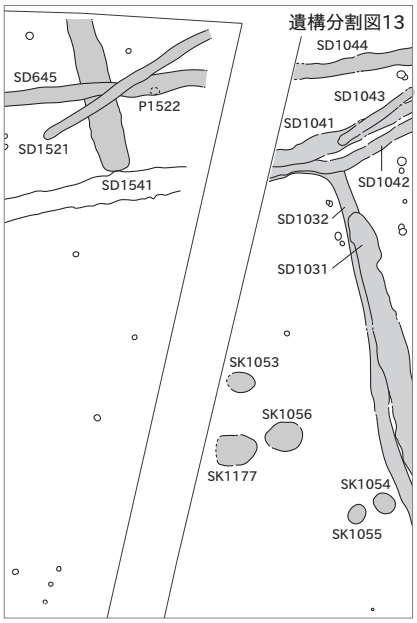
SD645（12C24）
1　暗褐色（10YR3/4）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト
　酸化鉄沈着。一部ラミナ状
　に堆積する。



P1522
1　暗褐色（10YR3/4）シルト
2　褐色（10YR4/4）シルト　酸化鉄が沈着し、
　一部はラミナ様に堆積する。



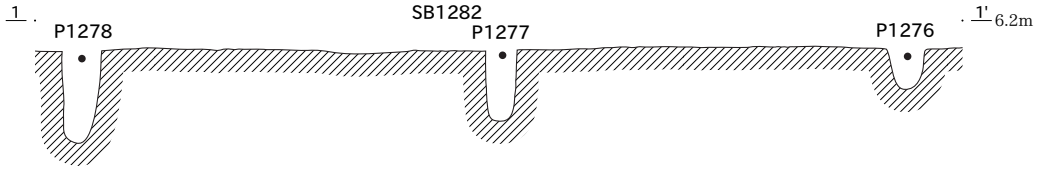
SD1541
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3 ）1%以下
2　暗褐色（10YR3/3）シルト
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3 ）1%
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト　地山ブロックの再堆積土が主体。

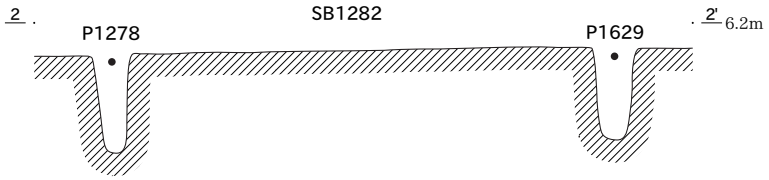


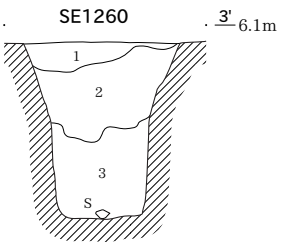
0　（1：40）　2m

SK1056
0　（1：30）　1.5m

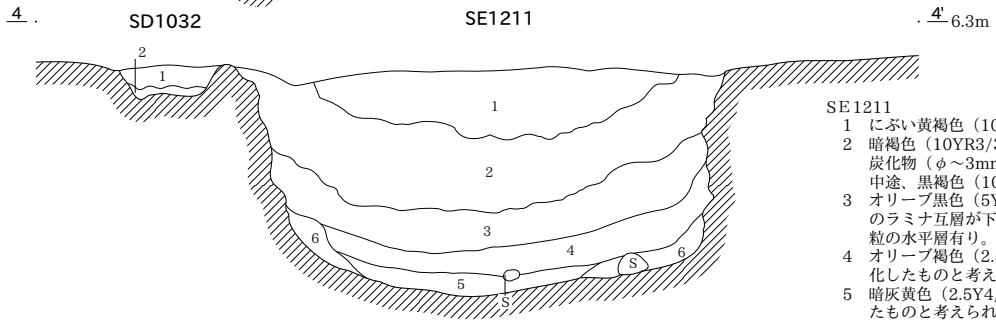
3
3'
SE1260
P1280
P1281
P1279
6.05
6.05
1'
P1276
P1277
2
1
P1278
SB1282
P1630
P1283
P1629
2'
13F
6
SK1225
6'
P1633
P1631
P1632
13G
4
SD1207
SD1032
SE1211
9
8
9'
8'
SD1201
4'
SD1031
10'
10
14F
7
7'
14G
SE1175
11'
5
5'
11
SD1259
0
(1 : 80)
4m



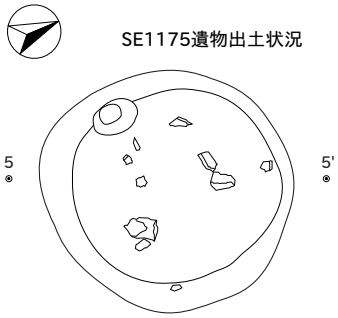


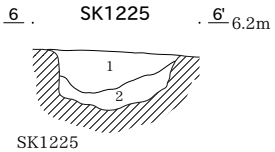


SE1260
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト
　炭化物（φ～3mm）
　1%以下
3　褐灰色（10YR4/1）粘質シルト
　粘性：強い

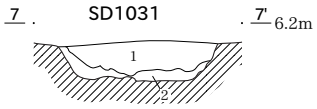


SE1211
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　焼土（φ～1mm）1%以下
2　暗褐色（10YR3/3。下部、グライ化して灰色（5Y4/1））粘質シルト
　炭化物（φ～3mm）1%　焼土（φ～1mm）1%以下
　中途、黒褐色（10YR2/2）シルトの間層が入り互層状となる。
3　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質シルト　シルトと黒色土（10YR2/1）のラミナ互層が下部で発達。このラミナ互層上に赤色（10R4/4）粒の水平層有り。
4　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質シルト　色調はグライ化により変化したものと考えられる。一部、黒色土の間層入る。
5　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質シルト　色調はグライ化により変化したものと考えられる。
6　黄褐色（2.5Y5/4）粘質シルト　地山ブロック主体層。比較的早く堆積した地山崩落層。

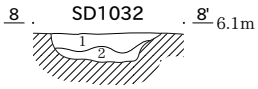




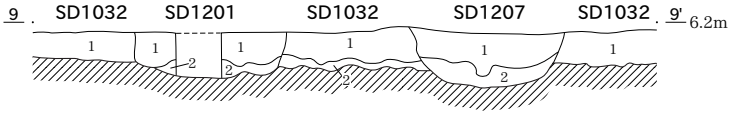
SK1225
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト



SD1031
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　炭化物（φ～1mm）1%以下
2　褐色（10YR4/6）粘質シルト

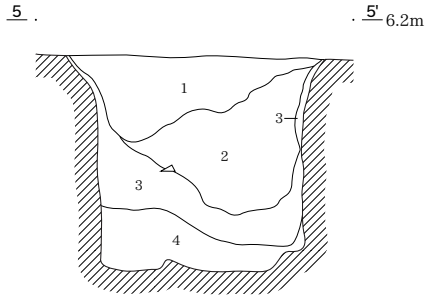


SD1032（8－8'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質シルト
　シルトブロックが主体の層である。

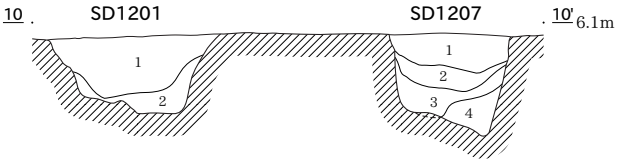


SD1032（9－9'）
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト
2　明黄褐色（10YR6/6）粘質シルト　粘性：強い
　シルトブロックが主体の層である。

SD1207（9－9'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト

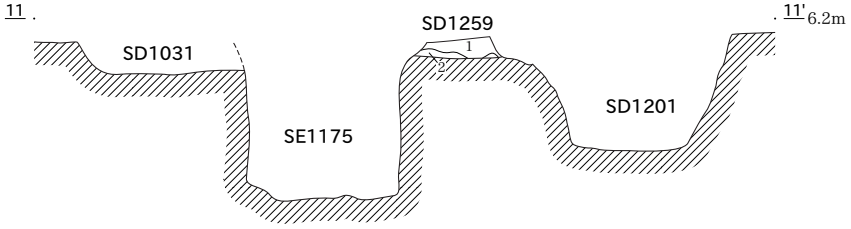


SE1175
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
4　褐灰色（10YR4/1）シルト　粘性：強い　炭化物（φ～5mm）1%

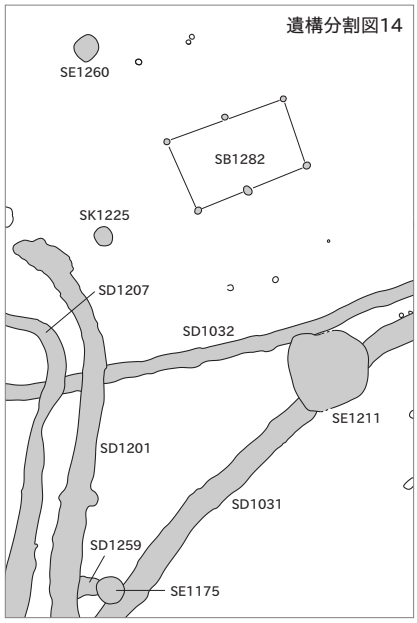


SD1201（9－9'、10－10'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト

SD1207（10－10'）
1　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト
2　黒褐色（2.5Y3/2）粘質シルト　地山ブロック（φ～10mm）10%　壁崩落土が主体の層である。
3　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
4　オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質シルト　シルトブロック主体層（φ～5mm）10%

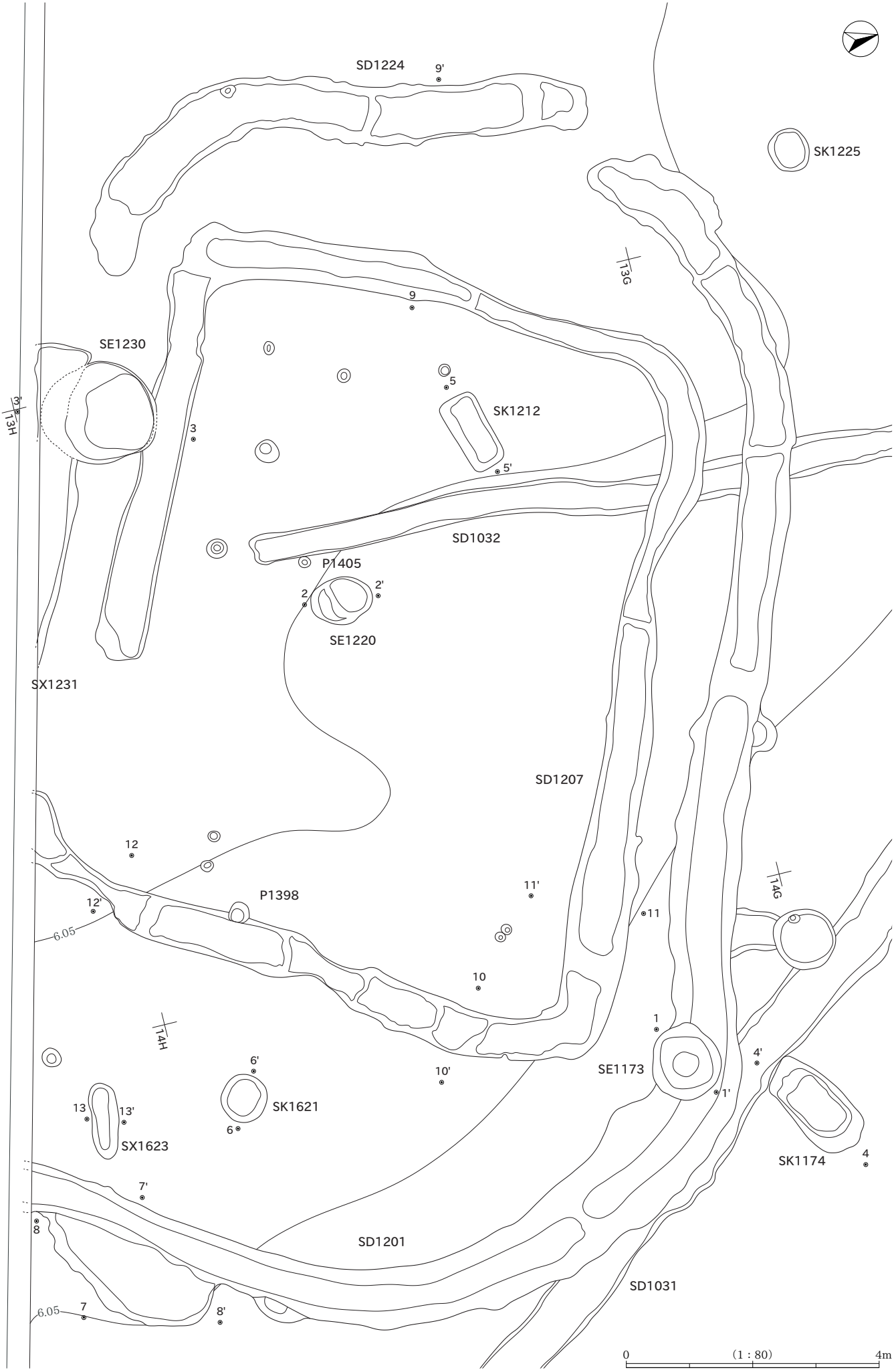


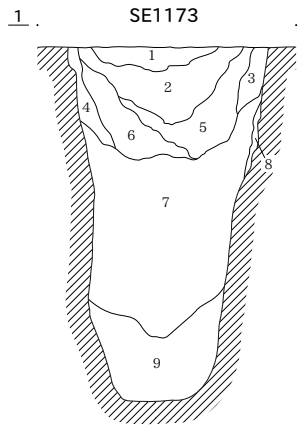
SD1259
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト



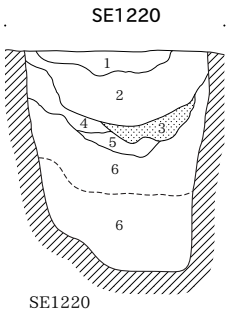
0　（1：40）　2m

SE1175
0　（1：30）　1.5m

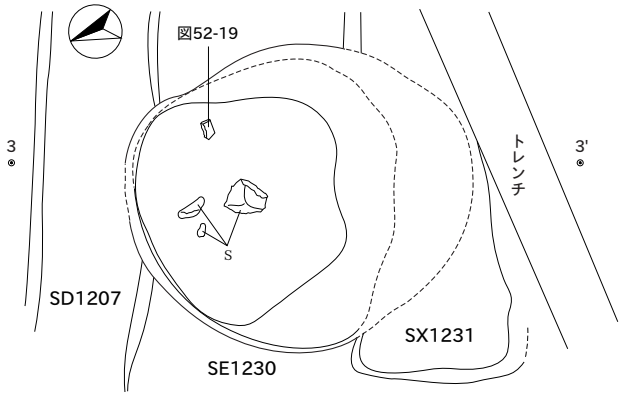

SD1224
9'
SK1225
13G
9
SE1230
5
SK1212
3
5'
13H
SD1032
P1405
2
2'
SE1220
SX1231
SD1207
12
11'
P1398
12'
6.05
11
14G
10
1
14H
6'
10'
SE1173
4'
1'
13
13'
SK1621
6
SX1623
SK1174
4
7'
8
SD1201
SD1031
6.05
7
8'
0
(1 : 80)
4m

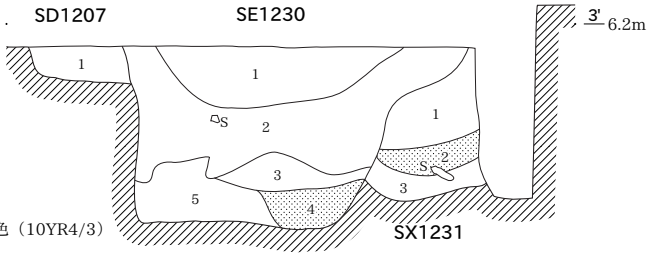


SE1173
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
焼土（φ～5mm）1%
3　黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
4　黒褐色（10YR3/2）シルト　炭化物（φ～10mm）3%
5　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
6　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
焼土（φ～5mm）1%
7　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：やや弱い　灰を多量に混入する。
8　黒褐色（10YR3/1）粘質シルト　シルトブロックが主体の層である。
9　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト　粘性：強い
しまり：強い　炭化物（φ～1mm）1%以下



SE1220
1　黒褐色（10YR3/2）シルト
炭化物（φ～3mm）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）
シルト　炭化物（φ～5mm）3%　焼土（φ1mm）1%
3　黒色（10YR2/1）シルト
しまり：やや弱い
炭化物主体層
4　褐色（10YR4/4）シルト
炭化物（φ～3mm）1%
シルトブロックが主体の層。
5　暗褐色（10YR3/3）シルト
シルトブロックが主体の層。
6　黒褐色（10YR3/2）シルト
炭化物（φ～5mm）1%

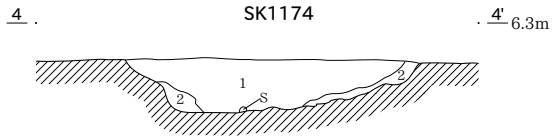




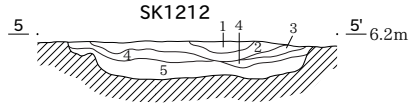
SD1207（3－3'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）
シルト

SE1230
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
2　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～3mm）3%以下
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト
4　黒褐色（10YR3/2）シルト　炭化物（φ～3mm）10%　焼土粒（φ～5mm）3%以下SX1231の1・2層からの崩落土層。
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト　シルトブロック主体層　地山ブロックによる埋め戻し土か。

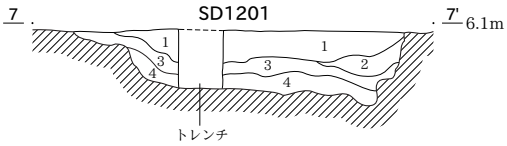
SX1231
1　黒色（2.5Y2/1）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）10%　焼土粒（φ～10mm）3%　シルトブロックと炭化物粒の混合土層。
2　灰白色（10YR7/1）シルト　粘性：強い　しまり：弱い　炭化物主体層である。
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト　粘性：強い　しまり：弱い

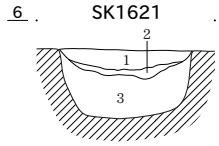


SK1174
1　褐色（10YR4/4）シルト
2　褐色（10YR4/6）粘質シルト

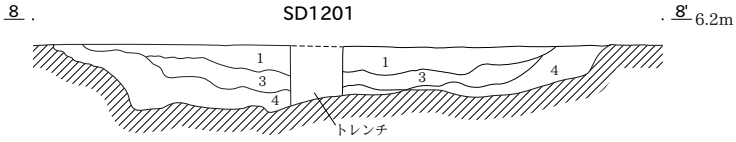


SK1212
1　暗褐色（10YR3/3）シルト
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト
3　黒褐色（10YR2/2）シルト　炭化物（φ～5mm）10%
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）　シルト
炭化物（φ～3mm）1%以下
5　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%

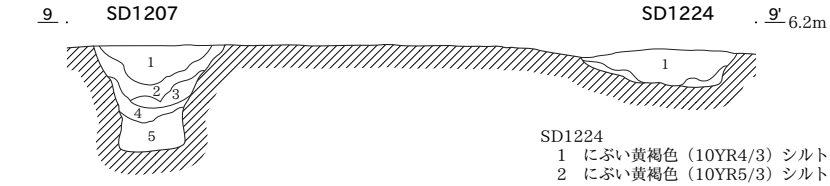




SK1621
1　灰黄褐色（10YR4/2）シルト
炭化物（φ～1mm）1%以下
2　黒色（10YR2/1）シルト
炭化物が主体の層である。
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）
シルト　炭化物（φ～1mm）1%

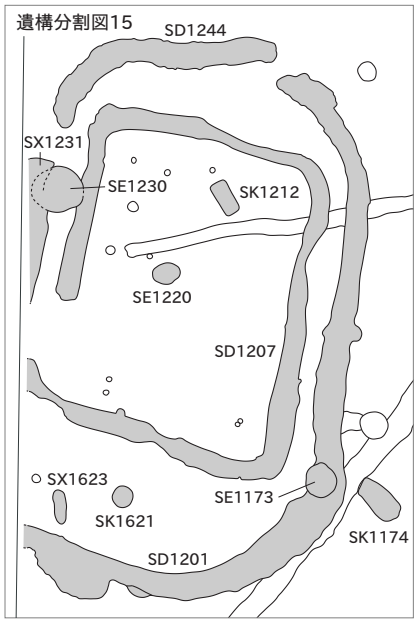


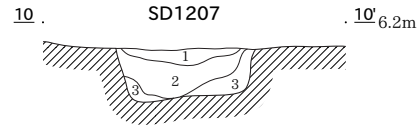
SD1201（7－7'、8－8'）
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト
3　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下
4　黒褐色（7.5YR3/2）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下
焼土（φ～1mm）1%以下



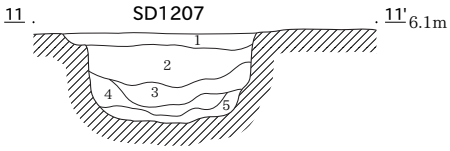
SD1224
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト

SD1207（9－9'）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
2　黒褐色（10YR3/2）シルト
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト　壁崩落地山ブロック主体層。
4　黒褐色（10YR3/2）シルト　色調・土質共に2層に近似する。
5　灰黄褐色（10YR4/2）シルト





SD1207（10－10'）
1　灰色（5Y5/1）粘質シルト
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト
3　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質シルト



SD1207（11－11'）
1　黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルト
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト
3　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト
4　黒褐色（2.5Y3/1）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下
5　黒色（2.5Y2/1）粘質シルト

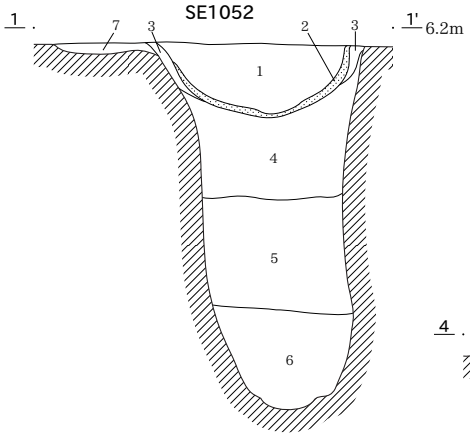
SD1207（12－12'）
1　黒褐色（7.5YR3/1）シルト
2　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質シルト　シルトブロックが主体の層である。
3　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質シルト　焼土（φ～1mm）1%以下

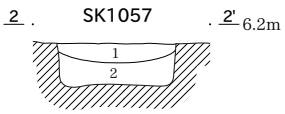
SX1623
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト
炭化物（φ～1mm）1%
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト

0　（1：40）　2m

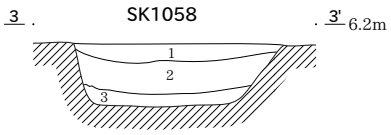
遺構分割図 16

SD1044
11Tr
SD1041
SD1042
6.05
10
3'
SK1058
3
6.05
6.10
9'
9
SX1178
10'
1'
1
SE1052
14E
SK1180
SK1210
5'
6'
6
SK1213
5
2
SK1057
2'
4
4'
SK1179
8'
7
SX1209
SX1208
8
7'
14F
0
(1 : 80)
4m

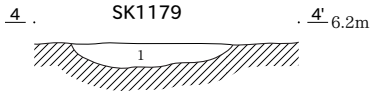




SK1057
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強い
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　しまり：やや弱い
炭化物（φ～2 mm）1%

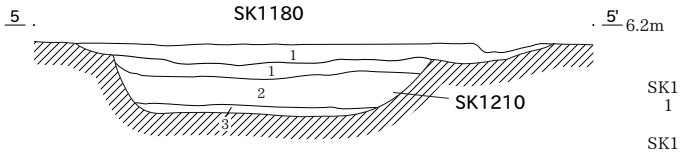


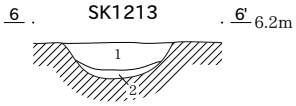
SK1058
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：強
炭化物（φ～2mm）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
3　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～10mm）5%

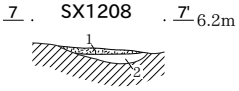


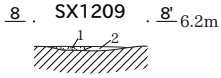
SK1179
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～10mm）3%

SE1052
1　褐色（10YR4/4）シルト　Ⅲ層土体土　Ⅳ層ブロック少量混入　粘性：やや強い　しまり：やや強い　炭化物（φ1～2mm）1%
2　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物主体層（φ1～20mm）　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや強い　しまり：ある　炭化物（φ1～3mm）3%
4　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ1～3mm）1%
5　暗褐色（10YR3/1）シルト　粘性：ある　しまり：やや弱い　炭化物（φ1～5mm）3%
6　褐灰色（10YR5/1）シルト　粘性：ある　しまり：やや弱い　炭化物（φ1～5mm）3%
7　暗褐色（10YR3/3）シルト　粘性：ある　しまり：やや強い　黄灰色砂粒5%









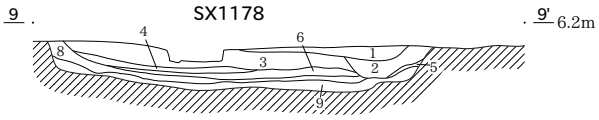
SK1180
1　褐色（7.5YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%

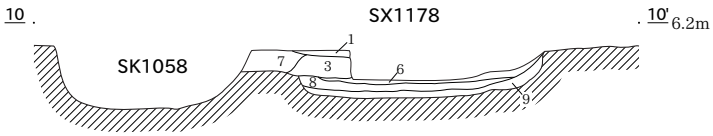
SK1210
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%以下
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～10mm）5%　部分的に焼土粒が認められる。

SK1213
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
黄灰シルトブロックと地山（Ⅳ層）ブロックを1%含む。
人為的に埋め戻された可能性がある。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　しまり：弱い　土質は1層に近似するが、わずかにしまりが弱い。

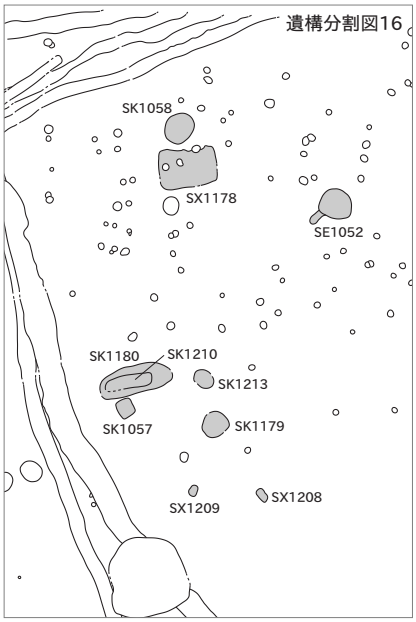
SX1208
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
焼土塊（φ5～10mm）10%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物
（φ～2mm）3%　焼土（φ～2mm）1%

SX1209
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：強い
炭化物（φ～2mm）1%　焼土（φ～5mm）10%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
被熱により赤変する部分が認められる。



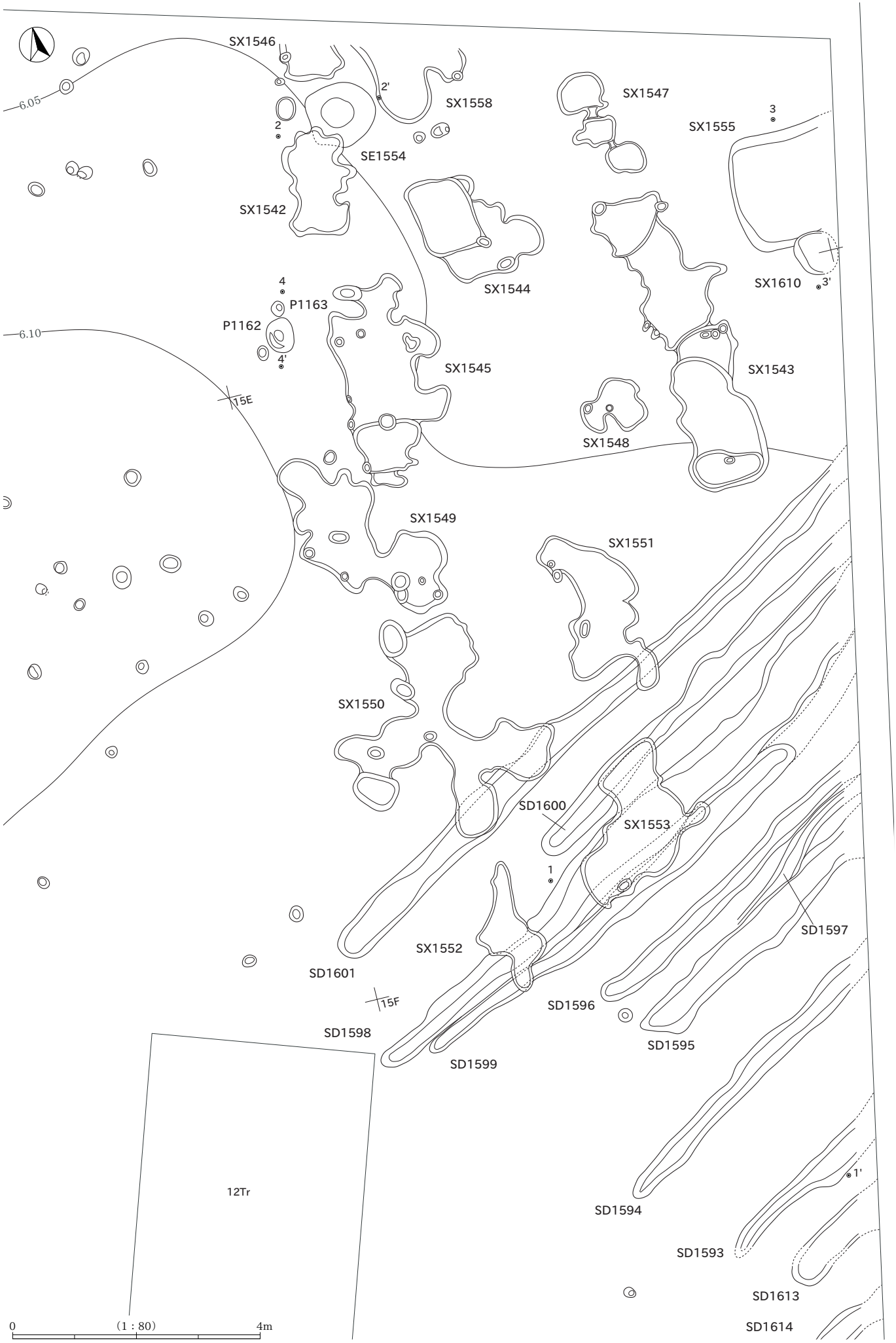


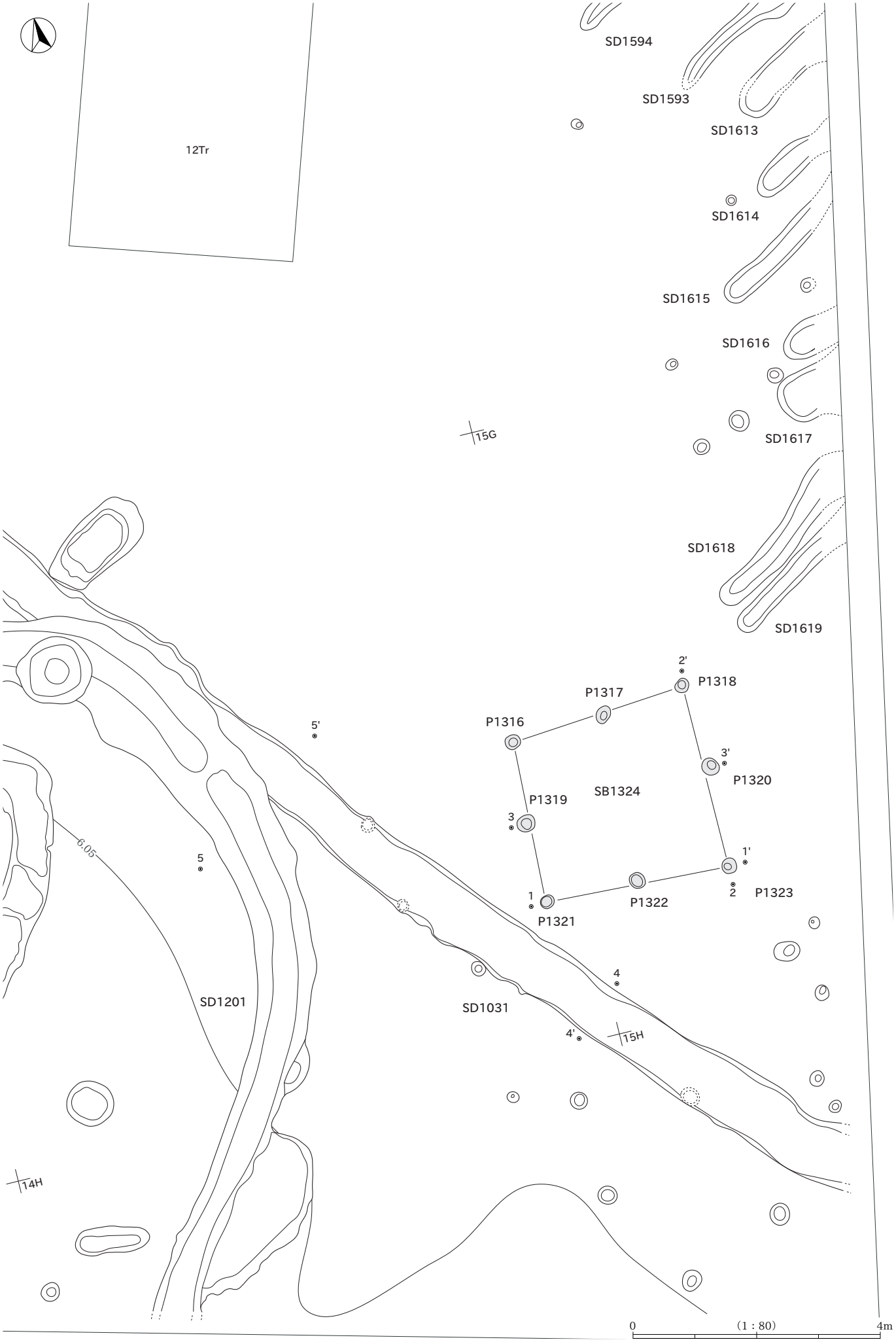
SX1178（9－9'、10－10'）
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%　　焼土（φ～5mm）1%以下
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）5%　焼土（φ～5mm）1%
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ1～5mm）1%以下　焼土（φ～5mm）1%以下
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
5　にぶい赤褐色（5YR4/4）シルト　粘性：弱い　しまり：強い　焼土ブロック主体層。
6　暗赤褐色（5YR3/2）シルト　炭化物（φ～5mm）3%
7　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　最下部に焼土ブロックが堆積。
8　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物･焼土を含まない。
9　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ5～20mm）5%　焼土塊（φ5～20mm）5～10%



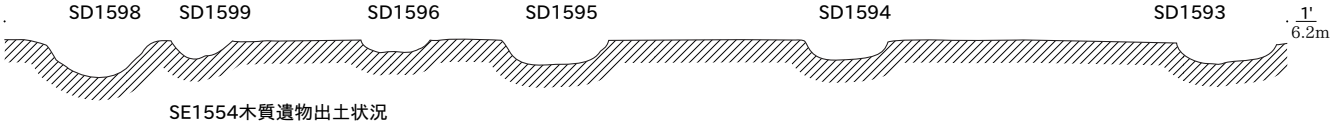
0　（1：40）　2m

遺構分割図 17

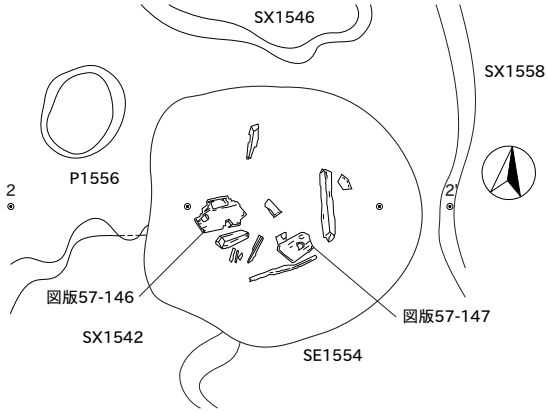

SX1546
2'
SX1558
SX1547
3
SX1555
6.05
2
SE1554
SX1542
SX1544
SX1610
3'
4
P1163
P1162
6.10
4'
SX1545
SX1543
15E
SX1548
SX1549
SX1551
SX1550
SD1600
SX1553
1
SD1597
SX1552
SD1601
15F
SD1596
SD1598
SD1595
SD1599
1'
12Tr
SD1594
SD1593
SD1613
SD1614
0
(1：80)
4m

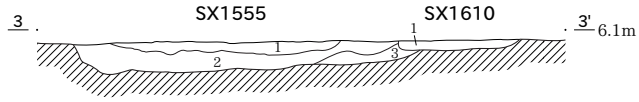

12Tr
SD1594
SD1593
SD1613
SD1614
SD1615
SD1616
SD1617
SD1618
SD1619
15G
15H
14H
P1316
P1317
P1318
P1319
P1320
P1321
P1322
P1323
SB1324
SD1201
SD1031
6.05
1
1'
2
2'
3
3'
4
4'
5
5'
0
(1 : 80)
4m

遺構個別図 17（SE1554、SD1593 ～ 1596・1598・1599、SX1555・1610、P1162・1163）／（SB1324、SD1031・1201）



SE1554木質遺物出土状況

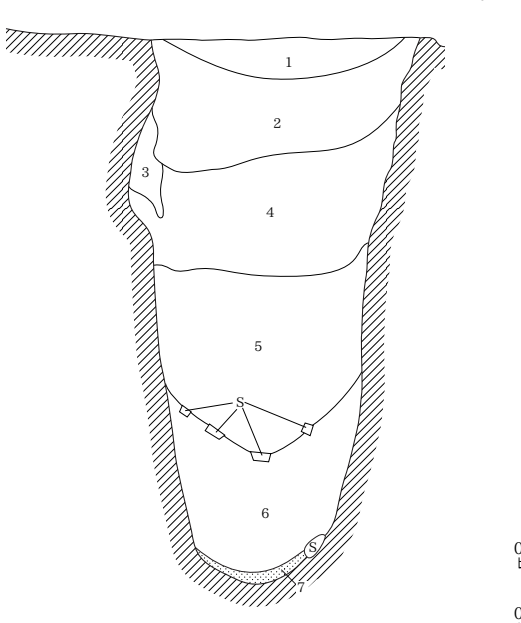


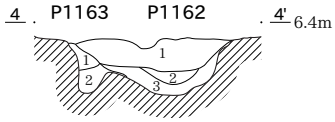


SX1555
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　地山（Ⅳ・Ⅶ層）ブロック（φ5～20mm）5%　Ⅲa層を主体とする層。
2　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　地山（Ⅳ層）ブロック（φ20～50mm）20%
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　地山（Ⅳ層）ブロック（φ5～10mm）3%　Ⅲa層と地山ブロックの混合土層。

SX1610
1　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト　地山（Ⅳ層・Ⅵ層）ブロック混在。

SE1554
1　褐色（10YR4/4）シルト　Ⅲa層を主体とする層。
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%　1層と比べ、しまりが弱い。
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　壁崩落土（Ⅶ層・黄灰砂質シルト）が主体の層である。
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　2層がグライ化した部分か。
5　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト　しまり：弱い　炭化物をほとんど含まない。
6　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%
7　黒褐色（10YR3/1）シルト　しまり：やや弱い　炭化物が主体の層である。

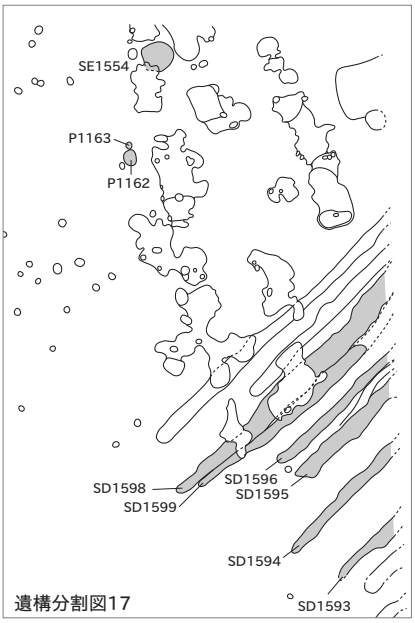




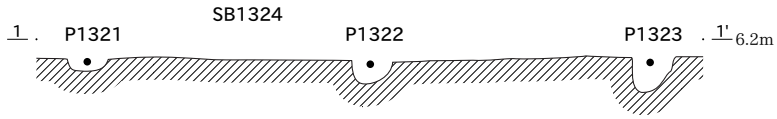
P1162
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　地山（Ⅳ層）ブロック5%
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：強い　地山（Ⅳ層）ブロック3%
3　暗褐色（10YR3/3）シルト　しまり：やや弱い　Ⅳ層土を主体とする層。

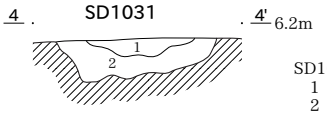
P1163
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　しまり：やや弱い　黄灰砂質シルトとⅣ層土の混合土層である。
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い

SE1554
0　（1：40）　2m
0　（1：30）　1.5m

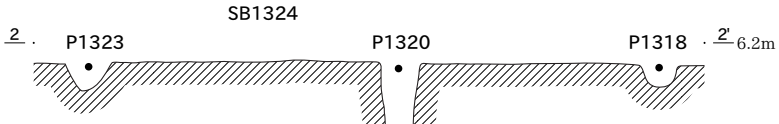


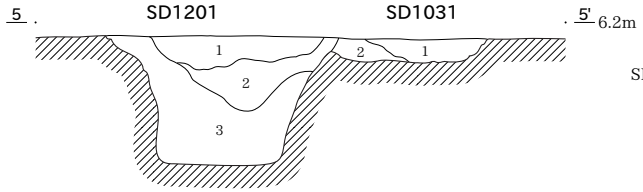
遺構分割図17





SD1031（4－4'）
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト

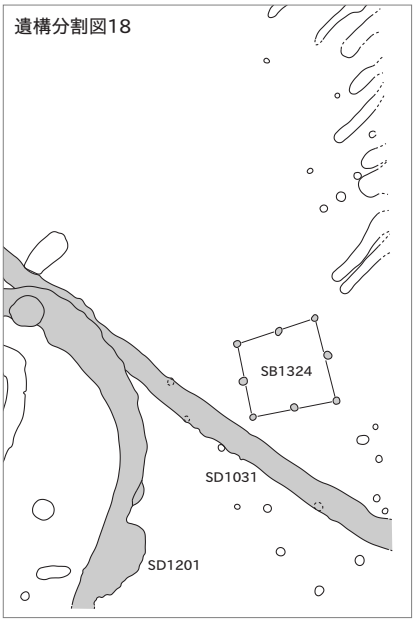




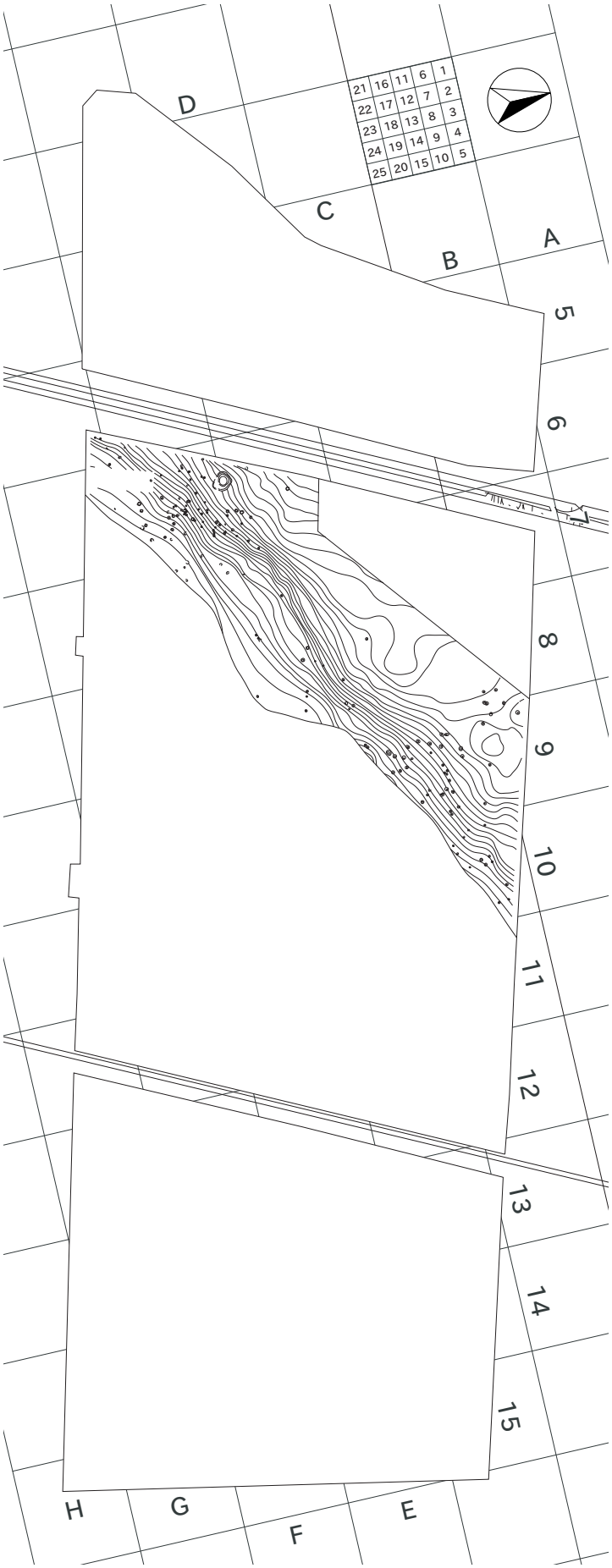
SD1031（5－5'）
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト
2　黄褐色（10YR5/6）粘質シルトシルトブロックが主体の層である。

SD1201
1　褐色（10YR4/4）シルト
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）1%　焼土（φ～3mm）1%以下
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト

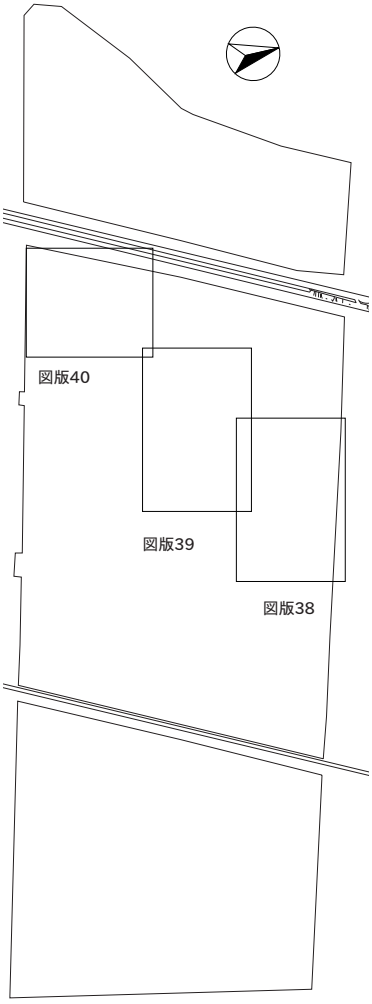
0　（1：40）　2m



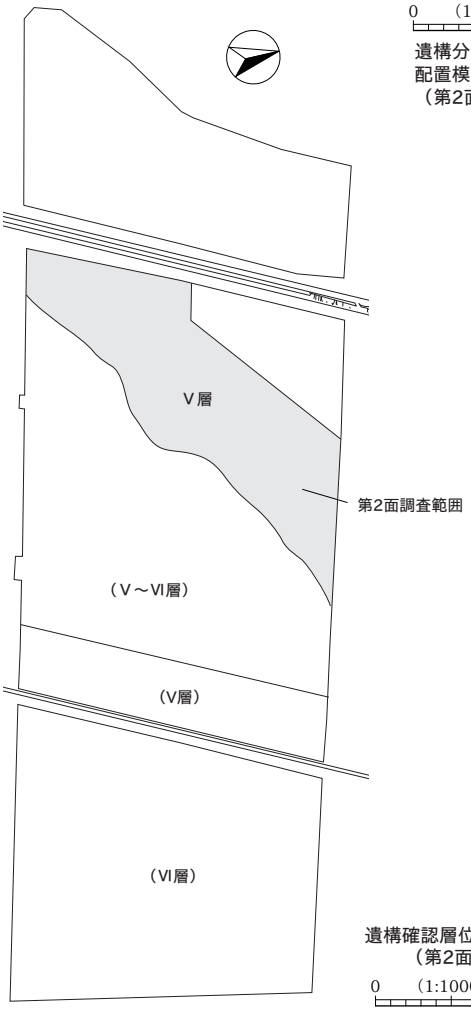
遺構分割図18



遺構配置図2（第2面）

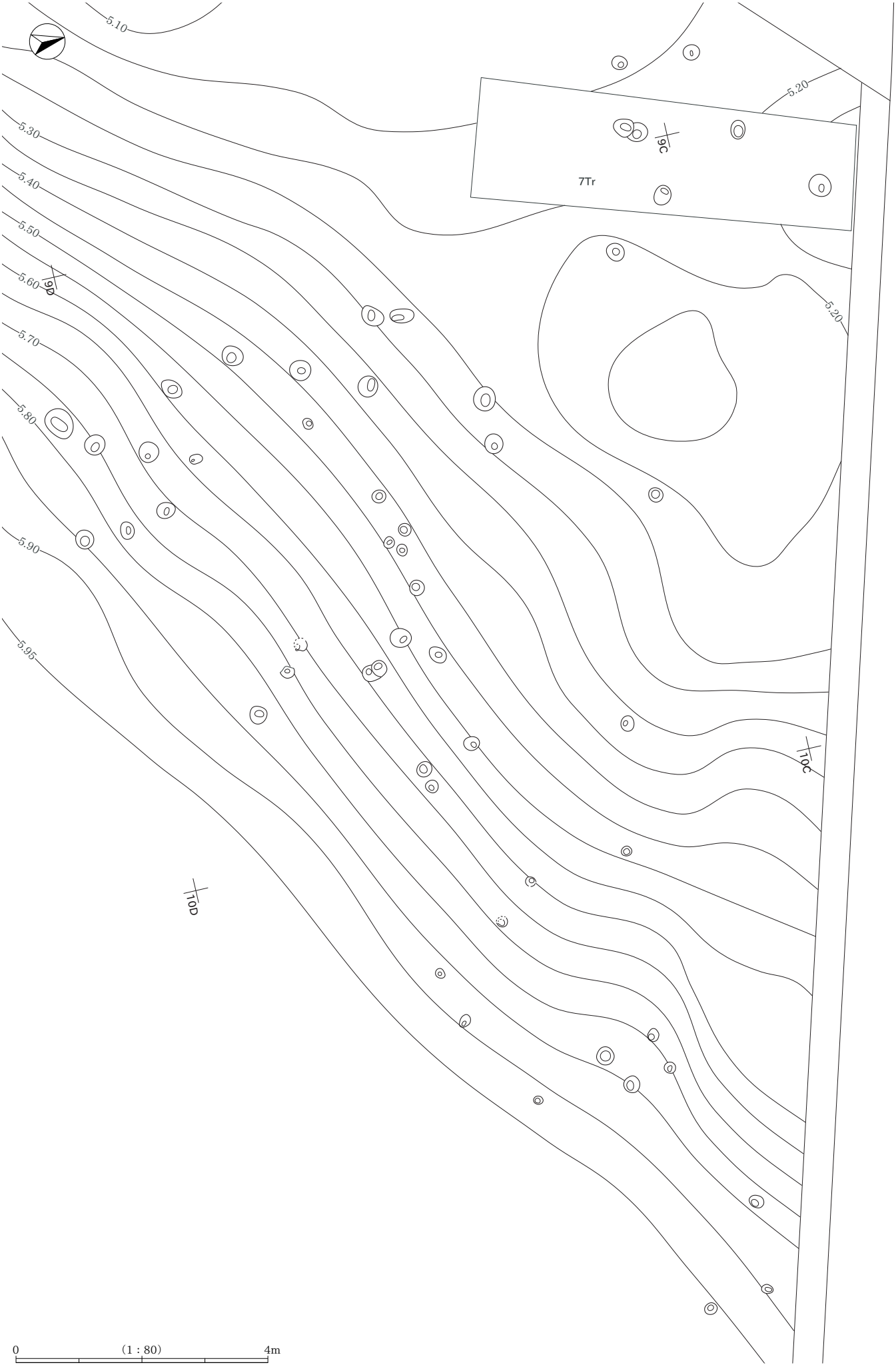


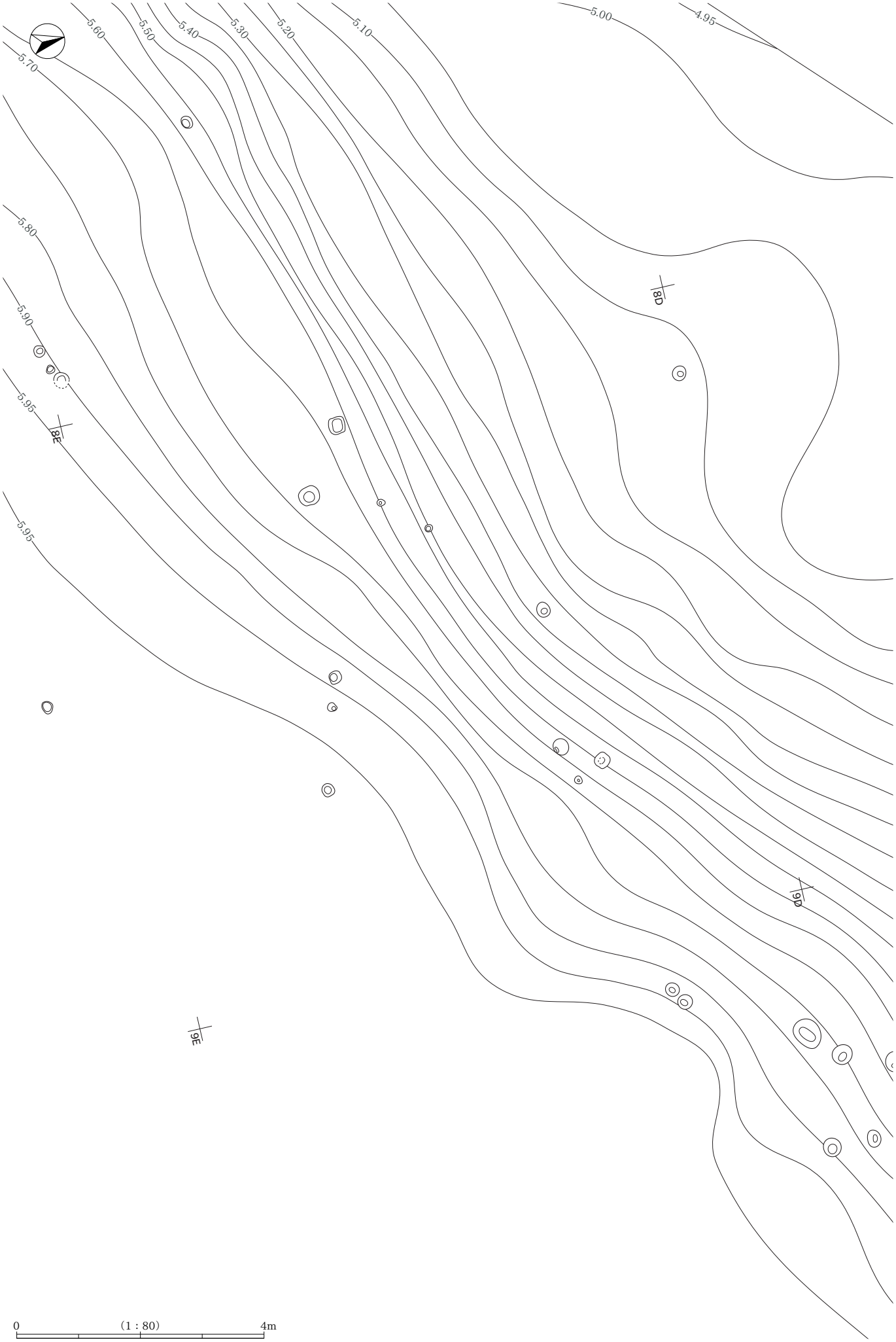
遺構分割図
配置模式図
（第2面）



遺構確認層位模式図
（第2面）

遺構分割図 19


5.10
5.20
5.30
5.40
5.50
5.60
5.70
5.80
5.90
5.95
5.20
7Tr
9C
9D
10C
10D
0
(1 : 80)
4m


5.70
5.60
5.50
5.40
5.30
5.20
5.10
5.00
4.95
5.80
5.90
5.95
5.95
8D
8E
9D
9E
0
(1 : 80)
4m

SK1414
1'
2'
1
2
P1337
P1387
P1430
5Tr
6E
7E
6F
7F
4.90
5.00
5.10
5.20
5.30
5.40
5.50
5.60
5.70
5.80
5.90
6.00
0
（1：80）
4m

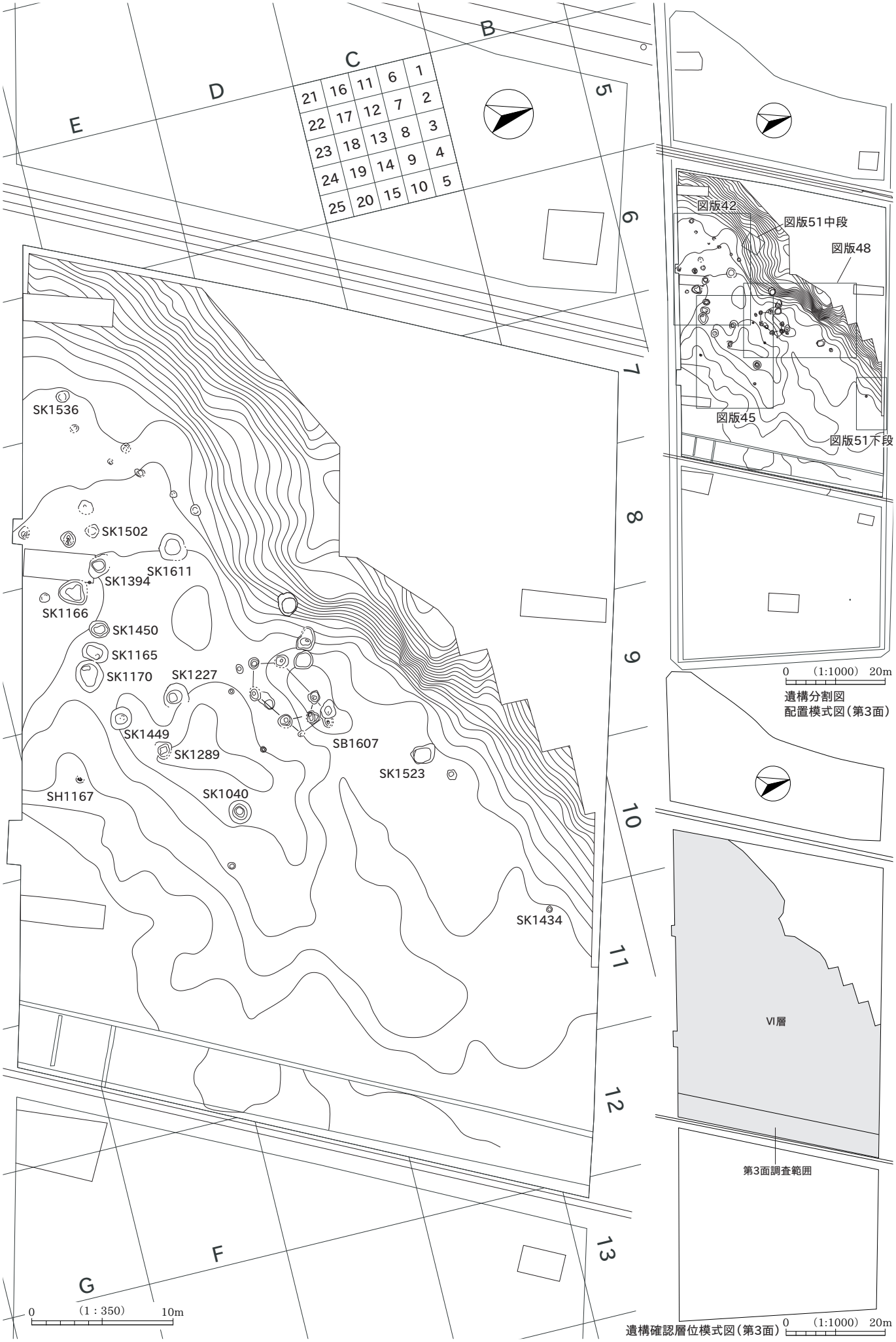
SK1414
1
1'
5.2m
3
2
3
1
5
4
6

SK1414
2
2'
5.2m
5
4
6

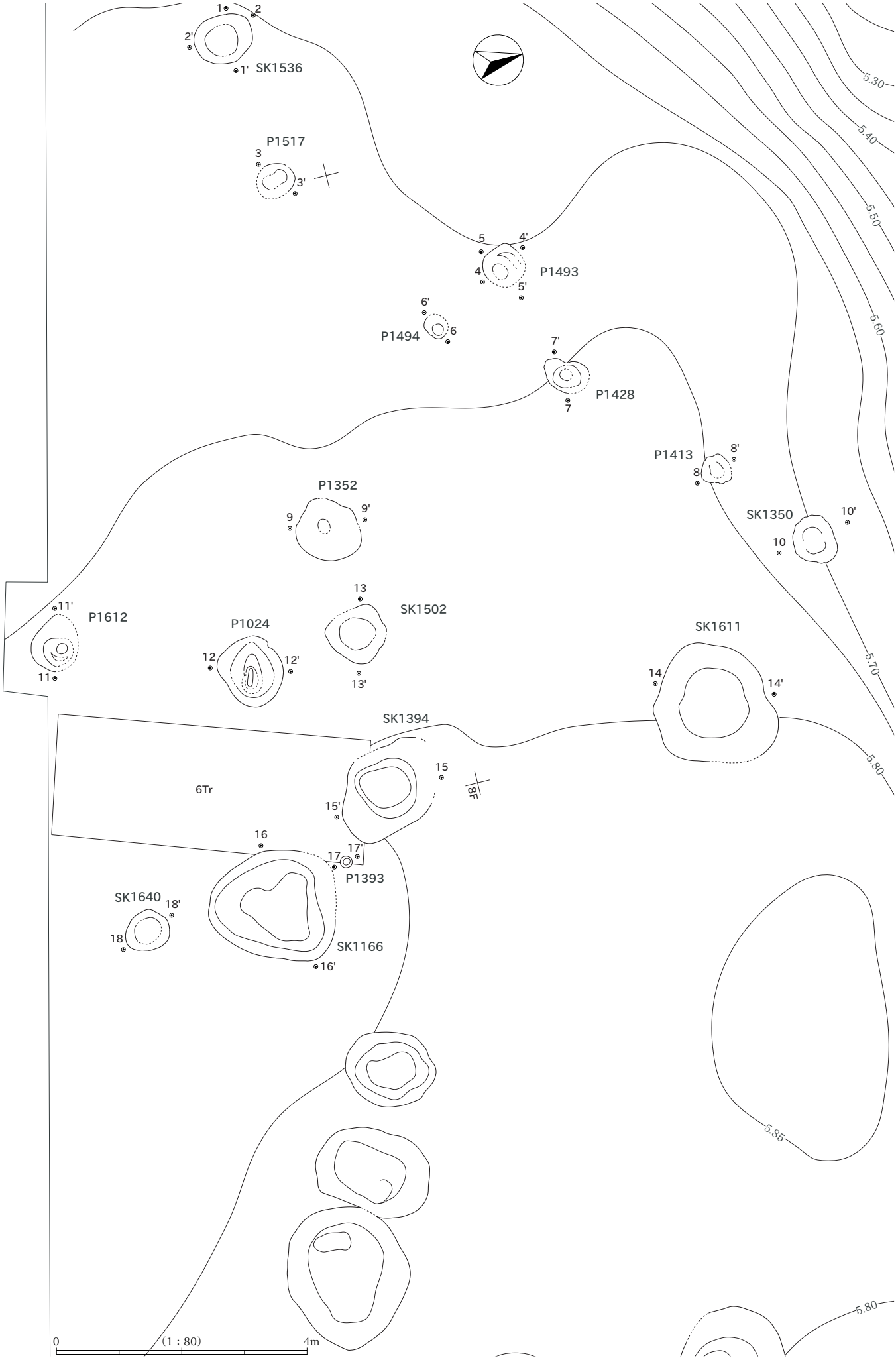
遺構分割図21

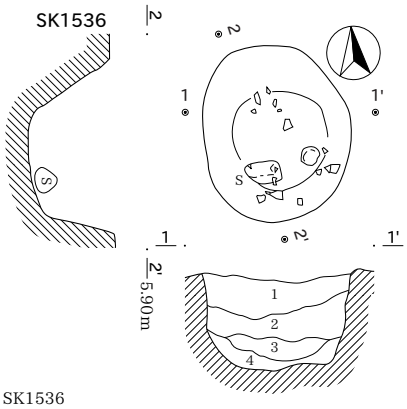
SK1414（1－1'、2－2'）
1　黒褐色（7.5YR3/2）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　酸化鉄5%斑紋状に混入する。
2　暗褐色（7.5YR3/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%　焼土（φ～3mm）1%
　灰黄色粘土粒（φ3～10mm）5%
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　焼土（φ～2mm）1%以下
4　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～10mm）3%　焼土（φ～10mm）1%
5　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～10mm）3%
　焼土（φ～10mm）1%　4･5層と6層の間に層厚1cm以下の焼土の薄層を挟む。
6　黒褐色（10YR3/2）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～30mm）10%　焼土10%　上位
　2mmほどの赤変が強く、これより下位では徐々に地山と同化する。本層上面が被熱面と考えられる。

0
（1：40）
2m

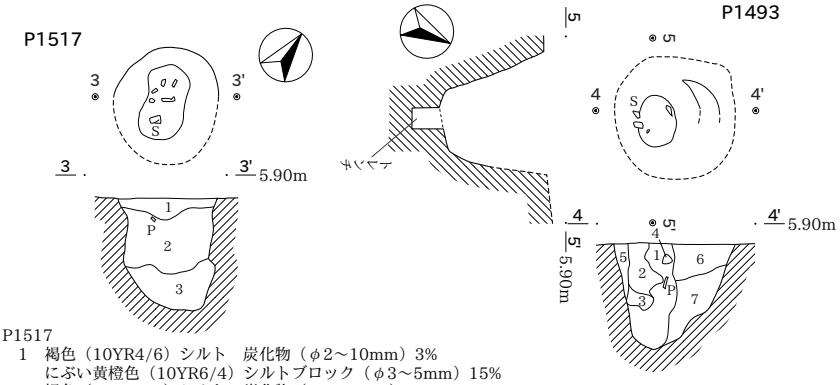

B
C
D
E
F
G
5
6
7
8
9
10
11
12
13
21 16 11 6 1
22 17 12 7 2
23 18 13 8 3
24 19 14 9 4
25 20 15 10 5
SK1536
SK1502
SK1611
SK1394
SK1166
SK1450
SK1165
SK1170
SK1227
SK1449
SK1289
SB1607
SK1523
SH1167
SK1040
SK1434
0 (1：350) 10m
図版42
図版51中段
図版48
図版45
図版51下段
0 (1:1000) 20m
遺構分割図
配置模式図（第3面）
Ⅵ層
第3面調査範囲
遺構確認層位模式図（第3面）
0 (1:1000) 20m

遺構分割図 22


SK1536
P1517
P1493
P1494
P1428
P1413
P1352
SK1350
P1612
P1024
SK1502
SK1611
SK1394
6Tr
P1393
SK1640
SK1166
5.30
5.40
5.50
5.60
5.70
5.80
5.85
0
(1 : 80)
4m

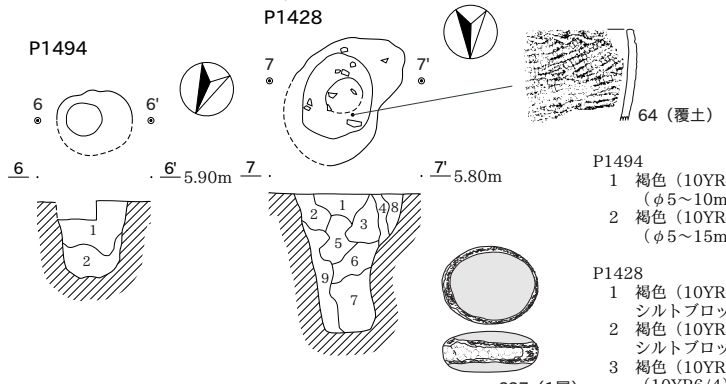


SK1536
1　黄褐色（10YR5/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～15mm）20%
2　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物
　（φ2～5mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック
　（φ5～15mm）15%
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　粘性：やや弱い
　炭化物（φ2～5mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック
　（φ5～10mm）15%
4　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）
　1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）20%



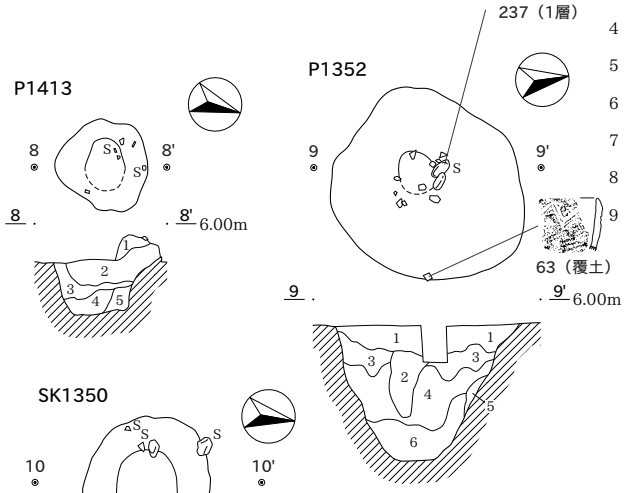
P1517
1　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ2～10mm）3%
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ3～5mm）15%
2　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ2～5mm）2%
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ5～10mm）20%
3　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物
　（φ5～20mm）1%　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック
　（φ5～10mm）20%

P1493
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ5～10mm）5%
　褐色（10YR4/6）シルトブロック（φ5～10mm）20%
2　褐色（10YR4/6）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ2～5mm）2%
　褐色（10YR4/6）シルトブロック（φ5～10mm）20%
3　褐色（10YR4/6）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　褐色（10YR4/6）シルトブロック（φ5～10mm）20%
4　褐色（10YR4/6）シルト　粘性：やや弱い　壁崩落土と考えられる褐色
　（10YR4/6）シルトブロックが混入する。
5　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　褐色（10YR4/6）
　シルトブロック（φ5～8mm）10%
6　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　褐色（10YR4/6）
　シルトブロック（φ5～10mm）20%
7　褐色（10YR4/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）
　1%以下　褐色（10YR4/6）シルトブロック（φ5～15mm）20%

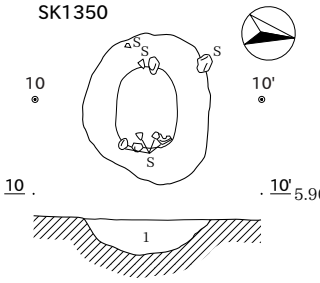


P1494
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ2～5mm）2%　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック
　（φ5～10mm）15%
2　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック
　（φ5～15mm）20%

P1428
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）3%　にぶい黄橙色（10YR6/4）
　シルトブロック（φ～3mm）10%
2　褐色（10YR4/6）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%　にぶい黄橙色（10YR6/4）
　シルトブロック（φ～5mm）10%
3　褐色（10YR4/6）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色
　（10YR6/4）シルトブロック（φ～5mm）10%
4　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～10mm）3%　にぶい黄橙色
　（10YR6/4）シルトブロック（φ～5mm）7%
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～5mm）5%
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ～10mm）7%
6　褐色（10YR4/6）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）1%　にぶい黄橙色（10YR6/4）
　シルトブロック（φ～20mm）10%
7　褐色（10YR4/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：弱い　炭化物（φ～10mm）3%
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ1～20mm）5%
8　褐色（10YR4/6）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色
　（10YR6/4）シルトブロック（φ～5mm）5%
9　褐色（10YR4/6）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色
　（10YR6/4）シルトブロック（φ～10mm）10%

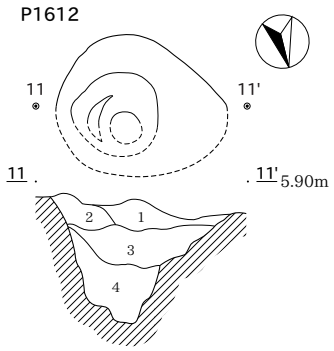


P1413
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：弱い　炭化物（φ～3mm）1%　下位層と比較し、
　シルトブロックの混入が少ない。
2　褐色（10YR4/6）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）1%　にぶい黄橙
　色（10YR6/4）シルトブロック（φ3～5mm）20%
3　黄褐色（10YR5/6）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ3～5mm）20%
4　褐色（10YR4/6）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ3～10mm）30%
5　黄褐色（10YR5/6）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（φ3～10mm）20%



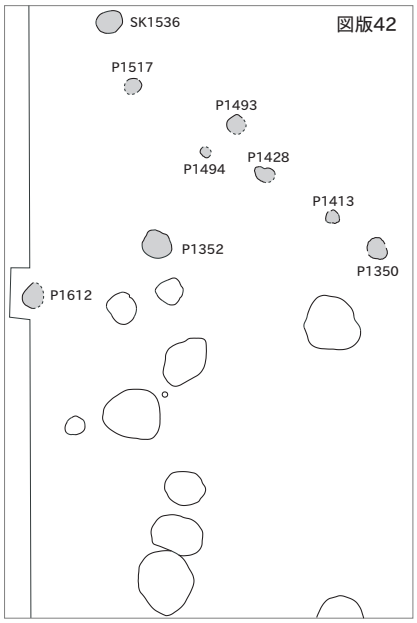
SK1350
1　褐色（10YR4/6）シルト
　炭化物（φ5～10mm）1%

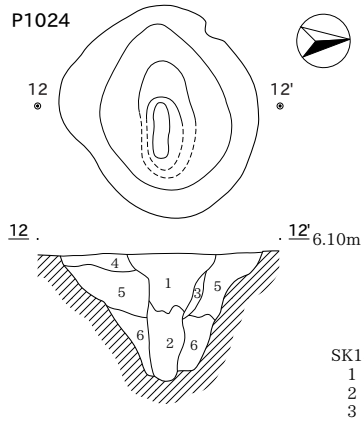
P1352
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）1%　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ3～10mm）20%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ3～10mm）20%
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ10～15mm）20%
4　褐色（10YR4/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ5～15mm）
　5%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）30%
5　褐色（10YR4/4）砂質シルト　炭化物（φ～2mm）1%　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ5～10mm）20%
6　褐色（10YR4/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い
　炭化物（φ～2mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック
　（φ10～50mm）30%

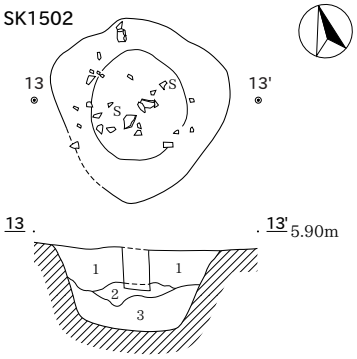


P1612
1　黄褐色（10YR5/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ2～10mm）20%
2　にぶい黄褐色～黄褐色（10YR5/4～5/6）シルト　炭化物（φ～2mm）
　1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）30%
3　褐色（10YR4/4）～5/4シルト　炭化物（φ～5mm）2%　にぶい黄橙色
　（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）20%
4　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い
　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック
　（φ5～30mm）40%

0　（1：40）　2m

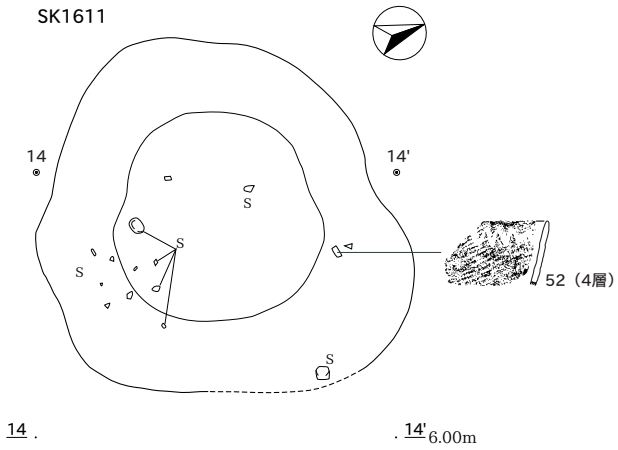


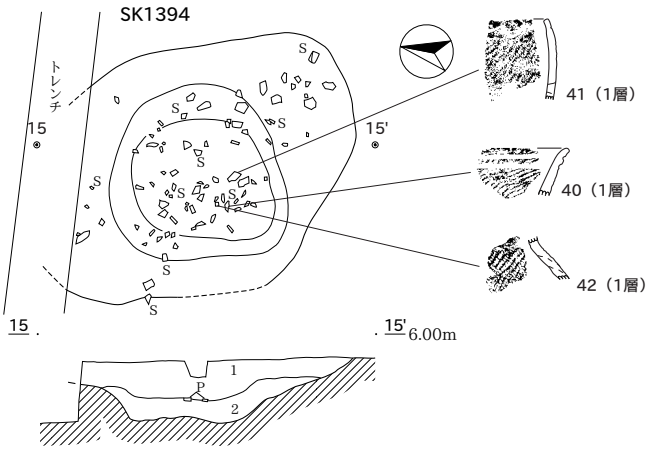




SK1502
1　黄褐色（10YR5/6）シルト　炭化物（φ2～10mm）2%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ3～30mm）20%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ3～20mm）20%
3　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ10～40mm）30%

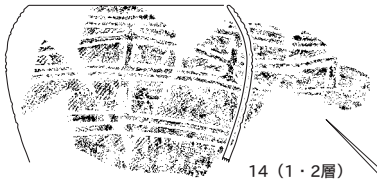
P1024
1　褐色（7.5YR4/4）シルト　粘性：弱い　炭化物（φ～5mm）5%
2　にぶい褐色（7.5YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）3%
3　灰白色（10YR8/2）シルト　炭化物（φ～5mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）3%
5　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%
6　褐色（10YR4/4）砂質シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下

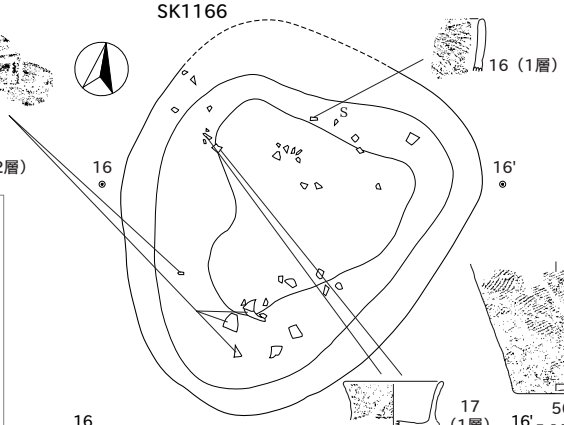


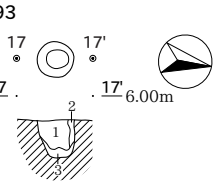


SK1394
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm）3%
土器の細片と小礫（φ20～30mm）の混入が目立つ。
2　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）1%

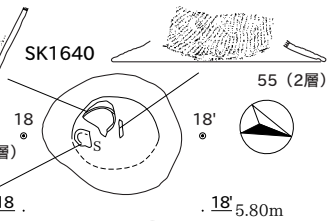
SK1611
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）25%
2　褐色（10YR4/6）粘質シルト　炭化物（φ～3mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）15%
3　褐色～黄褐色（10YR4/6～5/6）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下
にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）25%
4　褐色～黄褐色（10YR4/4～5/6）砂質シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下
にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～30mm）30%

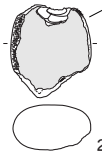


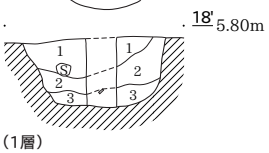


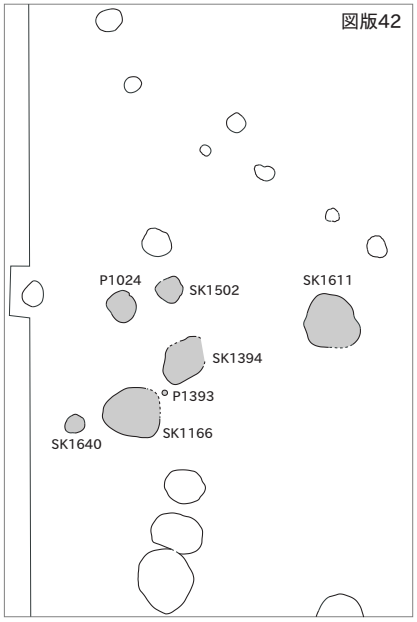


P1393
1　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト
粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
2　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト
粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
1層に地山ブロックが少量混入する。
3　にぶい褐色（7.5YR6/3）シルト
炭化物（φ～2mm）2%





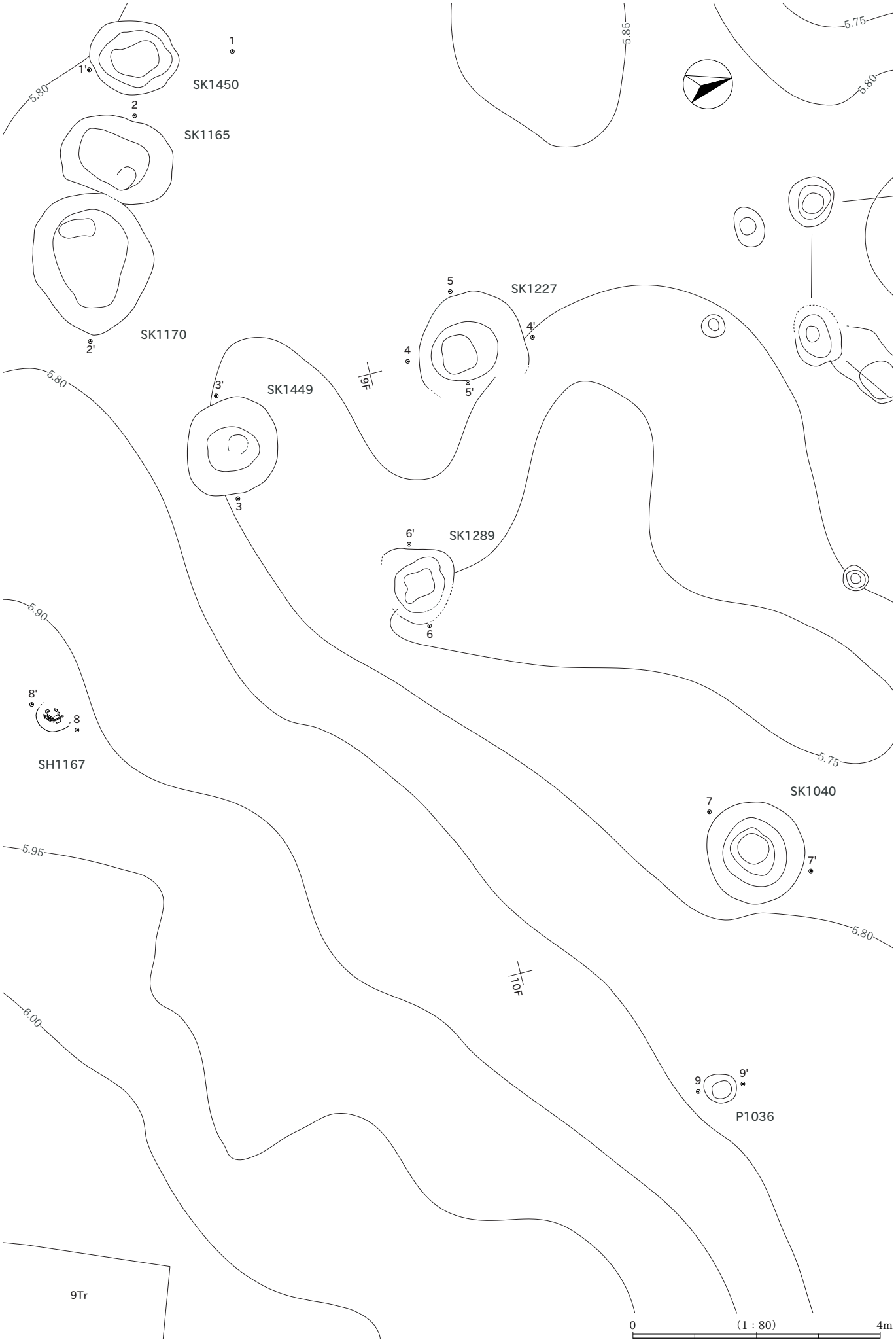


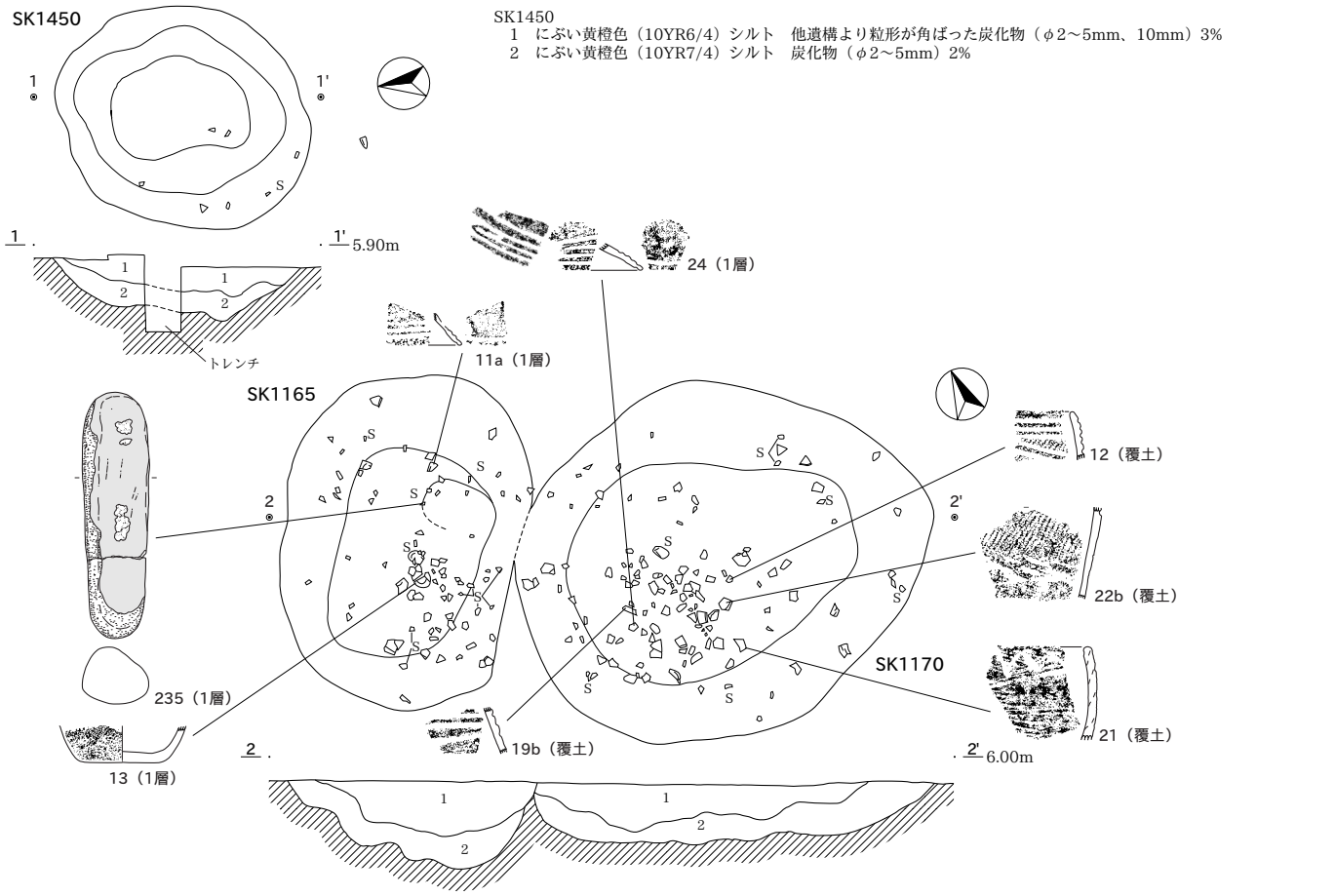


SK1166
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）2%
2　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）2%
3　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト

SK1640
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ2～5mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）40%
2　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　炭化物（φ2～5mm）1%　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（φ5～20mm）30%
3　黄褐色（10YR5/6）砂質シルト　粘性：強い　炭化物（φ～2mm）1%以下　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック
（φ5～20mm）30%

0　（1：40）　2m


SK1450
SK1165
SK1170
SK1227
SK1449
SK1289
SH1167
SK1040
P1036
9Tr
9F
10F
5.85
5.75
5.80
5.90
5.95
6.00
0
(1 : 80)
4m

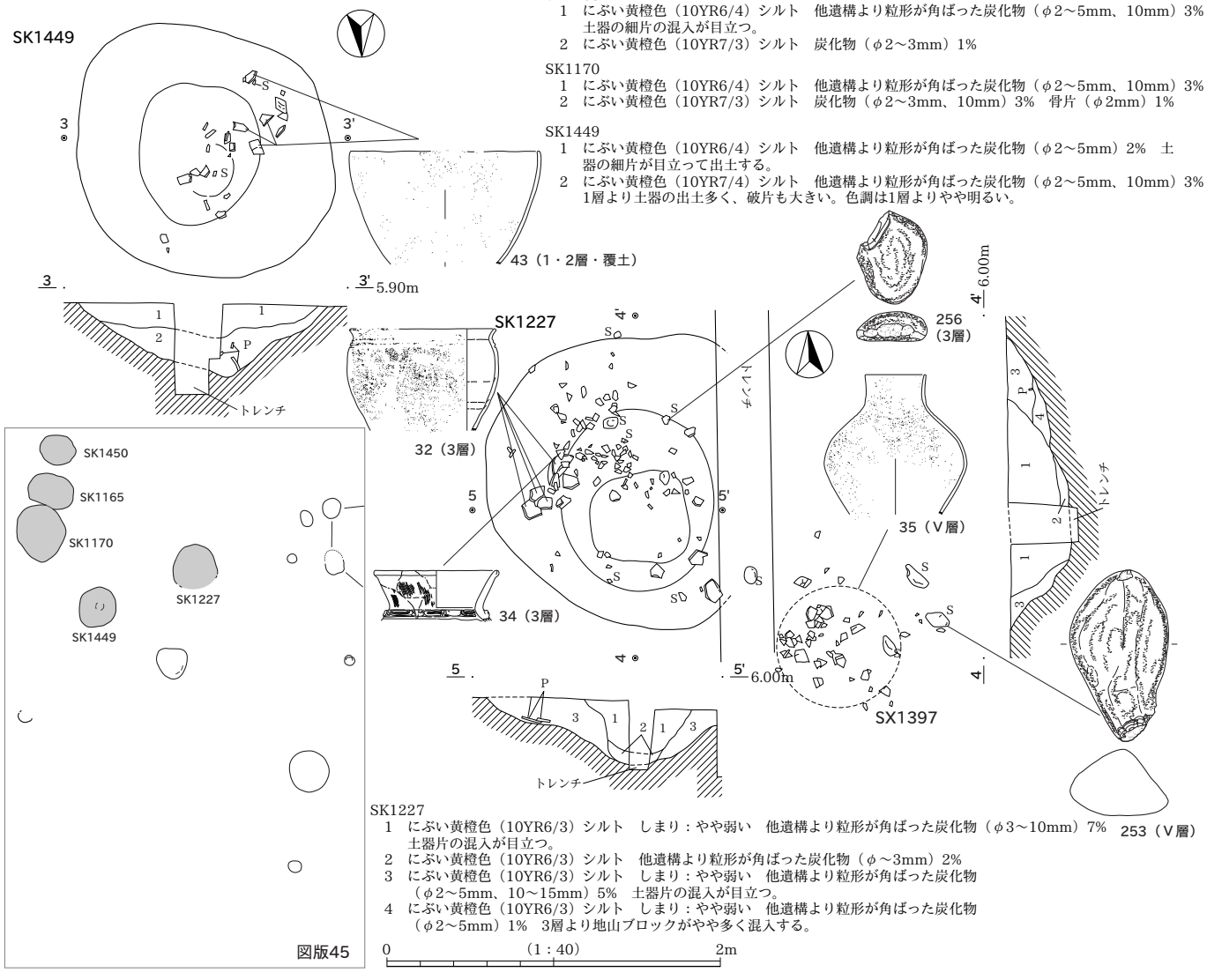


SK1450
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm）3%
2　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～5mm）2%

SK1165
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm）3%
土器の細片の混入が目立つ。
2　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　炭化物（φ2～3mm）1%

SK1170
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm）3%
2　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　炭化物（φ2～3mm、10mm）3%　骨片（φ2mm）1%

SK1449
1　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）2%　土器の細片が目立って出土する。
2　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm）3%
1層より土器の出土多く、破片も大きい。色調は1層よりやや明るい。



SK1227
1　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ3～10mm）7%
土器片の混入が目立つ。
2　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ～3mm）2%
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物
（φ2～5mm、10～15mm）5%　土器片の混入が目立つ。
4　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物
（φ2～5mm）1%　3層より地山ブロックがやや多く混入する。

0　（1：40）　2m

SK1289

トレンチ

6.00m

<1層遺物出土状況>

<2層遺物出土状況>

<3層遺物出土状況>

65（1層）

39（2層・覆土）

281（3層）

36（2層）

37（3層）

SH1167

6.10m

掘り方完掘

SH1167
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）5%
　炭化物は特に1～2mmのものが目立つ。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）2%

SK1289
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ3～5mm）3%　土器片の混入が目立つ。
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ5～15mm）7%　骨片（極細片）1%　土器片の混入が目立つ。
3　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　炭化物（φ3～5mm）3%

SK1040

155（覆土）

10（2層）

1～5層

7（2層）

6層

6（6層）

5.90m

9（2層）

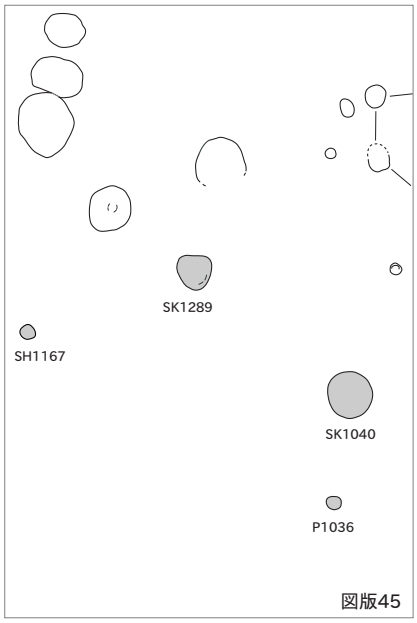
P1036

6.00m

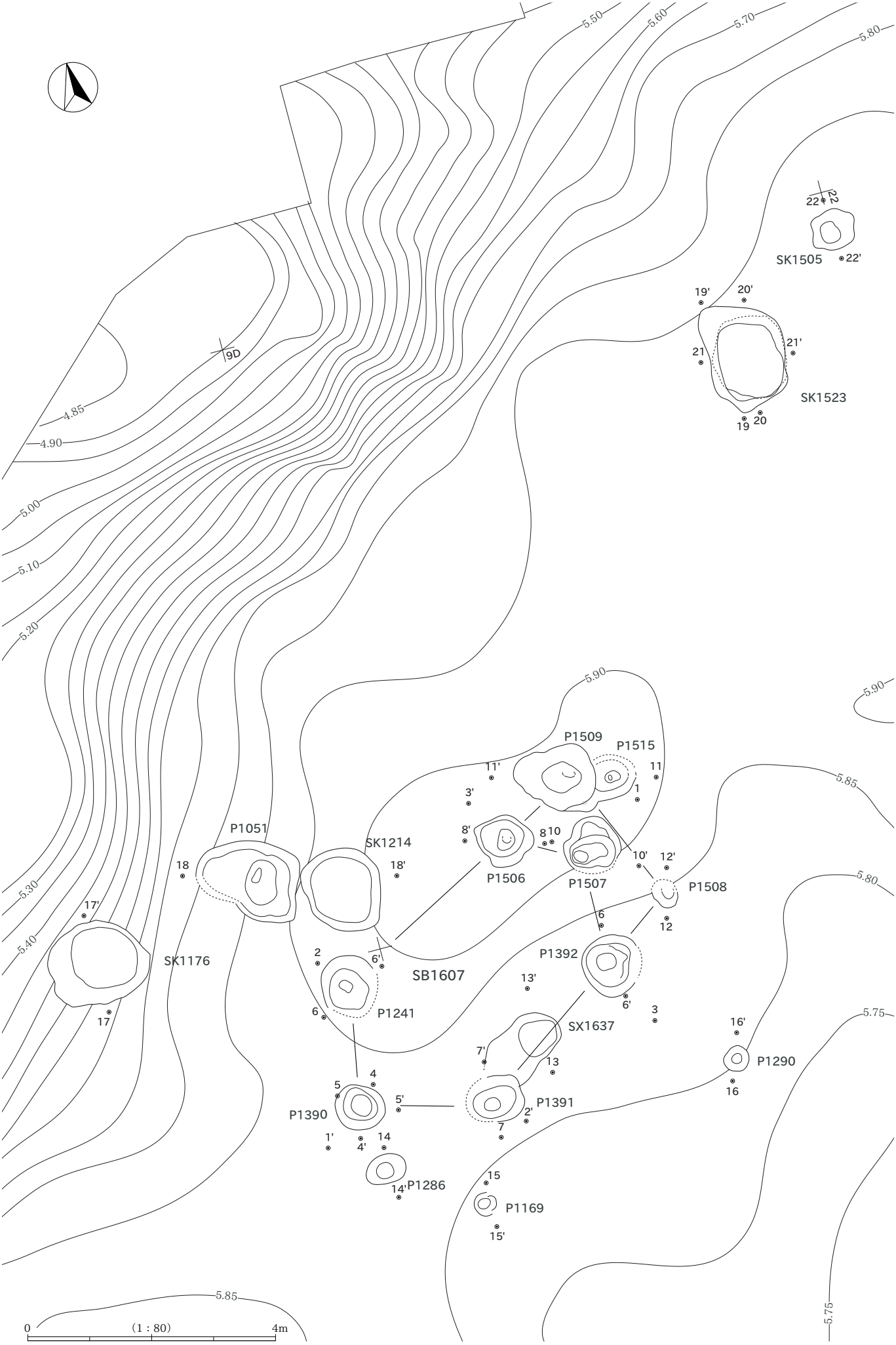
P1036
1　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　炭化物（φ3～5mm）5%
2　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ3～5mm）2%

SK1040
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ3～15mm）7%
　炭化物は部分的なまとまりをみせ、深鉢片周囲で特に目立つ。
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ3～10mm）3%
4　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ3mm）1%　地山ブロックが混入する。
5　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ3mm）2%
6　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ3～10mm）3%

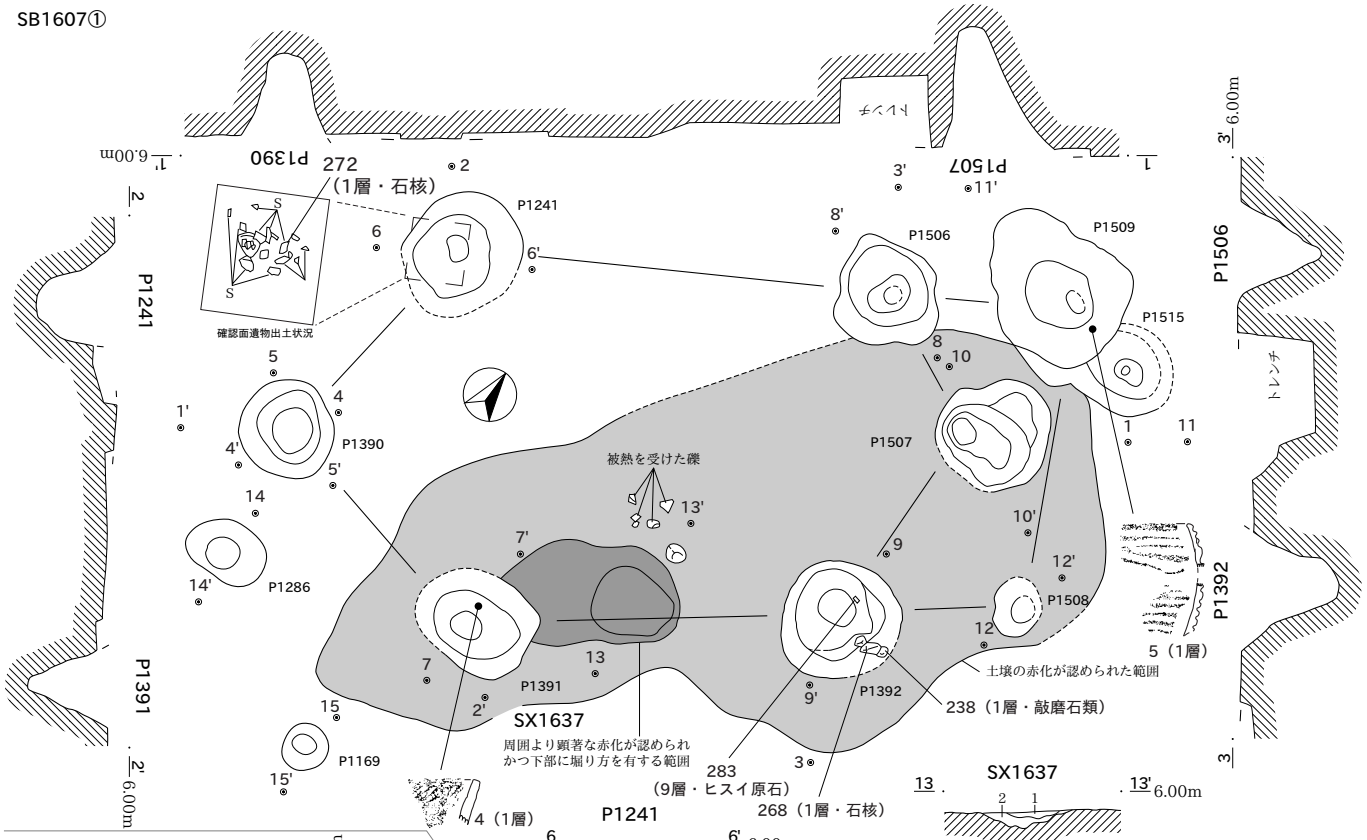
0　（1：40）　2m

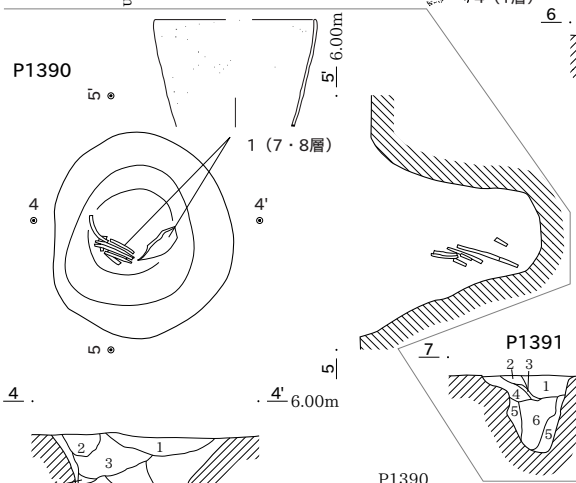


図版45


5.50
5.60
5.70
5.80
22
22
SK1505
22'
19'
20'
21'
21
SK1523
19
20
9D
4.85
4.90
5.00
5.10
5.20
5.90
5.90
P1509
P1515
11'
11
1
3'
5.85
P1051
SK1214
8'
8
10
18
18'
P1506
P1507
10'
12'
P1508
5.80
5.30
17'
6
12
5.40
SK1176
2
6'
P1392
SB1607
13'
6'
3
17
6
P1241
SX1637
16'
5.75
7'
13
P1290
4
5
5'
P1391
16
P1390
2'
7
1'
4'
14
15
14'
P1286
P1169
15'
5.85
0
(1 : 80)
4m
5.75

SB1607①

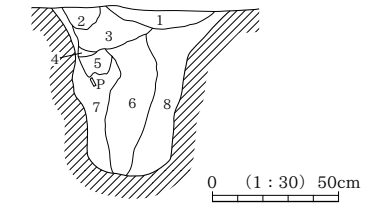




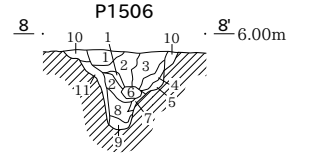
SX1637
1　灰褐色（7.5YR4/2）シルト　粘性：やや弱い
　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10m）7%　骨片（極細片）1%
2　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト
　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）3%

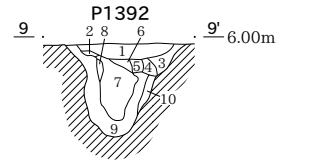
P1241
1　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～6mm）5%　剥片の混入が目立ち、土器片の出土は少量である。
2　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～2mm）2%　1層よりは少ないが剥片類が混入する。
3　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%

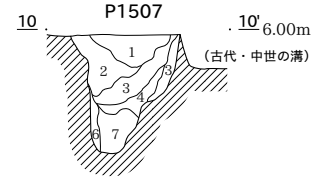
P1391
1　褐色（7.5YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～3mm、5mm、10mm）7%　焼土ブロック（φ5mm）2%
2　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～3mm）3%
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～3mm）2%
4　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～3mm、10mm）5%
5　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）1%
6　暗褐色（10YR3/3）シルト　粘性：強い　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～5mm、10mm）7%　柱痕部



P1390
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ2～10mm、特に2～3mmのものが目立つ）5%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ2～5mm、20mm）2%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ2～10mm、特に2～3mmのものが目立つ）7%
4　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　地山崩落土混入。1～3層より砂質強い。
5　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～3mm）3%
6　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ2～5mm）7%　柱痕部
7　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）2%　根固めに深鉢片を埋設する。
8　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）2%　7層より土器片の混入が少ない。







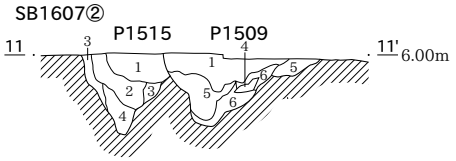
P1506
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
2　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%　極めて細かい土器片が混入する。
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下　地山ブロック主体の埋め戻し土由来と考えられる。
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～5mm）5%　掘り方埋土崩落後に充填したと考えられる土。
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～5mm）3%　掘り方埋土崩落後に充填したと考えられる土。
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　壁崩落による地山ブロック主体層と考えられる。
7　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　掘り方埋土、もしくはその崩落土と考えられる。
8　黄褐色（10YR5/6）シルト　柱痕充填土。地山ブロックが主体の層である。
9　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～5mm）1%以下
10　褐色（10YR4/6）シルト　掘り方充填土
11　黄褐色（10YR5/6）シルト　掘り方充填土

P1392
1　にぶい褐色（7.5YR5/3）　シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）5%　焼土（φ5mm）1%
2　にぶい褐色（7.5YR6/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）6%　焼土（φ5mm）2%　色調は1層より明るい。
3　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ3mm）1%　地山崩落土が混入する。
4　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）5%
5　にぶい褐色（7.5YR6/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）2%　4層と地山ブロックの混合土層である。
6　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、8mm）3%
7　褐色（7.5YR4/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm、10mm、20mm）7%　骨片（φ2mm）1%
8　にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト　炭化物（φ2～3mm）3%
9　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）3%
10　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト　炭化物（φ2～3mm）3%　地山ブロックの混入が目立つ。

P1507
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　土質は5層に近似する。掘り方埋土が崩落したものか。
5　褐色（10YR4/6）シルト　掘り方埋土
6　褐色（10YR4/6）シルト　掘り方埋土
7　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%以下　柱痕部分と考えられる。

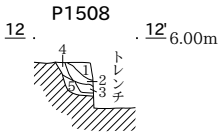
（1：60）P1390遺物出土状況,断面図を除く
0　2m

SB1607②

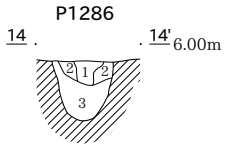


P1509
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%　掘り方埋土。
3　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%
4　にぶい黄褐色（10YR6/4）シルト　地山（Ⅶ層）ブロック主体層。壁崩落土と考えられる。
5　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下　柱痕部分に相当する。人為的な埋め戻し土の可能性あり。
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　地山（Ⅶ層）ブロック主体の掘り方埋土。

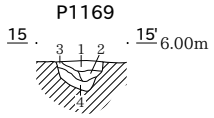
P1515
1　暗褐色（10YR3/3）シルト　炭化物（φ～3mm）1%　人為的な埋め戻し土の可能性が高い。
2　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下　人為的な埋め戻し土の可能性が高い。
3　褐色（10YR4/6）シルト　地山（Ⅶ層）ブロック主体の掘り方埋土。
4　褐色（10YR4/4）シルト　柱痕に相当する部分。人為的な埋め戻し土の可能性が高い。



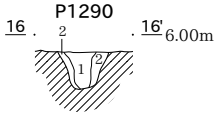
P1508
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～1mm）1%　柱痕か。
2　褐色（10YR4/4）シルト　シルトブロック（φ～3mm）3%　柱痕か。
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　シルトブロック（φ～5mm）5%　柱痕か。
4　黄褐色（10YR5/6）シルト　シルトブロック（φ～5mm）3%　掘り方埋土か。
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　シルトブロック（φ～3mm）1%　掘り方埋土か。



P1286
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～5mm）5%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下
3　褐色（10YR4/6）シルト　炭化物（φ～2mm）1%以下

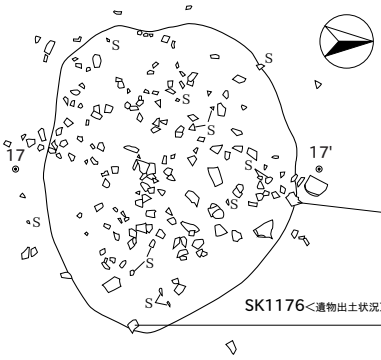


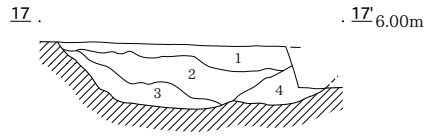
P1169
1　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト　粘性：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）3%　1層と地山ブロックの混合土層である。
3　褐色（7.5YR4/3）シルト　粘性：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ5mm）1%
4　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ5mm）2%

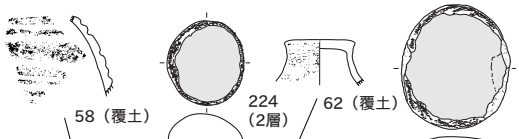


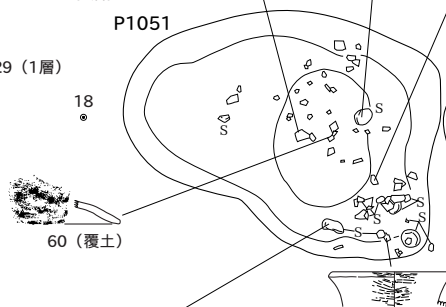
P1290
1　褐色（10YR4/4）シルト　しまり：やや弱い　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～5mm）5%
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト　他遺構より粒形が角ばった炭化物（φ2～3mm）3%

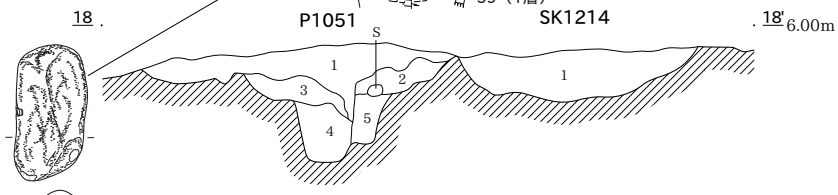
SK1176
1　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　しまり：強い　炭化物（φ～2mm）1%以下
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）3%
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%
4　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）1%





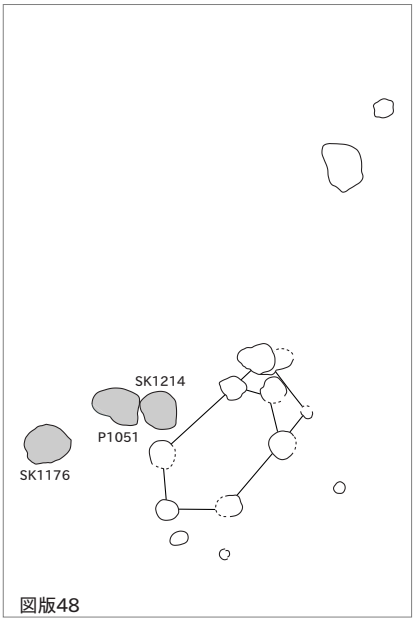






P1051
1　暗褐色（10YR3/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～5mm）5%
　シルトブロック（にぶい黄橙色（10YR6/4）（φ5～10mm）30%
2　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
　シルトブロック（にぶい黄橙色（10YR6/4）（φ5～20mm）40%
3　褐色（10YR4/4）シルト　粘性：やや弱い　炭化物（φ～3mm）3%
　シルトブロック（にぶい黄橙色（10YR6/4））（φ5～30mm）40%
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　シルトブロック（にぶい黄橙色（10YR6/4）（φ5～30mm）50%
5　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト　しまり：やや弱い　炭化物（φ～2mm）1%以下
　シルトブロック（にぶい黄橙色（10YR6/4）（φ5～30mm）50%

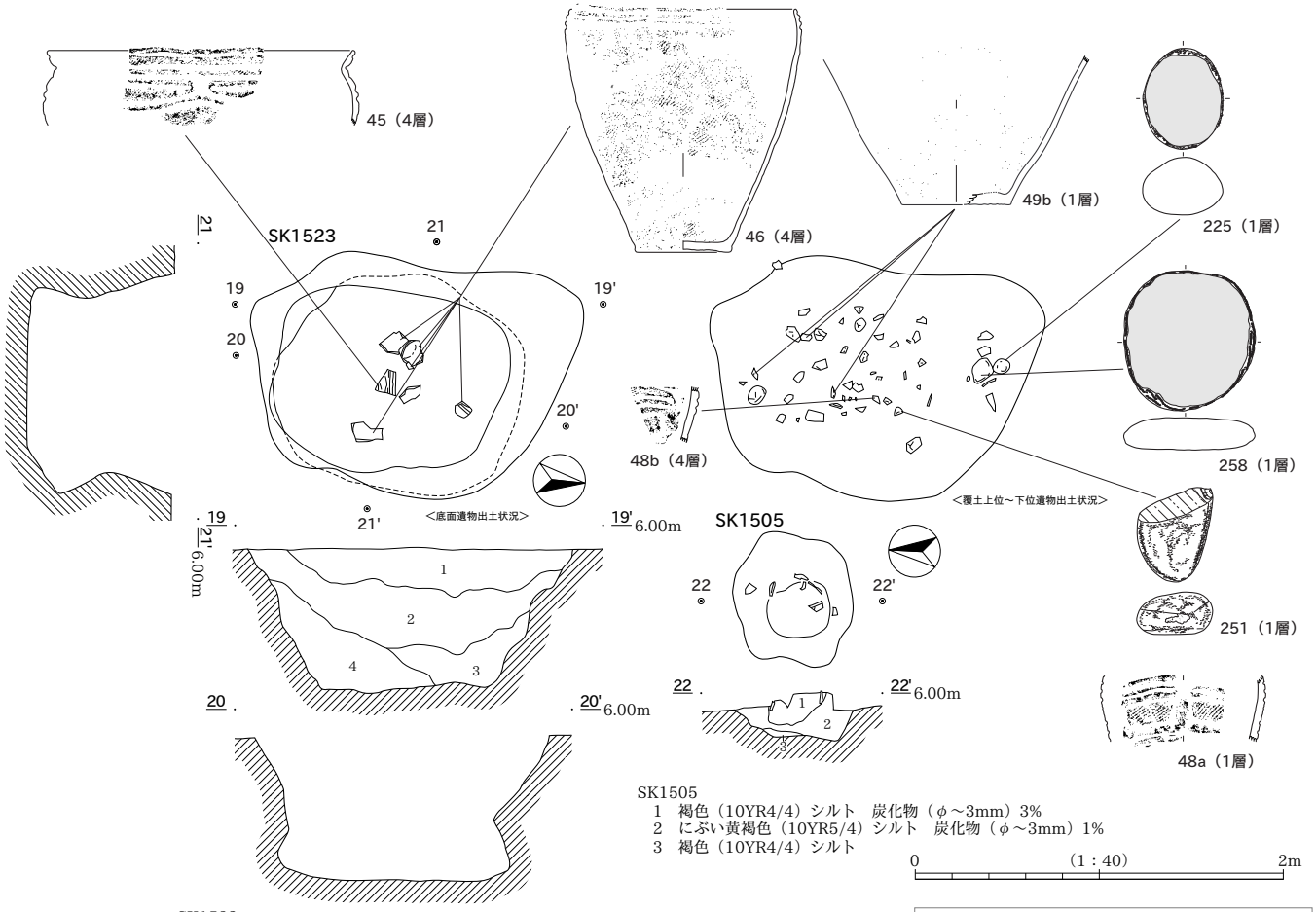
SK1214
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%　（にぶい黄橙色（10YR7/4）
　シルトブロック（φ5～10mm）40%



図版48

SK1176・1214,P1051
0　（1：40）　2m

P1169・1286・1290・1508・1509・1515
0　（1：60）　2m

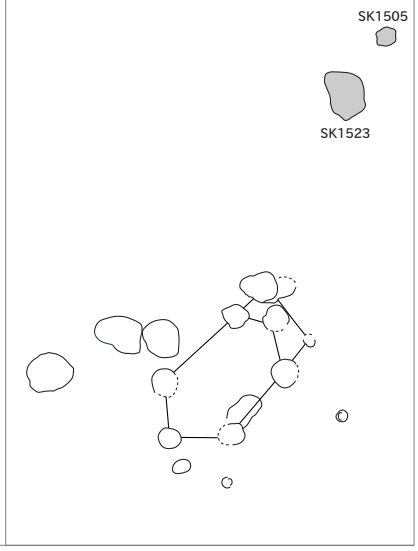


SK1523
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト　炭化物（φ～1mm）1%以下
4　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　炭化物（φ～5mm）5%

SK1505
1　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物（φ～3mm）3%
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト　炭化物（φ～3mm）1%
3　褐色（10YR4/4）シルト

0　（1：40）　2m

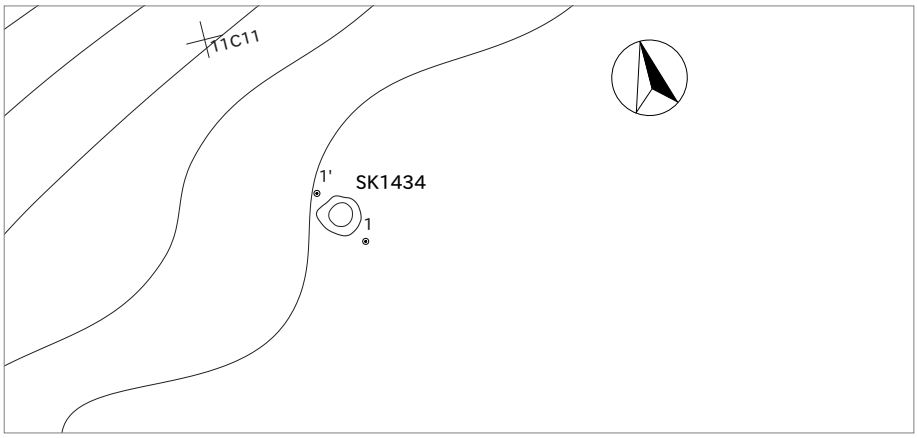
図版48



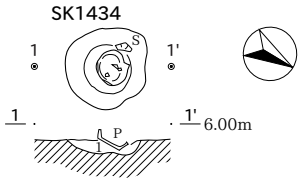
遺構分割図25　木質遺物出土状況

遺構分割図26

0　（1：80,遺構分割図25・26）　4m

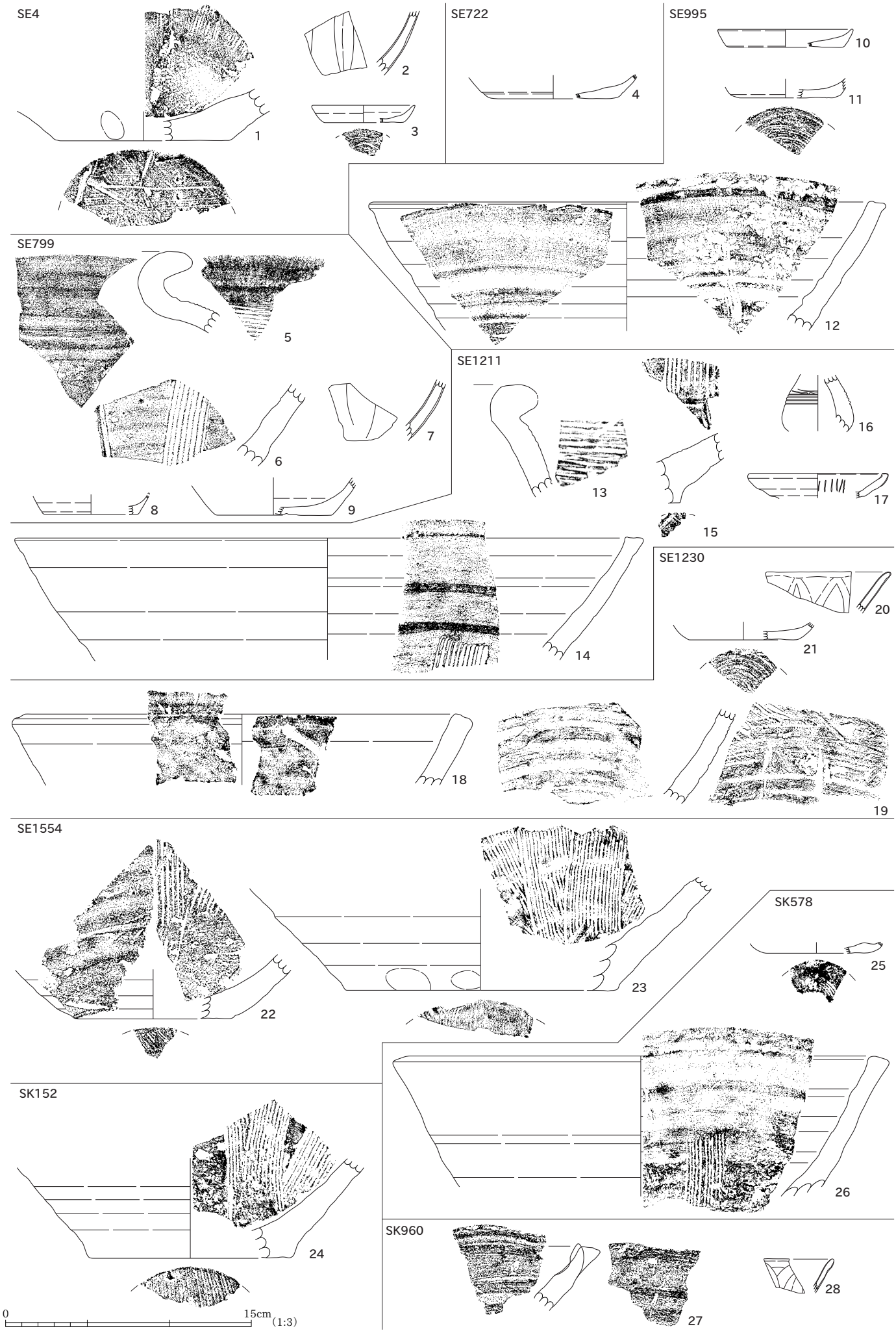


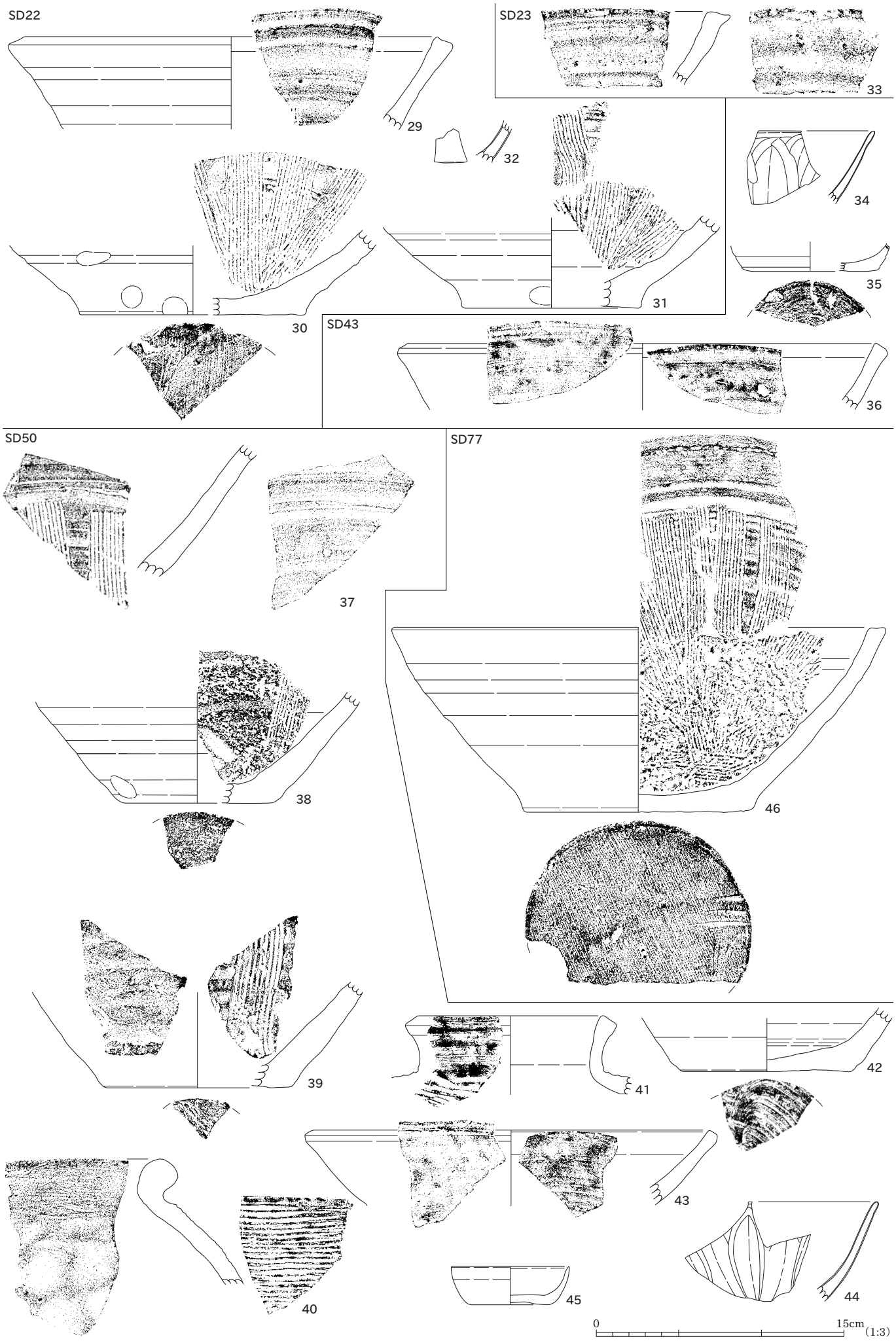
SK1434

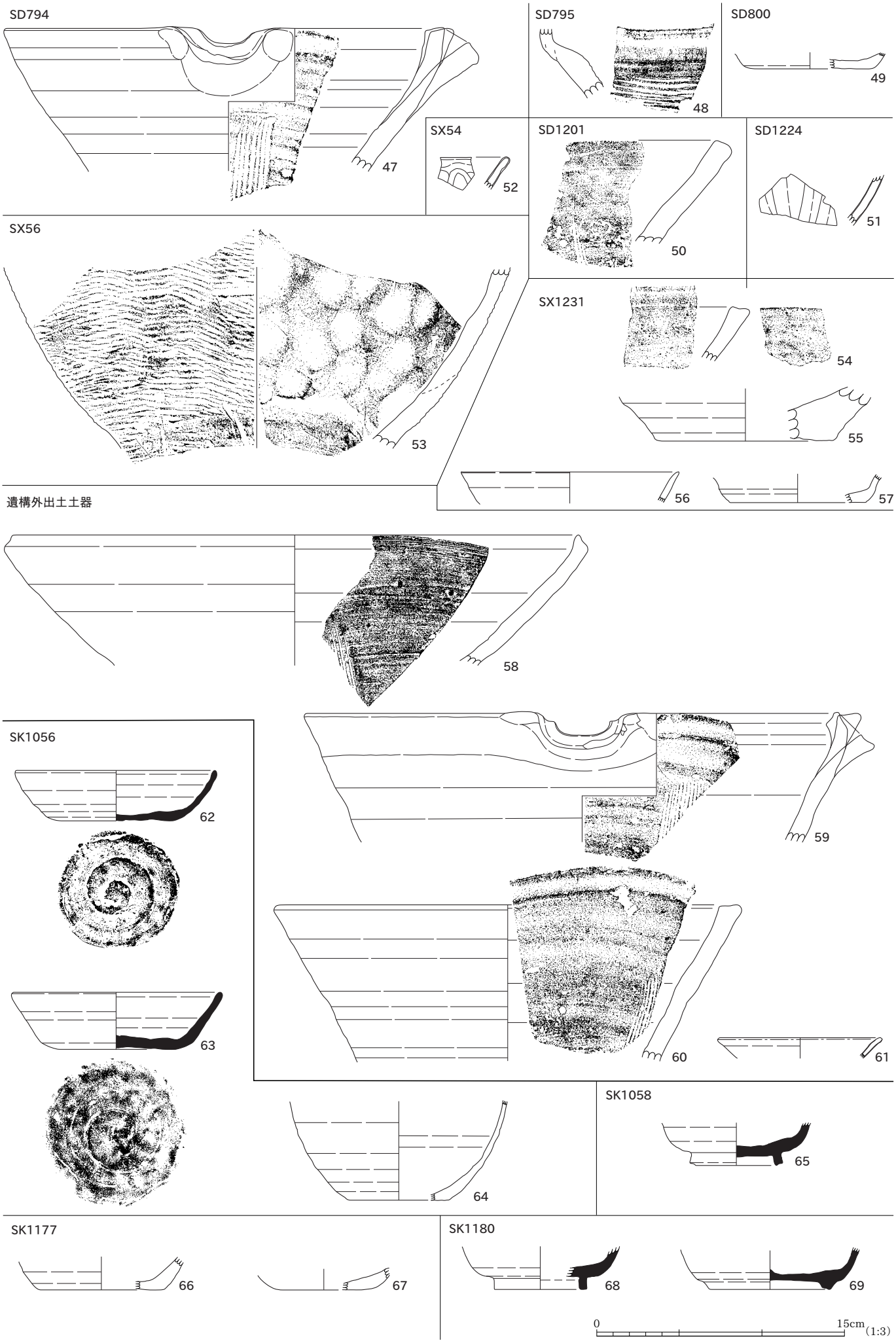


SK1434
1　褐色（10YR4/4）シルト　V層の落ち込みか。

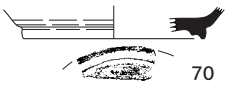
0　（1：40）　2m


SE4
1
2
3
SE722
4
SE995
10
11
12
SE799
5
6
7
8
9
SE1211
13
14
15
16
17
SE1230
18
19
20
21
SE1554
22
23
SK578
25
SK152
24
26
SK960
27
28
0
15cm
(1:3)

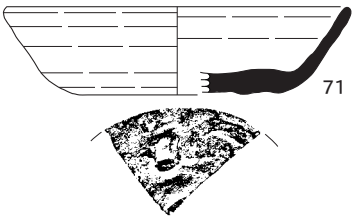

SD22
SD23
SD43
SD50
SD77
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
15cm
(1:3)


SD794
47
SD795
48
SD800
49
SX54
52
SD1201
50
SD1224
51
SX56
53
SX1231
54
55
56
57
遺構外出土土器
58
SK1056
62
63
59
60
61
64
SK1058
65
SK1177
66
67
SK1180
68
69
0
15cm
(1:3)

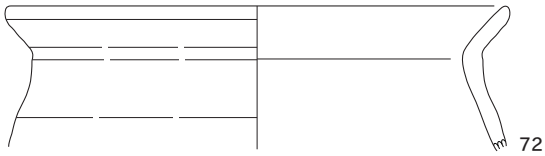
SD1032



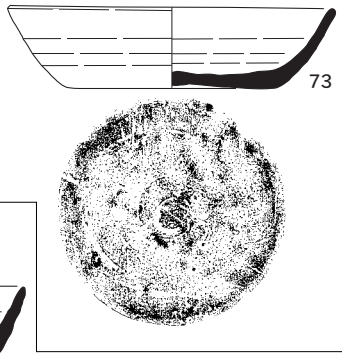
SD1539

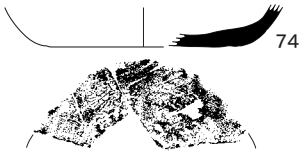


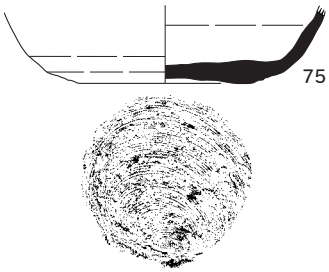
SX1537



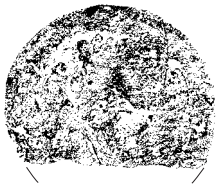
SX1178

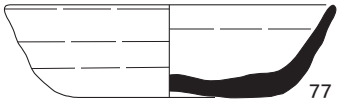


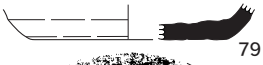


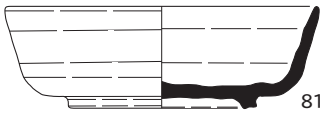


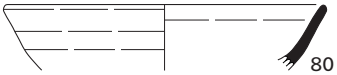
SX1624

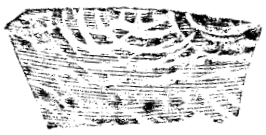




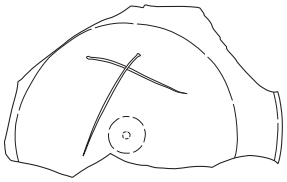


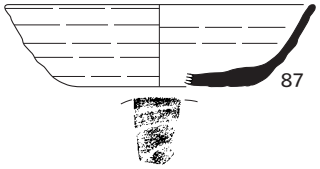


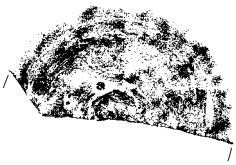


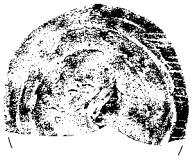


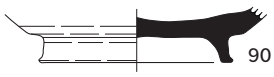
遺構外出土土器（第 1 面）

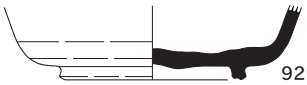


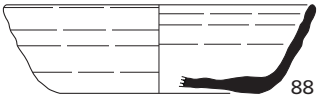


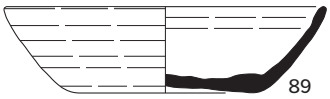


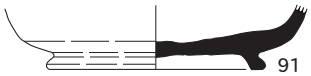




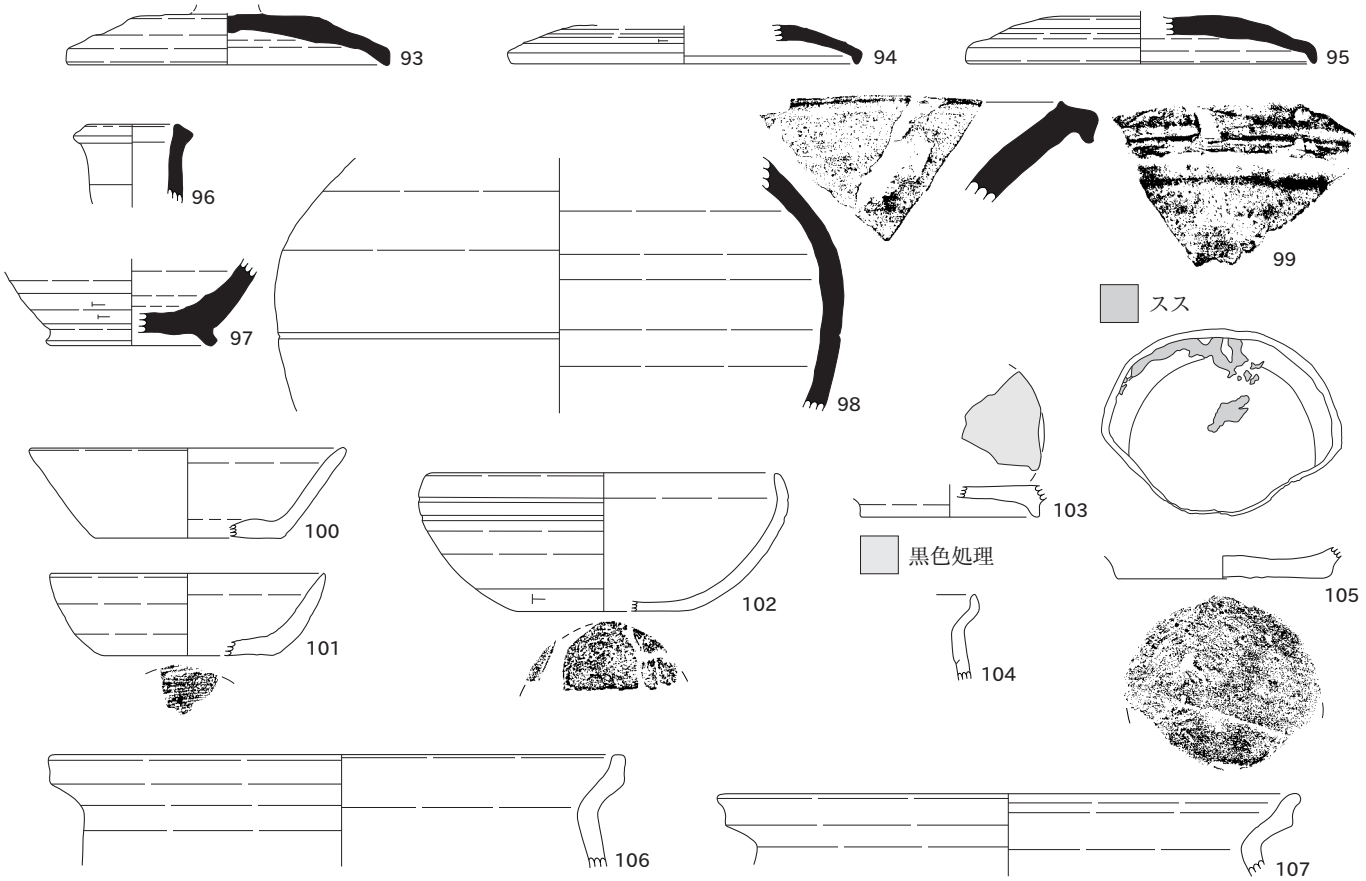




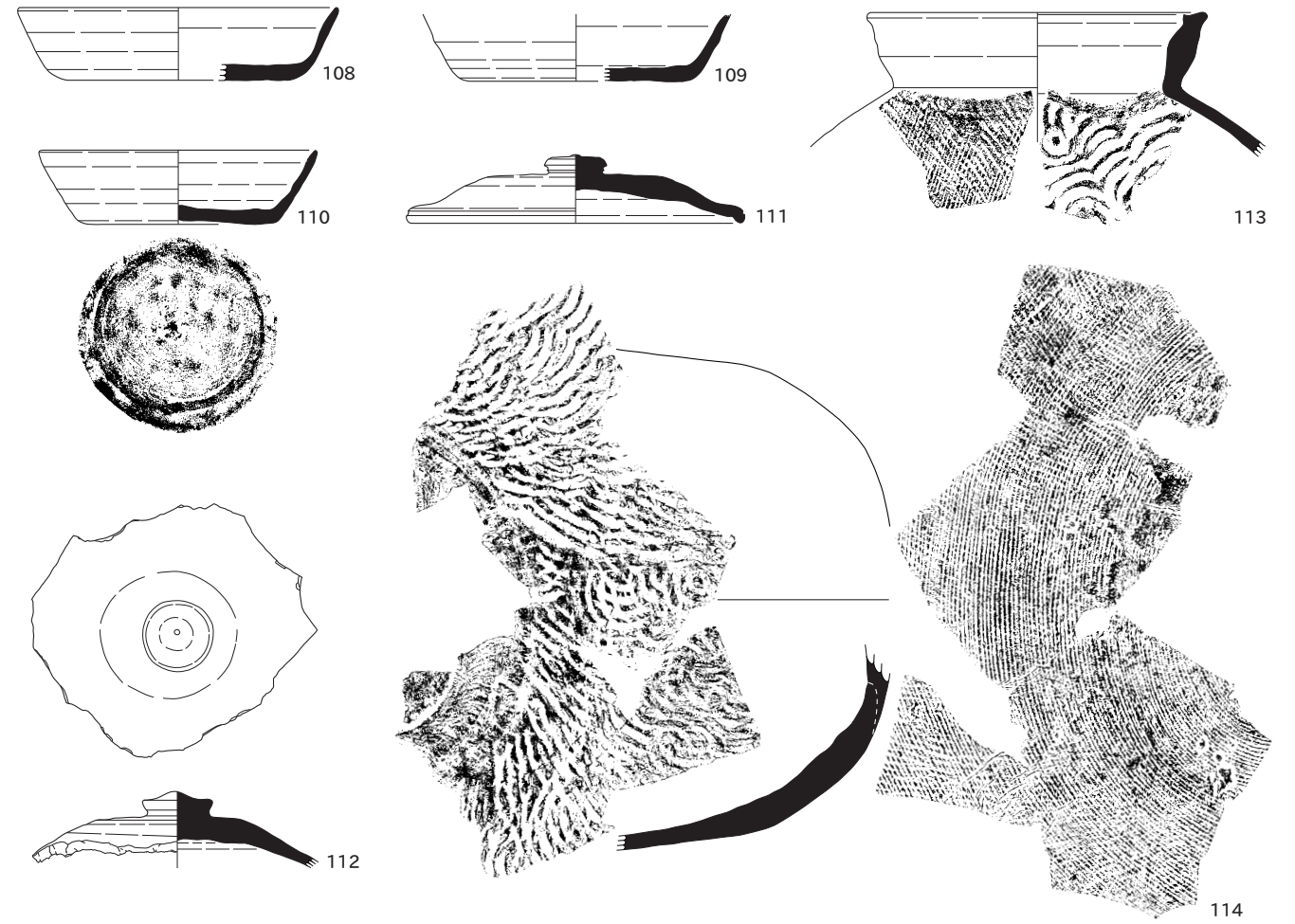




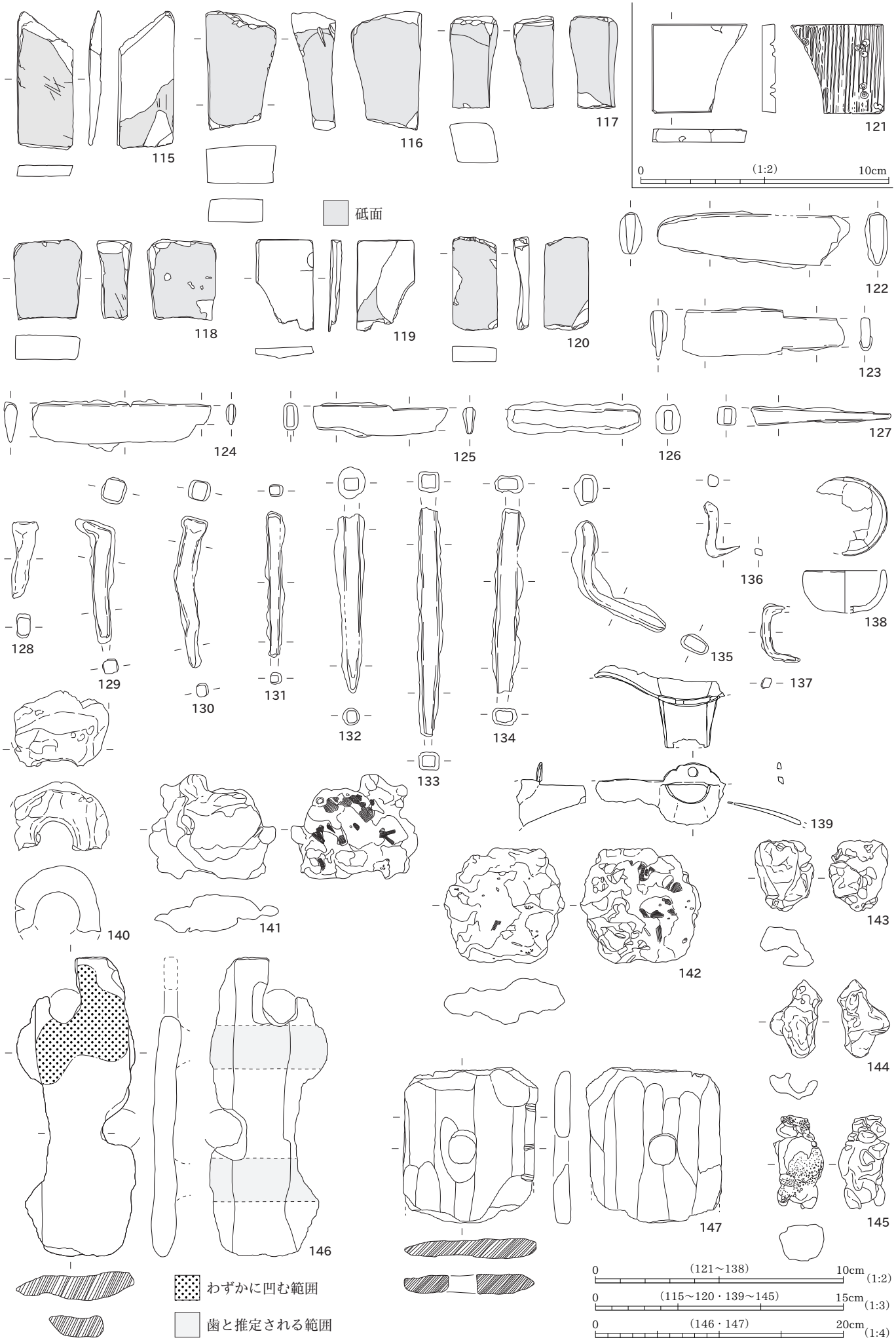
0　15cm（1:3）

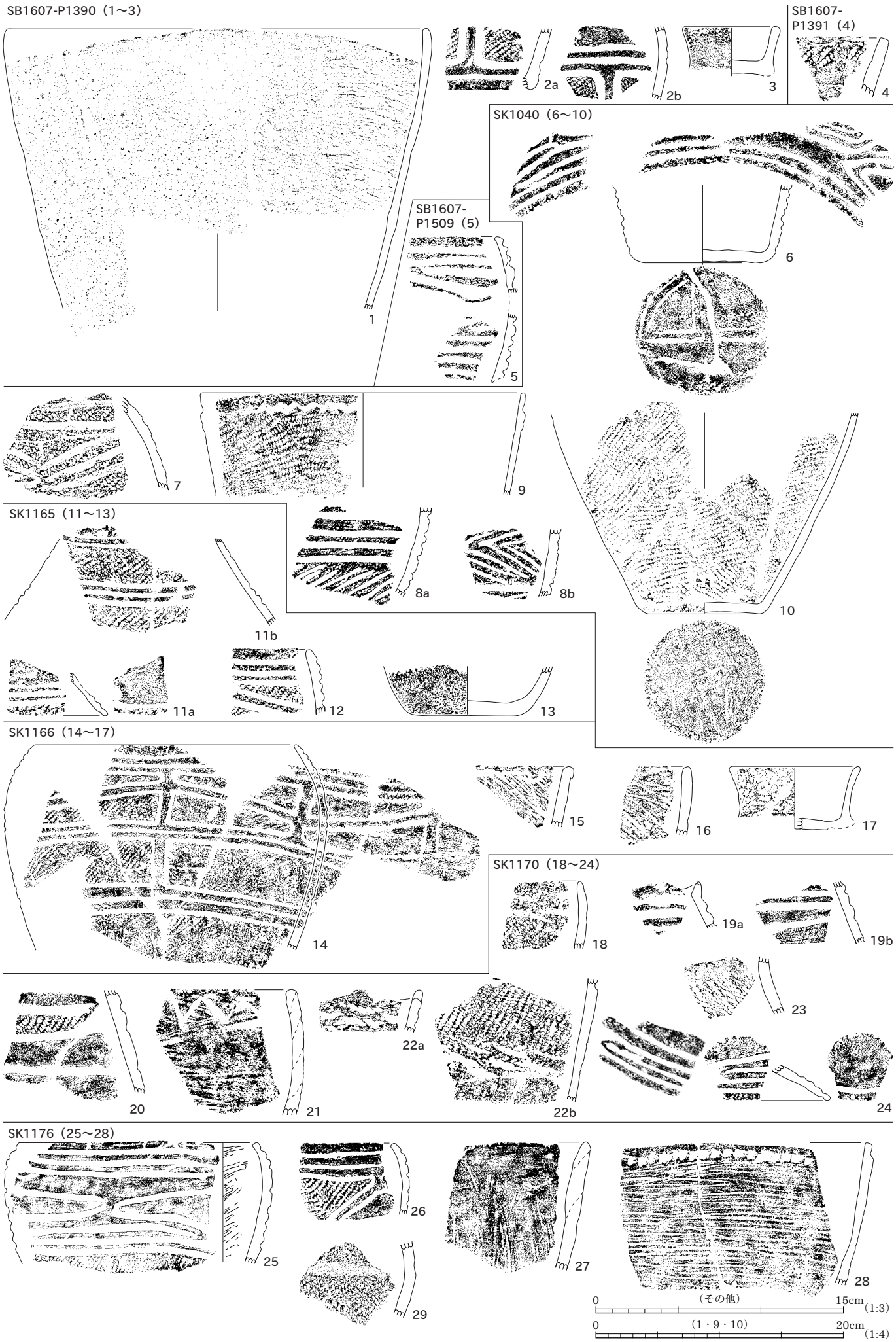


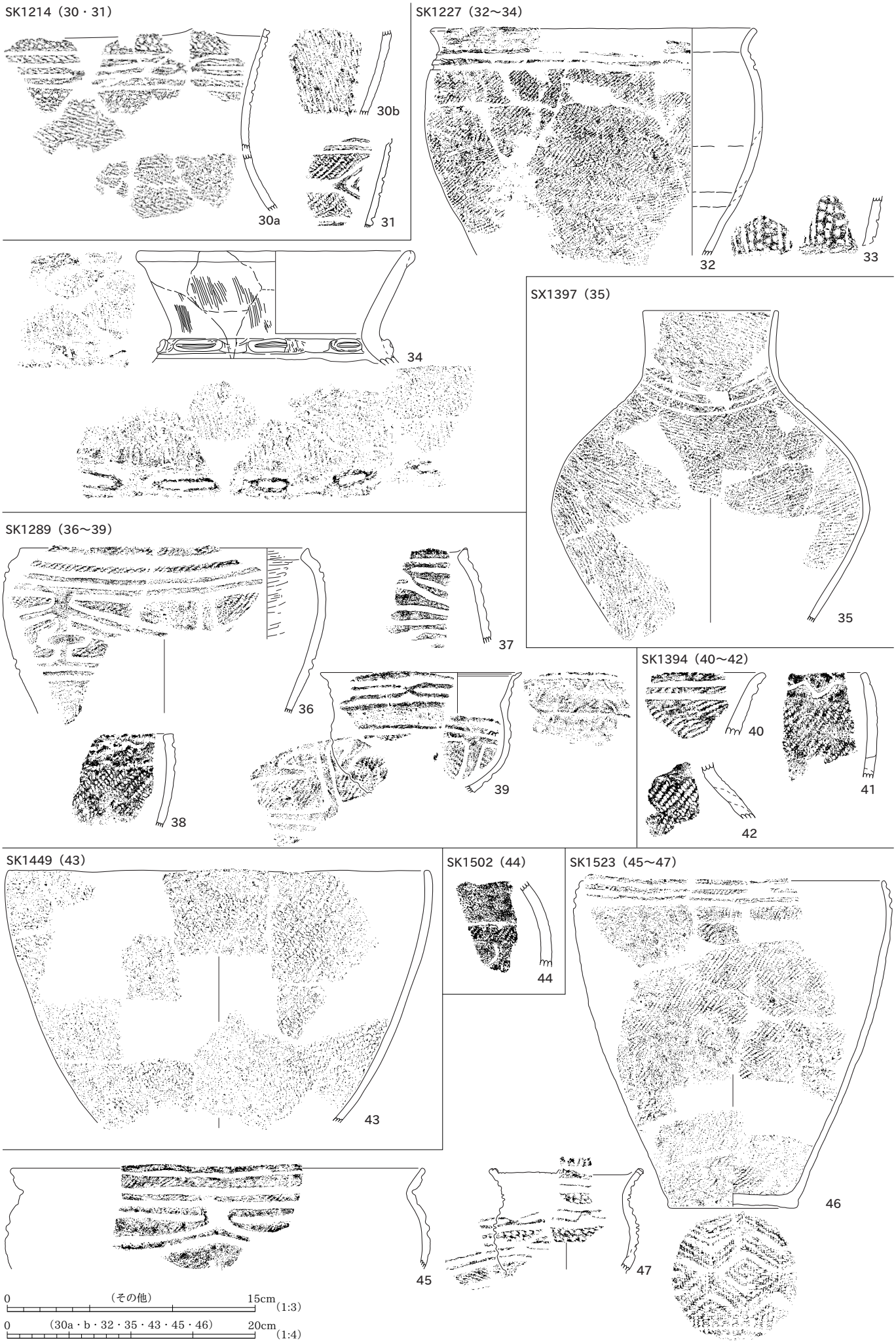
遺構外出土土器（第２面）

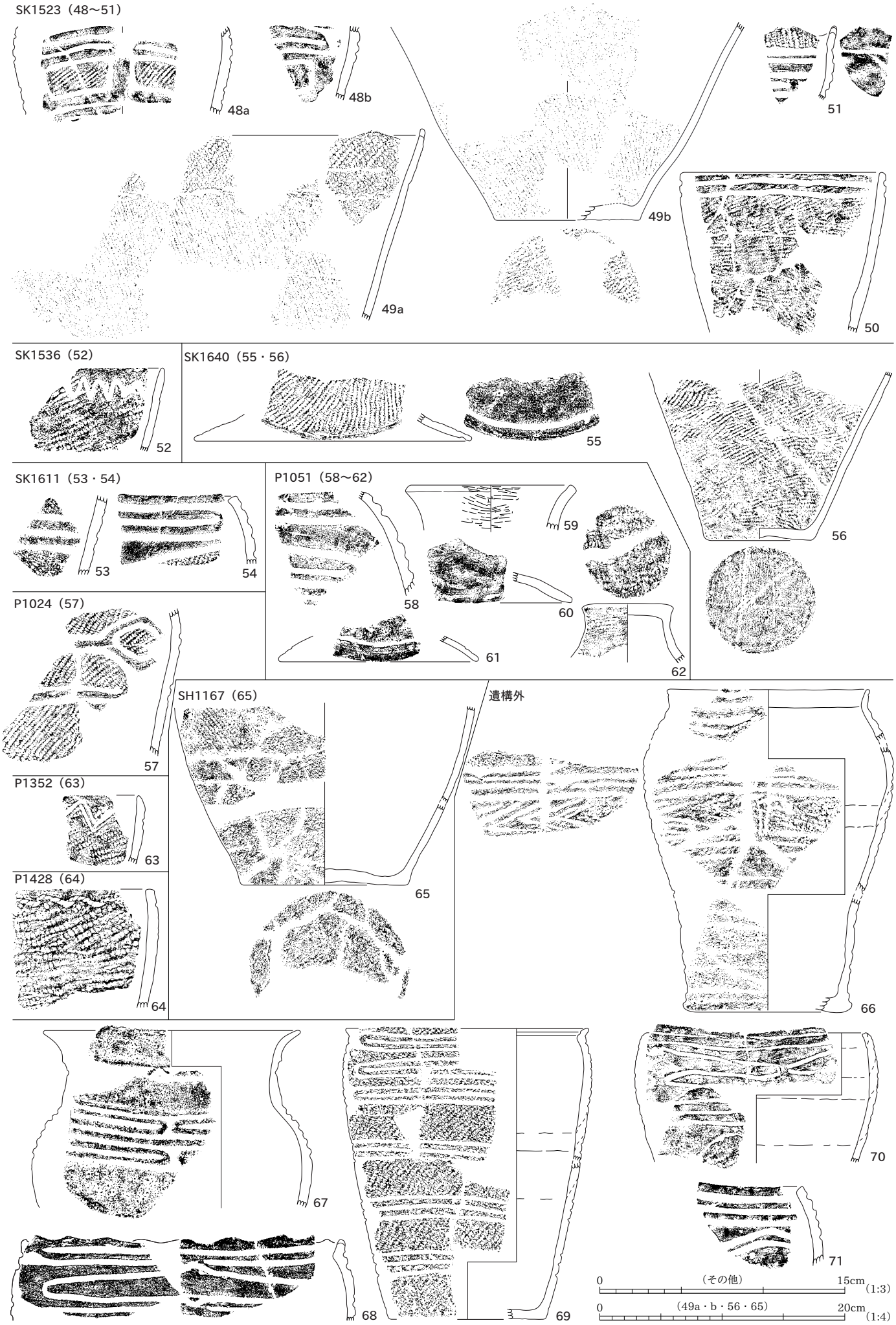


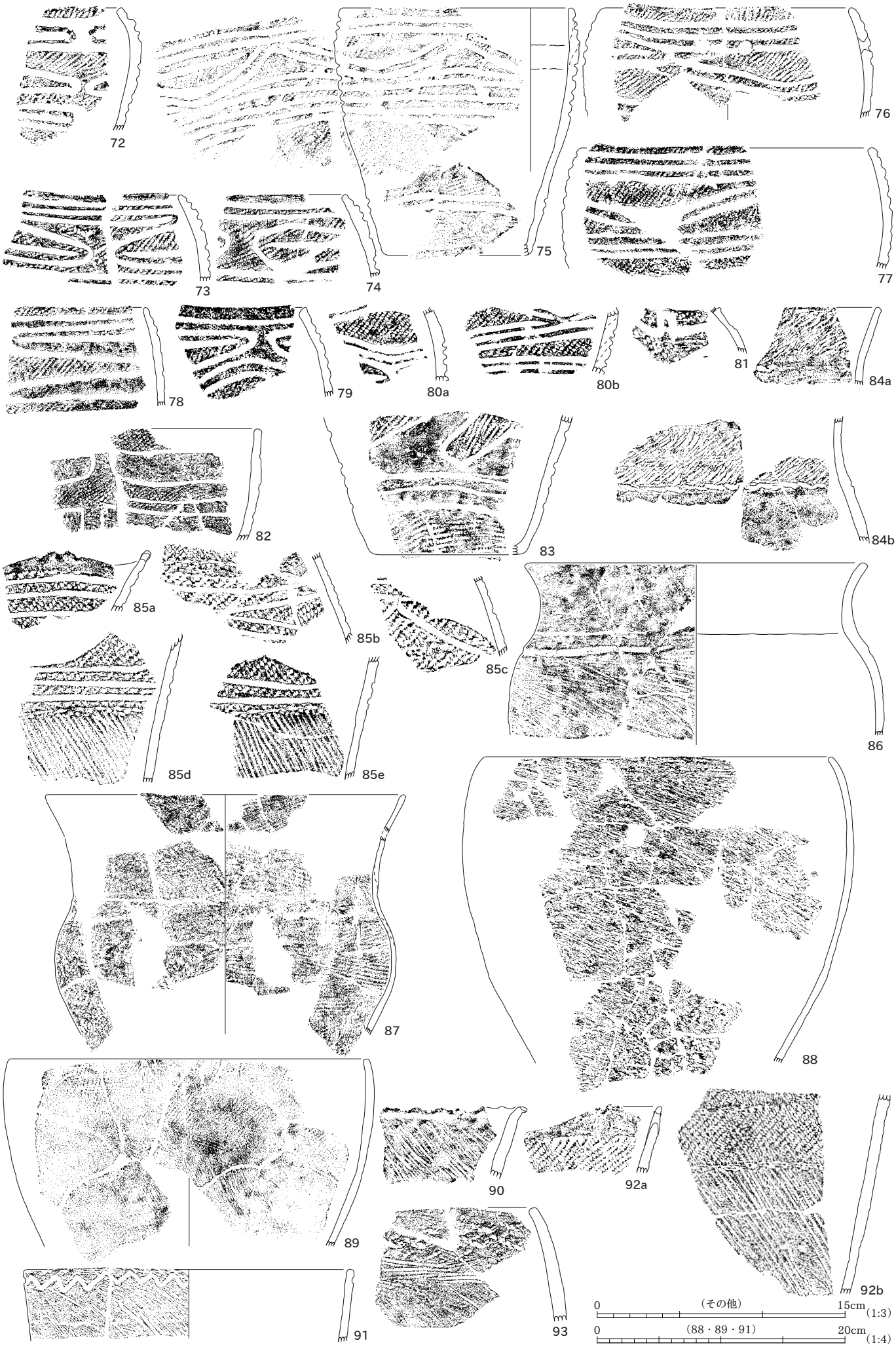
0　15cm (1:3)


115
116
117
121
0 (1:2) 10cm
砥面
118
119
120
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
わずかに凹む範囲
歯と推定される範囲
0 (121～138) 10cm (1:2)
0 (115～120・139～145) 15cm (1:3)
0 (146・147) 20cm (1:4)

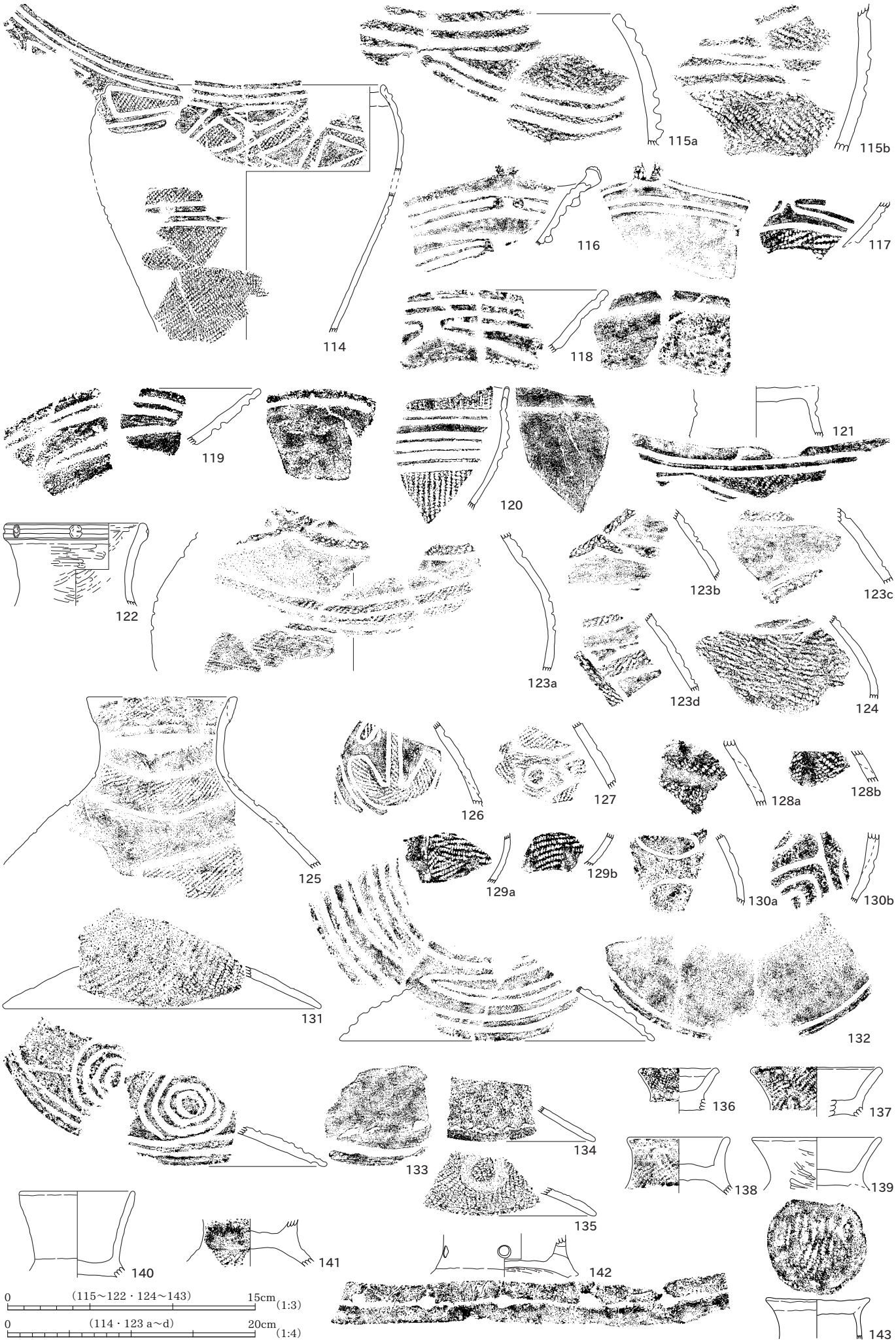

SB1607-P1390（1～3）
SB1607-P1391（4）
SK1040（6～10）
SB1607-P1509（5）
SK1165（11～13）
SK1166（14～17）
SK1170（18～24）
SK1176（25～28）
1
2a
2b
3
4
5
6
7
8a
8b
9
10
11a
11b
12
13
14
15
16
17
18
19a
19b
20
21
22a
22b
23
24
25
26
27
28
29
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（1・9・10）
20cm
(1:4)

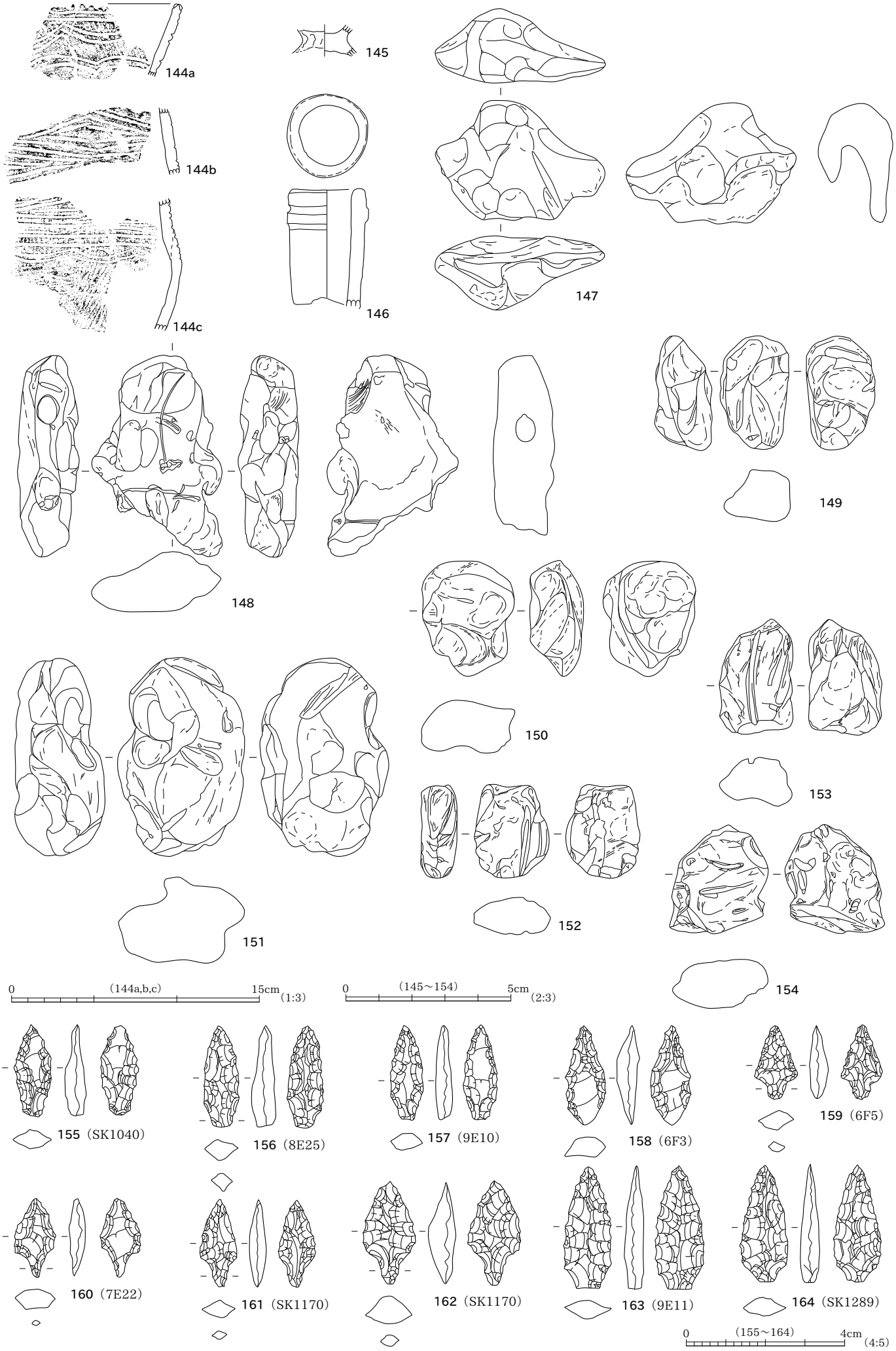

SK1214（30・31）
30a
30b
31
SK1227（32～34）
32
33
34
SX1397（35）
35
SK1289（36～39）
36
37
38
39
SK1394（40～42）
40
41
42
SK1449（43）
43
SK1502（44）
44
SK1523（45～47）
45
46
47
0 （その他） 15cm (1:3)
0 （30a・b・32・35・43・45・46） 20cm (1:4)

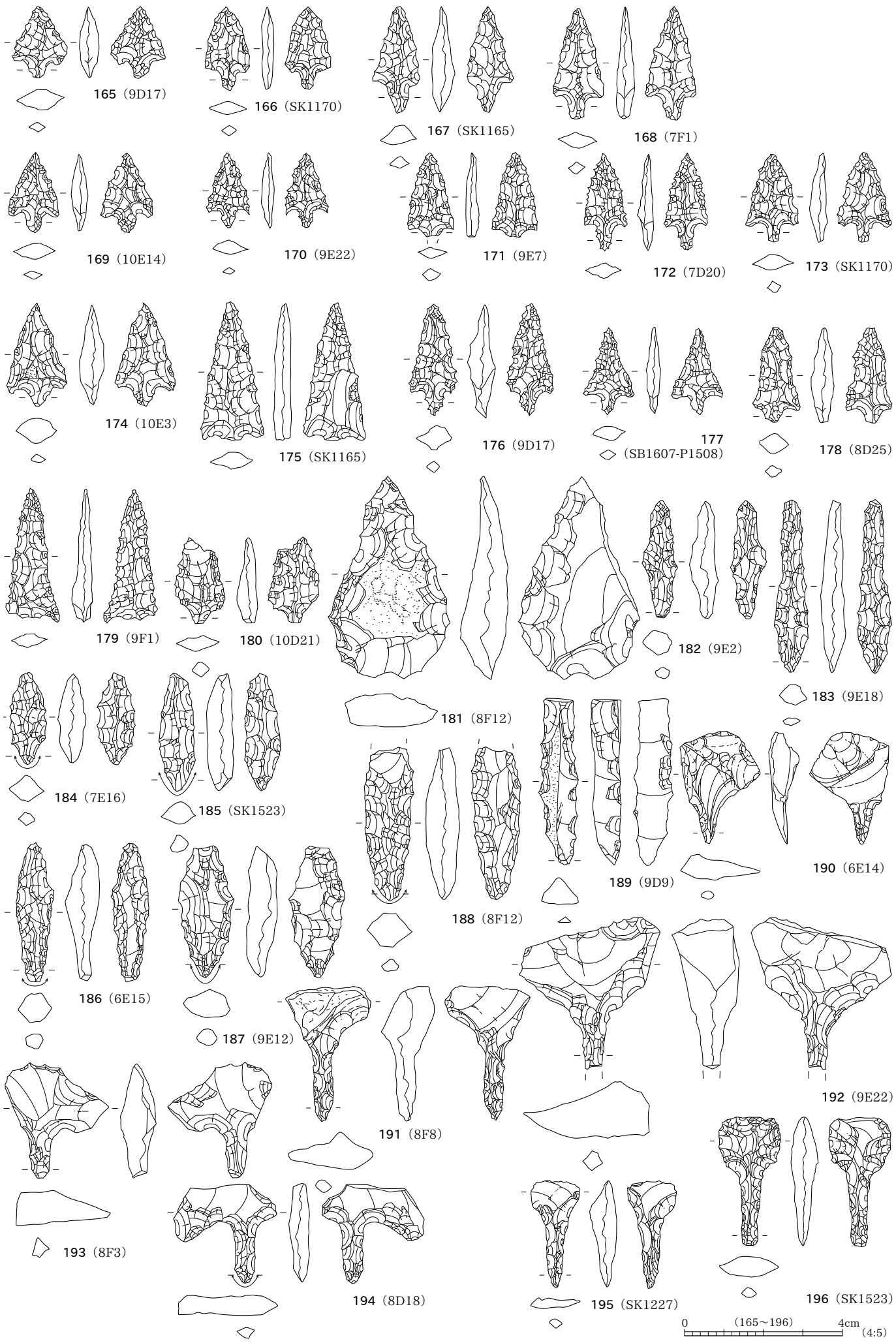

SK1523（48～51）
48a
48b
49a
49b
50
51
SK1536（52）
52
SK1640（55・56）
55
56
SK1611（53・54）
53
54
P1051（58～62）
58
59
60
61
62
P1024（57）
57
P1352（63）
63
P1428（64）
64
SH1167（65）
65
遺構外
66
67
68
69
70
71
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（49a・b・56・65）
20cm
(1:4)

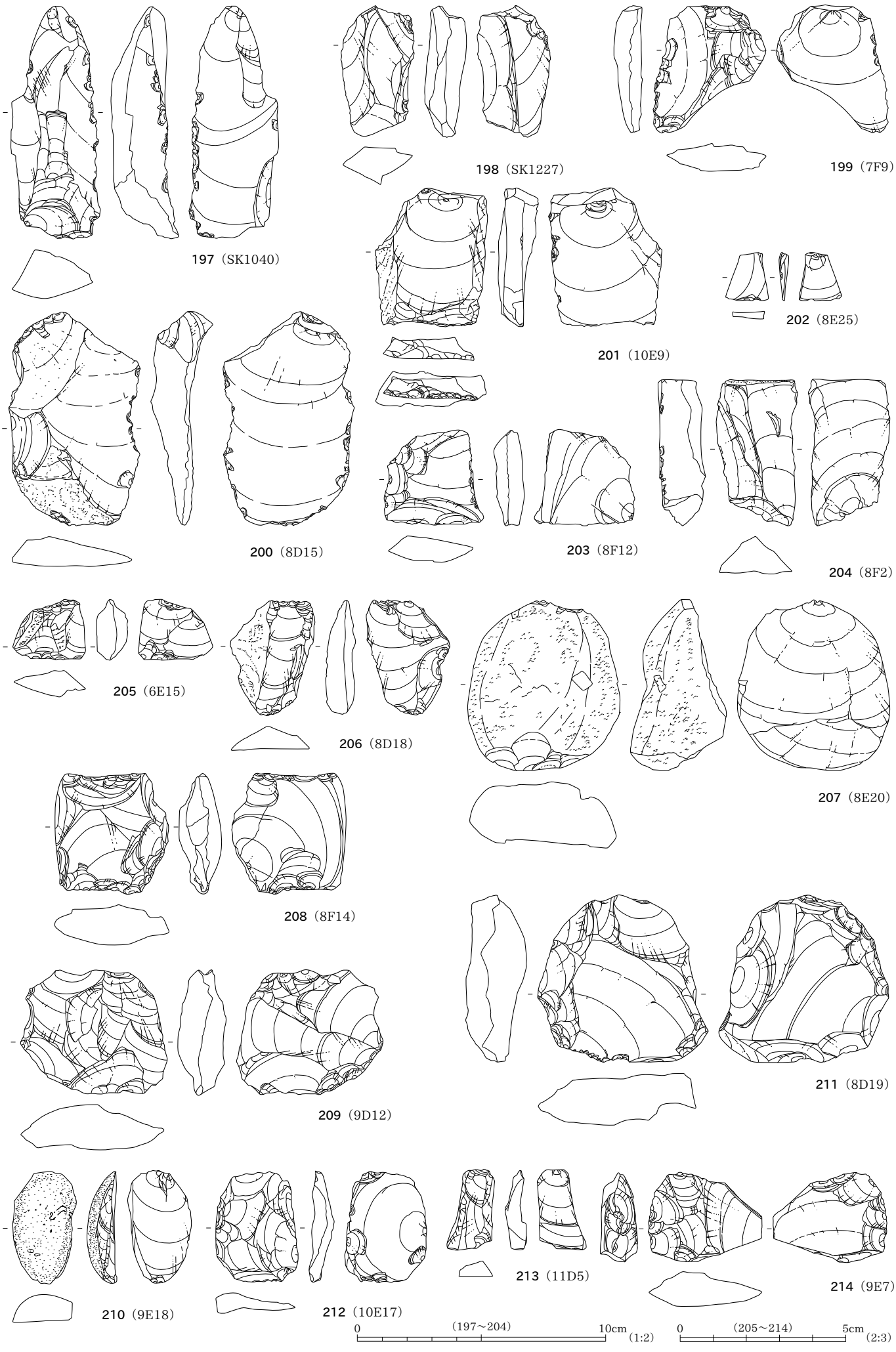

72
73
74
75
76
77
78
79
80a
80b
81
84a
82
83
84b
85a
85b
85c
85d
85e
86
87
88
89
90
91
92a
92b
93
0 （その他） 15cm (1:3)
0 （88・89・91） 20cm (1:4)

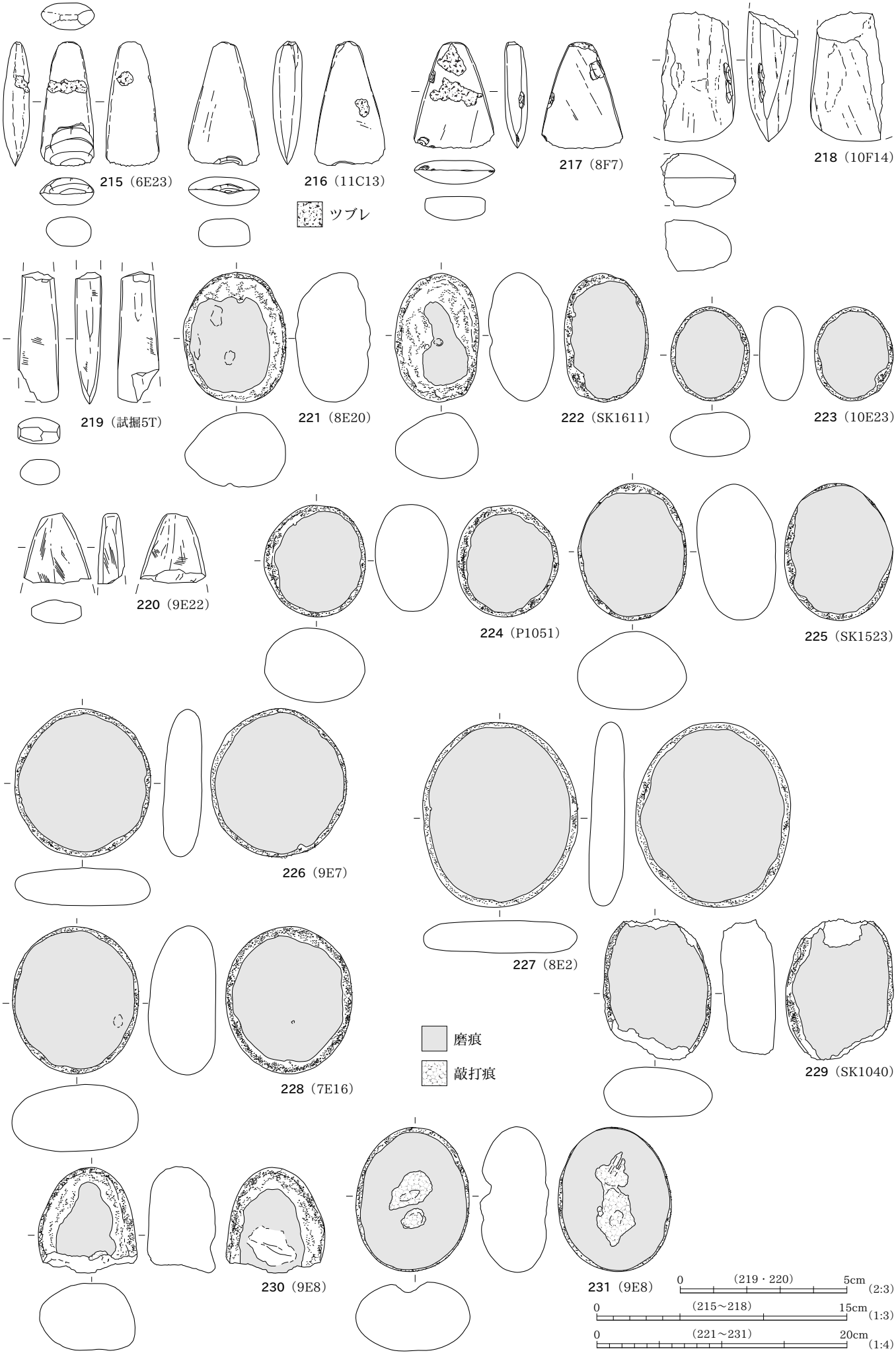
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104a
104b
104c
104d
105
106
107
108
109
110
111
112
113
0
(その他)
15cm
(1:3)
0
(94・95・98・110～113)
20cm
(1:4)

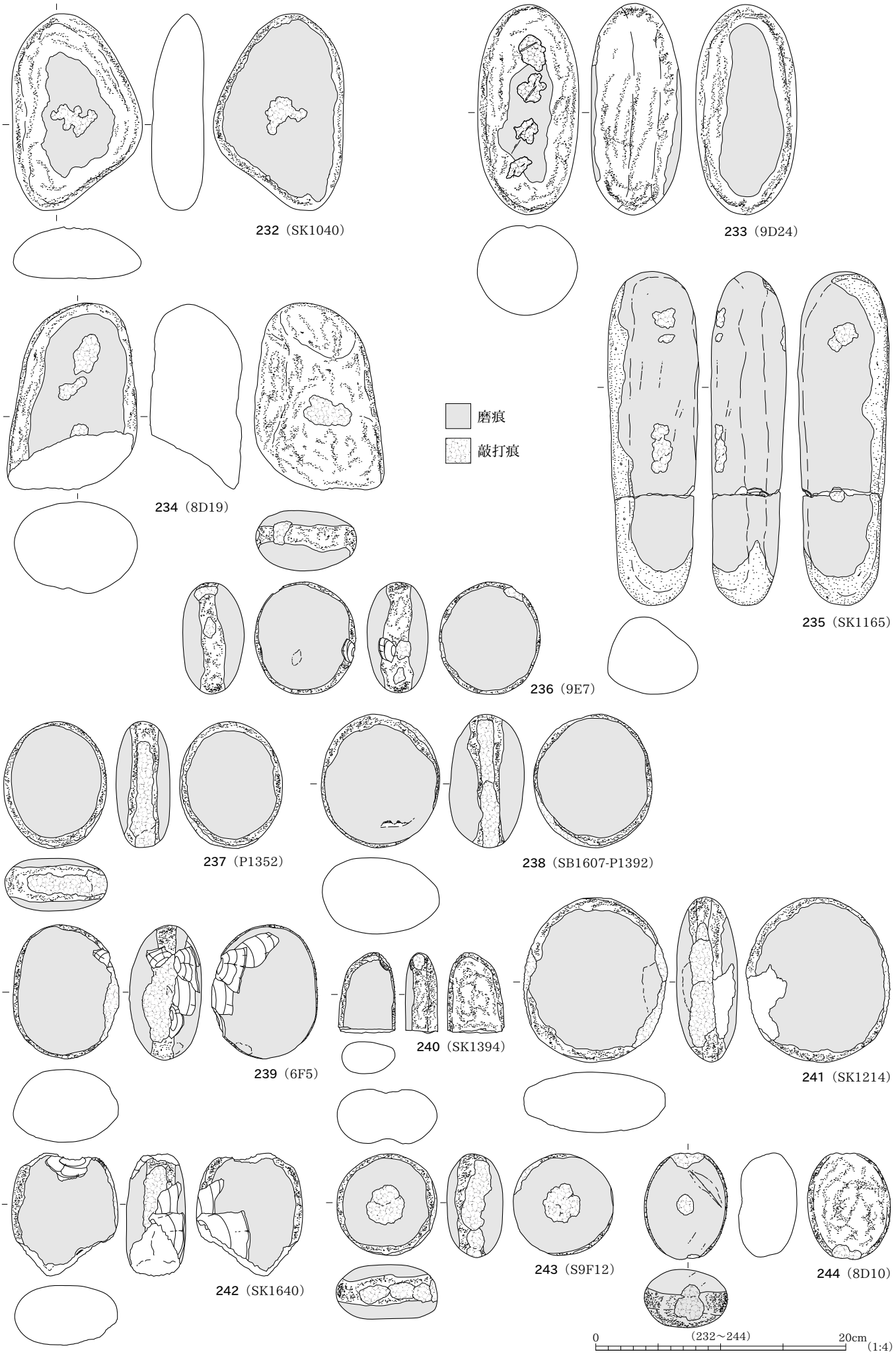

114
115a
115b
116
117
118
119
120
121
122
123a
123b
123c
123d
124
125
126
127
128a
128b
129a
129b
130a
130b
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
0 (115～122・124～143) 15cm (1:3)
0 (114・123 a～d) 20cm (1:4)


144a
144b
144c
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
0 (144a,b,c) 15cm (1:3)
0 (145～154) 5cm (2:3)
155（SK1040）
156（8E25）
157（9E10）
158（6F3）
159（6F5）
160（7E22）
161（SK1170）
162（SK1170）
163（9E11）
164（SK1289）
0 (155～164) 4cm (4:5)

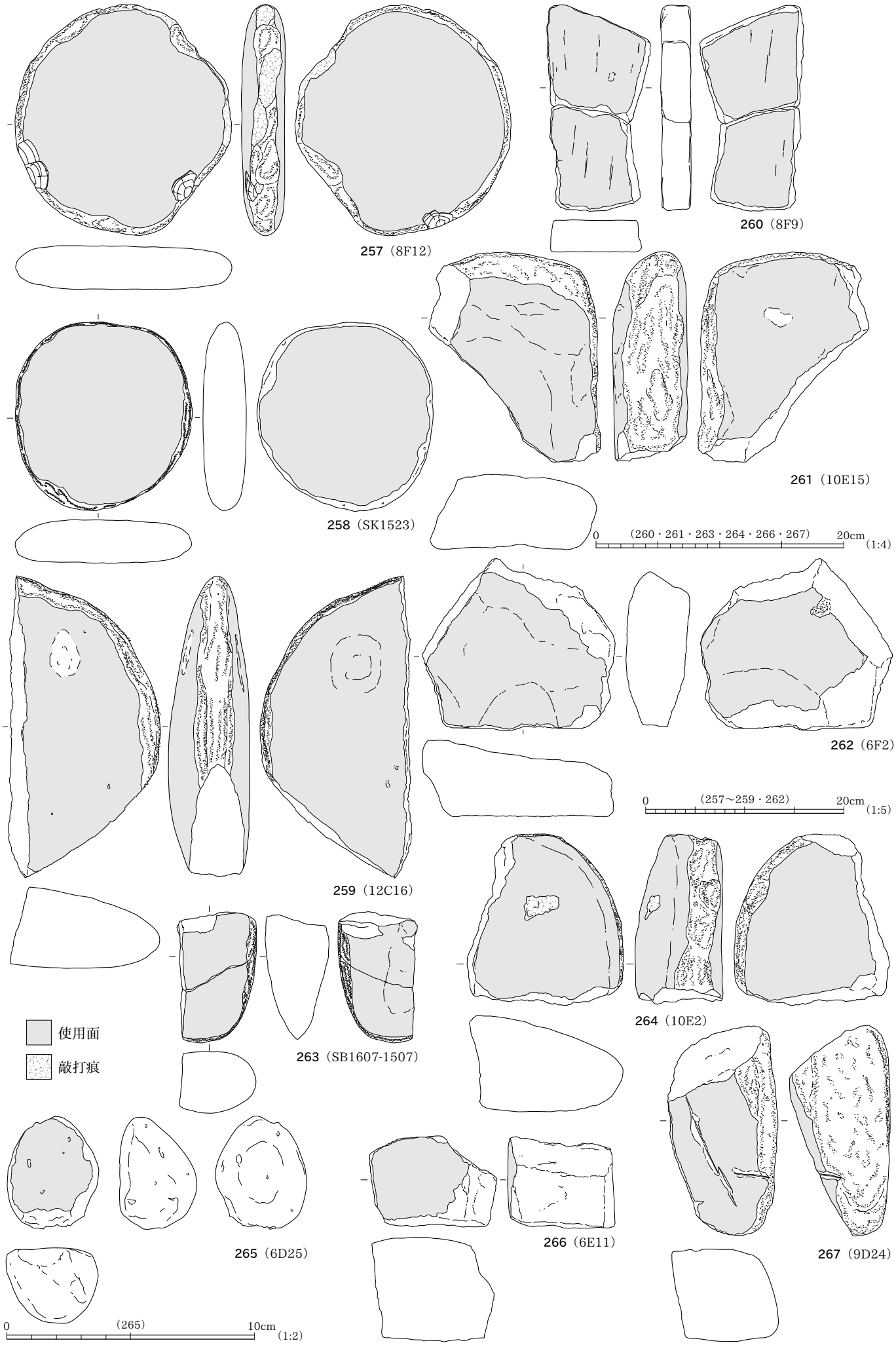

165（9D17）
166（SK1170）
167（SK1165）
168（7F1）
169（10E14）
170（9E22）
171（9E7）
172（7D20）
173（SK1170）
174（10E3）
175（SK1165）
176（9D17）
177
（SB1607-P1508）
178（8D25）
179（9F1）
180（10D21）
181（8F12）
182（9E2）
183（9E18）
184（7E16）
185（SK1523）
186（6E15）
187（9E12）
188（8F12）
189（9D9）
190（6E14）
191（8F8）
192（9E22）
193（8F3）
194（8D18）
195（SK1227）
196（SK1523）
0
（165～196）
4cm
（4:5）

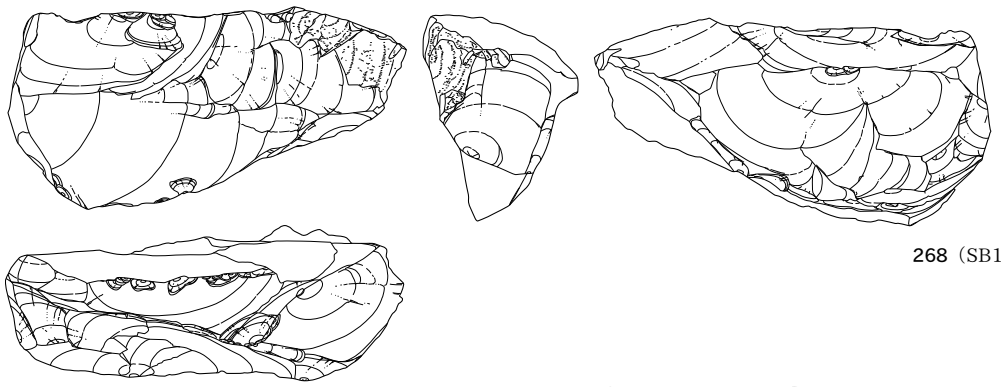

197（SK1040）
198（SK1227）
199（7F9）
201（10E9）
202（8E25）
200（8D15）
203（8F12）
204（8F2）
205（6E15）
206（8D18）
207（8E20）
208（8F14）
209（9D12）
211（8D19）
210（9E18）
212（10E17）
213（11D5）
214（9E7）
0 (197～204) 10cm (1:2)
0 (205～214) 5cm (2:3)


215（6E23）
216（11C13）
ツブレ
217（8F7）
218（10F14）
219（試掘5T）
221（8E20）
222（SK1611）
223（10E23）
220（9E22）
224（P1051）
225（SK1523）
226（9E7）
227（8E2）
228（7E16）
磨痕
敲打痕
229（SK1040）
230（9E8）
231（9E8）
0 （219・220） 5cm (2:3)
0 （215～218） 15cm (1:3)
0 （221～231） 20cm (1:4)

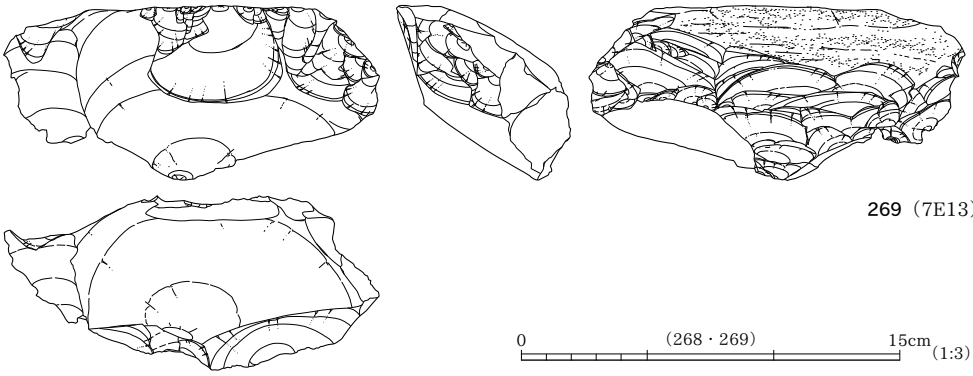

磨痕
敲打痕
232（SK1040）
233（9D24）
234（8D19）
235（SK1165）
236（9E7）
237（P1352）
238（SB1607-P1392）
239（6F5）
240（SK1394）
241（SK1214）
242（SK1640）
243（S9F12）
244（8D10）
0
（232～244）
20cm
（1:4）

245（8E5）
246（8D22）
247（6E10）
248（9E2）
249（9F20）
250（P1051）
251（SK1523）
節理面
252（SX1397）
253（SX1397）
磨痕
敲打痕
254（9E12）
255（SB1607-P1391）
256
（SK1227）
0　（248～256）　15cm（1:3）
0　（245～247）　20cm（1:4）


257（8F12）
260（8F9）
261（10E15）
258（SK1523）
0 （260・261・263・264・266・267） 20cm （1:4）
262（6F2）
0 （257～259・262） 20cm （1:5）
259（12C16）
264（10E2）
使用面
敲打痕
263（SB1607-1507）
265（6D25）
266（6E11）
267（9D24）
0 （265） 10cm （1:2）

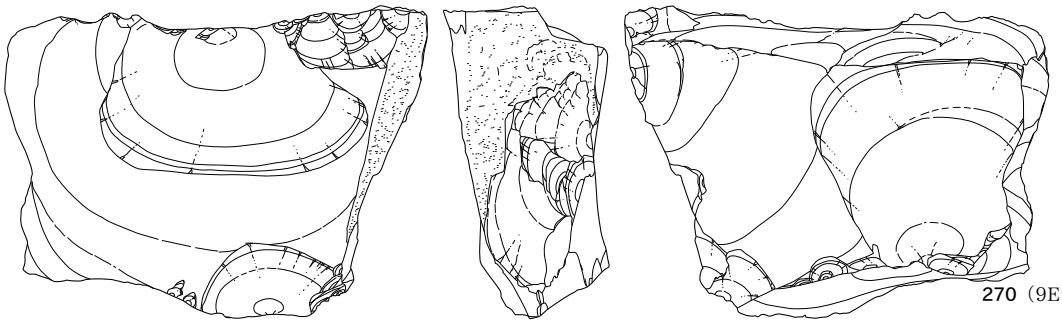


268（SB1607-P1392）

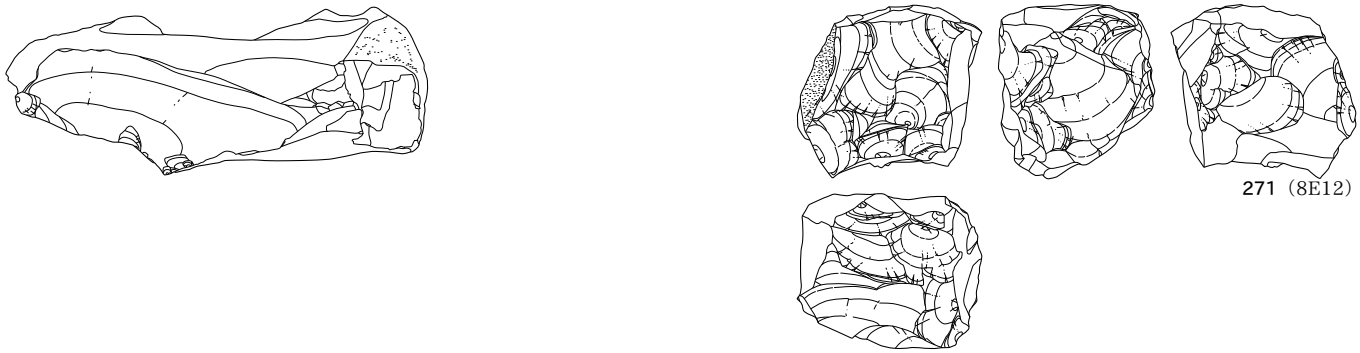


269（7E13）

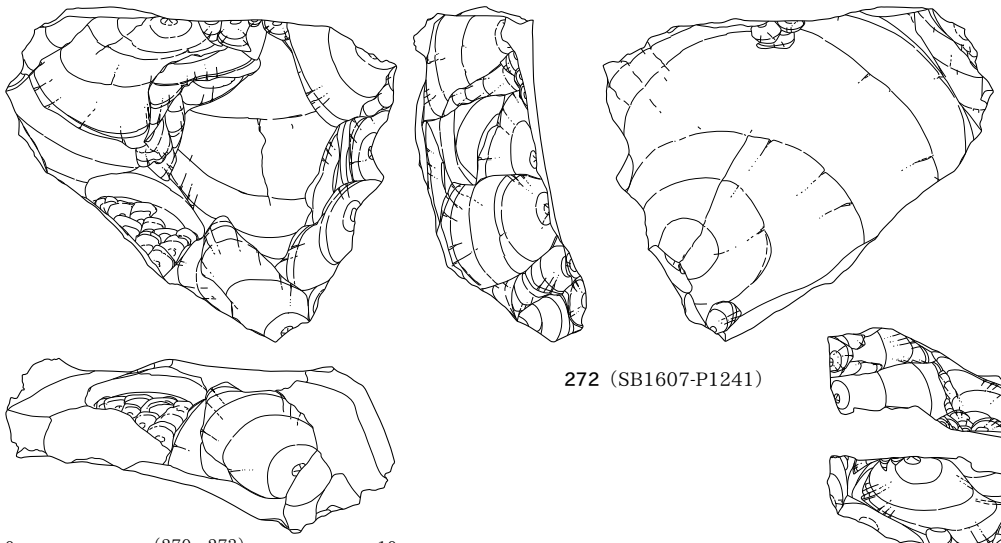
0　（268・269）　15cm（1:3）



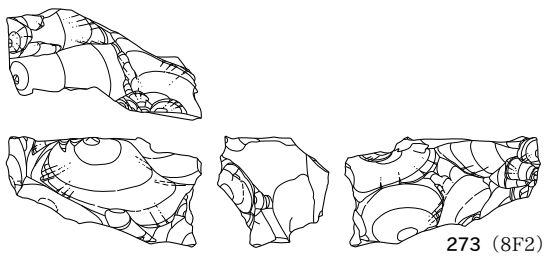
270（9E7）



271（8E12）

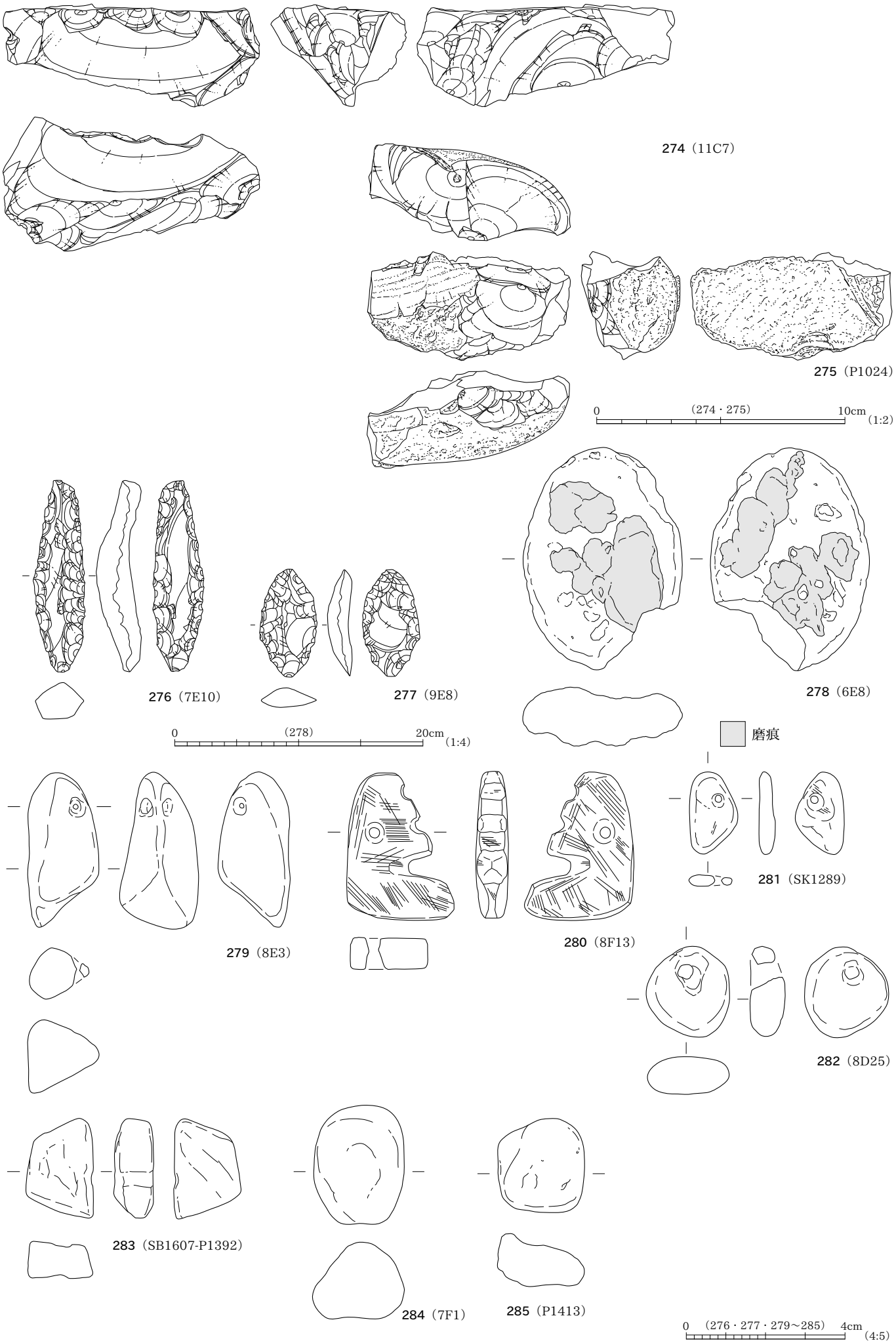


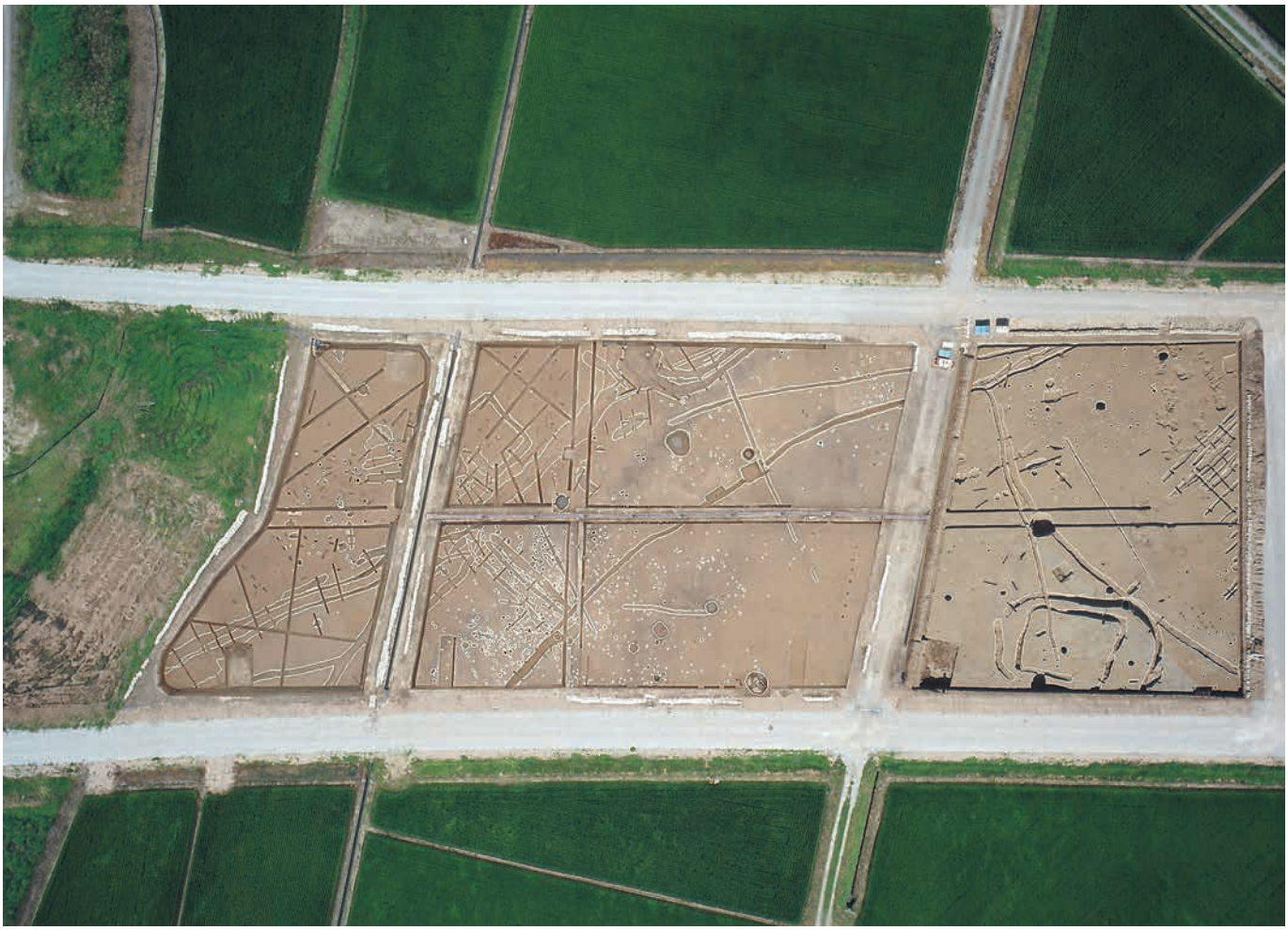
272（SB1607-P1241）



273（8F2）

0　（270～273）　10cm（1:2）


274（11C7）
275（P1024）
0 （274・275） 10cm (1:2)
276（7E10）
277（9E8）
278（6E8）
0 （278） 20cm (1:4)
磨痕
279（8E3）
280（8F13）
281（SK1289）
282（8D25）
283（SB1607-P1392）
284（7F1）
285（P1413）
0 （276・277・279～285） 4cm (4:5)



第１面　調査範囲全景（上が北、８月１日撮影写真と11月13日撮影写真を合成して作成）

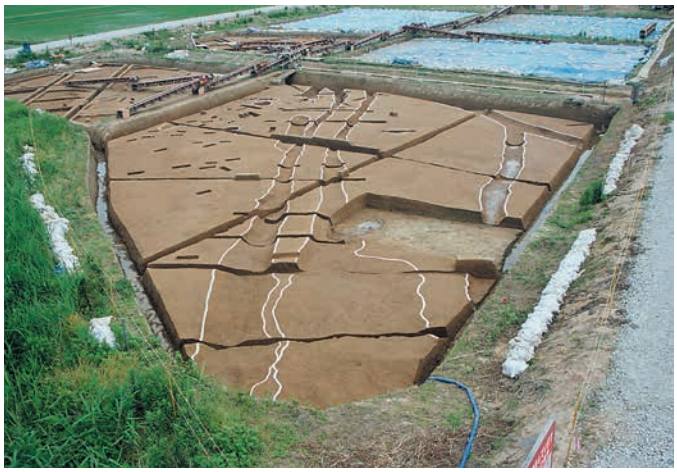
遺跡遠景（南から、第１面、矢印の交点が猫山遺跡）

遺跡近景（西から、奥が五頭連峰）

調査前風景（西から、奥が五頭連峰）

基本土層（西から、6D グリッド。第５図・柱状図⑧）

作業風景（南から、SB1324）



第１面　4D グリッド付近（西側 2E グリッドから）

第１面　5B・5C グリッド周辺（北東側 7A グリッドから）

第１面　7E グリッド周辺（南東側 8G グリッドから）

第１面　9B グリッド周辺（北西側 8B グリッドから）

第１面　8E・8F グリッド周辺（南東側 9G グリッドから）

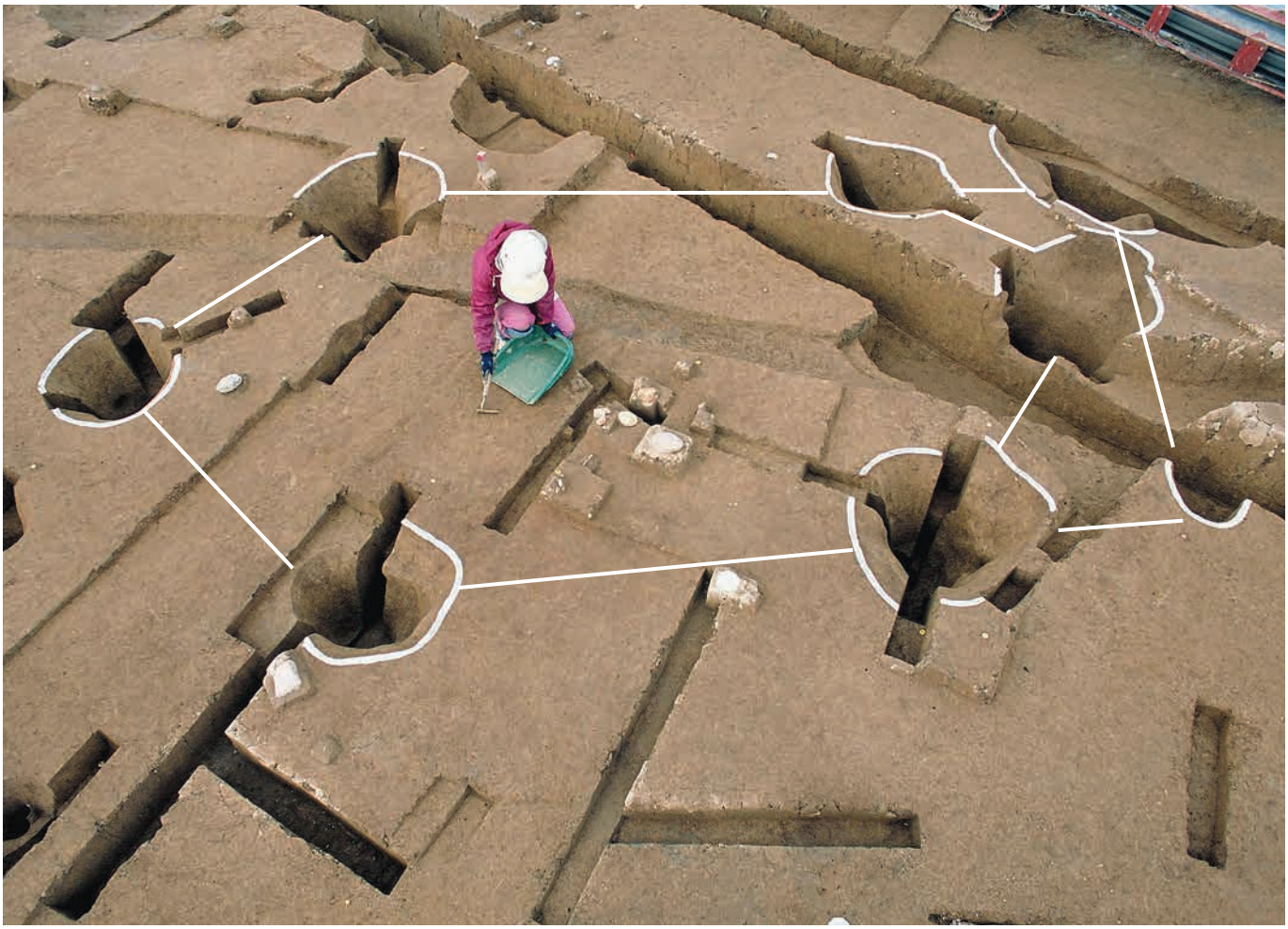
第１面　7F・8E グリッド周辺（南西側 6F グリッドから）

第１面　12F・13F グリッド周辺（南西側 9G グリッドから）

第２面　8C・9C グリッド周辺（西側 7B グリッドから）

第２面　6E グリッド周辺（南西側 5F グリッドから）

第３面　調査範囲全景（上が北）



弥生時代の掘立柱建物（SB1607）完掘（南東から）

SB1607 内　被熱を受けた礫　出土状況（東から）

SB1607-P1390　根固め土器出土状況（南東から）

SK1040　遺物出土状況（南東から）

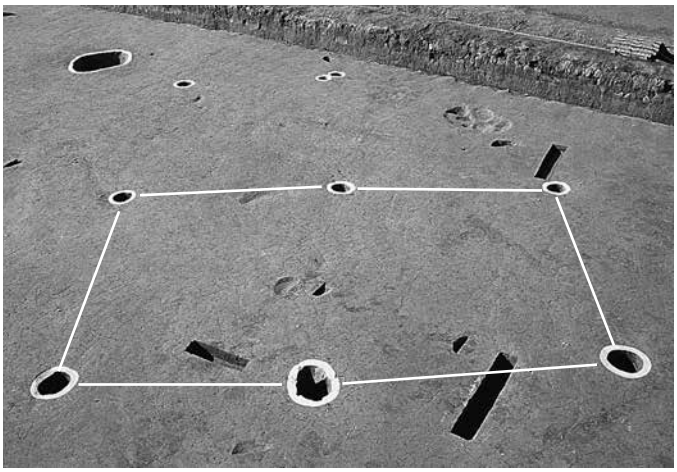
SK1523　底面遺物出土状況（南から）

9E17 グリッド　遺物出土状況（南から）

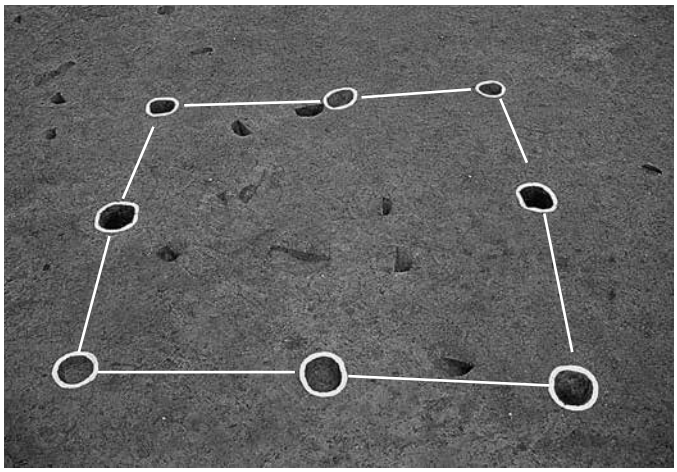
斜面部　遺物出土状況（6F1 グリッド付近から北東方向を望む）

SK1289　垂玉出土状況（北から）

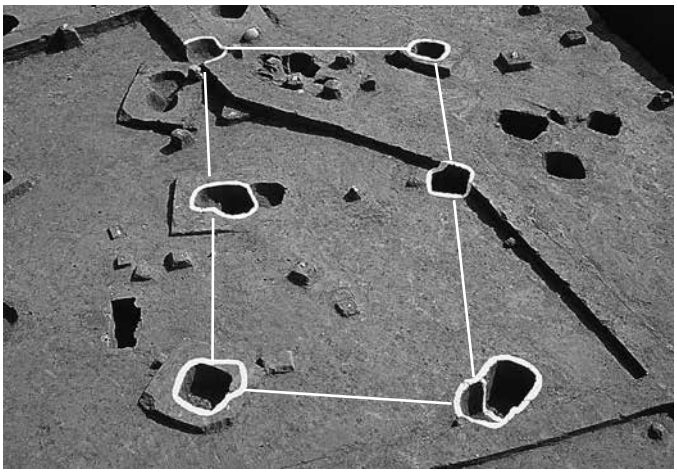
弥生時代の玉



SB1282　完掘（東から）



SB1324　完掘（南から）



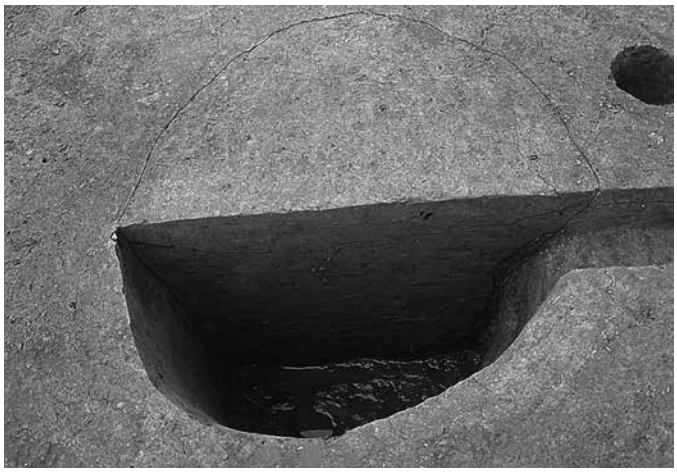
SB1500　完掘（西から）

SE4　断面（北から）

SE4　完掘（北から）

SE513　完掘（北から）

SE513　完掘（南から）



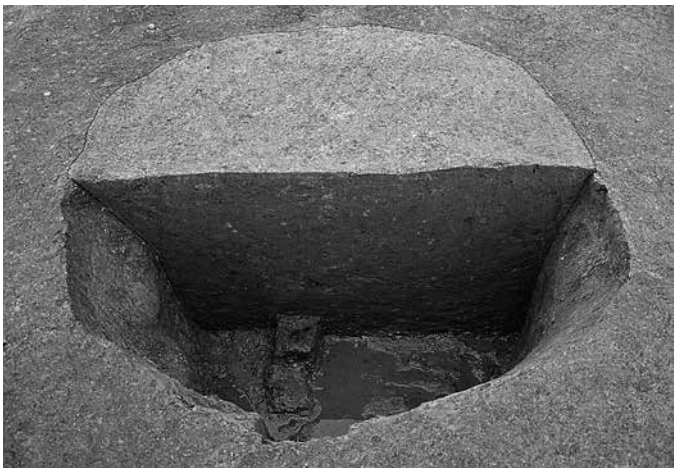
SE722　断面（南から）

SE722　完掘（北から）

SE799　断面（北から）

SE799　遺物出土状況（南西から）

SE799　完掘（北から）



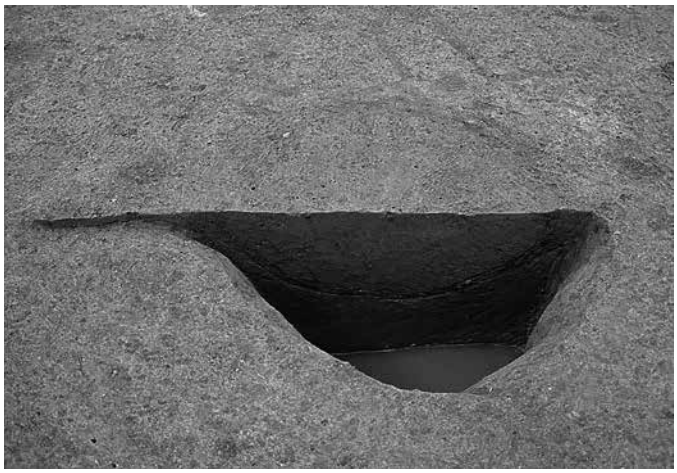
SE857　断面（南から）

SE857　完掘（南から）

SE995　断面（南から、覆土上半）

SE995　遺物出土状況（南から）

SE995　断面（南から、覆土下半）



SE1052　断面（南から）

SE1052　完掘（南から）

SE1173　断面（南から）

SE1173　完掘（南から）

SE1173　底面（東から）

SE1175　遺物出土状況（東から）

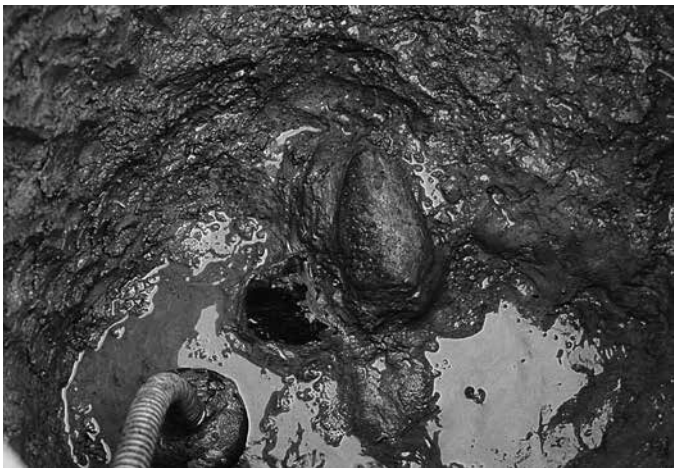
SE1175　完掘（東から）

SE1211　断面（南から）

SE1211　遺物出土状況（南東から）

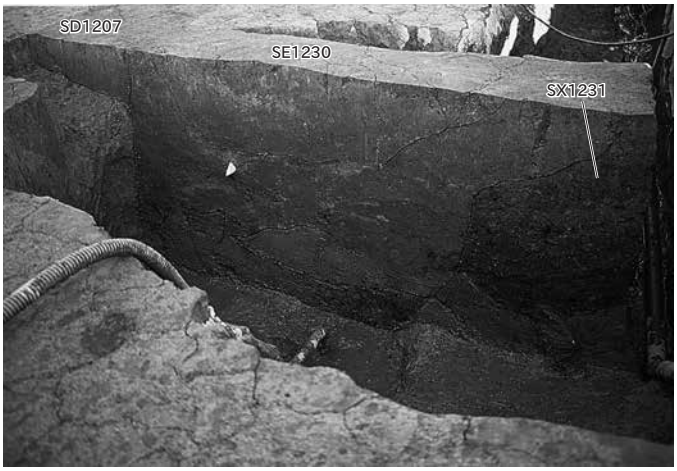
SE1211　完掘（北から）

SE1220　断面（東から）



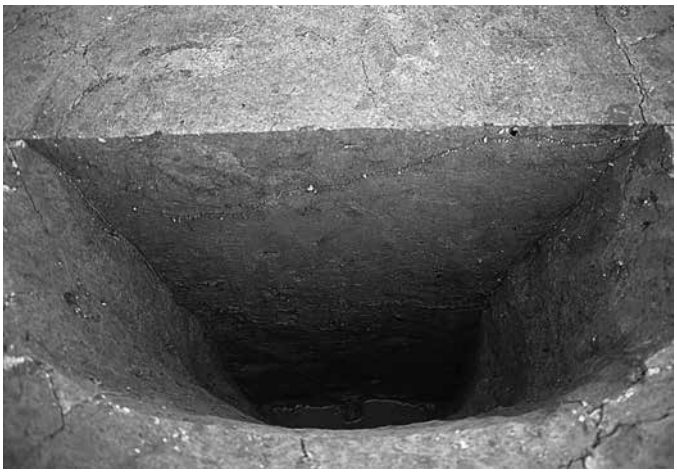
SE1220　遺物出土状況（東から）

SE1220　遺物出土状況（東から）



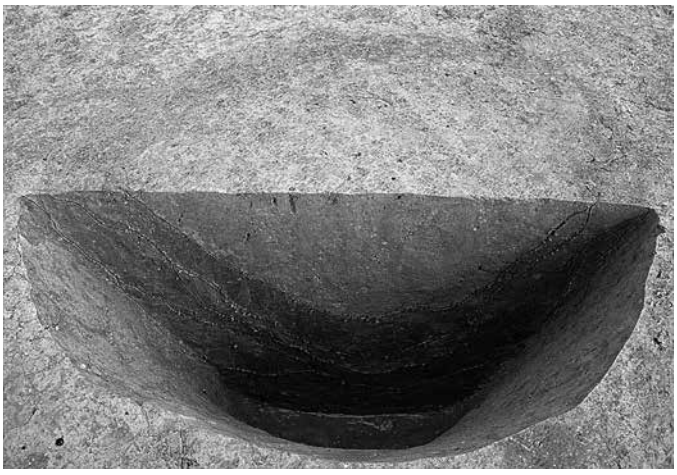
SE1230　断面（西から、左からSD1207、SE1230、SX1231）

SE1230　完掘（南西から）

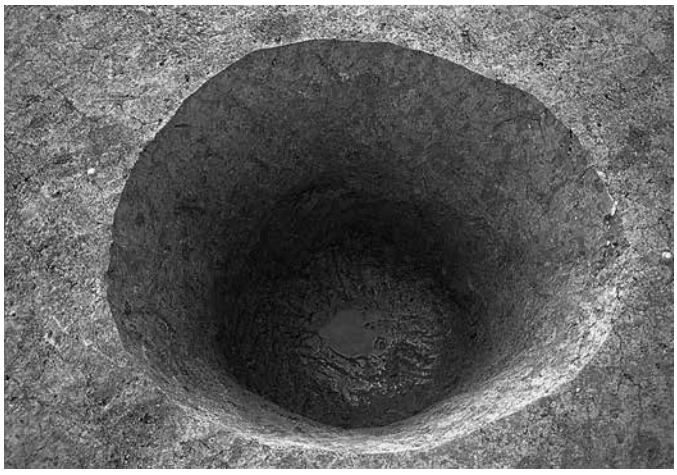


SE1260　断面（南西から）

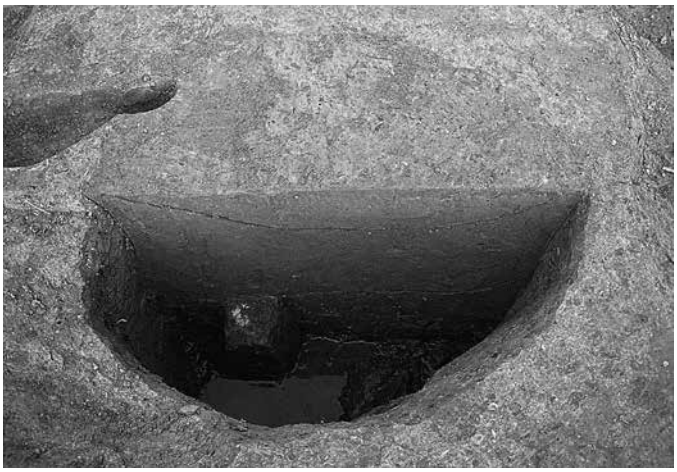
SE1260　完掘（北から）



SE1538　断面（西から）



SE1538　完掘（西から）



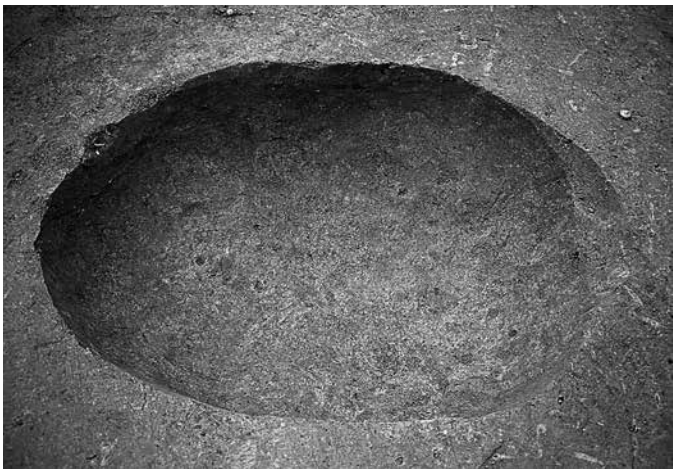
SE1554　断面（南から）

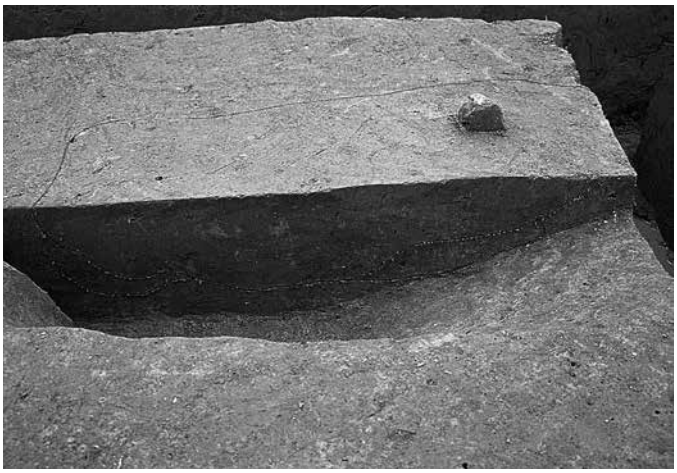
SE1554　遺物出土状況（北東から）

SE1554　６・７層断面（南から）

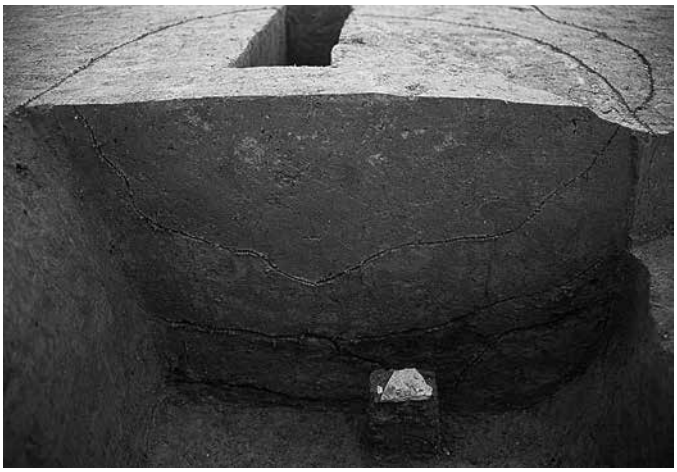
SE1554　完掘（南から）

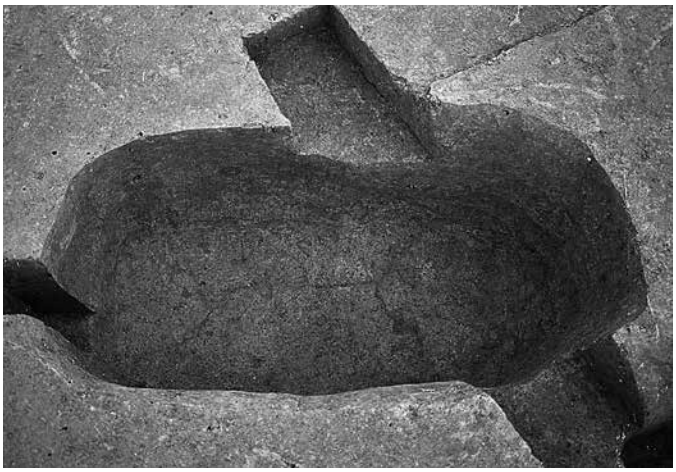
SK7　断面（東から）

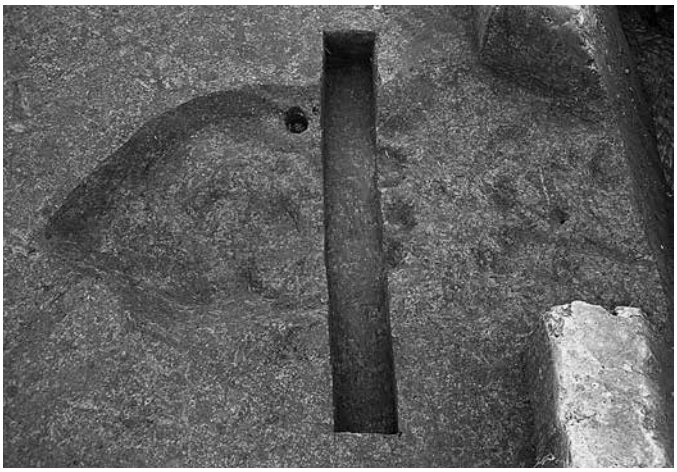

SK7　完掘（南東から）


SK15　断面（南から）

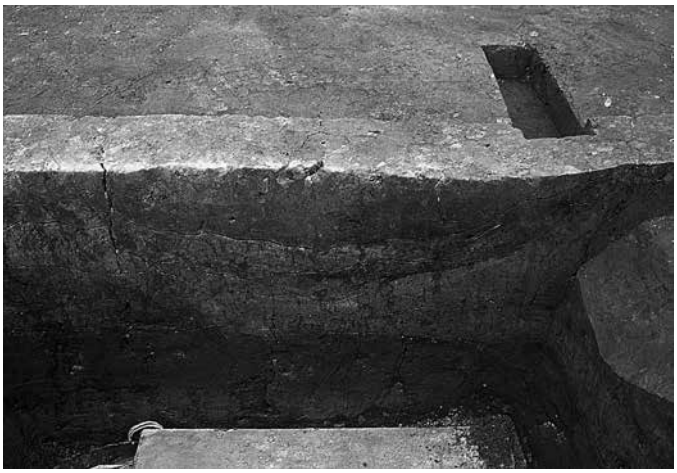
SK15　完掘（南から）


SK20　断面（西から）

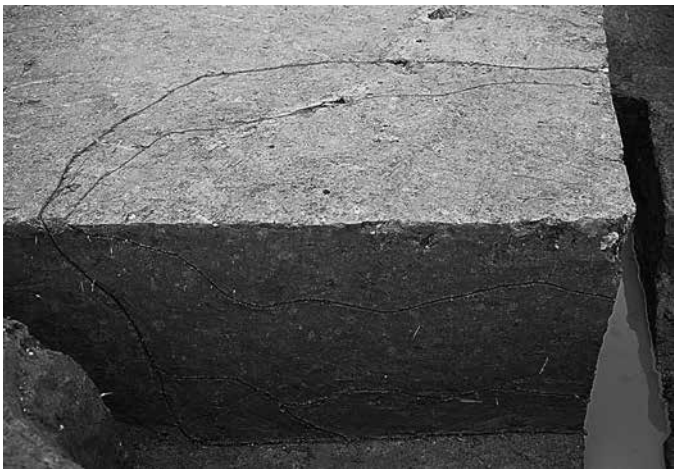

SK20　完掘（北から）


SK48　完掘（東から）

SK49　完掘（北から）


SK52　断面（東から）

SK52　完掘（南東から）


SK53　断面（北東から）

SK53　完掘（北東から）

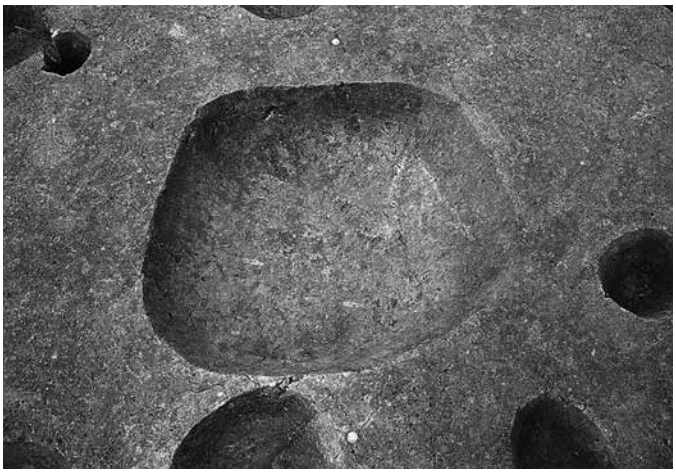
SK67　断面（西から）

SK67　完掘（北東から）

SK94　完掘（西から）

SK150　完掘（東から）

SK152　断面（南東から）

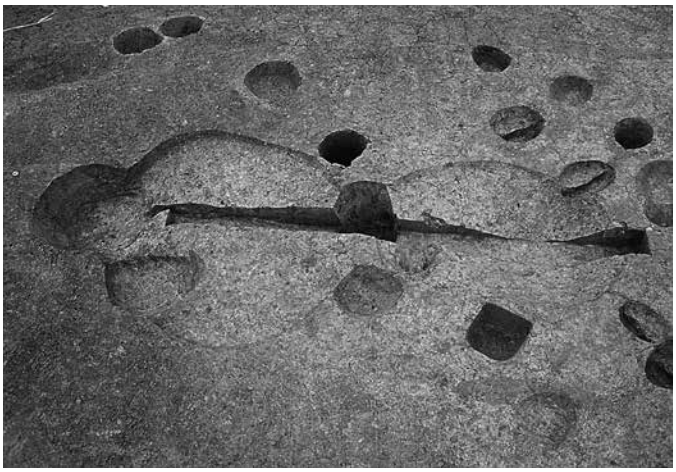


SK152　完掘（北東から）

SK507　断面（南から）

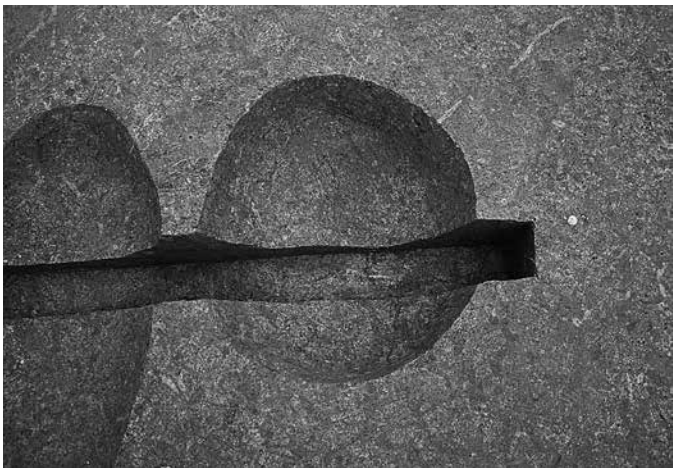
SK507　完掘（南東から）

SK520・SK521　断面（南から、左SK520）

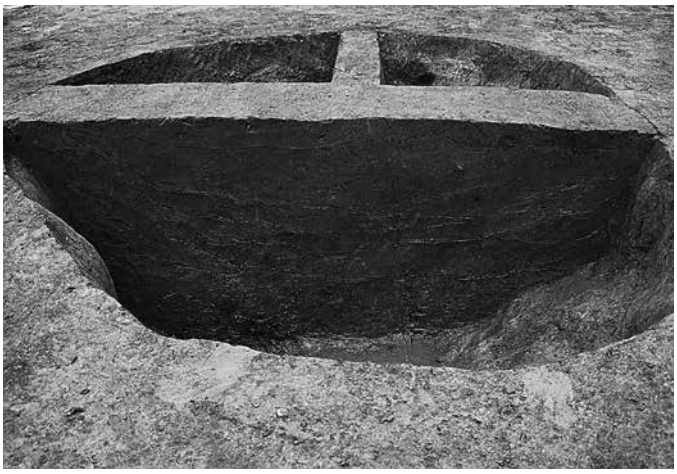


SK520・SK521　完掘（南から、左SK520）

SK545　断面（南西から）

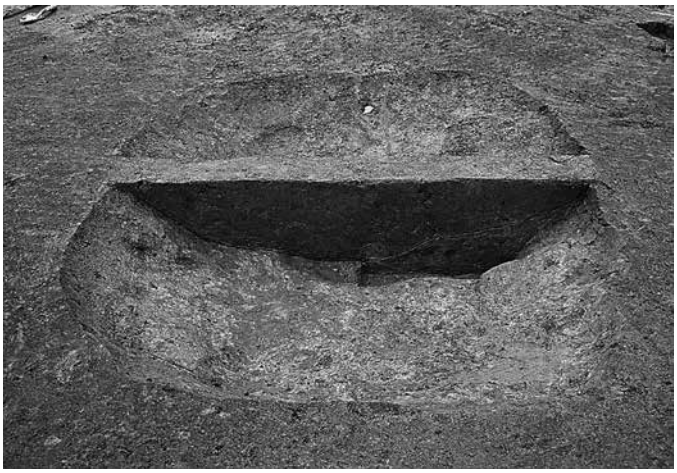


SK545　完掘（南西から）



SK578　断面（南から）

SK578　完掘（東から）



SK721　断面（南東から）

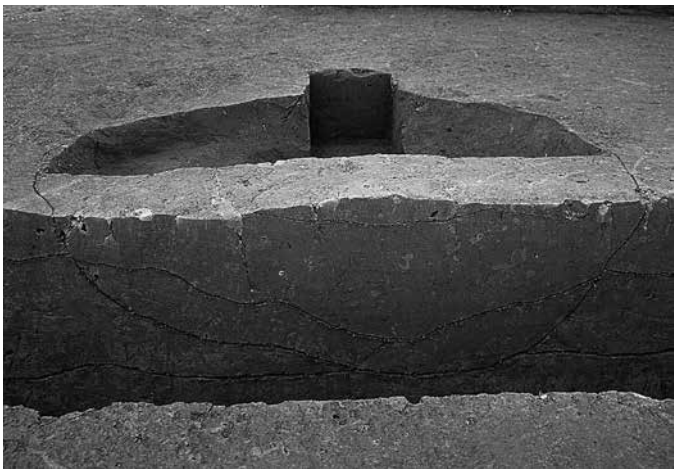
SK721　完掘（南東から）

SK763　断面（東から）

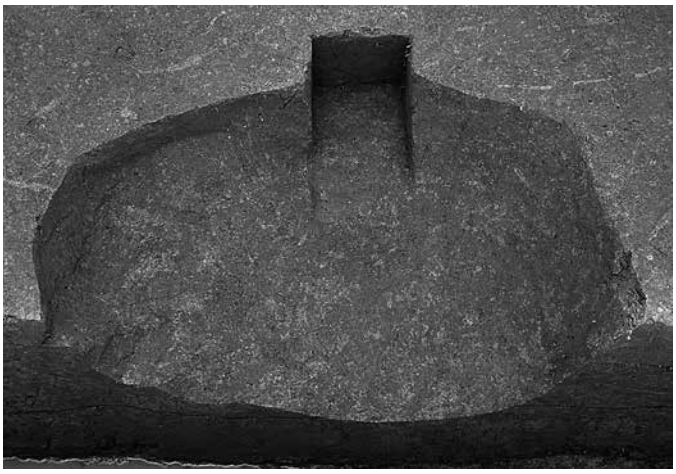
SK763　完掘（東から）

SK764　断面（南西から）

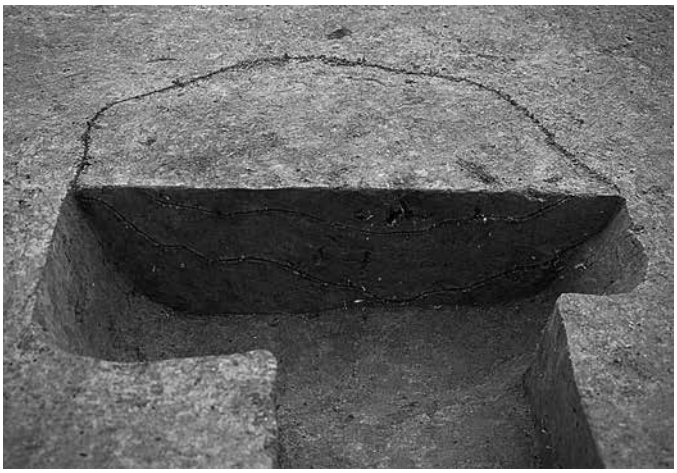
SK764　遺物出土状況（南から）



SK828　断面（南から）

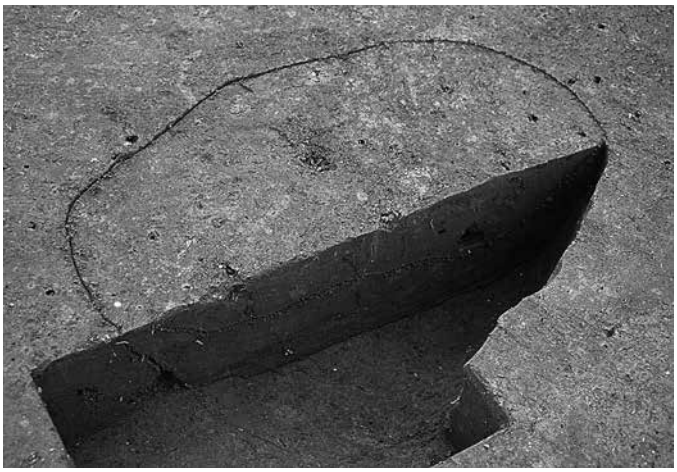


SK828　完掘（南から）



SK829　断面（東から）

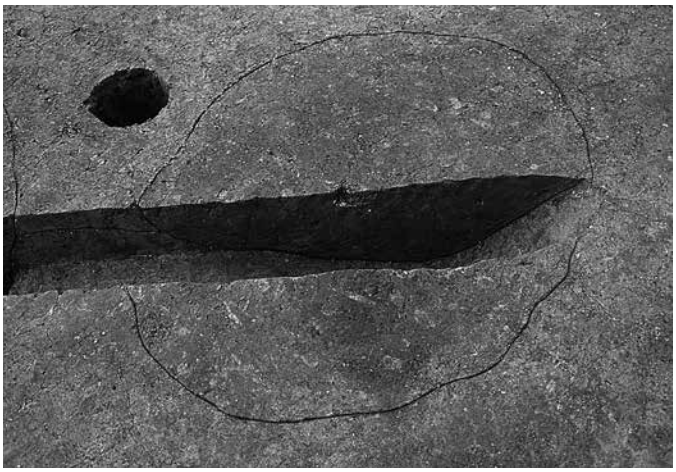
SK829　完掘（東から）



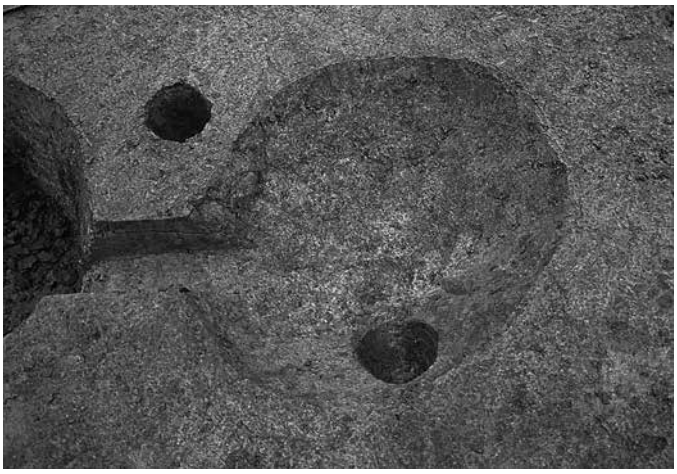
SK830　断面（北から）

SK830　完掘（南から）

SK920　断面（北から）



SK922　断面（南から）

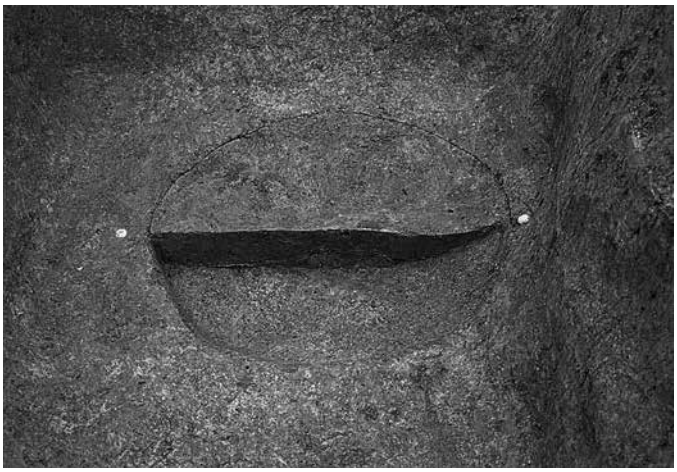


SK922　完掘（南から）

SK960　断面（北西から）

SK960　断面（北西から）

SK960　完掘（北東から）

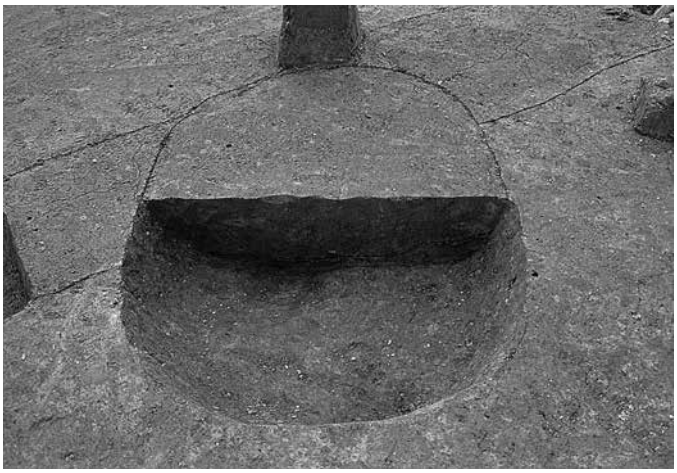


SK969　断面（西から）

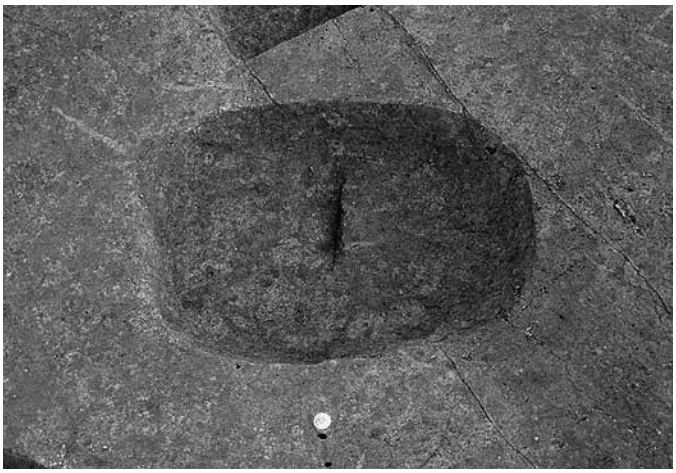
SK969　完掘（西から）

SK991　断面（南から）

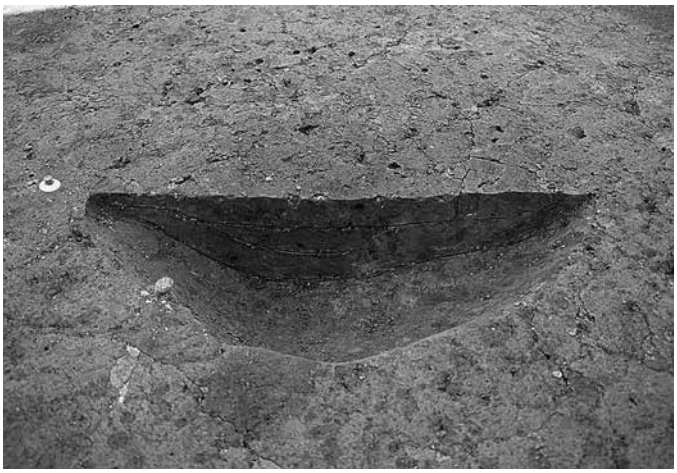
SK991　完掘（南から）



SK997　断面（東から）

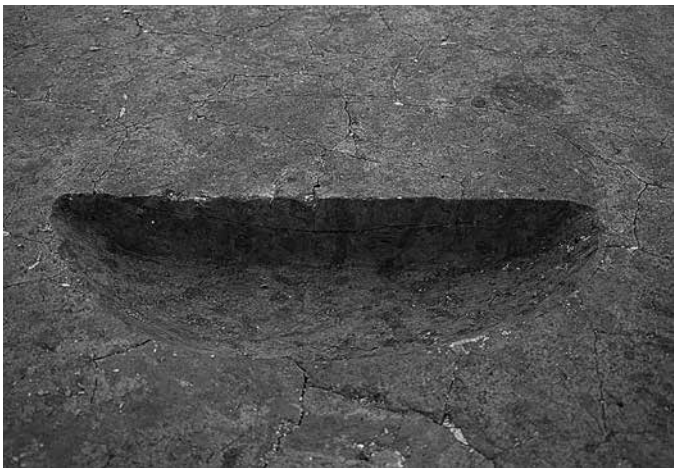


SK997　完掘（北から）



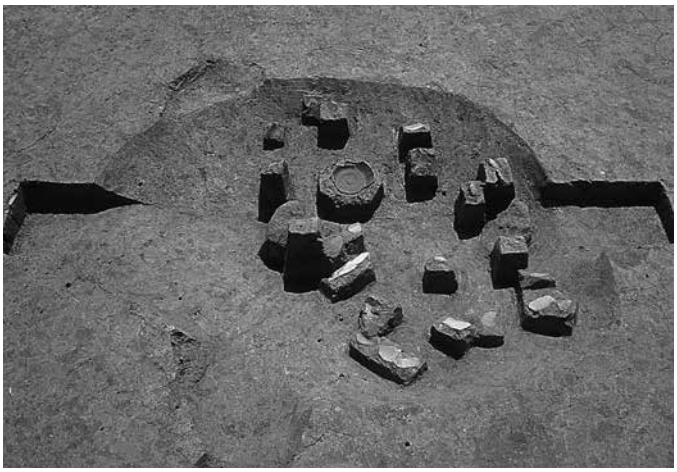
SK1054　断面（南から）

SK1054　完掘（南から）



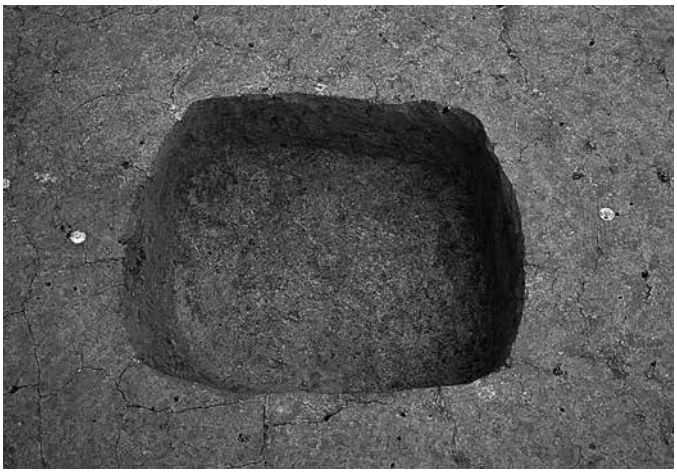
SK1055　断面（南東から）

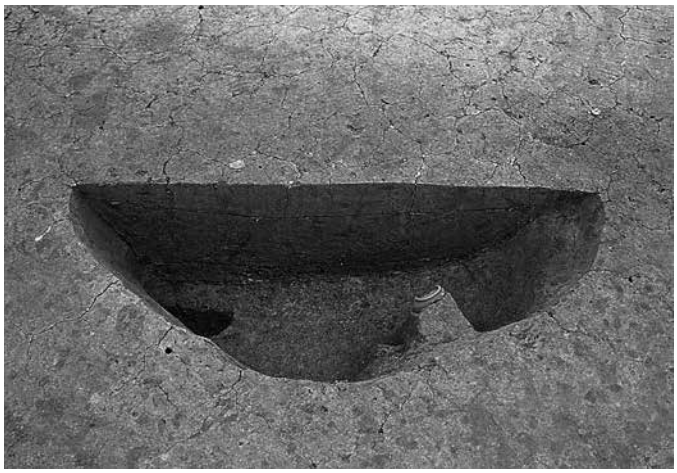
SK1055　完掘（南東から）



SK1056　遺物出土状況（北から）

SK1057　断面（西から）

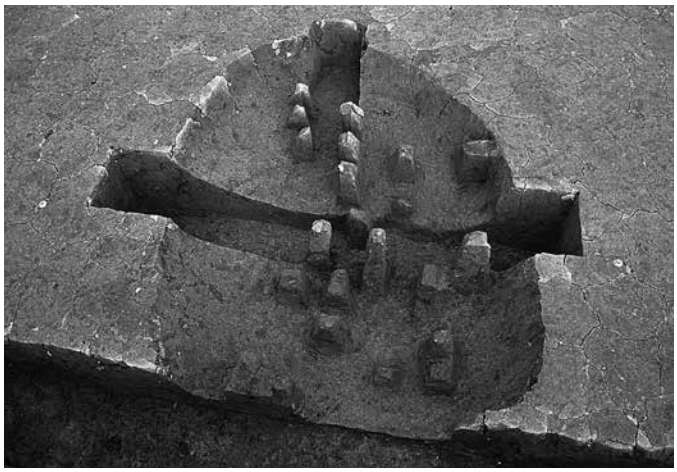

SK1057　完掘（西から）

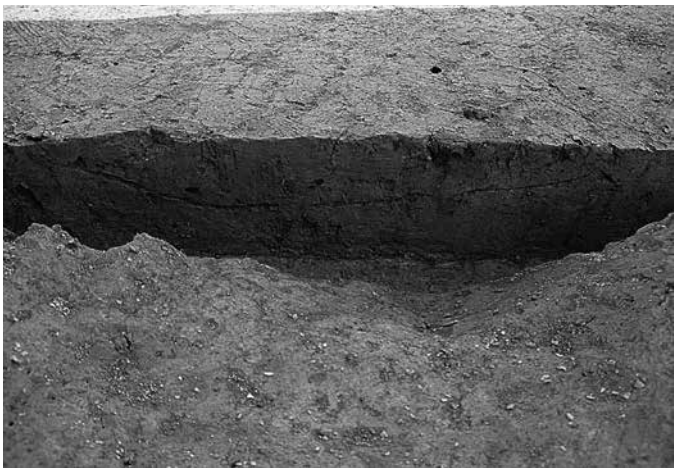

SK1058　断面（西から）

SK1058　遺物出土状況（北から）

SK1174　完掘（南東から）

SK1177　断面（東から）

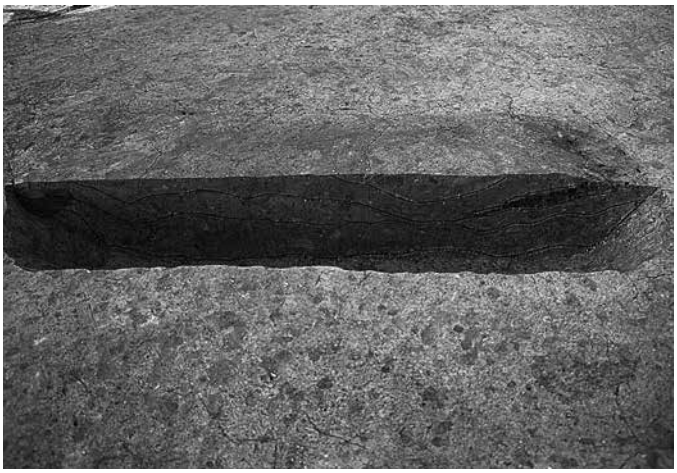

SK1177　遺物出土状況（西から）


SK1179　断面（南西から）

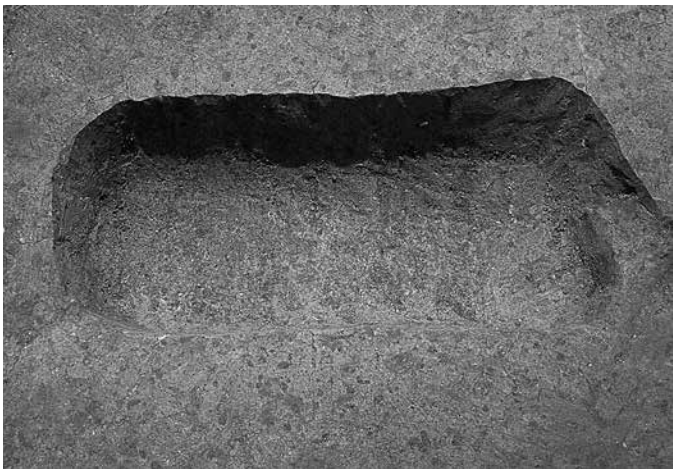
SK1179　遺物出土状況（北東から）

SK1180　完掘（東から）

SK1210　完掘（東から）



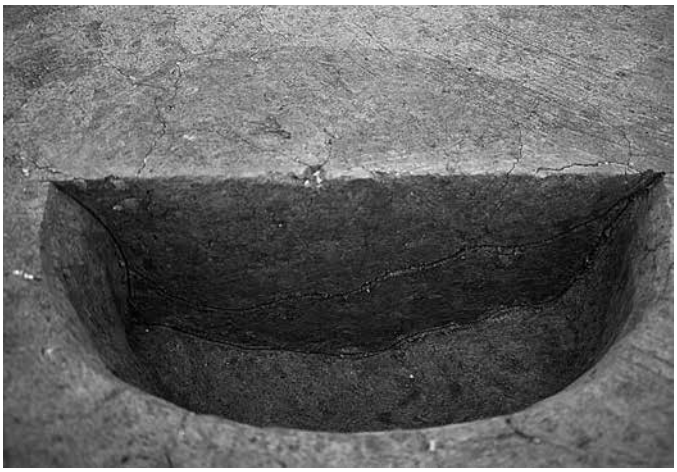
SK1212　断面（南から）



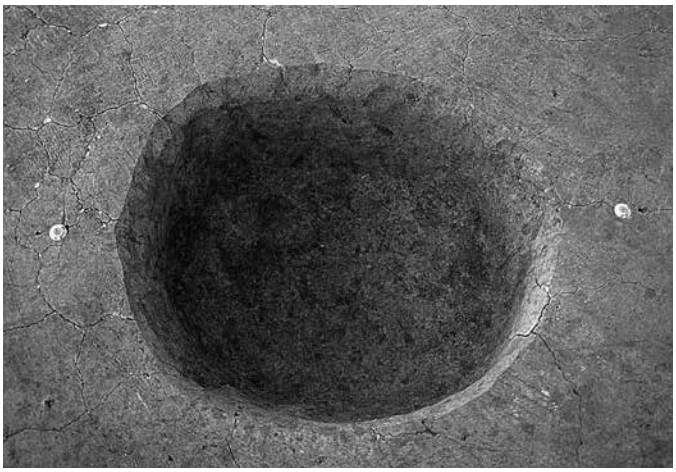
SK1212　完掘（北から）

SK1213　断面（南から）

SK1213　遺物出土状況（南東から）

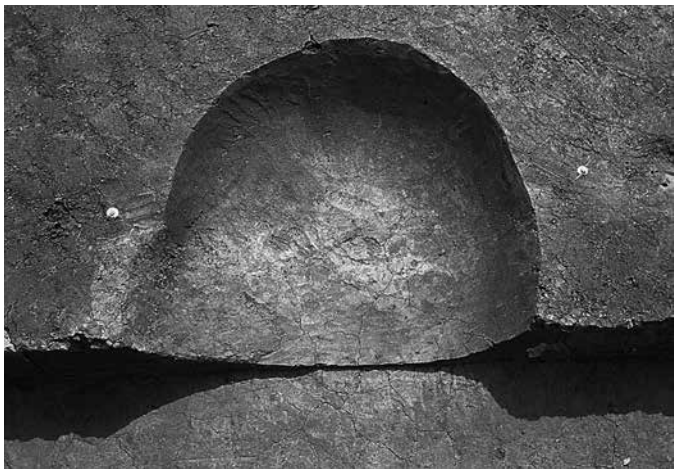


SK1225　断面（南から）



SK1225　完掘（南から）

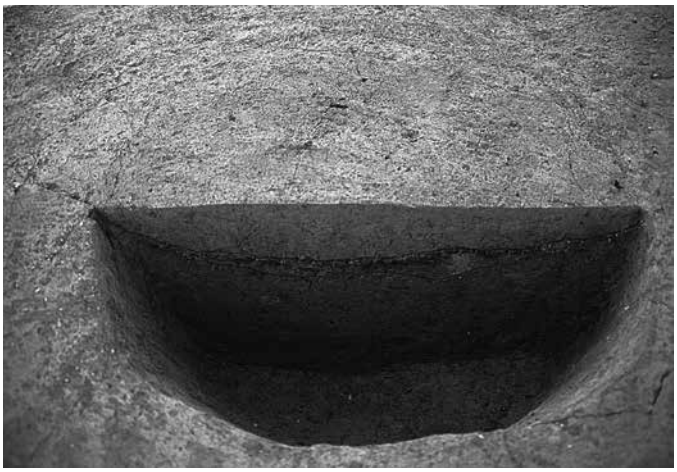
SK1255　断面（北から）



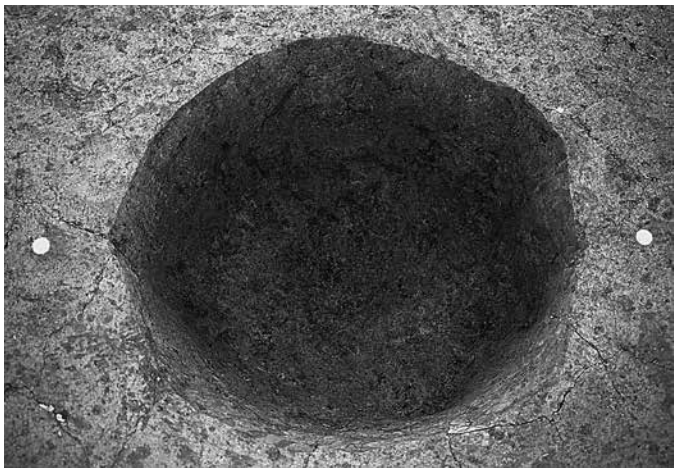
SK1255　完掘（北から）

SK1414　完掘（北東から）

SK1414　炭化物層断面（北から）



SK1621　断面（北から）

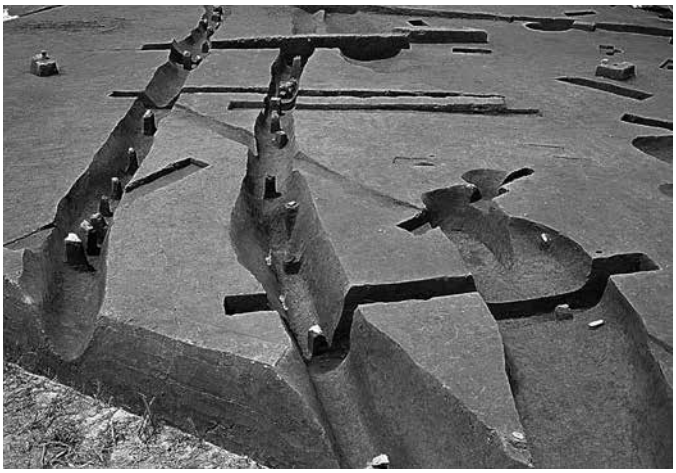


SK1621　完掘（北から）

SX1555　断面（西から）

SX1555　完掘（西から）

SD22・SD27　断面（北西から、中央SD22）



SD22・SD23・SD27　遺物出土状況（東から、左からSD23・22・27）

SD23　遺物出土状況（西から）

SD24　断面（西から、図版５上段　3-3'）

SD24・SD25　断面（南西から、左SD24）

SD24・SD25　完掘（南西から）

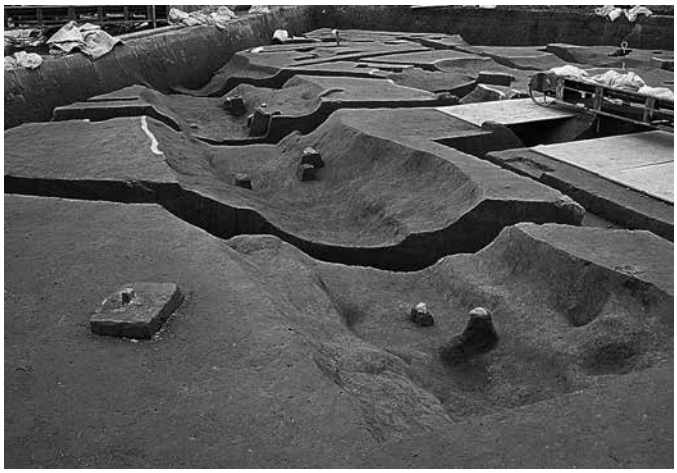
SD43　断面（南西から、図版11　5-5'）

SD43　完掘（北西から）

SD50　断面（北東から、図版15　6-6'）

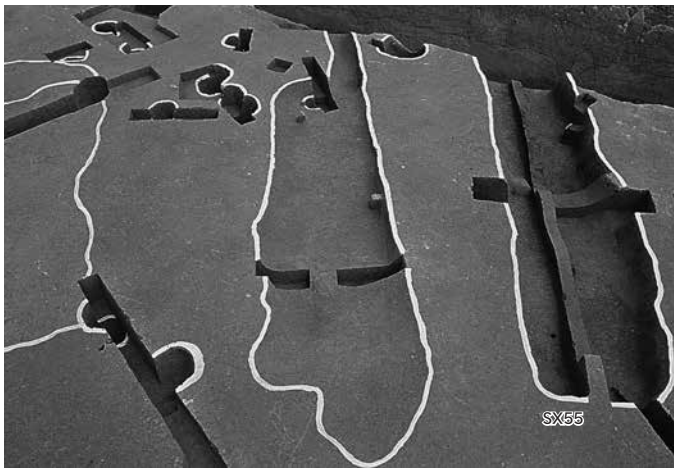
SD50　断面（東から、図版11　10-10'）

SD50　断面（東から、図版11　11-11'）



SD50　遺物出土状況（東から）

SD77　断面（西から、図版３　5-5'）



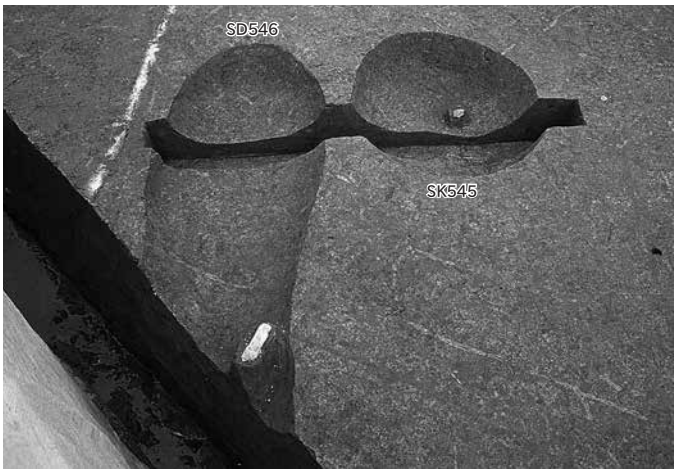
SD77　完掘（西から、右SX55）

SD148　断面（北東から、図版13　7-7'）

SD148　遺物出土状況（北東から）

SD148・580　完掘（南西から、手前SD148）

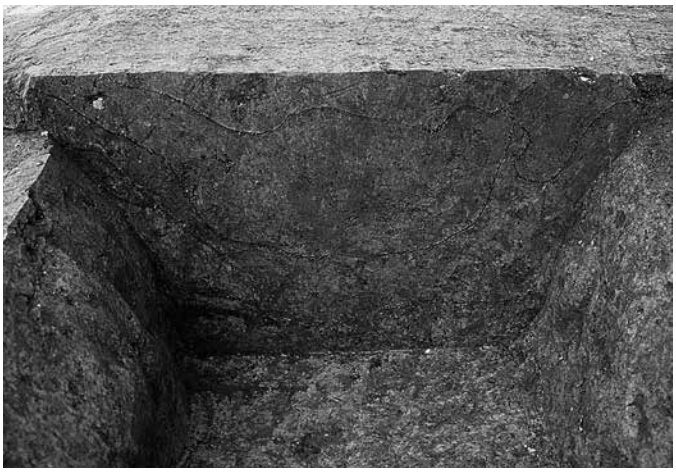
SD546　断面（南西から）



SD546　完掘（南西から、右SK545）

SD574　断面（南東から）

SD580　断面（南西から、図版17下段　5-5'）

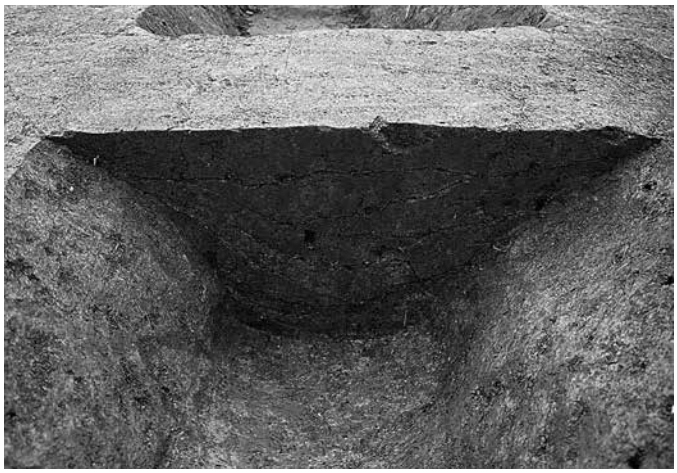


SD580　断面（東から、図版23下段　2-2'）

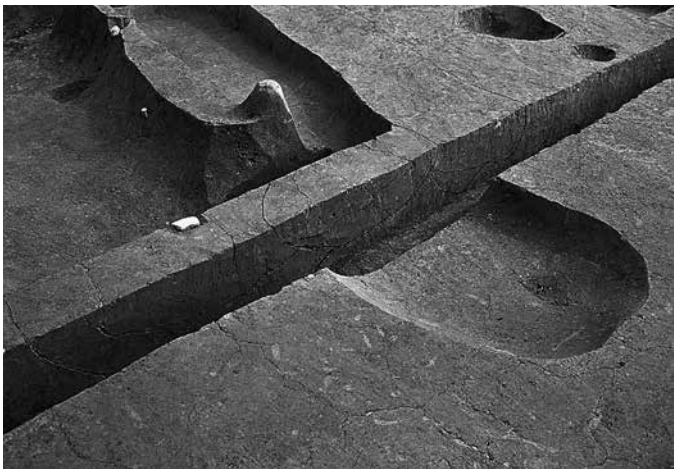
SD583　断面（南西から、図版９　9-9'）

SD583　断面（南西から、図版９　8-8'）

SD624　断面（南西から）



SD645　断面（東から）



SD793・795・798（北から、左から795・793・798、図版13　9-9'）

SD795　断面（北西から、図版13　10-10'）

SD796・SD797　断面（西から）

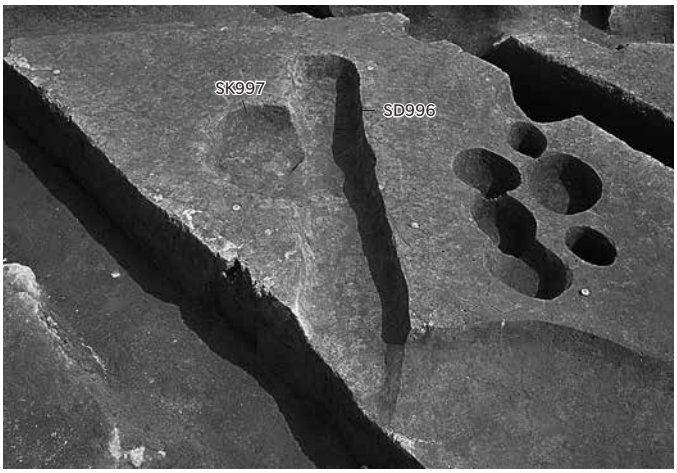
SD800（左）・SD801（右）　断面（西から）

SD800・SD801　断面（西から、左SD800）

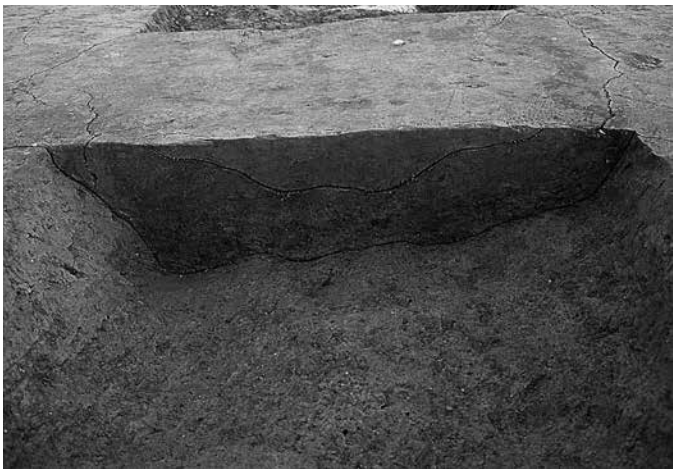
SD800（右）・SD801（左）　完掘（北東から）

SD962　断面（南西から）

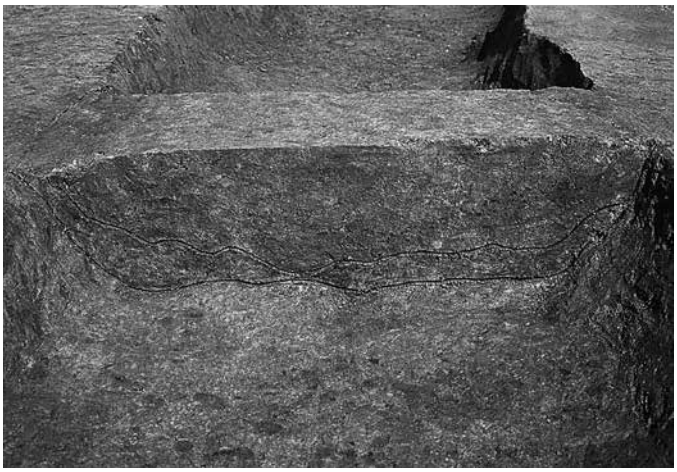
SD962　完掘（南東から）



SD996　完掘（北西から、左SK997）

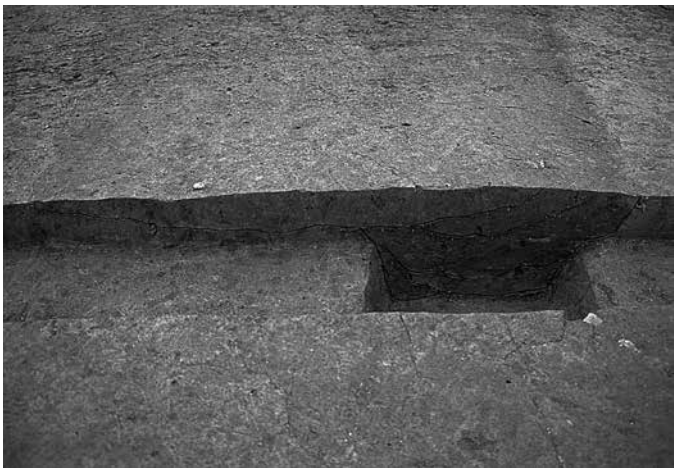


SD1031　断面（北西から、図版36下段　4-4'）

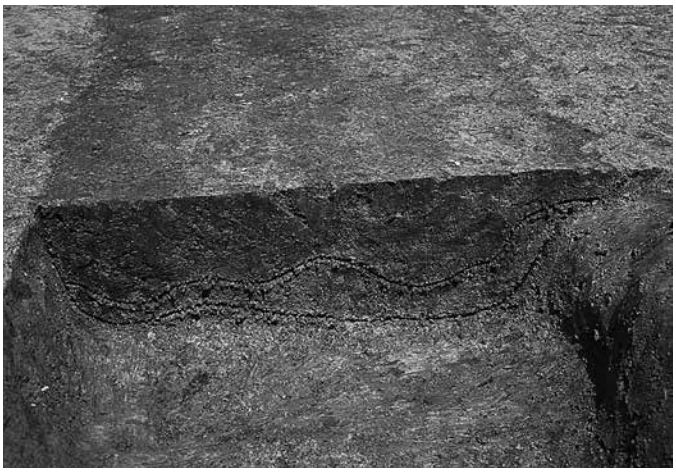


SD1031　断面（南西から、図版29　7-7'）

SD1031　完掘（北から、SD1032と重複）

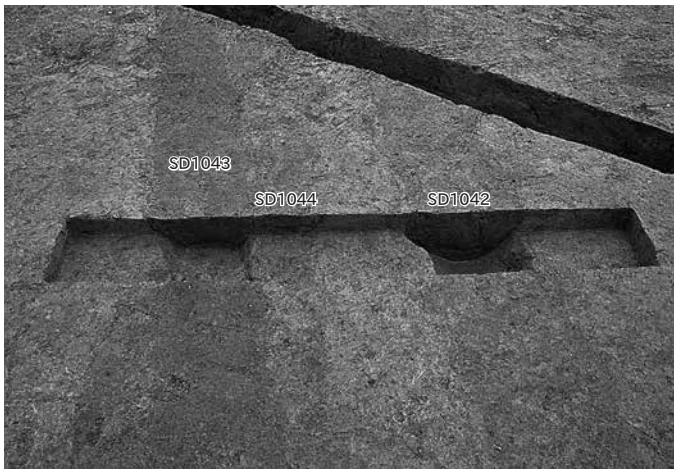


SD1031・SD1032　断面（北から、図版27　6-6'）

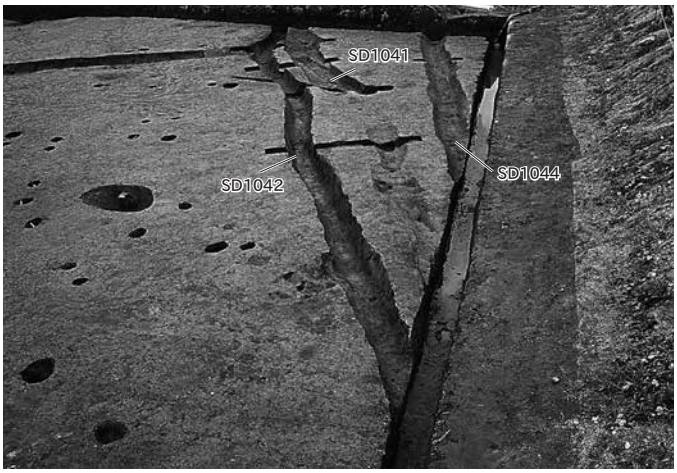


SD1032　断面（南から、図版29　8-8'）

SD1032　完掘（北から）

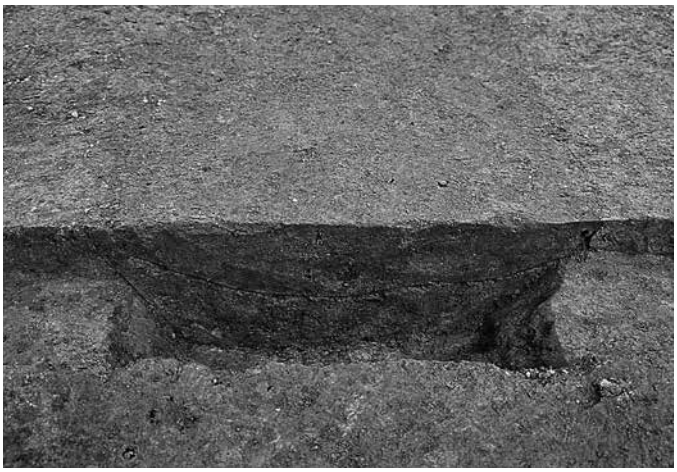


SD1041・SD1042・SD1043　断面（西から）



SD1042・SD1041・SD1044　完掘（東から）

SD1043　完掘（西から）

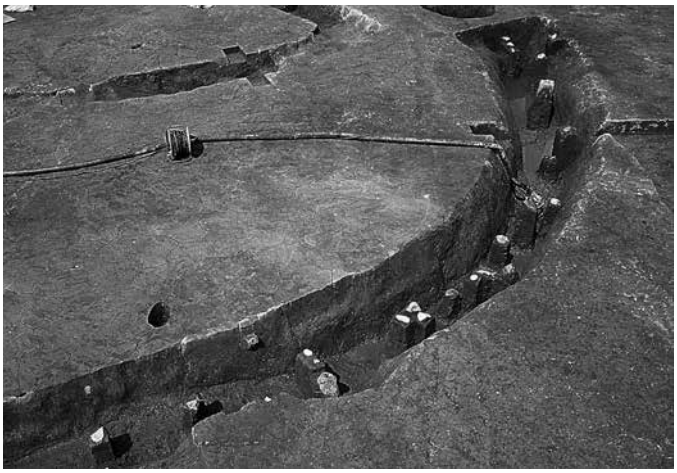


SD1044　断面（西から）

SD1044　完掘（西から）

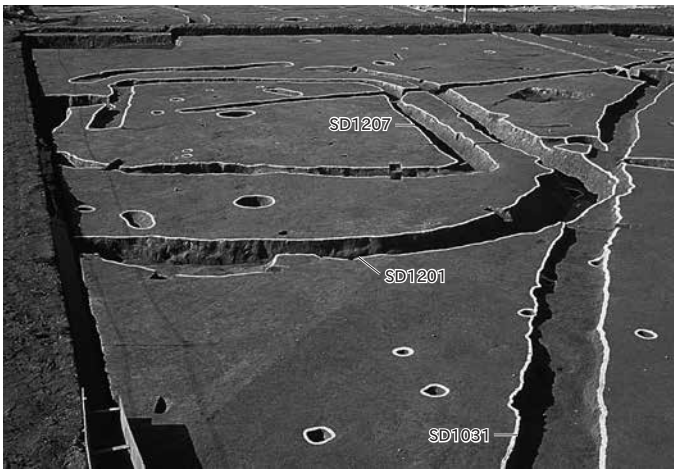
SD1201　断面（西から、図版29　10-10'）

SD1201　断面（南西から、図版36下段　5-5'）

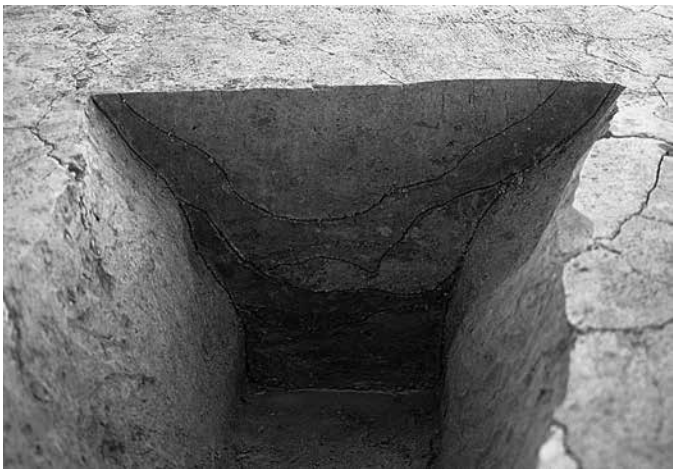


SD1201　遺物出土状況（東から）

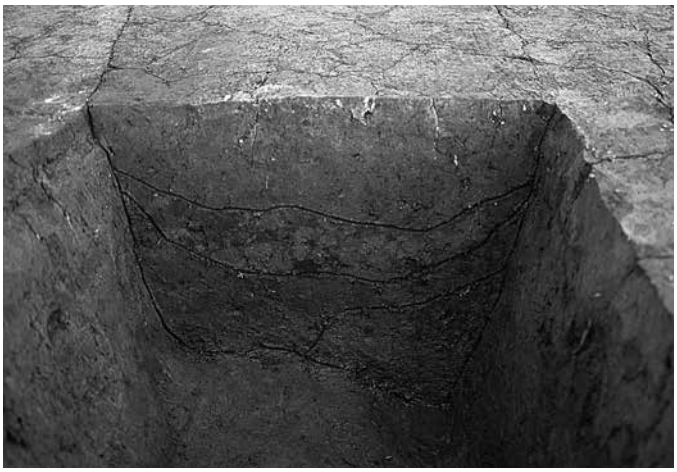
SD1201　（東側張り出し部分）完掘　（南東から）



SD1201　完掘（南東から、右SD1031）

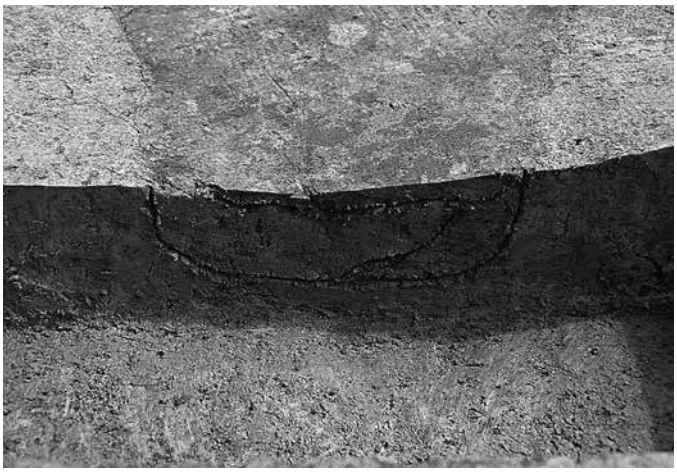


SD1207　断面（北から、図版31　9-9'）



SD1207　断面（西から、図版29　10-10'）

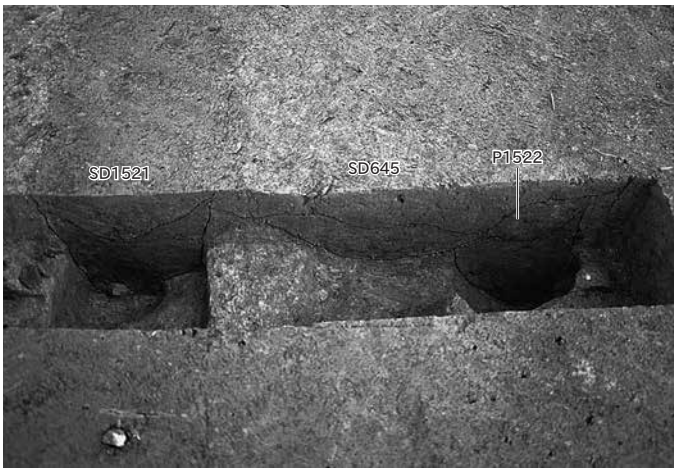
SD1207　断面（西から、図版31　11-11'）



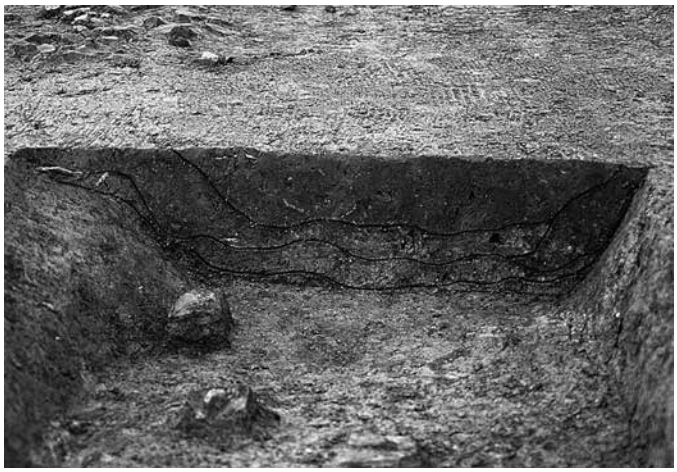
SD1207　断面（北西から、図版31　12-12'）

SD1224　断面（北から）

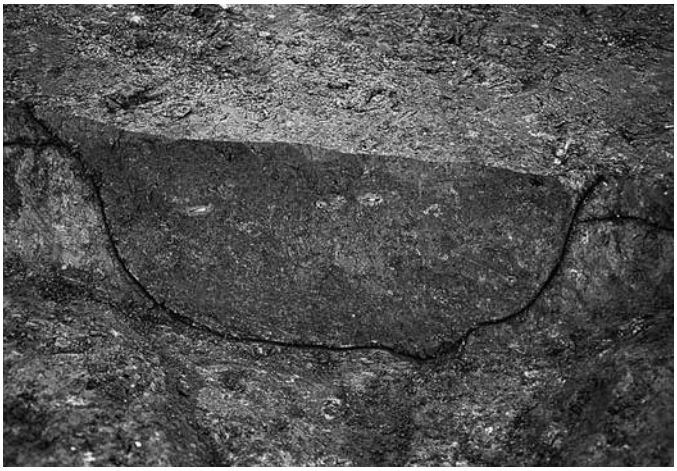
SD1201・SD1207・SD1224全景（上が北東、図版30）



SD1521・SD645・P1522　断面（西から）



SD1539　断面（西から）



SD1540　断面（北から）

SD1541　断面（南から）

SX55　断面（上半、南西から）

SX55　完掘（東から）

SX55　断面（下半、南西から）

SX55　掘り方完掘（東から）

SX1537　遺物出土状況（北から）

11F4・5グリッド　遺物集中範囲（北から）

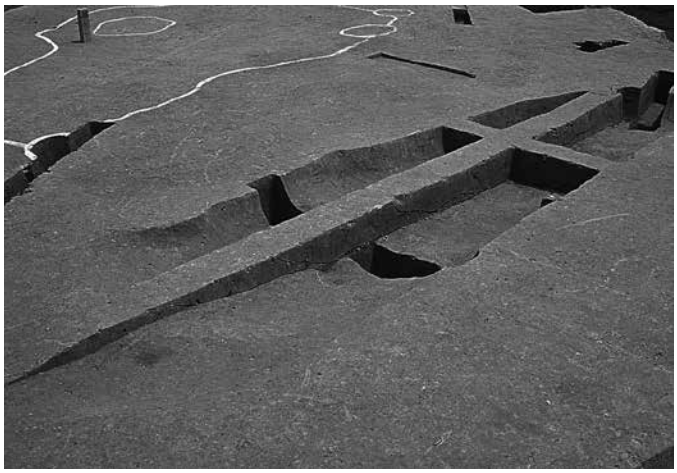
畝間状遺構　完掘（西から、15Eグリッド周辺）

畝間状遺構　完掘（南西から、15Fグリッド周辺）

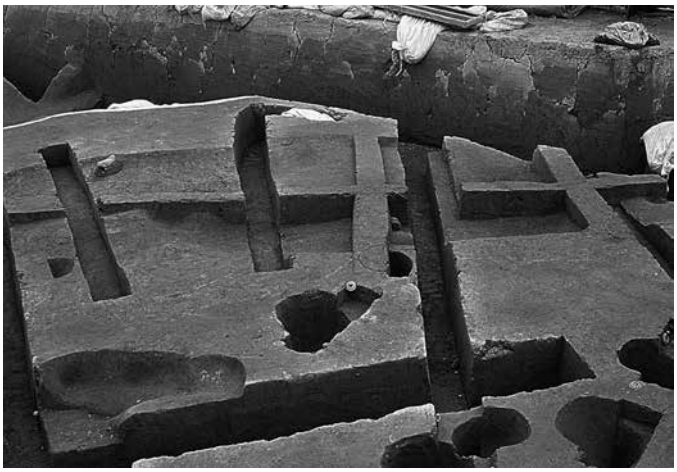
SX1543　断面（北西から）

SX1544　断面（西から）

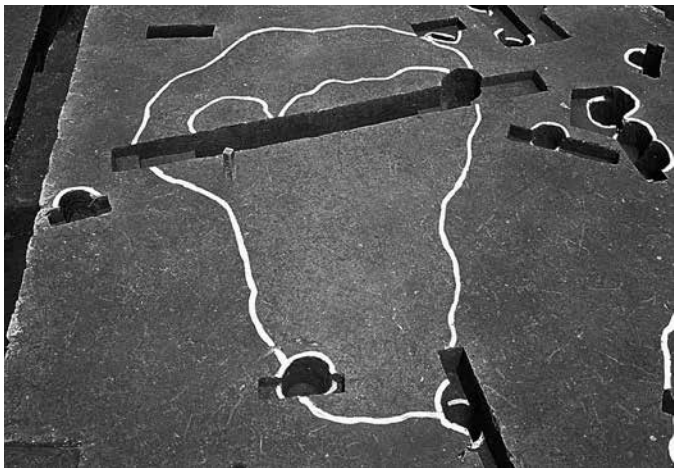
SX17　完掘（西から）



SX54　断面（南西から）



SX56　断面（北から）



SX85　完掘（南西から）

SX144　完掘（南から）

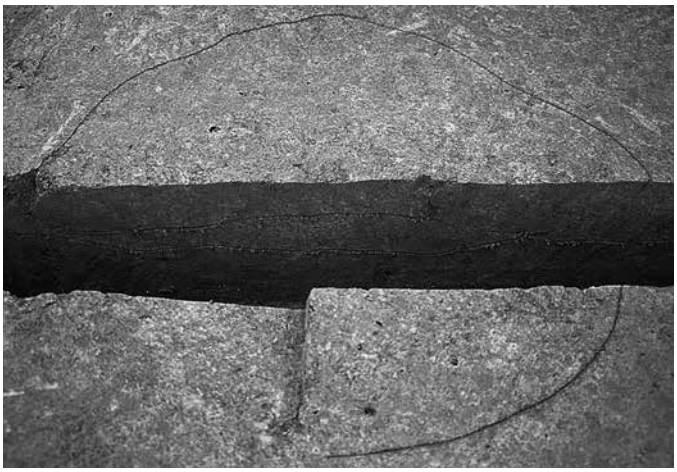
SX153　断面（南東から）

SX154　断面（南から）

SX154　骨片散布状況（南東から）

SX154　完掘（南東から）

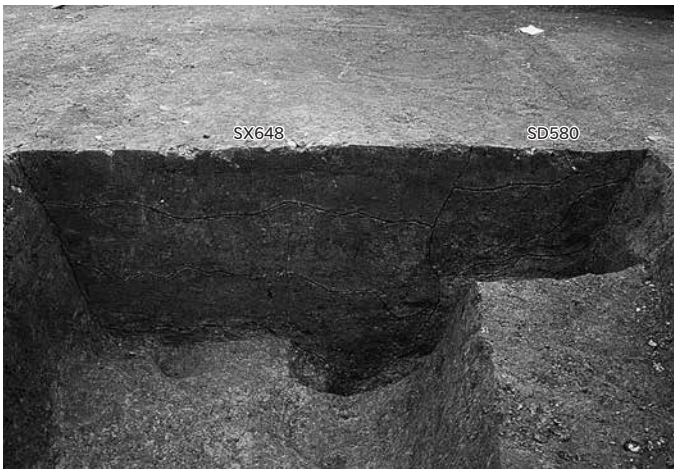
SX573　遺物出土状況（南から）


SX577　断面（南から）

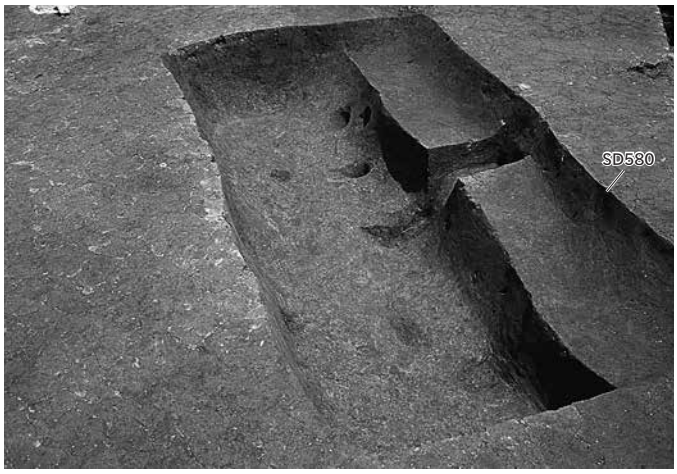
SX610　完掘（南東から）

SX647　断面（南西から）

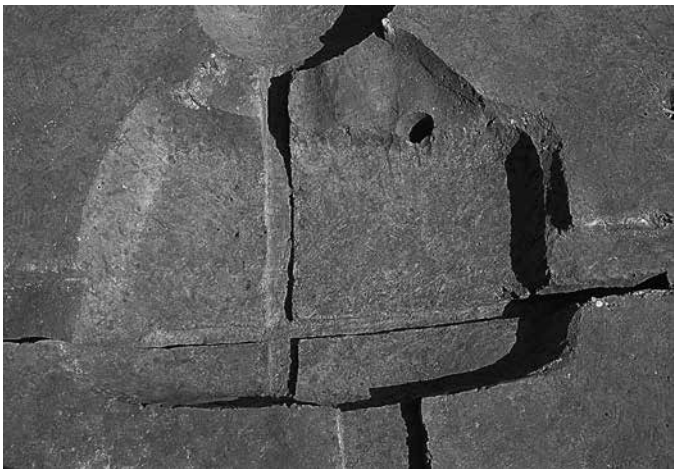
SX647　完掘（南から）



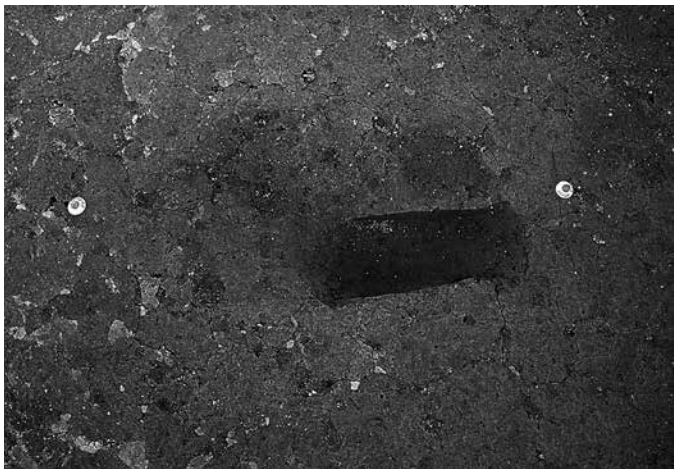
SX648・SD580　断面（北西から、左SX648）



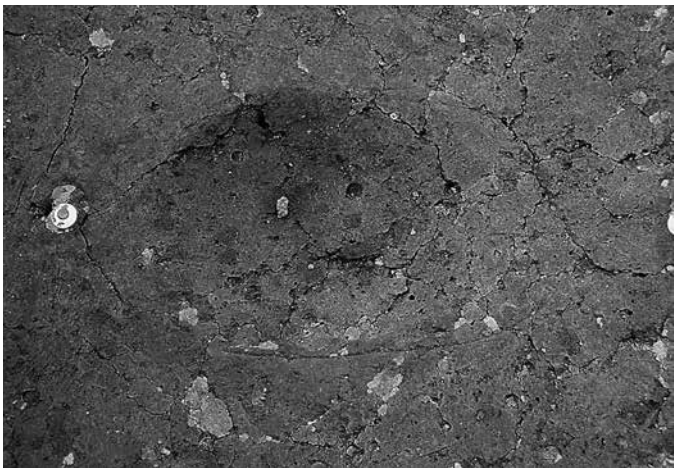
SX648　完掘（西から、右SD580）



SX1178　完掘（南から）



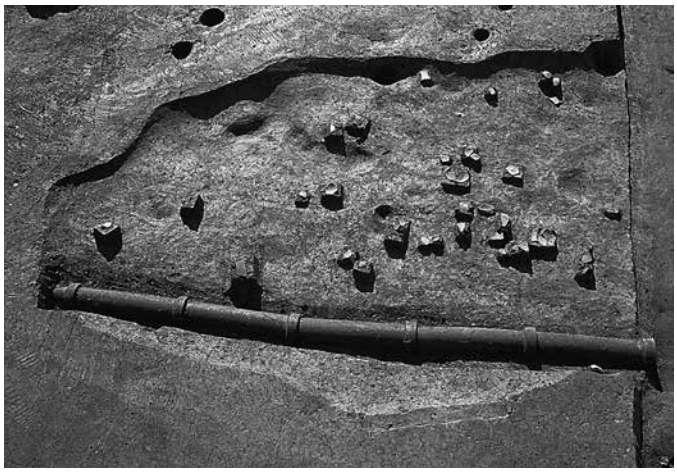
SX1208　完掘（南西から）



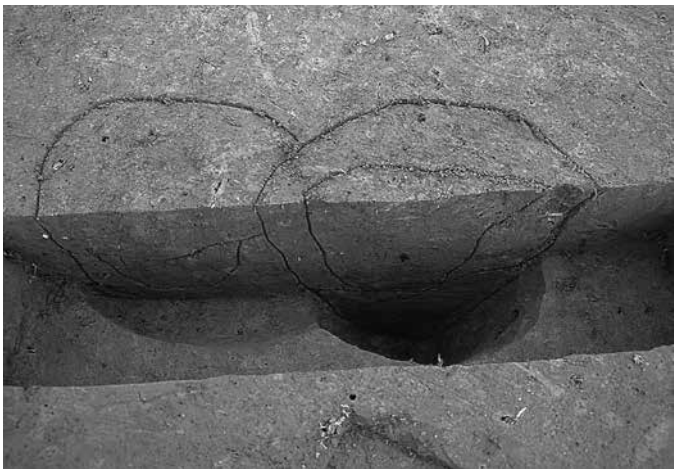
SX1209　完掘（南東から）

SX1623　断面（東から）

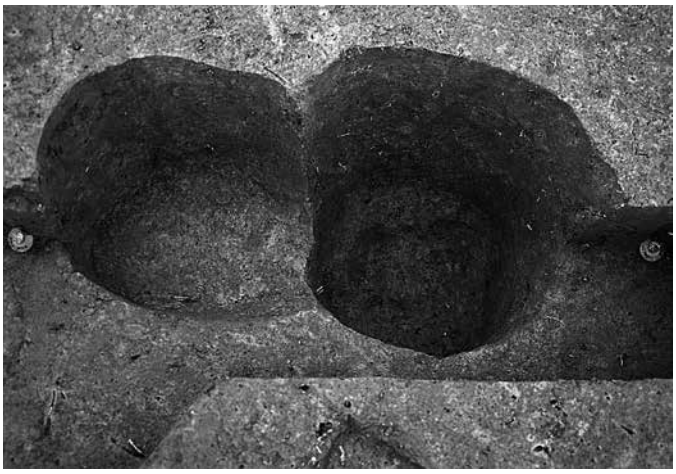
SX1623　完掘（北から）



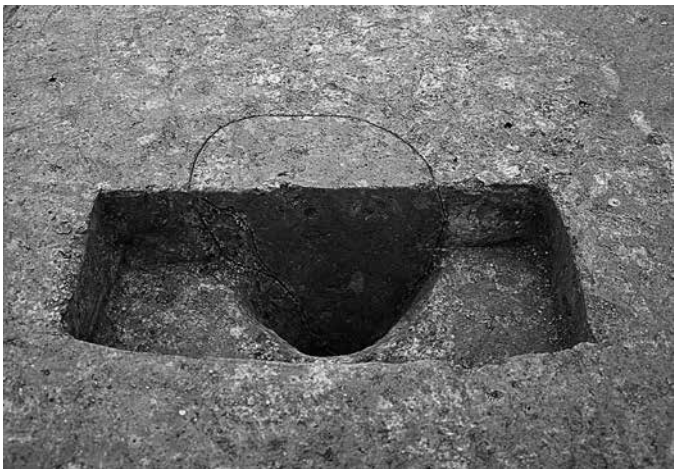
SX1624　遺物出土状況（北から）



P73・P74　断面（北から、左P73・P74、図版3）



P73・P74　完掘（北から、図版2）

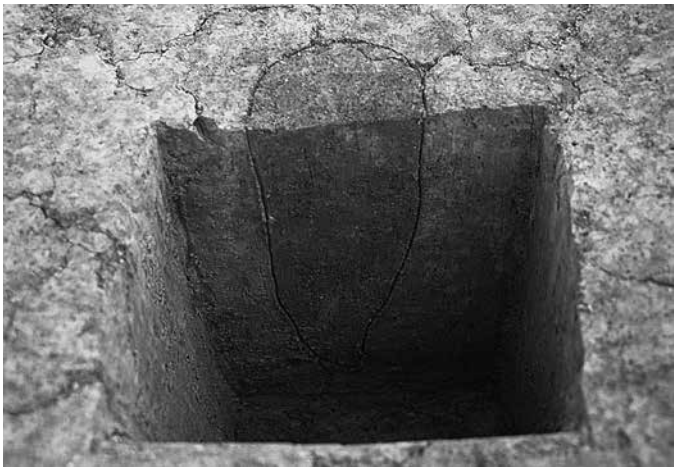


P105　断面（南西から、図版17）

P105　完掘（南西から、図版14）

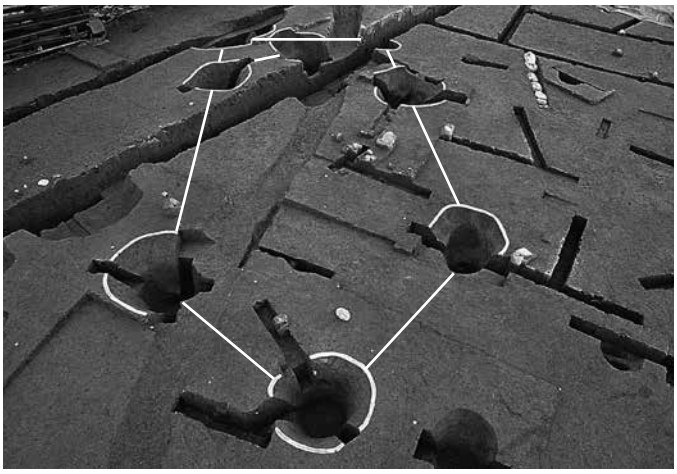
P117　断面（南から、図版2）

P485　断面（東から、図版12）



P1337　断面（北西から、図版40）

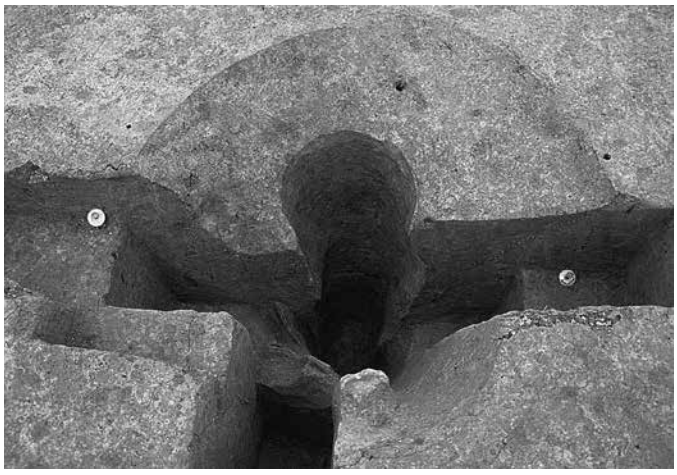
P1430　断面（西から、図版40）



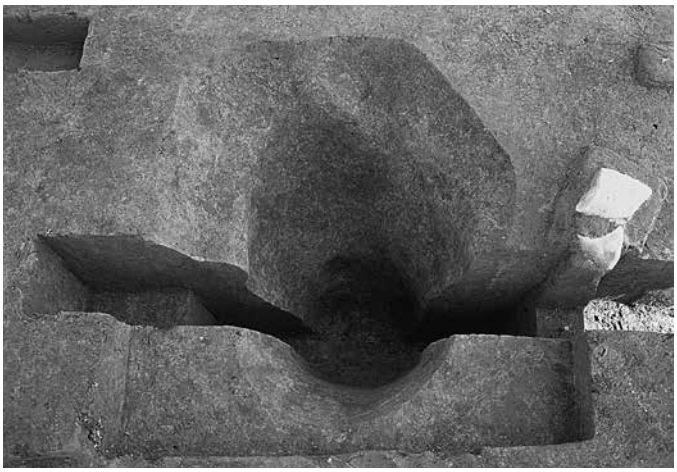
SB1607　完掘（南西から）

SB1607-P1241　遺物出土状況（南東から）

SB1607-P1390　断面（西から）

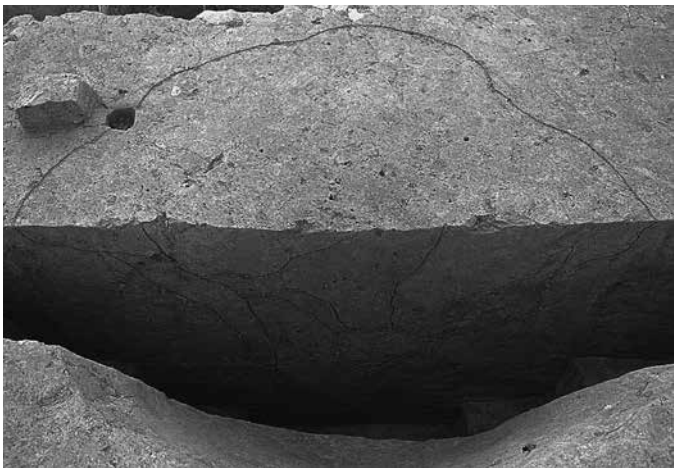


SB1607-P1390　柱痕部完掘（西から）



SB1607-P1391　完掘（西から）

SB1607-P1392　遺物出土状況（西から）



SB1607-P1506 断面（北から）

SB1607-P1506　完掘（北から）

SB1607-P1507　完掘（南東から）

SB1607-SX1637　完掘（西から）

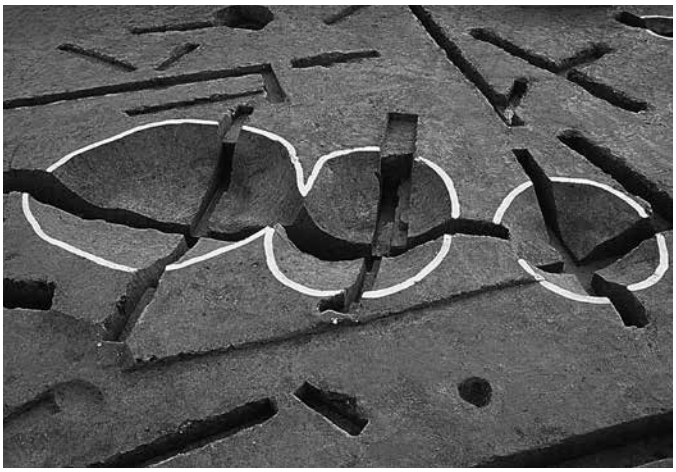
SK1040　断面（南東から）

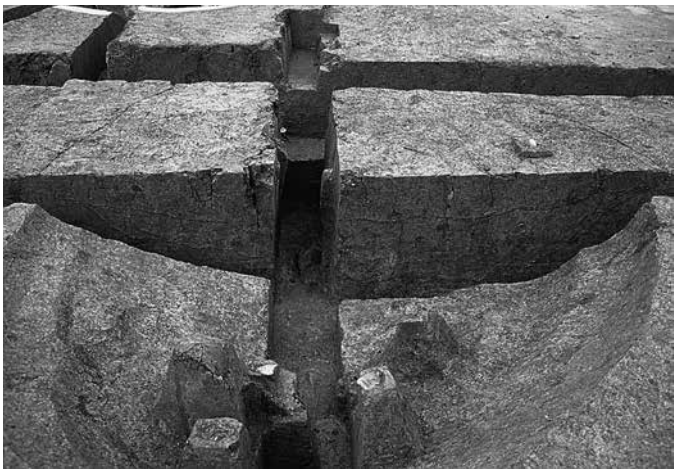
SK1040　完掘（南東から）

SK1170　断面（南西から）

SK1165・SK1170　遺物出土状況（南東から）

SK1450　断面（西から）


SK1170・SK1165・SK1450　完掘（北から）



SK1166　断面（南から）

SK1166　完掘（西から）

SK1176　完掘（北から）

SK1214　完掘（南西から）

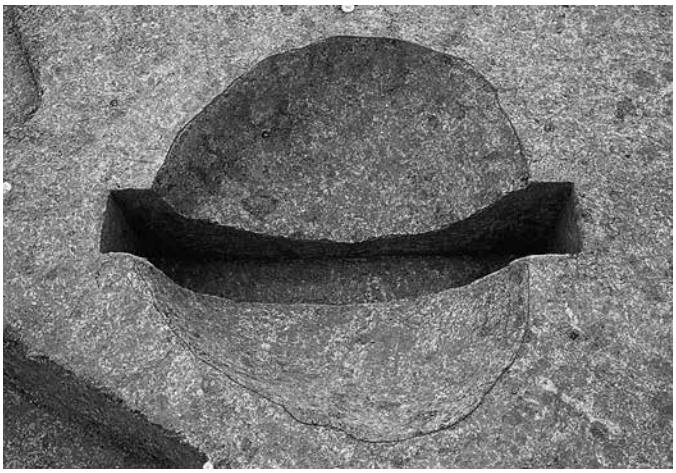
SK1227　遺物出土状況（東から）

SK1227　完掘（南から）

SK1289　断面（北から）

SK1289　完掘（北から）

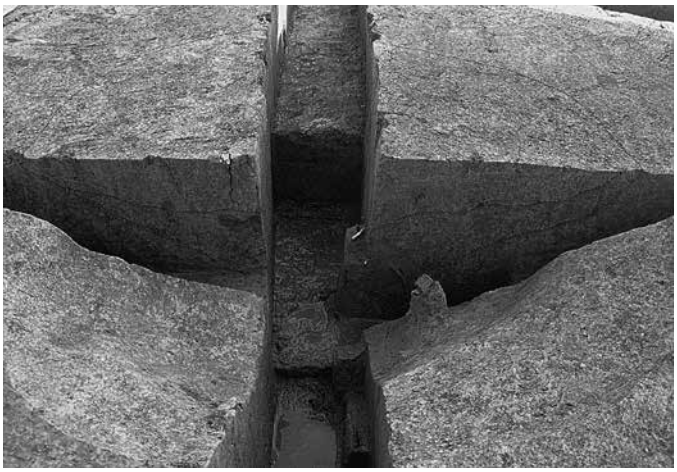
SK1350　断面（東から）



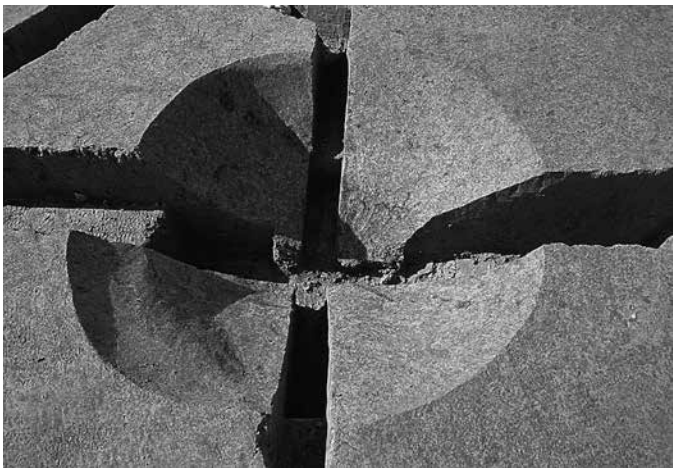
SK1350　完掘（東から）

SK1394　断面（西から）

SK1394　完掘（西から）



SK1449　断面（北から）



SK1449　完掘（東から）

SK1502　断面（南から）

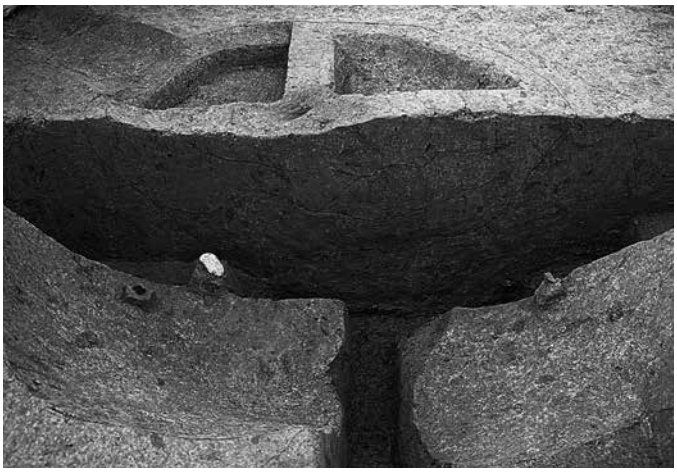
SK1502　完掘（南から）

SK1523　断面（東から）

SK1523　完掘（南西から）

SK1536　断面（南から）

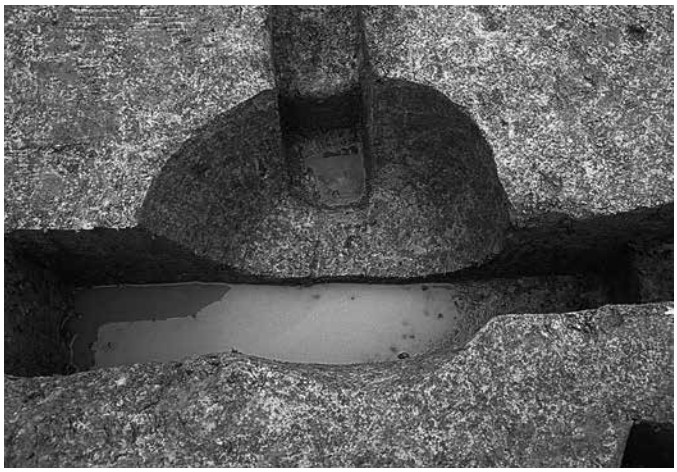
SK1536　遺物出土状況（南から）



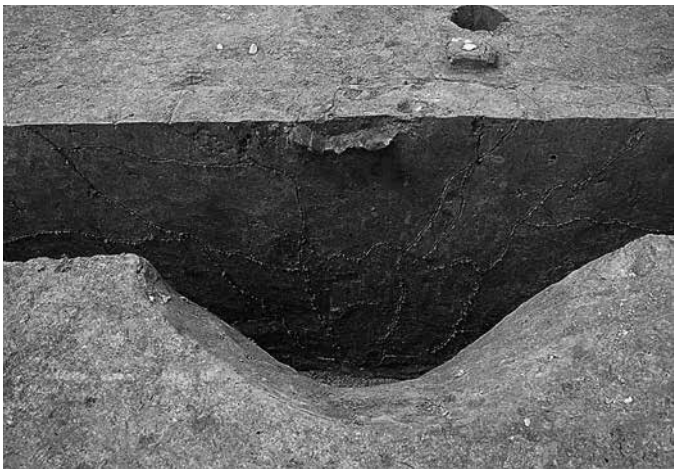
SK1611　断面（東から）

SK1611　完掘（南から）

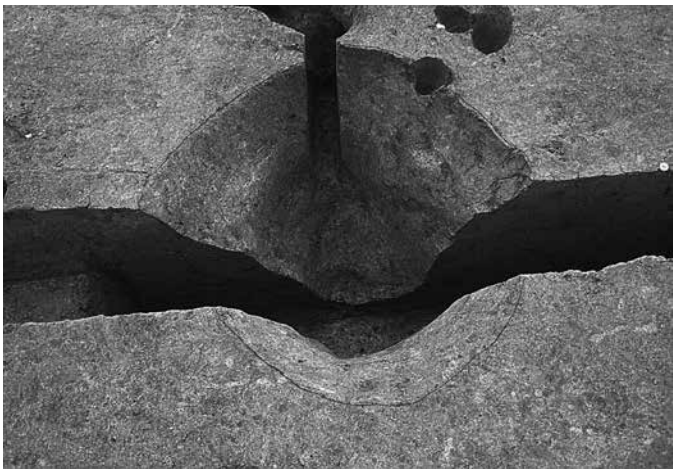
SK1640　断面（北東から）



SK1640　完掘（北東から）

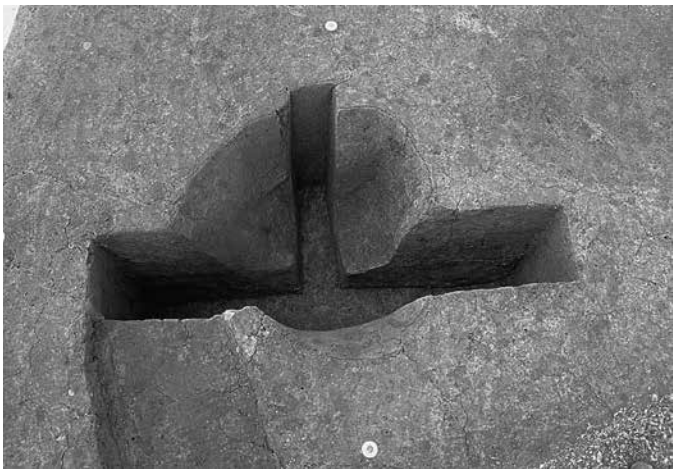


P1024　断面（東から）

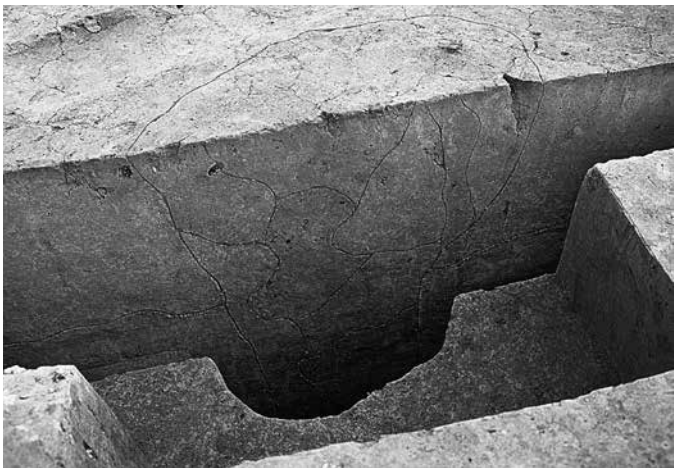


P1024　完掘（東から）

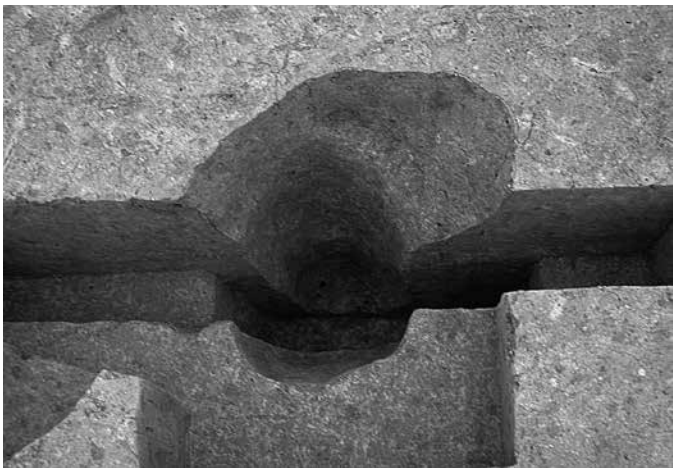
P1352　完掘（南から）



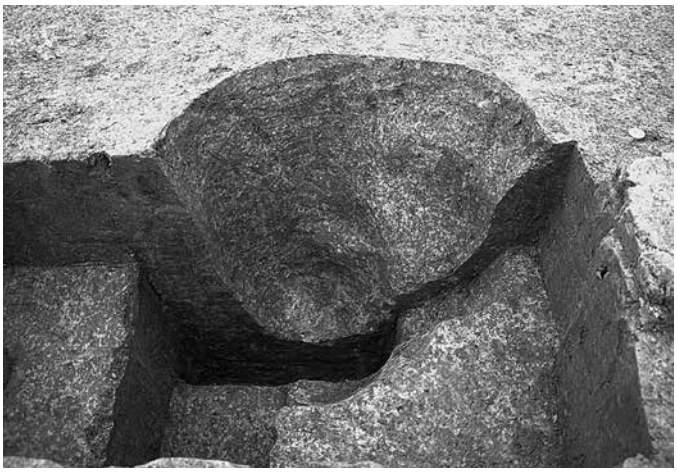
P1413　完掘（東から）



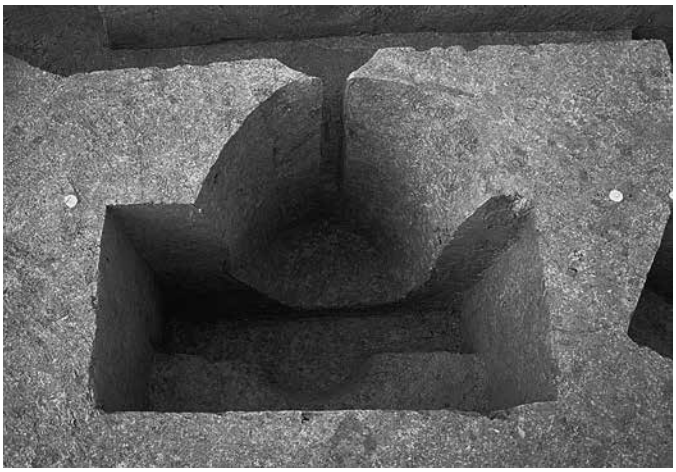
P1428　断面（北から）



P1428　完掘（北から）



P1493　完掘（北東から）



P1517　完掘（南から）

SH1167　検出状況（北西から）

SH1167　断面（北西から）

7F6 グリッド　遺物出土状況（南西から）

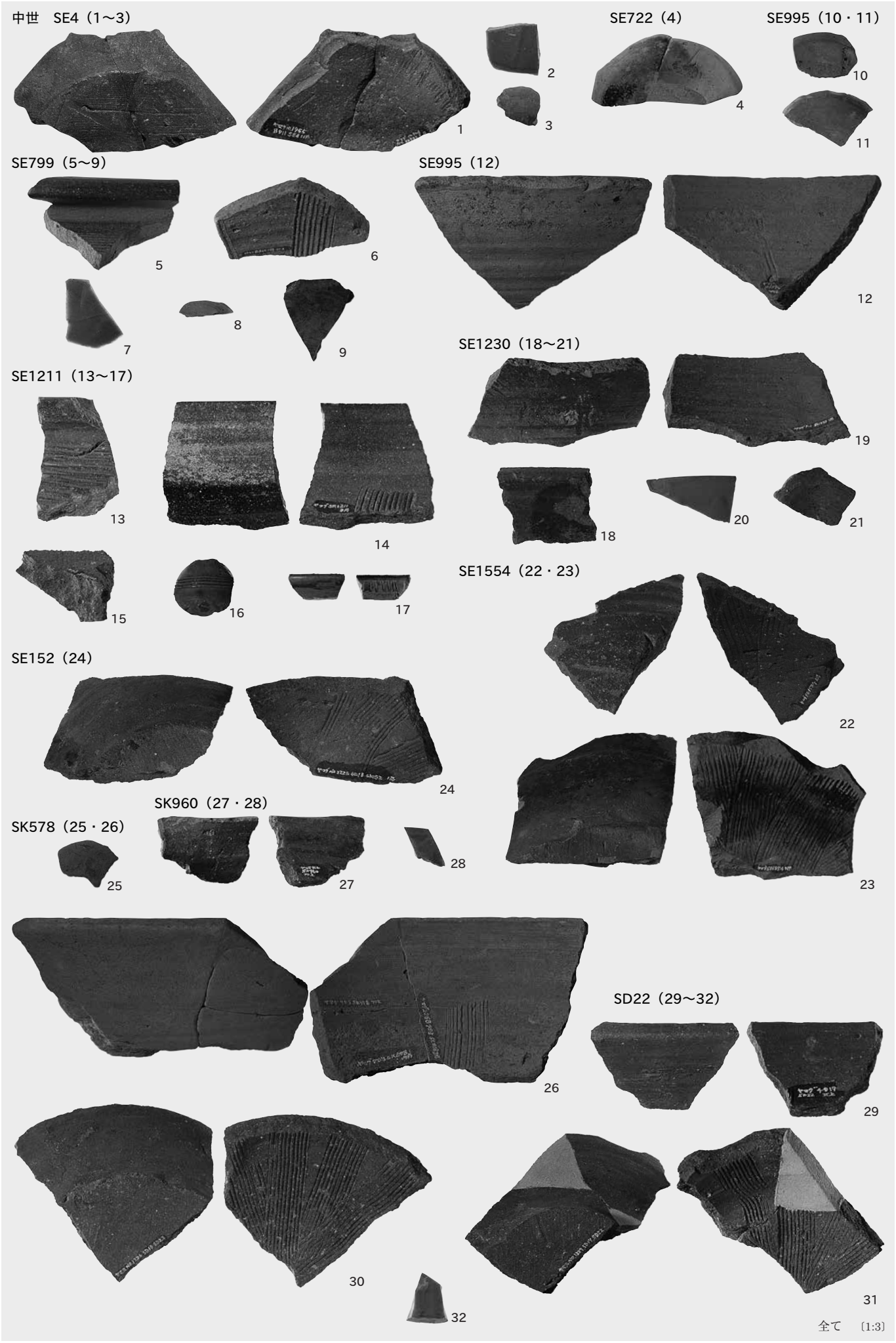
9E21 グリッド（SX1397）　遺物出土状況（南から）

9E6 グリッド　遺物出土状況（北から）

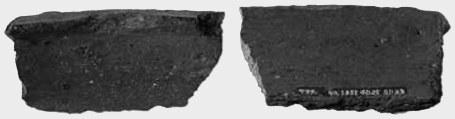
7D23・24、7E3・4 グリッド　木質遺物出土状況（西から）

斜面部（手前）と遺構群（右手奥）（8C25 グリッド付近から南東方向を望む）

斜面部から遺構群を望む（7E9 グリッド付近から東方向を望む）


中世　SE4（1～3）
SE722（4）
SE995（10・11）
SE799（5～9）
SE995（12）
SE1230（18～21）
SE1211（13～17）
SE1554（22・23）
SE152（24）
SK960（27・28）
SK578（25・26）
SD22（29～32）
全て　〔1:3〕

SD22（33）



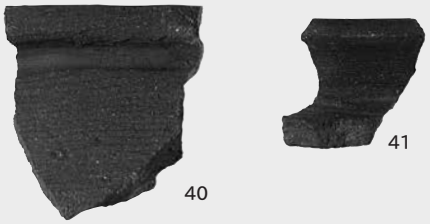
33

SD43（34～36）

34　35　36

SD50（37～45）

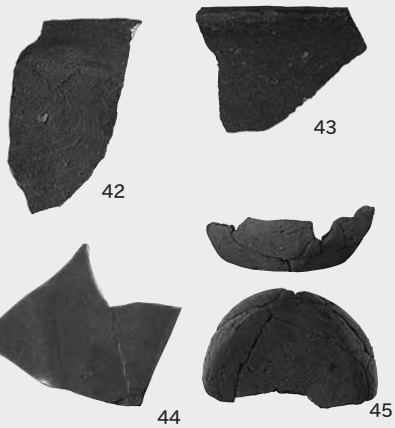
37　38　39



40　41

SD77（46）

46



42　43　44　45

SD794（47）

47

SD795（48）

48

SD800（49）

49

SD1201（50）

50

SD1224（51）

51

SX54（52）

52

SX56（53）

53

SX1231（54～57）

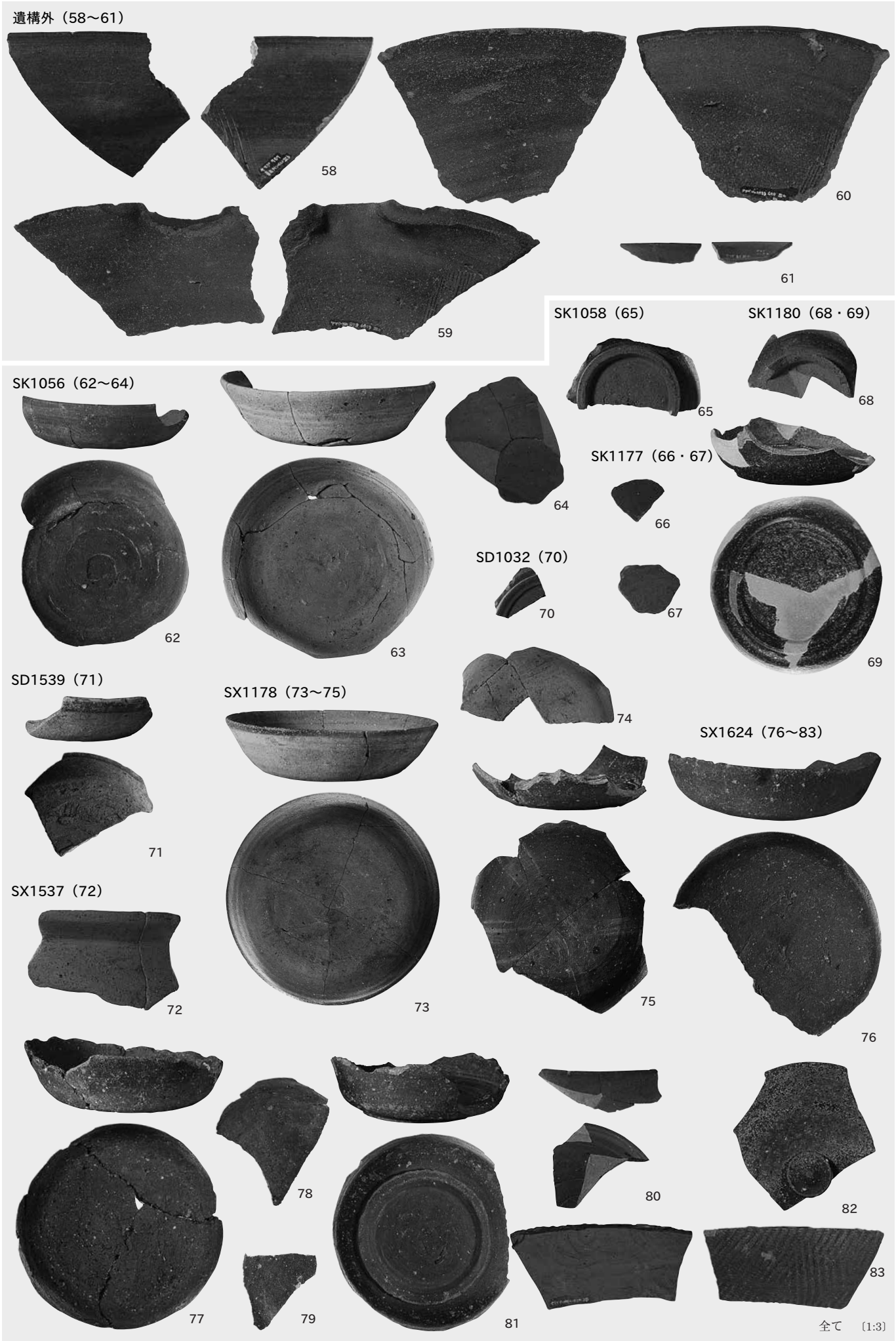
54

55

56

57

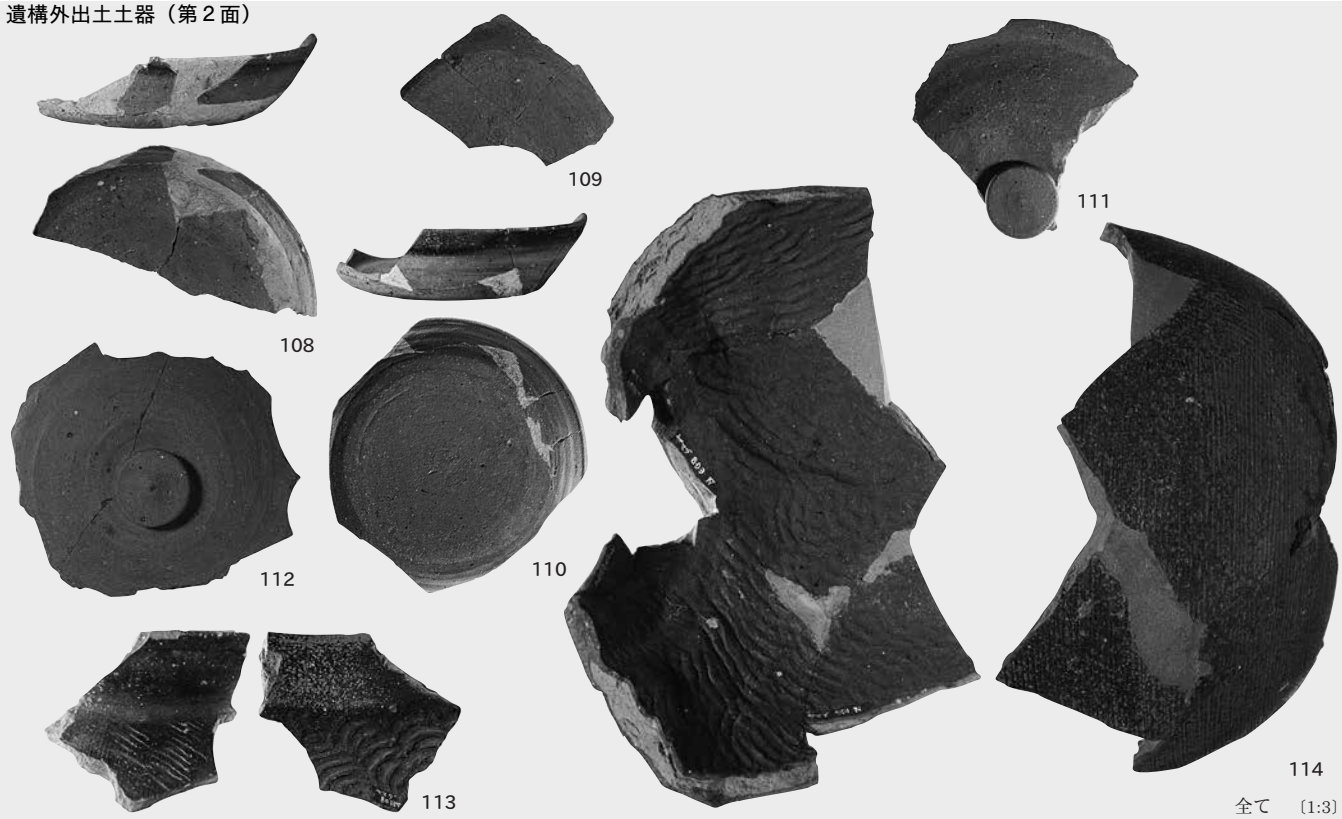
全て　〔1:3〕


遺構外（58～61）
58
60
61
59
SK1058（65）
SK1180（68・69）
65
68
SK1056（62～64）
64
SK1177（66・67）
66
62
63
SD1032（70）
70
67
69
SD1539（71）
SX1178（73～75）
74
SX1624（76～83）
71
SX1537（72）
72
73
75
76
78
80
82
77
79
81
83

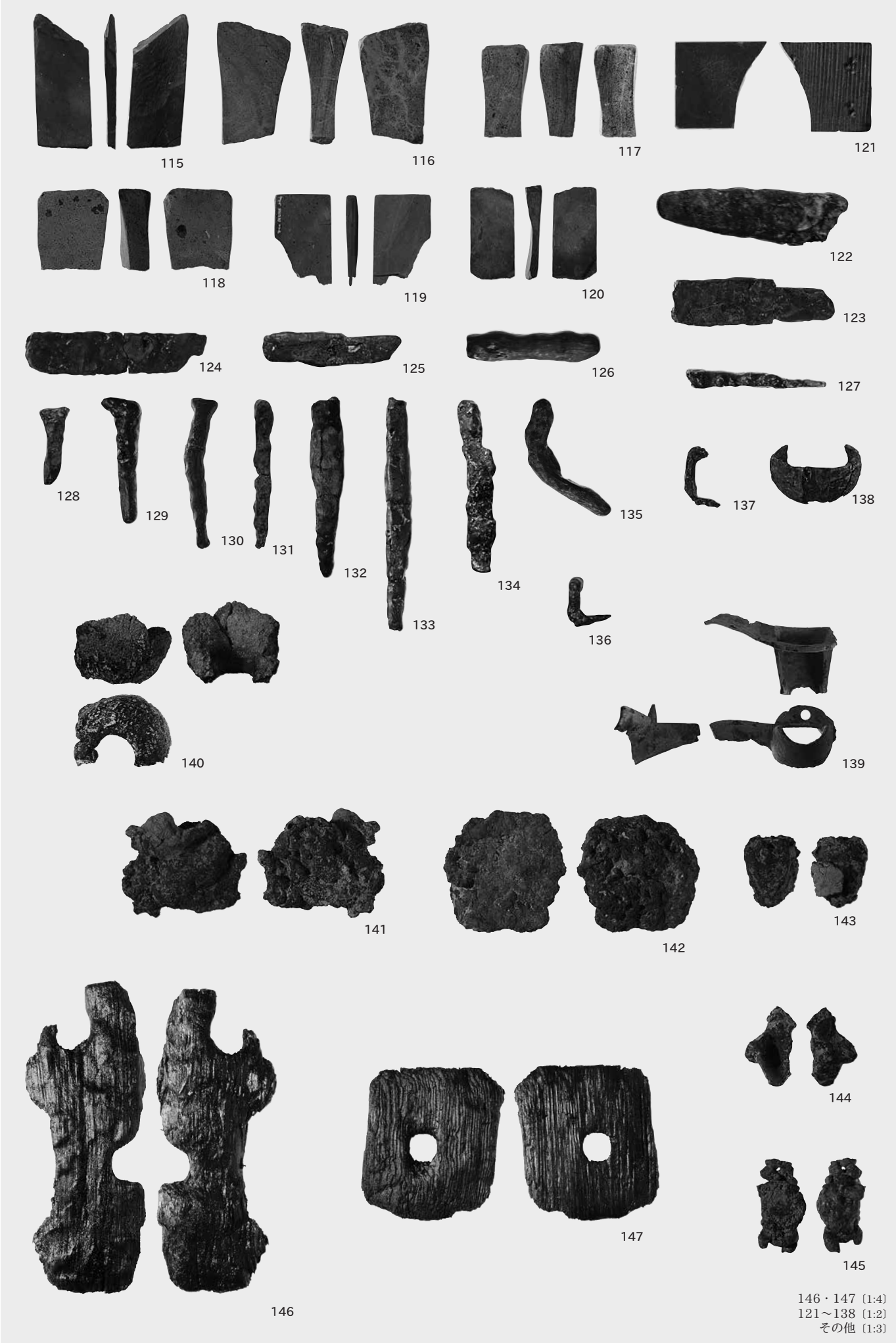
全て　〔1:3〕

遺構外出土土器（第 1 面）

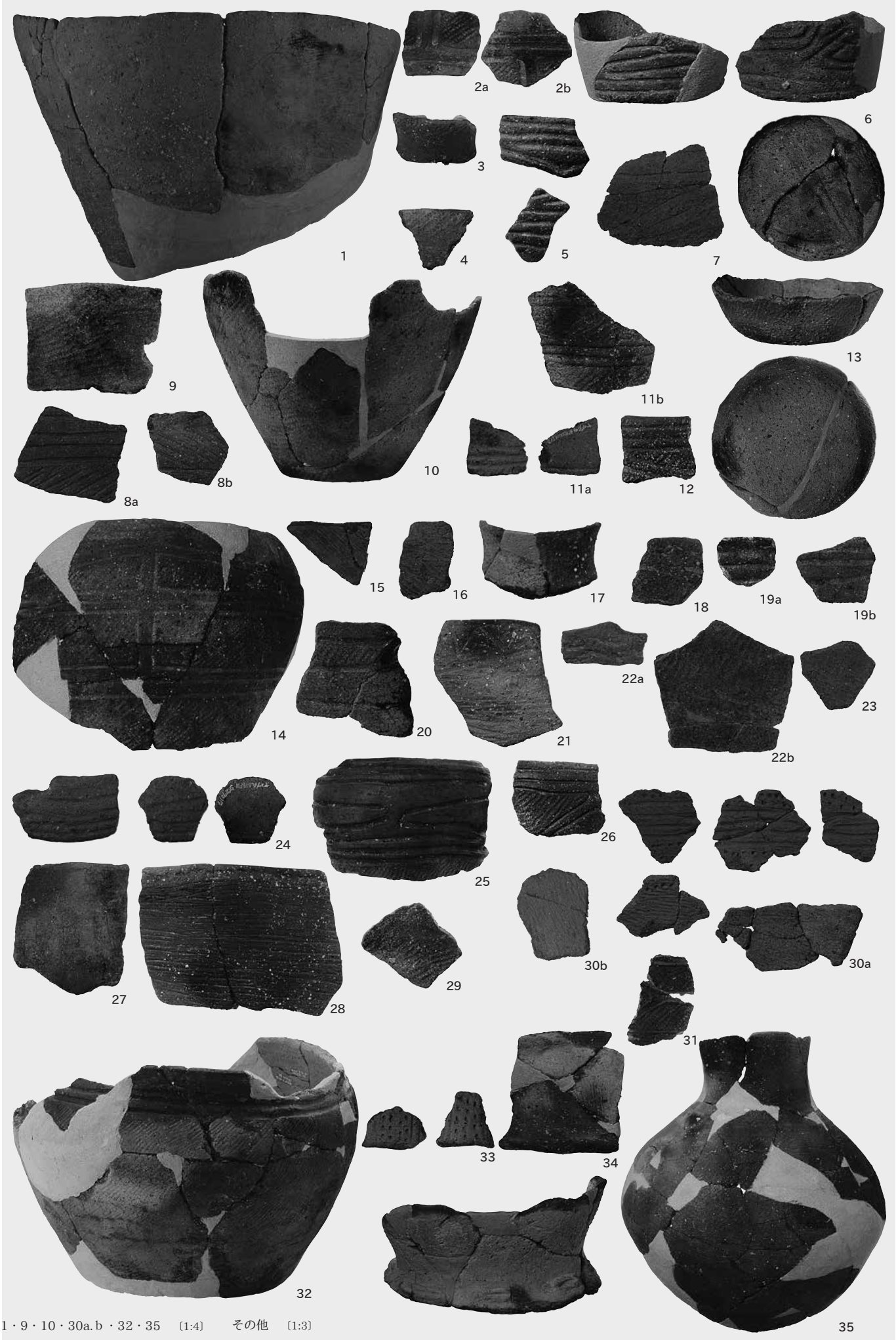
遺構外出土土器（第 2 面）



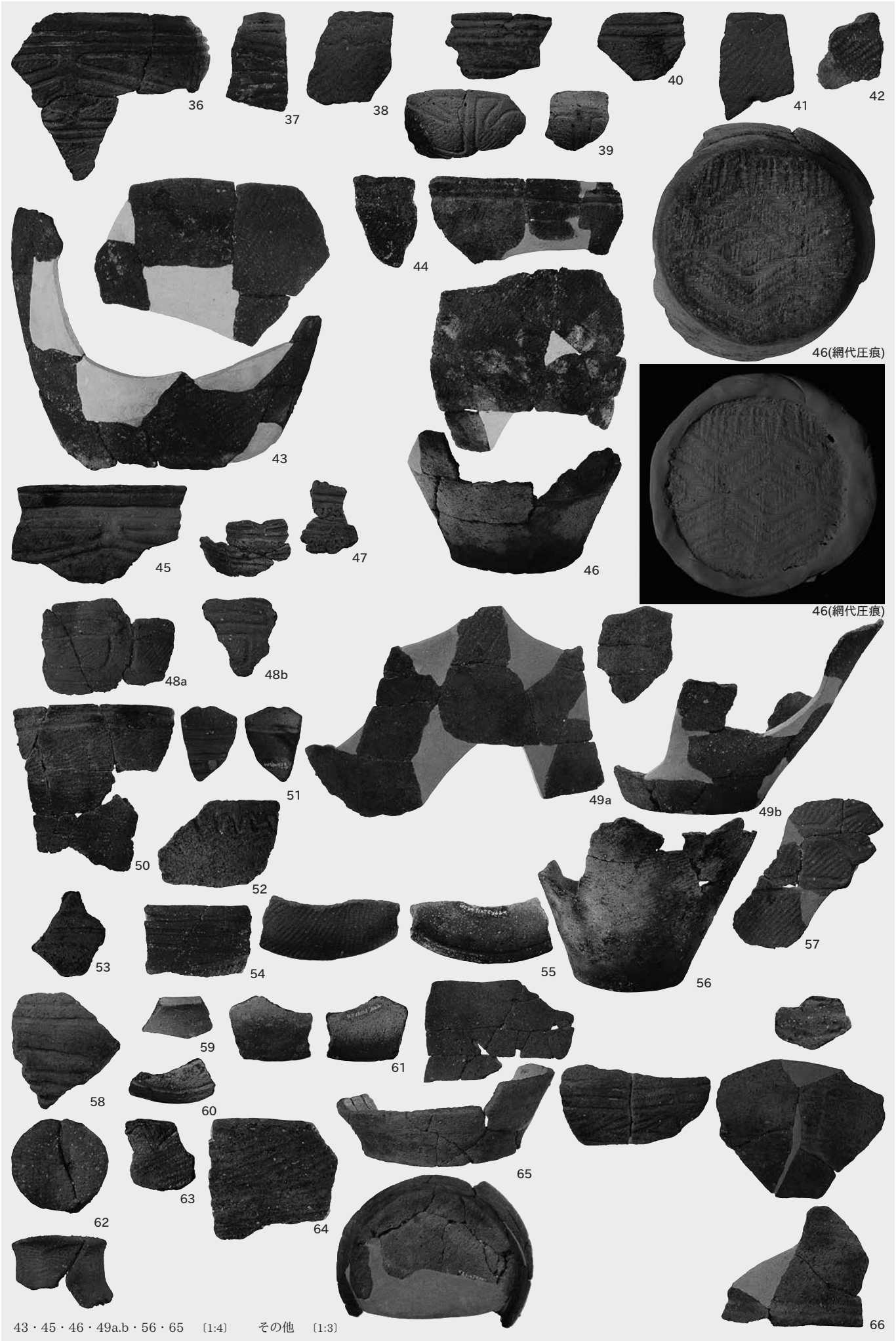
全て　〔1:3〕



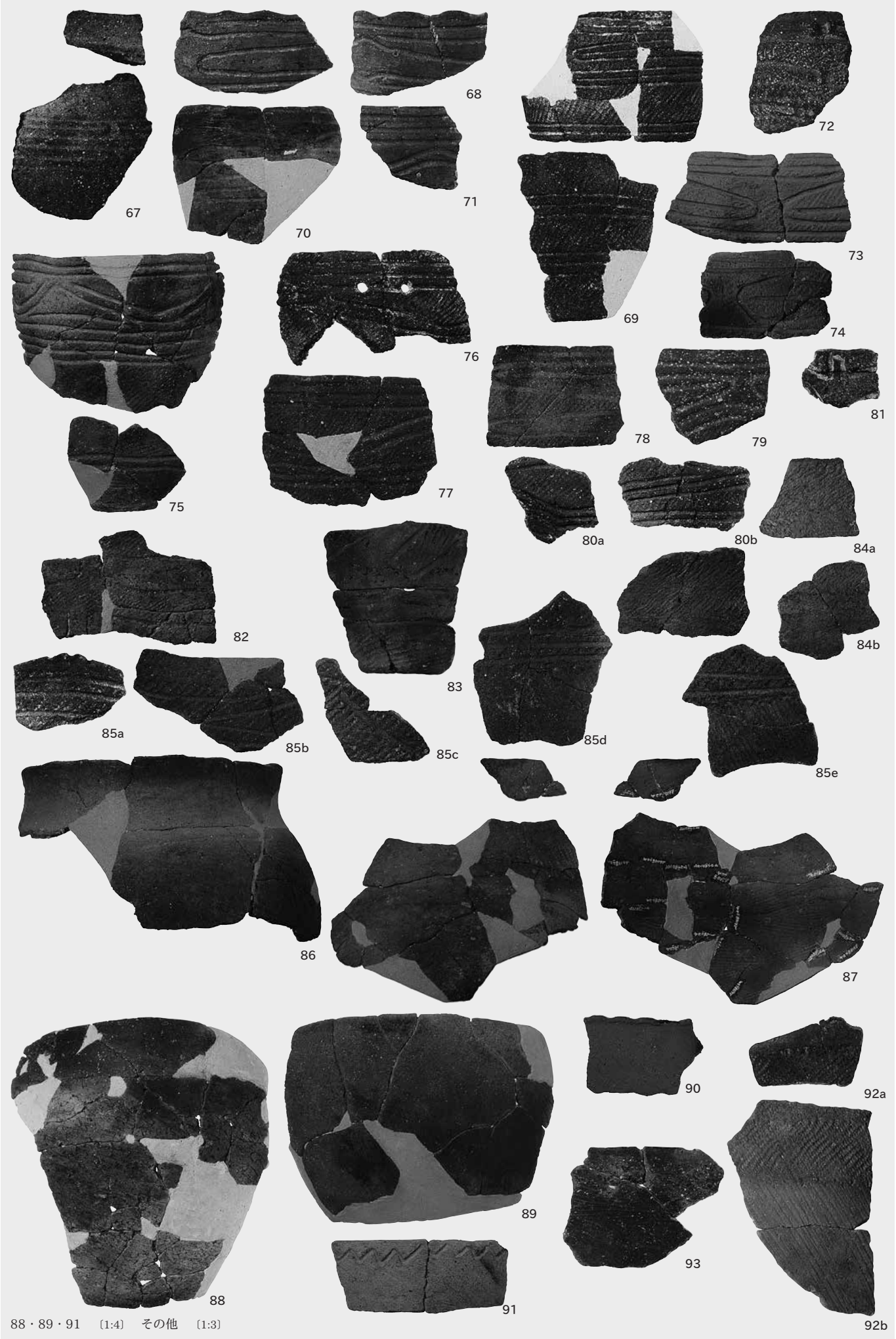
146・147〔1:4〕
121～138〔1:2〕
その他〔1:3〕



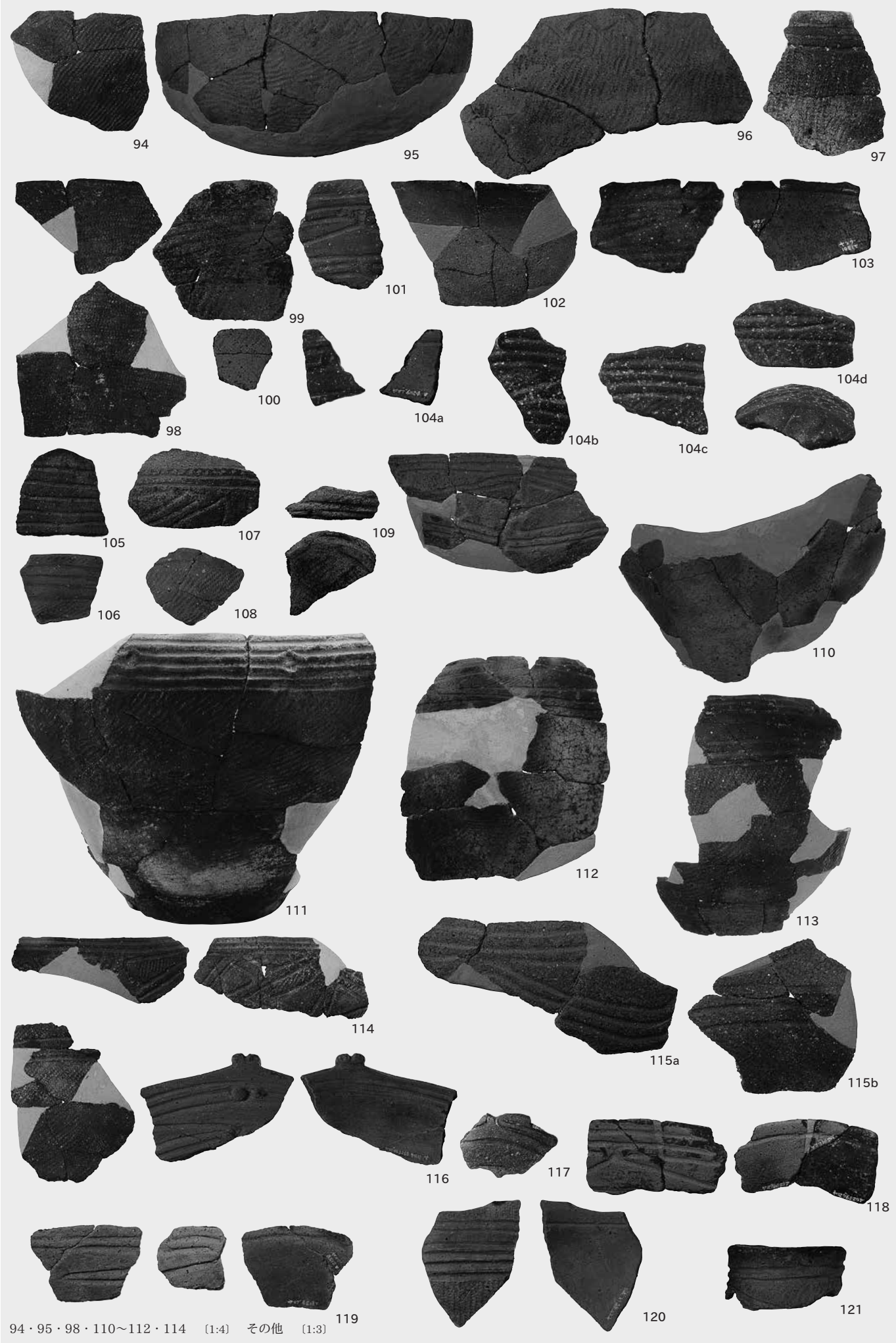
1・9・10・30a.b・32・35 〔1:4〕　その他 〔1:3〕



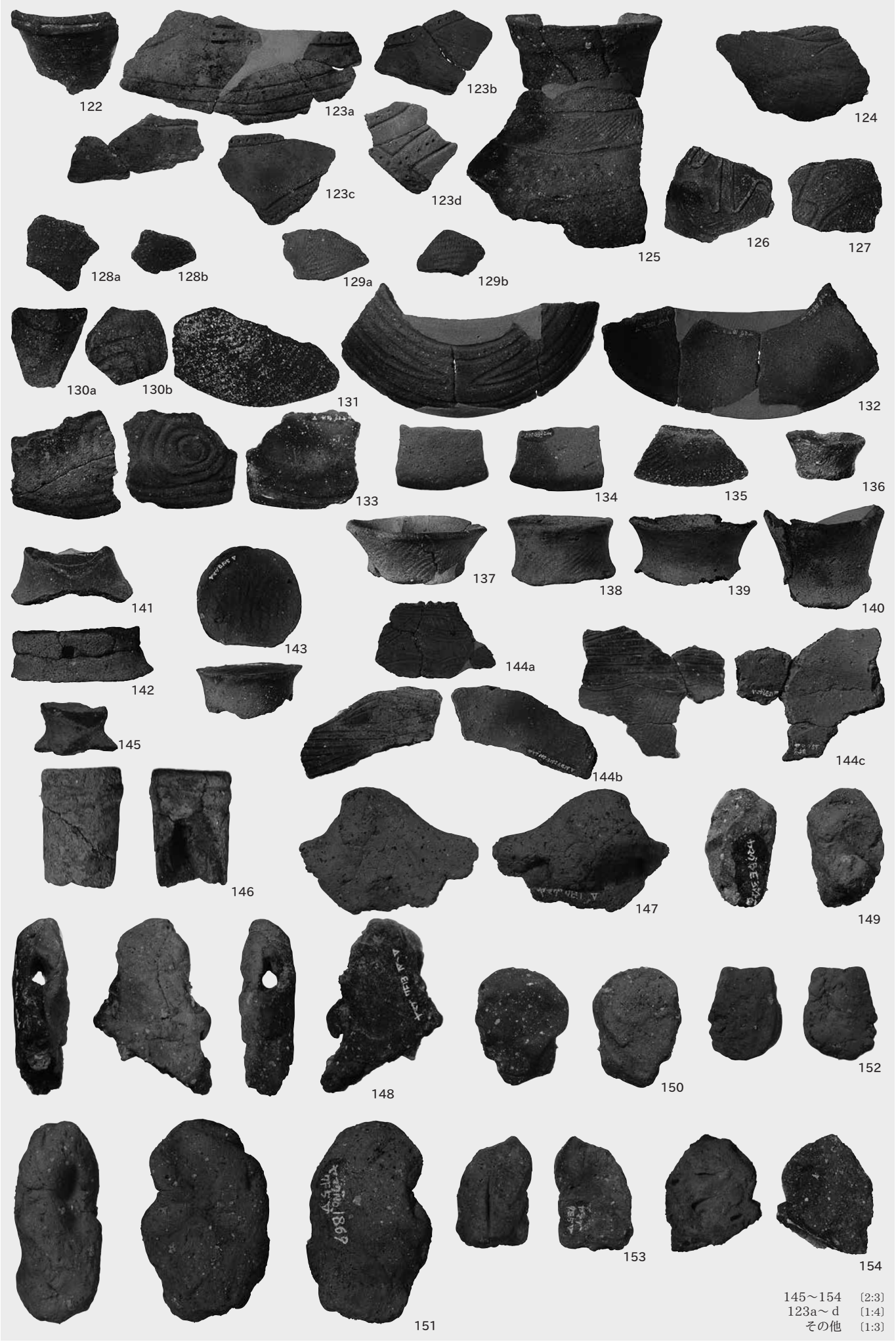
43・45・46・49a.b・56・65　〔1:4〕　その他　〔1:3〕



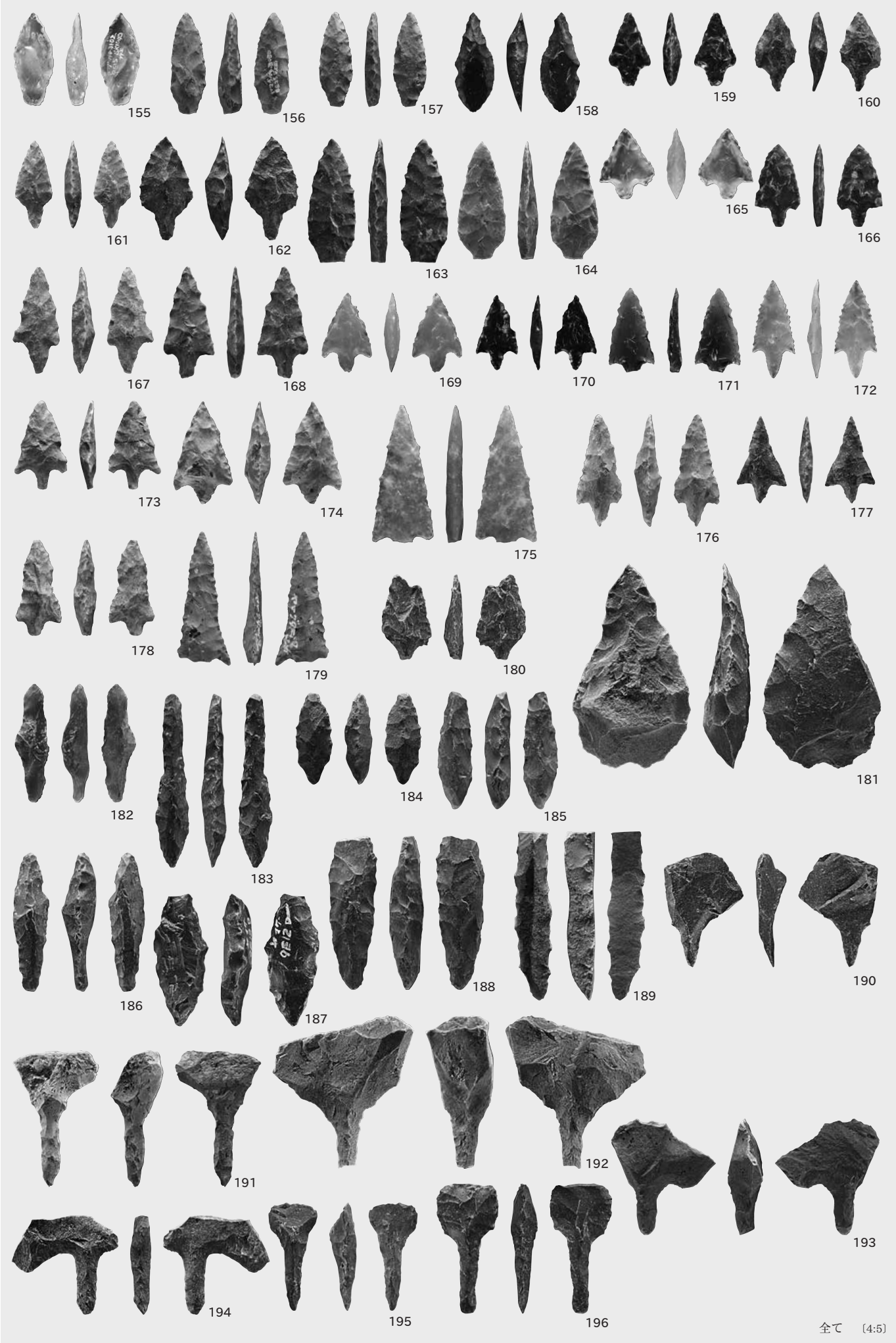
88・89・91　〔1:4〕　その他　〔1:3〕



94・95・98・110～112・114　〔1:4〕　その他　〔1:3〕



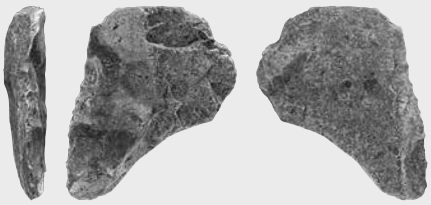
145～154　〔2:3〕
123a～d　〔1:4〕
その他　〔1:3〕


155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196

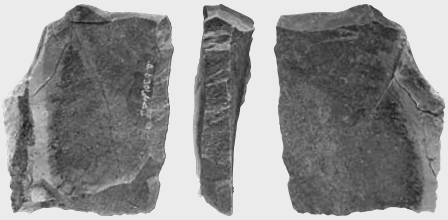
全て　〔4:5〕

197

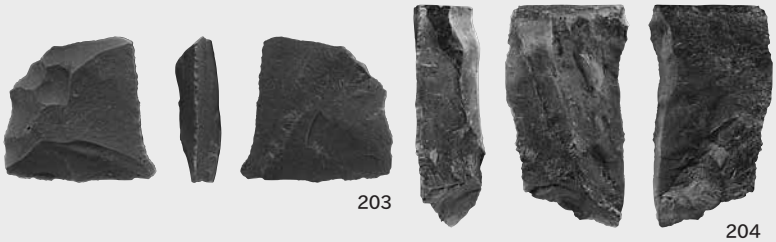
198

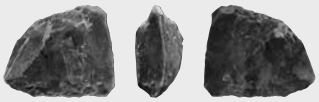

199

200


201

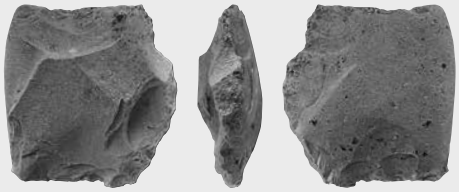
202


203　204


205

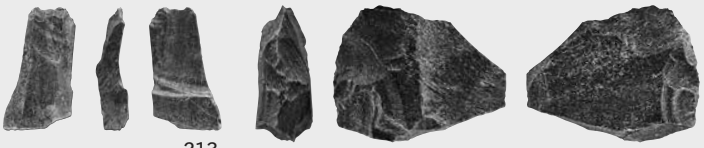
206

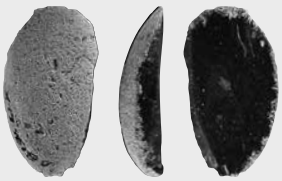
207


208

211

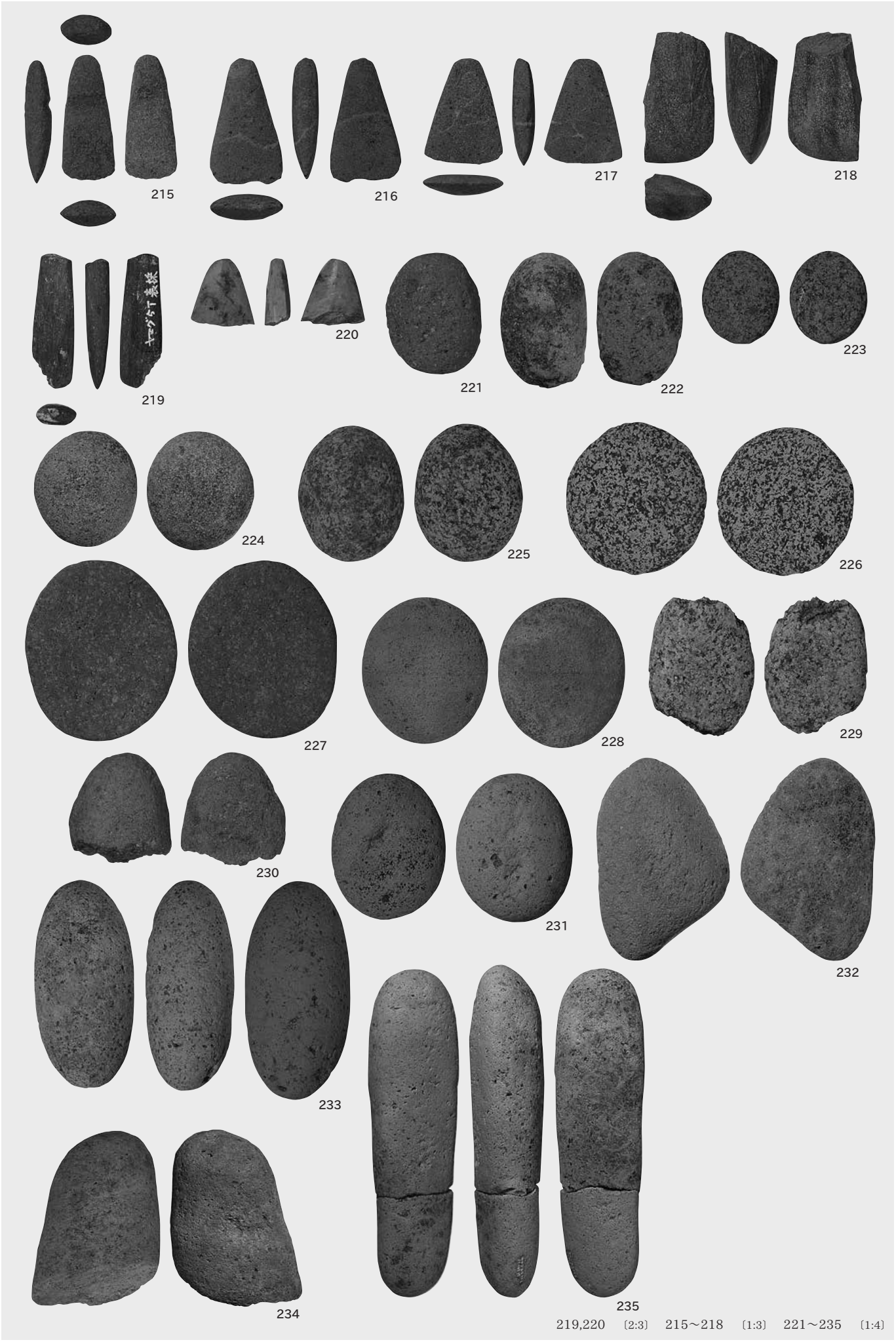
209


213　214

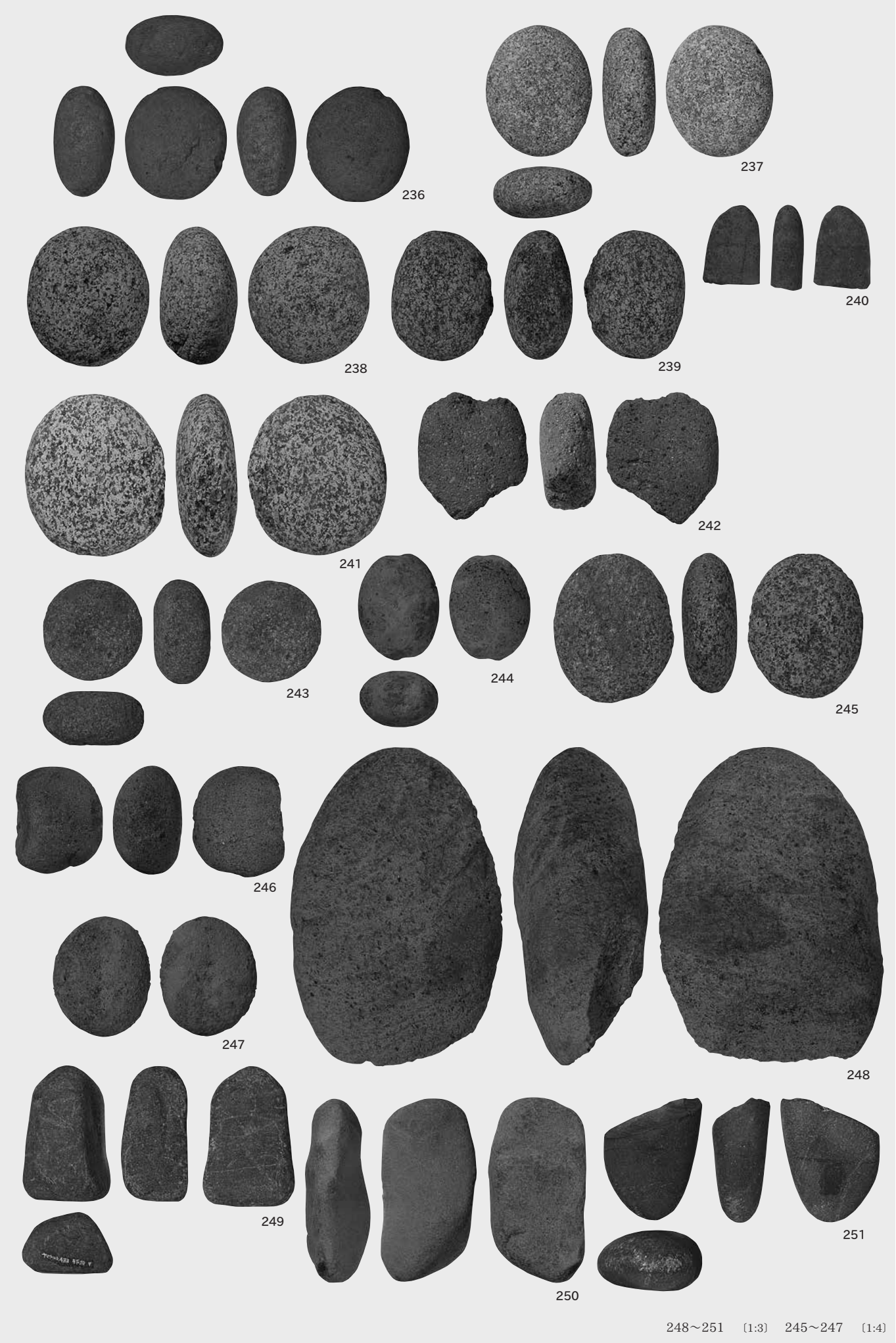

210

212

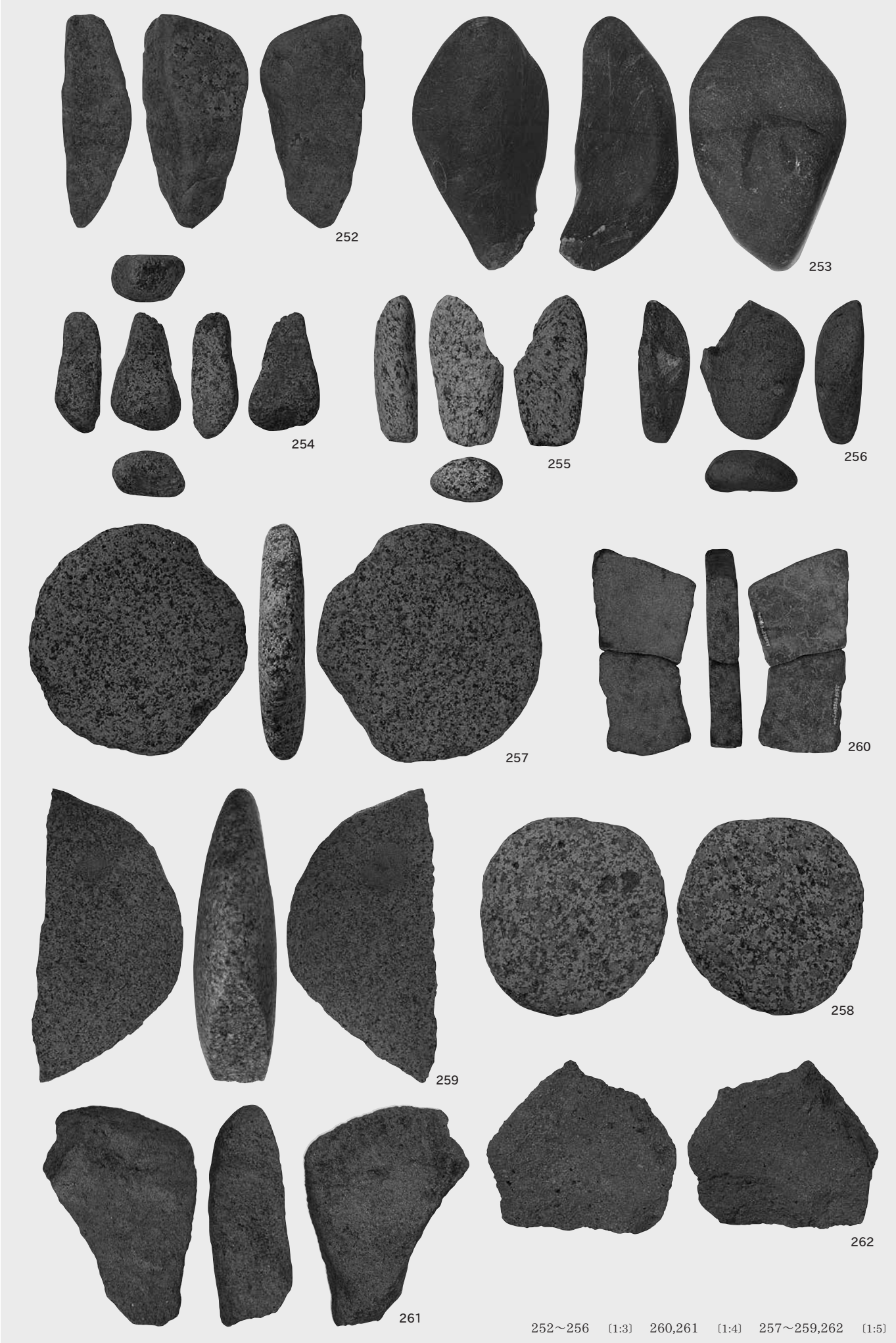
197～204　〔1:2〕　205～214　〔2:3〕



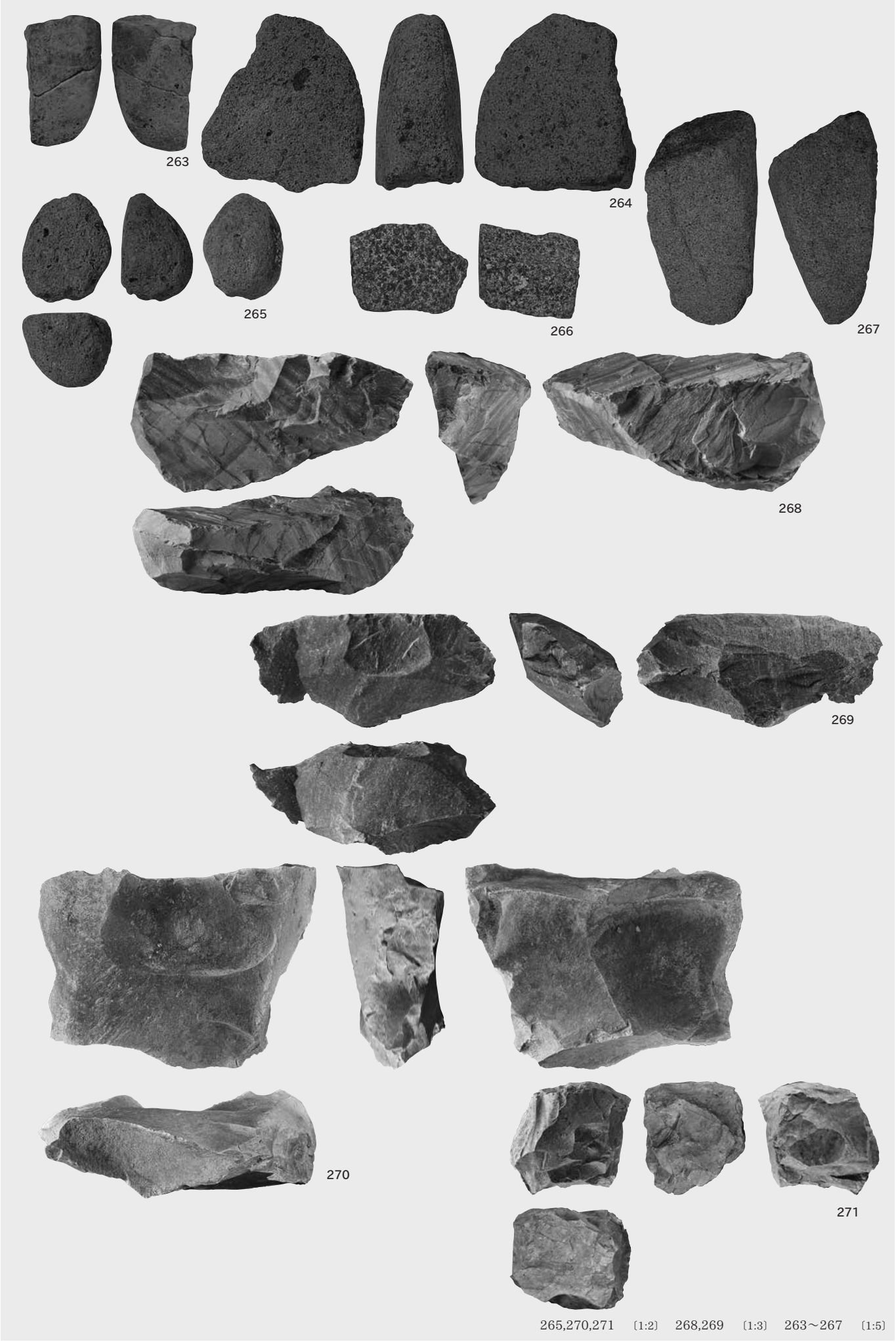
219,220 〔2:3〕 215～218 〔1:3〕 221～235 〔1:4〕



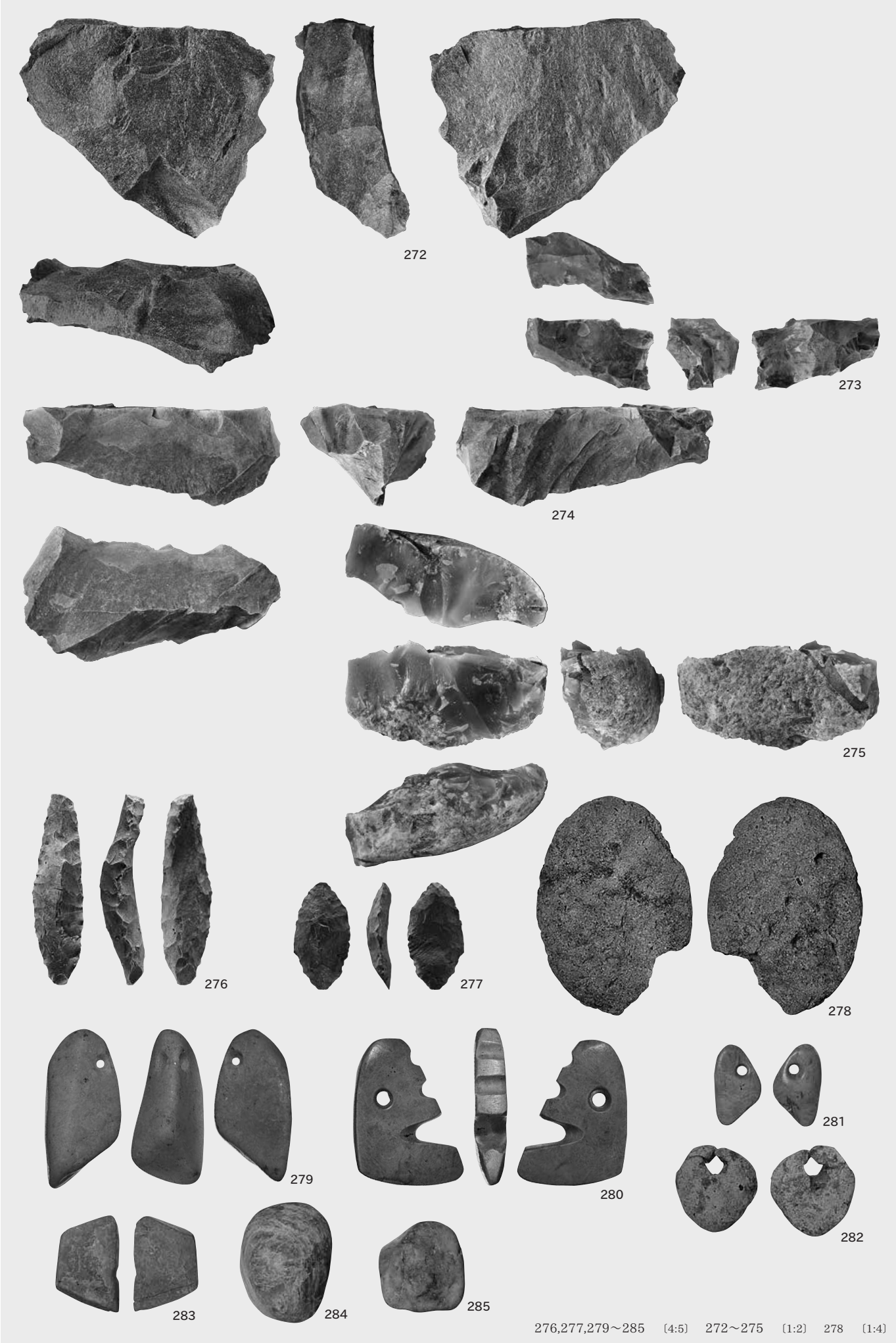
248～251 〔1:3〕 245～247 〔1:4〕



252～256 〔1:3〕 260,261 〔1:4〕 257～259,262 〔1:5〕



265,270,271 〔1:2〕 268,269 〔1:3〕 263～267 〔1:5〕



276,277,279～285 〔4:5〕 272～275 〔1:2〕 278 〔1:4〕

報告書抄録

ふりがな	やまぐちいせき
書名	山口遺跡
副書名	一般国道 49 号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 215 集
編著者名	荒谷伸郎･吉田浩明･高橋勝広･石垣義則（株式会社ノガミ）、千葉博俊･斉藤崇人･伊藤良永･馬場健司･松本美由紀・高橋敦・斉藤紀之・中根秀二（パリノ・サーヴェイ株式会社）、藁科哲男（有限会社遺物材料研究所）、髙橋保雄（埋文事業団）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社ノガミ
所在地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒 950-1136　新潟県新潟市江南区曽川甲 527-3　　TEL　025（280）6620 （株）ノガミ
発行年月日	2010（平成 22）年 2 月 26 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまぐちいせき 山口遺跡	にいがたけんあがのしやまぐち 新潟県阿賀野市山口 あざしろがくぼばんち 字城ヶ窪 3079 番地	15223	399	37 度 50 分 4 秒	139 度 11 分 54 秒	20080415 ～ 20081201	8,850㎡ （第 1 面 5,631㎡、 第 2 面 1,112㎡、 第 3 面 2,107㎡）	道路（一般国道 49 号阿賀野バイパス）事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口遺跡	集落跡	弥生時代前期～中期	掘立柱建物 1、土坑 19、ピット 15、埋設土器 1	弥生土器、土製品、石器、玉類（ヒスイ・蛇紋岩製の垂玉など）、搬入礫	
	集落跡	古代（8 世紀後葉～9 世紀中葉）	掘立柱建物 3、井戸 15、土坑 49、竪穴状遺構 1、溝 45、炭窯 1、焼土遺構 2、畝間状遺構 16、凹地遺構 14、性格不明遺構 22、ピット 1320	須恵器、土師器、石銙（巡方）	
	集落跡	中世（13 ～ 14 世紀）		青磁、白磁、珠洲焼、瀬戸・美濃焼、中世土師器、石器、石製品、鉄製品、銅製品、鉄生産関連遺物、木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 215 集

一般国道 49 号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

山　口　遺　跡

平成 22 年 3 月 30 日印刷
平成 22 年 3 月 31 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会

〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ

〒 950-2022　新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第215集『山口遺跡』　正誤表

頁	位置	誤	正
例言・抄録	編著者名	松本美由紀	松元美由紀
例言・抄録	編著者名	斉藤紀之	斉藤紀行